変人歓迎＞普通拒否

ノイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変人歓迎＞普通拒否

【Ｎコード】
Ｎ１５３２Ｊ

【作者名】
ノイ

【あらすじ】
県で一番変で有名な学校、烏坂学校。
その学校の中でも一際変わっている五人組がいる。男装趣味の剣道有段者や自称忍者のちょっとヤンでる奴。どっから見ても美少女な電波男。五人の中で一番常識人と勘違いしているいじられ役。そして、リーダー的存在の頭の中メルヘンティックな奴。
その五人組の毎日は楽しみと変と罰であふれている。今日も奴等は放課後の教室で部活に興じるのだった。

プロローグ　透麻

俺達は小さい頃からずっと一緒だった。
小学校も中学校も高校も。誰一人欠かすことなくずっと一緒。
ずっと一緒だったからお互いの痛みもわかるし。お互いの過去も知ってる。
楽しい過去も、辛い過去も。

て、まぁそう言うことだから、当然仲が良い。
うん。幼稚園の頃から変わった奴等だったけど……、歳をとるごとにドンドン悪化して。
はぁ。俺の周りには変な奴しかいない。たぶんフツーな奴等はコイツらがムリで来ないんだろう。
ていうか俺今までこいつら以外の友達が出来たことがないんだけど。

「おーい。透麻くーん」

こいつだ。たぶんその殆どの原因はこいつにある。俺達のリーダー的存在で一番変わった奴。っていうか一番厄介な奴。名前は佳。
左横髪と襟足を綺麗な赤に染めて、将来の夢が空を飛ぶこととかいうメルヘンティックな奴。意外と女顔のことは置いておこう。女顔のことは城道の存在のせいで目立ってないからな。

「おーい、おーい起きろぉ透麻ぁ」

ていうかさっきからうるさいなぁ。

「おーいって透麻ぁ」
「なんだよ……。人が気持ち良く夢の中で語ってたのに」
「ん、時間」

時間？　えーと時計は……。
ベットの枕元に置いてある丸い目覚まし時計に目をやる。時計の針はきっちり八時半を指していた。えーと、確か学校が九時から始まって、俺ん家から学校までが……四十分？

「ち、遅刻だぁあああああああ！」

海本　透麻（かいもととうま）
身長一七五センチ。高校一年生。全体的に少し緑色の入った髪。首元まであり。五人のいじられ役。他の四人のことを変だ変だというが結構自分も変なことに気付いてない。
幼稚園年長の頃に佳と出会って仲良くなる。佳と出会うまえは來優や城道とよく遊んでいた。

倉本　佳（くらもとよし）
身長一六七センチ。高校一年生。左横髪と襟足が赤い。あとアホ毛が一本たっている。よく寝癖で猫の耳が出来る。肩まである黒い

髪。五人のリーダー的存在にあたる。
自己中でマイペース。おもしろいことが大好きで普通という言葉が嫌い。親の仕事の転勤で保育園から透麻達の通う幼稚園に転入して来た。現在事故で両親とも他界。

柳生　城道（やぎゅうくにみつ）

身長一六一センチ。高校一年生。やや紺色の肩より少し下まである髪を一つにくくったポニーテール。かなりの美少女顔で、初対面の男子に告られることも多々ある。その度に男子を泣かしている。いつからか電波の称号を得ることになり、本人はソレを否定している。本人曰く宇宙人はクラスに一人の割合でいるらしい。佳と出会う前から透麻來優とは仲がよかった。五人の中の紅一点。
來優と一緒に剣道をしてたので剣道は激強。その強さと才能から柳生十兵衛の子孫だとかいう噂が。本人も否定はしていない。

守山　來優（もりやまくう）

身長一六七センチ。高校一年生。背中まである金髪。男装趣味で男子よりも女子の方が好き。小学生の頃あるきっかけで男装をしてしまい、鏡に写ってる男姿の自分に一目惚れして男装をやめれないでいる。下手な男よりカッコいいから彼女に騙される女子も多々。騙された女子の八割が同性愛に目覚めるとかそんな噂も……。幼少の頃から城道の家の道場に通っており、剣道は結構強い。佳や城道以外の男に負けることが凄くイヤで男よりも強く、男より男らしいのを目指して日々努力している。

佳と出会う前は城道と透麻とよく遊んでいたが、本人は城道と遊んでいたら勝手に透麻がいたとしか思っていない。

蒼空　汐姫（あおいゆうき）

身長一五八センチ。高校一年生。オレンジ色の髪をしていていつも右目が隠れている。昔はお金持ちだったんだけど会社が倒産。お酒に溺れた両親から虐待を受けていた。今でも体には虐待の時の傷跡が残っている。ある事故で両親を亡くす。

幼稚園の頃は病弱でいつも自宅療養か入院していたのでろくに通っていなかった。だから友達もおらずいつも一人で遊んでいた。

自分を退屈な毎日から救ってくれた佳が大好きで、佳の為なら何でも出来る子。ちょっと被害妄想が強くてヤンでる。あと自称忍者。嘘か誠かは判明されてない。

始まり　透麻（前書き）

サブタイのあとの名前はそいつ視点っていう意味です。

始まり　透麻

「ち・こ・く・だあああああああ」

やべぇ！　今日遅刻ったら完璧赤点だ

テスト最終日の朝。天気予報によると一日雲一つない快晴らしい。まぁ今の空をみるとあながち外れじゃあないことはわかる。ってそれどころじゃねぇよ！　テスト遅刻とか最悪だぞ。くそぉ。徹夜してまで勉強したのに全部パアになるじゃねぇか。

「遅刻してたまるかぁあああ！」

来た！　学校に行くときの最大の難関……地獄の坂！　六十度はありそうな急な坂道。何人この坂にやられたことか……。しかし俺はやられない。

足に目一杯力を込めチャリのペダルをだんだん早くこいでいく。グングンスピードをあげたチャリは坂を調子良く登っていった。……十メートルくらいまでは。

「くぬぅ。相変わらず坂なげぇ」

百メートルはありそうなくそ坂。一人なら行けるんだけど……。生憎俺は今ニケツしてる。後ろに人を乗っけてるんだ。

寝癖で猫の耳のようになってる髪。左の横髪を真っ赤に染め、襟足も真っ赤に染めてるまぁ何と言うか、赤色が好きな奴を乗っけている。

「なぁ透麻ぁ」

「なんだよ」

そいつは後ろ向きでチャリの荷台に乗る変な奴で、なんていうか……、自己中でマイペースな奴。

「今日って、空青いなぁ」
「それどころじゃねぇんだよ。遅刻だぞ？　赤点だぞ」
「あ、鳥が飛んでる」
「聞けよおい！」

てか今さらだがおかしいだろ。

「何でお前坂なのにおりないんだよ！」

フツーは気を使っておりるもんだろ。そうだよな。

「……っくしゅ。うー風邪かなぁ」
「だから聞けよ！」
「おりたら疲れるじゃん」
「俺が疲れんだよこのままじゃ」
「透麻は体力あるからいいんだよ。俺はないの。ていうか歩きたくない」
「お前っ！」
「あー、ほら遅刻するぞぉ。赤点だぞぉ」

てこでもおりない気か。ちくしょぉふざけやがって。こうなったらやけだ。坂がなんだぁ！

「おおー。速い速い。さすが透麻ぁ」
「はぁ、はぁ。落ちないようにしろよ！」

「おー」

俺の周りには変な奴しかいない。どこからどうみても美少女にしか見えない電波男。自称忍者で片目隠しのちょっとヤンでる女。女なのに男装が趣味で剣道の有段者。

まぁこれだけでも相当個性がキツいのに、まだもう一人いる。俺達のリーダー的存在であって一番厄介な奴。自己中、マイペース、将来の夢が空飛ぶこと。フツーっていう言葉が大嫌いな男。

こんな奴等だから当然クラスから浮いてる。クラスの奴等と仲が悪いわけじゃあないんだ。ん～、簡単に言えば注目を浴びてるってことだな。

って今はこんなことやってる暇なかった。遅刻だあ。

部活とは　透麻

キーンコーンカーンコーン……。

「ヤバいヤバいヤバいヤバいって！　急げ佳」

「別に遅刻したっていいじゃん」

「いいわけないだろ。俺は今回赤点とったらホントにヤバいんだって」

「ふーん」

コイツ人事だと思って。うわっ、あくびまでしてらぁ。コイツに危機感はないのか？

「ていうか佳も赤点とったらヤバいんじゃなかったっけ」

「あー、俺は大丈夫だよ」

「何でだよ」

「二十点ひかれても赤点にはならないから」

そう俺が遅刻ごときで騒いでる理由はそれだ。俺はお世辞でも頭が良いとはいえない。下の下にあたるだろう。

そんな俺でも留年はイヤだから昨日必至になって勉強したんだ。それでもやっぱり赤点ギリギリだろう。遅刻しなければ。さっき佳も言ってたけどこの学校はテストの日遅刻したらその日のテストは全て二十点ひかれるんだ。ようするにマイナス二十からのスタートになるわけだ。

かのゼロ点しかとらないアニメのあのキャラと同じ学力の奴がだぞ？　二十点もひかれてみろ。百パーセント赤点だろ。因みに赤点は十五点以下からだ。

「そういやお前昔から肝心なテストだけは満点だったな。いつもゼロ点なのに」
「ん～、やっても意味ないことをやる必要ないじゃん。それに俺一通り教科書読んだら覚えれるもん」
そうだった。コイツは天才だったな。
「その才能わけてほしい」
「つーかさ、時間大丈夫なん？」
ジ・カ・ン？
「びぎぽがなノオオオオオオ！」
時間だァアアアアアアアアア！
ええい！　もう佳なんかしるか！　俺は先に行く！　佳なんかほっといてやる。
「アイツ俺達のこと変な奴ってたまに言うけど、自分の方が相当変なことに気付いてないのかなぁ」

お、終わった……。

「赤点だぁ」

今日一日の最後のテストが終わった。クラスの奴等は終わって安心したのか騒ぎ始めたり帰り支度をしたりしている。その騒がしい中で一人、俺だけが机に突っ伏して、どよーんとしたオーラを放つ。理由は言わずもがなテストのことだ。

「わからなかった。あんだけ勉強したのに」

あー、補習だぁ。俺の夏休みがぁ。しかも下手したら留年……。うわぁー。

「ピッ。透麻から不幸オーラが出てるのだ」

「ああ？」

聞き慣れた声とアホな発言に顔をあげる。机の前には男子の制服を来た紺色の髪をした女の子が、

「男の子なのだよ」

もとい可愛らしい男の子がいる。名前は城道。かなりおもしろい名前だ。

「何で不幸なオーラをだしてるの？」

今度はちゃんとした女の子。オレンジ色の髪に片目を隠してちょいヤンでる奴、汐姫だ。たいそうな名前の割に体は成長していないらしい。

「お前らだったら言わなくてもわかるだろ」
「徹夜で勉強したのに朝起きれねぇで遅刻して二十点ひかれたってとこだろ？」
「……」
この妙に男らしい金髪のロン毛が來優。男装趣味の剣道有段者。
「その上徹夜までして勉強したのに、勉強したトコろがいっこも出て来なかったってオチ」
一人空を眺めながら俺が勉強した範囲を全て知りつくしてるかのように言ったのが朝チャリにのってた奴、佳だ。左の横髪と襟足真っ赤に染めてるちょい派手な奴だ。
「何で知ってんだよ」
「そんなことは安易に予想できる」
うっ。相変わらず油断のならない奴だ。
「なぁそんなことより佳今日はどうすんだ部活？」
もうクラスの奴等も帰り始めた中俺達が帰り支度をしないで教室に残ってる理由。それは部活があるから。
「するよお題ももう決まってる」
「さすが佳様」
「様付はやめろっていってるだろ汐姫」
「いいえ。これはボクが佳様のことをどれだけ愛しているか試される大事なことなのです」

そのいつもと同じ発言に佳はため息をつきソレを見てる俺達も心の中でため息をつく。
まぁそれはともかく。

「今度のお題はなんなのだ？」

城道が言った”お題”これが俺達の部活では絶対必要なもの。
そもそも俺達の部活は佳が学校側に言って半ば強制的に公認させたもので名前は部活。部活っていう名前の部活動。
なにをするかと言うとさっきも言ったお題をこなしていく部活だ。お題は毎日違う。佳の気紛れで決まったりクジ引きで決まったり、はたまた俺達のもとにきた依頼の中からおもしろいものを佳が決めお題にすることもある。いわば何でもする部活だ。
よくこんなもの学校が認めたなぁと本気で思う。

「理事長からの依頼なんだが……、喜べ透麻」
「は？」
「この依頼がこなせたらお前の赤点はなしだ」

ニヤリと笑いながら言う佳。

「マジで！？」

いっきに元気になる俺。やっべ。やる気出てきたぁ。

「で、佳お題ってなんだよ」
「ん～、ちょっと待て」
「？」

　來優は頭に？を浮かべてたけど俺と城道はどういうことかわかった。まだクラスには少数だが人がいる。たぶん人がいたら話せないことだろう。
　しばらくたって來優もソレに気付いたのかおもむろに自分の席に戻ってバックからジーパンを取り出しはき始めた。スカートじゃ落ち着かないらしい。

「いなくなったな」

　最後の人が教室を出ていって数分がたって佳は口を開いた。

「で佳、人がいたら話せない依頼ってなんだ？」
「ん？　ああ。お前らもうちの理事長知ってるよな」
「ああ、そりゃあなぁ」
「知ってるのだよ。ソレがどうしたのだ？」
「二五歳と言う若い歳にもかかわらず理事長という座をとり、容姿端麗、文武両道。現代の大和撫子といってもおかしくないくらいの女の人だ」
「ボク理事長、殺してくる」

　とんでもないことを口走った汐姫を俺と來優が必至で止めるなか佳は気にせず話を進める。

「だがそんな理事長もまだ独身。彼氏すらいないという悲しい現実。毎日毎日何が楽しくてシケた教師や鬱陶しい生徒達と接しなければならないのか。もういっそ死んでしまいたい。でも死んだら今もまだ夢見てる白馬の王子様に逢えない。そんな痛い妄想を未だにしている二五歳独身の理事長。普段は俺達の敵とも言えよう理事長の依頼なんか引き受ける筈がないのだが、優しい優しい俺が二五歳独身の理事長の為に仕方なく依頼を受けてやろうってこと。でその二五歳独身の理事長が依頼したのは」

”二五歳独身の理事長”って言いすぎだろ。ここに理事長がいたらシバかれるぞ。ていうか前置きなげぇよ。

「前置きはいいから一体依頼とはなんなのだ？」
「つーかそんな酷いことばっか言ってるとまた罰をくらうぞ」
「さすが佳様。相手のプライドをボロボロに崩すお言葉。どうかボクにも言って下さい。いえ、お言葉だけじゃなくその体でもボクを責めて下さい！」
「佳！　なんか汐姫が危ないこと口走ってんだけど！」
「そんな理事長がストーカー被害にあってるらしい」

うわっ全部無視かよ。さすがマイペース野郎。

「いくら男並みに強い理事長でも一応女だから怖いらしく俺達にそのストーカーを捕まえてほしいっていう依頼」
「ソレって警察に被害届け出しゃあいいんじゃねぇのか」
「來優、わざわざあの理事長が僕達に頼んだってことはもう既に警察に被害届けは出したあとだってことなのだよ」
「しかも嫌いな佳に直接頼むってことは警察はあまり聞き入れてくれなかったってことだな」

「そ、そんなこと透麻に言われなくてもわかってた！」
「あっそ」

はぁ。來優は男に負けるのが嫌いだからいつもこんなんだ。

「ストーカーか。そんな人が嫌がることをする人は許せない。あ、佳様これ昨日借りてたタオルです。昨日一晩中使ったので返します」
「無くなってたと思ったらお前かこのやろう。勝手に家に入ってくんじゃねぇ」
「勝手じゃないです。ちゃんと合鍵で鍵開けて入りました」
「勝手に合鍵つくってんじゃねぇよ」

……怖いなストーカーって。

「ピッ。今透麻と僕の考えが一致した気がする。確かにストーカーは怖い」

……あながち城道が電波受信してるってのも嘘じゃないのかもな。

「で、佳。どうするんだ」
「とにかく理事長が帰るとき俺達もこっそりつけてみようと思う」
「ん、りょーかい」
「あ、あと汐姫には別で頼みたいことが」
「はい。夜のお相手なら喜んで。どんなプレイでも佳様の気がすむまで」
「ちょっと黙ろうか汐姫」
「透麻には関係ない。ボクは佳様と話てるの」
「汐姫ちょっと耳貸して」
「へ？　あ、はい」

汐姫が佳の顔の前に自分の顔を持っていった。照れからか汐姫の顔は真っ赤だ。アイツは普段大胆なこと言うけど佳と二人きりになったり距離が近くなると照れや緊張で喋れなくなる。

佳が汐姫の耳元で何か言っている。かなり小さい声だから俺達には聞こえない。まぁ佳のことだから俺達の悪口とか俺達が困るような頼みごととかは話してないだろうけど。

「頼める？」

「は、い」

顔を真っ赤にして何度も頷く汐姫。それを見て佳は汐姫の頭を撫でる。

「あ、……」

汐姫の顔が湯気がでそうなくらいに真っ赤になった。体が硬直してるっぽいけどホントに嬉しそうな表情を一瞬だけ見せる。

佳と汐姫の間には何かがあった。少なくとも小学生の頃は汐姫は佳のことを様付で呼んでなかったしこんなにも溺愛してなかった。中学生から急に変わった。

何があったかは問詰めないけど俺達も何となく予想はついてる。汐姫の両親と佳の両親の死。それが関係しているのは確かだ。だから俺達は何も聞くことが出来ないでいる。

「おーい透麻ぁ」

「ん、な、なんだ佳？」

「いや、なんかボーっとしてたから」

「ああ、ちょっと考えごとしてた」

「考えごと？　悩みとか困ってることなら俺達に言えよ。仲間だろ」

コイツはそう言うことをさらっと言う。

「ありがとな。でも大丈夫。悩みとか困り事とかじゃないから」

「そっか。ならいいんだ」

俺達のことを誰よりも大切に思ってくれる。だから俺達はお前についてくんだ。お前が俺達を大切に思ってくれてるぶん俺達もお前を大切に思っている。狂おしいくらいにな。

理事長ストーカー編？　透麻

「理事長お疲れ様でした」
「お疲れ様」

「おっ、出てきたぞ」

今は夜九時の学校。理事長が仕事終わるのを校門近くで隠れて待っていた所だ。
車で帰る中年教師と社交辞令を済ませて校門を出た理事長。

「よし行くぞ」
「おお」

そしてそのあとをこっそり追う俺達。
佳の号令の小声で皆でハモったあと行動開始だ。
理事長の家はこの学校から徒歩三十分程歩いた所にあるらしい。
因みにこの情報は我が校の新聞部の情報だ。毎週発刊される学校新聞に書いてあった。俺は新聞何か読まないけど城道の奴が読んで何かの役に立ちそうなことは覚えてるらしい。学校から理事長の家まで時間を知ったことで何の役にたつか知らないが、てか怖くて聞きたくもないが、一度読んだだけで覚えられるのは凄いと思う。そういや佳も同じことが出来たな。

ストーカーの奴遅いな。

「なぁ、ストーカーさんはまだこねぇのか…」
「來優少しは待てないのか。まだ学校から出て十分だぞ」

「るせぇよバカ透麻。まだ十分じゃねぇよ。もう十分なんだよ」
「は、十分でしびれをきらすなんて情けねぇなぁ」
「ああ！？　誰が情けねぇって？」
「お前だよお前」
「やんのかテメェ！」
「おうやるか！」
「うるさい來優透麻」
「……わりぃ城道」
「透麻も実はしびれきらしてたんじゃないのか」
「なっ、佳！　お、俺はそんなわけ」
「嘘つかない」
「うっ。わ、わるい」
「まぁケンカするほど仲が良いからな」
「そうなのだ。二人とも仲よしなのだよ」

そりゃお互い嫌いってわけじゃないけどさ。昔からケンカ仲間だからな。

「それより気付いてるか城道」
「もちろんなのだよ」
「「なにが」」

うっ、來優とハモった。

「ボクも気付いているよ佳様」
「だからなにが？」
「気付いてないの透麻。ボク達の後ろ、二十メートルくらい後ろに校門から出たときからずっとついて来てる人がいるんだよ」
「気付いてなかったのか透麻。私は気付いてたけどな」
「嘘つくのはよくないことなのだよ來優」

「すみませんでした」

相変わらず城道と佳には頭が上がらないみたいだな。

ていうかそんな前からついて来てたとは。やべぇ気付かなかったな。

「やっぱりストーカーかなぁ佳」

「ん、その可能性は高いぞ城道」

「ボクが行って捕まえてこようか佳様？」

「やめとけ汐姫」

「わかりました」

自称忍者な汐姫でも女は女だ。佳もそれが心配だろう。それに汐姫は自称忍者なだけで強いわけじゃない。一年間山にこもって忍者修行をしたらしいが気配を読むのがずば抜けて良くなっただけで、その他は普通の女の子と変わらない。しいて言うなら普通の女の子より少し動きが速いぐらいか。

「ボクを心配しているのですか？」

少しうつむきながら言う汐姫。顔が赤いのが見てわかった。

「そうだよ」

「嬉しいですっ！」

ホントに嬉しそうに言う汐姫。それを見て表情を和らげる佳。

「ふむ、春なのだ」

「春だなぁ」

「そうだな」

「何言ってんだ？　夏だろ」
「佳様の言うとおり今は夏ですよ」

意味がわかってない二人がどこか微笑ましいなぁ。

「っと、佳後ろの男僕が行ってこようか？」
「私服や女装状態の城道なら大丈夫だろうけど、今は制服着てるだろ？　さすがにムリがあんじゃないのか佳」
「何言ってるのだ透麻。僕が女装するわけないだろ」
「よし、じゃあ城道頼むわ。いつもみたいに演技してな」
「うぅ……、わかったのだ。相手がストーカーなら確かにそっちの方が効率が良いからな」
「そうゆうことだ。じゃ頼んだ」
「任せるのだ」

「ん、じゃ行ってくるのだ」

いつもの演技。それは城道が自分の特長を最大限に生かすことだ。アイツは小さな頃から学祭などで色々な役に回される。まぁ主に女役何だが……。その小さな頃からの体験と、少し声を高くするだけで女の声と変わらないっていう声変わりのしていない声で何かと佳に女装させられたり、男に話かけに行かされたりしている。まぁ城道もイヤだとは言ってるけれどそれは罰ゲームや学祭のときがメインだから結局はやっている。

罰ゲームや学祭以外で女の演技をするのは久し振りなんじゃあないのか。ん～、前したときはいつだったかな……。あ、佳の姉さんがお見合い写真持って来たときか。あんときに彼女役として女装して貰ったんだな。懐かしいなぁ。

「私達はどうすんだ？」
「当然理事長のあとをつけるさ」
「城道を置いてか」
「城道なら勝手に追い付いてくるし、状況なら城道に渡した盗聴機で聞ける」

いつのまに渡したんだそんなもん。

「ならいい。よし、じゃ気合い入れてあとつけるか！」
「來優、静かにな」
「あ、わりぃ佳」

はぁ。相変わらず何も考えてないな來優は。だからバカなんだ。人のこと言えないけど。

「お、城道が男に話かけたぞ」

早いな。さすが城道。慣れてるだけあるな。

「音量あげてやる」

そう言って佳は盗聴機の音量をあげた。

「あのぅ、あなたは……、その……」

うっわ。女だ。まるっきり女だよ。声とかしゃべり方とか、ちょっと内気な女を演じてやがるなアイツ。

「何ですか？」

「あなたは……、ストーカーですか？」

「は？」

……、

「いやいやいや。俺の聞き間違いだよなぁ。まさかストーカーかも知れない奴にストーカーって聞くわけないよな。仮にそう聞いたとしてもストーカーが素直に、はいそうです。なんて言うわけないよなぁ。なぁ佳」

「安心しろ透麻。お前の頭はバカだが、耳は確かだったみたいだな。さっき城道はしっかりとストーカーですかって聞いていた」

「バカはアイツだぁあ！　そんな直球でどうすんだよ!?　そこは変化球だろ？　ストーカーですか？　って聞いてどうすんだよ!?　ヒットしねぇよバカ。フツーに見送り三振だよバカ」

「見送り三振の何が悪い。確実にアウトをとっただろ？　完璧じゃないか」
「野球の話をしてんじゃねぇよ！」

あーもうバカだコイツ。バカだこいつぅ。何でこんな時だけバカなんだよ佳と城道は。

「はい。ストーカーです」
「あ、そうですかありがとうございます」

えー！？

「まさかのホームラン！？　そこでホームランなのぉ！？　ありえねぇだろ！　てか何でアイツ自分がストーカーだと認めてんだよ、フツー否定するだろ！」
「バカか透麻。フツーな奴がストーカーなんかするか」
「なるほど。ストーカーする奴はフツーじゃないのか。よし、俺ちょっとアイツを勧誘してくる」
「「しなくていい！」」

アホなこというなバカ。
勧誘しようと男のもとにいこうとした佳を必至で止める俺と來優。
こういうときは來優と気があう。

「あれ？　佳様車が理事長の隣りで停まりましたよ」
「へ？」

あ、ホントだ。白いワンボックスカーが理事長の隣りで停まってる。
あ、フード被った男が数人降りて来たぞ。手に持ってる何かで理

事長を気絶させ車の中に……、

「ってアレヤバいんじゃねぇのか！？」

「ちっ。行くぞバカ透麻」

「バカ言うなアホ來優」

やべぇ。走りだしやがった。間に合え！

理事長ストーカー編？　透麻

「はぁはぁはぁ」
「はぁはぁっ、えれぇ」

マジでえれぇ。つか間に合わなかったし。やべぇんじゃねぇのか？　とりあえず佳んとこ戻るか。

「戻るぞ來優」
「ああ」

車も完璧見失ったしなぁ。
あ、いたいた佳。

「おーい佳やべぇぞ。見失っ……」
「だから仲間になれって。アンタのフツーじゃないトコが気に入ったんだって」
「いや、だから僕はさっきから断ってるだろ」
「佳様からの直接の申し出を断るなんて、死に値します」
「殺生はいけないのだ。手に持ってるナイフを離すのだよ」
「ちょっ！　さっきから何気に怖いんだけどこのオレンジの子！」
「なぁ部活入ろうぜ」

お・ま・え・らはぁあああ！

「「何してんだアホォ！」」

佳の腹目掛けての飛び蹴り。因みに來優は城道の腹目掛けて飛び

蹴りをしている。

「「ぐほっ」」

お互いクリーンヒットしたみたいだな。うん、やっぱ息あうな、こういうときだけ。

「ってぇな。何すんだよ透麻」

「いたた、なのだ」

「何すんだじゃねぇよ！　お前こそ何してんだよ。理事長誘拐されちまったぞ！」

「誘拐？　ああ、そういや何か連れていかれてたなぁ。あっ、ちょっ逃げんなストーカー」

いつまでストーカー男のこと引っ張ってんだよ。今肝心なのはそうじゃないだろ。

「むぅ、誘拐か。それはあまりいただけないのだ」

「だろ城道。で、佳どうすんだ？　私も透麻もあの車のナンバー一応見たぞ」

「いや、別にいいよナンバーは。理事長の服にこっそり忍ばせた発信機があるからそれ頼りに行く」

盗聴機のことといい、コイツ何でそんなもん持ってんだよ。

「いつ忍ばせたんだ？」

「ボクが佳様に頼まれてやったんだよ」

「おう。発信機は俺のだけどな」

「とにかく追いかけるのだよ。理事長も女の人。万が一があったら可哀相なのだ」

「万が一ねぇ～」
「どうかしたか佳」
「いや。じゃあ行くか」

今の佳のしゃべり方。万が一なんか絶対起こらないみたいな言い方だったな。
普通の生徒、まぁ俺達も含めてあまり理事長とは会わない。会っても全校集会のときぐらいだ。前に立って話だけ。だから何も俺達とは接点がない。
なのに佳だけは違う。たまにだけど理事長の愚痴を言ったりする。部活の件だって理事長が反対していたことは佳から聞かされないとわからなかった。
理事長から依頼を受けたにしても佳が理事長から直接受けたみたいだし、やっぱり佳と理事長は何らかの接点があるらしいな。

「なぁ佳」
「ん、なんだ」

佳の隣りを走りながら聞く。意外佳も全力疾走だ。てか走りながらだと少々キツいな。

「佳と理事長ってどういう関係なんだ？」
「……気になる透麻？」
「ま、まぁそりゃあな」
「俺と理事長はな……、あ、ついた」

何でこんなタイミングでつくんだよ！　いや、早くついたならそれはそれで良いんだけど。よりによって何でこのタイミング？
目の前には古い倉庫のような建物が建っている。建物の前には白いワンボックスカーが停めてある。ナンバーも俺と來優が見たのと

同じだから誘拐犯の車なのは間違いないだろう。
にしても、ありきたりだなぁ。とか思いつつ扉の前に行く。

「あ、そだ透麻。さっきの質問の答えだが……、俺とアイツは切っても切れない縁だ」
「へ？　それどういう」
「なるほどなのだ。じゃあ今回の依頼は……」

聞いていたのか隣りにいる城道が俺より先に理解したようだ。ん～、俺はサッパリわからん。依頼と関係してるのか？　城道は途中で喋るのやめたし。あー、意味わからんぞ。

「じゃあまぁ開けるぞ」

佳がデカい扉に手をかける。そして一気に横にスライドさせた。

「うわっ」

思わず声が出た。來優と汐姫も開いた口がふさがらないみたいだ。あの城道でさえビックリしてるのがわかる。唯一冷静なのは佳だけだ。

建物の中に入った俺達が目にしたのは、七人の体格の良い男達が全員血を流し泡をふいてる光景だ。七人の中の二人は外国人のようだ。

まぁどちらにしても明らかに格闘技をしてますよ、ってな奴等が倒れてんだぞ。それだけでビックリするのにその中心に立っているのが綺麗な長い銀髪をなびかせている一人の女だ。そりゃあ城道だってビックリするだろうよ。

「遅かったのぉ佳」

そう言って女は俺達に近付いて来た。

理事長ストーカー編？　透麻

「遅かったのぉ佳」
「うるせぇ、手加減ぐらいしろよ」

倒れている男達を見て佳はどうでも良さそうに言う。

「十分したのじゃが、相手にならなんだわ」

見た目からは想像出来ない特異なしゃべり方をしながら女は俺達の前まで来て止まった。

まさか、佳から文武両道と聞いてはいたけどこれほどとはな。この女を俺達はよぉく知らないけど一応知っている。俺達が通う学校の理事長だ。誘拐された本人でもある。

学校ではフツーの敬語だが、普段ではこんなしゃべり方をするのか。

「海本透麻、柳生城道、守山來優、蒼空汐姫」

なんだ？　理事長が俺達一人一人の名前を言った。

「佳がいつもお世話になっている。ありがとう」

さすがと言うべきか、礼儀正しい。それにしても今の物言い、何か佳のことを身内みたいに……、あ、そういうことか。

「理事長は佳の姉さんなんすか？」
「ん？　ああそうじゃ。なんだ、佳から聞いてはおらなかったのか

？」
「聞いてないっす」
確かに姉が二人いるとは言ってたけど、まさか一人が理事長だったのはなぁ。
そういや理事長何処かで見たことあるかと思ったら、幼稚園や小学校のときの参観日でたまにいたなぁ。銀髪だから相当目立ってた気がする。

「ちっ。こんな依頼俺達にする必要ないだろ。自分で何とかできたくせに」
「なんじゃ、姉の優しさがわからぬと言うのか」
「くっ……。だからお前は嫌いなんだ」
「お前じゃなかろう。お姉様じゃ」
「誰が呼ぶかアホ！」

確かにそれは恥ずかしい。

「ふむ、昔はお姉様と呼んでくれておったのに……。いつから反抗期になったのやら」
「うるせぇ」
「いつのまにやら変な部活までつくって、ワシは反対じゃぞ。よくわからんような部活なんて必要ないじゃろう」
「うるせぇなぁ。帰るぞ皆」
「佳」
「なんだよ城道」
「一応礼を言うべきなのだ。透麻も一緒に」

お礼？　あ、そっか。

「理事長、ありがとうございます」

赤点補習の件か。

「うむ。海本透麻は礼儀正しいのぉ」

「……ありがとな」

ぶっきらぼうだがちゃんとお礼をする佳。可愛いなぁ。

「ふむ。佳も相変わらずの可愛いさじゃ」

「っうるせぇアホ！　行くぞ」

佳は強引に俺と城道の手を掴んで建物から出ていった。

建物から出るまでずっと理事長は俺達、つってもたぶん佳にだけど、手をふっていた。

「なぁ佳」

「なんだ透麻」

「理事長って別に佳のこと嫌いじゃないんじゃないか？」

「嫌いだろ。今日の依頼も俺が断れないのを知ってて頼んだんだ」

断れない？

「何で？」

「何でってそりゃあ……」

「透麻も鈍いのなのだ」

「フツー気付くよなぁ」

「佳様の優しさがわからないの？」

優しさ？

「な、なにがだよ」
「うわぁ、ホントアホだな」
「鈍い鈍いなのだ」
「透麻はバカなの？」

なんなんだよコイツらは。優しさ、つってもなぁ。ん～、わかんねぇ。

「いいよもう。お前の夏休み何かつぶれろ」
「は？　急に酷いな佳」
「佳もツンデレなのだ」
「や、ツンツンだろ佳は」
「佳様、ああ、ボクも蔑んで欲しいよぉ。お願いします、ボクを弄って」

夏休みがつぶれる？　ああ、そういうことか。

「ありがとな佳。依頼受けてくれて」
「べ、別に透麻の為に受けたわけじゃ……、ない」

おお、ツンデレバージョンの佳だ。まぁ佳も城道程じゃないけど女顔だから気持ち悪いわけでもない。

「にしても理事長強かったなぁ」
「そうなのだ。僕でも一体一だったら負けるのだ」

城道がそう言うのなら俺の予想を遥かに上回ってんだろうなぁ。

「まぁなんにしても無事依頼もすんだし」

「そうなのだ。皆また明日なのだ」
「佳様、ボク今日安全日です」
「お前の頭の中はいつも危険日だな」
「大丈夫です。佳様の子供ならボク……」
「ん、じゃあな」
「ああ、佳様置いてかないで」
「ついてくるなアホ」

……まぁ何と言うか、汐姫は色々と凄い子だな。

「じゃあ僕も帰るよ。バイバイなのだ」
「あ、待てよ城道。一緒に帰ろうぜ。じゃあな透麻。遅刻すんなよ」
「ああ。じゃあな來優、城道」

アイツらは家が近いからいつも一緒に登下校してる。

「んじゃあ俺も帰るか」

……ん？　今日の依頼俺達何もしてなくね？

「……」

風がぴゅーっと吹いた気がした。
もう時刻は八時。暗くなった空の下、一人歩く俺透麻。頭の上で数羽の烏が鳴いて飛び去った。

親しき仲にも礼儀あり　透麻

「あー、肩いてぇ」

学校から家の帰路。いつも皆と別れる例のあの坂でいつものように別れたあと俺は一人寄り道もしないで家を目指していた。

俺ん家は母子家庭だ。三才の時離婚したらしく父親の顔なんか覚えてない。母さんは三才の頃から仕事を増やし今までずっと俺を育てて来た。

うん、ホントに感謝だな。親不孝はしたくないな。

そんなことは良いとして。まぁ当然だが朝早く仕事に行って夕方帰ってくる。で、そこからまた仕事だ。忙しいときは家に帰らない時もある。だから家では一人の時が多い。まぁ思春期なこの歳、一人でいたい時もあるから別に良いけど、小さいときは寂しかったなぁ。

因みに佳と汐姫の両親はいない。汐姫は中学の時からずっと一人暮らしをしている。だからたまに皆で泊まりに行って遊ぶことがあった。

佳も一応一人暮らし何だけど月に何回か姉が様子見に帰ってくる時がある。あ、理事長の方じゃないぞ。確か理事長より一つ上だった気がするな。

「にしても肩いてぇな」

今日の部活で寺部って言う部活のとこに遊びに行ったんだけど、そこで佳の気まぐれで坐禅勝負をすることになった。あとは予想できるように肩をバンバン変な棒みたいなので殴られたわけだ。てか寺部って俺達の部活と同じくらい意味不明だぞ。何の目的の部活な

んだよ。部長が近々大会があるって言ってたけど、ツルツル頭が集まって一体何する気だよ。

「……想像出来ねぇ」

てか想像したくねぇ。

どうでもいいこと考えてたら家についた。やっぱりチャリこぎながら考え事はいけないな。俺どの道通って家に帰って来たか全く覚えてない。

俺ん家は普通の二階建ての一軒家だ。住宅街にありそうなやつ。

駐車場の隣りにチャリを置いてポケットから鍵を取り出す。

ガチャ。

「ただいま」

母さんはとっくに仕事に行ったんだろう。それも当たり前か、もう七時だ。

案の定家の中から返事なんか返ってこない。

「あ、おかえり透麻」

筈なんだけどなぁ。

「何でいるんだ汐姫？」

「え、ボクいたらいけないの……」

「いやいや、ショックを受けたいのはこっちなわけで、てかどうやって入ってきた」

「こういう家の鍵ならピンセットでちょちょいのちょいだよ」

「お巡りさぁん！　ここに犯罪者がいます、空き巣がいまぁす」

「お巡りさぁん！　ボクこの男の子に汚されましたぁ。体も心もずたぼろの肉べんっ」

バカかこいつは、バカなのかこいつはっ！　危ないこと言いだした汐姫の口をふさぐ。

「ふがふが」
「お前はバカか！　頼むから卑猥な発言は控えてくれ」
「ふが」

こくんと汐姫が頷く。わかったみたいだから手を離してやる。

「ぷはぁ、あー苦しかった」
「はぁ」

何で家帰ってからも疲れないといけないんだろう。
二階にある自分の部屋に行く。汐姫が後ろからついて来てるけど、まぁ散らかってるわけじゃないから別に見られても気にしない。
自分の部屋のドアの前についたとき、

「にしてもアイツはホントに男か？　エロ本一つねぇじゃねぇか」
「僕と佳も持ってないのだ」
「城道と佳はいいんだよ。そんな汚いもの持ってないほうがいい。っかしいなぁ。アイツは持ってると思ったんたけどなぁ」

はぁ……。

「お前らは……」

ガチャ。

「人の部屋で何してんだぁああ！」
「おかえりなのだ透麻」
「おう、おかえり」
「あ、ただいま。じゃあねぇえ！」
のせられるかそんなもんで。
「何を怒ってるんだ？」
「たぶんアレなのだ。冷凍庫に入ってたアイスを食べたせいなのだ」
「あー、アレか」
こいつら人ん家の冷凍庫勝手に開けたのか？
「安心しろ透麻。あと一本お前のちゃんと残してるから」
「そんなこと怒ってんじゃねぇよ！　てか人ん家の冷凍庫勝手にあけんな！」
「失礼なのだ。いくら僕達でもそんな人道に背くことはしないのだ。透麻のお母様殿が皆に一本ずつくれたのだ」
「そうだぜ。さすがにそこまでヒデェことはしねぇよ」
「家に入ったのだって汐姫が鍵開けて誰かいませんかぁって言ったらお母様殿が出てきたから上がらせて貰ったのだよ」
そうか。全てはあのクソババアがいけないのか。
「あんのクソババア！」
「透麻。自分のお母様殿のことクソ呼ばわりはいけないのだよ」
「ババアもいけないぞ城道」
「ボクもそう思うよ」
「はぁ～。で、佳は？」

こいつらがいるんだ。佳がいないわけがない。

ガチャ。

「城道、冷凍庫にあった残りのアイス一本貰うぞ」

佳が部屋に入って来た。残りの一本、つまり俺のアイスを口にくわえてだ。

「あちゃぁなのだ。まさか勝手に人ん家の冷凍庫開けてアイスを食べる人がいたとは。いやはや、僕の考えも少し甘かったのだ」

「大丈夫だ城道。私も予想してなかった」

「さすが佳様。人の家のものを自分のもののように勝手にとるというご行為。尊敬します」

「ん？　何のことだ？　あ、透麻おかえり」

お・ま・え・は、

「ジャイ○ンかぁあ！」

「何言ってるんだこいつは？」

「佳が酷いのだ」

「ああ、佳が酷い」

「佳様凄いです」

「……で、お前らは何をしに俺ん家に来たんだ？」
「はあ？　何って部活に決まってんだろが」
「來優の言う通りなのだ。また佳の気まぐれなのだよ」
「そ。だから透麻ん家に来たわけ」

あー、なるほどぉ。だから俺ん家に来たわけかぁ。

「……っだから何で俺ん家なんだよ！」
「坂で別れたあと來優ん家の車に乗せてもらって透麻ん家に来たんだ」
「だから何で俺ん家に来たんだって聞いてんだ！」
「そろそろ外も暗くなってきたな。よし、じゃあ行くか」

そう言って部屋から出て行った。

「佳様ボクを置いていかないで下さい」

汐姫もそう言って佳のあとを追った。

「まぁそういうことだ。行こうぜ透麻」

來優も部屋から出ていった。

「皆説明が下手なのだ。いつもの気まぐれなのだよ」

城道は肩をポンと叩いて出ていった。

がしがし。と頭をかく。

「あー、もう！　行く、ちょっと待てよ」

何だかんだ言って俺は佳の気まぐれについて行く。俺だけじゃない。來優も汐姫も城道も。絶対佳を裏切ったりしない。

それは何故なのか？　長年の付き合いだから？　親友だから？　仲間だから？　信頼してるから？

もちろんそれもある。でも、ただ好きだから。愛してるから。狂おしい程に愛しているから。ホモとかそんなんじゃない。俺達は佳に救われた。それは各々違う形だが、それでもそれがきっかけで佳をより好きになった。

なんだろ？　佳は空みたいな奴なんだ。掴もうに掴めない。でもいつのまにか俺達を癒してくれてる。空が嫌いな人間なんていないだろ。そんな感じだ。俺達には無くてはならない存在。それが佳なんだ。

俺は佳を狂おしい程に信頼している。佳がどんなことしても俺達を裏切るとは絶対思わない。他の奴等は、よくわからない。何を救われたかもわからない。まぁ救われたことに間違いはない。

「ちょっと待てって佳！」

「早くこいよ透麻」

『透麻くんって盲信しすぎじゃない？』

そう言えばそんなことを誰か言ってたなぁ。盲信かぁ。盲目の信頼の略かな？　それの何が悪い？

できるよ。俺なら、俺達ならできる。佳を陥れたり殺そうとする奴を俺達なら躊躇無く殺せる。

これをやらなきゃ夏じゃないッ！　透麻

佳に連れられて来たトコは学校。夜の闇に不気味にたたずむ我が学び舎だ。問題は、

「夜の学校に来てなにをする気だ？」
「んまぁ聞きました城道さん」
「聞いたのだ。夜の学校といえばすることは一つしかないのだ」
「そうですよねぇ。なのにこの子ときたら」
「情けないのだ。お母さん透麻をそんな子に育てた覚えはないのだ」
「え？　なにこの茶番劇。ちょお腹立つんですけど」

ていうか何で佳お姉言葉？

「ちょっ城道、お母さん役は俺だろ。お前がお母さん役とったら俺オカマなお父さん役になるだろ。そんなお父さんやだろ」
「甘いのだ。オカマなお父さんを反面教師に透麻はたくましい男になっていくのだ」
「あ、そっか。いや待て。もしかしたらオカマの道に進むかも知れないぞ」
「透麻がその道を選択するならお母さんは止めはしないのだ」
「いや待て待て。父さんはやだぞ。オカマな透麻なんて父さんはやだぞ」
「グダグダじゃねぇか！　つか俺がオカマになる方向で話を進めんな！」
「じゃあクジ引くかぁ」

無視ですかこのヤロー。

「ほら透麻早く引けよ」

引けっつったってもう一本しか残ってねぇじゃねぇか。

まぁ引くけど……。

「透麻何番？」

「俺、二番」

「じゃ俺とペアだな」

佳とペアか。

「で結局何するんだ？」

「肝試しなのだ」

「肝試しかぁ」

「なんだ？　まさか怖いのか透麻？」

「怖いわけねぇだろバカ來優」

「あー、羨ましいな透麻。ボクも佳様とペアになりたかったなぁ」

「わりぃな汐姫」

涙ぐみながら言う汐姫。なんかホントに悪いと思って来た。

「肝試しかぁ懐かしいな」

「懐かしいのだぁ」

「小さいころよくやったなぁ。汐姫のビビるトコがおもしろかったなぁ」

「そんな、ひどいよ來優」

「冗談だって汐姫。ビビる汐姫が可愛かったんだよ」

「か、可愛い！？　ぼ、ボクが？」

汐姫はおもむろに手首を抑えながら俯いた。俺でも汐姫の事情は少し知っている。汐姫が抑えているのは汐姫の心の傷跡だ。

「おい、懐かしむのもいいけど行くぞ。俺と透麻、來優と汐姫。で城道は一人」
「むぅ、僕は一人なのかぁ」
「何言ってんだよ。好きだろ？　こういうの」

佳が城道にそう聞いた。城道はいたずらをする子供のようにニヤリと笑いながら、

「大好きなのだ」
「よし。じゃあまずは俺と透麻から行くわ。來優と汐姫は何分かたったら適当に来てくれ」
「おうわかった」
「ボクは呼ばれるの二番目なんですね……」

呼ばれる順番なんかどうでもいいだろ。

ドキッ、肝試し編　透麻

明かり一つない真っ暗な廊下。頼りは窓からふりそそぐ月光と手に持った携帯電話のライト。それでもお世辞にも明るいとは言えない。昼の賑やかな姿とは違う夜の不気味な姿。

校舎内に入って俺はさっそくその不気味さに気持ちを押されがちだ。

「なぁ佳」
「ん～？」
「何か不気味だなぁ」
「そうだなぁ」

いや、冗談じゃなくて本気だ。おかしい程不気味なんだ。

小さい頃から夏が来るたび佳に付き合わされ夜の学校に侵入している。最初こそ少しは怖かったものの、二回目からは怖さなんか感じず、楽しんでいた。まぁ五回目くらいからはマンネリ化したんだが……。

それに俺はホラーは苦手じゃない。城道ほどホラーが好きってわけじゃないが一応一人でホラー映画くらいなら見れるくらいだ。

あれか？　この学校は夜に入るの初めてだから少し怖いのか？

「なぁ透麻」
「なんだ？」
「何か気配感じないか」
「気配？」
「ああ。後ろから誰かがついて来てるような」

ま、マジで？　そういわれればそんな気も……。なんかだんだんとこつこつって足音まで聞こえだしてきたし。

「透麻、何だと思う？」
「さ、さぁ。俺にはサッパリわからない」
「そうか……。俺はな」

佳が真剣な顔つきで俺の顔を見る。
ごくり。と生唾を飲む音がした。もちろん俺の喉から。

「俺は後ろからついて来てる奴は……」
「だ、誰なんだ」
「來優と汐姫だと思うぞ」

いつもの顔に戻ってへらぁという佳。
こいつあんなに引っ張っといてそういうオチかい。

「おー、合流できたぞぉ汐姫。よかったなぁ」
「は、はい～」

後ろをライトで照らすと汐姫と來優の顔がうつった。
佳のいうことはやっぱりあってたみたいだ。
あれ？　汐姫半分泣いてねぇか？　すっごい潤んでるぞ目が。

「佳様ぁ、怖かったです」
「そうかそうか。汐姫はいつも怖がってるもんなぁ」

佳が目茶苦茶嬉しそうに言いながら汐姫の頭を撫でる。

「うぅ、怖いのは苦手です」

「あー、汐姫可愛いなぁ」

バカ來優が汐姫に抱き付きながら言った。
うっわぁ。的な目でそれを見る俺。

かたかた。

「ん？」

かたかた？　一体何の音……。

「お、おい」
「あ、何だよ今いいとこなんだぞバカ」
「何だ透麻」
「あ、あれ」

かたかた。

さっき來優達がきた廊下の方を指差す。俺の目が確かならさっきの音は……。

かたかた。

これでハッキリした。どうやら俺の目は確かみたいだ。
ていうか、

「何で人体模型が歩いてんだよぉおお！」
「うわぁあああ！」
「あ、ああ、もうダメ……」

汐姫が意識を失ったぁ。まぁ佳がとっさに腕を掴んでおんぶしたからよかったけど……。
俺達は全力疾走で歩いてくる人体模型から逃げた。

「はぁはぁ」
「ちょっ、なんなんだよアレはなんなんですかアレはぁあ!?」
「ちょっと落ち着けよ來優。ここまで走ればもう大丈」

ガタガタ!

「……」

やべぇ。後ろ振り向くのが怖いと思ったの今日が初めてだ。
ていうか確認するまでもねぇ。あの人体模型確実に走ってるだろ？　走ってるよねあの音は!?　てか人体模型が何で走ってるんだよ!?

「もうイヤだぁああ!」
「來優俺だってやだぞ。何が楽しくて人体模型と鬼ごっこしなくちゃいけねぇんだよ!」

ホント楽しくねぇよ。何かリアル鬼ごっこしてる気分だよ。

「あー、もうさっきからウゼーな」

ずっと黙っていた佳が急に立ち止まった。
そして何を血迷ったか人体模型の方に走って行った。

「ったく。テメェは誰の許可をえて俺達を困らせてんだよ」

そして人体模型にラリアット……って有り得ないだろ！
首が素っ飛んだ人体模型はその場に倒れて動かなくなった。
「はぁ。さすがホラー研究部。いい仕事をするな」
そう言いながら戻って来る佳。
「どういうことだ佳」
「右に同じだ」
「右っていうなバカ透麻」
「今そこ突っ込むとこじゃねぇだろ」
「そ、そうだった」
「で、どういうことなんだ佳」
「ん～、どういうことって言われてもなぁ」
ポリポリと頬を掻きながら困った顔をする佳。
「肝試しを盛り上げて貰おうとホラー研究部にお願いした。っていうこと」
あー、なるほどぉ。
「「ふざけんなぁあああああ！」」
「う、うわぁあ！」

ドキッ、肝試し編？　透麻

「なるほどなぁ。ここ何年かマンネリ化した肝試しを盛り上げようと、ねぇ～」
「そっかぁ。でもこれはやり過ぎだよなぁ」
「うんうん。まさかうちのホラ研がここまで本格的とは思わなかったなぁ」
「「ちょっと黙れや」」
「はい」

ったく佳は。
頭に四つのたん瘤（こぶ）が出来た佳は汐姫をおんぶしたまま正座をしている。てかさせてる。少しは反省して貰わないとな。
あ、ホラ研ていうのはホラー研究部の略な。

「うーん。でもさぁ透麻何かおもしろくなって来たなぁ」
「そうだな。俺達の為にここまでやってくれたんだ。楽しまないとな」
「そうそう。そして明日はお礼しに行かなくちゃなぁ、たぁっぷりと」
「ああ、たっぷりとな」

フフフ。楽しみだなぁ。

「んじゃあさっさと一周して出るか」
「そうだな。ほら行くぜ佳」
「ああ」

來優が佳に手をかした。よし。さっさと校舎一周するか。

「んじゃ行くか。もうビビるなよ二人とも」

ん～、ホントに反省したのかな佳は。

携帯のライトを頼りに俺達は佳を先頭に歩きだす。

「ぐ、ぐび……どごだぁ……」

……ふと後ろ見たら人体模型が飛ばされた首を探していた。うわぁ、ホントに完成度高いなぁ。作り物だってわかってもゾっとする。

「……透麻、來優」

「ん？」

「あそこに髪の長い白い服来た女の人がいる」

「あー、ホントだ」

「見ろよ透麻、ハサミ持ってるぜアイツ」

その上白い服に赤黒い液体がついている。

そいつは俺達に気付くとゆらゆらとこっちに歩いて来た。

マスクしてる。こいつはもしかして……。

「ねぇ、私綺麗？」

やっぱりな。

「おー透麻口裂け女だ。初めて見た」

「私も初めてだ」

「それ言うなら俺もだ」

てか初めてじゃなかったら逆に怖いだろ。

「ねぇ、私綺麗？」
「んじゃ次行くか」

佳は口裂け女を無視して進みだした。佳が無視したから俺達も無視をする。口裂け女はお決まりの言葉を言いながらついて来たけど、しばらくしたらいなくなっていた。

「テケテケテケテケ！」

ブォー。

空飛ぶヘンテコな人形みたいな奴。言うまでもないな、テケテケだ。そしてその後ろから木刀を持って特攻服を着た首のない男がバイクに乗ってテケテケを追いかけている。

あー、だからテケテケ半泣きなのか。可哀相だなぁ。

「來優、助けてあげろ」
「は？　命令すんなバカ」

そう言いながらも首なしライダーが横を通るタイミングを伺いだす來優。基本動物には優しいんだよな。テケテケが動物なのかどうかは疑問だけど。

「てい！」

來優の真横をちょうど首なしライダーが通ったトコで來優は足を突出す。來優の足は首なしライダーの横腹にヒットしそのまま壁へ

と叩きつけた。

「ふふん。ちょろいなぁ」

自信満々に來優が俺を見てくる。あの目はあれだな、うん。お前にはこんなこと出来ないだろバァカ。って言う目だな。

「誰がバカだぁこらぁ！」

「ハァ？　誰もバカなんて言ってねぇだろ。頭大丈夫ですかぁ？」

「ケンカ売ってんのか！」

「売ってんだよバァカ！」

ドガァ！

「ぼびぎゃあああああ！」

「「……」」

後ろから大きな衝突音と奇妙な叫び声がして振り返る。

「……行くか來優」

「そ、そうだな」

俺は何も見てない。何も見てないぞ。無人バイクに轢かれたテケテケなんて見てないんだからな。

てか結局來優助けれてないし。どっちも倒したことになってるな。

「あー、火の玉だ。綺麗」

「なんだ來優でも女らしいとこあるんだな」

「うっせぇバカ」

真っ暗な廊下にポツポツと光る数個の火の玉。綺麗に一列になり壁をすりぬけていった。

（……火の玉を綺麗って思うのは女らしいのか？）

「何変な顔してんだ佳」
「佳は変な顔じゃねぇよ。可愛い顔だろが」
「そんなこと言われなくてもわかっとるわバカ」
「誰がバカだこのバカ」
「バカにバカって言ってなにが悪いんだ大バカ」
「もうやめろ。てかボキャブラリー少な過ぎ。幼稚園児みたいだ」

うっ。否定出来ない……かも。

「もうちょっとで終わるんだから仲良くしろよ」
「はぁ。わかった」
「佳の頼みだから仕方ねぇな」

言ってろバカ。

ガシャ、ガシャ。

「それにしても起きないなぁ汐姫は。私汐姫の怯える顔がみたいのに」
「ドSだな」
「違う！　汐姫の怯える顔は可愛いんだ」
「答えになってねぇよ」

ガシャ、ガシャ。

「ん～、確かにちょっと疲れたかな。起こすか。汐姫」

そう言って体を揺すったりぴょんぴょん跳ねたりする佳。揺れで起こそうとしてるんだろなぁ。兎みたいでなんか可愛い。

ガシャガシャ。

「ん、ん～……」

「あ、汐姫起きた」

「ふぇ、な、何でボク佳様の背中に！？」

「ん、気絶したからおんぶ」

おー、見る見る汐姫の顔が真っ赤になっていく。

（う、うわぁ。顔が近いよぉ。ボク顔真っ赤？　今顔真っ赤なの！？　恥ずかしいよぉ）

ガシャガシャガシャ。

（心臓がうるさい。佳様に気付かれたら恥ずかしいよぉ。でも、）

ガシャガシャガシャ。

（もう少し長くこうしていたい）

ん？　汐姫にしては成長したのか？　佳の背中に顔埋めて前に回してる腕に少し力を込めてる。

ガシャンガシャン！

「春だな透麻」
「そうだな來優……ていうか、さっきから気になってたんだけどこの音なに？」
何の音なんだろ。ガシャガシャガシャガシャ、と。まるで鉄が擦り合ってるみたいな音。
「なぁ佳何の音かわかるか」
「お、おい佳、汐姫、その他」
その他って……俺のことか。
「み、見てみろよ」
來優が真っ暗な廊下の先を指差す。俺には何も見えないぞ。
ガシャンガシャン！
でも音は來優が言うとおり前の方からだ。それにだんだん大きくなってるから近付いてるってことだな。
じゃあ何が？　俺には見えない。來優には見えている？　佳もビックリしているから見えているっぽいな。汐姫は……音だけでビビって震えてるな。
ガシャンガシャンガシャンッ！
近い。音だけだからおおよそだけど五メートル先くらいにいる。
問題はなにが、だ。

「おい佳、來優何がいるんだよ」
「み、見えねぇのか透麻」
「行列だよ透麻」
「行列？　なんの」

ガシャンガシャンガシャンガシャン！

距離が三メートルくらいになった。
そうか、やっとわかった。やっと俺にも見えた。行列ってのはそう言うことだったのか。こりゃ幾ら作り物ってわかってもビビるわ。
行列だ。昔、国の為、金の為、大切な人の為に自分の力を振るった奴等の行列。

「透麻、武者の行列だ」

そう佳が言う頃には俺にも朧（おぼろ）だがハッキリと見えていた。黒々とした液体が染み付いた鎧を身に纏い、錆びてはいるがその錆びが何人も殺して来たことを強調している武器を手に握り、威風堂々と大きな列を成して廊下を歩いている武者達の姿。
その数、その力強さ、全てにおいて俺達は怖じ気ついた。
一人を覗いて、だ。

「……すげぇ」

佳の口からそんな言葉が漏れた。
凄い？

ガシャンガシャンガシャンガシャンっ！

「うわっ！　ぶつかる！」

あんなのとぶつかったら身がもたねぇ。クソっ。避けるのももう間に合わねぇっ！

覚悟を決めて強く目を瞑る。

ガシャンガシャンガシャンガシャン……。

……あれ？

「ぶつかって、ない」

「よかったぁ。あんなのとぶつかったら堪らねぇぞ」

「映像だったみたいだな。あ、汐姫また気を失ってる」

ホントだ。汐姫ダランとしているな。まぁさっきのは気を失う気持ちもわかるけど。

「凄かったなぁ。んじゃ行くか」

佳が少し興奮気味に言った。……佳が楽しいんならいっか。ホラ研も半潰しくらいで済ましてあげよう。

「ねぇねぇお兄ちゃん達」

急に俺の手を小さい手が掴んだ。冷たい感触がする。ゾッとするくらいの冷たさ。後ろを振り向いたら小学生くらいの女の子がいた。

「お母さん知らない？　はぐれちゃったの」

凄いな。ホラ研ここまでリアルなもの作れるのか。さっきのも凄かったけど。その女の子は透けているのに俺の手に触れている。

「……ごめん知らない」

佳が女の子の目線と同じくらいに屈んで苦々しそうに言った。

「ありがとうお兄ちゃん。花もう少し探してみるね」
「花？　キミの名前？」
「うん。鏡花（かがみはな）って言うの。バイバイお兄ちゃん達」
「かがみはな……」

女の子はそう言うとフッと消えた。
ん？　消えたってことはアレも映像だったのか？　いや、映像だったら触れないよな。何か仕掛けたなホラ研。

「鏡花……」
「どうかしたか佳」

考えごとか？

「いや、たぶんただの偶然だ」
「ん？」
「もういいから早く行こうぜ」
「ああ。そうだな來優」

そうだった。長かった肝試しももう終わりだ。そこの窓から出て校門まで行けば終了。あー、明日が楽しみだなぁ。覚悟しとけよホラ研。

肝試し結末　透麻

「あれ城道何でいるんだ」
「ホントだ。何で城道私らより早いんだよ」

校門に帰って来たらもう城道が先にいた。俺達より遅くスタートした城道が何で先にいるんだろ？　追い越されたわけじゃないよな。追い越されたら普通気付くしなぁ。

「城道……」

佳が何か言いたそうに城道を見る。城道は佳が言いたいことがわかったのか一度頷いてから何でこんなに早く帰って来たのかを答えだした。

「僕は行かなかったのだ」
「は！？」
「まさか城道ビビったのか」

城道に限ってそれはないと思ったが……。

「うん。ビビったのだ」

まさかホントにビビって入れなかったとはな。

「僕が窓から入ろうと思ったら嫌な気配を感じたのだ」
「嫌な気配？」
「うん。それは」

「ちょっと待って城道」

來優が城道の話を遮った。

「その嫌な気配って数人の気配か？」

「数人って言えばそうなるのかな？」

「ははーん。城道その気配の正体わかったぞ。城道がビビったその気配はな……、ホラー研究部の奴等の気配だ！」

そんなんで城道がビビると思ってんのかこのバカは。

「……、じゃあそれでいいのだ。とにかく僕は入ろうとしたら怖くなって入るのやめたのだ」

「んー、でも城道一人だけ入ってないからなんか罰ゲームだな」

「へ？　佳それは酷いのだぁ。佳だって僕が何で入れなかったか気付いてるのに、その仕打ちは酷いのだよ～」

「問答無用城道」

「うぅ～」

潤んだ目で悲しむ城道。まぁこれは仕方ないな。城道だけ入らなかったんだから。今のこの時間だと罰ゲームは明日になりそうだな。まぁ楽しみにしとくか。

「佳のバカァなのだ」

「お、今ので罰ゲームが重くなった」

「嘘嘘なのだ。佳は天才なのだ」

「あからさまだな。罰ゲーム何にしよっかなぁ」

「うぅ～、佳の悪魔ぁ」

「おらぁホラ研！」
「テメェら昨日はよくもやってくれたなぁ！」

あの肝試しの翌日。朝俺と來優はいつもより早めに学校に行き、ホラ研の部室に殴り込みをしている。ホラ研の奴等は部室の角で固まりながらふるふると怯えている。

「ご、ごめんなさい。何も仕掛けられなくて」

にしてもこいつら変な格好してるなぁ。部員皆が黒いフードを目の下まで深く被っている。何か黒魔術で呪われそうな気がしたぞ俺。

「お前らよくもあんな」

よくもあんな、ん？　こいつら今さっきなんて言った？

「待てテメェら今さっき何て言った？」

來優も引っ掛かったのか聞き返す。

「え、なにもできなくてごめんなさい」
「なにもできないって、は？」
「我が部の霊感の強い子が昨日強い怨念や妖気を感じて、仕掛けをするのをやめたんです」
「ま、待て。てことはお前ら昨日学校になんの仕掛けもしてないんだな」

「は、はい。え？　そのことを怒りに来たんじゃないんですか？」

じゃ、じゃあ俺達が昨日見たものは……。

「と、透麻、呪われたりしないかな……」

「し、知るか」

「ど、どうするんだ」

「とにかく、こいつらをシバく」

「そうだ、な」

悪いなホラ研。ただの気晴らしにシバかせてもらう。だって何かしてねぇと怖いんだもん。

コロコロ、コツ。

「ん？」

俺の足に何かが当たった。足元を見る。当たったのは首。昨日の人体模型の首だった。

「がらだ、どご、だ」

……。

「「うわぁあああああ！」」

全力疾走だ。俺と來優は死ぬ気で教室へと走った。

「佳！　城道！」

教室へついた俺は佳と城道を呼んだ。聞きたいことがあるからだ。

「んー？」

「なんなのだ？」

「いや城道お前がなんだ」

城道はメイド服で登校していた。そのへんの男や女が着てたらキモいで終わるんだけど城道は超美少女（男です）だ。似合い過ぎていて困る。周りの男達も城道のメイド姿にソワソワしている。

「こ、これは罰ゲームで仕方なく着ているのだ」

あたふたと両腕を上下にふりながら恥ずかしそうに答える城道。その行動がまた男心をグッと……、

「ってそんなことよりお前ら昨日のこと知ってたな！」

「昨日のことって？」

パシャパシャ。

「昨日肝試しのことだよって写真をとんな來優！　あとでいいだろ写真は！」

「あ、わりぃ城道が可愛いすぎてつい」

いやわからなくはないが、わからないことはないんだが！　今は堪えてくれ。俺だって欲しいよ写真。あとで焼き増し頼もう。

「だから僕は言ったのだ」
「おい城道、僕じゃないだろ」
「うっ……、だから私は言ったのです」
「城道！」

佳が城道にキツく言う。たぶん罰ゲームを遂行してないんだろう。

「わ、わかったのだよ！　だから私は言いいましたよ、ご、ごご主人様……」
「……は！」
「可愛いいぃっ！」

來優が爆発した。城道に抱き付いて頬をすりすりさせている。あー、こいつホントに爆発しねぇかな。

「ちょ、い、痛いですご主人様！」

ぶっ！

鼻血。あ、俺のじゃねぇよ。來優が鼻血ふいたんだよ。

「やっべナイス佳。可愛いすぎだろ城道！」
「だろ。やっぱ城道は何着させても似合うな」
「ちょっと待つのだ。僕はまだ透麻と話が、」
「こら城道。お前はメイドだろ」
「うっ……。私はまだ透麻様とお話があります。申し訳ないのですがご主人様、少し待っていてください」

あー、場合によってご主人様は変わるのか。

「やばい。鼻血でそぉ」
「もう出てるぞ來優」
「佳にも着て欲しいなぁメイド服」
「そうか、今度は來優に着せてみるか」
「あー、それで佳と城道に囲まれて過ごしたい」
「よかったな來優。ちょうどあと一人メイドが欲しかったんだ」

何か静かに言い争いをしてる。噛み合ってないけど。

「佳様、メイドならボクが。佳様からならどんなお仕置を受けても良いですから。御奉仕もします」
「あ、メイドはやっぱいいや」
「ガーン！」

……アホか。

「透麻様、私は嫌な気配がしたので入るのをやめたと言いましたよ。とても強い怨念を感じたので怖くなったのです」
「そ、そうか」

様づけされたら何かかゆいなぁ。

「佳はいつぐらいから気付いてた？」
「ん、ああ。鏡花が出てきてからかな」
「鏡花？」
「そういや佳鏡花の名前を呟いて何か考えてたな。何考えてたんだ」

來優が復活して鼻血を止めながら佳に聞いた。

「なぁ俺達が小学校にいた時花子さんって怪談が流行ったろ」
「ああ、懐かしいなぁ」
「懐かしいですね」

そんなのも流行ったなぁ。えと、確かトイレに隠れた花子さんが母親にばれて殺されるって話だったかな？

「アレなホントにあった話なんだよ。五十年程前、母親がある日父親を包丁で刺して殺し、学校に逃げた娘も追いかけて殺した事件があった。それから何日後その娘は母親を探して転々と色んな学校を彷徨うっていう噂がたったんだ」

……まさか。

「その殺された娘の名前が鏡花。俺も最初はアレもホラ研がつくったものかなぁ、と思ってたんだけど城道が先に校門にいたことでハッキリしたってわけ。アレらは本物だって。おかしいとは思ってたんだ。うちのホラ研があんな凄いのを作れるわけがない」

確かに。ホラ研自体あんまり噂をきかないしな。

「まぁ皆何もなくてよかったのだ……、良かったです」

佳に睨まれ城道は言いなおした。

「それはそうとご主人様、私はいつまでコレを着ていないといけないのでしょうか」
「学校が終わるまで」
「そんなぁ。ご主人様酷いです」

「ホラー研究部か……、いらないねぇ」
「うんうん。会長潰そうよ」
「んー、じゃあ任せるよ海里」
「りょーかい会長」
「じゃあオレ先帰ってるから。あとは任せたよ。バイバイ」
「さよなら会長……。ふふ。さぁって楽しみますか」

何気ない一言に救われたりする時もある　透麻

これは昔の話。まぁ俺が幼稚園の頃の話だ。そして、俺が佳に救われた話。

それは他の人にとって小さい言葉でも、それは他の人にとってはどうでもいい言葉でも、俺にはとても大切でとても救われた言葉。

「お前生意気だな」

当時の俺はとにかく嫌な奴だった。幼稚園児にしては人一倍力が強かった俺は気に食わない奴は片っ端から殴っていった。入院沙汰になったこともある。

まぁ、たいてい來優か城道が止めてくれるからやり過ぎにはあまりならなかった。

幼稚園の年少のころから年長の奴等とのケンカはしょっちゅうだ。まぁこっちには來優や城道がいたから負けることはなかったけど、それでもケガすることはしょっちゅうだ。

そのたびうちの親がペコペコ俺を連れて頭を下げていた。

「そんなことすんな！　恥ずかしいんだよバカ」

そんな罵声を浴びせたこともあったなぁ。母さんはそう言う俺に一度微笑むとまた頭を下げた。

年長に上がった時俺は皆から恐れられていた。

「アイツ父親いねぇんだぜ」

それでも影での悪口は絶えることなかったし益々酷くなっていった気もする。まぁそのたびそいつらをボコボコにしたんだけどな。
そして転校生、佳がやって来た。

「よろしく。あ、おもしろくない奴はよろしくしなくてもいいから」

今と変わらない髪色をしていた佳は俺の気にすぐ触れた。

「お前透麻ってんだな。父親いないんだって？」

あー、こいつもか。こいつも俺をバカにするのか。
俺はその言葉を聞いた瞬間に佳の顔面を殴った。俺が殴ったら皆倒れるんだけど佳は違った。殴られてもアイツは倒れもせずヘラヘラと笑いながら、

「透麻、おもしろいな。気に入った。仲間になろう」

そう聞こえた頃には俺は仰向けに倒れていた。頬が痛い。たぶん殴られたんだろう。倒されるのは久し振りだ。ずっと前城道にケンカ売った時ぐらいか。
にしても、太陽ってこんな眩しかったっけ。空ってこんな遠かったっけ。

「あ、仲間になった透麻に一つだけ言っとく」

俺の顔を覗きこむ佳。太陽の光を反射して佳の横髪が更に赤くなる。可愛らしい佳の顔が近くて一瞬ドキっともした。

「母親に迷惑をかけるな。父親がいないことをバカにされたからっ

て母親に迷惑はかけるな。お前のソレは母親の助けにはなってないんだぞ」

何で知ってるんだろう。何でわかったんだろう。何で俺のやりたいことがわかったんだろう。

俺は母さんに頭を下げて欲しい為にやったんじゃない。

俺はバカにされたからやったんじゃない。

俺は父親がいないことをバカにされて母さんが腹立ってたんじゃないかと思ってやったんだ。母さんが出来ないから俺がやれば母さんがスッキリするかと思って。

「透麻。俺と遊ぼう。俺と目一杯遊んで、楽しんで、笑って、そしてそれを見てもらおう。それが母親の一番喜ぶことだと思うぞ」

そうか。俺が楽しかったら母さんは喜ぶのか。そうか。俺が傷ついたら母さんは悲しむのか。

伸ばされた手を掴む。太陽は眩しかったけど、空はまだ遠かったけど、殴られた頬はジンジンと痛むけど、何か嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、ただ嬉しかった。

「よし。仲間二人目だ」

「二人目？」

「ああ。また今度一人目に合わせてやる。とにかく今は変わった奴を仲間にいれる」

「変わった奴か……。あ、二人いるぞ」

「なに！？　ホントか？」

「ああ」

「紹介しろ」

「一人は強くて可愛い男でもう一人はカッコいい女だ」

「名前は？」

「男が城道、女が來優」
「勧誘しに行ってくる。ほら透麻もこい」
俺を人知れず救ってくれた人は、行動力が幼稚園児のそれではなかった。行動までがえらく早かった。

朝一番最初に開けるのは瞼！　城道

正座をして目を瞑る。体の力を抜き自然と一体となる。それが無我の境地。

何も考えず、自然と一体になり、大気の流れに逆らわず身を任せる。そうしているうちに神経がぎりぎりまで研ぎ澄まされていく。全ては集中力がなせる業だ。

これが僕の毎日の日課なのだ。

道場の師範の子供として生まれた僕は幼い頃から剣道をやっていた。僕のやっていたソレは幼い子にさせるのは酷で何度も逃げだそうと思った。だって三歳児に手に豆が出来るまで竹刀握らせるんだよ。酷いのだよ。

今ではもう慣れて中学一年生の頃には無我の境地にまで達することが出来た。これはとても凄いらしい。父上もとても喜んでいた。

幼稚園の頃はよく透麻のやり過ぎを止めたり、一緒にケンカをしに行ったりしていた。母上は僕がケンカをする度に困った顔をし、父上は勝ったことを伝えると喜んでいた。父上は強さこそ全てなのだと思っている。そして僕も小さい頃からそう教え込まれていたのでソレに何も疑問を感じていなかった。

「誰なのだ」

目を瞑ったまま静かに言う。

「私だ。相変わらず隙がないな」

「父上」

父上？　なんの用だろ。

「來優ちゃんが来てるぞ」
「もうそんな時間！？」

あちゃぁ、集中しすぎたかなぁ。朝の稽古のあとだから汗も流したいし服もまだ着替えてない。

「……待ってもらうのだ」
「わかった。伝えておこう」
「ありがとなのだ」

急がないと。あんまり人を待たせるのは好きじゃない。

こうして僕の一日は始まった。

順位なんて気にするモンじゃない　城道

「人が多いのだ」

来優と一緒に登校し、今は学校の掲示板の前。

この掲示板には前にやったテストの順位と総合点が表されている。

もちろん赤点保持者や夏休み補習を受けないとダメな人の名前も。

それがあってか長期休みの前のテストの結果はいつもより見る人が多く掲示板の周りには生徒が群がっている。

「そうだなぁ。確かにここから見るのは難しいな。てか男共邪魔だ」

「うーん、見えないのだ」

まぁどうせ僕は二位くらいなのだ。わからなかった問題なんか二つくらいしかなかったし、一度見直したけどミスもしていない。九教科総合で八九〇点はあると思う。

この点数だけで普通なら一位は狙えるんだけど、うちの学校には佳がいるからなぁ。

「お、城道と來優発見」

「おはよなのだ透麻、佳」

「おはよー佳。ついでに透麻」

佳と透麻が隣りからやって来た。

「佳結果どうだった？」

「んー、わかんないし興味ない。全部八〇点なのは決まってるから見る必要がない」

「俺も。補習免除だから見なくていい」

そっか。透麻は理事長に補習を免除して貰ったのだった。佳も遅刻しなかったら減点なんかされなかったのに。

「城道は見たのか？」

「僕も見てないのだ。まぁ赤点は絶対無いからいいんだけど」

「私もたぶん無いと思う」

來優は透麻程じゃないけどあまり勉強が出来ないから少し不安なのだ。大丈夫だったらいいんだけど。

「退け！」

黒いフードを被った男達と屈強な体付きをした男達が二人の女子を囲んでる。いや、違うのだ。二人の女子がその男達で周りの生徒を威圧しているのだ。

男達（主に屈強な方のだが）に威圧された生徒が掲示板までの道を開けていく。

「なんなのだアレ」

「ああ、そっか。城道や來優はいつも早いから知らないのか。アレは生徒会の奴等だ」

「あの男達がか？　うちの生徒会は醜いな。てかあの黒フードはホラー研究部じゃねぇのか？」

「いや、生徒会の奴等は真ん中にいる女子二人だ。ほら髪真っ赤な奴がいるだろ？　アイツが生徒会長。で、その前を歩いてる水色のロン毛ちびが副会長。性格がすっげぇ悪いって評判だ」

男達に命令してる所を見ると確かに性格が良いとは言えない。

生徒会かぁ。佳や僕達の邪魔にならなければ良いのだけど……。

「会長着きました。お前ら邪魔だ！　さっさと退きなさい！」
「……なぁ、海里。この生徒達はホントに自分から進んでこういうことをしているのか？」
「当然ですよ会長。私はいいって言ってるのに、どうしてもやりたいんだって言って聞かないんですよ」

どこからどうみても嘘だろ。

「そうか。ならいいんだ」
「はい。あ、会長一位ですよ！」
「なに！？」

一位？　あー、今までずっと二位だった人ってあの人だったのか。
今回佳が二〇点減点されたから一位になれたのか。

（オレが一位？　じゃあアイツは……五位だと！？　なにかあるな）

「よかったですね会長」
「ん、ああ」
「倉本は五位みたいですね」
「そ、そうだな」

なるほど。佳にライバル意識でもあるのか。

「ふぁ～。眠い」
「あ、ちょっ佳」

そう言って佳はとことこと教室の方向に歩いていった。

「さ、会長行きましょう。ほらさっさと動けバカども」

「そう言うのよくないな」

海里とか呼ばれていた女子に透麻が言った。あちゃぁ、何で透麻はそう言うのに絡むんだろう。

「……何をやめろって言うの海本」

「初対面から呼び捨てかよ。こいつらに命令するのをやめろって言ってんだ」

「命令？　この人達は好きで言うことを聞いてるのよ。人聞きが悪いことを言わないで」

「どうみたって命令だろ。なぁホラ研」

透麻に呼ばれホラー研究部の人達はビクっと肩を竦めた。……何かをしたのだな透麻。

「命令じゃないわよねぇ元ホラー研究部の皆さん」

「は……い」

元？　……まさか。

「ホラー研究部を潰したのだな」

「ええ、そうよ柳生。だってあんな意味のない部活潰れて当然じゃない。そう、例えば貴方達が所属している変な部活もね」

……。

「おいテメェ！　私達の部活を潰す気か！」

「潰す？　もちろん潰す気よ」
「よし來優。今のうちにベキベキに骨折って立てないようしてやろうぜ」
「やれるものならどうぞ。ただし私に手をだそうってものならこの男達が黙ってないけどね。因みに元レスリング部よ」
ふふんと鼻で笑い見下ろすように見てくる。既に透麻と來優はヤル気になってるのか指やら首やらをボキボキ鳴らして今にも飛び掛かって行きそうだ。
「來優、透麻」
それを二人の前に手を伸ばして止める。今この二人が暴れたらケガ人が大勢出るのだよ。二人とも怒ったら見境ないから。
それに、ここで暴れたら確実に佳に迷惑がかかる。理由はどうあれ佳がつくった部活はなくなるだろう。それは絶対に嫌なのだ。もしそんなことになったら僕は、僕達は……。
「生徒会」
「なに柳生」
「もし佳の困ることをするようなら……、覚悟はしておくのだよ」
「わかった。肝に命じておこう。しかし、幾ら学校側が認めたからとてオレ達生徒会は認めてないからな。柳生城道、オレ達はお前らと争うことになっても構わない」
「それは部活を潰すと言うことか」
「今はまだだけどな。けどいずれ……」
……コイツ。
「行くのだ二人共。佳が待ってるのだよ」

「良いのか城道」
「アイツらほっとくのか」
「いいのだ」

あの赤い人、強い。たぶん僕と同じくらい。それに生徒会はまだいるはず。覚悟をしないといけないのは僕達も同じみたいなのだ。

「いいんですか会長、あのまま見逃して」
「ああ。正直今この場でアイツらと争っても勝てる気はしなかったな。まぁ負ける気もしないが。海本透麻や守山來優ならそこのレスラー五人なんて時間の問題だ。そして柳生城道なら秒殺だろう」
「……そんなに厄介ですか」
「まぁな。だがオレ達生徒会が全員集まれば負ける気はしないよ。勝つのはこっちだ」
「さすが会長。というかこの場にあのグズ共がいればちゃちゃっとすんだのに」
「まぁそう言うな。ほら早く行かないとチャイムなるぞ」
「はぁい」

「遅かったな」

教室に入ると佳と汐姫が迎えてくれた。

「あー腹立つ！　何で止めたんだよ城道！」
「そうだよ。私と透麻ならあんな奴等余裕だ！」
「何かあったのか」

佳が真剣な顔つきで聞いてくる。んー、ここで佳が入って来たらややこしいことになるのだ。

「別になんにもないのだよ。透麻と來優が少し苛立ってるだけなのだ」
「……そっか。ならいい」

窓の外を向く佳。空を見てぼーっとしているのだろう。たいていこういうときは何かを思い付く。たぶん今日も、

「そうだ。なぁ今日何か用事ある？」
「ボクは佳様と楽しむ予定が」
「私はとくにないな」
「僕もないのだ」
「俺は」
「皆なしか」
「えっ俺はまだ」
「じゃあ今から部活しようぜ」

今から？　やっぱり何か思い付いたのか。まぁ、僕に断る理由はないのだ。授業なんか簡単すぎて出る意味もないし。

「何をするのだ？」

「缶けりだ」

なるほど。確かに今日はいい天気なのだ。

「絶好の缶けりびよりなのだ」

「だろ。てことで河川敷まで競争な。あ、びりの奴鬼だから」

じゃあ、って言って佳は窓から飛び降りた。ん～、さすが佳。ここ一応二階なんだけどなぁ。

学校の二階って行ったら飛び降りれない高さじゃないけど相当勇気がいるし失敗したら足を捻挫する。これから缶けりやるんだから利口な人はまず飛び降りないだろうな。

まぁ僕は。

「飛び降りるのだよ」

窓に向って走っていく。そのままの勢いでジャンプ。落ちるのは早い。でも僕にはゆっくりと感じた。

しゅたっと綺麗に着地したら今度は河川敷までダッシュだ。

後ろを振り向くと汐姫も飛び降りようとしていた。汐姫は山で修行していたらしいからこういうのは大丈夫なんだろう。

「ふふっ」

透麻と來優が慌てている顔が頭に浮かんで思わず笑う。

「んー、気持ちいいな」

涼しい風、見渡す限りが青と緑の河川敷。時間が時間だから人が全くいない。いても散歩中のじいさんぐらいだ。

さぁて、城道はそろそろ来そうだけど汐姫達がたぶん遅いからなぁ。何しようか……。

ざわざわ。

気持ち良い風が吹いてるし、寝るか。

「よっ」

手入れの行き届いた土手に寝転び鞄を枕替わりにする。日差しが強いけど鞄の中にあるアイマスクを装着すれば問題はない。

風も気持ちいいし、ポカポカと暖かい。それに聞こえてくる音が優しくて子守歌になる。波の音、風の音、葉の音、車の音、犬の鳴き声、鳥の鳴き声。この時間のここはウザい音がない。

教室の女子達のコソコソ喋る声、男子の下品な声。普段なら気にならないけど眠いときだったら話は違う。眠いときのあの声はウザすぎる。唯一良いのが教師の授業をする声だ。何故か眠れるなあの声は。不思議なもんだな。

ていうか、そんなこと考えたら眠くなって、きた。

「ふぁ〜……ねむ」

城道もまだ来ないみたいだし、寝ようか……。

「……かい、ちょう？」

かいちょう。快調、会長、海鳥、諧調、開帳。……かいちょうってなんだろう。

「あれ会長じゃないのか」

ていうかさっきから誰だ。城道の声じゃないし、汐姫でも來優でもない。他に知り合いの女は……、覚えてないや。

「あ、やっぱり会長だ。ねぇねぇ会長」

あー、とうとう頭をぽんぽんと叩いてきたか。確実に俺に話し掛けてるなぁ。眠いのになぁ。

「ねぇ会長ー」

頭を叩いていた手がだんだんと顔に――

ぶすっ。

「っ、いってぇえええ！」

「ん？」

いてぇ！　なんだコイツ！？

「目だろ、その部分は目だろが。突くなバカ」

あー、マジいてぇ。
アイマスクをとって起き上がる。未だ霞む目をゴシゴシ擦りながら目の前の女を睨んだ。
「目？　なははは。悪かった悪かった。それにしても会長じゃないみたいだなぁ。声が違う」
かいちょうって会長かぁ。
「思いっきり人違いだ。見てわからないくらい似てるのか俺とその会長は」
「んー、似ているっちゃあ似ているよぉ。雰囲気が似ている。信頼している人しか受け付けない！　みたいなオーラーが似ている。外見は似ているかどうかわかんないけど……。だって自分は会長の顔を知らないからね」
「知らないって――」
霞んでいた視界がハッキリとする。ハッキリと視界で見た女の姿は真っ赤な髪に襟足と左横髪だけ黒色を残している派手な髪。そして閉じている瞳。身長はたぶん同じくらいだろう。
「わかる？　自分は随分前に見えないんだよ」
「か、」
「か？」
「カッコいいなお前！」
「カッコいい！？」
相当驚いたのか目を少し開いてビックリする女。
「何そのセンス！　めっちゃカッコいい！　やっぱり赤と黒は最強

だなぁ」

やべぇ。初めてだ。俺と同じセンスしてる奴と出会うの。

「……ぷっ、ははは」

しばらくポカーンとしていた女は急に腹を抱えて笑いだした。

何がそんなにおかしいんだろ。にしてもセンス良いなぁ。そうか、赤をベースにするって手もあったのか。

「あー、おもしろいねキミ。初めてだよそんな切り返しをして来た人は。自分は羽路（はる）という。キミは？」

キラっと女の耳の羽のピアスが光った。

「俺は佳。見たところ烏高だよな」

制服が來優と汐姫が着てるのと同じだから間違いはないと思う。

「ん、そうだけど。まさか佳も？」

「俺達の部活に入らないか？　てか入れ」

「うわぁ、壮大に無視するなぁ。勧誘してくるってことは自分は嫌われる対象にはならないみたいだな」

「赤と黒が好きな奴嫌いにならないよ。それに俺はお前のフツーじゃないトコが気に入った。髪とかこの時間にここにいることとかな」

「なるほど。しかし嬉しい誘いなのだけど自分は部活には入れないんだ。すまないね。」

最近の奴等にしたら珍しい口調。もっと気に入った。

「あー、お前が欲しいなぁ」
「……ふむ。面と向かって言われたら少しばかり照れるね」
なにが？
「少し考えさせてくれないか。佳は決して悪い奴ではない。しかし自分達はまだ会って間もないわけで、今すぐにと言うわけにはいかないよ」
「いや。俺は今すぐにでもいい」
「……佳がいいなら。でもまだ自分が良いとは言ってない。佳はホントに良いのか？　こんな自分で。髪の毛は派手だし、学校にもまともに言ってない。おまけに目が見えない。こんな自分で佳はホントに良いの？」
「俺はいいよ。目が見えない？　そんなの関係ない。大事なのはお互いの気持ちだ」
「そう、か。少し返事を待ってくれないか。考えたいんだ。将来に関わる問題だから」
将来？　あー、確かに進学や就職でも部活はしていた方が良いらしいしな。ふーん。そこまで考えてるのか。
「まぁホントは今すぐにでも欲しいけど」
皆が来たら部活するしなぁ。歓迎会もかねて色んなことしたいんだけど。羽路が考えたいって言うなら仕方ないか。ムリ言って拒否られたら意味ないしな。
「今すぐにでもって……照れる」
「返事を待つよ。いい返事を期待してるからな」
「う、うん。あっ、もう学校行かないと。会長に呼ばれてるんだっ

た。じゃあ自分はもう行くね」
「んー。バイバイ羽路」
「うん。バイバイ」

普段強い人が弱くなると心配するのだ　城道

「んー。バイバイ羽路」
「うん。バイバイ」

へー。佳に僕達以外の知り合いがいたんだ。なんか意外だなぁ。ていうか出るタイミングを失っていたのだ。何かあの人勘違いしていそうだったし、何よりあのビミョーに噛み合ってない会話がおもしろかったから出るに出られなかった。
羽路と呼ばれた女の子が走り去って行くのを確認したあと佳に近付く。

「佳もすみにおけないのだ」
「んー、やっと出てきたか城道」
「あや？　気付いてたのか」
「そりゃあな」

ん～、さすがなのだ。

「まぁ汐姫に見られなくてよかったのだよ」
「へ？　なんで」
「佳と女の子が二人で仲良く話してるトコなんて汐姫が見たら恐ろしいことになるのだよ」
「そぉか？」
「そうなのだよ」

確実に汐姫が錯乱するのだ。

「まだ皆来てないみたいなのだ」
「んー。時間がかかるのは予測してたよ」
「僕はさほど時間はかかってないのだ」
「お前は例外だ」
「じゃあ佳はもっと例外なのだ」
「まぁな」

むぅ、肯定する所が佳の変なところなのだ。

「まぁ城道も座れよ」

自分の隣りの芝をポンポンと叩きながら座るよう促す。

「じゃお邪魔して、よいしょ」

河川敷の芝の土手で隣り合って座る。これが青春なのだろうか？
じー、っと佳の顔を見てみる。いつもと変わらないへらぁとしてるとも無表情ともとれるような表情で空を見ている。
何を考えてるんだろう。佳と一緒にいて週に六回くらいはそう思うときがある。佳はその何とも言えないような表情で何を考えて何を思って行動してるんだろう。
会ったときから不思議な感じはしていた。何だろう、とにかく不思議な感じがしていたのだ。
僕はそれが気になってあの頃ついて行ったのだ。まぁ透麻達はまだ気付いてないみたいだけど、佳にはやっぱり秘密があったのだよ。
言いたくない秘密が。

「なぁ城道」
「なに」
「そんなに見られるとさすがに照れる」

「わ、悪かったのだ」

照れるって……。確かにかなり見ていた気はするが……。そんな照れるだなんて無表情で言われても、何かこっちが照れる。

ていうかなんなのだこの男同士のラブコメは！？

「なぁ城道」

「……なんなのだ」

佳は視線を僕から空に変えた。雲が片手の指で数えられるくらいしかない青い空。その空を見上げて陽の眩しさからか片手で目に影を作っている。

なんだろう。その光景が何故か綺麗に見えた。神秘的に見えた。脳裏に焼き付いた。たぶん僕は今土手で物欲しそうな顔をして空を見る佳のその姿を一生忘れることはないだろう。

佳の赤と黒の髪が風になびき混ざり合うように重なる。

「なぁ、俺達、ずっと一緒だよな、今までも、これからも」

珍しく弱々しい声をだす佳。何が彼をそこまで弱くしたんだろう。さっきまで普通に話してた彼を何が弱くしたんだろう。

横顔からでもわかる。佳の揺るぎない強い瞳は今は不安を抱えている泣きそうな瞳になっている。

何が佳をこんなのにした。あの強い佳は？　あの掴み所のない佳は？　あの頼りになる佳はドコに行った？

生徒会とのことがバレた？　佳自身疲れた？　それとも僕達の中で裏切り者が出た？

「佳、何かあったのか」

「ん、別に」

空をみたまま動かない。
佳、僕なら佳に害のある奴を殺せるよ。経歴に傷がついたっていい。刑務所に入って不味いご飯を食べてもいい。その家族から恨まれたっていい。
世間がどんな目で僕をみようと僕はただ一人、佳さえ笑っていればそれでいい。他には何も望まない。

「ただ、いつかは皆離れて行くんだろうなぁって思って。城道、空はさ、雲はさ、触れようにも触れられない。掴もうにも掴めない。届かないんだよ。手を精一杯伸ばしても、届かない」

空に向って手を伸ばす佳。その表情は焦っていて、泣きそうで、焦躁感で溢れていた。僕には佳が何をそんなに焦っているのかわからない。何をそんなに泣きそうなのかわからない。
でもこれだけは言える。
佳は確かに空や雲に例えることが出来る。でも佳は――
ギュッと佳の手に指を絡める。

「城道？」
「確かに空や雲には触れられない。掴めない。届かない。でもね佳」

佳は空や雲じゃない。それは僕だって、僕達だって同じ。

「――僕達には触れられる。掴める。佳の手は僕達には届くのだ。佳の手は、声は、心は僕達には届く。何が佳を不安にさせているのかわからないけど、僕達はそばにいる。ずっとそばにいるよ。離れることはない。今までだって、これからだってずっと、ずっと」

僕達が離れるとき。それは佳が僕達を要らないと思ったとき。で

もたぶんそれは永遠に来ないだろう。来る筈がない。僕達はお互い必要とし、愛しているのだから。あ、ホモじゃないよ。

「……城道」
「ん、なに？」
「この手の繋ぎ方は恋人繋ぎだ」
「え」

恋人繋ぎ？　相手の指の間に自分の指を絡めるのは恋人繋ぎなのか？

「ご、ごごめん。知らなかったのだ。ただああした方がより安心だと僕は思っただけでそんな気は」
「まぁ俺は良いけど。城道と恋人繋ぎ。城道は美少女だしな」
「僕は男なのだ！」
「あーずるい！」

キーンと耳から脳に衝撃が走った。くらくらする頭で声の主は汐姫だとなんとか判別する。

「佳様と城道だけ手繋いでる！　ボクも繋ぎたい！」

そう言って空いてる方の佳の手に自分の指を絡める。

「ねぇ佳様」
「ん？」
「手を繋ぐって何だか暖かいです」
「……そうだな」
「それは繋がってるからなのだ。手を繋ぐことで安心するのだ。自分は一人じゃないって」

「そっかぁ。でもそれだったらボク達にはあんまり必要ないかもね。だってボク達ずっと一緒だもん。一人になるなんて有り得ない」
「だって佳」
「そう、だな。あ、知ってた汐姫、この手の繋ぎ方恋人同士がする繋ぎ方なんだぞ」
「へっ！」

汐姫の顔がそれを聞いた途端に真っ赤になった。そして、今度はだんだんと怒りに満ちた表情に……、ってアレ？　僕を睨んでるのは気のせいかな？　気のせいなのかな？

「城道、佳様と何をしてたの？」

あちゃぁ、気のせいじゃなかったか。まさか僕にも嫉妬するとは。僕男なのになぁ。なんだろこの扱い……。

「別に何もしてないのだよ。そもそも僕は男であって」
「だって城道美少女だもん。不安になるよ」

むぅ。そんな泣きそうにならなくても。ホントに僕が悪いみたいになるのだよ。

「もうこうなったら城道を監禁してボクに忠実な奴隷になるまで調教するしか」
「あやっ！　佳、汐姫が怖いこと言ってるのだ！」
「んー、いい天気」
「伸びをしてる場合じゃないのだ！」
「城道ー、今日ボクの家に来ない？」
「丁重にお断り致します」
「まぁまぁそんな遠慮なんかしないで、ね。精一杯もてなすよ」

「いやいや、ホントに勘弁してほしいのだ」

佳と手を繋いだまま僕に言い寄る汐姫。僕も佳と手を繋いだまま出来る限り後ずさる。

でも、まぁ佳と手を繋いでいるから行動出来る範囲は決まってる。難なく捕まった僕は汐姫の説得に全力を尽くした。

そういや見事に話が逸れたけど、佳は何がそんなに不安だったのだろう。長年の付き合いだから僕達がそう簡単に離れるわけないってわかってる筈なのに。わかってるのに佳を不安にさせる何かがあるってことか。

これは久々に殺し甲斐のある話だ。佳に害を為すモノは殺す。それが昔僕達四人がした約束。掛け替えのない人を守り抜く為にした約束事。

害を為すモノは全て潰す、壊す、殺す。

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すころすころすころすころすころすころすコロス。

僕は、潰すよりも、壊すよりも、そっちの方が得意なのだよ。

「……何やってんだ」

あ、透麻だ。てことは來優が鬼なのだ。

「何って、昼寝？」
「手を繋いでか？　ていうか何で恋人繋ぎ？」
「仲良い証拠なのだ」
「そうだよ。ボクと佳様の仲の良さを誇示してるんだよ」

ホントは少し恥ずかしいんだけど、まぁなんか離す訳にもいかなくて……。
正直離すタイミングを失ったのだ。

「なんだ羨ましいのか？」
「なわけねぇだろ。恥ずいわ」
「ボクは恥ずかしくないよ。むしろ微笑ましい」
「そりゃお前はな。城道は恥ずかしいだろ」

むぅ、ボクにふるのか。酷な質問なのだ。恥ずかしいと答えれば佳に悪い気がするし、恥ずかしくないと答えれば男として大事なモノを失う気もする……。どうすればいいんだろう。そもそもこんな質問をぶつけて来た透麻が悪い。透麻はバカだからこういう時のボクの気持ちがわからないのだな。何か仕返しがしたい。

「で、どっちなんだよ城道」

透麻が答えを急かすように聞いてくる。

「ナイショなのだ」

ここは無難に安全策をとるのだ。恥ずかしいか恥ずかしくないか透麻の考え次第なのだよ。

「それより透麻今日久々にボクの家来るのだよ」

「えっ！？」

「透麻がどれだけ強くなったのか稽古してあげるのだ」

「いや、あの、それはちょっと……」

ふふふ。メッタメタのギッタギタンにしてやる。

「お、いいなそれ。じゃあ今日は缶けりやめて城道ん家行くことにしよう。うん、決定」

「そうするのだ。きっと母上が喜ぶのだよ」

佳も来るのか。はぁ、相変わらず佳の気紛れは怖いなぁ。佳が来たら父上が喜ぶのだよ。父上直々に稽古しそうなのだ……。

ん、ちょっと待つのだ。今はまだ学校が始まったばかりの時間、つまり朝なのだ。そんな時間に帰ったら怒られはしないか？

「むぅ……、うん、怒られないのだ」

「は？　何言ってんだ」

「僕の直感がそう告げているのだよ透麻」

「いや、意味わかんねぇから」

「わかってほしいのだ」

「ちょっとムリあるよな」

僕と透麻の絆はそんなモノなのか……。

「……はぁ」

「何そのため息。何か腹立つんだけど」

まぁ冗談だけど。僕達の絆は計り知れない程固いのだ。

「何城道を悲しませてんだぁあああ！」

「はぁ！？　ゲフォオオオオオ！」

……おー、綺麗に落ちていったのだぁ。

「あ、來優だ」

「遅いよ來優」

「見事な飛び蹴りなのだ」

「ありがと。にしてもやっぱり最後かぁ。クソ、あの警察に止められなかったら絶対透麻には勝ってたのに」

先程透麻がいた地面をガッガッ、と蹴りながら悔しそうに言う。

「よし、來優も来たことだし行くか」

「へ？　缶けりするんじゃねぇのか？」

「あー、あれなくなった。城道ん家で遊ぶことになった」

「マジで！？」

「また佳のいつもの気まぐれなのだ」

「そ、そっかぁ。やぁ残念だなぁ、でも仕方ねぇかぁ」

ラッキー。これで罰ゲームしなくてすむ。的なことを考えている

んだろうなぁ。そんなことあるわけないのに。

「來優、その考えは残念無念なのだ」

「へ？　な、何のことだ」

「あ、大丈夫大丈夫。來優の罰ゲームは別のをちゃんと用意してるから」

「な、えっそ、そんなぁ。見逃してくれないのかよー！」

「当たり前。じゃあ行くか」

……ふむ、何か忘れているような……あっ。

「ちょっと待てぇえ！　お前ら俺のこと忘れてんじゃねぇ！」

「あ、透麻いたんだ」

「あれ？　いたっけ？」

「何でお前制服に土つけてんだ？」

「お前のせいだろうが來優！　それにお前ら二人も一応俺と会話したよなぁ！」

「僕は覚えてたのだ」

実はさっき思いだしたんだけど……。

「城道は優しいなぁ。つか先ず來優は俺に謝らないといけねぇだろ」

「謝る？　何で？」

「お前が俺を蹴って土手から落としたんだろうが！　そのせいで俺は土塗れなんだよ！」

「あーあー、わりぃ。じゃあ行くか」

「何か軽いぞオイ」

「あー、透麻何でそんなに制服汚れてんだ？」

「さっき説明しただろうが。人の話くらい聞けよ佳！」

「説明してたっけ？」

「してたよ佳様。ボク一応聞いてました」
「一応ってなんだよ！」
「うるせぇなぁバカ透麻。さっきからしつこいぞ」
「元はと言えばお前が蹴ったのがわりぃんだろうが」
「謝っただろ、しつこいなぁ。てか何で私蹴ったんだっけ？」
「知るかんなこと！」

むぅ、少しうるさいのだ。ご近所迷惑になりそうなのだ。そろそろ止めた方が、

「こらーそこの高校生、こんな時間に何してんのぉ、学校はどうしたのぉ？」

向こうからメガホンをもったスーツ姿の若いお兄さんが歩いてやって来た。ていうかホントに若いのか？　髪の毛が真っ白なのだ。

「なんだあのオッさん？」
「さぁ？」

透麻と來優の言い争いが止んだ。結果オーライなのだ。あのお兄さんには少し感謝なのだ。

「あー、今オッさんって言ったなそこの緑色っぽい男の子」
「緑色っぽいって俺のことか？」

緑って言ったら透麻なのだ。

「ていうか、緑の男の子、もう学校始まってる時間でしょぉ、こんな可愛い子達いっぱい連れて何してんのぉ？」
「オッさんこそ何してんだよ。仕事は？　まさか無職ってわけじゃ

ねぇだろ」
「透麻その言い方は失礼なのだ」
「あ、いいの、僕慣れてるからぁ。かばってくれてありがとね、えーと、紺色の可愛い女の子って、え？　ズボン？　あ、よく見ると黒赤の子もズボンだ」
「僕と佳は男なのだ」
「あー、そっかぁ。やぁ、可愛いからてっきり女の子かと思ったよ。やや、悪いねぇ」

何か軽い人なのだ。話易いし、見た目もフツーじゃない。でも、何処かで会ったことが……。

「……行くぞお前ら」
「あ、ちょっ待てよ佳」

急に歩きだした佳のあとを追う透麻。僕達もそのあとを追う。
そしてお兄さんは歩調が速く、佳の隣りまで歩いていき佳の腕を掴んだ。

「ちょっと待ってくれる？　えーと、佳くんであってる？」
「気安く呼ぶな、あと手を離せ」
「ん～、ごめんごめん。でも手を離したらどこか行っちゃうでしょお？　僕一応刑事だから見逃すわけにはいかないんだよねぇ」

そう言って空いてる手で胸から警察手帳を出すお兄さん。それを一瞬開いて佳に見せてすぐにまた胸ポケットに閉まった。

「……冴谷（さえたに）って名前なんだ。何の用」
「だから一応見逃すわけにはいかないんだって。制服からすると烏高でしょ？　生徒手帳もってる」

「家」
「あらぁ？　生徒手帳は絶対持ってないといけないって先生から言われなかったのぉ？」
「さぁ？　殆ど寝てるからわからない」

佳と冴谷って名前の刑事が静かに言い争いをしている。気のせいか佳の機嫌が少し悪い気がする。
むぅ、それにしてもあのしゃべり方どっかで聞いたことがあると思うんだけど……、思い出せないのだぁ。

「じゃあまぁいいや。名前とお家の電話番号教えてくれる？　はい、一人ずつどうぞ」
「海本透麻。電話番号は――だ」
「くそっ、二人目かよ。ついてねぇ。守山來優、番号は――だ」
「二人目？　あはは、それはついてないねぇ」
「うっせぇ笑うな」
「ごめんごめん、次ぃ」
「蒼空汐姫、電話番号は――だよ」
「ふむふむ。髪の毛珍しい色してるね。地毛？」
「地毛じゃないよ。そう言う刑事さんも染めるにしては珍しい色だね」
「ナイショだよー。これストレスで真っ白になったって上には言ってるんだから」
「クビになるかもね」
「それは怖いねぇ。じゃあ次言ってみよー」
「柳生城道なのだ」
「うそっ。見た目の割に厳つい名前だねぇ。ん～、でもそのギャップがまた……っていけないいけない、相手は男の子だった」

……、ホントに刑事なのかな。

「電話番号は――なのだ」
「じゃあ最後は、佳くんだね」

ニヤリと、背筋がゾッとしそうな程の不気味な笑み。口角を歪ませた冴谷さんはゆっくりと佳の方を向いた。
何故だろう。今冴谷さんと佳が話したらいけない気がした。これからの話しは佳の悪い方向に進む気がしたのだ。

「……、仲良いねぇ。皆から好かれて嬉しい？　倉本佳くん」

気がついたら僕達は佳と冴谷さんを区切るように立っていた。どうやら皆僕と同じ嫌な予感がしたみたいなのだ。

「答える必要はないよ。アンタは俺に会えて嬉しい？」
「ああ。頭の血管がぶちギレそうな程嬉しいよ」

なんだ、この人急に雰囲気が変わった。気さくな感じから一気に真反対な感じに。

「相変わらず仲良しごっこは続いてるんだね」

今まで話しをしていた時と同じニヘラとした顔で話す冴谷さん。でもその言葉には刺がある。

「ごっこ？　そういやあの刑事もごっことか言ってたなぁ」
「ごっこだろどうみても。僕から見たら自立が出来ないクソ餓鬼の友情おままごとだよ」
「んだとコラ！」
「私らをバカにしてんのか、アア゛！」
「バカにしてる？　バカにしてるのはどっちでしょぉね。いつまでも幸せそうにのうのうと生きてきて、お前らこそバカにしている」
「何言ってんだコイツ？」
「意味わかんねぇこと言いやがって。私らが何をバカにしてるっつんだよ」
「まだ気付かないの？　これだからバカは」
「……ねぇ、これ以上ボク達をバカにしたら、コロスよ」
「殺せるものならどうぞ。僕もそうしてくれると現行犯逮捕が出来て楽なんですが。いつまでも逃げられないで済むしねぇ」

……コイツ、思い出した。三年前のあの警察か。

「まぁお前らなんか正直どうでもいいんだけどね。ねぇ倉本佳くん」
「……きめぇんだよ」
「……キモい？　今キモいって言ったの？」
「ああ」
「ハァ！？　フザケンナヨクソガキガ！　テメェみてぇなガキなんかいつでも殺せるんだよ！　調子のってんじゃねぇぞオイ！」
「……コロス、佳様をバカにして！　殺してやる！」
「汐姫がキレたのだ！　透麻、來優止めるの手伝って」

うわっ。お願いだからカッターナイフを持って暴れないでくれなのだ。抑えてるこっちの身にもなってほしい。

「透麻、來優何してるのだ！」
「わりぃ城道、俺も汐姫と同じだ……、コイツは潰す」
「どうしようかぁ、壊す？　それとも殺す？」

あちゃあ、透麻と來優もキレてるよ。今すぐにでも飛び掛かっていきそうなのだよ。もう勘弁してほしいのだ。

「佳、二人を止めてほしいのだ」
「……はぁ。仕方ないな。おい、落ち着けお前ら」

さすが佳、頼りになる。佳がそう言ったら暴れるわけにはいかないのだよ。

「なんだ止めるのか？　あーあぁ、お前らを刑務所にぶち込むチャンスがなくなってしまったねぇ。まぁ僕は最初からお前にしか興味ないけどねぇ、倉本佳くん」

何で佳なんだ？　あの事は佳には関係ない筈。それにこの人のあ

の事件への執着も異常だ。この人には関係ないのに。

「……で？　そんなに俺が気になんの？　悪いけど俺そっちの気はないから。じゃあな」

「あと四年、逃げ切れると思うなよ」

四年？　逃げる？　何のことなのだ？　何で佳があと四年逃げないといけないのだ。そもそもナニから逃げる？

「行くぞ」

佳はゆったりとした速さで、冴谷さんはスタスタと足早に、二人は振り向きもせずに各々反対の方向へ歩いた。

「……佳」

「ん？」

冴谷さんと佳の関係は気になるし出来れば聞きたいんだけど、ソレをすれば佳は悲しむ。そんな気がして僕は出かけた言葉をそのまま飲み込んだ。

「やっぱり何でもないのだ。そんなことより早く行こ」

気にはなっている。聞きたい、知りたい。でもイヤだ。悲しませるのが、困らせるのが。それに佳に知られたくないことは僕達四人にもある。僕達四人だけの秘密。僕達四人だけの罪。佳には関係のないこと。関係があってはならない、関係があるのを知られてはならない三年前の罪。

「ほら汐姫も來優も透麻も早くするのだ。遅いと置いてくよ」

まだ落ち着かないのか三人共ギスギスとしたまま歩いて来た。
全く、このくらいのことで怒っちゃダメなのだよ。僕だって我慢したんだから……死ぬ程、ね。
家に帰ったら手を洗わないといけない。こんな血がついた手で竹刀は握れないのだ。あ、絆創膏もいるかなぁ。

ジャー。

水道の水が勢い良く流れでる。夏の暑さにはちょうど良いくらいの冷たさだ。その流れる水に手をあてる。

んー、怒られなかったのは予想どおりだったけど、まさか夜の座禅の時間を延ばされるとは……考えもしなかったのだ。

傷口に水があたり少し染みる。でも少しそれが気持ちいい。自分が我慢した証だ。昔ならとっくに掴み掛かっていただろう。少しは成長したってことかな。

けど嬉しいようで少し悲しい。この成長は僕が佳のことを昔ほど大切に思わなくなってきたと言うことなのかな？　そんなことが頭の角をちらついて悲しい。そんなことあってはならないことなのに。

「……違う」

違うのだ。あの我慢は後先考えずキレていたあの頃とは違って、ちゃんと考えるようになったってことなのだ。きっとそうなのだよ。

蛇口を閉め手の水気をとる。

えーと、確かポケットの中に……、あったあった。

ポケットの中の絆創膏をとり両の手の平に貼っていく。

……よし出来た。じゃあ道場に急ぐのだ。もう透麻と來優は着替えてるだろうし。

それにしても父上が出掛けているのはラッキーだった。父上は何かと佳を気に入っている。毎回僕と戦わせようとするのだ。たまに父上自身が僕達二人を相手するときもあるけど。

「なにはともあれよかったのだ」
「なにが？」
「父上がいなくて」
「あー、なるほど」

あー、なるほど、じゃあないのだ。ちょっとだけビックリしたのだよ急に後ろから話しかけられて。

「もぉ可愛いなぁ城道くんは」
「葵さん、急に出てこないでほしいのだ」

葵さんはくすくすと笑いながら僕の隣りまで来た。
怠そうに着崩された制服。制服のズボンを折って無理矢理膝より少し下くらいの長さにしている。真っ黒の首元まである髪。前髪はM字バンクにしていていつも頭の天辺には一束アンテナが出来ている。いつも笑顔な糸目の二コ上のお兄さんだ。
僕が中学の頃父上に弟子入りをした人。いつもなよなよしていて性格も優しいんだけど……ちょっと爆弾みたいな人なのだ。
と、とにかく葵さんはもの凄く強い。僕達五人がかりで何とか倒せるくらいだと思う。因みに僕達と同じ高校の三年生の筈なんだけど、

「何でいるの？」
「やぁ、起きたら城道くん達が帰ってくるのが見えてぇ、どうせなら僕もサボっちゃおうみたいなぁ感じになったぁ。てことで暇ぁ、僕も交ぜてぇ」

いつまでも僕の隣りにいると思ったら、そういうことだったのか。
むぅ、でもこればっかしは佳が決めることだしなぁ、まぁ聞いてみ

ようか。

「それにしても皆が家に来るなんて久し振りだねぇ」
「そうなのだ」
「で、佳くんとはどこまでいったのぉ？」
「なっ！？　よ、佳は男って何度言えばわかるのだ」
「えー、だって恋人役したんでしょ～」
「あ、あれは頼まれたから……」
「可愛いなぁ城道くんは」

むぅ、またからかわれたのだ。

「あ、それよりさぁ、ねぇ見て見てー。ミサンガ増えたんだよぉ」

そう言って指で両足をさす葵さん。両足には色とりどりのミサンガが片足に五個ずつくらいしてあった。そういや両腕にもいっぱいしてる。

「いいでしょぉ。またシリーズが増えちゃったぁ」

この人の変な所、趣味がミサンガ集め。あとは中学生の時周りから爆弾って恐れられていたことかな。

「あそだ、あげないからねぇ」
「いや、別に欲しくないのだ」

そんな自慢気な表情で見られても……。

「やっとついたのだ」

なんか道場までが凄く長く感じた。
葵さんは嫌いじゃないけど少し苦手なのだ。だっていつも僕をからかうのだよ。まぁそれがなければ良い兄上なんだけど。

「早く入ろうよぉ。ちゃんと靴は脱いで入るんだよぉ」
「わかってるのだ」

はぁ。父上の代わりに葵さんか……。

「はぁ」
「あ、溜め息だぁ」

「やぁ皆久し振りだね～」
「葵さん!?」
「な、何で葵さんが？」

透麻と來優がビックリしているのだ。二人は前家来た時に葵さんにこてんぱんにやられてるのだ。それに普通なら今葵さんは学校にいる時間、ビックリするのもムリはない。

「あー、葵さんおはよ。今起きたの？」
「おはよー。相変わらず汐姫ちゃんは佳くんにべったりだねぇ」
「葵、今起きたのか」
「そうだよぉ。佳くんも相変わらずみたいだね～。先輩を呼び捨てなんてフツーは出来ないよ。そういうフツーじゃないのが佳くんのいい所」
「ありがと」
「あそだ、僕もまぜてくれない？　暇なんだよね～」
「いいよ。城道の父さんか葵さんには元々頼む気だったし」

……、何か來優が可哀相な予感がするなぁ。

「てことで來優、罰ゲームは葵さんと試合だ。因みに何でもありだぞ」
「えっ!?　いや、マジそれは勘弁してほしいんだけど」
「來優ちゃんが相手かぁ。僕朝弱いから來優ちゃんが剣道してるのを見るの久し振りだなぁ」
「葵は防具なし。いいだろ？」
「えー、当ったらどうするのぉ。痛いじゃん」

「そ、そうだぞ佳。当ったらどうすんだ」

や、その心配はいらないと思うのだ。当るわけがないのだよ。

「大丈夫。むしろ当ったら嬉しい」

「うわぁ、ドSだね佳くん」

「うるさい」

そう言って佳は自分のそばに置いてあった竹刀を葵さんに投げた。葵さんはそれを、ぱしっと取ると、ギュッと片手で握り竹刀の先を來優に向ける。

來優ももう既に防具に着替えていたし竹刀も持っていたから準備は出来ていた。心の準備はまだ出来ていないみたいだけど。

「はぁ、マジでやんのかよ。仕方ねぇ、腹括るか」

両手で竹刀を握り、竹刀の先を葵さんに向けジリジリと葵さんの方へ歩いて行く。葵さんとの距離が三メートルぐらいの所で來優の動きがピタっと止まる。

（す、スキがねぇ……）

……來優の困ってる顔が面越しでもわかる。でも來優もあれから成長している筈。少しは期待できるのだ。

「来ないのぉ？　じゃあ僕から行くよー」

そう言って竹刀を目一杯振り上げる葵さん。來優を誘っているのだ。

（胴がスキだらけだ。誘ってるのか？　いや、でもここで動かないわけには）

動いた。來優が一歩動き竹刀が当る間合いに入った。そしてすかさず竹刀を横に振るった。

「ドオォ！」

ぶん、と小気味いい音のあとをパシっとした音が続く。來優の胴を葵さんは竹刀がギリギリ届かない位置まで一歩で下がり、來優の振るった竹刀が横切った瞬間にまた一歩前に出て振り上げていた竹刀を振り下ろした。

「メンだよぉ」

「……」

來優には何が起きたかわからないだろうな。たぶん透麻もわからない。本当に一瞬の出来事だからだ。さすがとしか言えないのだよ。

「くそぉ！」

地団駄をして悔しがる來優。來優は男に負けるのが一番嫌いだから凄く悔しいのだろう。でも相手が相手だ、負けるのは仕方がない。それにしても何で佳は來優を葵さんと試合させたのだ？　罰ゲームだからってそんな目に見えている勝負なんておもしろくないのに。なにが見たかったんだろう？

「あーもう！　見えてたのにもう一歩を踏み出せなかった！　くそっ悔しいなぁ」

見えてた!?　來優がさっきの葵さんの動きを見えていた?

「ん、次透麻行け」
「よっしゃ、待ってたぜその言葉」

正座をして來優と葵さんの試合を見ていた透麻が勢いよく立ち上がった。前までの透麻なら自分より圧倒的に強い相手との勝負は絶対しなかった筈なんだけど……。

「次は透麻くんかぁ」
「勝ちにいくよ葵さん」
「勝てるかなぁ」

鼻歌を歌いながら竹刀を透麻に向ける。

「その余裕のツラ一瞬で崩してやる」

先手必勝。透麻の好きな言葉だ。透麻は素直なのだ。いつも最初は突っ込んで来る。今回も同じ。竹刀を振り上げたまま突っ込んで行く。そして間合いに入ると葵さんの頭目掛けて思いっきり竹刀を振り下ろした。

「当らないよぉ、そらメン」

それを半歩横に動いてあっさり躱した葵さんは透麻の額に竹刀を振り下ろす。
終わったのだ。透麻は一度攻撃したら次までの反応が少し遅いのだ。アレは透麻には躱せない。

「当らねぇよ」

なっ！？　躱したっ。竹刀をあっさり捨てて踏み込んで来た透麻。

「俺の得意なのは剣道じゃなくてケンカなんだよな」

そう言いながら葵さんの顔に拳を突き出した。でも惜しい。透麻はそれも躱されて胴をとられた。今度のは避けれずまともに決まったみたいだ。

「いってぇえ！」

そりゃあそうだ。葵さんの一撃はすっごく痛いのだ。防具をしてなかったら絶対骨が折れていたのだよ。

それにしても、

「いやぁ、成長したねぇ二人ともぉ。見違えるほどだったよぉ」

そうなのだ。二人とも凄く成長したのだ。前なんて全く反応出来ず気付かないうちに終わってたのに、凄い成長ぶりなのだ。

「おもしろいよな城道」

佳が汐姫に抱き付かれながら言った。

「うん」

確かに人が成長するのはおもしろい。佳はこれが見たかったのだな。來優や透麻がどれだけ成長したか、それが見たかったのだきっと。

「生徒会とケンカするかもしれないらしいな」
「何でそれをっ！？」
佳あの時はもういなかった筈なのに。
「聞いてた奴が噂してた」
「なるほど」
バレたものは仕方ないか。
「いいじゃんケンカ。おもしろそうだ」
「佳がそう言うなら仕方ないのだ。ホントは僕達三人でしようと思ってたんだけど、全面戦争なのだ」
おもしろい、か。負けたら部活がなくなるかもしれないのに。いや、負ける筈ないか。
「なくなるわけないだろ。俺達の部活がなくなる時は俺達がバラバラになる時だ」
「ふふふ。確かになくなる筈はないのだ」
だって、僕達がバラバラになるなんて絶対にないんだから。
この時僕は不覚にも気付かなかったのだ。いや、ここにいる全員が気付かなかった。葵さんはもちろんのこと、腹を抱えて蹲ってる透麻も、本気で悔しがっている來優も、佳に抱き付いている汐姫も、

佳と会話していた僕すらも佳のビミョーな変化に気付かなかった。
よく見れば気付いていた変化なのに、僕達は自分達の不変をあまりにも確信していたがゆえに気付けなかった。佳の瞳が微かに揺らいでいたことを。そしてそれはアレを読むまで到底気付くことはなかった。

未来の僕から過去の僕へ……。

後悔は先にたたず。
後悔をすることがわかっていたのなら僕達は最初から出会わなかっただろう。
こんな結末を迎えるのがわかっていたら僕達は仲良くなるのをやめていただろう。
積み上げていたものが大きすぎた。
喪ったものが大きすぎた。
悲しみが大きすぎた。

もし届くのなら未来の僕から過去の僕に伝えよう。僕達の未来は悪夢のように暗い暗い物語だと。

当然今の僕はそのことを知るよしもなかった。

対決なのだ！　城道

「じゃあ次は城道な」
「えっ、僕もするの？」
「あたりまえだ。葵次は城道だぞ」
「あー、悪いけどぉパス。僕疲れちゃったぁ」

道場の端まで歩いていきドッと座りこむ葵さん。
よかったぁ。葵さんとやったら相当疲れるのだ。まぁ今はノーマルな状態だから幾らかはマシなのだろうけど……。

「……仕方ないなぁ。俺とやるか城道」

佳とかぁ。凄い久し振りなのだ。

「……うん楽しそうなのだ」
「ん、じゃあ決定だな」
「あれ、佳防具はつけなくていいの？」
「城道こそ」

……防具か。

「「いらない」」

防具なんてつけないのだ。だってこれは何でもありの試合。剣道の試合じゃないんだから。

「防具は邪魔」
「さすがなのだ」

本当にさすがなのだよ。普通は防具もつけずに竹刀を振り回すなんて出来ない。相手の本気の攻撃が顔にくる。こんなの面をつけても慣れない内は怖いものなのだ。
お互い五メートルの距離を開けて向き合う。少し遠すぎるけど相手は佳だ。用心にこしたことはない。

「それにしても久し振りなのだ佳と試合するのは」
「え、そ、そうだな。確かに久し振りだな」

ん？

「前やったのはいつぐらいの頃かな」
「最後にやったのは小学校高学年くらいのときなのだ」
「ああ、そうだったな。懐かしいな」

少しど忘れしていたのかな。佳が忘れ事なんて珍しい。佳が忘れるのは詰まらない普通な事ぐらいなのに。

「透麻くん、來優ちゃんもちゃんと見ておきなよ。見るのも立派な勉強の一つ。これからもっと強くなりたいのならこの試合は絶対に見ないとねぇ」

角の方で葵さんが何やら言っている。上手く聞き取れなかったけどたぶん僕達の試合を見ていろってことだろう。
今は葵さんの声に反応している余裕はない。集中しないと一瞬でやられる。

ぴくっ。

佳が先に動いた。竹刀を下に下げて走って来る。

ギュッと竹刀を握る手に力を込めそれを迎え討とうと待つ。

「え？」

視界一面に竹刀の先が映る。

投げて来たっ。体を微かに捻り目潰しをしにきた竹刀を躱す。

佳は――

「――下か」

いつの間にか懐に潜り込んでいた佳。体を低くして足を突き上げてきた。狙いは急所でもある顎。これを後ろに下がって避けるようじゃ佳には勝てない。

片手で握っていた竹刀を振り下ろす。佳の足はギリギリの所で躱し、振り下ろした竹刀にその時間分の力を加える。

これで決まる――わけがない。

案の定それを佳は体をねじって躱すとそのままコマのように回転して下からの回し蹴りに繋げてきた。僕の竹刀は完璧に振り下ろしたあと。しかもこの攻撃は速い。躱すのはムリ。だったら……。

最初の佳の攻撃以来後ろに伸ばしていた左手を佳の顔面目掛けて振り下ろす。僕の左手には竹刀が握られている。

あの竹刀が僕の顔スレスレを通ったあとに左手でキャッチしていたのだ。それを今まで体の後ろにやり、死角で佳には見えないようにしていた。

「ちっ」

「ヤァア！」

バキ、ドス。

「ぐっ」

「かはっ」

蹴られ横に飛ばされる。いたたた。蹴られたせいで竹刀の軌道がずれ当たったのは佳の肩。まぁでも確実に当たった左肩はしばらく力が入らないだろう。

そう言う僕も顎を蹴られてフラフラなんだけど。

「怖いなぁ。フツーは避けるよ」

「避けたら佳は倒せないのだ」

肉を斬らせて骨を断つ。フラフラも治ってきたし、成功なのだ。

佳が相手だから肉を斬られたのだよ。他が相手だったら僕は自分の肉なんて斬らせないのだ。一部例外な人は覗くけど。

それにしてもさすが佳。フツー最初っから竹刀なんて投げないのだ。そのあとの蹴り技も見事だったし。

「やっぱり佳は強いのだ」

「城道だって強いよ。フツーはあのスピードで飛んでくるものを避けた瞬間にとれない。しかもそのあと見えないように隠してるしな」

「どう致しましてなのだ」

（思ったより曲者だなぁ）

やっぱりそう簡単には勝てないか。前やった時は少し佳に押され気味だったから、今度は勝ちたいのだ。仕方ない、とっておきをするのだよ。

「……」

「……無我の境地、か」

心を無心に。自分は自然の一体、自然は自分の一体。心を乱すな。ただ来るモノだけに反応しろ。尖らせろ、神経を精神を、細く鋭く。

「なぁ葵さん、何でどっちも動かねぇんだ」

「ん～、それはねぇ來優ちゃん、二人とも動く期を見計らっているんだよぉ」

「そうなんだぁ」

「じゃああの城道の静けさはなんなんだ。なんかあそこに城道がいるようでいないような……とにかく変な感じだ」

「へー、透麻くんよく気がついたねぇ。アレは無我の境地っていってぇ……まぁ簡単に言えば極限の集中モードかな」

「極限に集中してるってことか？」

「そうそう。簡単なようでそれを故意的にするのは難しいんだよ。まぁ偶発的なら皆結構したことはあるんだよね。漫画とか読んでる時に他のモノが目にはいらない、気にならない、聞こえないってことあるでしょ～。アレは凄く読むことに集中しているってこと。そして今の城道くんはこの道場の全てに集中しているんだよぉ。試しに後ろから何か投げて見たら？　絶対当らないから」

「いや、そんなことはできねぇよさすがに」

「まぁそりゃそうかぁ。あ、でもね無我の境地はそう長くは続かないんだ。精神がボロボロに疲れちゃうからねぇ」

「てことは」

「ケリをつけにきたってことか」

「その通りだよ」

「城道もとっておきをだして来たな。じゃあ俺もとっておきを見せ

てやる。零から生まれる打撃だぞ。おもしろいだろ」

「零から生まれる打撃？」
「どうかした葵さん？」
「え、いや何でもないよ～。心配してくれるの來優ちゃん？　優しい～」

……。

「行った！」
「しっ、透麻」

佳も同時にダッシュしたか。まぁ結構距離が空いていたからな。だが、佳、もうそこは竹刀の間合いだ！
竹刀を横に降る。ちょうど佳の胴体あたりの高さ。
フッと佳の姿が視界から消える。今までの僕じゃ反応仕切れない程の速さ。でも今は違う。

「横」

もう片方の竹刀で右隣りを突いた。何かに当たった気配はない。

「今度は左」

また突く。次は髪か何か柔らかいものにあたる感触が一瞬だけした。

「後ろ」

振り向きざまに竹刀を振り下ろした。佳はそれを半歩横に動き躱

して、拳を僕の首目掛けて飛ばしてくる。
竹刀を捨てその拳を避けたあと伸びきったその腕を掴む。そのまま肩に持っていき背負い投げをする。受け身を取らせないためもう片方の手は服の袖を持ちふさいでいる。

「甘いよ城道」
「なっ」

投げられながら佳は体を捻って無理矢理僕の手から逃れ着地した。

「これが俺のとっておきだ」
「はやっぃ」

一瞬で懐に入られた。反応できなかった。やばい、早く後ろに、

ガシ。

「逃がさない」

腰に佳の左手が回る。
後ろに下がれない！

――だったら、

佳の右手が左胸にそえられる。
僕の右手が佳の体の中心に目掛けて突き出されて行く。
どっちが先だ。それで決まる。

ドスッ。

やった。僕の勝ち――

ドクンっ！

「がはッ！」

そんな、僕の方が先に当たった筈……。
やっぱり佳は強いのだ。

バタン。

「……零から生まれる打撃。何で佳くんがあの人の技を……」
「おい！　佳、城道大丈夫か！？」
「來優は城道を見ろ！　俺は佳を見るから」
「お、おう」
「よ、佳様、城道……ねぇ！　大丈夫だよねっ」

……なんか、騒々しいのだ……。死ぬわけじゃないのに。
むぅ、もう少し寝てたいんだけど、心配してるようだし、起きるのだ。

「いたたた、あーもう、佳は手加減を知らないのだ」
「それは城道も同じだ」

むくっと佳が起き上がってから言った。どうやら佳も倒れてたみたいなのだ。これは引き分けかなぁ。

「引き分けだな城道」
「あちゃあ、僕は勝ちたかったのだよ」

案外本気で悔しかったりする。

「お前ら心配させやがって！」
「そうだそうだ。透麻の言う通りだ！」
「佳様ぁ」
「ちょっくっつくな汐姫、痛いんだぞ」
「あはははは、っいたたたた」

笑うと響く……。
それにしても最後の方。佳の動きに反応出来なかったのだ。無我の境地はまだ続いていた筈なのに。まだまだ先はあるってことなのかな。

「ちょっと休憩するか。疲れたし、痛いし」
「そうするのだ」
「じゃあもうお昼だし、ご飯にでもしようよ～」

葵さんナイスな発言なのだ。

「母上がご飯つくってくれてると思うのだ。汐姫は先に行って待っててほしいのだ。透麻と來優は着替えてから行くのだ」

皆現金なのだ。すぐに言われた通りに動きだした。

「んじゃあ僕も行って来るのだ」
「ああ、先行って待っててくれ」
「ん、わかったのだ」

佳は座ったまま動こうとはしない。まぁ僕も少し一人になりたかったから良かったのだ。

道場を出て少したってやっと水飲み場についた。
水飲み場の壁に背中を預けて座る。

「ふー、いたた、なのだ」

一息つく。少し歩いただけで激痛に襲われる。全く、佳はホントに手加減を知らない。
襟を伸ばし左胸を覗く。
あのまま僕が何もしなかったらもしかしたら……。
ぶるっと体が震えた。今ごろ恐怖がやってきたのだ。
痛い。佳にやられた所は凄く痛い。でもこのズキズキが嬉しい。
あ、Mではないよ。佳が本気だったのが嬉しいのだ。佳はいつも僕達に本気だ。それが嬉しい。どこまでも対等として見てくれる。それがどんなに嬉しいことか。
だから嬉しいのだ。たとえ佳のあの一撃で僕が死んでいてもこの気持ちは変わらない。
伸ばしていた襟を戻す。

「ご飯が待ってるのだ」

重い腰をあげ、痛みに耐え、のろのろと歩く。
さっき見た左胸は拳くらいの大きさで少しへコんでいた。

このまま、ずっと……　佳

……いってぇ。

「手加減くらいしろよ城道」

城道がゆっくりと道場を出て行ったあと俺は思いだしたかのように腹を抑える。

アレだ。目茶苦茶痛い。城道、確実に溝を討ったな。よくあの状況でそんなことが出来たな。逃げられないと知ったらすぐに攻撃に移す。しかも一番有効な攻撃を即座に考えて実行する。凄いな城道は。

「よいしょっ、いたたた」

いってぇ。動く度にいてぇよ。

「起きて大丈夫ぅ？」

「ん、大丈夫。でも肩くらい貸してもいいんじゃない葵」

「いやぁ貸したいのはやまやまなんだけど、いいの貸しても？」

「何で？」

「肩を貸したら城道くんに負けたことになるんじゃないの～」

負けたことになるのか。

「やっぱいい。自分で歩く」

負けるのはいやだ。城道が俺の一撃に耐えてるのに俺が耐えないのはダメだ。

「負けず嫌いだねぇ」

にやにやと笑いながら葵が言う。

俺は負けず嫌いなんじゃない。対等じゃないのが嫌なんだ。そりゃあ負けるのも嫌だけど、俺だけ甘えるわけにはいかない。

「ねぇ佳くん」

「ん、なに」

「佳くんはドコであの技を覚えたんだい？」

不気味にほくそ笑む葵。

汐姫と城道は本宅へ、透麻と來優は更衣室で着替えをしている。

俺と葵以外誰もいないこの静かな道場で俺は一瞬時が止まった気がした。

一瞬頭が真っ白になった。何を言ってるのかわからない。何で笑っているのかわからない。何でこの技を知っているのかわからない。

体が金縛りにあったかのように動かない。

もしかして葵は”俺達”のことを知っている？　だったらどうする？　消す？

「昔って言っても五年前だけど僕はある女性にその技をかけられ死にそうになったんだ」

……は？

「それからその女性の姿が頭から離れなくてねぇ～」

「で、なに？　仕返しでもしようと？」

「いんや、告白しようと思って～」

……バカだ。

ていうかちょっと待て。葵を半殺しにしたのはたぶん、ていうか絶対あの二人のどっちかだよな。てことはもし葵があの二人のどっちかと付き合って結婚までに至ったら……。

『葵義兄さん』

『なんだい義弟よ、そんなに寂しい顔をして、僕の胸に飛び込んでおいで』

『葵義兄さぁん』

「バカかぁああ！」

有り得ない！　てかなんだ今の妄想は!?　汚い汚い汚い汚い、何で葵の胸に飛び込まなくちゃいけないんだよ。ていうか義兄さんって何だよ。絶対呼びたくねぇ。

「で、何でその技を知ってるの？」

「な、なんか、こうズバッとやったら出来た」

身振り手振りを交えて必死に伝える。頼むからこれでなんとかなってくれ。俺は葵を義兄さんなんて絶対呼びたくねぇ。

「そっかそっかぁ」

ごまかせた、のか？

「なわけないよねぇ」

やっぱムリか。

「ほらぁ早く教えないとぉ」

落ちている竹刀を手にとり俺の喉元に突き立てる。

「くっ」

全体が黒色で白い髑髏の模様が一つついている俺のお気に入りのネクタイを掴む葵。

「ほらほらぁ……早く言わないと……」

ネクタイを徐々に緩めて行く葵。やべぇ、キモい。

「秘密がバレちゃうよ～」

「っこの！」

葵に殴りかかる。が、あっさりと避けられ押し倒される。

「そんな力の籠ってない拳、当らないよ～」

くそっ。葵の体重が俺にのしかかる。いつもの俺なら振りほどけるのに……。城道との試合で全身が痛い。相当無茶をしたからな。筋肉が悲鳴をあげている。加えて今日は”アノ日”だ。

「今日は弱くなっていく日だよね」

「……テメェやっぱり」

「あーっ！」

「ちょっ、葵なにしてんだよお前！　佳は男だぞ！」

來優、透麻！

「……あーあ、邪魔がきちゃったねぇ佳くん。もうちょっとで気持ちよくなれたのにねぇ」

「ふざけるな」

「なななな、お前らそんな仲だったのかぁ！」

「ほ、ホントなのか佳！？」

……。

「アホかお前らは」

「じゃあねぇ佳くん。先行ってるよ」

そう言って葵はヘラヘラと笑いながら道場から出ていった。

”今日は朝から学校をサボって土手に行った。そこで羽路って言う面白い奴に会って勧誘したけど返事は保留。入ってくれたらめちゃめちゃ嬉しいな。

汐姫達が来るのを待つ間城道と話した。ちょっと弱気になって城道に心配かけたと思うけど、城道が心配してくれてるようで少し嬉

しかった。やっぱりいいものだ仲間は。
皆がそろったあと三年前の警官に会った。今ではあの警官も刑事になっててちょっとビックリしたなぁ。でもアイツ三年前は白髪じゃなかった気がするんだけどな。
とにかくアイツは勘違いをしている。あの刑事は俺がやったんじゃない。いや、もしかしたら俺がやったのかもしれない。わからない、自分がわからない。
どっちにしろ俺は捕まるわけにはいかない。いつまでも皆といたいから捕まる訳にはいかない。

城道ん家に行って來優と透麻を葵と試合をさせたら思わぬ結果に嬉しくなって笑ってしまった。予想はしてたけどまさかあんなに成長してるなんてなぁ。
城道は手加減しないし、お陰で体はボロボロに痛いし、今こうして書いてる時も痛い。でもご飯は美味しかったからよしとしよう。
問題は葵だ。まさか俺の秘密を知ってるとはな。ストーカー癖のある汐姫にもバレてないのに……。皆に話すようならどうにかして消すしかないな。

そういや日記を書き始めてそろそろ二年がたつ。よく続いてるなぁと自分でもビックリする時がある。これからも続けたい。

思い出を、皆との思い出を多く記すために。

明日は何をしようか。明日が楽しみに思えるようになったのは皆と出会ってからだ。

出来ればずっとこのまま皆と、ずっとずっと……”

「スー、スー……」

「おーい佳。お姉様が来てあげたぞ。ご飯はもう食べたか。ん？何じゃもう寝たのか……」
「スー、スー」

「全く、布団にも入らずに寝るとは、風邪を引いたらどうするんだ」
「ん、……スー」

バサァ。

ん、なんか、暖かい……。

「せめて毛布ぐらいかけて寝るんだぞ。相変わらず世話のかかる奴じゃな」
「スー……スー……」

（……神様は残酷なことをする。こんなか弱い子に呪いを二つも残すなんて……）

「ごめん、佳。ワシが男に生まれていたら、最後に生まれたお前にこんなことなんて……」

名前は紗弥。白馬の王子様を夢見る奴　佳

「……ん」

朝の匂い。暑くもなく寒くもないちょうどいいくらいの温度。時間は、六時くらいか。夏だからか外はセミがミンミン鳴いている。朝、か。

「ん～」

椅子に座ったまま両手足を伸ばす。気持ちいい～。
そっかぁ、俺あのまま寝たのか。
やべっ、日記によだれとか垂れてないよなっ。

「大丈夫か」
「何が大丈夫なんじゃ」

……うわぁ。
後ろを振り向く。俺がいつも寝てるベットに銀色の髪をした女が座っていた。二五歳独身の我が校の理事長だ。名前は紗弥（さや）。白馬の王子様を夢見る痛い大人。

「何でお前がいるんだよ」
「お姉様に対してお前とは酷いのう。ま、相変わらずって所か」
「人の質問に答えろ。何でいるんだよ」
「それはお前が一番わかっておるじゃろう。今日明日はアノ日じゃ」

……そうだったな。
俺が一番嫌いなアノ日。皆と会えない日だ。皆と会えないだけで悲しくなる。

「それにしても」

紗弥が立ち上がり俺の隣りまで歩いて来た。

「日記とは、可愛いことをしておるじゃないか」
「なっななっみ、見たのかっ！」

咄嗟にバッと日記帳を手で覆った。
恥ずかしい、ていうか人のものを勝手に見るなっ！。

「うぬ、しっかりと見たぞ」
「見んなアホ！」

最悪だ……。よりによってコイツに見られるなんて。

「……笑えただろ」
「は？」
「おもしろかっただろ。俺がこんな女々しいことしてるなんてなぁ。お前からしたらおかしくて腹がよじれただろうな」
「何を言っておるのじゃ。おかしいわけないだろう」
「また心にも思ってないことをよく言えるもんだ」
「佳、思い出を大切にしようとしている奴を笑う奴がおるか？　そんな奴はワシが懲らしめてやる。佳は可愛いんだから、もっと自由にしていいんだぞ」
「……ふん」

自由？　ジジィとババァが死んでからも俺が縛られてんのはお前ら姉のせいだろうが。

「俺に自由は有り得ない」

「……佳」

「そんなことより早く行くぞ。今度の標的はどいつだ」

「佳、その前にお風呂に入ったほうがよいぞ。少し匂う」

「えっ！？　ちょっすぐ上がってくるから。てか日記絶対読むなよ！」

「わかっておる」

確かに少し汗臭い。そっか、昨日お風呂に入らないまま寝たのか。

「あ、佳替えの下着はそこに置いておくからな！」

「大声で喋るな！」

夢願いは幻となって……　紗弥（前書き）

ここから少しファンタジー要素です。
話が違う！　とか、いきなりこんなかよ！　とか思うかも知れないけど、これも一応大事な通過点なのです。

夢願いは幻となって……　紗弥

ジャー。

シャワーの音が聞こえてくる。今ごろきっと佳は体を洗っているのだろう。

佳の下着とタオルを脱衣所の棚の上に置いて脱衣所を出る。

「日記」

昨日つい読んでしまった。この日記を読んで嬉しく思ったけどその反面悲しくも思った。ワシらが佳にしてきたことを痛感させられたからだ。

佳には辛い思いをさせてきた。そんなことはわかっている。けど、もうあの人達はこの世にいないんだし佳もありのままの姿で生きてて欲しい。

「ワシらが、邪魔しておるのじゃろうな」

心咲(みえ)姉が女だから、ワシが女だから、必然的に最後に生まれて来た佳がワシら以上に厳しく育てられる。最後の希望と言われ期待されていたから。その期待が外れても生まれて来た佳を跡目にしないといけないから。

ワシがあの時跡目を継ぐと言えていたのなら、今頃佳はありのままの姿で今を楽しんでいただろう。

ワシがあの時代わりに力を手に入れたなら、今頃佳は自由に生きていたのだろう。

ワシと心咲姉は甘えていたのじゃ。都合良く一番最後に生まれてきた佳に。

神様は残酷だ。生まれた時に佳に一つ呪いをつけ、あの人達が死んだすぐ後に役目から逃げられないようにもう一つ呪いをつけた。

今すぐお風呂場に行き抱き締めたい。

か細いその体を。

戒めのように彫られた醜くきその鬼の背中を。

親友にまで嘘を吐き続けている儚いその正体を。

――大好きなワシの妹の体を。

もし過去に戻れるのなら、あの時逃げた自分の罪を消し去りたい。

もし願いが叶うなら、どうか悲しすぎる妹を自由にしてあげて欲しい。

もし何でも治せるのならあの子にとって一番酷い呪いを治してあげて欲しい。

醜くき背の鬼を消し、親友への偽りをなくし、かけられた悲しく残酷な呪いを打ち消しあの子を自由に。

その為ならばワシはどれだけ傷つこうが構わない。

「夢願いは幻となって消え入る。儚きその想いは届くことなく簫然（しょうぜん）たる闇に消え失せる。ならば届かない祈りはもう止めよう。絶望に平伏すのじゃなく、希望に頭（こうべ）を上げるでもない、己が手でそれを成し得るのだ。信ずるは神ではない己自身だ」

……結局どれだけ祈ろうとどれだけ願おうと叶わないのなら、今のワシが何とかするしかない。どんな犠牲を払っても、ワシは佳に自由になって欲しい。

「何を言ってんだ」

「へ、あ、ああそうだな意気込みじゃ」

「意気込み？　なんの」

「佳は知らんでよい。それより準備は出来たのか？」

驚いた。自責の念でいっぱいになっているから気付かなかったのか。それにしてもあの親達（ひと）の言葉がこんな所で役にたつとは。

心咲姉も心咲姉なりに頑張っておるようじゃし、ワシはワシなりに頑張るかのう。

「ああ。あとはあの服に着替えるだけだ」

「そうか。じゃあ行くかのう」

「なぁ」
「なんじゃ」
「いつもいつも思うんだけど、この格好はないだろ」

朝六時半くらいの街通りをスラスラ歩いていく。
六時半ともなるとちらほらと歩いている人がいるし車ならもう結構通っている。
そんな中を俺は超目立つ格好で歩いている。巫女服だ。正直恥ずかしいさ。まずこれを着て行かなくちゃいけない理由がわからない。

「んー、まぁユニフォームみたいなモノじゃし、それに似合っておるからいいじゃないか」
「似合ってる？　俺に巫女服なんか似合う訳ないだろ」

ていうか俺が巫女服着たら派手な巫女さんだろ。髪が黒と赤だぞ。変すぎる。

「そんなことはないがのう。まぁいいか」
「そんなことより今回の悲惨な奴は誰だ」
「野村勝男、三六歳。欲望に駆られ取り憑かれた哀れなサラリーマンじゃ」
「そいつは何の欲望に駆られたんだ」
「金欲じゃ」

醜い。欲望を満たす為にアイツらを受け入れるとは、醜くすぎる。

俺と同じくらい醜い。

「そろそろじゃぞ」

「ああ」

人ごみを離れ、一応街中なのに人が全くいない神社につく。神主も巫女もいない無人の神社。なのに手入れが行き届いているのはたぶん紗弥が掃除をしているからだろう。

俺にとって最悪の思い出しかない嫌な場所だ。

城道達にも話してない秘密。話したら嫌われそうで怖い秘密。俺はここで人に取り憑く異形の類を退治する。まぁ要するにゴーストバスターみたいなモノだ。依頼を受け無償で退治し、取り憑かれた人はその間の記憶を失う。俺にとってマイナス要素しかない嫌なモノだ。

「奴さんは中にいる」

俺は紗弥に返事をしないでご神殿の中に入って行く。木の戸を開け、中に足を踏み入れる。足に木の冷たい感触が伝わってくる。

相変わらず不気味なトコだ。

朝だというのにほの暗い。夏だというのに肌寒い。神を祭っている筈なのにあるのは天井や壁に隙間なく飾られた鬼の面だけ。

戸をしめると明かりが入ってくる場所はもう唯一の窓とも言える一つの格子だけ。それも高い位置にあり子供の身長では届きもしない残酷なモノ。

嫌な場所だ。早く出たい。

格子から視線を戻す。部屋のおくに男が座っている。手や足を枷

で縛られたその男は俯きながら何かぶつぶつ呪いのように声を発している。

「お前が野村勝男か」

「いやだ、渡したくない、この金は私のものだ、帰れ、帰れ、金は私のものだ、金は私のものだ、金は私のものだ」

何をぶつぶつ言ってるかと思えばくだらない。

「野村勝男」

「いやだ、いやだ、いやだ」

野村勝男の目の前まで行き額に手をあてる。生きているとは思えないほどの冷たさが手から伝わってくる。

かなり衰弱してるな。

「今からお前のなかにいる異形の者を俺のなかにうつす」

「なんで、なんで、こうなった、私はお前の保証人に……」

聞こえてないか。まぁどうでもいいけど。

額と額を合わせる。その瞬間何かが意識の中に飛びこんできた。

「くっ、ぅあっ！」

痛い、痛い痛い痛い。苦しい苦しい苦しい！

頭を抱えその場に倒れ体がのけ反る。

痛い苦しい痛い苦しい。

野村勝男の中にいた者が俺の中に移って俺の中の者が戦っている。

頭が破裂しそうなくらい痛い。全身の血管が一気に切れそうな気がする。頭の中で声がする、悲鳴と歓喜。絶望と希望。

「くっがぁああっ！」

意識がとびそうだ。

涎を撒き散らしながら床を転げ回る。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい。

嫌だ、嫌だ、ココは良い思い出なんか一つもない。

「堀秀光。お前の中の者を俺の中に移す」

「やめろ。俺はこのままで満足だ」

快楽殺人者、婦女暴行。最悪の欲に駆られたこの天パの汚い男。

コイツの中の者を俺の中に移した。

「ぐっぅあああっ！」

痛い苦しい、やめろ。

「ああっ、はぁはぁ」

『余計なことをするな。この男はろくでもない奴だ。このまま俺に取り憑かれて死んで行った方がいい』

頭の中でコイツの中にいた奴が話しかけてくる。
「はぁはぁ、ダメ、だ。コイツは、そんな楽に殺したらダメだ」
こういう奴こそ、ちゃんと裁かれるべきだ。
「ちっ。余計なことしやがって」
「くっあぁっうがっ」
「お前、あと数年もしたら良い女になりそうだな」
「ぐっぎゃっ。ぁ、な、なに、して、んだ」
堀が起き上がった。
コイツ枷は!?
「うああ!」
「へへっ。今は抵抗出来ないみたいだし、コイツも犯すか」
そう言って堀は俺の肩を掴むと乱暴に巫女服を脱がした。
「なっぎゃ、や、やめ」
「ああ、小さいけどまぁいいか」
『ほらみな、だからほっとけばよかったんだ』
「よっこらせっと」
「う、あああああああああああああ!」
『よくも俺の邪魔をしたな。俺を殺しても俺がかけたその呪いは続くだろう。お前には一番残酷な呪いが……』

「はぁはぁはぁ……」

気を失ってたのか。

野村勝男は気絶している。起きたころにはここに来た記憶も俺と会った記憶も失っているだろう。

こうやって倒れていると思いだすな。出会う前のころを。

「佳！」

「はぁはぁ、なんだよ」

「よかった」

安堵の表情を見せる紗弥。コイツはあの時も天パの男を半殺しにして俺を病院まで連れて行ってくれた。汚くて臭いものがたっぷりついた俺を躊躇なく抱き締めて。そんなことがあってから俺の声がやむと必ずコイツは戸を開けて入ってくる。

「お前の手なんていらない」

「そうゆうな。疲れておるだろう。ほらワシの肩に捕まれ」

「いらないって言ってるだろ！」

ばしっと差し延べられた手をはたく。

「今さら何のつもりだ。罪滅ぼしでもしたいのか？　アイツらが死

んだら手の平返したように優しくしやがって、ふざけんなよ！」
「……言いたいことはそれだけか」
……表情一つ変えない。くそっ。心咲姉みたいに表情をころころ変えるんならまだマシだ。それに心咲姉はあの頃から優しかった。俺を心配していた。
「言いたいことはそれだけなのかと聞いておる」
「……ほっといてくれ、頼むから」
そう言うと紗弥は無言で俺を通りすぎ野村勝男の枷を外してそのまま外へ運んで行った。
戸を閉められたこの部屋はまたほの暗い空間となる。壁や天井に隙間なく張り詰められている鬼の面が一斉に俺を睨んでいるような錯覚に落ちる。
そうだ。あの頃もこんな感じだった。無理矢理この部屋に入れられ一晩中独りで過す。精神を鍛える為、どんな境遇になっても揺るがない心を作る為。
物心ついた頃から夜はずっと独りでここにいた。夜、暗くなってから、朝、明るくなるまで。冬は毛布一つと一緒に放り込まれる。泣きわめいたり、外で何か粗相をすると次の日に一日この部屋から出してくれない。ご飯もない。冬なんか毛布すらくれない。
ただ、ただ孤独だった。
でも時々朝起きたらご飯が置いてあったり、毛布が一つ多く体にかかってあったりしてたな。
最初はアイツらの優しさかと思ったけど違った。やってくれてたのは心咲姉だった。紗弥は何もしてくれてない。
そんなの八つ当たりだってわかってる。紗弥にキツいのが子供みたいな八つ当たりだってことくらいわかってる。でも俺はあの時の

心咲姉の優しさが凄く嬉しかった。逆に見向きもしなかった紗弥を許せない。

「……ガキか俺は」

暗い、暗い、寂しい、寂しいよ。城道、透麻、來優、汐姫……あいたい。

「あー、やべ。……寂しい」

だから、皆にあえない日は嫌いなんだ。

「……」

野村勝男を背負い無言で出て行く。佳と口は聞かない、目もあわせない。

無言で部屋を出て戸をしめる。

神社の階段あたりに野村勝男を置き自分は大きなご神木の所へ隠れるようにサァっと行く。ご神木の前で座り塞ぎ込んだ。

「うっ」

我慢した。ワシはよく我慢した。今ワシの周りには誰もいない。だからもういい。だからもういいんだ。

そう自分に言い聞かせた。

「うわっ、ぐすっひく」

無言だったのは喋ったら泣いてしまうから。目を合わさなかったのは目があったら涙が出てしまうから。

ワシは強くないといけない。佳の前じゃ強く冷徹な姉でなければならない。泣いている所なんて見られる訳にはいかない。だから我慢しなければいけなかった。

「うわぁあん……ひっく、がま、んした、えらい、」

涙目で視界が朦朧とする中ワシは自分を褒める。よく我慢した、

と。

「ごめ、ん、佳。何もできない、弱いお姉ちゃんで、ごめん、うぅ」

何一つ助けてあげられないお姉ちゃんでごめんなさい。

もう少し、あと少しだけ待っておいて。涙が止まったら迎えに行くから。

「何をそんな所でぐずっているのかと思えば……、はぁ」

ビクっと体が震えた。

見られた、誰に。恥ずかしい、情けない、いやじゃ、もう死にたい……。

「ぅ、うわあああああん」

「大声でなくなアホ。私よ。心咲よ」

「ふえ、心咲、姉？」

「いい歳した大人がふえとか言わないの」

後ろを振り向くと赤い和服を来て長い黒髪に簪を差している心咲姉がいた。一見漫画に出てきそうな遊郭の女の人だ。

「な、んで、ぐすっここに」

「なんでって今日はアノ日でしょ？　佳が変な男に絡まられたらどうするの」

え？　そっちの心配？

「で、紗弥は何で泣いてるの」

「ワシ……何も出来ない……お姉ちゃんだなと思って」

「そんなことないでしょ。私が佳にこっそりご飯や毛布を持って行っていたのがバレた時毎回自分が勝手にやったって嘘をついて私の代わりにお仕置を受けたのは紗弥でしょ。それに佳の参加日に気になってこっそり行ってたり、佳にもっと優しくしてあげてって頼みこんだのも紗弥じゃない」

「でも結局優しくはならなかった」

「仕方ないでしょ。あの人達は最低な親だったんだから。私にはバレないようにこっそりとすることしか出来なかったけど、紗弥はあの人達にめんと向って言ってたじゃない」

……。

「わかったなら行くよ。佳は寂しがり屋だからきっと泣きそうになってるわよ」

「……うむ、わかった」

「よし、紗弥はやっぱりいつも通りが一番可愛いわ」

「な、何を言っておるのだっ」

「ところで紗弥、白馬の王子様には会えた？」

「心咲姉、今度そっち系の質問をしたら、覚悟をしてもらうことになるぞ」

「わかったわ、頭にいれとく」

王子様は簡単に出会えないから王子様なんじゃ。

佳は泣いてないじゃろうか。心配だ。心咲姉の言う通り佳は寂しがり屋じゃからのう。

『親のわたしに逆らうな』
『あなた達子供は親の言う事を聞いてればいいのよ』
『そんなの間違っておる。ワシ達は道具じゃない』
『気持ち悪い喋り方して、産まなければよかった』
『生意気言うな紗弥』

アナタ達は文句を言ったワシを叩いた。夜佳を部屋に閉じこめたあとワシを裸にし神社の鳥居に縛り付け放置したこともあった。その時体中を虫に噛まれ腫れたこともあったし男達に犯されたこともあった。

それでも文句を言うのを止めないワシをとうとうアナタ達は捨てた。親が子を捨てた。親子の縁が切れた。

ワシはそれを待っておった。文句や意見を言う度に度重なる暴力、暴言。ワシはもう決めていたのじゃ。中から幾ら文句を言おうが無駄なら、外から佳を救おうと。

ねぇ、アナタ達は知らなかったじゃろう。気持ち悪いと言ったこのワシの喋り方は、ある日テレビで見た時代劇のヒーローの喋り方を真似してたんじゃ。そのヒーローは困っている人を助け、悪さをしている人を成敗する何処にでもいそうなヒーロー。

ワシはそんなありふれたヒーローに憧れたのじゃ。

別に困っている人みな救えなくてもいい。悪を成敗出来なくてもいい。

ワシの可愛い大事な妹、佳を救えればあとは自分がどうなろうが構わない。

佳のヒーローにワシはなりたかった。

ただ……それだけ。

「いないのだ」
「あー、今日はあの日か」
「何かやる気しねぇな」
「ボク寂しいよぉ」

やっぱりいない。教室のドコを探しても佳はいなかった。
透麻が言ったアノ日ってのは佳と会えない日のことだ。二月に一日程佳に会えない日がある。何で佳に会えないのか透麻達は知らない。
けどボクは知ってるのだ。
一度この日に佳のあとをつけたことがある。佳は巫女服を着て一人で静かな神社に入って行った。そこで僕が見たモノは誰にも話してはいない。誰も知ってはならない気がしたからだ。佳も僕に見られていた事に気付いてないだろう。だから僕も知らない事になっている。
あの不気味な部屋で佳が何をしていたのかはわからない。ただ佳が一人で床を転がり、苦痛な悲鳴をあげていた。僕にはそうとしか見えなかった。
何度助けようと思っただろう。でも、明らかに僕じゃ役にたたないとわかっていた。じゃあ僕がしてあげられる事は？　佳が自分から話すまで黙っていることしかない。
耐えるのだ。それが佳の為なんだから。

「てことは今日は部活なしか」
「あーあ、暇だなぁ」

「はぁ、ボク今日一日何を思って生きればいいんだろ」

……。

嫌な気配を感じドアの方を向く。思った通り嫌な奴等がこっちを見ていた。海里とか言う名前の水色のロン毛ちび、そしてその取り巻きだ。

「どうやら暇な一日にはなりそうにないのだよ」

「は？」

「何言ってんだ城道」

「今日佳がいなくて案外良かったのだ。生徒会を全力で潰せる」

ニヤリと口角を吊り上げる。嬉しくて嬉しくて堪らない。佳に会えない日は皆ストレスが溜まっているのだよ。それを都合良く解消出来て、尚且つ邪魔者を潰せるのだから。これ以上嬉しい話はない。

「楽しみだな」

「ああ、わくわくして来たぜ」

「アレが佳様の害？　消さないとダメだね」

ほら、皆喜んでる。

「来たぜ」

來優が指をポキポキならしながら言う。

取り巻きの一人、二メートルはありそうなスキンヘッドの大男がズカズカと教室に入って来た。うん、あれはきっと妖怪の類なのだ。種族はフランケンシュタイニーなのだ。きっとそうに違いない。

フランケンは僕達の方に真直ぐ歩いて来る。教室の人達はフランケンに怖じ気て道を開ける。話していた人も話すのをやめフランケ

ンの足元の方を見ている。
僕達の目の前まで来たフランケンはギロっと睨むとドスの利いた低い声で話し始めた。

「海里様が放課後」
「うるせぇボケぇ！」
「ギャッ！」

二メートルの体が横に飛ばされた。机や人を巻き込んで倒れるフランケン。
もう、透麻は手が早い。まぁ出したのは足だけど。
それにしても、ナイスなのだ透麻。

「うぐ、て、テメェらぁあ」

蹴られた横腹を抑えながらヨロヨロと立ち上がるフランケン。

「バカに先こされたぁあああ！」
「へ、な！？」

フランケンの後ろに回っていた來優。後ろからフランケンの腹に腕を通した。ここまでいったら流石のフランケンも來優がすることをわかったのだろう、凄いビックリしている。
顔面蒼白のフランケンの体が一瞬持ち上がる。体を反る來優。フランケンは首と肩を床に叩き付けられた。

「そ、んな、女にこんな技が……」

ジャーマン・スープレックス。有名なプロレス技の一つだ。

というか來優、スカートでそんな技をしたら……。

「來優、パンツ見えてんぞ」

「なっ！」

凄い速さで座りスカートを抑える。でももう遅い。周りの男子は勿論何故か女子までもが良い表情をして、親指を立てている。何人かは流血してるのだ。

來優の後ろにいた人達は本気で悔しいのか両膝をついてガックリしている。

「……なぁ城道、こんなんでいいのかこの学校」

「ユニークなのだ」

透麻が隣りで呟く。けど透麻もその学校の一員なのだ。

「ふふふ、少しは恥じらいをもったら？」

海里と他の取り巻きが教室に入って来た。堂々と僕達の前を通りすぎ來優の後ろでのびているフランケンの隣りまで行く。

「それにしても、こんな金髪バカにやられるなんて、情けないにも程があるわ」

透麻が最初に蹴ったのはノーカウントみたいなのだ。

「誰が金髪バカだコラァ」

「あら、自分だと気付かないくらいバカなんですの？」

「テメっ！」

「ああそれと、似合ってませんよ、白色の下着」

「なっ」

カァーと後ろからでもわかる程顔を赤くする來優。耳まで真っ赤になっている。恥ずかしさでいっぱいなんだろうな。

「起きなさいグズ」

ドスッ。

海里がのびているフランケンの横腹を蹴る。何度も何度もフランケンが起きるまで蹴った。

苦しそうに起きたフランケンを連れて教室から出る為に僕達の前を通りすぎようとする。

「おい水色ちび」

「……なに海本透麻」

「そういうのやめろっつったろが」

「はっ。このグズ達は自分からやってるのよ。私に言われても困るわ」

また透麻は……。まぁそういう優しい所が透麻の良いところなんだけど。

「お前らもそれでいいのか。こんなちびの言いなりでいいのか」

取り巻き達は無言で透麻を見る。目は死んでない。何かの理由で仕方なくやってるみたいなのだ。

「没落した蒼空財閥とは違うのよ。私の一言で職を失う人がどれだけいると思う?」

「そういうことか」
「貴方達の親も職がなくなったって知らないわよ」
「そんなことやってみろ……殺してやる」
「ぅっ……」

透麻の殺気に押されたのか海里が一瞬たじろぐ。でもすぐに元に戻り、ふんっと言って歩きだした。

「あー、そうだ。このグズが伝え忘れたようだから言っておくわ。放課後体育館で待っている。会長の伝言よ」
「俺達は今すぐでもいいんだぜ」
「よくも私をバカにしたな」

元気がいいのだ二人共。

「放課後体育館でいいのだな」
「ええ。よかったわ話がわかる人がいて。猿二匹じゃ会話になりませんわ」
「誰が猿だコラァ！」
「死ねボケバカ」

……。

「では放課後、逃げないで下さいね」

逃げる？　バカじゃないのか。今からもう楽しみで堪らないのに逃げるわけがないのだ。

部活存続試合～それぞれの覚悟　海里

教室を出て生徒会室に向かう。もちろん下僕達も一緒だ。まぁ当然生徒会室には入れないけど。

それにしてもまったく、何なのアイツは。気に食わない。倉本達もそうだけど、その中でも海本だけはどうしても気に食わない。私が私の下僕をどう扱おうが勝手でしょ。

気に食わない。潰してやる、徹底的に。

ふふふ。あの人達が負けたら脅して私の靴でも舐めさせてあげようかしら。

「放課後が楽しみだわ」

コンコン。

生徒会室のドアをノックして入る。入る前に下僕達には解散するよう命令をする。

「放課後体育館裏に集まりなさい」

そうね、十人もいれば十分かしら。

「失礼します」

ガチャリとドアを開け室内に入る。ホワイトボードが一つと長机が二つとパイプ椅子が五つ、そしてふかふかなソファが一つある簡素な部屋。まぁ生徒会室としては普通でしょう。

奥のパイプ椅子に会長が長机に手をついて座っている。顔は意を決したような表情をしている。そして、その向かいに坊主頭に剃り

込みを入れた男が肘を立てて座っている。街で見掛けたらなるべく関わりたくないような人種にあたるでしょう。あとはソファに寄り添いながら寝ている双子。両方とも髪は腰までの黒色で、片方は右に、もう片方は左に髪を括っている。

「バカ二人は寝てしまったんですか。まったく脳天気なものですわ」
「まぁそういうな海里。舞と萌は緊張しない所が強いんだ」
「会長は二人に甘いですわ」
「何を言うんだ。オレはお前にも、もちろん巳剣（みつるぎ）にも甘いだろ」
「るせぇ。んなことを真顔で言うんじゃねぇよ」
「巳剣、その態度は会長に失礼ですわよ。謝りなさい」
「いいんだ海里。巳剣は照れてるだけだ」

ニコっと向かいに座っている巳剣の顔を見て笑う会長。女の私から見ても見惚れてしまう表情だ。

「なっ、ば、バカヤロー、照れてなんかねぇよ」

顔を真っ赤にして否定する巳剣。
あれでは肯定しているのと同じですわね。

「そんなことよりアイツらとはどうゆう風にケンカすんだ？」
「巳剣ケンカじゃないわよ。これは制裁です」
「はあ？　俺らがやんのはケンカと変わらねぇだろ」
「まったくこれだから野蛮人は……はぁ」
「はっ、良く言うぜ性悪が」
「こら、ケンカはやめろ海里、巳剣」

会長にそう言われたら従うしかない。巳剣も渋々といった様子で、舌打ちを一度してから静かになった。

「そうだな、誰とあたるかはくじで決めようと思う」
「くじ、ですか？」
「そうだ」
「ふざけるな！」

バンッ、と机を叩き会長に怒鳴る巳剣。
うるさいですわ。本当にクズね。

「俺は柳生とやりてぇんだ！　くじなんかで決めんじゃねぇ！」
「落ち着け巳剣。くじの方がおもしろいだろ」
「おもしろくねぇよ！　俺がもし柳生とあたらなかったらどうしてくれんだ。アイツを潰せねぇじゃねぇか、ああ〝！」
「……驕るな。お前の力じゃ柳生には到底勝てないよ」
「そんなことやってみねぇとわからねぇだろ！」
「しつこいぞ巳剣。いい加減にしないと黙らすぞ」

ビクっと私の背筋が凍り付く。会長の目が巳剣の目を見据える。巳剣も気圧され会長から目を逸した。
室内に嫌な雰囲気が流れる。言葉を出せない。声を発声したらその声が最後の言葉になりそうな感じがする。
ピリピリと体に電気が走る。体が危険信号を発信している。動くな、喋るな、呼吸を止めろ。
ああ、こんなにも違うのか。同じ人間なのに明らかに違う。努力？　才能？　それ以前の問題だ。会長を見てると質の違いを思い知らされる。
この人だけは敵に回したくない。心の底からそう思ったのは会長と初めて会ったときが初めてだ。

「巳剣、とりあえずはオレの言う通りくじでやってもらう」

「……くっ」

下を向きながら残念そうに歯を食いしばる巳剣。

「だけど、柳生とケンカがしたいならいつでもオレに言え。その時はオレが特別に場所を設けてやる」

この優しさとさっきの威圧が会長の武器だと私は思う。もちろん会長は凄く強い。でもそれは当然のように備わっているものなんだ。言うなら武器をとる為の手だ。この強さがあるからあの威圧が出来る。この強さがあるからあの優しさがある。

そして、人を魅了するのはやっぱり強さじゃなく威圧と優しさ。魅了する為の前座が力。

絶対王政？　力だけで押し付ければ人は必ず反抗する。一人じゃムリでも二人なら、二人でムリなら四人。そんな感じでその力が強い程反抗する人も増えるだろう。

反抗を許さない威圧。そして、反抗を起こさせない優しさ。それを会長は持っている。

会長を気に食わない奴もいるだろう。でもそれはちゃんと会長と向き合ってないからだわ。会長と向き合えばこんなに素晴らしい人はいない。そう思う筈。

「ありがとな」

「こっちこそ、ありがとわかってくれて」

やっぱり会長は最高ですわ。

「じゃあ海里、巳剣、それと寝てる舞と萌、放課後は必ず勝とうな」

「当たり前だ」

「はいですわ」

例え誰が相手でも、私は勝ちます。会長、あなたの為に。

「会長ー」
「スー、スー」

保健室のベットに横たわっている金髪の女の人に話しかける。

「会長起きて」
（……かいちょう、快調、階調、海鳥、開帳、会長……）
ン、まだ寝てるのか？
「会長ー」

顔をペタペタと触る。
えーと目は……、あったあった。
ぶすっと指で目を押した。

「……」
「……あー、なんだ会長って私のことか」
「起きたんですね会長」

目を押されているのに第一声がソレはどうかと思うが、まぁ本人が気にしてないのならいいか。

「羽路、何度も言うが私は会長ではない。委員長か部長かナツと呼べと言っているだろう」
「なはは。まぁまぁ気にしないでほしい」

「あといい加減目を刺すのはやめてくれないか」
「ン、忘れてたよ」

どうりで指先から変な感触がすると思った。
いかんせん。自分はどうやら人を起こす時目を刺す癖が出来ているようだ。まぁ故意的なんだけどね。

「それより組長」
「……なんだ」
「生徒会の人と倉本って人達がやっと対立したよ。そして今日の放課後対決するっぽいな。チャンスだよ」
「……そうか。ふぁ～、今日は眠いから動きたくないんだがなぁ」
「そんなこと言ってるから自分達風紀委員は影が薄いんだと思う。そうか、自分達が知られてないのは委員長のせいなのか」

なるほど。自分の言葉で初めて気付くのはどうかとは思うが、納得した。全ては部長のせいなのか。

「……それは関係ないと思うんだが」
「あ、それよりナツ、自分人生初告白を体験したよ。いやいややはり照れるね」
「そりゃよかったな。で、相手は」
「佳と言うナツ会長に似た人だよ。しかも女の子ときた。まぁ自分は男の子より女の子の方が好きだから嬉しいのだけど」
「はぁ……、羽路名字は聞かなかったのか」
「名字？　そう言えば知らないな」

なんて言うのだろう。ン、まぁいいか。

「佳と将来を共にしようか迷っている今日この頃なんだけどね。な

ははは、真剣に悩むなぁ」
「ていうか人の愛称をころころ変えるな。一つに統一しろ」

今頃そこ突っ込むか。やはりナツ会長は何処かスローペースだね。

「よし、決めた」
「ン、なにをだい？」
「放課後あけておけよ羽路。風紀を正すぞ」
「なはは、りょーかい」

久し振りの活動。それも獲物は大きい。いやはや、気合いがはいるね。

「んじゃ私は寝るから。放課後になったらまた起こしてくれ」
「りょーかい」

ふむ。やはりこの会長は緊張感というものがない上にとことんスローペースだな。

「スー、スー」
「もう寝てる」

……いたずらでもしようか。何がいいだろう……、顔に落書き？ありきたりすぎるな。下着を脱がしておこうか、いやそれをするならいっそ全部脱がすか。

「……あとがこわい」

さすがにそれはやめておこうか。
ふむ、だとしたら何がいいだろう。

「……簀巻きにしようか」

よし、そうと決まれば縄を持ってこよう。

部活存続試合なのだ～説明　城道

「あら、遅かったわね。怖じ気ついて逃げたのかと思いましたわ」

放課後の体育館。さっそく僕達を挑発してくる海里。

「逃げるわけないのだ」

楽しみで楽しみで楽しみで

……言わずもがな透麻と來優のことなのだ。

「來優、立場上有利なのはあっちなのだ。ルールぐらいは従うべきなのだよ」

「くっ……わかった」

「じゃあ説明しますわ。先ず、対戦相手は今から引いてもらうくじで決まります。その結果に不満不平、反論意見は認められません。不正ももちろんダメですわよ。次に、対戦中は他の人の関与を一切禁止します」

……これは少し困ったのだ。

「関与をした時点でその対戦はもちろん、関与をした人の対戦も相手側の勝ちとなります。なお、対戦していない人が関与をした場合対戦権利を失われ相手の不戦勝となります。わかりましたかお猿さん？」

「なぁ城道、俺絶対あのクソちびを壊したい」

「なめんな透麻、あのちびは私がやる」

二人共目が血走ってるのだ。

「落ち着くのだ二人共。何事も冷静さを欠いたらダメなのだ。汐姫を見習うのだよ。凄く冷静なのだ」

体育館に入ってからずっと静かな汐姫を見る。

アレ？　入る時は隣りにいたのに……。

「あー、汐姫なら向こうだぞ」

透麻が指差した先、体育館の角の方に汐姫が蹲って何かをしていた。

「そういや汐姫体育館来るまえに、久し振りの出番だからしっかり研いでなきゃって言ってたな」

「ああ。なんか瞳孔開き気味だった気もする」

來優と透麻の発言。瞳孔開き気味。まさか、汐姫。

「ふふふ。お師匠様ぁ、下界におりて初めてこのコを使う時が来たよぉ。大切な人を守る為なら使ってもいいんだよねぇ。ボク、守るよ。佳様の居場所を」

シャー、シャーと小気味悪い音が響く。

……汐姫の師匠は何を渡したんだろう。

「最後のルール。生徒会の私は下僕達とセットで一人、バカ双子は二人で一人とし、それに有無はいわない」

「上等だぁ。下僕何人でも呼んでこいやぁ」

「私が三秒で潰してやるよ」

頼もしいのだ。

「期待してるのだ二人共」

「私達生徒会が勝ったなら貴方達部活は潰します。貴方達が勝ったのならこれからも好き勝手すればいいわ。私達はもう一切文句はいわないわ。じゃあ早速くじを引いてもらおうかしら」

海里が言うのと同時に坊主頭の男子が教壇に大きなガチャガチャを置いた。あのガチャガチャ結構重たそうなのにあんなに軽々と持

ち上げるとは……、あの男は僕があたるべきなのだ。そして僕と來優と透麻が先に勝ってもう対戦する必要を無くさないといけない。佳はいないから自然と相手の不戦勝、汐姫は戦わせたらダメなのだ。色んな意味で。

てことは一番好ましいのはあの坊主頭が僕、海里が透麻、双子が來優なのだ。

アレ？　今さらなんだけど数があわないのだ。あと一人、生徒会のメンバーが足りない。

「生徒会一人足りないのだよ」

「ああ、言うの忘れてたわ。私達は一人、前生徒会長が助っ人にいますわ」

前生徒会長か、強いのか弱いのか全くわからない。尚更僕達三人で早く決めた方が良さそうなのだ。

教壇まで行きガチャガチャのノブを捻る。パンパカパーンと言う音がガチャガチャから鳴った。

生徒会、資金の無駄遣いじゃないのかこれは。

さてと、皆ガチャガチャをしたようなのだ。このくじは吉とでるか凶とでるか……。

カポっと蓋を外し、中の巻いてある紙を開く。

四番？

生徒会がホワイトボードに何かを書き始めた。

”一番、巳剣

二番、舞＆萌

三番、海里
四番、マッキー
五番、会長”

「來優、透麻、汐姫、何番なのだ？」
「私は一番」
「俺は二番だな」
「ボクは三番だよ」

……凶と出たか。最悪なのだ。
この勝負、もしかしたら僕達の負けがあるかもしれない。

「來優気をつけるのだ。相手の男相当強いのだ」
「ありがと。任せとけ」

城道がそう言うなら本当に強いんだろう。しかも私じゃ勝てないくらいに。
でも負けられない。男にだけは、絶対に。
そして勿論負ける気もない。城道が心配するのもわかる。この勝負が部活がなくなるかどうかの鍵になる。だから私は絶対負けちゃダメなんだ。

「ちっ、柳生とやりたかったが……女かよ。あーあ、最悪だ」
「女だからってなめんなよボケ。巳剣っつったっけ、テメェなんて私で十分だ」
「言ってくれるじゃねぇか」

さて、どうするかな。さっきのガチャガチャを平気な顔して持ち上げた所を見て、コイツの力が半端じゃねぇってことはわかった。竹刀もねぇしな。どうしようか。

「やばいのだ」
「大丈夫だろ。來優だぞ。アイツが城道と佳と葵さん以外に負けるトコなんて想像つかねぇよ」
「巳剣って言うのか。巳剣は正直來優より実力が上なのだ。來優が勝つには相手が油断してるトコを一発で決めるしかない」
「……そんなに強いのか巳剣って奴」
「うん。しかもそれだけじゃない。來優にはこの場所は不利なのだ」

「体育館がか？」
「そうなのだ。來優は竹刀を持ってないのだ。だったら巳剣を倒すには打撃系か組み技系か、まぁとにかく直接相手の体に触れなければならないのだ」
「そっか、それで何で体育館が不利なんだよ」
「先ず力が明らかに相手の方が上回っている。体重も、リーチの長さも。それに下は床。來優が剣道以外に得意とするのはプロレスなのだ。プロレスは下が床だと相手が大怪我にもなるけど出来る技が限られてくるし避けられた時の反撃も怖い。何より力と体重で技もかけにくくなるのだ」
「……」
「來優が勝っている要素があるとしたらスピードだけかも知れないのだ。そのスピードも可能性の話なんだけど」
「……大丈夫。來優は負けねぇよ」
「透麻……」
「來優は強い。昔から人の二倍も三倍も努力して来た。知ってるだろ城道。努力した奴が必ず報われるとは思ってねぇけど、それでも絶対來優は負けねぇよ」
「……うん。來優は負けない」

ったく、恥ずかしいこと言ってくれるな。こりゃあますます負けるわけには行かなくなったな。
だけど城道の言う通り、私が勝っているかも知れないのは速さだけ。それもまだ不確定要素だけどな。ホントどうするかなぁ。

「……あーもう！」

ごちゃごちゃ考えるのはやめだ。とにかく突っ込む。先ずはそれからだ。
巳剣に向って思いっきりダッシュする。

先ずはタックル。そして様子見だ。

「突っ込んでくんのか」

ドンっ。

ビクともしねぇ。

クソっ！

「ヤァ！」

頬に拳を叩き込む。

くっ。これも躱さねぇのか。

「クソヤロー！」

パンチのラッシュだ。腹、胸、顔面、それぞれに絶え間なく拳を叩き込む。それでも巳剣はビクともしないし、避けようともしない。なめられてる。男に、こんな知らねぇ男に！

「クソがァア！」

殴るのをやめその場で飛ぶ。空中から顔面を足で蹴りに行く。これならさすがに避けんだろ。

バシっ！

「嘘、だろ」

これも避けないのかっ。

どんだけ人をなめれば気がすむんだ。
一旦二メートルぐらい距離を置く。そしてそこから全力でドロップキックをした。
巳剣の腹に当たったソレは静かな音を立てただけで巳剣を飛ばそうとも、動かそうともしなかった。
なんだコイツは、ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな。

「……動けよ、何で動かねぇんだよぉおお！」

くそ、くそ、クソッ！
今度はパンチとキックのラッシュ。
動け、なめんのも対外にしろ。女だからか、私が女だからなめてんのか。

「ふざけんなよテメェ！」

バチィン！

小気味良い音が響いた。頭の中で反響する。痛い、頬が痛い。頭がくらくらする。視界がハッキリとしない。世界が反転している。

バタン。

「來優！」

透麻の声だ。あ、城道の驚いてる顔も見える。汐姫は、泣きそうだな。アレ？　でも何で皆反対なんだ？　あー、そっか。私が反対なんだ。

「……一発で終わりか。まぁ女にしちゃあ頑張った方だ。三つくらい痣ぐらいにはなってんじゃねぇのか」

”女にしちゃあ頑張った方”

これだから嫌なんだ。女ってだけで弱く見られる。女ってだけでなめられる。女ってだけで力で強引にねじ伏せられる。

まぁ実際今ねじ伏せられてんのか。

嫌だなぁ。体が動かない。今がチャンスなんだけどな。いつか城道や佳に勝つ為に頑張って練習して来たアレ。今なら技かけられるんだけどな。体が言うこと聞かない。

これだから女は嫌なんだ。一発でもう体が動かない。言うことを聞かない。力もつかないし、反応も遅い。私に才能無いだけかも知れないけど。

あーあ、ちくしょぉ。悔しいな。男に負けた。また男に負けた。もうケンカじゃ負けないって決めたのに。ごめんな佳。佳の居場所守ってやれそうにないや。

「來優」

佳、皆ごめんな。

『いいかお前ら、もう佳を悲しませない為に俺達は強くなるぞ。今よりもっと、佳に害のある奴に負けないように』

『そうなのだ。僕達のせいで佳は大怪我をしたのだ』

『ボク、強くなるよ。弱いけど、いつか佳様を守れるように』

『そうだな。私も男には絶対負けない。とくに佳の害のある奴には』

『佳に害のある奴は壊す』
『殺すのだ』
『消すよ』
『潰す』
『絶対に佳を守る。佳は俺達にとって大切な人だから』
『何をしてもなのだよ』
『佳様に悲しい思いはさせない』
『当たり前だ』
『じゃあ約束な』

約束。救って貰ってばかりが仲間じゃない。
お互い救いあってこそが仲間だ。なのに私達は佳に救って貰ってばかり。
だからした。大事な約束を。
そうだ。こんなトコで寝転がってる場合じゃねぇんだよ。今やらなきゃどうする。負けたら確実に佳が悲しむだろうが。
一発頬にくらったからなんだ。
飛ばされたからってなんだ。
痛いからってなんだ。
くらくらするからってなんだ。
違うだろ。一番痛いのは、一番傷つくのは佳の悲しむ顔を見た時だろ。
こんな痛みへっちゃらだ。動け私の体。立て私の足！

「ハァ、ハァハァ」
「お前、まだ立てたのか」

「……ったりまえだボケ。負ける、わけには、いかないんだよ」
「大人しく寝てた方が綺麗な顔が崩れなくてすんだのに」
「ハァハァ、顔だぁ？　んなもんは、どうでもいい……。どんだけ崩れようが、醜くくなろうが……、私には絶対そばにいてくれる仲間がいる」

だから、私の顔のことなんかより……、

「佳の悲しむ顔の方が見たくないんだよ！」
「バカが」

ドスっ！

「がっは」

腹を殴られた。
わかった。コイツは力も速さも全て私より上だ。コイツの動きが全く見えない。

「さっさと倒れてな」

バチィン！

今度は顔面か。くそっ、膝が、また……。

ガクン。

「ふっ。倒れたか。フツーの男でも俺の拳を二発くらったら気絶するのに。そう考えたらお前はよくやった方だな」

あー、痛いなぁ。このまま倒れたままでいたいな。そしたらどれだけ楽かな。
力が抜けきっていた足にもう一度力をいれる。
アイツは、後ろを向いてる。

ガシっ。

「なっ！　お前まだっ」

巳剣の背後から腕に手を回して掴む。
これが、私のとっておきだ。下は床、もうどうにでもなれだ。

「ちっ」

巳剣が腕に力を入れて私を振りほどこうとする。
巳剣の腕は完全にロックしている。そう簡単には振りほどけないよ。

「ハァハァ、脳みそ、」

体を反っていく。同時に巳剣の巨漢が床を離れた。

「ぶち撒けろー！」

ドゴォン！

綺麗なブリッジを描く。

「ぐぅっ、がはっ」

バタンとその場に倒れる。巳剣は、動かない。巳剣の後頭部から血が流れている気もするが……どうでもいい。

「ハァハァハァ、もう、動けない」

疲れた。体が痛い。でも、

「なぁ、城道、透麻、汐姫……私、勝ったろ」

「ああ」

「勝ったのだ來優」

「凄いよ來優」

「あはは……、ホント凄いよ私」

とっておきを城道達に見せてしまったけど、まぁいいか。

「それにしてもダルマ式とはな。凄いな來優」

「とっておきだったんだけどな」

なにはともあれ、これで一勝だ。

「次は俺だな、瞬殺して来るから見とけ」

「聞いた萌」

「聞いた聞いた舞。アイツウチらを瞬殺するらしいよ～」

「そんなの出来るわけないのにねぇ」

「ねぇー」

……うざ。

「透麻、お前あんなんに負けたら恥だぞ」
「わかってる。お前は座って休んどけ來優」
「寝転がって休んどくわ」

座っててもえらい。体中がズキズキと痛むんだぞ。あー、顔腫れてそうだなぁ。さっきはカッコいいこと言ってたけど正直いやだなぁ。

「ウチらから行かせて貰うよ」
「貰うよー」
「勝手にしろ」

双子が左右別々に透麻に突っ込んで行く。
やべぇ、あの双子……アホだ。透麻に突っ込んで行くのは自殺行為だぞ。アイツの脳と目は変だからな。ホークアイって言ったっけ？　よくわからんけど変な脳だ。

「わりぃな」

ドォオォ！

「ガっ」
「ハッ」

「テメェらとは背負ってるモンの重さが違うんだよ」

文字通り瞬殺だ。ていうか、双子弱ぇー。

部活存続試合～負けられない勝負？　汐姫

……二人共凄い。來優は圧倒的に自分より強い人に勝ったし、透麻なんか変な双子を瞬殺した。

「余裕」

「さすが透麻なのだ」

「ちっ、ていうかあの双子弱すぎだろ」

「だな。まぁ俺にかかりゃあそのへんの双子くらい余裕だな」

変な双子は透麻に床に叩き付けられて気絶した。なんだったんだろうあの双子。捨て駒？　それともネタキャラ？

巳剣って人は自分で止血をして來優を睨んでいる。來優も負けじと睨み返す。

今度はボクの番。相手は海里とか言う小さい人とその取り巻き。正直取り巻き達には勝てる気はしない。だからボクが狙うのは海里がボクのトコに寄って来た時。

「行ってくるよ」

「おう」

「無茶はするなよ汐姫。私は汐姫が傷つくのは見たくない」

「ありがと來優」

でも、今日は無茶をさせてほしい。だって佳様と皆の居場所を守る戦いなんだから。

「……汐姫、大丈夫なのだ。明日またいつものように皆で部活をするのだ」
「……当然だよ城道」
明日、また皆で笑って部活をする為に……。
「ボクは負けない」
ボクだって伊達に山に籠ってたわけじゃない。この勝負、絶対に負けられない。
「ふふん、まさか私の相手が貴方とはね。これも何かの因果かしら」
「因果？　ていうか朝の時から気になっていたけどボクのこと知ってるの？」
「……貴方、私のこと覚えてないわけ？　昔パーティーで何度もお会いしたでしょ」
パーティー？
「ボクどうでもいいことと人は覚えないようにしてるんだ」
それにあの時は皆のコトで頭がいっぱいだったから。今もいっぱいだよ。
「とことん私をなめてますわね。まぁいいわ。元お嬢様は果たして戦えるのか……、楽しみですわ」
海里が手をボクに向ける。十人の取り巻きが一斉に走って来た。
うわぁ、迫力あるなぁ。ガタイの良い男子が十人走ってくるんだよ。ホラー映画の比じゃないよ。

当初の予定は海里がこっちに来るのを待つ、だったけど……、待つのはやめた。ボクから行こう。ムリかも知れないけど、それでもただ待つよりはマシかなと思う。

ボクは足には自身がある。不規則な山道で鍛えた俊敏差。ソレと気配を消すことだけが皆と見劣りしないボクの自慢。

走ってくる男達の間を縫うようにして海里のトコまで行く。背も低く小柄だからこそ出来る技だ。あと來優より、胸もないから……邪魔にならない。

前三メートルの位置に海里を捕らえる。ぽっけからカッターナイフを取り出し刃をキリキリと出した。

佳様の害は排除する。

「死ねぇ！」

大丈夫。殺したら皆に迷惑がかかる。だから皆に迷惑をかけない為に急所は外すから。だから死ぬ程の苦痛を味わってね。

「バカ、ですわね」

「え」

視界がぐるりと回った。変な浮遊感、背中の急な痛み。投げられた？

「うえっ」

胃の中のモノが暴れ回る。吐きそう。

ガッ！

「私が戦えないといつ言いました？」
「く、ぅう！」

髪を捕まれ強引に顔をあげられた。
誤算だった。完璧にボクのミスだ。屈強な取り巻きを引き連れているぐらいだから自分じゃ戦えないかと思ってた。くそぉ。

「それにしてもカッターナイフとは危ないわね」
「は、なせ」

くっ。髪を掴むなんて卑怯だぞ。

「これは人を切るモノじゃないわよ」

キリキリと刃を出し入れしながら海里は不気味に笑いながら言う。

「これはモノを切る為にあるのよ。正しい使い方を教えてあげますわ」

指をパチンと鳴らした。取り巻きの一人がやって来てボクを羽交締めする。
やめろ。触るな。汚い手でボクを触るな。ボクに触っていいのは佳様と皆だけだ。お前らがボクに触るな。

「触るなぁあああ！」
「暴れたら危ないですわ。ちょっと黙らせなさい」

ドゴ。

「うっ！　うえ……」

「きゃっ。汚いですわね。吐かないでよ」

言いながらボクの服を切って行く。ブレザーもスカートも、カッターシャツも。

「や、めろ、やめろ！」

ぱさっと服が床に落ちる音がなった。その音はボクの頭の中でサイレンのように鳴り響いた。

「うわっ」

海里の顔を見なくてもわかる。それくらい酷いモノだから。

「まさかあの蒼空財閥の当主二人が娘にこんなコトをしていたなんて」

「み……るな」

背中やお腹、太股や足先、胸や腕。残酷につけられた切り傷や擦り傷、そして火傷の跡。

「もしかしてその髪で隠している右目も？」

グイッとボクの右目にかかっている髪をあげた。

「あ、ああ……ぅ」

いつ振りだろう。この右目がまともに外を見るのは……。

眉から目の下までに垂直に入っている刃物で斬られたようなあと。

見られたくなかった。誰にも。

「……、醜い」

ビクっと体が震えた。醜い、醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い醜い。

わかってる。そんなコトはわかってる。でも、何でソレをお前に言われなくちゃならない。

「離せ！　殺してやる！　殺してやるッ！」

離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せ離せはなせはなせはなせはなせハナセ！

「貴方も醜いけど、一番醜いのは貴方の親ですわ。没落したからって娘にこんな八つ当たりをするなんて。まぁこんな不出来な娘なら八つ当たりもしたくなるでしょうけど」

お前が、

「酷いことをしますわね。親が親なら子も子ってわけですわね。カッターナイフで人を切ろうとして……、私は心底蒼空家に生まれなくてよかったと思いますわ」

何をシッテイル？

「でも事故で死んでよかったんじゃない？　これ以上傷を増やさなくてすんだし」

優しかったボクの親をシッテイルのか？

「確か巻き込まれて死んだ夫婦がいましたわね。可哀相に」

巻き込まれた夫婦が誰の親かシッテイルのか？

「しかもその子供が今はこんなバカみたいな連中と遊びバカみたいなコトをしていて毎日笑っている。本当に巻き込まれた夫婦が可哀相ですわ」

言うな。

「しかも類は友を呼ぶって言いますから、貴方達がどれだけバカで可哀相かは貴方を見れば一目瞭然ですわね」

悪口を言うな。ボクを救ってくれた皆をバカにするな。

透麻を、來優を、城道を、佳様をバカにするな。

『汐姫がバカだからこうなったんだ』

『余計なこと言わないでよバカなんだから』

『おいで汐姫、お仕置だよ』

『熱い？　ねぇ熱い？　熱いよね汐姫。じゃあもう一本行こうね』

「しかも肝心な勝負でこの有様。貴方の仲間達も悲惨ですわね。貴方のせいで品位を下に見られ、貴方のせいで大事な勝負に負ける。あら？　泣いてるの？　汚いですわ。吐くわ泣くわ、汚物ですわね貴方」

……、ごめんなさい。ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

「ねぇ、聞いてるの？」

バチィン！

「ぁ、う」

「聞いてるの？」

バチィン！

ぶたないで……。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ボクが悪かったです。ぶたないで……、お願い、ぶたないで……お父さん、お母さん」

優しい頃に戻ってよ。

「はあ？　何言ってるの？　私は貴方のお父さんやお母さんになっ

た覚えはないわよ」
「ごめんなさいごめんなさい」

バチィン！

「ぅぐっ」
「あー、そう言うこと。お父さんお母さんにもこうやって叩かれたのね」

バチィン！

「気持ち悪い。病んでるわね。精神科に行けば」
「ぅ、うぅ……ぐすっ」
「ねぇ、貴方」

ごめんなさい、お父さんお母さん。ボクが余計なことを言ったから仕事がダメになって。でもね、ボクは今も好きだよ。だって、痛いけど、いつも一緒にいるもん。

「何で生まれて来たの」

『こんな子産まなければよかった。

ねぇ、汐姫……何で生まれてきたの？』

我慢する。痛いの我慢する。だから、お父さんお母さん、ボクも連れていって。置いてかないで。
また、一人ぼっちにしないで……、お願い。

「……ごめんね。産まれてきて」

『汐姫、今度の休みはピクニックにいこ』
『ママ張り切ってお弁当作るわね』

うん。たのしみ。

『ごめん汐姫、急な仕事が入ったんだ。汐姫ならわかってくれるよな』
『パパ一人じゃ心配だからママも行くね。困ったら家政婦さんに何

か言ってね』

パパ、ママ、ボクともだちができたよ。よしっていうおとこのコだよ。

『男の子だとぉ。汐姫、今度家に連れて来なさい。汐姫にふさわしいか確かめてやる』

『ふふふ。パパ汐姫の初めての友達が男の子だからはしゃいでるのよ。今度連れて来なさい。ママも気になるわ』

パパ、ママ、きょうよしとあそんだの。ほかにもくうやとうまってコもいたよ。

『そうかそうか。いいなぁ、パパも一緒に遊びたかったなぁ』

『よかったね汐姫。楽しかった?』

ぐすっ。

『どうしたの汐姫?』

きょう、けんかした。みんなであそんでたらおっきなコがボクをたたいたの。

『うちの大事な汐姫になにさらしてくれとんじゃぁあい。どこのどいつじゃあ!』

パパ、どうしたの?

『パパは今狂ってるのよ。そっとしておいてあげて』

うんわかった。

『で、何処か怪我とかしてないの？』

うん、だいじょうぶ。みんながまもってくれた。すごかったよみんな。

『よかった汐姫に怪我がなくて』

『クソっ。何でだ、何処で失敗した！』

パパ、どうしたの。

『うるさい汐姫！　ちょっと向こう行ってろ』

『汐姫、パパとママ今忙しいから向こう行ってようね』

パパ、ママ、今日ね、

『今忙しいんだ黙ってろ』

『向こう行ってて汐姫』

ゴホっゴホっ。パパぁ、ママぁ、どこ？　体が……。

お父さん、お母さん、痛いよ。熱いよ。苦しいよ。何でこんなことするの。

『うるせぇ！』
『黙ってなさい』

どこ、どこに行ったの？　ボクを置いてどこに行ったのお父さん
お母さん。何でボクを一人ぼっちにするの……。一人は、やだよ。

”ごめんね汐姫。ママとパパ、汐姫に酷い事ばっかりしてきたね。
謝ってすむ事じゃないけど……ごめんなさい。ちょっとママとパパ、
疲れちゃったから遠い所に行ってきます。
朝起きたらご飯食べる前にちゃんと歯磨きをすること。学校には遅
刻しないこと。夜は早く寝ること。汐姫、体には気をつけるのよ。
いつも元気でいてね。
少し、良いことか悪いことかわからないけど……、佳くんの為にな
ることをします。
最後に、ママとパパの可愛い大切な汐姫へ。汐姫と一緒にいられた
ことがママとパパの宝物です。これからも見守っているので幸せに
なって下さい。最後までろくでもないママとパパでごめんね。じゃ
あ、バイバイ汐姫”

お、父さん……お母さ、ん……いやだ。置いてかないで。ボクも
連れてってよ……。連れてってよぉ……。

「い、や……。いや、だ。置いてか、ないで。お願い……。イヤぁあああああ！」

「うるさいわね。全く品性の欠片もない。そろそろ終わらせますわ。そのまま首を締めなさい」

「やめろ」

暗い、暗いよ。

「はぁはぁはぁ」

何でこんなにも、悲しい。

一人はイヤだ。余計なことを考える。イヤなことを考えてしまう。頭から離れない。呪いを受けたあの日から度々考えてしまう最悪なコト。

「城道、皆……」

何で俺はこんなにも、悲しいんだ。怖い、過去が、未来が、現実が。

いつか皆に嫌われそうで。

いつか皆が離れていきそうで。

いつか皆を忘れてしまいそうで。

こんなに皆に隠し事をしてるんだ嫌われても仕方ない。離れていっても仕方ない。でも、俺からは絶対嫌わないから、絶対離さないから。

そんな自信もあの呪いを受けた日以来なくなった。

もうイヤだ……。

「……助けてよ」

誰か、お願い。何でもするから、何だってするから……助けて。

ガラっ。

急に明るくなる。扉が開き、光が部屋に注ぎ込まれた。

「佳、寂しくなかった？」

「心咲、姉」

光に包まれている着物姿の心咲姉。

眩しい。心咲姉はあの時も眩しかった。助けてくれようとしていたあの時だ。

「ほら、おいで佳。佳にそこは似合わないよ。佳はもう一人じゃないでしょ」

そう言い差し延べられる白い手。その手を掴む為に手を伸ばす。

「出ましょ」

俺の手を掴んだ心咲姉は振り返り半ば強引に俺を引っ張って行った。

眩しいな。外はこんなにも眩しいのか。それに匂いも違う。澄んだ良い匂いがする。

「佳……大丈夫じゃったか、寂しくはなかったか？　おいていって悪かった」

紗弥が申し訳なさそうな顔をして謝る。

俺が悪いのに何で先に謝るんだよ。俺が謝りにくくなっただろ。

だからコイツは嫌なんだ。

「……」

無言で紗弥の横を通り過ぎる。

「……佳、許して、くれるわけは、ないか」

「紗弥、俺も悪かった。ごめん」

面と向って言うのは恥ずかしい。これが俺の今の限界だ。

「佳……、ありがとう」

「うわっ、抱き付くなアホ」

う、後ろからギュッとされたっ、ギュッとされたぁ！

「離せ紗弥」

「そうよ、離しなさい紗弥。城道くんにも抱かれたことないのよ」

「なっ、ななに言ってんだよ心咲姉！」

「佳、柳生城道と恋仲なのか」

そ、そっか。心咲姉の前に城道を彼女役として紹介したっけ。

ってあれ？　さっき心咲姉、城道くんって言った？

「不思議そうな顔ね。城道くんが男の子だってことくらいわかってるのよ」

「うっ、騙したわけじゃないんだけど……、お見合い写真を見せられるのが嫌だったから」

嫌だろ。恋人がいないだけでお見合い写真を見せられるんだぞ、この歳で！

「そのことはいいわよ。お見合いをさせようとした私にも非はあるしね。そんなことより、ホントにまだ抱かれてないのぉ？」
「柳生城道……、不順異性交遊で職員室に呼ばなくてはならぬな」
「呼ぶな！　それにそんなことしてないし抱かれてもない！　城道は仲間だ。恋人じゃない」
「えー、ホントにぃ？」

心咲姉はこうなったらちょっとしつこい。

「ホントだよ」
「じゃあ好きな人とかはいないの？」
「好きな人……」

……考えたことないな。ていうか、人を好きになる権利があると思わない。だって、好きになっても嫌われるだけだから。俺を好きになる人なんて余程の変人だ。もしくは地球人じゃない。

「……いない」
「いないのかぁ。紗弥は紗弥でアレだし、はぁ、私の夢はまだ叶いそうにないなぁ」

心咲姉の夢？

「心咲姉の夢ってなに」
「ふふ、私の夢はね、妹と恋話することなのよ」

……なんか、粗末な小さい夢だな。一応理由くらいは聞いておこうか。

「何でソレが夢？」

「だって幸せじゃない」
「幸せ？」
「そう。笑いながら、時には泣きながら、相談にのったり協力したり。隔てるモノなんか一つもない、ただ純粋に恋話をする。そんな小さな暖かい幸せを私は欲しい」

胸に手を置いて暖かく語る心咲姉。
俺は数分前の自分を悔いた。心咲姉はやっぱり優しい。小さな暖かい幸せが欲しい。そんな心咲姉の夢を粗末と言った自分が嫌になった。
俺達の幸せも含んだ心咲姉の夢は粗末で小さいモノなんかじゃない。小さいけど大きくて暖かく、心咲姉の優しさが滲んでいる夢だ。
だけど叶わない。紗弥はともかく、俺がダメだから。ここでも俺は足を引っ張るんだ……。

「そんな顔しないの佳。佳には佳にしかない魅力があるのよ。城道くんはソレがわかってて一緒にいるんでしょ」
「……ありがと」
「どう致しまして」

可愛いらしく微笑む心咲姉。
今さらだけどよく考えたら俺達は目立っている。だって巫女服に着物にスーツが並んで歩いてんだぞ。こんな奇妙な光景は滅多にないと思う。

「もうこの辺りは通学路じゃな。ウチの生徒も疎らだが目に入る」
そっか……。もう下校の時間か。ていうかやっぱりあの神社に入ると時間感覚が狂うな。まだ昼ぐらいかと思ってた。

「佳、見られてもいいのか？」
「別に気にしない。コスプレか罰ゲームだと思われるくらいだから」
俺だって部活で負けて何度か恥ずかしい格好をしたことある。その格好で学校に行ったこともあるから今さらこんな姿見られたってどうってことない。
「お前は良いのか、学校を休んだ生徒とこんなに仲良さそうに歩いていて」
「別にワシと佳の関係を隠しておく必要もないから大丈夫じゃ」
あっそ。と呟く。
そんなことよりお風呂に入りたい。お風呂に入って体を洗い流したい。今日の嫌な思いと一緒に。それに汗もだ。あそこにいるだけで嫌な汗をかく。ホントろくなトコじゃない。
「じゃあワシは学校に用があるので一度家に戻る。あとは頼んだ心咲姉」
「わかってるわ。佳のことは任せなさい。今日は帰ってから佳と学校の話で盛り上がる予定なんだから」
……やめて欲しい。心咲姉と学校の話で盛り上がる姿が想像できない。
紗弥とわかれて俺と心咲姉はゆっくりと歩きだす。下校する生徒もさっきよりは少し数を増している。
何人かは俺に気付いたのか挨拶をしてくる奴や手をふってくる奴も出てきた。
「人気者なのね。お姉ちゃん嬉しいわ」

下校する生徒を見ながら優しく微笑む心咲姉。
確かに嫌われてはないと思う。いじめとかにもあってないし。だけど人気者とまではいかない。俺はそいつらとは遊んだことないし、最近は誘われたこともない。
それに、

「俺は人気者になんかなりたくない。皆とずっと一緒だったらそれだけで満足だ」

叶わない願いとわかっているのに願ってしまう。
届かない祈りだとわかっているのに祈ってしまう。
どんな暗闇の中にいても光を探してしまうように。
どんな絶望の中にいても希望を探してしまうように。

どうせいつか別れるなら……。
ダメだ。そんなの考えたくもない。とにかく今を強く生きよう。
皆といられる今を大切に生きていこう。

「なぁ聞いたか」
「あ？　なにを」
「柳生達が生徒会の奴らとケンカするらしいよ」
「は、マジで！？　いつ？」
「今日。体育館でだって」
「ちょっ、早く言えよ！　見にいこうぜ」
「ムリムリ。鍵とか完全に閉められてたし、暗幕もされてたらしい」
「マジかよ。くそっ、來優ちゃん見たかったなぁ」
「はぁ、俺汐姫ちゃん見たかった」

ケンカ！？　生徒会と。

「佳、さっきの人達城道くんの名前だしてなかった？」
「心咲姉、さき帰ってて」
「あっ、佳！」

急げっ。早く、もっと早く！
皆強いから無事だとは思うけど……。なんだろう、嫌な予感がする。

大切に、大切に、ただ大切に。やっと見つけた光を喪わないように。皆を、居場所を守れるように。

好きで、好きで、愛している皆を、守れるように。

「なんのつもりかしら柳生。ルールを忘れたわけじゃないわよね」

不満そうに睨んでくる。

僕の突然の関与に驚いたのか汐姫を羽飼締めしていた男の力が緩み、汐姫が床に崩れ落ちた。

ふるふると両肩を抱き震えている汐姫。ガチガチと噛み合わない歯を鳴らしながら、ごめんなさい、と呟いている。

「汐姫は少しメンタル面が弱いのだ」

ニヘラとした笑顔を海里に向ける。

「汐姫……落ち着くのだ。汐姫には僕達がいるのだ」

上着を脱ぎ汐姫に被せる。これで少しは汐姫の体も隠れるだろう。あとは落ち着くのを待つだけなのだ。と言っても時間はかかりそうだけど。

「城道加勢するぜ」

「來優は引っ込んでろ。俺が加勢する」

「おもしれー。俺はまだやれるんだ。俺も交ぜてもらおうか」

「ウチらは遠慮しとく」

「遠慮しとく」

……透麻はともかく來優は傷が酷いのだ。まだ休憩してた方がいいのだよ。たぶん透麻もそれが心配なんだろう。

「貴方達これはケンカじゃないわ。人の戦いに関与したらダメなルールくらい覚えてるわよね？　柳生、いいの？　貴方が関与したらあとは倉本に任せるしかなくなるわよ」

佳は今日は来れない。そんなのわかってる。そして負けるわけにはいかない。そんなこともわかってる。だから僕は汐姫の戦いに関与してはいけない。僕達の居場所がなくなるから。

「透麻、來優……、見ているのだ」
「なっ、城道！」
「これ以上汐姫が傷つくのを黙ってみてろっていうのか！　そんなの俺も來優も耐えれねぇよ！」
「黙って見てるのだ！　透麻と來優の勝ちを無駄にするわけにはいかないのだ」

わかってる。佳はこれない。僕が関与したら相手の不戦勝で僕達の居場所がなくなる。

「やっぱり柳生は賢いわ。話がわかってる。今さっきのは許してあげるから早くそこ退きなさい」
「黙れ」
「っ！」

……でも、佳はそんなことより、仲間が傷つく方が悲しむ。そしてなにより、仲間が目の前でアレだけ傷ついているのを黙って見てられる程僕はおとなしくないのだ。

「柳生わかってるの？　貴方負けになるわよ。そんな汚い女のせいで自分が負けてもいいわけ？」

「黙れと言ったのだ。黙らないとその口……殺すぞ」
「ぅっ……」

海里が後退る。

「來優、透麻、汐姫を頼んだのだ」

汐姫を抱き抱え來優と透麻の所に持っていき汐姫を預ける。

「任せとけ」
「城道、ボコボコにしてやれよ」
「わかってるのだ透麻」

まだ落ち着かない汐姫の頭にポンと手を置く。佳がいつも汐姫にやっている様に優しく頭を撫でた。

「行ってくるのだ汐姫」
「……城道……ごめん」

一瞬汐姫がそう呟いたかのように聞こえた。
皆に背を向け、海里とその取り巻きを睨む。

「柳生、私はもっと貴方は賢いかと思ってましたわ。やっぱり類は友を呼ぶというわね。貴方も同じ猿だったわ」
「しつこいのだ。何度言えば気がすむのだ？　僕は黙れといったのだよ」
「くっ、やれお前達。ボコボコにしてやれ」
「うおおおお！」

一人の男が突っ込んで来る。

その大きなガタイを活かしてタックルをしてきた。

「格の違いがわからないバカは引っ込んでろ」

飛んで来た球を打つように男を足で払い退ける。男の横腹を捕らえた足はそのまま男の体を吹き飛ばした。

「僕が用があるのは海里なのだ。ケガしたくなかったら引っ込んでろ」

取り巻きの男達を睨みながら威圧する。男達はたじろいで、攻めてはこず、じっと僕を見ている。

「海里、僕が女の子は殴れないと思ってるのならそれは大きな間違いなのだ」

男だろうが女だろうが、若かろうが年寄りだろうが……それが僕達の害なら僕は容赦なく殴るのだ。

ゆっくりと海里の方へと歩き始める。

ズキッ！

左胸に強い痛みが走った。表情には出さずあくまでも痛みなど感じてないように歩く。

左胸の激痛。心当たりなら一つある。そしてそれは僕が今日の戦いで一番心配していたことでもある。

昨日の佳との戦いだ。

歩くだけでこの激痛。きっとさっきの蹴りで痛みが増したのだ。蹴るまえまではまだこんなに痛くはなかった。

これじゃ思い通りに体が動かない。

海里一人を殴るくらいなら別に問題はないか。あるとしたらこの取り巻き達を一気に全員相手にすることくらいか。捕まったら終わり。だから一人にあまり時間をかけてはいられない。このままじっとしてくれていたら嬉しいんだけど。

「なに止まってるの？　さっさと行くのよ。命令に背いて困るのは貴方達の家族ですわよ」

「う、くそぉおお！」

海里の言葉で取り巻き達が一斉に動きだした。今度は一人じゃ勝てないと学習したんだろう、僕を囲むように円になった。

コイツらは腐っても格闘技をかじってる奴等なのだ。個々の能力は勿論、海里の元で下僕として働いている分連帯感もある。今の僕じゃやはり少しキツいのだ。

せめて無我の境地が出来れば……。

ダメだ。痛みで気が散る。まだまだ修行が足りないのだ。

「どうしようかな……」

とにかく来た者から叩く。

「う、うおおおお！」

正面の奴が二人、大声を出しながらタックルをして来る。一人は上半身、もう一人は下半身狙いだ。少しタイミングをずらしているから最初の奴を避けてももう一人が来るってことか。

甘いのだ。

一人目のタックルをスレスレで避ける。そして二人目のタックル。下半身を狙っている為か普通のより腰を低くしている。
このタックルは避けない。逆に迎え討つ。
低くしてるせいで当てやすくなった顔に蹴りを入れた。
タックルでの相手の勢いを利用した攻撃。軸足がしっかりとしてないと僕が後ろに飛ばされるけど、毎日の鍛練で生憎こういうのは慣れている。
男はそのまま床に倒れて息を荒げている。
一人終了、と。

「次は誰、っ」

しまった！
背後の気配に勘づいて後ろを振り向く。遅かった。振り向けたのは首だけ。体は羽飼締めされて身動きが出来ない。
そう言う作戦か。最初の二人が大袈裟に声を出しながら突っ込んで来たのは注意を自分達に向ける為。後ろで静かに忍び寄る仲間に気付かせない為か。
困ったな。こんな早く捕まるなんて。

「華奢だな。この体のドコにあんな力があるんだ」
「ただ筋肉をつければいいってものではないのだよ筋肉バカ」

頭を思いきり後ろにふる。バキっと鈍い音と共に一瞬相手の腕の力が弱まった。
今だ。勢い良く体を捻り相手の腕から逃れる。
少し頭突きをした後頭部が痛いがまぁ逃れる為の犠牲なのだ。

「ぐっ、く、そ」

鼻を抑えながら男が腕を伸ばしてくる。
この軌道はヤバいッ！　避けないと！

くら……。

視界が揺らぐ。一瞬だけだが目眩がした。
しまった。さっきの頭突きか……。目眩は一瞬だけ。でも戦いではその一瞬が命とりになる。焦点のあった視界が真っ先に映したのは男の手がもう数センチ先まで迫っているという事実。
避けられない。
男の手が僕の左脇から胸にかけてを掴んだ。握力が一〇〇はありそうな男の手。その手で思いっきり左胸を捕まれる。

ミシミシっ。

「ひぐっぁ！」

骨が軋む音が鳴る。襲って来るのは激痛。
く、そ。このままやられてたまるか。

「なんだ？　ここが痛いのか？」
「ぃぎっぁあああああ！」

うぐっ……。

「どうしたんだよ城道。城道があんな奴等なんかに負けるわけが」
「城道、まさかっ！」
「まさかってなんだよ來優」
「昨日の佳とのアレが響いてんじゃ」
「あの最後の相打ちのやつか」

「大丈夫か城道！」

來優と透麻が、心配してる声が聞こえる。バカか。心配かけちゃダメなのだ。

「ハァ、ハァ。だ、大丈夫なのだ……心配、無用、なのだ」

「さっきはよくも鼻をやってくれたな。オラっ！」

「ぅっい〝ぁあああああああ！」

さっきよりも力を入れる男。

ヤバい……、痛みのせいで、力が入らない。

「ふふ。どうやら怪我してるみたいね柳生。ほら、ボサっとしてないで貴方達もやりなさい。二度と私に逆らえないようにするのよ」

命令され僕に近寄ってくる取り巻き達。

「ほら俺がまた羽飼締めするから、あとは好きにしな」

そう言って掴んでいた手を離し、羽飼締めをする男。

反撃したかったが力が出ない。痛みのあまり涙が出てるのか視界が滲みまとも前が見えない。

く、そ。

「負ける……わけには」

「もう諦めろよ」

ドスっ！

「かっは……」

「城道！」
「おっとここは通さねぇ」
「くっ、そこ退けよ巳剣」
「通さねぇっつったろ」

だ、ダメな、のだ。

「と、うま……きちゃ、ダメなのだ」
「城道、仲間がやられてんのを黙って見てられるわけないだろが」
「私もだ！」

ここで、暴れたら……居場所が、

「佳の居場所が、なく、なるの、だ」

大事な、僕達の居場所が。

「なくならねぇよ。コイツら全員壊して脅せば済む話しだ」
「だから通さねぇっつってんだろ」
「くっ。通さないっつうなら力づくで通る」
「私も手伝うぞ透麻」
「おもしれー。二人同時にかかって来な」

ぅっ……、ダメ、なのだ。

「戦っては、ダメなのだ」

みん、な。

「そういや俺前から気になってたんだけど、柳生ってホントに男なのか？」
「ああ、このさい確かめて見るか」
「ぅ、ぐ」

正面の男に胸倉を捕まれる。男は胸倉を掴むと一気に手を下に振り下ろして服を破った。
露になる僕の体。

「な、なんだこれ」
「こ、こいつこんな体で」

男達の目が左胸に釘付けになる。ボコっと赤黒くへコんだ僕の左胸。小さな拳型の痕が出来ている。

「ば、化物ですわ。あの身体でよく立っていられましたね。普通なら痛みで立てないはずですわよ」
「ハァ、ハァ……」

……体が熱い。
視界の角の方で來優と透麻が巳剣にやられているのが見えた。
ダメ。喪(な)くなる。
自然と頬から涙が出てきた。痛いからじゃない。熱がでて苦しいからでもない。悲しいから。

「ぅくっ……ぐすっ」

瞳から滲みでる涙は溢れ、静かに頬を伝う。一筋、二筋と、溢れ流れる滴は止むことを知らない雨の様だ。

情けない――守れなかった。

悲しい――約束を破ってしまった。

「情けないわね男のくせに。顔も女だし、これではもう本当の女みたいっ」

ドスッ。

微かに聞こえた鈍い音。

ブシュァアア。

噴水の様に何かが吹き出る音。その音で聞こえずらかったけどカランカランと何かが落ちる音もなった。

「え？」

海里の声がした。それはあまりに呆気なく素頓狂な声。何が起こったかわからないような声。

「ぅ、キャアアアアアアア！」

素頓狂な声は悲痛な叫び声になって体育館に木霊した。

「やったよ、佳様、皆。邪魔者は消したよ」

汐姫の声がする。

消したってまさか!?

「ゆ、許さない、許さない!　蒼空!　よくもぉおおお!」

どうやらかすり傷みたいだ。海里は背後の汐姫の首をしめると思いっきり地面に倒した。

「アハハハハ。邪魔者は消したよ。これでまた皆と一緒に、いられ……る」

「死ね!　死ね死ね死ね死ねぇえ!」

「オイ!　やめろ!」

「ハァハァハァ、なに?　邪魔するの巳剣?」

「それ以上絞めたら本気で死んじまうぞ」

「死ねばいいんですわこんな奴。刺したのよ、刺したのよ私を!」

「落ち着け海里」

「これが落ち着いていられるの!?」

バシっ!

「落ち着け海里。お前が人殺しになったら会長が悲しむ」

「あ、ぅ」

頬をぶたれたせいか、それとも会長と聞いたせいか少し落ち着いた海里。

汐姫は!?　透麻は來優は!?

「み、んな……」

皆倒れてる。

霞んで滲む視界でも何故かハッキリと確認できた。僕達の絶望的な状態を。

佳に、佳に……。

「ぐすっ……」

なんて、言えば……。

「はぁ、泣きたいのはこっちですわ。乙女の肌を傷つけられて……、会長に嫌われたらどうしてくれますの？」

グイッと髪を捕まれる。

涙で見えない海里の表情。

もう、ダメだ。守れなかった。守って貰ってばかりだった。恩も返せない。佳に救って貰った絶大な恩も僕は返せない。

「うぅ……ぐすっ」

唇を噛み締める。悔しくて。

涙が溢れる。悲しくて

心から自分を嘲笑する。情けなくて。

胸の中でキミを想う。愛しくて。

「……ごめん」

消え入りそうな儚い声。大切な佳に向けての言葉。

ホントに、ごめん。守られてばかりで、救って貰ってばかりで…
…ごめん、なのだ。

何もない、無限の無味乾燥の地獄の中で、唯一僕を救ってくれた輝き。
暖かさもわからない、冷たさもわからない。
喜びもわからない、悲しみもわからない。
誰も教えてくれない、誰も示してくれない。
そんな人達の中でキミだけは教えてくれた。
キミだけが救ってくれた。
色のない世界、白と黒も、光も闇も、何もない僕の世界にキミは色をつけた。キミから色は広がっていった。
暖かな色。儚いキミ。僕は一生それを守ると決めた。僕は一生キミを守ると決めた。

何もない世界にモノが溢れだす。嬉しくて涙が溢れでた。
大切で、大切で愛しい僕達の佳。
佳を守る為ならこの命投げ出す覚悟はできている。
佳を守れないくらいならこの命なんかいらない。
佳が喜ぶのなら僕は何でもしよう。
佳が悲しむなら僕はどんなコトをしても喜ばそう。
佳の笑顔が好きだから。心が暖かくなる。

佳の悲しむ顔も好きだけど、見ると心がギュッと締め付けられる。
だから、佳。笑っていて。いつだって笑っていて。佳の笑う場所を守る為ならば……僕は……。

「……負けら、れない」

羽飼締めしている男を体を曲げて投げとばす。

「ぐわっ」
「まだそんな力があるのかっ！」

海里の取り巻き達はまた僕を取り囲む。
芸がない。同じ手は二度もくらわない。

「ぐっ」
「がっは」

不思議だ。胸の痛みが全然ない。不思議なくらい体が軽い。そしていつもより相手の動きがわかる。三六〇度、相手の動きがわかる。
無我の境地、ではない。無我の境地よりも上。さらに上。

「な、なんですの。人間じゃ、ない。ば、化物ですわ」

化物……。別にそれでもいい。佳を守れるならなんにでもなって

やる。

「な、なにしてるのクズ共。早く倒しなさい！」
「お前の取り巻きはもう動けねぇよ」
「巳剣！　貴方でもいいわ、早く倒して」
「ハっ、俺は最初からそのつもりだよっ！」

巳剣のローリングラリアットを屈んで躱す。

「流石柳生だな」

間髪を入れずの踵落とし。だけど、今の僕には遅い。
踵落としを横に避けた。
避けた所で意味はなかった。巳剣の踵は床にはつかず、そのまま軌道を変えて横薙ぎの蹴りに変化した。
こんな変則蹴りを佳以外で出せる奴がいるとは……。
そう思いつつやってくる足の脛を肘で迎え打った。

バキッ！

「ぐあっ！」

一瞬痛みで怯む巳剣。それを逃さない。巳剣の顎目掛けて掌打を打つ。
うまい。当ると同時に後ろに飛ぶことで衝撃を和らいだ。けど、ダメだ。巳剣はもう動けない。脳が揺らいでまともに立てないだろう。
双子と元生徒会長は論外としてあとは海里だけ。

「ひっ、来るな！　誰か私を守りなさい！」

あとは、海里、だけ……なの、だ。

バタっ。

将来の夢。小さい頃先生に聞かれ皆恥かしながら答えていた。

來優はケーキ屋さん。透麻は世界征服。汐姫は両親みたいな立派な社長。

皆夢があって凄いなと思った。恥かしくてホントのことを言えなかった子もいるだろうけど、皆夢があった。

『城道達とずっと一緒にいたい』

小さいくせに妙に大人じみた夢。佳の夢だ。一人だけそんなことを言った佳を僕達以外の皆が笑った。

透麻達は何を思ったかわからないけど、僕には佳の夢は不可能だと思った。不可能で愚かな夢。そう思った。

でも、笑えなかった。バカに出来なかった。何でかはその時はわからなかったけど、今なら……。

『城道くんの将来の夢はなに?』

『僕の夢は……』

部活存続試合～負けられない勝負？　佳

「ハァハァ……」

体育館の扉を引く。どうやらホントに鍵をかけてるみたいだ。ガチャガチャと鳴るばかりで一向に開く気配がない。

鍵。今度夜侵入しようと思ってつくっていた体育館の合鍵。確か財布の中に――あった！

ガチャリ。

鍵を差し込んで回す。確かに開いた音がなった。

一息もつかず思いっきり扉を開いた。

ガララっと勢い良く音を鳴らしてスライドする重々しい扉。開けると目の前には暗幕が閉められていてソレも思いっきり開ける。

夕焼けの光が俺を後ろから支える。体が崩れ落ちそうな程の衝撃的な惨状が俺の脳を支配した。

透麻、來優、汐姫、城道……。

悲しみと怒りで煮えくり返る心。

赦さない。絶対に許さない。

血を流し倒れている透麻と來優。

下着姿にされ男達に晒されたであろう倒れている汐姫。

そして、涙で少し目が腫れていて倒れている城道。

バカげている。ふざけている。

こんな屈辱は初めてだ。

こんな悲しみは初めてだ。

こんなに腹がたつのは初めてだ。

「俺の仲間になにしてんだぁ！」

殺気と怒気が混ざった叫び。

生徒会も既にボロボロみたいだ。さっきので戦意喪失している。

「……貴方と戦うのは会長ですわ」

「うちらじゃないしね」

「そうだしね」

悔しいけど今の俺じゃコイツらに勝てない。

ホントは悔しいなんてもんじゃない。腹がたつ。生徒会にもそうだけど、何より自分に腹がたつ。

一緒にいて戦うことも出来なかった。

一緒にいて痛みを共感することも出来なかった。

なにより、やり返すことも出来ない。そんな弱い自分に腹がたつ。

今日じゃなかったらできるのに。

やっぱりいつも俺は足を引っ張る。俺が皆と出会ってなかったらこんなことにならなかった。透麻や來優が傷つくことも、汐姫が過去の傷を掘り返されることも、城道が涙を流すこともなかった。

時々思うんだ。俺があの時仲間に誘わなければ皆はもっと普通の人生を歩めたかもしれない。友達がいっぱい出来て、俺に振り回されることなく大勢で笑って、傷つくことなく幸せに過ごしていたかもしれない。俺と出会わない方が皆幸せだったのかもしれない。そんなことを思うんだ。

元々不純な動機で皆に声をかけたんだ。ホントは誰でもよかった。

俺はとことん最悪だ。

「……ふっ、おもしろいなお前」

「……誰だ」

「アッシは皆からマッキーって呼ばれている。元生徒会長じゃ、まぁよろしゅう頼む」

なんだコイツ？　銀髪で後ろに一つの三つ編み、碧眼の男。変な奴だ。でも関わりたくない。俺の直感がそう叫んでる。コイツは苦手な属性だ。そう、アイツみたいな。

「生徒会のボスだ。要するにお前の敵。わかったか？」

そう言いながら近付いてくる。そうかコイツが一番上か。コイツを叩けば……。

「ん？　お主まさか……ふっ、ホントにおもしろいな」

人の顔や体を吟味しやがって……気持ち悪い奴だな。

「海里引きあげるぞぃ」
「へ？　な、なんでですか？」
「この勝負はアッシらの負けじゃ。あのバカが来ないから倉本の不戦勝じゃぞ」
「なっ、会長は来ますわよ！」
「時間ぎれじゃ」
「くっ……」
「早くしないとおっかないのが来るぞぃ」
「……いつか、必ずいつか潰しますわ」

そう言って生徒会の奴等は倒れている仲間を一人引きずりながら出ていった。

一人元生徒会長だけが体育館に残った。

「お前は行かないのか？」
「……アッシはこやつらの後始末をしなきゃならんからな」
倒れている取り巻きを指差して言う。
「そうか……」
右手に力を込める。コイツ一人なら今の俺でも一発ぐらいなら！
そう思い元生徒会長の頬に拳を叩き込む。
「ふっ、遅いのぉ。姉とは比べモノにならぬ程実力差があるのぅ」
もみもみ……。
「ふっ、どうやらこっちの方も姉とは比べモノにならないのぅ。だから男としてやっていけてるわけか」
「言いたいことはそれだけか？　さっさとその手を離せ」
もう一発殴りかかるけど、それもあっさりと躱された。
「ふむ、胸を揉まれてもその落ち着きぶり、男じゃのぅ」
「バカにするな。そんなことより俺はムカついてんだよ」
「……まぁ今回は痛みわけじゃな。こっちも怪我人が出たんだし……さぁて、じゃあこの男達を口封じするか。お主は早く体育館から出たほうがいいぞぃ。もう少しで超厄介な奴がくる」
……コイツを殴りたいのはやまやまなんだけど……、今は城道達の方が先だ。

「……覚えとけよ」
「アッシは可愛い女の子の名前は忘れないぞ」

……コイツ、俺のこと知ってんのか。そういや紗弥と比べモノにならないとか言ってたな……。この学校で俺の正体を知ってて俺と紗弥の関係も知ってる奴がいるなんて。コイツもいつか……。

「ふむ、安心するのじゃ。こやつらにはお主のことは言わぬよ」
「……」

信用できない。城道達を傷つけた奴らのボスだ。そんなこと信用できる筈がない。

「じゃあまたな。またいずれ会うじゃろう」

「ぐすっ……ひくっ」

あれ？　佳が、泣いてる？　何でだっけ。あー、そっか無くなったんだ。

ごめん、佳……守れなくて。

「……無茶、しないで……ぐすっ」

あははは……、何か佳がそうして泣いてるとホントの女の子、みたいなのだ。

「……ひくっ」

「よ、し……」

佳の髪に指が触れる。

佳の顔が上にあるってことは僕は寝てるのか。いい香りもする。

それになんかふかふかなのだ。心地いい。優しい。この心地よさが永遠に続くと思ってたのに……。

「ご、めん……佳」

一筋、微かに暖かい涙が僕の頬を伝った。

『僕の将来の夢は色のある世界にいたいことなのだ』
『なんだ、じゃあ俺と同じだな』
『へ？』
『だって、色のある世界にいたいんだろ？　俺達がずっと一緒だったら色が消えることはないよ』
『……そう、なのだ？』
『そうなのだ』
『あ、真似するななのだ』
『あはは』

そっか……、僕と佳が求めているモノは同じなのか。

『ずっと一緒』

幸せの言葉。それが僕の夢なのだ。笑いたければ笑えばいい。誰も実現したことのない夢。僕達なら実現できるのだ。
――そう、信じてる。

「……ん」

ここは、保健室？　あれから僕は、気絶したのか。確か來優や汐姫や透麻が皆倒れて……っ！

「みんな！？」

ズキっ。

酷い頭痛がした。勢い良く起き上がったのがいけなかったのだきっと。

「おはよ」

「あ、おはよ……なのだ」

平然と椅子に座りカップラーメンを食べてる佳。あれ？　なんなのだこのゆったりとした空気。

「汐姫も透麻も來優もまだ寝てる。城道もまだ寝てろ。体、痛いんだろ」

確かに痛い。起き上がる時は頭痛のせいで気にならなかったけど、腕を動かすだけであちこちが痛む。でも、今はそんな場合じゃないのだよ！

「佳、部活がなくなったのだ……、守れなくて、ごめん」

「あー、そのことなら大丈夫。部活はなくならないよ。こっちの勝ちだから」

え？　生徒会が負けたのか？　誰に、って言っても佳しかいないか。でも、佳何で来れたのだ？　今日は来れない日じゃ……。そして何故か巫女服だし。

「……城道」

ズズー。

佳がラーメンを食べる音。何か和やかなのだ。

「何か勘違いしてる」

「勘違い？」

「そ、勘違い」

ズズー。

「俺が大事なのは城道や汐姫や來優や透麻。部活じゃない」

……。

コトっと佳がラーメンを長机の上に置いた。

「部活はなくなったらもう一度作ればいい。でも、みんなの代わりはいない。部活がなくなることより、みんなが傷つく方が……悲しい」

「……ごめん」

「ん、わかればいい」

佳はまたラーメンをとると食べ始めた。

確かに部活はなくなれば作ればいいかもしれない。でも、僕は今日傷ついたのを無駄だとは思わない。だってこの傷は大切なモノを

守ろうとして負った傷。僕は今日の出来事を忘れることはないだろう。みんなで頑張って守る為に負った名誉の傷なのだから。

僕は今日の出来事を忘れるわけにはいかない。だって大切なモノを守れなかった忌むべき傷なのだから。僕は今日を機に成長しなければならない。守れるように。このままじゃいけないのだ。もっと強くならないと。

「ま、まぁ……その」
「ん？」
「守ろうとしてくれたことは……嬉しかった」

カップラーメンの容器で自分の顔を半分隠しながら言う佳。
あはは、なんか嬉しいのだ。

「佳ー！」
「佳様ー！」
「うわっ」

來優と汐姫が佳に飛び付いた。ホントに飛び付いたのだ。自分が寝ていたベットからニメートルは離れている佳のトコまで。

「お、起きてたのか!?」
「佳ー、ごめん。私も佳が大事だよ！」
「佳様ぁ、心配かけてごめんなさい。ボクも佳様が大事ですー」

涙を溜めながら叫ぶ來優と汐姫。

「バカかお前らは。一々抱き付くことないだろ」

「透麻も起きてたのだ？」
「ああ、さっきな」

頭をがしがしと掻きながら歩いて佳のトコまで行く透麻。
透麻も何だかんだで佳のトコまで行くことは來優達となんら変わらない。僕も行きたいんだけど……、いたたた、本気で痛いのだ。まだちょっと歩けそうにないのだよ。

「そんなこと言って透麻もホントは抱き付きたいんだろぉー」
「そうだよ透麻の変態」
「何で変態になんだよ！」
「あ、抱き付きたいって言うのは否定しなかった」
「佳様に抱き付きたい気持ちは良くわかるけど……なんか犯罪だよ」
「はぁ、もう意味がわかんねぇよ」

透麻は照れ屋なのだよ。だから案外本当に……。

「おはよ透麻」
「ああ、おはよう佳。それと、ありがとな」

やっぱり照れ屋なのだ透麻は。

「それはそうと……ん」

両手を広げ透麻を見つめる佳。目で抱き付いても良いよと言ってる。気がする。

「ちょっ巫女服姿でそんなことすんな。なんか犯罪的だ」
「うわぁ変態だ」
「佳様変態ですよ透麻は」

「なんでだよ！」

「ふーん、変態」

「なっ佳まで！」

あはは、相変わらずの弄られっぷりなのだ。

「じゃあ皆起きた見たいだから保険医呼んでくる」

寝とけよ、と一言言い残し佳は保健室を出た。次第に聞こえなくなる佳の足音。完全に聞こえなくなってから透麻が僕のトコまで歩いて来た。

僕のベットに座る透麻。なぁ、と話をきり出す。

「佳、目が少し腫れてたな」

透麻の言葉に汐姫と來優が暗い顔をして俯く。皆どこかで気付いてるのだ。佳が泣いてたってことを。泣かせてしまったってことを。

「私達……守れなかったんだな。佳が来ないとホントになくなってたんだな」

「佳様はああ言ってたけど守れなかったことには変わらないよ」

掻き消えそうな声で呟く。蝉も鳴くのを止めた時間。学校に残ってる生徒も僕達だけのとても静かなこの空間。來優と汐姫の静かな声は十分と僕の胸に響いた。恐らく透麻の胸にも。

「……僕達は強くならないとダメなのだ」

もっと、もっと強く。

「ああ。約束をもう二度と破らない為に」

佳をこれ以上悲しませない為に。

幸せ　ナツ

カツ、コツ……。

外はもう暗い。不気味なまでに静かな廊下を歩く。

ムナクソ悪い。体育館なんか行かなければよかった。

『来たか超厄介な奴』

『失礼だな。私からしたらお前の方が超厄介者だ。で、倉本達は何処にいる』

『倉本？　何のことじゃ。この惨状を見てわからないわけではなかろう。生徒が暴れてると報告を受け止めにいったが少し遅かった。見ての通りこやつらがそのケンカの張本人達じゃ』

『……くだらない嘘を』

『嘘、とな。なら聞くが嘘だと言う証拠はあるのか？』

『……』

『そう言うことじゃ。お引き取り願おうか』

『そういえばそちらのじゃじゃ馬が私のトコに来たぞ。何やら戦いの邪魔をしないで欲しいと頼まれてな』

『……あのバカ』

『断ったら急に襲って来たんで……』

『なにをした』

『全治二週間ってトコかな。生徒会室に捨てて来たよ』

『……』

『復讐、しないのか？』

『ふっ、お主とやってもなんら得はない。それに先に手を出したのはうちのバカだろ。自業自得じゃ』
『……』
『じゃあ風紀委員長が来てくれたことじゃし、あとのことは頼むかのぅ』
『ふんっ』
『ああ、そうじゃ……倉本佳、あなどらん方がいいぞぃ。アレはお主と似てる。そしてお主より辛い孤独を背負っておる』
『……ふん』

くえない男だ。何を考えてるのかわからない。
私より辛い孤独だと。何を言う。あんなに日頃幸せそうに笑っている奴が孤独なんか知ってるわけがない。私と似てる筈がない。

カツ、コツ。

考え事にふけりながらも足を進める。目指しているのは保健室。恐らく倉本はそこにいる。仲間を手当てする為に。
あの男のせいで余計な時間を浪費したが、まだいるだろうか。いなかったらその時はまた明日にすればいい。いたら倉本の仲間ごと矯正すれば良いだけだ。無理矢理にでも。
羽路は帰らせて正解だったな。自分の気になる人が目の前で傷つくのは耐えられることではない。あの子は見えないけどそう言うことは感知できる。私もあの子の傷つくところを見たくない。

カツ、コツ……。

保健室の明かりが見えて来た。誰かいる見たいだ。保険医はこの時間は職員室で教師と談笑しているからたぶん違う。他の生徒ってこともまずないだろう。残る可能性は……。

「私達……守れなかったんだな」

この声。どうやら当りのようだな。

保健室に着々と近付いていく。顔つきが変わるのが自分でもわかった。人を傷つけたくない。今さらそんなことを思ってももう遅い。取り返しのつかない程私は人を傷つけてきた。

旗じゃ人は倒せない。人を倒すには剣を持たないとダメだ。どんなに旗を掲げても勢いのついた敵は止まらない。仲間が傷つくのが怖かったら敵を傷つけるしかない。戦わずして得る平和などないのだから。

「僕達は強くならないとダメなのだ」

……強くなる。何の為に。決まってる。人が強くなろうとするのは自分の力を誇示したいが為だ。

「ああ。約束をもう二度と破らない為に」

……約束を破らない為に。
保健室のドアノブに触れようとしていた手を止める。踵を返して元来た道を辿る。
約束の為に強くなる。そんな人がいたとは。人は汚い。そんなこと十分わかってる。利用し、裏切る。それを繰り返して人は生きる。なのに、この人達は……。

「どこが孤独だ。幸せじゃないか」

やる気が失せた。柳生達に感謝するんだな倉本。

「ん？」
「どうしたんだ城道」
「……いや、たぶん気のせいなのだ」

焦りなのだ　城道

ツクツクボーシ、ツクツクボーシ。
ミーンミンミンミーン。

朝七時。良いぐらいの温度の中、僕は道場の真中で座禅をしている。外では鳴き声でわかるようにツクツクボーシとミンミン蝉が賑やかに合唱している。
昨日の自分の醜態。痛みのせいだと自分に言い訳しながらろくに動けなかったあの勝負。情けない。
でも最後の取り巻き達を倒していったあの変な感じ。あの感じをいつでもできるようになったら僕は更に強くなれるのだ。
無我の境地を上。それを出せるようになるのが今の僕の課題なのだ。
どうすれば出せるのか。六時からずっと座禅をして考えてるんだけどわからない。ただ闇雲に無我の境地をしてれば出来るってわけじゃないのだ。それはただの時間の無駄なのだ。まずどうしてあの状態になったかを考えるのだ。守りたいと強く思ったから。確かにそうだけど……。

「あーもう！」

全くわからないのだ。

「おい城道。來優ちゃんが来たぞ」
「ん、ああわかったのだ」

もうそんな時間か。結局何も掴めなかったな。そうだ父上に聞いてみればいいのだ。

「父上ちょっと聞きたいことがあるのだ」

「お、なんだ珍しいなお前が聞きたいことがあるなんて」

「ちょっと行き詰まって……。無我の境地の更に上にはどうやって行けばいいのだ」

「……何をそんなに焦ってるのか知らないがお前にはまだ早い」

「早い遅いじゃないのだ。僕はもっと強くならないといけないのだ！　闇雲に練習しても時間の無駄なのだ」

もっと強くならないと。もっと早く。

「はぁ。じゃあ一つヒントだ。無我の境地の上が無我とは限らない」

無我の境地の上が無我とは限らない？　どう言うことなのだ。

「城道、何を焦ってるのかしらないが、この世に無駄なモノなんかない。道端に咲いてる花にも、人間が造ったコンクリートにもそこに在る意味は存在する。お前にそれがわからないわけじゃないだろ」

……。

「早く準備をしなさい。來優ちゃんが待ってる」

そう言うと父上はポリポリと頭を掻きながら出て行った。

無駄なモノはない、か。

「ちょっと焦りすぎなのかも知れないのだ」

「お待たせなのだ」
「ああ。昨日の傷はもう大丈夫か」
「日常生活に支障はないのだ」

痛くないと言ったら嘘になる。でも我慢出来ない痛みじゃない。だから今の言葉が最適なのだ。

「なぁ城道」
「ん、なんなのだ」
「無我の境地、私に教えてくれないか」

來優も強くなろうとしてる。やっぱり昨日のことは僕達の心に焦りを生んだのかも知れない。

「焦ってはダメなんだってわかってる。だからゆっくりでもいい。とにかく私はもっと強くなりたい」
「わかったのだ。じゃあ道場の時間に少しだけ教えるのだ」

こういうのは自分で出来るようになった方がいい。人に全て教えて貰ってては意味がない。

「しっかし暑いなぁ」
「さっきまでは良いぐらいだったんだけど」

太陽がギラギラと輝いている。蒸し暑いのだ。

「今日は終業式だな。明日から夏休みかぁ。楽しみだなぁ」
「うん。楽しみなのだ」

夏休みといえば学生のオアシス。長い休みが続く素晴らしい日々なのだ。そして夏休みといえば！

「今年もやるのかな」
「佳のことだから勿論やるのだ」
「楽しみだなぁ合宿」
「今年は何処に行くのかなぁ」

去年は山だったなぁ。透麻と來優が遭難しかけてちょっと大騒ぎしたのだ。

「あー、楽しみだなぁ」
「まぁいつ来るのかわからないんだけど」

いつもと同じように合宿も当日の朝早くに唐突に来るから僕達は夏休みが始まったら予め合宿の準備をしておくのだ。そうしておけば佳がいつ来ても準備に困らないのだ。

「佳今日は来るかな」
「わからないのだ」

まぁどうせ終業式だし午前中に終わるからあんまり来ても意味な

いのだ。

今日佳が学校来てなかったら午後、佳の家に行ってみようかな。

「透麻ぁ、アンタ学校は行かないの？」
「行かねぇよ。今日は行く意味無いから午後まで寝んだよ」
「あっそ。じゃあお母さん仕事行ってくるから、ご飯は適当に何か食べといてね」
「ああ」

バタン。

玄関のドアが閉まる音がした。訪れる静寂。蝉の鳴き声が窓の外からガンガンに聞こえて来る。普段ならうるさくてウザったいけど今の俺には関係ねぇ。夏だからって気合いが入ってる太陽も俺の部屋のエアコンには勝てない。涼しい。飲み物、菓子、つまみ、カップラーメン、ポット完備の完璧な俺の部屋。午後まで時間はたぁっっぷりある。

「ふっふっふ」

俺は今日の為に今まで頑張って来た。待ってたぞ。そう、今日は待ちに待った夏休み！

「今日から夏休みじゃあああい！」
（※ホントは明日から）

終業式？　ハッ、んなもん行くわけがないだろ。だらだらと長い話聞いて、課題やプリントを配られて、通知表を配られる。みろ、

何処に行く意味がある？
そうさ。俺の夏休みは普通の奴等より一日早く始まるんだよ。

「もうっ夏休み最高ぉー」

さぁ、何をしようかなぁ。やっぱりここは家に一人っきりじゃないと出来ないことを。

「ねぇ透麻」
「ん、なんだ」
「ボク強くなりたい。ケンカの仕方を教えて」
「んー、そんなこと言ってもなぁ」

ケンカに仕方なんか……、

「ってなんでいんだよ！」
「丁度透麻のお母さんが出て行くトコだったから入れて貰ったの」

あんのクソババァ、せっかくの俺の楽しみを台無しにしやがってぇ！

「教えてよ透麻！　ボクはもう……足手まといはイヤだ」

……。

「……何で城道や來優に頼まないんだ。アイツらのならちゃんとした型のある奴だし教わりやすいだろ」
「ダメなんだよそれじゃ。ボクは師匠に一応教えて貰ったんだけどそう言うのはからっきしダメだったんだ。向いてなかったんだよ」

向いてなかった。汐姫はそんな言葉でくくり付けたけど、かなり努力した結果がダメだったのがわかる。それほどまでにそっちの才能はなかったんだろう。

「だから透麻見たいな目茶苦茶なのじゃなきゃダメなんだ！」

「め、目茶苦茶って……」

まぁ、でも仕方ないか。昨日のは確かに俺もショックだったし。強くなりたいって気持ちはいやほどわかる。

「汐姫、ケンカに仕方なんかないんだ。とにかく殴る蹴る。先に倒れた奴が負け。ケンカなんてそんなもんだ」

「……」

「でもな、強くなりたいんだったら別だ。強くなるなりかたならある」

「ホントっ！？　どうすればいいの」

「んーとなぁ、先ずは自分の長所を知ることかなぁ。俺なんかほら、知っての通り変な目と変な脳だろ？　だから周りがどう動いてるのかわかる。相手の位置がわかるってことは大事なことだからな」

まぁ、それが短所でもあるんだけどな。

「汐姫の長所は、気配を消すことと足、かな」

「うん」

「ってことはだ、先ずは先手必勝だ。相手より先に絶対に相手を殴れ。それが大事だ。あとは適当だな。思ったことをすればいい」

「え、そんだけ？」

そんだけって言われてもなぁ。実際俺もしたいことしてるだけだしな。

「おう、それだけ。ケンカは実戦経験が一番大事だからな。まぁイメトレでもしとけ。俺は寝る」

やることも汐姫が来たからなくなったし。午後まで寝るかな。

「ありがと透麻。ボク頑張るよ」

「おう。ムリはしないようにな。あと実戦っつっても無暗にケンカを売ってたらただのクズだぞ」

「わかってる。ボクはただ相手を傷つけたいんじゃない。佳様を守りたいんだ」

「……守ろうな、今度こそ。じゃあおやすみ」

実は洗わないでそのままの日も……　佳

『鬼が強くなる日が訪れる。それは表が裏に、裏が表に。光が闇に、闇が光に変わることでもある。そしてその間はお前には特別な力が手に入るが今までの力を失う。鬼が強くなる日、お前の存在意義はその日にある』

俺の存在意義、存在理由、俺はそれだけの為に産まれて来た。

『お前はそれだけの為に産まれて来たんだ。家族の温もり？　友達？　そんなものお前には必要無い。お前に必要なのはただ鬼に耐えられる精神力のみだ。いいか、お前は私達以外には誰も必要としていない。いなくてもいい存在。そして私達にはいなくてはならない存在。お前を最も必要としているのは私達だ。私達の期待を裏切るなよ』

……はい。父さん、母さん。

「佳、朝よ起きなさい」
「うー、ん。わかった」

心咲姉の声で目を覚ます。最悪な寝覚めだ。アイツらが夢に出て

くるなんて。

「あら、呆気ないわね。お姉ちゃんとしてはなかなか起きない妹をあらゆる手を使って起こしたかったのに」

……。

「あらゆる手ってなに」

「それは、ねぇ」

両手の指をわきわきと動かしながら怪しげに笑う心咲姉。

何をする気だったんだろう。想像したくないな。

「今日は何して遊ぶ？　私はなんでもいいわよー。とにかく一緒にお風呂入る？」

「遠慮しとく」

そっか……、学校行けれないんだ。別に学校が好きなわけじゃない。ただ、城道達と会えないんだなぁって思うと少し寂しい。昨日保険医呼んで俺は帰ったんだけど、城道達は大丈夫だろうか。透麻はもう体は大丈夫だろうか。來優は女なんだから傷が残らないといいな。汐姫の心の傷は癒えただろうか。心配だ。城道は……、城道に限ってないとは思うけど、泣いてないだろうか。皆のことが心配だ。皆に会いたいな。

「佳……」

心咲姉が心配そうな声を漏らす。バカ。心咲姉に心配かけてどうするんだ。

「……今日は依頼人がいないから城道くんと遊んでも大丈夫よ」
「いいよ。今日は家で大人しくしてる。心咲姉に心配かけるわけにはいかないから」
「そう、わかった。じゃあ一緒にお風呂入ろっか」
「いや、それは遠慮しとく」

一緒に風呂に入ることしか頭にないのか。別に心咲姉と二人っきりですることってないしなぁ。寝るか。

「心咲姉、俺暫く寝るからお腹減ったら冷蔵庫に入ってるもの適当に食べていいからな」
「なに、寝るの。つまんないなぁ。じゃあ私は掃除でもしておくわ」

あまり散らかってない俺の部屋を見渡す心咲姉。
まぁ、掃除するとこなんてあまりなさそうだけど。とため息混じりに心咲姉が呟く。
俺の部屋は綺麗に掃除されてるわけではない。なのにあまり散らかってないってことは要するに物があまりないってことだ。必要最低限生活に困らない程度の物しか置いてない。クローゼットの中には数着しか服が入っておらず寂しい中身となっている。テレビは本当に暇な時につけるだけだから常にコンセントにはさしてない。ゲームなんて一人でしないから勿論ないし、ＤＶＤプレイヤーなんて言うものもない。包丁やフライパン、電子レンジなんかもあるけど、冷蔵庫は常にがらがらで何も入ってない。入っているものと言えば温めるだけで出来るハンバーグが一つとパックのカフェオレが一つだ。二つとも昨日帰りにコンビニで買って来た奴だ。
お腹が減ったら近くのコンビニで買えばいい。基本家に帰ってすることは日記を書くこととお風呂に入ること、寝ることぐらいだ。
お金は生憎と一人暮らしには困らない程沢山ある。今まで一人で暮らして来て困ったことはあまりない。

「全く、少しは何か買えばいいのに。服とか買わないの」
「興味ない」
普段制服だから私服なんてどうでもいい。
「興味ないって……。じゃあ下着とかはどうしてるの」
「洗って使い回し。三着あれば十分」
「佳、それはちょっと問題よ」
「無問題」
ベットに俯せで倒れている俺。見なくてもわかる。心咲姉の今の顔はおそらく引きつっているだろう。
でも仕方がない。だって今までずっとそれで生活して来たんだ。今さら変えようとは思わない。
「漫画も本もゲームもないわね。高校生とは思えないわね。お姉ちゃんちょっと悲しいわ」
「そう。おやすみ」
読みたいともしたいとも思わないんだから仕方がない。それにそんなものお金の無駄使いだ。
あ、いい具合に眠たくなってきた。昨日心咲姉と遅くまで話てたからな。まだまだ寝たり無いんだよなぁ。

『ははっ、見ろよこの寝顔。相変わらずバカ面だぜ』
『やめるのだ來優。落書きはダメなのだよ』
『頬に花丸も書こうよ。ボク上手いよ花丸書くの』

やめろ。やめろよ。やめろコラァアアアアアア！

「ッラァアアアア！」

クソっ！　変な夢見たぁ。
上半身が起き上がったついでに額を触る。
なんだよ汗びっしょりじゃねぇか。最悪な悪夢だ。

「ハァ、ハァ……、あ、わりぃ汐姫大声だして」

恐らく、というか確実に驚いてるだろう汐姫に一言謝る。謝ったあとで汐姫の反応を見る為に視線を汐姫に移した。

「ビックリしたぁ。どうしたの急に大声だして」
「てかきったねぇなぁ汗」

「悪い夢でもみたのだ？」
「ああ。まだみてるみたいだ」

何で居るはずの無い奴がいんだよ。寝る前は居なかっただろうが。

「んだよそれ失礼だな。私らがいたら悪いんかコラ」
「お前らじゃねぇよ、お前だよ。お前がいたら最悪なんだよコラ」
「表でろやコラァア！」
「上等だボケェ！」

ダンっ、と台の上に足を乗せて怒鳴る來優。勿論俺も対抗して足を乗せる。

「まぁまぁ落ち着くのだ二人共」
「そうだよケンカはよくないよ」

お前ら本当に止める気があるならゲームしてんじゃねぇよ。

「てか何で城道と來優がいんだよ」
「ボクが居れたの。もしかして、悪かった……？」

泣きそうな声色で言う汐姫。だからゲームしながら言うんじゃねぇよ。声は泣きそうでも目は思いっきりテレビ画面をガン見してんじゃねぇか。ってアレ？　涙目じゃね？　今一瞬黒い画面になったから汐姫の顔が反射して見えたけど涙目じゃなかったか？

「ごめ、んね」

さっきよりも声色がヤバいしやっぱり泣きそうなのか？　てか泣きそうな癖に何で城道と格ゲーしてんだよ！　しかもしっかりと城

道の攻撃ガードしてるし。

「……ボクが悪かったんだよね」

アレ？　汐姫のキャラ何かリストカットしだしたぞ。ザクザクザクザク自分の手刺しだしたぞ！　何あのキャラ！？　あんな技あったっけ？　どんな隠しコマンドだよ！　自分の体力確実に減らしていってるだけじゃねぇか！

「ホント、に……ごめん」

見るな！　そんな辛そうな顔で俺を見んな！　てか俺を見てる暇あったら城道が使ってる熊か、刺してる自分の手を見ろよ！　何顔だけ横向いて俺を見てんだよ！　知らないぞ。俺が悪いんじゃないんだからな。お前を操作してる汐姫が悪いんだからな！　だから涙流しながらこっち見んな。正直般若みたいな顔で涙流したり辛い顔したりしても気持ち悪いだけなんだよ！

ザク、ザク。

やめたげてぇ！　胸を刺すのはやめたげてぇ！　ほらマジで死にそうな顔になってるって。

「ボクなんて、死ねばいいんだ……」

「うっ……」

な、なんか本格的に俺が悪い感じになってきたな。ゲームのキャラ、段々と自分を刺しているスピードが速くなって来てる気がするし、汐姫は今にも泣き出しそうだし、來優は、おい謝れよ、的な顔で見てくるし。てか何でお前にそんな顔されなきゃなんねんだよ。

半分はお前のせいだろうが。

「わ、悪かったよ汐姫。ごめんな。だから泣くなよ」

「……許して、くれるの」

「ああ、だから汐姫が泣くことはないぞ」

「ありがと」

ピタっ。

と、止まった、止まったぞ。心臓を刺していた手がやっと止まった。キャラも、良くやった的な顔でこっちを見た。ふー、良かったなお前。やっと戦えるな。頑張れよ。

「もらったぁなのだ！」

ザシュ。

汐姫の般若のキャラの首が飛ぶ。城道の熊が顔を引っ掻いて千切ったのだ。おい城道、それはあんまりじゃないか。折角自傷行為が終わって今からだって時に、それはないだろ。そこの熊も何満足したような顔してんだよ。心が痛くはないのか？　いや、そもそもこのゲームってこんな感じだっけ？　首とか飛ぶような格ゲーだっけ？

「ふっ、僕の勝ちなのだ」

「あーあ、負けちゃったなぁ。城道強いね」

「それほどでもないのだ」

もうなんなんだよお前らは……。

「俺、顔洗ってくるわ」

そう言って自分の部屋を出て洗面台へと行く。何か疲れた。
洗面台に着き鏡に写った自分の顔を見る。そこには疲れきった顔の俺の顔が……おい。両頬に妙に上手い花丸の落書き、そして額にはお決まりの落書きが……って國？　肉じゃなくて國？　しかも何で難しい方の國何だよ。簡単な方の国で良いじゃねぇか。いやまて。つっこむトコはそこじゃねぇ。断じて普段の俺の顔はこんなんじゃねぇぞ。

「あのヤロー」

ダッシュで部屋に戻る。ドアを乱暴に開け、台の上にダンっと足を乗せた。ふざけんじゃねぇぞ。

「人の顔に落書きすんなボケェ！　くらわすぞゴルァア！」
「上等だァ！　やってみろやクソヤロー」

何でお前は人の顔に落書きしといて逆ギレ出来るんだよ。おかしいだろ。お前おかしいだろ。

「あ、鏡見たんだ。上手いよね花丸。ボクが書いたんだよー」

何嬉しそうに自白してんだよ。バカか。お前の頭はバカか。

「ボクは止めたのだ」

さすがだ。俺の仲間はお前だけだよ城道。でもな、何で俺の顔見ないんだよ。笑ってんだろ？　お前絶対笑ってんだろ。

「そうだ。何で肉じゃなくて國だと思う？　それはなにくを反対から読むとくにだからだ。凄いだろ？　お前にはこんな考え出来ねぇだろ」

面白くとも何ともねぇクソ事実を自慢気にカミングアウトしてんじゃねぇ。出来ねぇよ。出来るわけねぇよそんな幼稚な発想。最近の小学生でもしねぇよ。自慢気な顔で胸はってんじゃねぇぞボケ。

「お前ら……潰す！」
「おうかかってこいやバカ透麻」

來優の顔面目掛けて拳を突き出す。來優も俺目掛けて握った手を突き出してきた。対抗しようってのか……上等だオラァ！

「やめるのだ二人共」

パシ。

「「え？」」

城道に拳を止められたかと思うと視界が一気に反転した。そして俺のベットの上に落ちた。投げられたのか？　クソ、全くわからなかった。

幸いベットだったから受け身がとれなくても痛くはなかった。ただ問題が一つ。

「どけよ來優。重いんだよ」

來優が俺の上に乗ってるという事実。そりゃあゴツい男が乗るのとは訳が違う。柔らかくて乗っかられても痛くはないんだけど……

重い。

「なっ！　お、おお重いだと！？　女の子にたいして失礼だろがバカ」

「うるせぇ。重いのは重いんだよ。てか俺の上で暴れんな。重さで圧死する。汐姫なら乗ってもしないけどな」

「て、テメェ！」

そう言って來優が腕を振り上げる。あー、やべぇな。マウントポジションとられてる状態だからな。躱せるかなぁ。

「ねぇ透麻」

「っ！」

ゾっとする。來優もしたんだろう振り上げたまま動きが止まってる。ひんやりとした空気が充満するなか、キリキリと言う嫌な音が鳴った。自然と首が横を向く。音のする方へ、声がした方へ、汐姫の方へ。

「ボクが乗っても圧死しないって要するにそれって……」

な、なんだ。何か俺ヤバいこと言ったか？　軽いって言われたら女子って喜ぶもんなんじゃないのか。

カッターナイフを俺の首にぴたりとつけて汐姫は続ける。

「ボクには胸が全然無いって言いたいの？」

どんな解釈だよ！　そりゃあ汐姫には胸は無いけど、

「ピっ。今透麻汐姫には胸が無いって思ったのだ」

「コロス」

何で!?　何でそれを言うんだよ城道!　なに、お前そんなに俺に死んで欲しいの?　てかお前のそのピってやつ懐かしいなぁ。

「透麻」
「な、なんでしょうか」
「言い残したことは?」

考えろ。考えるんだ俺。ここで助かる唯一の道を考えるんだ。

「ひ、貧乳好きも多いと思います」

これぐらいしか考えつかなかった俺の頭脳を呪う。クソ、こんなことならちゃんと授業聞いてたら良かった。

「授業は関係ないのだ」
「何でお前は人の思ってることがわかるんだよ」
「いや、なんとなく」

恐ろしくかつ的確ななんとなくだなオイ。

「……よ」
「よ?」

黙っていた汐姫が口を開いた。あれ?　汐姫顔が真っ赤だ。何でだろ?

「佳様も、好きかな……胸が、無い子」

あー、そういうことか。だから顔真っ赤なのか。

「さぁ、どうだろうな。聞いてみないとわからないな」

「……そっか」

とにかく助かった。さすが俺の頭脳。素晴らしい程冴えてるな。

「じゃあバイバイ」

「え！？」

カッターナイフが俺の首をスライドした。あ、死んだな俺。何でこんな冷静なんだろ？

「冗談だよ透麻。本気で切るわけないじゃん」

あーそっか。わかってたんだ。汐姫は俺を切らないって。汐姫は俺達を切らない。仲間だからな。だから冷静だったんだな。

「う～、元はと言えば來優が悪いんだ」

「へ？　な、何で私なんだ」

標的を俺から來優へと変えた汐姫。今にでも來優に飛び付きそうな勢いだ。

「來優のこの胸が悪いんだぁ！」

あ、飛び付いた。汐姫が飛び付いたお陰で來優は後ろに倒れて俺の体から離れた。

ふー、軽くなった軽くなった。さて、とばっちりをくらわない為にベットから離れるか。

さっさとベットから離れ城道の隣りまで行く。

「おい城道」

「なんなのだ？」

「よくもさっきは余計なことを言ったな」

「何のことなのだ？　ボクは感じたことを言ったのだ」

「だからそれが余計なこと――」

「あっ、ああっ、くすぐったいよ汐姫。ひゃぁっ、そんな、トコ、ぁっ触る、な」

「羨ましい。ボクにわけてよその胸」

「あっ、ひぅっはは、くすぐったいって、きゃっ、ちょっ、もうやめ、て」

……ベットの上でなにやってんだよバカ共が。

「あ、そだ透麻。その落書き落としてくるのだよ。透麻が起きたからこれから佳の家に行くのだ」

「大丈夫なのか？　今日も佳とは会えない日なんだろ」

確か、二日くらいは会えない筈だ。

「んー、たぶん大丈夫なのだ。そんな気がする。佳の家に行ってダメだったら大人しく帰るのだ」

「そっか、わかった。じゃあ落としてくるわ」

そもそもこんな落書きなんかしなかったら今すぐにでも出れてたんだけどな。

そんなこと思いながら洗面台へと向った。

本　透麻

「はぁ、はぁ、はぁ……あっく、も、もうやめろ汐姫」

おい、まだやってたのかお前ら。

ベットの上でぐったりしている來優。相当疲れてるみたいだ。それに更に追い討ちをかけようとしてる汐姫。

俺が顔の落書きを落とす為に費やしていた１５分間、ずっと汐姫にくすぐられていたとするならもうそれは同情ものだ。あんなに來優が疲れてるのも仕方がないな。

「遅いのだ」

「ああ、なかなか落ちなかったんだよ」

石鹸や洗顔を駆使して何とか落としたんだぞ。あんなでっかい字で落書きしやがって、やべっ思いだしたら腹たってきた。アイツらにもいつか落書きしてやるからな。

「にしても、城道も止めてやれば良かったのにアレ」

「別にケンカしてるわけでもないし止める必要はないのだ。それに……」

「それになんだよ」

「透麻でもこういうモノを読むんだなぁって思って、つい読んでしまったのだ」

そう言い城道が背中から出したのは一冊の分厚い本。カバーも剥

がれ、色も少し褪せていてボロボロだが中のページは意外と綺麗なもので読むのに支障はない。タイトルは七つの罪。とても仲良しな六人の話だ。六人で力を合わせて今まで色々な困難に打ち勝って来たんだけど、その中のリーダーがある日急にいなくなる。いなくなったリーダーを探す為に五人はそれぞれ力を合わせ色々な困難に立ち向かう。それで何とかリーダーを見つけることが出来たんだけど……。最終的にバッドエンドのストーリーだ。

何でかな。他の漫画とか本は飽きたら売るか廃品回収に出すのに、この本だけは手放せずにいる。不思議なもんだな。

「少し読んだんだけど、なかなかおもしろいのだ。六人とも凄く仲良しで何となく僕達に似てるのだ」

最初の方は仲良し六人組の日常しか書いてないからただの仲の良い六人のハッピーな話かなぁと思う。でも中盤、特にリーダーが失踪してからはそれぞれの過去を振り返ったりしている。それぞれの人間の七つの罪に似せた重い過去を振り返っている。そして、最後に結局この六人はリーダーがきっかけでバラバラになる。読み進んで行く程段々と重たい話になって行く。

この六人を俺達に似てるって言った城道には読んで欲しくない、ていうか來優や汐姫、佳にも読んで欲しくない、絶対に。その筈なんだけど――

「――貸そっか」

気付いたら口が動いていた。

待てよ。何で俺そんなこと言ったんだ？　こんなの貸せるわけないだろ。

「え、いいのだ？　じゃあ遠慮なく借りるのだ」

「や、やっぱり城道それ」

読ましてはダメだ。なのに続きの言葉が出てこない。なんでだ？

「ん？」

「……や、何でもない」

「あ、そうだ早く佳の家行くのだ。もう随分時間が経ったのだ」

「ああ。おい來優、汐姫、佳の家行くぞ」

「はぁ、はぁ、わ、わかった」

「わかったよ」

だ、大丈夫か來優。あんなに疲れてる來優を見るのは初めてだぞ。

んーと、今は二時前か。佳の家つくのは二時半前ってトコかな。

「じゃあ行くのだ」

まぁ別にいいけどよ、お前ら……、

「片付けくらいしろよ！」

「ピっ、い、嫌な予感がするのだ」

今は佳のアパートの前。ここからでも見える佳の部屋を見ながら城道が呟いた。両肩を抱き、ぶるっと一瞬だけ震えた城道。

「嫌な予感って……まさか佳の身に何かあったのか！？」

城道の嫌な予感は良く当る。クソっ。佳の部屋へと走った。來優や汐姫も俺のあとを追って走りだす。最悪な光景が頭に浮かび上がる。佳、無事でいてくれ！

手すりが錆びている少しボロイ階段を急いで駆け上がり廊下の一番奥、角部屋へと走る。ドアの前には三桁の番号と倉本という表札が貼ってある。

ドアノブを握る。捻りそして思いっきり腕を縮め――

――ガンッ！

「ぐぎゃっ！」

鼻がっ、鼻がぁ！

内側から開けられたドアに鼻をぶつけ涙目の俺。鼻血が出るかも知れない鼻を片手で抑えながら内側からドアを開けた奴を見る。

薄い桜色の綺麗な浴衣。浴衣から露出した肌は白く柔らかそうで、後ろで一つに纏められている枝毛が一本も無さそうな黒い髪。それに刺さっている一つの金色の簪（かんざし）。それが日の光を反射して俺の目に焼き付く。

綺麗だ。
目の前の女の人に鼻をぶつけられた怒りを忘れて素直にそう思った。

「大丈夫？」

その人の澄んだ大きな瞳が俺の目を見る。黒い瞳に写った俺の姿が瞳ごしに見えた。

「う、だ、大丈夫です」
「そう。よかったわ」

ふふっと目を細め笑うその顔が佳の顔とかぶる。佳も女だったらこんな感じになるのだろうか。……そうだ佳！

「テメェ、何者だ！」
「ん、私？」

目的を思い出した。危ない危ない忘れてた。それにしてもなんて恐ろしい奴だ。

「佳の部屋で何してたんだぁ！」

來優が女の人の胸倉を掴んだ。

「離すのだ來優！」

城道が走ってやって来て來優を制止した。

「何で止めるんだよ城道」

「そうだよ。佳様の家から知らない人が出て来たんだよ」
「そうだぞ。すごく怪しいじゃねぇか」

俺達の言葉に耳を傾けず城道は俺達とその女の間に立つ。女の方を向いて城道がお辞儀をした。

「久し振りです、お姉さん」
「久し振りね城道ちゃん」

可愛い声で城道は言った。
お姉さん？　城道ちゃん？
なんだよ。一体どう言うことなんだ。何で城道が女の演技をしながら目の前の女をお姉さんって呼んだんだ？　この女も城道のことを知ってる見たいだし……。

「皆、この人は佳のお姉さんだよ」

女の演技のまま城道が言う。

「はぁ！？」
「マジで」
「佳様のお姉様」

そうか。この人が佳の一番上の姉で城道が彼女役をするはめになった原因か。城道から美人で佳に似てるって聞いてたけど……、あー、なるほどなって感じだな。

「皆佳に会いに来てくれたの？」
「はい」

城道が返す。佳の姉って聞いたから來優も汐姫も俺も毒気を抜かれ申し訳ない気持ちでいっぱいだ。來優何か胸倉掴んだからな。すっげぇしょんぼりしてる。

「そっかぁ。ありがと。佳今寝てるけど入って起こしてあげて。私これからちょっと用があるから少し出掛けるわ」
「わかりました」

佳の姉さんは城道の返事を聞くと、どうぞって言い、中へ入れてくれた。皆入るのを確認したらドアから出た。

「じゃあゆっくりしていってね」
「あのっ」

ドアの前でそう言い歩きだそうとした佳の姉さんを來優が止めた。

「なに、えーと……」
「來優です。守山來優」
「うん、來優ちゃん」
「さっきは胸倉を掴んですいませんでした」

深々と申し訳なさそうに頭を下げる來優。來優は頭を下げていたから見えなかっただろうけど、俺達には見えた。佳の姉さんがにっこりと微笑んだ表情を。

佳だ。紛れもなく佳の姉さんだ。その表情は佳が優しく笑うときの表情とそっくりで、佳の笑った顔がだぶった。

「いいわよそんなこと。私は嬉しいわ、佳を想ってくれる人がこんなにいてくれて。ありがとう。あの子、ちょっと素直じゃないトコがあるし、無鉄砲なトコもあるけど仲良くしてね」

「はい。私達はいつまでも親友です」

頭をあげて來優が答える。後ろからでわからないけどたぶん來優も笑顔だろう。

「いつまでも……か。本当に、ありがとう」

佳の姉さんはそう言うと歩き出した。

気のせいか？　最後の言葉、少し声が震えていた気がする。泣いていた？　なわけないか。泣く意味がわからないからな。それにしても、何か違和感がある。佳の姉さんが言っていたこと。自分の弟の友達とかに言う台詞にしては少し大袈裟だし、何か違和感がある。まぁ大袈裟なのは佳に親がいないってことで何となく大袈裟になるかも知れないけど……、それにしても何かが引っ掛かる。

「何か腑に落ちない顔をしてるのだ」

城道が俺の顔を下から覗きこんだ。

「何がそんなに気になるのだ？」

佳の姉さんの台詞……って別に言う程のものじゃないし、ただの俺の気のしすぎかも知れない。

「別になにも」

「お姉さんの台詞なのだ」

「っ！？」

コイツはホントに何人だよ。火星人か？　なぁ火星人だろお前。

「何いつまでもそんなトコで話してんだよ」
「そうだよ」

來優と汐姫が玄関を離れ奥へと歩いていく。必然的に玄関には俺と城道しかいないことになった。

「まさか透麻も気付くとは。お姉さん、僕が彼女役をしたときもそうだった。たまに何処か台詞に違和感があるのだ」
「わかったのか」

その違和感がなにか。

「それは」
「それは？」
「ただの僕達の気のしすぎだったのだ」
「はぁ？」

なんだそりゃぁ。はぁ。でも城道が言うならそうなのかも知れないな。

「さぁさぁもうそんなことはいいから早く行くのだ」
「……おう、わかった」

城道が早く行けと背中を押してくる。城道に背中を押され続けるのも悪いからさっさと城道を残して歩いて行った。

「……言えるわけがないのだ。お姉さんの台詞の違和感……。

”これからも”が無いってことなんか、絶対に」

「佳は良い人に、出会えたわね……ぐすっ。いつまでも……だなんてほんと、うに……ありがと」

残酷な温もり　佳

暖かい。手の平から、体から、全身に伝わってくる暖かさ。心地いい。俺はこの温もりを知っている。凍て付いた心を優しく溶かすような。どんな暗闇の中にいても光を照らしてくれるような。どれだけ自分を見失っても導いてくれそうな。

俺はこの温もりを知っている。その優しさも、その残酷さも。いくらすがりついても、泣きついても離れる時は離れてしまう。あっさりと、消えてしまう。何事もなかったように。

この温もりが消えたあと俺はどうするんだろう。何を思って生きるんだろう。ダメだ。考えつかない。だってそれは俺であって俺ではないんだから。

暖かい。この暖かさを今は大事に。もう少し、いつか消えるならせめてその日までこの温もりにすがることを許して欲しい。

「ん」

瞼を開ける。目にはいつもとシミ一つ変わらない見慣れた天井が写し出される。

今、何時だろ。心咲姉にはちょっと悪いことをしたかな。

手探りで頭の上の時計を探す。見つけ、掴み目の前まで持って行く。

「五時か……」

よく寝たな。何か腕と体がちょっとダルい感じがするけど、ただの寝過ぎのせいか。

起き上がり部屋を見渡す。

心咲姉、帰ったのかな。部屋を見渡しても心咲姉が見つからない。まぁ帰ったなら帰ったでそれでいいんだけど。

それにしてもお腹減った。そういや昼何も食べてないな。晩ご飯にするか。お腹の減りすぎでキッチンから良い匂いまでしてくるし。まぁ気のせいだろうけど。いやもしかしたら心咲姉が何か作ってくれてるのかも知れない。一応行って見るか。

「あ、バカか透麻。チョコレートなんかカレーにいれるな」

「いや、だって佳甘いの好きだから」

「良いんだよ。カレーのルーを激甘にしたから」

「この唐揚げおいし〜」

「うむ。中々おいしいのだ」

「つまみ食いをするな汐姫城道」

「あ、じゃあ俺も」

「テメェは絶対食うな！」

あー、やべ。寝過ぎで幻聴と幻覚までする。だって有り得ないだろ。今日は会えない日。そう決めた日なのに目の前に会いたい奴等がいる。何故か料理作ってるんだが……いや、作ってるのは一人であとの三人は邪魔してるだけか。

「幻覚だ、幻覚」

でも、例え幻覚でも嬉しいな。
目を覚ます為にとりあえず顔洗うか。顔洗ってからまたキッチンに行こう。そうしたらもういない筈。……一瞬の夢の筈。

「あれ？」
「どうしたんだ城道。あ、來優の作った唐揚げにあたったか？」
「やっぱりテメェは絶対食うなよ。一口も食べさせないからな」
「冗談だって來優。で、実際どうしたんだ城道」
「いや、今佳がいたような気がしたのだ」
「えっ！？　佳様起きて来たの？」
「たぶん。汐姫、悪いけど呼んで来てくれないか？」
「お安い御用だよ城道。むしろ望むところだよ」
「あはは、じゃあ頼んだのだ」

「がらがら……ぺっ」

よし。顔も洗ったし歯磨きもした。これで頭も起きただろう。

「……」

まだ寝てる見たいだな。鏡に俺の顔以外に汐姫の姿が写ってる。
もう一回洗うか。

「佳様ーご飯出来ましたよ」

いくら洗っても汐姫は消えない。もしかして……。

「幻覚……じゃない」

「幻覚？　佳様ボクは幻覚じゃないです。れっきとしたボクです」

あー、何か良くわからない言い回し。ホントに幻覚じゃないのか。だとしたら何でここに。

「汐姫、何でいるの」

「ぇ、来たら、いけなかったですか……」

「いや。でも今日は」

「知ってます！　昨日今日明日ぐらいは会えない日だってこと。でも、昨日佳様はボク達を助けに来てくれて」

「アレは心配だったから」

気付いてたら体が動いてたんだ。会えない日だって、会ったら皆に迷惑かけるって自分が一番自覚してるのに。

「ボク達だって心配なんです！」

し、んぱい？

「ボク達だって、心配なんです。佳様のことが、心配でたまらないんです。昨日もしかしたら佳様怪我をしたのかも知れない、熱をだしているかも知れない、ちゃんとご飯は食べれているか、ちゃんと寝ているか……心配なんです」

「心配、してくれてたの」

「それだけじゃないのだ」
「城道、やっぱりお前もいたのか」

てことは、皆いるのか。

「汐姫の声が聞こえたので来てみたのだ」
「うん。佳様……それだけじゃないです」
「会いたかったからなのだ」
「会いたいと思ったから、佳様に会いたかったから来ました」
「……」

あー、もう。この日はダメなんだって。体も弱くなってるし、心も弱くなってる。簡単に壊れるし、簡単に泣く。自分の身すら守れない状態なのに……そんなこと言われたら。

「あり、がと」
「佳様行こ。來優がおいしいご飯作って待ってます」
「うむ。唐揚げは絶品だったのだ」
「ああ、わかった」

嬉しくて、嬉しくて笑みがこぼれそうで。この温もりが無くなることを考えたら泣き崩れそうで。でも無くなる日まではすがりつくって、泣き付くって、絶対離さないって決めたから。どれだけ傷ついても。

ハゲ、坊主、ハゲ坊主！　透麻

ミーン、ミーンミーンミーン。

「あぢぃ」

蝉の鳴き声がかなり煩わしく思う場所。太陽がいつもより近くに感じ、風がいつもより涼しく感じる。ざわざわと木々の葉達が風に揺られて陽気に踊る。何年も人に触れられず拒絶してるかのような獣道を俺達は歩いてる。

「クソあぢぃ。城道、水」
「もうないのだ透麻。少しは我慢するのだよ」
「我慢なんか出来るかよ」

この蒸し暑さ、俺達五人だけで歩いてるならまだ我慢も出来る。だけどな生憎なことに俺達は今五人じゃない。いるんだよ、夏に一緒に歩きたくない奴等が。剃髪した素晴らしく整った形をした頭。熊と毎日組み手してそうな筋肉ムキムキの屈強な肉体。その上身体のバランスは良くムキムキの肉体を違和感なく見せている一八〇強の高身長。厳つい顔からは厳しさの他に優しさも見てとれる。最近の若い奴等が着るようなおしゃれにこだわった服装じゃなく、かと言ってシンプルな服装でもない。漫画とかで出てくる修行中の坊主が着るような胴着に身を包み首からは大きな数珠をぶら下げている。

「ハッハッハ。この程度の暑さでへこたれるとは。倉本殿、少しお仲間に甘いのではないか？」

四人いる坊主の中でも一際背が高く筋肉ムキムキな坊主が笑いながら佳に言う。数珠の色が黒だからコイツがリーダーだろう。

「うっせぇハゲ。さっきからお前の頭が日光反射して俺に攻撃してんだよ」

太陽と坊主光線を同時にくらってんだぞ。精神的に限界が訪れるわアホ。

「ハッハッハ。海本殿は口だけは達者のようだな。その分ならまだ当分は大丈夫だろう。目的地まではまだ数十分はかかる」

「ま、まだかかるのか」

朝八時に出て今一〇時半だぞ。バスで途中まで来たとしてもこの山に入って一時間は歩き続けている。普通の街を一時間歩くのとは違うぞ。山だから殆どが坂道だし、しかも歩いてるのは獣道だ。人が歩けるような道じゃない。それ＋（プラス）太陽光と坊主光だ。疲れたなんてもんじゃねぇぞ。來優なんか歩き始めて三〇分経った時点から無口になって歩くのに専念している。あのうるさい來優がだぞ。

「海本殿、見なされ蒼空殿はスタスタと普通に歩いているではないか。守山殿も口は開かないけど精一杯歩いている。柳生殿と倉本殿も楽しそうに話をしながら歩いているではないか。根を上げているのは海本殿だけだぞ」

汐姫は山で修行してたくらいだから慣れているんだろう。懐かしくて嬉しいのか知らないがうきうきしてるように見える。來優は坊主達に負けまいと頑張っているだけ。城道と佳は……相変わらずだ。

坊主達も慣れた足取りで歩いていることから毎年合宿に来てるようだ。

そう、今は残念なことながら寺部と合同強化合宿に来ているんだ。

「はぁ、もうやだ。家に帰りたい」

終業式が終わり、夏休みも始まってもう二〇日はたつ。今日まで毎日宿題写したり遊んだりしてたのに、何が楽しくてこんな坊主達と……。

「ハッハッハ。今年はより楽しい合宿になりそうだ。ご助力感謝するぞ倉本殿」

「別に気にするな。この合宿楽しもうな」

「ハッハッハ。そうだな楽しもう。でも合宿の本来の目的、鍛練は怠っては駄目だぞ」

「わかってる。鍛練も含めて楽しむんだよ」

「いやいや流石倉本殿。良い事を言いなさる」

まぁでも、佳が楽しそうなら別にいいか。

「ん〜」

両手を空に伸ばす。確かに暑いけど、悪い気はしない。優しく撫でる風も、音を奏で陽気に踊る木々達の葉も、青く澄んだ空も、全てが気持ちいい。

「よっしゃ楽しむか」

「ハッハッハ。流石部活部。おもしろい人ばかりだ」

雑巾勝負だ　透麻

「あそこが合宿先の宿だ」

自分の背丈くらいある草を払いのける。目前に広がるのは本当に同じ山なのか疑うような綺麗で整理された芝の平地。芝の節々に色鮮やかな花が咲いていて蝶が舞っている。その平地の真中には寺があり芝や花や蝶に囲まれたその寺は神聖な雰囲気を醸し出している。

「ついたぁあ！」

やっと、やっとついたぁ。この腐れハゲのヤロー、何が数十分だ。思いっきり一時間経ってんじゃねぇかボケ。

寺の軒に寝転がる俺。あー、気持ちいい。

「生きててよかったぁ」

ホントにそんな言葉が口から漏れる程気持ちいい。來優がそんな気持ちよさそうな俺を見てわくわくした顔付きで同じように寝転がろうとした。

「まだ休憩には早いぞ二人共。これから世話になる寺に挨拶したあと掃除だ」

「ハァ！　マジかよ」

何言い出すんだこのハゲ坊主。

「文句を言わない透麻。お世話になるんだから当然だぞ」
「うっ、わかったよ佳」

でも、一番ガッカリしたのは來優だ。結局寝転がれなかったからな。凄い泣きそうな顔でとぼとぼ歩きだした。

「來優悪いな。温泉もあるそうだから掃除が終わったら汐姫と入って来ていいよ」
「ほ、ホントか佳！」
「ああ」

來優の顔がパァっと一気に明るくなった。

「よっしゃあ、気合い入れて掃除するぞ！」
「ハッハッハ。じゃあ先ずは廊下を掃除。そのあと境内、勿論台所やトイレも掃除。最後に各々が泊まる部屋を掃除しよう。女子（おなご）と我等は別の部屋だ。まぁこれは当たり前だな。あとは男は少々数が多いので部屋を二つにわけるか。クジで部屋をわけるから部屋わけは掃除が全て終わってからしよう」

掃除か。また來優が妙に絡んできそうだな。

「じゃあ先ずは廊下だ。埃をはたき雑巾で拭いてもらおうか」
「よっしゃ透麻勝負だ！」

ほら来た。

「仕方ないな。ただ掃除をするだけじゃ面白くないしな。どっちがあの端まで早いか勝負だな」
「その勝負のったぁ！」

「俺もやるぜ」

……誰だこの坊主。

「ワタシの名は幸樹（こうき）」

「俺の名は彰（あきら）」

「ハッハッハ。二人共負けず嫌いで勝負事は好きなんだ。迷惑でないのなら加えて貰っては駄目だろうか」

「私は別にいいぜ。誰にも負ける気はしないしな」

「俺も別に來優がいいならいいけど、お前ら恥かいても知らないぞ」

「ハッ、恥かくのはお前らだ」

「ワタシは負けないですよ」

えらい自信だな。こりゃ楽しみだ。

「まぁ何にしても勝負をするには先ず埃をはたくのが先ですけど」

「ああ、それならもう終わった」

「僕達は先に境内を掃除しておくのだ」

「じゃあボクは台所を掃除するね」

相変わらず早いなぁ。まぁ佳と城道は何でも半端じゃないからな。

「なっ！」

「は、早いですね。何者ですか」

「ハッハッハ。相変わらず不思議な奴等だな。お前らも知ってるだろう。たまに我が部に遊びにくるではないか」

「いや、師匠それは知ってるけど……」

「まるで師匠のようではないですか」

そっか。寺部は部長のことを師匠と呼んでるんだったな。変な部

だな。まぁ人の事言えた義理ではないか。

「ハッハッハ。じゃあ我も境内を掃除してくるとするか。北斗ついてこい」

「はい師匠」

北斗と呼ばれた寺部の中では一番背が低くくムキムキじゃない坊主がハゲについていった。低いっつっても一八〇はあるぞたぶん。

「なるほど。お互い凄い上司をもったわけですか」

「まぁ俺らの師匠の方が凄いけどな」

「佳と城道は上司じゃねぇよ」

「仲間だよ。俺らには上司も部下もないんだ」

「そうだわかったか。そんな事よりさっさと始めるぞ。言っとくけど私は負けないぞ」

雑巾を絞りながら会話をする俺達。超ダサい光景だ。

「おいお前」

「お前じゃねぇ守山來優だ」

「じゃあ守山。お前制服姿だろ。大丈夫なのか」

「ワタシもそれが心配です。貴女は女の子、スカートだと思いっきり走れないのでは？」

「心配いらねぇよ」

そう言い來優はスカートを脱ぎ始めた。

バカか。いきなり脱ぐな。コイツらビックリしてるじゃねぇか。

「ショーパン履いてるから大丈夫だ」

太股よりもっと上。もうバレーボールで履く短パンと変わらない長さのジーンズを履いている。その変の奴ならすらりと伸びた細く白い足に嫌でも目がいくだろう。勿論コイツらもだ。

「じゃあ始めるぞ」

まぁ見られても別に気にしない男らしい來優には関係のない話だがな。

さて、雑巾も絞り終えたし、廊下の端で四人並んだし、準備は出来たな。

「じゃあ誰が合図する」

「ワタシがしましょう。いきますよ、よーい……ドン！」

直線五〇メートル以上。それを三回横に曲がって元のトコに戻って来たら丁度四角形の形になる。勿論ゴールはスタートした位置だ。

來優はまぁ予想してたとしてコイツら以外と速いな。こりゃあ面白くなって来た。

変化が怖いのだ　城道

「それにしても珍しいのだ」
「ん、なにが」
「佳が他の人と一緒に合宿だなんて」
「んー、あ、スポンジとって」
「りょーかいなのだ。はい」
「ありがと」

ごしごしと佳が何処かを擦る音が後ろからする。今は佳と汐姫と台所を掃除している。トイレやお風呂も含めて境内の中は殆ど掃除した。やってないのは各々の部屋とここ台所ぐらいだ。そういやさっきまで飼雲（かいうん）先輩もいたんだけど……、何処にいったんだろう。まさかサボってるんじゃ……、いや、北斗を置いてそれはないか。まして正義感の塊の様な人だからサボるなんてことは有り得ないか。

今はそんなことより佳の変化のことの方が大事だ。今までずっと僕達だけだった合宿が今年は他人と一緒だ。一日だけなら良いが二泊三日と来たらこれは変に思っても仕方ないのだ。いつもの気紛れならいいんだけど……、何か嫌な予感がするのだ。

「それで、何で今年は合同合宿なのだ？」
「んー何でって……いつもの、気紛れだよ」
「っ！？」

違う、違うのだ。いつもの気紛れじゃないのだ。佳、何でそんな悲しい声をだすのだ。佳がそんな声をだしたら……。

「心配するな城道。ホントに気紛れだから」

「……佳、僕達は永遠に親友なのだ」
「……ああ」

変化が怖い。そう思ったのは初めてだ。佳、離れないで。佳が離れたら僕はもう生きていけないのだ。佳、先に手を差し延べたのは佳だよ。僕はいつまでもその手を握っているのだ。だから、どうかこの手を離さないで。

「よし、終わった。皆終わったか」
「ボクは終わりました」
「僕も終わったのだ。北斗は」
「え、あ、ぼ、ぼくも終わりました」
「そっか。じゃあ透麻達のトコに戻って見るか」
「そうするのだ」

勝負してた見たいだし遅くてももう終わってる筈なのだ。だから部屋の掃除ぐらいは皆でするのだ。

「ハァ、ハァ」

透麻達のトコまで戻ると皆息を荒げて仰向けで倒れていた。むぅ、何をしてるのだろう。一応廊下は綺麗になってる見たいだけど、まさか早く終わってサボってたわけじゃ……。

「……何してるのだ透麻」
「あ、城道、ハァ、ハァ。なんだ、もう掃除終わったのか」
「終わったのだ。透麻の方はどうなのだ」
「ああ、俺達の方もついさっき終わった」
「随分と長かったようなのだ」
「それはなコイツらが」

そう言って透麻は同じように寝てる寺部の二人を指差した。寺部の方も相当バテてる見たいなのだ。ただの雑巾リレーでこんなにも疲れるものなのか？

「負け出したからって妨害しだしたんだよ」

なるほどなのだ。だからそんなに疲れてるのか。
透麻の言葉を聞いて寺部の一人が勢い良く立ち上がって透麻を睨んだ。

「ハッ、よく言うぜ。テメェも雑巾投げてきやがっただろうが」
「うっせぇ。お前らが先だろうが」
「ふっ。キミ達部活部の雑巾の投げ方は美しくなかったです。ワタシの投げ方を見ましたか？　腕の角度、顔、顔顔顔、全てが美しい」
「あー、クソ黙れハゲボケ。負け犬共がうるさいんだよ。佳、城道、汐姫私が一位だぞ」
「なっ！？　來優お前はアイツらを無視して一人で走ってったから一番速かっただけだろ。卑怯だろが」
「あんなのまともに相手する奴がバカなんだ」
「っんだとコラァ」

むぅ、このままじゃ話が一向に進まないのだ。

「じゃあ皆ついてくるのだ。部屋の掃除をするのだよ」
「早く終わらせよう。皆早く休憩したいだろ」
佳の言葉にこの場にいる全員が反応した。それほど疲れているのだろう。僕も少々疲れたのだ。佳の言う通り早く終わらせたい。

男らしさ　來優

「ん～、気持ちいい」

部屋の掃除が済んで私と汐姫は佳達より少し早めに休憩をとっている。理由は簡単だ。佳達は掃除のあとに部屋を分ける為のクジがある。部屋を分ける必要のない私達は一足早く休憩を貰っただけだ。だから、汐姫を誘ってさっそく温泉に来ているわけだ。

「來優、ちゃんと体洗った？」
「当たり前だ。ちゃんと洗ったよ」

最初は乗り気じゃなかった汐姫だけど、来て見たら少し感動した見たいで今はすっかりお湯につかってる。
汐姫が乗り気じゃない理由、それは体の傷を見られたくないからだろう。汐姫は私に背を向ける形でお湯につかってる。背中にも刻まれてる様々な傷のあと。汐姫の綺麗な白い肌に不釣り合いのその傷達を見る度に心がギュッと絞まる。私はあの頃汐姫が虐待されてることにすら気付かなかった。仲間が辛いことにあっていたのに気付かなかった。

「……來優」
「な、なに」

汐姫の背中をじっと見ていたから呼ばれて少し目を逸した。本人にとってはあまり見られたくないものなのかも知れない。いや、そんなこと当たり前か。体中にある傷を見て欲しい奴がいるものか。

しかも女の子だぞ。いるわけがないだろうが私のバカ。

「ボクの体……汚いからあまり見ないで」

心が痛い。汐姫が自分の体のことをそういう風に言うなんて……。

「汚くなんてない」

汐姫の体をギュッと抱き締める。背中から汐姫の胸のあたりに腕を回して抱き締めた。ギュッと力強く、汐姫が離れていかないように。

「私は汐姫のこと好きだよ。体、心、全部含めて汐姫のことが好きだ。仲間だからな。だから汚ないとか言うな」

私に出来ることはこんなことくらいだ。こんな安っぽいことしか言えない。汐姫の体の傷を初めから無かったかのように治せるわけでもない。汐姫が心に受けた傷を治せるわけでもない。ただ、私が思っていることを素直に汐姫に伝えることしか出来ない。そんな無力な自分に腹がたつ。

ギュッと抱き締める腕に力が入る。

「い、痛いよ來優」

「あ、ごめん」

入れすぎていた力を少し緩める。でも汐姫は離さない。今離したら私が汐姫を突き放した見たいになるから。汐姫が何か言うまで私からは絶対離さない。

「來優ありがと」

「私にはこんなことくらいしか出来ないから」
「それにしても、ちょっと悲しいな」
「な、何か悲しませるようなことしたか」

ぐるんと汐姫が体を回す。正面から汐姫を抱き締めてる感じになった。
こ、これが裸の付き合いって奴なのか。汐姫の小さな胸に私の胸がくっつく。

「ボクと來優じゃこんなに差があったんだね」
「なんのことだ」
「今ボクの胸に当たってるこれだよぉ！」

そう言い汐姫は私の胸をガシっと掴んだ。

「ひぁっ！　バ、バカ離せ！」
「自慢気に押しつけて、羨ましい」
「ぁっひぁ。ちょっも、揉むなバカ」
「何を食べたらこんなになるの」

うっ、密着してたから逃げれない。

「私は、あっん汐姫の胸の方が、羨ましい」
「嘘ついてまで励まさなくていいよ」
「ひぁっん、あっ。う、嘘じゃないって、ぁっ」

だ、ダメだ。変な感じがする……。

「嘘じゃない？」

ピタっと止まる汐姫の手。やっと解放された。また揉まれたら困るから少し汐姫と距離をとる。

「ハァハァっ、私は男らしくなりたいのに胸が大きくなって……」
「そっか。來優は男らしいのに憧れてるもんね」

そうだ。私は女らしかったらダメなんだ。汐姫見たいに女じゃダメなんだ。男らしくないと、男より強くないと、そうじゃないと私はタダ背の高い女子になる。普通になる。繋ぎ止めないと、変でいないと、皆から捨てられる。佳がくれた居場所なんだ。たった一つの私の居場所なんだよ。もうあんな悲しい思いはしたくないんだ。もう捨てられるのは……いやだ。

「そうだ！　ご飯いっぱい食べたら大きくなるかな」
「さぁ。でも食べるなら太らないように気をつけろよ。太ったら元も子もないぞ」
「そ、そうだね。やっぱり大食いはやめとくよ」

風が吹く。この温泉は露天だから風がお湯から出てる肩より上にあたる。気持ちいい。暖かくて涼しい。そんな感じだ。上を見上げれば綺麗な青空。夜も来ようか。夜は星空が見え、また別の気持ちよさがありそうだ。

「夜も来ような汐姫」
「うん」
「あ、でも覗きに注意しような。佳や城道はないと思うけど透麻と寺部は危険だからな」
「わかった。でも佳様になら覗かれてもいいんだけどなぁ。もしかしたらそこから発展するかも知れないし……、出来ちゃった結婚とかでもボクは別に気にしないし」

うっ、何でそっち方面にいくんだろうか。汐姫は妙に大人っぽいことを考える。大人っぽいって言うのは勿論えっち的な方のだ。

私なんか自分でそんなこと考えてる時点で恥かしいのに……。ダメだ！　男らしくないと。男ならこんくらいの会話は余裕で出来る……筈だ。自信ないけど。

「そ、そうだな。でも私はやっぱり覗かれたくないな」

「あはは。やっぱりそうだよね。じゃあそろそろあがろっか。ボクのぼせそうだよ」

「ああ」

そばに置いてある籠の中に入っているバスタオルを手にとる。お湯から出るときにそれを体にまく。私と汐姫しかいないけど、万が一を考えてだ。まぁないと思うけど。

「そういや午後から何するんだっけ」

「えーと、確か座禅だった気がする？」

「また座禅かぁ、めんどくさいな」

「あはは。ボクは得意だけど、透麻が目茶苦茶苦手だよね」

「ああ、バシバシ叩かれるもんな。笑いを堪えるのが大変なんだよなぁ」

「無心だよ來優。我は自然の一部なり～ってね」

自然の一部かぁ。もしかしたら無我の境地のヒントかも知れないな。

「気合い入れてやってみるかぁ」

「うん」

あー、クソっふざけんな。何で俺がアイツらと同じ部屋なんだよ。何で佳や城道と別なんだよボケ！

「喝！」

バシンッ！

「いでっ！　何すんだよクソ坊主」

「邪念が見える」

クッソォ。坊主のくせに生意気な。人の邪念なんてわかるわけねぇだろがクソハゲ。

「カァツ！」

バシン！

「いっづ！　だから何でなんだよ！」

「邪念が見えた」

クソヤロー。あー肩いてぇ。

今は午後の座禅タイムだ。俺が凄く苦手としてる時間だ。バシバシ何の根拠もなく人の肩を叩きやがってあのクソ坊主が。

目を瞑って静座する。これから世話になる寺の道場見たいな場所に俺らは並んで静座してる。寺部の部長、クソ坊主を除いてだ。右

から幸樹、彰、北斗、來優、城道、佳、俺の順に並んでいる。今始まって三〇分はたつけど叩かれたのはまだ俺だけだ。何かそれが腹たつ。そもそも座禅なんかする必要ねぇだろが。

「喝」
「いたっ」
「守山殿、少し集中が途切れた見たいだな」
「わりぃ」

くくっ。ダセェな來優。集中が途切れるとか情けねぇ。

「カァァアツ！」
「あだぁあ！」
「邪念が見えすぎている」
「テメェ明らかに今の來優より力が違うだろうが！　何で俺ん時はそんな気合い入ってんだよ」
「海本殿は今のが初めてではないだろう。少しは集中するんだ」
「う、ぐ……」

クソ、事実ばっか言いやがって反論出来ねぇじゃねぇか。

「ぷっ、集中出来てねぇとかしょぼいな」
「ああ！　テメェコラ彰何か言ったか！」
「集中出来てねぇとかしょぼいっつったんだよ」
「表でろやコラァ！」
「望むところだ」
「カァァアツ！」

バシっバシっ！

「いってぇ！」
「いっ、すみません師匠」
「うむ。まだまだ修行が足りん」

あークソ。彰のせいで俺まで叩かれたじゃねぇか……って、ン！？　おい、佳の奴寝てないか？　今チラッと見えたけど明らかに表情が寝てる感じだったぞ。何かそんなこと思うと寝息まで聞こえて来た気がする。

「スー、スー」

やっぱり寝てるだろ！　ふっ、佳勝負は時に残酷なものだぞ。いくら佳だからって勝負事に手加減もひいきもしない。

「おい坊主」
「カァァツ！」
「いだっ。ちょっちょっと待てタンマだタンマ。佳の奴明らかに」
「カァァアツ！」
「いでぇ！　て、テメェは人の話を最後まで聞くってこと知らないのか！　佳が寝て」
「カァァアアアツ！」
「いだぁああ！　クソハゲコラ坊主！」
「喝喝喝喝喝喝カァツ！」

バシバシバシバシバシバシンッ！

「ぐぎゃああ！　こ、のクソ坊主がぁあああ！」

ダンっと立ち上がり坊主の胸倉を掴む。

「佳が寝てるってのがまだわからねぇのか！」
「やめろ透麻」
「っ佳！？」

いつの間に起きたんだ。いや、そりゃああんだけうるさかったら起きるか。それにしても流石佳だ。まだ目を瞑って静座したままだ。

「倉本殿は寝ていないようだが」
「……ちっ」

胸倉をバッと離して大人しく座る。

「覚悟はよいな海本殿」
「ああ、存分に叩けよ」
「うむ。では行くぞ」

あー、畜生。絶対腫れるな肩。

「カァァアア――」

ギュッと目を瞑る。すぐに来るだろう痛みに耐える為に。

「――つまみ食いしたら……來優に怒られる」

ピタっと坊主の動きが止まったのがわかった。
おいコラ坊主。今の明らかに寝言だよな。これで俺は叩かれず済むよなぁ。だって無実だもんなぁ。

「か、カァツ！」

バシッ！

「ぎゃっ！　な、何で俺なんだよ坊主！」
「じゃ、邪念が見えた……気がする」
「おいテメェ今気がするっつったか！　気がするっつったよなぁ！」
「か、か、喝喝喝喝喝喝喝喝喝喝喝喝喝カァァアアアツ！」

バシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシバシィィイイインッ！

「ぐあぎゃあああああああああああッ！」
「しゅ、集中が出来ていない」
「も、もういい、勘弁してくれ」

いたい……。涙出そうなくらい痛い。てかもうちょっと出てる気がする。
り、理不尽だ。この坊主は理不尽だ。き、気をつけろよ汐姫、城道。この坊主だきゃあ理不尽だ。

「倉本殿も喝！」
「いたっ。……えーと、あー、おは、よう」
「うむおはよう。ついでに海本殿、喝！」
「ぐあっ！　い、今のは何でなんだよ」
「言っただろう。ついでだと」

見ろ……理不尽だ。

○○という真理　透麻

「いててててっ」

肩に湿布を貼る。あー、いてぇ。あのクソ坊主バシバシ叩きやがって。

それにしても晩飯も食って風呂も入ったしやっと部屋で楽になれると思ったら……。

「何でお前らと一緒なんだよ」

そういやコイツらと一緒ってことを忘れてた。クソ坊主以外の寺部の連中と部屋が同じ。佳も城道も違うんだぞ。最悪だ。

「クジで決まったんだから仕方ないだろ」

「そうですよ。諦めなさい」

「す、すいません、ぼ、僕何かと同じで。ちゃ、ちゃんと幸樹君と彰君見張るのでゆ、許して下さい」

何かおどおどと鬱陶しい奴もいるし。はぁ、最悪な合宿だ。まぁ部屋は結構広いし良しとするか。一八畳の畳の間だ。四人で布団敷いて寝るには十分すぎる。確か佳のトコはここの半分くらいの大きさだったな。広い方がいいしコイツらは相手しなかったらどうってことないから……こっちの方が良かったのかも知れないな。

「なぁなぁトランプやろうぜ海本」

「七ならべでどうですか」

「あ？　やらねぇよ勝手にしとけ」

俺はもう寝る。今日一日で疲れてんだよ。主にお前ら寺部の部長のせいでな。

早々に布団に寝転がり横を向く。勿論幸樹達のいない方向を向いている。

「おい、寝るのか」

無視だ無視。

「お前……」

彰が近くに寄って来て静かに喋り始めた。聞く気がなくてもこんな近かったら嫌でも聞こえるし、筋肉ハゲが寄って来たと言う事実に少し鳥肌がたつ。睡魔のヤローでさえ全力失踪で逃げ出したくらいだ。お陰で眠気が全くしねぇよコノヤロー。

「ここ、覗けるんだぜ」

何を？　そんな質問は愚問だ。今の言葉で理解出来ない男は干からびている。それか思春期をまだ迎えてないんだろう。男が宿に来て小声で覗けると言った。これに意味何て一つしかない。そう、真実はいつも一つとかの有名な名探偵も言っているだろ。

ガバーッと起き上がる。

「ま、マジで」

「ああ、ここの温泉は近くの宿の客も入りに来るんだよ。しかも若い女が主にだ」

全身が身震いした。勿論武者震いだ。俺は今から数多い男の夢の中の一つを叶えてくる。犯罪にならない程度にな。
（※覗きは犯罪です）

「行くか」
「当たり前だ」

やべぇ、何かコイツとは仲良くなれそうな気がして来た。最初はそんな気全然なかったんだけどな。いや、違う。コイツとは友達とかそんな普通なモンじゃない。戦友だ。間違いなくコイツとは同じ戦場にたつ友だ。

「じゃあ行くか。俺達の戦場へ」
「ああ。道案内は任せたぞ彰」

俺達は絶対に負けない。一目、必ず一目女体と言う神秘を見るまでは。

「ここだ」

彰に案内されてついた場所は露天風呂と外とを仕切ってある板の外側だ。にしても結構分厚いぞこの板。

「この板の先に真理がある」

真理か。中々上手いこと言うじゃねぇか。

「どうやって見るんだ」

「ふっ、俺が去年来た時に開けておいた覗き穴がある」

なっ!?　何て策士なんだコイツは。ヤバい、俺はこんな頼もしい戦友をもったのか。

「じ、じゃあ覗くぞ」

「あ、ああ」

二つある覗き穴のうち右の方の覗き穴を覗く。右目を閉じて覗く左目に全神経を集中させる。

見えた。けど湯気が濃くてハッキリとは見えない。ってか……

「人いねぇじゃん!」

「し、しまった!　時間が時間だからか」

そう言えば今は一〇時前。こんな時間に温泉につかりに来る奴何てあまりいない。ていうかそんくらい行く前に気付けよ彰。いや俺もだけど。

「クソ、ヘマしちまったぜ」

「はぁ、女体は拝めなかったか」

諦めて帰るとするか。

ひた、ひた。

「ま、待て海本！　き、来たぞ」

「なに！？」

急いで覗き穴を覗く。そこには湯気でシルエットしか見えないけど確かに女が歩いて来た。胸のあたりが少し膨らんでいるぶん間違いなく女だろう。

「クソ、湯気が邪魔だ」

俺もそれには同感だ。

「それにしても背の高い女だな。一六五……いや七はありそうだな。モデルか何かでもしてんのか」

「いや、俺はあんくらいがいい。背が高くて胸は少し控え目。スタイルは超俺好みでパーフェクトだぜあの女」

お前の好み何か知ったことかよ。それにしても湯気邪魔だ。あ、体洗いだした。細い手のシルエットが腕や足、体を擦りだした。何度も言うけど湯気邪魔だチクショウ。

「な、何かシルエットだけってのもそそるな」

彰のテンションがちょっとおかしくなって来たぞ。何かコイツヤバいこと口走らないように見張っとかないとな。

あ、体洗い終えてお湯の方に歩いて来たぞ。丁度俺達が覗いてるのはお湯の方向からだから女は俺達に体の正面を向けてることになる。近づく度に徐々にハッキリとしていく体。シルエットではなく柔らかそうな白い肌色が見えて来た。湯気が上の方が濃いのか顔は

やはり見えない。だけど俺達にはそれでも十分だった。覗かれてることに全く気付いていない女は俺達の方に向いている。だから、細く柔らかそうな腕や足。控え目な胸、そして視線は胸より下、下腹部より少し下の……ゴホンっ。まぁとにかく少し刺激が強すぎる。

「鼻血出そう」
「俺何かとっくに出てる」

汚いなお前。隣りで鼻血出してる汚い奴は放置して、俺の目は女の体に釘付けになった。女の一挙一動に敏感に反応する目。綺麗だ。こんなに体が綺麗なのに顔が不細工な訳がない。意味不明な確信が俺の中にあった。だから顔は見えなくても十分だ。

ずし、ずし。

な、何だこの地響きは。新しい奴が来た見たいだけど……ゴツい。男だ間違いない。

「や、やべぇぞ」
「なにがだ」
「あのシルエットは……師匠だ」

シルエットであの腐れ坊主がわかるって……さ、さすが同じ坊主。そんなこと思いながら視線を女に戻す。

「っ！？」
「と、とにかく逃げるぞ」
「あっおい！」

彰が走りだしたから俺も仕方なくあとを追って行った。だけど俺

の頭の中ではあのハゲや彰のことは眼中になかった。ただ一つ。最後に見た女の背中。その綺麗な背中に彫られていた鬼の刺青が頭を占拠していた。

（あの鬼、何処かで……）

見られた。体を。正体を。
――背中の鬼を。
バシャァンと飼雲の顔目掛けて拳で水を切る。勿論ただの目眩ましだ。飼雲が水に気をとられてる隙にお湯からあがり背後をとる。
ピタっと飼雲の背中に張り付き首に右手を回す。回した右手の手首を左腕でしっかりと挟み固める。

「倉本殿、だな」
「ああ」

否定をしても見られた以上意味がない。無言なら肯定してるも同じ。だったら潔く認めよう。どうせコイツにはここで気を失って貰うんだ。失う数分前の記憶と一緒に。

「離す気はないのだな」
「悪いけど、気を失って貰う。記憶と一緒に」

飼雲は一言そうか、とため息混じりに呟いた。
飼雲の首を絞めてる右腕に力を込める。

「残念だ」

ズシリッ！　と言葉と共に何か重たいモノが俺の体を駆け巡った。
唐突な衝撃に腕の力が緩み、体は衝撃を少しでも逃そうと無意識に後ろへ吹っ飛ぶ。
体内から熱いものが駈け登って来る感覚に陥る。ソレは一瞬で俺

の喉まで達し、溢れ出る。

「うえっ」

苦しい。息が出来ない。吐いてる間に酸欠に襲われて息をしようと駈け登って来るものを無理矢理飲み込み、それでも息をする前にまたすぐにやって来て吐く。必死で鼻から空気を吸うけどそれでも吐いてるせいで微量だから苦しさは止む事をしらない。

全て吐き終わったあと、体が空気を求め、肺が一気に膨らんだ。一斉に空気を吸い込んだせいでむせ返りまた苦しくなった。

落ち着け。そうゲホゲホとむせ返りながら頭の中で自分に言い聞かせる。何が起こったか、頭の中はそのことと苦しさで一杯だった。

ズシンッ。

「ひっぁ」

地響きのように聞こえる飼雲の足音。ガバっと頭をあげる。飼雲がじっと俺を見下ろしていた。人間は理解出来ないことに恐怖する。この時の俺の頭は理解出来ないことだらけで飼雲に恐怖を覚えていた。

立てない。距離をとらないとヤバいことはわかっている。さっきのがまた来たら確実に気を失ってしまうだろう。距離をとらないと。焦るのは頭だけで体は全く言う事を聞かない。

こんなに人が怖いと思ったのはいつ振りだろうか。とうとう頭すら諦めたのかそんなことを考え始めた。

「倉本殿」

すらりと脳内に声が響く。不思議とその声に怒りという感情はな

く、優しさすら感じ取れた。だからだろうか、その声は俺の心を現実へと引き戻した。

「何故女子（おなご）だという己の身分を隠していたのかは聞かないでおこう」

飼雲の表情を見る。その顔から咎めるつもりがないことがわかった。ただいつもより少し真剣な表情だ。

敵わない。何をされたのかすらわからない上に俺の事情にまで気をつかってくれている。

「ただ、先程のようなことをされては困る。お主は、」

「ごめんなさい！」

ダンっと自分の吐瀉物で汚れた床に頭をつける。痛かろうが汚かろうが臭かろうがそんなの気にしない。飼雲になら、飼雲だからこそお願いしたい。頭と手をこれでもかってくらいぴたりと貼り付ける。

「飼雲先輩、どうかこのことは他の人には黙っててくれないか。皆を騙してるっていうのはわかってる。このままじゃダメだってこともわかってる。でも、今はまだ……」

「倉本殿、その理由は背中の刺青と関係あるのか」

「……はい」

「それはまだ言えないことなのだな」

「まだ、言えない。言う勇気がない」

嫌われそうで、離れていきそうで……。

「わかった。元々こういうのは本人の口から言うべきだ。我は何も言うまい」

「ありがとう」

顔をあげた。優しく口許を吊っている飼雲。見られたのがホントに飼雲で良かった。立ち上がりもう一度、今度は笑ってありがとうと言う。

「く、倉本殿」

急に引きつった表情をする飼雲。

「と、とにかく体を隠してはくれないだろうか」

体？

「……」

無言で桶を手にとる。お湯をすくい何度か頭から体にかけてバシャァとかける。

「く、倉本殿」

体や髪についた自分の吐瀉物を綺麗に洗い流したのだ。お湯に音をたてずに肩までつかった。

右手に空の桶をもち構えの体制に入る。

「見んなアホー！」

ガコォン！

言うまでもなく俺の投げた桶は飼雲の頭に直撃した。

普通なら躱せるんだろうけどそこは空気を読んだんだろう。

「てかお前はどうなんだよ」

「我か？」

確かに裸を見られた俺も恥かしいけど今どきふんどしっておかしいだろ。色々あって突っ込むの忘れてたけど、何でふんどし何て持ってんだ。

「いや、ここは混浴だからもしかしたら誰かいたら悪いなと思ったわけだ」

「だから何でふんどしなんだよ」

「いつもの下着だが」

……ダメだコイツ。時代錯誤してる。

それにしてもそっか、混浴なのかここは。

「そうか、混浴なら仕方ないな」

うん、見られても仕方ない。

「倉本殿は豪快だな」

「そうか？」

「ハッハッハ。では我も入らせて貰うとしよう」

飼雲が俺と少し距離を開けてお湯につかった。遠慮してんのかな。

「ここはいい。空気は澄んでるし、何より空が綺麗だ。そうは思わないか」

空、か。上を仰ぐ。果てしなく続く黒を蒼い月光が優しく照らし、無数の星達が自らの光で絵を書いてるかのように繋がりあっている。

確かに綺麗だ。俺達が住んでる場所からはこんな風には見えないだろう。夜の黒は眩いネオンにかき消されて、静かな時間は雑踏で無くなる。星達の絵も、街の光に比べたらか弱く、存在を隠している。建て並ぶビル群が空を仰ぎ見ることを忘れさせる。

別にそれが悪いとは思ってない。他の生き物にとっては知らないが俺達人間にとってはどんどん住みやすくなって行く。ただ、こういう静かな空間を忘れてはならないと思う。自然の雄大さを忘れてはならないと思う。あまりにも大きくて、綺麗な自然は心を癒してくれる。

「ああ、綺麗だな」

だけど、あまりにも綺麗過ぎて、寂しくなる。心にポッカリと穴が空いた見たいに虚しくなる。小さい自分を知って、何も無い未来を知らしめられて、泣き崩れそうになる。汚い俺達の街じゃ考えなくていいことを考えさせられる。

「ん？　どうかしたのか倉本殿」

「いや、別に」

空を見つめたまま動かない俺を不審に思ったのか飼雲が心配そうな声をあげる。

何だろうこの気持ちは。言いようがないこの気持ちは。理解出来ない。なのに温かい。

気付けば一筋温かいものが頬を伝った。

「……そう言う時もあるだろう。倉本殿、今は誰も見ていない、安心なされよ」

飼雲の声が心に届く。その声は俺の心の氷を溶かして入って来た。我慢、寂しい、恐怖、仕方がないと諦めて凍らせていた心の部分が溶けて行くのがわかった。そしてそれは言葉じゃなく、全てある形で現れる。

「ぁ、う……うぇ」

ゆっくりと、段々激しくと瞳から涙が溢れる。氷が一気に水になるように、コップから水が溢れるように。

空を仰ぎながら静かに泣く俺を飼雲は見ないでくれていた。その優しさがまた俺の涙を増やした。

霞んだ視界が映す空。蒼く白い月光は大きくぼやけ、光で絵を描いてる星ももう何を描いているかわからない。だけど、やっぱり綺麗なままで涙は暫く止まらなかった。

驚いた。葵の言っていた事はこういう事か。

『佳くんはおもしろいし誰にも言えない秘密をいっぱい抱えてるんだよー。見てて飽きないよねぇあーいうの。飼雲もいつか気付くよ』

ニヤリとどこまでも不気味な笑みをした葵が脳内に浮かびあがる。ふむ、秘密とやらはこれだけではないだろうな。

星空を見ながら咽び泣く倉本殿を見て思う。あの背中の刺青は、何故女子と言う事を隠していたのか、そして、言う勇気がないとはどう言う事なのか。

まぁ一番最後のは只今まで騙していた事への罪悪感かも知れぬが。大体何故男として生きなければならなかったのか。葵は何かを知っていそうだったな。相も変わらず不気味な奴だ。

「ぅあ、ぐすっ」

そう言えば葵はこうも言っていたな。”佳くんは強いよー”と。柳生殿達も皆倉本殿が強いと思っておる見たいだ。

だが、果たしてそうだろうか。我にはそうは到底思えない。何故なら目の前で泣いているのは紛れもなく只の一人の女子にしか見えないからだ。弱い所があり、そこを隠している。脆く儚い一つの命。皆と何一つ変わらない。何故倉本殿を皆強いと思う。何故特別視をする。只、倉本殿は人より我慢をしておるだけではないか。大好きな仲間にまで自分を隠して、罪悪感と戦い、弱音を吐くのを泣きたいのを必死で我慢しておるだけではないか。それを誰も気付いてあげられてないだけではないのか。ならば少し心配だ。今のように何

処かで泣かなければ、何処かで発散しなければ壊れてしまいそうだ。ぱんぱんに膨れた風船が勢い良く破裂するように、何処かで倉本殿の気が壊れてしまいそうだ。

でも、気付かないのも無理は無いのかも知れぬ。我だってこのような事にならなければ気付かなかっただろう。いつも強がっている事に気付かなかっただろう。

何故、誰も頼ろうとしない。何故、誰かにその身を預けようとしない。何が怖いんだ。何が不安なんだ。倉本殿、お主はどれだけ大きな秘密を抱えておるのだ。

今だに声を出して泣こうとしない倉本殿を見据える。こんな状態でも強がっている。もはや我に出来ることは何もないだろう。否、何かあったとしてもそれは我がするべきではない。

倉本殿から目を離す。せめて、この一時だけはゆっくりと泣かせていてあげたい。どんなに日頃強がっていても、おもしろくても、鬼の背を持っていても、やはり倉本殿は一人の人間の女子なのだから。

籠の中の鳥　紗織

「かごめ、かごめ」

”籠の中の鳥は、いついつ出遣る”

「夜明けの晩に」

”鶴と亀が滑った”

窓に掛けられた格子。五メートル四方の部屋。テレビやラジオとかそう言うのは存在しない。外界を知る物は一切存在しない簡素な部屋の中、私は唄う。読み上げるように、叫ぶように、風に乗せるように。

ドアには外から鍵、窓には格子。確実に出口の無いこの部屋にもう長いこといる。日付は忘れた。今日が何曜日なのかはわからない。一体何年ここにいるのかもわからない。ただ当たり前のようここに存在しているだけ。

何でここに存在しているのかもわからない。ただ、唄うだけ。格子から見える空を見上げ、目前に広がる森を眺め、誰かに届くように、誰かが気付いてくれるようにと願って唄うだけ。大声で叫んでも、大声で泣いても気付いてくれないのだから。

今日は満月だ。綺麗な、綺麗な月光。それが木々達に優しく降り注ぎ幻想的な眺めをつくり出している。

何だろう、この胸の高鳴りは。何だろうこの心の奥底から湧き上がる感情は。満月は何度も見て来た。月光に照らされる森も何度も見て来た。でも、初めてだこの感情は。

今日ならもしかして。

私は唄う。私はここにいるよ。気付いて。私はずっとここにいるよ。ずっと。ほら、アナタのすぐそばに。

「後ろの正面だあれ」

気付いてよ。

私は籠の中の鳥。飛ぶことを禁じられ、ずっとここに閉じ込められている。いつかここから出られる日を願って。いつか飛べる日を夢見て。

〝かごめ、かごめ。籠の中の鳥は、何時何時出遣る。夜明けの晩に。鶴と亀が滑った。後ろの正面だあれ?〟

「綺麗な声だね」

声をした方を向く。それは木々がちょうど無い場所、私の家の目の前。月の光が降り注ぐ。注ぐ光を受けてきらきら輝く甘いオレン

ジ色。私と同い年ぐらいの彼女はもう一度声を発する。この季節に不釣り合いな長袖を着て、一つしか無い真直ぐな瞳でしっかりと私を見て。もう一度私に話しかけた。

「綺麗な声だね」

私がまだ涙を流せる体なら、きっと前が見えなくなるくらい泣いているだろう。泣くことの出来ない私は体が震えるのを、声が震えるのを精一杯抑えながら言った。

「ありが、とう」

それでも我慢出来ずに少し声が震える。彼女はそんな私に、にこっと微笑みながら、どう致しましてと言った。

ここに閉じ込められてから人と話すのは久し振りだ。いや、家の外から話しかけられたのは初めてだ。この人なら私をこの檻の中から出してくれるかも知れない。

「アナタの名前は？」

私は何時からこの檻の中にいただろう。何時までいるのだろう。何時出られるのだろう。

春夏秋冬、朝昼夜、晴れた日、曇りの日、雨の日、雪の日、嵐の

日も、雷が鳴り響く日もあった。その全てを窓の格子越しに見て来た。家の前を人が通ったこともあったけど幾ら呼んでも誰も気付いてくれない。

私は何時までここにいるの？　何時になったら出られるの？　もう夜から明け方しか時間が無いのに。私をここから出してくれるのはだあれ。

「ボクの名前は汐姫」

「そう。私の名前は紗織。よろしくね汐姫」

「うん」

汐姫、それが私をここから出してくれる人の名前。

差し延べた手　汐姫

声が聞こえたんだ。いや、声じゃない。唄だ。暗く、悲しい唄だ。その唄が風の音と共に微かにボクの部屋まで届いた。窓を開けてなかったら気付かなかっただろうけど、よかった、気付くことが出来て。だってその唄はあまりにも悲痛な声で唄われていたから。泣きそうな、誰かを求めている声で唄われていたから。

音のする方へ歩いて行く。深い森の中へ。山で修行していたから夜の森には慣れてる。頭に来た道を叩き込んでいるから遭難することも先ず無い。だから安心して音のする方へ歩ける。

音が近くなっていく。悲痛な唄、寂しい唄、求めている唄、そして綺麗な声。何でこんな夜に唄っているんだろう。何で誰も気付かなかったんだろう。そんな疑問が頭に浮かぶ。

人の通る道とは思えない道、獣道を抜けるとそこは開けた場所だった。ボク達が泊まっている場所のように木々の無い開けた場所。そこに建っている一件の別荘。古びてもなく新しくもない別荘を見て変な思いが頭を過ぎった。

「ここだけ時間が経っていない見たい」

何だろう、ホントにそんな感じがした。

声が聞こえる二階を見る。格子がはめられた窓。そこに月を見ながら唄っている彼女を見た。年は同じくらいだろう。月明りを浴びてるせいかこんな夜中でもハッキリとその容姿が見えた。長い黒髪、病的な程に白い肌。そして、寂しそうに月を見つめる瞳。

似ている。そう思った。彼女はあまりにもボクに似ている。月を眺め、空に憧れる。誰にも届くことの無い手をずっと伸ばして、誰か握ってよ、この手をとってよ、と願う。

『誰か、この手を』

……ホントに似てる。ボクの時は佳様が手を差し伸ばしてくれた。佳様が寂しそうなボクの手を握ってくれた。今この娘に手を差し延べられるのはボクだけだ。何故かそんな確信がボクにはあった。

佳様見たいに上手く出来るかはわからない。佳様と違ってこの気持ちは確かに同情かも知れない。相手にとって余計なお節介かも知れない。でも、それでもボクは手を伸ばす。恐らく外を知らないであろう彼女に外を教えてあげる為に。いつまでも部屋の中で退屈そうな彼女に楽しさを教える為に。

「綺麗な声だね」

ボクは言葉と言う形で手を差し延べた。その手を彼女は同じ言葉で握った。佳様、ボクは頑張るよ。今日を合わせてあと二日しかないけど、ボクは頑張るよ。

「それでね、透麻ったら溝に片足入っちゃったの」
「ふふふ、おもしろいねその透麻って人」
「おもしろいよ。來優といつもケンカしてるけど」

あれから何時間経っただろう。話しこんじゃったな。紗織にはつまらない話かも知れないけどそれでも紗織はちゃんと聞いて笑ってくれている。家に入るわけにはいかないから外から話すことしか出来ないけど、今はそれでも良い。次来た時に外に連れだそう。もちろんちゃんと家に入って良いか聞いてからだ。

「そうそう、透麻の携帯電話を城道が壊したこともあったなぁ。城道は機械が苦手だから」
「けいたいでんわ？」
「うん。知らない？　電話とかメールとか送れる物だよ」
「めえるって何？」
「手紙だよ」
「そうなんだ」
「しかもすぐ届くんだよ。一分もあったら相手のところに届くよ」
「わぁっ、凄いねそれ！　私も欲しい」

なんだろう。この違和感。ボクと同い年くらいの筈なのに話が噛み合わない時がある。知らないことが多すぎる。紗織は、そんなにも小さい時からあそこにいるのかな。そんなの悲しすぎる。

「紗織、花火って知ってる？」
「花火？　知ってるよ」
「明日花火しない？　佳様達も呼ぶから皆でしよ」
「……うん」

「ボクがそこから出してあげる。一日くらい出たって怒られないよ」
「……でもどうやって？」
「ボク鍵開けるの得意だから」
「ふふ、それじゃ泥棒じゃない」
「あはは。じゃあ紗織を盗みに行くよ」
「うん、待ってるよ可愛い泥棒さん」

にこりと笑う紗織の顔。ボクも負けないくらいにこりと笑い返す。
明日花火をする時は紗織の笑顔をもっと近くで見たい。その為には何が何でも紗織を盗まないと。あはは、ボク、ホントに泥棒見たい。

「ねぇ、汐姫。もっと話を聞かせて」
「うん」

驚いたな。外はもう知らない物ばかりみたい。それを知れて嬉しい。汐姫の話は退屈じゃない。知らない物を教えてくれるし、汐姫の友達はおもしろい。こんなに楽しいのはまだ外にいて友達と遊んでいた時以来だ。

汐姫は好きだ。私に楽しさをくれるし、私を助けてくれる。でも、好きだからこそ……花火をするって約束したからこそ、汐姫には私を助けて欲しくない気持ちが出て来た。

ここから早く出られることを望んでいたのに……。凄いよ汐姫は。たった数時間なのに初対面の人をこんな気持ちにさせるなんて。

「でね、佳様ったら透麻の目に落書きして授業中寝てもこれで大丈夫とか言うんだよ」

「ねぇ汐姫」

「ん、なに」

「さっきから名前が出てくる度に思ってたんだけど、何で佳って人だけ様をつけてるの？」

「……ボクの大好きな人だから」

汐姫の大好きな人。話を聞いてるうちじゃおもしろい行動をとったり奇抜な発想で周りを振り回す人見たいだけど、何で汐姫がそんな人を好きになるんだろう。汐姫の友達もそう。皆なんだかんだ言って佳って人から離れていない。佳、か。不思議な人みたい。

「佳様はボクを助けてくれた人なんだ」

切なそうに、愛しそうに月を眺める汐姫。きっと汐姫の瞳には月なんか映ってない。映っているのは佳って言う人の顔……たぶん。

「ボクもね、小さい頃一日中ずっと部屋にいたんだ。病気でね、親が心配して幼稚園に行けなくて、ずっと家の中だったんだ」

「汐姫が一人だった？」

「うん。毎日が暇で、毎日が色褪せていて、毎日が空を見て過ごす日々だった。そして、そんな日々から助けてくれたのが佳様なんだ」

そっか。だから汐姫には聞こえたのか。だから汐姫に届いたのか、私の唄が。汐姫と私は似てるんだ。同じ籠の鳥だった。ただ籠が違うだけ。ただ、閉じ込められている理由が違うだけ。汐姫のことがもっと知りたい。汐姫の友達のことがもっと知りたい。初めてだ。こんなに人に興味をもったのは。

「汐姫、その話もっと聞かせて」

「いいけど、面白くないよ」

「いいよ。私はもっと汐姫達のことを知りたい」

ただ純粋に。汐姫は月を眺めると懐かしそうな表情をして、私に視線を戻す。そして、恥ずかしそうに自分の過去を話し始めた。

月下の出会い　汐姫

ピピピピピッ、ピピピピピピピピッ、ピピ。

うるさい。手探りで目覚まし時計を探し、止める。朝か。今日もまた始まった。昨日と同じ、一昨日と同じ、ずっと同じ色褪せた日々が今日も幕を開けた。

トランプにボードゲーム。テレビにゲーム機。遊び道具はいっぱいある。この部屋にいたら毎日遊ぶのには困らないだろう。ゲーム等に飽きたら絵本だって沢山置いてある。でも、やっぱりそれだけだ。絵本はもう全部読み飽きた。何十個もある絵本を全て何十回読んだ。ゲームも一人用は全てクリアした。最初こそはそりゃ一人でもある程度楽しかったけど今となっては全然楽しくない。テレビだってよくわからない番組ばっかだ。

「……はぁ」

コンコン。

「どうぞ」

「おはよう御座いますお嬢様」

ドアを開けて若い女の人が入って来た。名前は茜（あかね）。パパがボクの為に雇ったメイドさんだ。メイド服に身をつつみ、黒い長髪にカチューシャをしている。性格は優しくて本当のお姉ちゃんみたいだ。

「おはようあかねさん」

でも、所詮はメイドだ。本当のお姉ちゃんにはなれないし、友達にもなれない。だってボクの世話をするのが仕事だから。どれだけ遊んでくれてもそれは本心ではない。それに他の仕事がいっぱいで遊ぶ時間さえあまりない。

「お嬢様カーテン開けますね。今日は良い天気ですよ、陽射しもよくポカポカします」

「そう」

いい天気だろうが関係ない。ボクはどうせこの窓から眺めているだけだもの。雨降ったって困るわけでもないし、晴れだからって外に出れるわけでもない。

「ではお嬢様、朝食を持ってくるので歯磨きをして待っていて下さい」

「うん」

茜さんはそう言うと一礼して部屋から出て行った。

窓から陽の光が差し込む。外からはボクと同い年ぐらいの子から高校生くらいの人の元気な声が聞こえてくる。

嫌だ。聞きたくない。他人の幸せそうな声なんか聞きたくない。カーテンを閉め、耳を塞ぐ。ベットの上で暫く蹲りいつもと同じようにどうしようもないことを考える。

何でボクだけ……。

バカらしい。そんなこと考えても考えても答えなんか見つからないのに。

声が遠のいて行く。耳から手を退け、ベットから出る。言われた通りにしなくちゃ。洗面台へとトコトコと歩いていき、鏡に写る自分の顔を見る。楽しくなさそうな顔。可愛げのないつまらない奴の顔がそこには写っていた。

もう暫く家から出てないせいか腰まで伸びた真っ黒な髪の毛。まともに陽の光を浴びてないせいか病的なまでに白い肌。園児のボクでもわかる。ボクは普通じゃない。普通の人みたいに外に出られないし、普通の人みたいに毎日パパやママといない。当然友達もいない。パパとママは仕事で仕方ない。小さなボクでもそれはわかっている。だからパパとママには毎日会えなくても仕方がないって割り切っている。ボクが病気でパパとママが心配してボクを外に出さないってことも仕方がないと割り切っている。そのせいで友達がいないのも割り切っている。そう、ボクは全てをもう心のどこかで諦めている。

オレンジ色の可愛いらしい歯ブラシをとる。口にいっぱいの水を含みそれを口の中で転がしたあとペッと吐く。歯ブラシに歯磨き粉をつける。いちご味の子ども用の奴だ。ただ子ども用でもボクには刺激が強すぎる。すぐに口の中に水を含み歯磨き粉を落とし、一緒に吐き出す。それからうがいを何度か繰り返して歯磨きは終了だ。口をタオルで拭いてると茜さんが入ってくる。これも昨日と同じ。

「お嬢様、歯磨きは終わりましたか？」
「うん」
「じゃあご飯の準備が出来ましたので行きましょうか」
「うん」

昨日と同じ言葉、ただ違うのは昨日はパンとスープだったのが今日はご飯、味噌汁、魚だってことくらいだ。一応毎日ご飯は違う。でも、味は同じだ。同じ美味しくない味だ。どんな豪華な物を出されても、どれだけ好きな食べ物を出されても、全部同じ。美味しく

ない味。一人で食べるご飯はそんな味しかしない。皆ボクが食べるのを見てるだけ。顔色を伺うように、腫れ物を触るように。ボクに何かあったらパパやママに怒られるから。

ボクのせいで迷惑をかけるわけにはいかない。だからボクは今日も言う。昨日と同じ、今までとずっと同じ言葉を。

「ご馳走さま。美味しかった。ありがとう」

この言葉を聞いた瞬間作った人は安堵のため息を漏らす。そして、また同じ言葉を機械のように繰り返す。

「有り難う御座いますお嬢様」

このやり取りで皆困らなくてすむ。食べ終わったら自分の部屋へと戻る。あとは昼ご飯を待つだけだ。昼ご飯を食べたら晩ご飯を待つ。晩ご飯を食べたら寝て朝を待つ。ずっとこれの繰り返し。待つ間は窓から外を見る。人を見る。鳥を見る。空を見る。何も考えずに、ただじっと見つめる。それだけの日々だ。

何日もずっと人を見ていると自然に顔を覚えてしまう。その人が通る時間を覚えてしまう。だからボクの家の前を通る人達は殆ど覚えている。覚えていると行っても顔だけだけど。今日も同じ。見知った人が見知った服を着て見知った速さで歩いている。空も同じ。同じように晴れたり、同じように曇ったり、同じように雨が降ったり……。ボクはそれをずっと部屋の中で見ている。何も考えずに。何も考えられずに。

そして今日も同じように終わって行く

――筈だった。

夜、九時半ぐらいにボクは何となくカーテンを開けて外を見る。ホントに何となくだ。何時もなら布団を被って寝てる筈の時間。何故か今日は寝れなかった。だから眠くなるまで空でも見て時間を潰そうかと思っただけだ。

月を見る。綺麗だ。綺麗な満月がそこにはあった。堂々と、他のどの星よりも綺麗に強く輝いている。数十秒、ほんの数十秒だけ月が雲に覆われ陰る。月が見えなくなったからボクは家の前を見下ろした。月が隠れなければボクは見なかっただろう。ボクは出会わなかっただろう。

月がもう一度姿を現し地上を照らす。月と同じくらいに輝く首までの銀色の髪。きらびやかな和服に身を包んだ長身の男の人。その隣りでトコトコと歩く子供。ボクと同じ歳ぐらいだろう。恐らく二人は親子だ。だけど、父親の方とはその子は正反対だった。ツギハギのみすぼらしい和服。きらびやかに輝く銀色ではなく、どんよりとしたどこまでも黒い真夜中を具現化している様な真っ黒な髪。その中で妖しく光る赤い髪。とてもじゃないけど綺麗とは言えない。言えない筈なのに、

「きれい」

呟いてしまった。思ってしまった。思わない筈の言葉を。誰がどう見ても綺麗なのは父親の方なのに。

カタッと窓に指が当り音をたてた。小さな音だけど何故かボクはドキリとした。気付かれてないかな。恐る恐る親子を見る。親子は何も気付かない様子で歩いていた。

よかった。気付かれなかった。

「……ボク、なにしてるんだろ」

バカらしい。そう思ってカーテンを閉めようと、手を伸ばした。

「っ！」

目があった。あの子供がこっちを向いていた。ばちっとボクと子供の目線が交わる。数秒だけ時間が止まったかのように感じ、気付くとボクはカーテンを閉めていた。

「……おなじ、め」

目があった子供の顔を思いだす。人形のような綺麗な顔。だけどつまらない、今を諦めている顔。あの子供はボクと同じ、つまらない顔をしていた。

あんな子、初めて見た。家の前で見たのも初めてだし、ボクと同じつまらない顔をしている人を見るのも初めてだった。

「……ねよう」

そうだ。だからなんだ。だからどうなるんだ。何も変わらない。あの子供を見たからってこれからが変わるわけじゃない。

瞼を静かに閉じる。眠気が襲って来る。そのままソレに身を預け、ボクは寝た。今までと変わらないであろう朝まで。

そう言えば、今日は少し違ったな。今までの今日と少し違った。時間でいうとほんの数分だったけど……確かに違った。小さな、ホ

ントに小さな小さな変化。

おやすみ。意識が途切れる寸前、ボクは変化に別れを告げた。

救いの手　汐姫

ピピピピッピピピピ！

「う、ん」

朝、か。今日もまた繰り返しの朝が訪れた。

「はぁ」

やる気の無さと体の怠さで何となく布団から出たくない。でもそんなわがままも言ってられないだろう。もうすぐ茜さんがボクを起こしにやってくる。その前にベットから起き上がり、うるさい目覚ましを止めなくちゃいけない。茜さんの仕事を増やすわけにはいかないから。

コンコン。

「お嬢様、朝ですよ」

目覚ましを止めたタイミングで茜さんがやって来た。今までと同じことをして、今までと同じ歯磨きをするよう促す。そしてボクも機械のように同じ行動を繰り返す。

朝八時半。美味しくも不味くもない朝ご飯を食べ、恒例の言葉を放ち部屋に戻る。

ガチャリ。

自室の部屋のドアを開ける。昨日よりも良い天気のせいか部屋に入った瞬間に太陽の光がボクを迎えた。ちかっと赤い眩しさからか一瞬目を閉じた。

ん、赤い？

目を開ける。窓の前を凝視する。陽の光を背に浴び、窓に座っている子供。赤い髪が光を利用し輝きボクの目をまた照らす。

「……きれい」

また呟いてしまった。窓の前の子供はその言葉を聞くとにこっと笑い、

「だろ」

そう一言言った。憎らしい程真直ぐした目で、つまらないボクの顔を見てそう一言。

数秒たって冷静になる。そうなって見るとさすがに今の状況がおかしいことに気付く。この子供は勝手に入って来た。何が目的？決まっているお金だ。小さいボクでもわかる。ボクの家はお金持ちだ。いや、泥棒なわけがない。こんな小さい子供がそんなことするわけがない。でも、とにかくやることは決まっている。

「あかねさん！」

人を呼ぶことだ。ボクは茜さんの名前を叫んだ。すぐにドタドタと茜さんが走って来る音が聞こえた。滅多に大声を出さないボクが叫んだんだ。何事かと思い急いだんだろう。叫んで数十秒もしない内にドアがバンッ！　と荒々しく開けられる。ドアの方を見ると茜

さんが肩で息をしながらボクを見た。

「ど、どうしたんですかお嬢様」

「まどのところにへんなこどもが」

ボクはすぐさま窓を指差した。

「子供……、ですか？　お嬢様どこにいるんですかその子供は」

「あ、れ」

いない。さっきまでいたのに。窓から飛び降りた？　でもボクの部屋は二階にある。子供が飛び降りれる筈がない。じゃあどこに？　思えば窓のところにいたのもおかしい。窓は確かに開けて出たけど、この部屋まで外から来れるわけがない。だったらあの子供は何だったんだろう。

「もうお嬢様、遊んで欲しいのなら言ってくれればいいんですよ。そんな嘘つかなくても私は遊んであげますよ」

窓をパタンと閉めて茜さんが言った。

嘘じゃない。嘘じゃないのに……。

「ほら、ベットもこんなしわだらけにして」

茜さんがベットの布団を掴んだ。そしてしわを伸ばす為にバサっと上下にふった。

「あ、おじゃましてます」

「あら、いらっしゃい」

……いた。

「……って誰ですかあなたは！」
「よしっていいます。よろしく」
「あ、これはご丁寧に。私は茜って言います……じゃない！　何処から入って来たの！」
「あかねさんそのこだよ、へんなこども」

変な子供はどうやらボクが窓から目を離した隙にベットに隠れていたようだ。だからベットがしわくちゃになってたのか。

「どこって、まどから。そんなことよりおまえなまえは？」
「ボク？」
「ああ」

名前、か。自分の名前を聞かれるのは久し振りだなぁ。

「ボクのなまえはゆうき」
「ゆうき、か。よし、ゆうきあそぼう」
「えっ」

遊ぼう。誘われた。ボクが、遊びに。

「……う、うん――」
「何を言ってるの。お嬢様はあなたとは遊べないの。さぁ来なさい」

茜さんがよしの首ねっこを掴み引きずっていく。

「……」

下を見る。泣きそうで。そんな顔見せたら茜さんが困るから、ボクは下を見た。

「ゆうき！」

ビクっと体が反応する。よし、怒ってるんじゃ……、無理矢理引きずられて怒ってるんじゃないかな。どっちにしろもう二度とボクのとこには来てくれないだろう。

「またくるからな」

ばっとよしを見た。

何で、何であんな顔が出来るんだろう。にっと笑いながら、引きずられながら手をふっている。その子供は昨日見たつまらない顔とは違って、とても楽しそうにボクを見ていた。

「ねぇよし、なんでボクのところにきたの？」

「んー、さいしょあったときたすけてっていわれたきがしたから」
「たすけて？」
「うん。だからいった……ていのはうそで、おもしろそうだからいった。つまらないやつだったらいかなかったよ」
そっか。助けて、かぁ。確かにボクはそう思ってたのかも知れない。何もかも諦めた気でいたけど、気付かない内に、手を伸ばしてたのかも知れない。誰かこの手をとって、誰かボクをここから出してって。
「手を差し延べてボクの手をとってくれたのは佳様だったんだ。一度目があっただけでボクの手に気付きボクを助けてくれたんだよ。もう運命感じちゃうよね」

「そこで好きになったの？」
「……うん。でもね、その時の好きは友達としての好きだったんだ。恋愛の好きになったのは違う時なんだよ」
「違うとき？」
「……うん」

もう一度助けてくれた時……、ボクの中の感情が変わったんだ。

「あ、汐姫そろそろ帰らないと」
「ボクはまだ大丈夫だよ」
「ううん。ダメだよ。……もうすぐ夜が明けるから」

……眠いのかな？

「わかった。じゃあまた来るね」
「うん。ありがと汐姫楽しかった」
「ボクも楽しかったよ。バイバイ」
「バイバイ」

佳様、ボクはいつまでも大好きだよ。ボクを救ってくれたあの日からこれからもずっと。佳様は知らないと思ってるかも知れないけど、ボクは知ってるんだよ。でも、例え結ばれない恋でも、例え認められない恋でも、ボクは諦めない。だって別に男と女しか愛し合えないなんてことはないんだから。同性でも、ボクと佳様なら愛し

合えるよね。ボクの愛は性別なんてそんなモノ超えてるもん。

「ね、佳様」

ボク達は皆佳様のことが好きなんだよ。形は違うけど、皆好きなことに変わりはない。

ボクは佳様を狂愛している。その派手な髪も、綺麗な柔らかい肌も、小さいけど形のいい胸も、細くて長い指も、すらりとした足も、形の綺麗な透明な爪も、肩の小さなほくろも、よくわからない背中の刺青も、ボクは好きだよ。佳様のなら髪の毛も眉毛も睫毛も匂いも……佳様の一つ一つが大好き。

「あは、ボクって一途だなぁ」

知ってるよバカ　透麻

……あー、朝か。えーと、そうか、ハゲ部（※違う）との合宿だったな。

「いててて」

完璧に筋肉痛だな。動くと痛い。これはアレだ。まだ寝とけって神様が言ってんだな。うん、てことでおやすみ。

ミーンミンミンミーン。

「ごがぁ、ぐぅ～」

……。

ミーンミンミンミンミーン。

「ごぐわぁあ、ぐうぅ～」

……。

ミーンミンミンミンミンミンミーン！

「ごぐわがぁあああ！」

「っるせぇ！」

ガバーッと起き上がる。おかしいんじゃないのか！？　何で寝ようとしたらこんなうるさい刺客がいるんだよ。

「ウゼーんだよ！」

蝉！

「と彰ぁああ！」

枕をまだ気持ちよさそうに寝てる彰に投げ付ける。有り得ないだろあのいびきは！

「ブヘッ！」

顔面直撃。俺ってピッチャーの素質あるかも。とまぁそんなどうでもいいことはおいといて、持って来といてよかったぜ殺虫剤。バックの中にある殺虫剤を片手に勢いよく軒下にでる。

ミーンミンミンミーン。

「死にたいんならそのまま鳴いとけ」

ミンミっ……。

「よし」

ものは試しだな。蝉と穏便な交渉を終えて俺は自室へ戻る。彰の顔面に乗っかってる枕を奪い取り、自分の布団に寝転がる。

「ふぅ、これで静かに寝れる」

瞼を閉じていざ夢の世界へ、

「ごがぁあああああ」

ブチッ！

やっべぇ、血管切れそうだわぁ。コイツどこまでも俺の邪魔をしやがって。

「ぶち殺す！」

ハッハッハ。今ならわかるぜ犯罪者諸君。カッとなってついやりました。悪気はなかったんです。まさにその通りだよなぁ。トランクス一丁で寝てる彰の所まで行く。

ボキバキ。

あー、指の関節が気持ちいいくらいになるなぁ。思えば彰とも昨日色々あったけど……。

「じゃあな彰」

ガララ！

引き戸が開いた音。誰だよ今良いとこだったのに。

「ちっ、誰だ邪魔する奴は……、來優？」

來優だ。髪が乱れ、寝間着のジャージも情けなく乱れた來優がそ

こにはいた。寝癖なのか所所に跳ねた髪の毛、どうやったらそうなるのかわからないくらい乱れてるジャージ。鎖骨は見え胸の谷間が微かに見えている。ズボンも少しずれているのか白い下着の上の部分が見えている。ヤバい、忘れてた。

「とうまぁ？」

コイツ、寝起きがクソ悪いんだった。寝ぼけた眼で俺を見たあとヨタヨタと危ない足取りで寄って来た。

「しょうぶらぁとうまぁ」
「うるせー。さっさと戻って寝てろ」
「うるしゃいうるしゃい、しょうぶらぁ」

……ウゼー。汐姫は何してんだ。

「しょうぶしょうぶしょうぶ～」

ポカポカと俺を殴ってくる來優。はぁ……、マジ殴りたい。あ、殴ったら目ぇ覚ますかな。うん、そうだそれが手っ取り早いしな。殴るか。

「う、うーん、っも、守山っ！　何でここにっ！？　てか胸見えるぜ、パ、パンテ」
「寝てろハゲ」
「ィ！」

起きて来た彰の頭にかかと落としをお見舞いした。ったく、情けないな。見られてんじゃねぇよバカ來優。

「しょうぶ……んにゃ、すー、すー」

殴っていた來優の体が倒れて来た。寝やがった。殴るだけ殴って寝やがったぞコイツ。

「はぁ」

ったく、手のかかる。

「おら」

俺の胸にもたれかかっている來優の体を背中に回す。腕を俺の首から前に回し、足を持ち上げる。まぁようするにおんぶだな。

「部屋行くから落ちんなよ」

「ん～……」

「ホントにわかってんのかコイツ」

「とうまぁ、しょうぶ……」

夢でまで勝負かよ。ホントにバカだなコイツは。

「はいはいまた今度な」

「……かったぁ、とうま、ざこ」

誰が雑魚だバカ。

「……にしても重いなぁ」

やっぱり胸のせいじゃねぇのか。胸がでかいってのも困るもんなんだな。まぁ來優の場合身長のせいもあるか。でも、それでもやっ

ぱり女だなぁ。柔らかいし、男よりは軽い。

「お前は凄いな」

こんな体で俺とやり合ってんだもんな。あの生徒会の男の時も倒れたって一歩も引かず……。

「十分男より強いよお前は」

こんなの來優が正気の時には言えないけどな。それにしても……。

「重いなぁ」

「柳生殿、朝餉（あさげ）の用意が出来たから集中はその辺りにして食べにいこうではないか」
「わかったのだ。でももう少しやってから行くから先に行ってて欲しいのだ飼雲先輩」
「うむ、わかった」

わざわざ呼びに来た飼雲先輩には悪いけど、もう少し無我の境地をやっておきたい。再び集中する。寺のお堂の真ん中で座禅をし目を閉じる。お堂全体の気を敏感に感じる。この状態になったらお堂に蚊が入って来ても気付くのだ。それほど僕の無我の境地は凄いのだ。

「……っ！」

飼雲先輩を思いだして目を開ける。先程飼雲が出ていったであろう正面の入口に目をやる。おかしい。僕は今もさっきも無我の境地

に入っていた。なのに、なのに何故飼雲先輩に気付かなかった。入って来たのも、出ていったのもわからなかった。僕に気付かれないでお堂を出入りするなんてそんなことが出来る筈がない。

「まさか……テレポート」

いや、でもだったら何故僕は声をかけられるまで気付かなかったのだ？　そうか別の次元から声をかけ、その瞬間に僕の前に出てくれば僕は気付かないのだ。もしホントにそんなことをしたというのなら……。

「飼雲先輩はもしかしたら宇宙人なのかも」

……なわけないか。そもそも飼雲先輩からは宇宙人って感じがしないのだ。何だろう、もっと別の何か……。

「父親？」

自分で言っときながら笑える。父親？　確かに飼雲先輩は僕より年上だし髪の毛無いし少し老けてるけど父親ってよりは近所のおじさんなのだ。もしくは住職なのだ。

「あははっ」

お経を読みながら木魚を叩いてる飼雲先輩を想像して笑ってしまう。似合いすぎなのだ飼雲先輩。

ぐぅー。

笑っているとお腹から音がなった。どうやら僕の体はご飯を要求

しているみたいなのだ。

「……あやぁ、お腹減ったのだ」

ご飯の準備が出来たと言っていたことを思いだす。未だぐぅぐぅなってるお腹を手で抑えながら歩いて行く。ふらふらとした足取りで、頭の中では美味しいご飯を想像して。朝ご飯が楽しみなのだ。

宇宙人？　父親？　城道（後書き）

【次回予告】

「や、やめるのだ、やめるのだぁあああああ！」

ドアの隙間からかいま見えた惨状。飛び散った肉片。こぼれ落ちる内臓。血が滴る刃物を手に犯人は薄笑いを浮かべる。叫んだ僕の方を見つめる犯人は狂喜に満ちた瞳を細め、転がっている肉片や内臓を踏みながら歩み寄って来る。次の標的――僕のもとへ。

「な、んで……なんでなのだ」

ブシュッ。

左目に何かが入って来る。痛みと熱が僕を襲った。

「以上、全部嘘なのだ」

恩返しらしい……　城道

「な、なんなのだこれは」

目の前の食卓の上に並べられた”モノ”を見て思わず呟く。さっきまでうるさい程にご飯を求めていた僕のお腹も急に静かになった。

「これは……残飯？」

「師匠ちょっとゴミ箱とお皿を間違えてますよ」

彰と幸樹がエプロンを着ている飼雲先輩の顔を見て言う。飼雲先輩の料理がここまで酷いとは……これじゃ僕が作った方がまだマシなのだ。

骨が殆ど露わになっている魚、の上にかけてある何やら黒い液体にその上にのせてある紅生姜。あさりとわかめと豆腐が入っている緑色のお吸い物。恐らく味噌汁なのだろう。それに湯飲みに注がれている飲み物はぶどうジュースでデザートはレモンとオレンジ。

茶碗に入っている白米……それが凄く美味しそうにみえる。

彰と幸樹はさっき見たいに信じたくないような表情で飼雲先輩を見て、北斗は考えることをやめ真っ白になっている。來優はどうやったらこんなモノが作れるのかぶつぶつと本気で考えていて汐姫は今日も良い天気だね、と目の前の現実から逃げている。透麻は何故か半分泣いている状態で腕で目をごしごしと擦っている。そして泣きそうな声で、

「うっ、か、感動した。まさかこんなに他の素材を殺してただの米を国宝級に美味く見せる方法があるなんて……、ハゲ坊主、アンタは天才だよ。あのクッキング〇パを越えてるよ」

いや、遥かに下回っているのだ。クッキング○パ以前にただの料理下手な人すらを遥かに下回っているのだよ。

「い、いやこれは我が作ったのではなく、どうしても自分が作りたいと言う人がいて」

「それは誰ですか師匠！」

「おらぁ出てこいやぁ！」

幸樹と彰が飼雲先輩に詰め寄る。飼雲先輩、自分が作ってないのなら何故エプロンを着ているのだ。

「……俺だけど」

台所へと続く扉から佳が出てきた。相変わらず何を考えているかわからない無表情の佳がエプロン姿で名乗り出た。

「倉本テメェかぁ！」

「こんなモノ食べられるわけないでしょう！」

彰と幸樹が料理を持って佳に歩み寄る。ああ、そんなことしたら。

「おいテメェら！」

「佳の作った料理が食べれねぇのか！」

來優と透麻が二人の胸倉を掴んだ。今にも殴りそうな雰囲気だ。そのせいで二人が手に持っていた料理が床に落ちた。やっぱりこうなったのだ。早く二人を止めないと。

「ああ？　お前らだってさっきバカにしてただろ」

「そうですよ。ワタシ達が貴方達の言葉を代弁してあげたんじゃないですか」
「なっ！　俺達はバカになんかしてねぇよ」
「そうだそうだ。むしろ目茶苦茶食べたいわ」
「じゃあ食べて見ろよ」
「そうですよ、どうぞ」

そう言いながら彰と幸樹は床に落ちてバラバラになった魚を指差した。透麻と來優がその言葉を聞いてちょっと戸惑う。

「佳様が作った料理が落ちちゃったよ。何してるの、皆？　その魚見たいに切り刻まれたい？」

そうだった。止めるのは二人じゃなく三人なのだ。汐姫が何処からか包丁を取り出しそう言うのでシーンとした空気が流れた。

「……悪い」

そんな空気を壊したのは佳だった。

「こんなモノ食べれるわけないよな……作りなおすから待っててくれ」

いつもと変わらない声色で床に落ちた魚を手で拾っていく佳。長い髪が顔を覆い隠しどんな顔をしているかわからない。声はいつも通りだ、おかしい程に。

「ったく、しっかりしろよ部活部の部長さん」
「本当です。今度はもっと食べれそうなものを作って下さい」

しゃがんでバラバラになった魚を一つ一つ拾っている佳に彰と幸樹が言葉を放つ。怒るつもりはない。確かに他の人からしたら朝ご飯を待たされる上に一つも反省をしてない、そんな風に見えるのだから。だから怒るつもりはない……、けど。

二人の肩をグイッと掴み後ろに引っ張る。急に引っ張られ二人はそのまま抵抗することも出来ず後ろに流される。佳のそばから離される。

佳の手からバラバラになった魚を一つ摘み口にいれる。

ぱくっ。

「ん、おいしいのだ」
「城道……」

ぱくっ。

「おう、うまい」
「おいしいよ佳」
「おいしいです佳様」
「透麻、來優、汐姫」

床に落ちバラバラになり、佳の手の平に全てバラバラのまま集まっていた魚が無くなった。バラバラの魚は僕達の中に一つずつ入っていった。

「皆……ありがと」

にこっと優しく微笑んで佳は言った。その笑顔に僕達も笑顔で返す。

「あ、本当だ。これ美味しいですよ」
「うむ、我も美味しいと思う」
北斗と飼雲先輩も箸で魚を摘み食べたらしく声をあげた。
「倉本殿、早くエプロンを脱いで手を洗ってきなさい。皆で食べよう」
いつの間にかエプロンを脱いでいた飼雲先輩が笑いながら言った。
「ありがと」
一言そう言い残して佳は台所へと向った。
「ありがとなのだ飼雲先輩、北斗」
佳の料理はお世辞にもおいしいとは言えない。見栄えも悪いし組み合わせも悪い。和食なのに飲み物がぶどうジュースでデザートがレモンとオレンジが出るくらいだ、何となくわかるだろう。なのに飼雲先輩と北斗は美味しいと言ってくれた。それは本当に僕達には嬉しいことだった。飼雲先輩と北斗は佳の頑張りを知ってくれた。魚を拾っている時の佳は声は変わらなくても微かだけど手や肩が震えていた。それに手にも昨日はつけていなかった絆創膏をつけていた。それだけで佳がどれくらい頑張ったかはわかった。だから佳の料理は僕達の心においしいと感じさせたのだ。
「いや、感謝等されるいわれはない。我らは謝らないといけない。彰と幸樹がバカなことを言って悪かった。すまない」
「なっ、師匠何故謝るのですか」

「そうだ。俺達は一般的な意見を言っただけで、」
「黙れ！」

飼雲先輩の怒鳴り声に彰と幸樹は押され静かになった。

「確かにお主らは一般的な意見を言った。それを間違えているとは言わない。しかしなお主らの意見はこの場にふさわしくない。何も知ろうとしない愚鈍な者がする意見だ。気付いたか？　倉本殿の肩が震えていたことに。倉本殿の手に貼ってあった絆創膏に」
「うっ……それは」
「でもそんなもの気付いたって不味いものは不味いとしか」
「食べてなかろうお主らは。倉本殿の頑張りに気付き、食べていたのなら不味いと思ってもそんな言葉は声に出ない筈だ」

彰と幸樹は何も言えなくなってうつむいたままだった。

「……倉本殿は四時から作っていたそうだ。料理の才能にとことん恵まれなかったのだろう。何度も何度も失敗したそうだ。そこの米も何度も失敗してようやく出来たものだそうだ」

そうなのだ。佳は昔から料理とかそういった家庭的なものは苦手だったのだ。

「何時間もかけて今の料理が出来た時倉本殿は嬉しそうに”これで少しでも喜んで貰えたら嬉しい”と言っていた。我らに言った言葉でもあるし、柳生殿達に言った言葉でもある。感謝したいそうだ。合同合宿をしてくれた我らに、いつも一緒にいてくれる柳生殿達に。だから早起きをし、馴れない料理を何度も失敗しても精一杯にやった。これは倉本殿に教えて貰ったのだが……気付いたか？　茶碗に丸められるように入ったその白米は我らをイメージし作ったらしい。

そして緑色の味噌汁は海本殿、紺色のぶどうジュースは柳生殿、黄色のレモンは守山殿、橙色のオレンジは蒼空殿をイメージしたそうだ。それほど倉本殿は我らのことを想って作ったわけだ」

佳……。

「あはは」

嬉しいのだ。

「うー、佳ぃ」

「佳様ぁー」

「うわっ泣くなよお前ら。來優、鼻水出そうになってるぞ。汐姫は……おい何処にそんなに凶器を隠してたんだよ」

汐姫の足元にカッターナイフやら包丁やらナイフやら刃物の類が十数個転がっていた。一度汐姫とは銃刀法違反について話あう必要がありそうなのだ。

「手、洗ってきた。どうしたんだ、來優、汐姫」

佳が台所から戻って来た。まぁ來優と汐姫が気になる気持ちはわかるのだが。

「何でもないのだ。それより早く座るのだ佳。僕もうお腹がすいてたまらないのだ」

「ん、わかった」

その前に、と佳は自分の魚を半分に箸で割り彰と幸樹の皿に置いた。

「さっき落ちたから……迷惑、かな」

余計なことを言ったら殺す、そう言った視線が彰と幸樹に向けられる。まぁ視線を送っているのは透麻と來優と汐姫の三人だけなのだ。彰と幸樹はその殺意の視線と先程の話から断るわけにはいかず、ありがとなと引きつった笑顔で言った。

「うむ。じゃあ皆食べようではないか」

飼雲先輩のその言葉を合図に一斉にいただきますと言ってからご飯を食べ始めた。

その後……　透麻

「ハァ、ハァ、くっ、もうリタイアか守山」
「ハァ、ハァ……うっ、ま、まだまだ、私は、まだ余裕だ」
「ハァハァ、早くイキなさい。楽になりますよ」
「うっ、誰がお前らなんかより、先に……ぅう」
「あーもう、うるさいのだ三人共！」

　來優達の会話を城道が制止する。まぁうるさいしウザイ会話だったことは言うまでもないな。今の時刻は十時。そうあの朝飯からちょうど二時間たったころだ。俺と北斗と佳以外の奴等は全員お堂で寝ている。勿論腹を壊したからだ。そうだな、恐怖が襲って来たのはちょうど三〇分前、座禅をしているころだ。急に座禅をしていた彰が立ち上がりトイレに行った。それを合図かのように幸樹、來優、汐姫がトイレに駆け込み、最後にハゲ坊主が駆け込んだ。理由は言うまでもないだろう。朝飯に胃袋が耐えれなかったんだろう。かく言う俺も十分前ぐらいまではアイツらと同じ横たわっていた身だ。さっさと汐姫見たいに部屋に戻って寝てればいいのに、來優達は負けず嫌いな性格が災いして、先に部屋に戻りたくないみたいだ。城道がもう治りかけてるらしく部屋に戻るよりもここで寝てる方が動かないし楽でいいらしい。ハゲ坊主は大分前からトイレに籠ってる。佳には原因が佳の朝飯だと気付かれたくなくて近くの旅館まで薬を貰いに行ってもらってる。だから今お堂にいるのは変な勝負を展開している來優と彰と幸樹、もう治りかけの城道。治った俺に何故か最初から大丈夫だった北斗だ。

「にしても北斗はよく痛くならなかったな」

「は、はい。僕には何故皆が体調を崩したのかわかりません。おかわりがしたかったくらい美味しかったのに」
「はは、そう言って貰うと何か嬉しいな」

佳に聞かせてやりたい。うん、北斗は良い奴だな。今度何か困ってたら助けてやろう。

「こ、今度また倉本くんが料理をつくった時は僕も誘って下さい」
「あ、ああわかった」

コイツ本気で言ってんのか？　まさかマジでうまいとか言ってんのか？

「あ、そうだ。昼の御飯も作ってもらいませんか」
「いや、止めとこう。俺らがもたない」

確信した。コイツの味覚は壊れてる。きっと佳の料理を食べて壊れたんだな。さすが佳だ。破壊力が尋常じゃねぇ。

「ま、前から気になってたんですが……海本くん達は何で倉本くんのことをあれ程大事にしてるんですか？」
「唐突だな」
「す、すいません、気になってたから……」

何でコイツはこんなにおどおどしてんだ？　まぁ別にいいけど。

「大事だから大事にしてんだよ。そう言うお前は何で寺部に入ってんだ？」

あんな部活に入ろうなんて気は俺は絶対しない。てか殆どの奴が

しないだろう。だから前々から結構気になってたりしたんだよな。

「……師匠は、僕達にとって先生みたいな人なんです。実は僕昔苛められてて、高校入る前は引き籠もりだったんです。でも高校はちゃんと行こうと思って入学式に行ったら僕を苛めていた人にあってしまって」

ああ、そう言うことか。また苛められていた時に助けてくれた。まぁそのへんだろうなぁ。

「また苛められた時に助けて貰ったんです。助けてやろう、その代わりに寺部に入れと無理矢理約束されました」

うん、その約束は予想外だ。

「最初は辛かったです。でも師匠は色々なことを教えてくれました。強さは心から、とか」

「へぇ。で、もう苛められなくなったわけ？」

「はい」

何かたいしておもしろい話でもなかったな。まぁコイツにとっては目茶苦茶大切な思い出なんだろうけど……。城道達はまだあの様子だし……早く佳帰ってこないかな。

「はぁ、暇だ」

その後……　透麻（後書き）

余談。

「ふがぁあああ！　もうムリ！」

バタバタと走りさって行く彰。限界が来たんだろう。トイレまで腹を抑えながら走る。やっとの思いでつきドアノブに手をかける。

ガチャガチャ。

……開かない。

ガチャガチャ。

……やはり開かない。

ドンドン！

「早くしてくれぇ！」

トイレの中の人にそう叫ぶ。が、返って来た答えは……、

「彰か。もう少し待ってくれ」

飼雲の声。待てと言う返事。焦る彰。もう既に時間がないことはすぐにわかった。

「し、師匠ぉ！　は、早く！」
「もう少し」

何度急かしても待てという返事のみ。何回繰り返したかわからない問答。そしてついに……。

「ふぬぉおおおおお！」

彰の悲痛な叫びが寺を超え森に響いた。恐らく山びことなって何度か繰り返されただろう。獣のような響きが。

あ、漏らしたかどうかは彰と飼雲が固く口を閉じているので定かではない。

迷子　佳

「……困ったな」

よくわからない獣道。周りには行くときには見なかった木や草が生えている。これはアレだ。完全に迷子になった。

「どうしようか」

旅館の人から貰った薬が入ってるビニール袋を一度見る。どうしよう。一旦戻るか、それとも進むか。

「……なるようになるか」

考えても意味はないしな。とにかく進んでみるか。何となく進んでみることにした。あ、山で迷子になったら勘で動いたらダメだよ。

ずっと真直ぐに進んで行くと開けた場所についた。そして目の前に建っている一つの廃屋。別荘だったのか？　昔は綺麗だったんだろうけど今じゃ木が腐ってて見る影もない。ふと二階に何かの気配を感じて窓の方を見る。格子がはめられた窓、その奥に人がいる。長い黒髪の女。その女がじっとこっちを見ていた。何も考えず、何も期待していない眼で、ただ虚ろに俺の方を。でも、目が合ったときに何となく感じた。コイツも俺と同じだ。そして、汐姫と同じ。

「出してやろうか」

自然と声が口から出た。女は俺の声を聞くとビックリしたような表情を見せた。

「……貴方は？」

この声。そうか……昨日の夜歌ってた奴はコイツだったのか。

「俺は佳。お前は？」

「そう。貴方が佳くん。私は紗織」

「紗織か……、困ってるんだろ。出してやろうか」

そう言うと紗織は困ったように微笑んだ。

「いいの。汐姫が出してくれるって言ったから」

「そっか。汐姫と会ったのか」

「うん。色々話してくれたよ。佳くんのことも。本当に髪の毛黒と赤なんだね」

「カッコいいだろ」

「私にはわからないな」

……やっぱりこの良さがわからないか。まぁいいけど。

「歌は歌わないのか」

「聞こえてたの？」

「ああ。綺麗な声だったよ。おかげでよく寝れた」

「……佳くんは変わった捕らえ方をするのね。綺麗な声って言われたのは二度目だよ。ありがとう」

「うん、じゃあ俺はこれで。薬を待ってる人等がいるから」

「わかった。バイバイ」

「バイバイ」

紗織に別れを告げたあと踵を返しもと来た道に戻る。草木の道に足を踏み入れる。

あ、ヤバいな。そういや迷子だった俺。知らないと思うけど聞いておくか。

「ただいま」

「え、あ……おかえりなさい？」

「困ったことに俺迷子だった」

「……ふふ。汐姫の言ってた通りおもしろい人だね。変わってる」

「どう致しまして。道を聞きたいんだけど」

「汐姫はあっち方面に帰って行ったよ」

そう言って森の一部を指差す。話しが早くて助かるな。

「ありがと。じゃあ行ってきます」

「ふふふ、行ってらっしゃい」

さて、帰るか。紗織に軽く手を振り指差された方へと歩く。汐姫が紗織を出すなら夜だろう。ここで会ったのも何かの縁、か。花火でもして派手に見送ってやるか。

独りの辛さはよく知っている。閉じ込められる辛さはよく知っている。だから、せめて最後だけは……。

「汐姫の友達だしな」

クイズ？　勉強！？　透麻

「ふざけるな！」

ダンッ！　と机を勢いよく叩く。來優が、うるせぇなぁと横でぼやいてるがそんなの今は気にしていられない。俺の睨む先には飼雲がいる。あのハゲ坊主はホントに俺の嫌なことしか提案しないな。

「何でこんなトコに来てまでテメェらなんかと勉強しなきゃいけねぇんだよ！」

佳が持って帰って来た薬を飲み、腹を治して皆で昼飯を食ったあとハゲ坊主が午後は皆で勉強をするとか言いだした。言わなくてもわかるだろうけど俺は勉強が嫌いだ。だから当然勉強道具なんて持って来ていない。そのことをハゲ坊主に言うと、我が持ってきているとか言って完璧に俺の逃げ道を断った。だから今強行手段の怒って勉強なんかさせない作戦に出てるところだ。

「海本殿、学生の本分を忘れてはならんぞ」
「学生の本分がどうした。俺は勉強がしたくないんだ！」
「透麻……子供みたいなのだ」
「みたいじゃなくて子供なんだよあのバカは」

よーし來優、あとで覚えてろよ。瘤じゃすまないくらいに頭を殴ってやる。

「倉本殿は了承してくれたのだぞ」

「なっ、おい佳それホントか？」

座ってお茶を啜っている佳を見る。佳はズズーとお茶を一度啜ると俺の方を向いた。

「……にがっ」

「にがっじゃねぇよおい」

「城道これ苦いぞ」

「当たり前なのだ。生茶なのだよそれ」

「ああ、どうりで苦いわけだ」

ガン無視かよ。まぁ否定しないってことは了承したらしいな。なんだってそんなこと了承したかな。あーもう！

「ちっ」

佳の決定したことなら仕方ない。勉強かぁ。何でそんなモノあるんだよ。めんどくさい。

「透麻、勉強って言っても楽しくしたいからクイズ形式にした。だから一緒にしよ」

佳が自分が飲んでいたお茶を差し出しながら言ってくる。仕方ないなと溜め息混じりに言いながらお茶を受け取り口に持っていく。

「にがっ」

今さらだけど苦い物が苦手だからって俺に飲ませようとするのはどうかと思うぞ佳。俺だって苦い物が好きと言うわけじゃないんだぞ。なんて思いながらも全部飲み干す。佳から貰った物だ。残すわ

けにはいかない。
アレだ。飲み干したのはまずかったな。少しくらいあげればよかった。反省するからさ、俺の背中に刃物突き立てるのやめようか汐姫。

「汐姫、とにかく落ち着こうか」
「透麻が舌切り雀になるんなら落ち着くよ」
「佳、俺が舌切り雀になるまえに汐姫を止めてくれ」
「じゃあ問題。平安京が出来たのは何年？」

あらぁ、佳さん無視っすか？　いや、まて俺。これは使えるぞ。

「汐姫、ほら問題だ。佳が問題を出したぞ」
「……仕方ないなぁ。許してあげるよ透麻」

何か俺悪いことしましたっけ？　何て言う疑問を頭の隅に追いやって消しさったあと、実際俺もその問題を考えて見る。平安京だろ？　そんなのわからない方がおかしい。

「わかったぜ！」

彰が意気揚々に手をあげ佳にアピールする。

「ん、彰」
「一一九二年」

紛らわしいから訂正する。彰は千百九十二年って答えた。彰の答えを聞いて皆シーンとなる。間違いに気付いてない彰だけが凄いどや顔で俺達を見る。ヤバい。可哀相すぎる。そしてバカすぎる。

「彰……」

ハゲ坊主が優しく彰の肩を叩いて、

「その答えは不正解だ馬鹿者！」

投げ飛ばした。扉を突破り外まで飛ばされる彰。その光景に俺と來優と汐姫は息を呑んだ。そして少し安心して自分が寺部じゃないことを喜んだ。もちろん心から。

「と、このように間違えたら投げ飛ばされます。因みに三問連続でクイズに参加しなくても投げ飛ばされるよ」

佳の補足説明。いやいや、なにそのデスマッチ。クイズに間違えたら投げ飛ばされる。それだけならまだよかった。誰かが答えるまで待つと言う逃げ道があったから。だけどその逃げ道を潰すかのような追加ルール。三回連続で不参加も投げ飛ばされる。要するに逃げれるのは三回の内一つは必ず答えなければならない。しかもこのルールにはもっと残忍な要素が含まれている。

「あ、一番正解が多かった人には飼雲からご褒美があるらしい」

「現地直売でしか手にはいらないふんどしを褒美としてあげよう」

い、いらねぇ……。何だその嫌がらせは。誰がふんどし何か貰って喜ぶんだよ。バカかあのハゲクソ坊主は。

「それと何か好きなものを買ってやろう」

全力でやらせてもらいます。一斉にやる気を露わにする俺達。この勝負。絶対に負けられない。アイツらは気付いてないかも知れな

いけどこのクイズ勝負はそんなに長引かない。その理由にルール二が大きく関係している。三回の内一回は答えないといけないわけだ。クイズに参加しない飼雲と佳を除いて、俺達は七人いる。要するに最初から投げ飛ばされる奴が最低四人出てくる。早速投げ飛ばされた彰を除いたら三人だが。この勝負。最初の三問がかなり重要だ。いかに投げ飛ばされないか。それが大きく勝敗に関わってくる。恐らく一度でも投げ飛ばされたらもう終わりだ。クイズに参加することは難しいだろう。そのことは後々わかる。

「さっきの問題わかる人」

平安京の問題。これは簡単だ。そしてこれを答えれば三人の内の一人に残れる。これは答えとかないと。

「わかるのだ」

クソッ。城道に先を越された。ヤバいな。城道だから間違えることはまずない。次の問題もこれくらい簡単な問題ならいいんだが。

「七九四年なのだ」

城道が間違えた!?　やった。これで一番厄介な敵は――

「あたり。やっぱり簡単すぎたかぁ」

「鳴くよ鶯平安京なのだ」

「……」

「どうしたのだ透麻？」

「な、何でもない」

良い肉作ろう平安京じゃなかったのか。あのバカ先公が。騙した

な！　（※透麻はバカです）

「んじゃ次、奴隷解放を訴えたアメリカの大統領は、」
「エイブラハム・リンカーンです」
「……飼雲、投げろ」
「幸樹、人の話は最後まで聞けといつも言っておるだろう！」

彰と同じように華麗に放物線を描きながら飛んで行った幸樹。

「エイブラハム・リンカーンですが、そのリンカーンの妻の名前は？」

知るかぁあ！　そんなもん知るわけねぇだろうが！

「メアリー・トッドです」
「北斗あたり」

北斗凄いなぁ。てかヤバいな。あと一問しかない。しかも飛ばされるのは必然的に俺か來優か汐姫だ。來優達には悪いけど投げ飛ばされるのは嫌だから本気でいかせてもらう。今まで生きて来た１６年間で得た知識で勝ちを狙う。脳みそをフル回転だ俺。（※透麻はどうしようもない程バカです）

「じゃ次。地球温暖化、」
「オゾン層」
「凄い城道。あたり」
「やったのだ」

おいおい、おかしいだろ。地球温暖化しか言ってないのに何で正解がわかるんだよ。ていうかお前ら二人で争う気か。もう一人くら

いその中に入れてやってもよかっただろうが。

「じゃあ飼雲、投げて」
「わかった」

ガシっと肩を掴まれる。不思議と痛くはなく、見てないといつ掴まれたのかさえわからない程掴まれた感覚がなかった。でも、逆に次に来る違和感がハッキリわかった。まず浮遊感。その次にもの凄い速さで変わる景色に、息が止まるかと思うくらいの風の抵抗。飛ばされながら俺は冷静に考えてみた。明らかに彰や幸樹と違う気がする。放物線じゃなく直線を描いている気が目茶苦茶する。くっそー、あのハゲ坊主だきゃあ……。

「覚えてろよぉお！」

キラァン。

そして俺は星になった。まだクイズに参加したいんだけど、どうせ戻っても投げられるだけだ。多分ルールを知らない彰はもう一度戻って投げられるだろう。三回連続で不参加だからだ。ましてやあの城道だぞ。エスパー城道、電波美少女城道、感じる城道、まぁそんな感じで色々と言われている。その城道にクイズで勝とうっていうのがそもそもムリだったんだ。

「はぁ、終わる頃に戻るか」

そういや城道が欲しいものって何だろう。……まぁいいか。城道の欲しいものなんか考えてもわかるわけがない。汐姫の欲しいものなら一瞬で大体わかるんだけどな。佳の使用済みの何かに決まってる。ホントにストーカーって怖いなぁ。

それにしても……欲しかったなぁゲーム。バイトでもして自分で

貯めるか。

木々の間を吹き抜けボク達に届く風。上を見れば満天の星空が光で繋がりあい、月がキラキラと弧を描いている。雲一つない透き通った夜の空。開けた場所に佳様と二人っきり……、だったらどれだけ幸せだっただろう。むさ苦しい坊主達が四人腰に手を置きこの空を見ながら笑っている。何故かその姿に一種の感動を覚えてしまう自分に吐き気を催しながら溜め息と一緒にその気持ちを吐き出す。

「ていうことで花火をしよう」

紗織がいる屋敷の前まで皆を連れて来て佳様が言った。寺部の人達は一斉にそれに賛成し、皆で持って来た花火を開け始める。來優と透麻は三つの蝋燭に火を灯す。

「佳様、誘いたい人がいるんですけど……いいですか？」

佳様はいいよと即答したあと、行こうかと手を伸ばした。

「い、いいんですか」

「当然」

ギュッと伸ばされた手を握る。恋人繋ぎをするにはボクの心臓が破裂してしまいそうだから普通の繋ぎ方にした。でも、それでもボクの心臓は皆に聞こえるんじゃないかと言うくらい激しく高鳴っている。顔が熱い。体が熱い。やだ、ボクの手汗とか出てないかな。

顔とかボクちゃんとしてるかな。ニヤけてないかな。固まってないかな。握る力強くないかな。ど、どうしよ、汗かいてきたかも。

「あ、ああありがとございます」

お、落ち着くんだよボク。て、手を繋いでいるだけ。手を繋いでいるだけなんだから。

「行こう」

そう言いボク達は屋敷の門を潜り中に入っていった。

おかしいな。昨日来た時はもっと綺麗だった気がする。何だか今日は全体的に錆び付いていたり、朽ちてたり。雰囲気がどことなくおかしい。誰も住んでないみたいな、そんな感じだ。

ふと紗織がいた二階の窓を見てみる。

「紗織」

そこにはこっちを見る紗織がいた。ボクは声をあげ空いている手を大きく振った。紗織はボクのほうをジッと見つめていた。

「佳、何であんなトコに……、佳なら気付いている筈なのだ」

城道の声はボク達には届かなかった。その視線も、飼雲先輩がこっちを見ていることにも……。

コン、コン。大きな扉を叩く。中からは一切の反応が見られない。このまま待っていても意味がないから扉を開けた。鍵がかかっていたら開ける為に一応色々と持って来たんだけど意味がなかった。扉はガチャリという音を立てて呆気なく開かれた。

「すいません」

玄関（なか）に入ってもう一度呼び掛ける。でもまた反応はない。佳様が靴を履いたまま奥へと歩いていく。手を繋いでいたからボクも引きずられる形で歩いていく。

「佳様っ」

迷うことなく階段を見つけ上っていく佳様。ぎしぎしと嫌な音が一段踏む度に館内に鳴り響く。崩れそうな程古い階段。玄関もそうだったけど埃被っている床や壁。ホントにこんなところに人が住んでいるのかな。頭の中をそんな疑問が過ぎるけど、実際ここに紗織が住んでいる。そう自分を納得させ、どんなに古くて汚いところでも人は住めるという定義を自分の中でたてた。

階段を上りきって真直ぐ進み、佳様はある部屋の前で止まった。

「汐姫、ここだ」

何で？　何で佳様は迷わずに真直ぐ来れたんだろう。窓から差し込む光のお陰で何とか真っ暗ではないにしても見えるのはせいぜい数十センチ程先なのに。それなのに佳様は迷うことも考えることもなく進み、階段を見つけ、この部屋の前で止まった。まるで、”引きつけられる”ように。

「佳、様？」

「汐姫、鍵かかってるから開けて――出してあげて」

言われた通りボクはまず鍵穴を見た。そして、ポケットからピンセットと細い曲がった棒を取り出して鍵穴に突っ込んだ。少しの間ガチャガチャと穴をいじる。ガチッと音がなる。鍵が開いた音だ。

「開きました」

佳様にそう一言告げてドアノブに手をかける。ガチャリと捻り、押した。

『ありがとう、汐姫』

何だろう。開けた瞬間風がボクの体を吹き抜けた。それは、暖かかったし、冷たくもあった。温もりもあったし、寂しさもあった。声も、したんだ。紗織の。ありがとう、って。

佳様がそっと頭を抱いてくれた。ボクの涙で佳様の服が濡れる。離れなきゃ、でも離れられない。声を抑えるので必死で。

ドアを開けた先、紗織がいた部屋には……紗織がいた。ボクが見てた、話していた姿とは全く違う姿で、紗織が窓の方を見ていた。ぎしぎしと天井から垂れている縄が揺れる。もう、殆ど干からびている状態の紗織がその縄に吊られていた。

「佳、様。生きて、たんだよ。ボク、話してたんだよ……何で、紗織ぃ……」

佳様の胸に抱かれたまま、ボクは昨日見た紗織を思い出していた。

笑っていた。楽しそうに。話していた興味深そうに。間違いなく生きていた。ボクと話しをしていた時は。

「可哀相に。亡くなってから大分たっている」

飼雲先輩の声。

「飼雲」

どさっという重いものが地面に落ちた時のような音がした。

「蒼空殿、倉本殿も早くその故人をおろしてあげなさい」

そう飼雲先輩が言ったあと佳様がボクから離れ、紗織のところに歩いた。飼雲先輩は座った体制でボクを見ると紗織のところに行くようにボクを促す。

「汐姫、手伝って」

「は、い」

慎重に紗織の首にかかっている縄をほどく。紗織を部屋の床に寝かすと飼雲先輩が合掌をした。そして、ゆっくりと静かにお経を唱えはじめた。

一日。たった一日しか話してない。時間にしたら一日の半分も話していない。それなのに、ボクの涙は止まらなかった。紗織はずっと前に死んでいた。死んでもずっとあの部屋から出れなかった。閉じ込められていた。だから毎日夜になったら唄ってたんだ。

耳から飼雲先輩のお経が聞こえてくる。頭の中では、紗織の唄が響いてくる。

「ぐすっ」

崩れそうな体を佳様が隣りで支えてくれた。

「ねぇ、佳様。紗織は……」

「……出れたよ。汐姫にもありがとうって聞こえただろ」

「うん」

パァンっ。窓の外に大きな花が咲く。火で出来たその花は綺麗に咲いて一瞬で消えた。

「では、行くか」

お経を読み終えた飼雲先輩はそう言うと出ていった。

「汐姫行くか」

「うん」

花火、するからね紗織。見ててよ。綺麗だから。

『うん、見てるよ汐姫。ありがとう』

『かごめ、かごめ。

籠の中の鳥は、何時何時出遣る。

夜明けの晩に。

鶴と亀が滑った。

後ろの正面だあれ?』

『ボクの名前は汐姫』
『そう。私の名前は紗織。よろしくね、汐姫』

『汐姫、それが私を出してくれた人の名前』

かごめ歌　汐姫（後書き）

今回かごめ歌を少し変わった感じで勝手に妄想して書いて見ました。籠目と籠の中の鳥はそのまま檻とか閉じ込められてる感じで、檻の中の人は、いつになったら出られる。鶴と亀が滑ったは、何か今までと違うことが起きる的な感じで、後ろの正面だあれは、出してくれたのは誰？　って意味です。そんな感じで妄想しました。

かなり短くなるかも知れないけど、次話に紗織のことを書こうと思います。

あ、かごめ歌のこの意味はあくまでも僕の勝手な妄想です。

ありがとう　紗織

起きたらココにいた。電気もない、暗いこの部屋に。そうだ……私は見てしまったんだ。男達が人を殺めている所を。そこから私は逃げて、逃げて逃げて後ろから何かで殴られて気を失った。

窓から外を見て見る。広がる森。全く見覚えがない所。格子がされているし、ドアにも鍵がかかっている。そして出れたとしてもこの森の中、迷子になって死んでしまう。私は……。

記録しよう。幸いなことにここには机がある。ペンや紙はないけど、机があれば私が何日ここに閉じ込められているかぐらいは記録できる。爪で机に一の字を彫る。

二日。

大声を出して見る。何度も何度もずっと。森が私の声を木霊する。届けば良い。誰かに届いて欲しい。そして私の所まで……。

三日。

声を。もっともっと声を。

五日。

机に正の字が出来る。今日で五日経った。声は……出ない。声を出そうとしても出ない。ただ、喉が痛いだけ。そろそろ限界かも知れない。五日何も食べてない。苦しい。空腹が限界まで来たらこんなに苦しくなるのか。

十日。

まだ、生きてる。声も出ないのに。痩せ細った自分の体を見る。もう、限界か。でも、私は。

二十日。

何で、私は生きている。死にたい。もう嫌だ。一人は嫌だ。暗いのは嫌だ。苦しいのは嫌だ。寂しいのは嫌だ。机には正の字が四つ出来ている。

空を、地を。あの蒼空の下をもう一度歩きたい。あの大地の上をもう一度歩きたい。あの、温かい風をもう一度感じたい。

「うぅっ」

もう一度、外に。もう一度、皆と。もう一度……。

「うわぁぁぁあああああああああああああああああああああああああ！」

泣いていた。掠れた声で。人の声とも言えないような声で。暗い檻の中、月を見上げながら。久し振りに出た声は、悲痛な泣き言で、苦痛な叫び声だった。

二〇一日。

縄を見つける。もう、疲れた。死んだら自由になれるかな。死んだらここから出れるかな。もし、死んでもここから出れないんなら、誰か、いつか私を。

何年、何十年と時を重ねて来た。朝が来て、また暗い夜が来る。繰り返し、繰り返し待った。誰かが、必ず来てくれる。誰かが必ず助けてくれる。

この檻の中で、夜から明けまでずっと待った。今日は、今日こそは、と毎日毎日来るのを信じて。

そして今日。

『ボクの名前は汐姫』

ありがとう汐姫。

『ありがとう、汐姫』

ここから、出してくれて。自由をくれて、ありがとう。

ブー、ブー、ブー。

「わりぃ城道、メールだ」

コントローラーのスタートボタンを押しゲームを停める。画面内で必殺技を繰り出そうとしていた城道のパンダの動きと弱パンチをしようとしている俺のムキムキのボクサーの動きが止まる。ジャージのポケットの中でメロディーと一緒に振動している携帯をとる。

こっちはプライベート用なんだけどな。誰だ？　汐姫か？　來優か？

携帯のディスプレイを見ると登録されてないアドレスが表示されている。結局知らないアドレスで誰かわからないから開いて内容を見てみる。

『今、貴方の後ろにいるの』

パタンと携帯を閉じコントローラーを握る。

「誰からだったのだ？」

「ああ？　知らない奴から。多分頭のイカれてる変な奴だろ」

スタートボタンを押しゲームを再開。あ、やべっ。必殺技モロにくらった。体力ゲージが緑から赤に変わる。ヤバい、このままじゃ

負ける。俺の体力はあと一発で死ぬぐらい、城道の体力はまだ半分くらいある。ここで逆転を狙うなら……、やるしかないか。”黄金の右腕”

「あと一発なのだ」
「まだまだぁあああ」

慣れた手つきでコマンドを押して行く。このゲームの中で一番複雑だと言われるこのキャラの必殺技のコマンド入力。俺は暇な時があればいつも練習していた。朝起きて目覚ましを押す代わりにコマンド入力、飯の時もコマンド入力、トイレの時もコマンド入力、風呂の時もコマンド入力、寝る前のおやすみの挨拶の時もコマンド入力、眠れない時羊を数える代わりにひたすらコマンド入力！　今こそあの辛かった修行の成果が出るとき。失敗するな俺！

俺のキャラが奇妙なステップを踏み出す。首をゴキゴキと鳴し、パンダを威嚇する。徐々に輝き出す右腕。そして今、最後のボタンが押された。

コォォオオオオオ！

強く光り輝く右腕。その腕を曲げ、腰を低くし、上体を捻る。今だ！

「いっけぇえええ！」
「てい」

ＫＯ！　画面上に大きくその文字が表示される。空高らかに勝利のＶサインをつくる勝者。惨めに地面に倒れて息絶えている敗者。

ふっ。

「いい試合だったな」

城道の肩を叩きそう言う。

「さて、と」

城道の肩をそのまま握る。いや、握り潰すといってもいい。そのくらい力をいれる。

「お前、手加減くらいしろよ」

「痛いのだ」

仕方ないので城道の肩から手を離す。さっきのワンシーン。俺のキャラの放った黄金の右腕がパンダに届く前に下キックでやられ見事に地に落ちた。このパンダ足のリーチが長すぎるぞ。パンダのくせに。ていうか必殺技を仕様もない技で邪魔するな。

「次は何するのだ？」

「あー、そうだなぁ、課題教えてくれねぇか？　自分で考えるのが怠い」

うちの高校は不思議な所で、夏休みの課題をどれか一教科しなかったら全教科の補習を受けないといけない。そしてその補習で赤点をとったりサボったりしたら留年になる。まぁ他の学校よりは楽だけどな。だって一教科すればいいだけの話だ。

「なるほど。僕を呼んだのはそう言うわけか」

「おう。答え教えてくれないか？」

「……仕方ないのだ」

「ありがとな。飲み物とかアイスとかいるんなら言ってくれ。持っ

てくるから」
「じゃあお言葉に甘えて、アイスを持って来て欲しいのだ」
「わかった」

よっしゃ。これで残りの夏休みを満喫できる。来週は花火祭りだしな。今の内に終わらしといて問題はないだろう。

「透麻ぁ、まだぁ？」
「おう、今行く」

わからない　佳

「気持ちよかった」

朝風呂を終えて部屋に戻る。髪の毛をタオルでくしゃくしゃとしながらベットに座る。今日、何をしようか。暇だな。時間はもう昼近く。とにかく昼ご飯でも食べようか。でもお腹減ってないしなぁ。

机の上に目をやる。赤い真新しい携帯が置いてある。その隣りにはその携帯が入っていた箱がある。そう言えば三日前の合宿の時、解散時に城道が携帯をくれたな。お金を出したのは飼雲だったけど、まぁあのクイズの褒美だしな。一応城道達と飼雲のアドレスが登録されている。

携帯かぁ、便利なんだろうけど使い方がわからない。メールと電話なら城道が教えてくれた。ていうか城道もそれくらいしかわからないって言っていた。

「試しにメールしてみるか」

机まで携帯をとりに行き、ベットに戻る。教えて貰った通りボタンを押しメールの画面を開く。確かここに相手のアドレスを……、相手って誰にしようか。

「……こういうの透麻が得意そうだから透麻でいっか」

相手を透麻に設定する。あれ？　件名と本文、どっちにうつんだっけ……。

「……件名、本文」

本文、かな。だって文って書いてるしな。ん、じゃあ本文をうつか。

……本文って何をうてばいいんだ？

『遊ぼう』

「単純すぎるしありきたりだな」

『佳です』

「だから？　ってなるよな」

『おめでとう』

「なにが？」

『死ね』

「ただの中傷だ」

わからない。皆何を考えてどう言う内容をうってるんだ？　ていうかあんなに短くていいのかな。でも透麻とか來優は長文は読むのが怠いって言ってたしな。でも短かったら何てうてばいいのかわからないし……。

「あー、もう！」

ごろんとベットに仰向けで寝転ぶ。わからないから適当でいいや。

『今、貴方の後ろにいるの』

「さすがに……、変かな。まぁいっか」

送信、と。送信完了しました、っていう文字が画面に表示される。な、なんかドキドキする。透麻、どんな返事をするんだろう。ちょっと楽しみだな。

携帯をじっと見つめる。透麻が返信してくるのを楽しみにしながら。

一〇分。

遅いな。透麻も俺見たいに考えてるのかな。

三〇分。

ブーブー、ブーブー。

「来た！」

ガバーッとベットから起き上がり携帯を手にもつ。

『寂しい私の心を癒して。夫が単身赴任でもうずっと夜の――』

「……」

パタン。

一時間。

……来ない。透麻、寝てるのかな。

一時間三〇分。

ブーブー、ブーブー。

一時間前と同じように起き上がり携帯を手にとる。

『脱いで触るだけで八万円。貴女はただ脱いで男の――』

ゴン！　アレの画像付きで来た変なメール。見た瞬間に壁へと携帯を投げ付けた。

「あっ！　壊れてないかなっ！」

自分のやったことに気付き急いで携帯を手にとる。なるべく見ないようにして携帯を開く。

よかった、壊れてなかった。壊れたら透麻のメールが見れないからな。

ベットに戻りまた透麻からの返信を待つ。

二時間。

三時間。

四時間。

ずっと携帯を見つめているけどアノメール以外もう携帯が鳴ることはなかった。

「……透麻」

六時間。

「スー、スー」

わからない　佳（後書き）

オマケの話

「課題ありがとな。じゃあな城道」
「バイバイ透麻」

「あ、そうだ。佳携帯買ったのだよ。透麻のアドレスも教えたから」
「へ？」
「じゃあバイバイなのだ」

アレって佳からのメールだったのか？　今度謝ろ。

幸せな脳内　汐姫

咲き誇る桜の花。その下で優しく笑う大好きな人。風が吹き桜がひらひらと舞う。ボクの方に伸びる手。それをボクは掴む。そっと触れた瞬間に貴女の温もりがボクに伝わって来て、ボクはその温もりに胸の高鳴りを抑えきれなくて。

「汐姫」

優しい声で貴女はボクを呼ぶ。

「佳様」

手を引きボクを抱く貴女。ボクは貴女の顔を見つめる。貴女もボクの顔を見つめる。交わる視線。自然とボクは目を瞑り唇を少しだけ尖らす。瞑っていてもわかる。貴女はボクの顔に自分の顔を寄せていく。あと数ミリ。あと数ミリの所で風が邪魔をした。ビュッと強い風が吹きボクは驚き目を開ける。そんなボクを見て貴女は微笑む。

「可愛いよ」

照れるボクを見て貴女はもう一度微笑む。そして、今度こそ貴女の唇とボクの唇が重なった。

「何て夢を見たんだぁ。ねぇ、どう思う？　これって予知夢かな？」
「違うと思うぞ」
「だったら何？」
「いや、ただの夢だろ。もしくは妄想」
「えー！」

　來優のその素っ気無い言葉に少し大袈裟にショックを受けたような声を出す。

「ねぇ、來優はこう言う夢見ないの？　例えば好きな人の夢とか」
「好きな人……か」
「まさか……いないの？」
「そう言えばいないなぁ」
「城道とか気にならないの？」
「城道は親友だしなぁ。恋愛対象とかには絶対入らないなぁ」

　そうなんだ。ボクはてっきり來優は城道のことが気になってると思ってたのに。じゃあ、まさか……。

「……透麻とかは」
「透麻？　あはははははっ！」

　お腹を抱えながら笑う來優。まぁボクもそれはないと思ってたから別に予想通りだけどさ。そんなに笑わなくてもいいじゃん。

「アイツは確かに良い奴だよ。バカで真直ぐで正直で……許せないことは絶対に殴ってでも止めるし、後先構わずに困ってる人を助けるし……」

あれ？

「意外と面倒見が良いし、それに意外と優しい。けど、やっぱり親友でケンカ仲間って感じかなぁ」

それにしては城道の時より何か褒めてる気がする。まさか來優って透麻のこと……。

「にしてもアイツバカだよなぁ。合宿の帰りのバスの時涎垂らしながら寝てたんだぜ。小学校の時何かランドセル忘れて帰ったりしてたなぁ。昔からバカだよなぁ」

……ないよね。だって來優と透麻だし。でも何か……ちょっとだけお似合いかなぁ。あくまでちょっとだけだけど。ボクと佳様に勝てるようなベストカップルはいないんだぁ。愛の深さが違う。ボクなら佳様の体の何処でも舐めれるもん。足を舐めろって言われたら喜んで舐めるよ。

「あ、そうだ。汐姫何で私を呼んだんだ？　夢の話を聞かせる為じゃないよなぁ」

「そんなわけないよ。ちょっと家が汚れてたから掃除手伝って貰おうと思って。一人じゃ大変なんだぁ」

「はあ？」

嫌そうに來優が溜め息混じりに言う。でもボクにはとっておきが

ある。

「シュークリーム買ってあるよ」
「仕方ないなぁ手伝ってやるよ」
「ありがと」

あはは。なんだかんだ言って來優も世話好きなんだよ。
さぁて、佳様達がいつでも泊まりに来れるように綺麗にしとかなくちゃ。

「てことで、リアル人生ゲーム大会ー」

棒読み感が否めない感じで佳が言った。そんな棒読みで言われてもテンションがあがるわけもなく、また意味のわからない提案にガクンと肩を落とした。

「じゃあ早速」

佳がルーレットを回す。五の位置でルーレットが止まり、赤い駒を五つ先のマスまで動かした。

「えっと、右の人にしっぺをされる」
「わかったのだ。手加減はなしなのだよ」

あー、リアル人生ゲーム大会ってそう言うことか。マスに書いてあることに従って進んで行けばいいのか。なるほどな。ただ、一つ。何でそんなインドア派ゲームを公園でやらないといけないんだ？そこの所がかなり気になるんだが……。

「次は僕なのだ」

城道の青い駒が三マス進む。

『自動販売機で一番左下の飲み物を一気飲みする』

「佳、これってお金は」
「自己負担で」
「……わかったのだ」

城道が近くの自販機まで買いに行ってる間ゲームを進める。汐姫が六を出して早口言葉をやった。次は俺だな。あんまりやる気はしないんだが……。

「一、か」

最悪な出だしだな。えーと、命令は……。

『一マス戻る』

「スタートからやり直しでいいだろうが！」

何でいちいち一マス戻る何て書いたんだよ。ていうかスタートから一マス進んだだけでやり直しって早すぎだろ！

「あははっ。アホだなぁ透麻。見てろよ、私が手本見せてやるよ」

來優が勢いよくルーレットを回す。四。

『四マス戻れ』

「誰に命令してんだクソゲームがぁあ！」
「お前だってやり直しじゃねぇかバァカ」
「うるせぇ。テメェよりは良い目が出てんだよ！」
「ハッ！　負け惜しみだろがバカ」

俺と來優が言い争っている間に佳がルーレットを回す。出た目は六。佳の赤い駒が俺達からどんどん離れていく。

『次の番まで静座』

何か楽でいいな佳。

「えい」

城道は五。買って戻って来たばっかで命令はこなせてないけど一応進める見たいだ。コーラ片手に駒を進めていく。

『果肉入りオレンジジュースを一気飲み』

「……行ってくるのだ」

『借りてた物があったら返そう』

「佳様これ。明日返そうと思ってたんですけど……」

汐姫がポケットから出したのはコップだった。よくそんな物ポケットに入ってたな。てか何でポケットに入れてんだよ。

「勝手に持ってくな汐姫」

「すみません。抑えきれなくて、つい」

なにが抑えきれなかったんだ？

さぁ、次は俺だな。また一とか出たら本気で萎えるぞ。

「二、か」

『やったぁ、二マス進もう』

「ん？」

ここで何か違和感が。最初に二マスでた。それに十二マス。さぁ合計は？　……四だ。

『四マス戻れ』

「ふざけんなコラァ！」

何がやったぁだよ！　何が二マス進めだよ！　詐欺だろ、詐欺だよなぁコレ！　上げといて落とすんじゃねぇぞバカヤロー！

「あはははは っ。コイツ命令されてるぜ」

一周前の自分を思い出せバァカ。

「スタートで指くわえて私らがゴールするの待ってな」

そう言いながら來優はルーレットを回した。

『四マス戻れ』

「ッ壊す！」

「落ち着いて來優。ボードゲーム相手に大人気ないよ」

珍しく汐姫が止めに入った。一旦落ち着いた來優は深呼吸をして

座り治した。

「なぁ、佳」

「ん？」

「コレいつまでするんだ」

「もちろん終わるまで」

二周してまだ一マスも進めてない俺達。先が長いのが見てとれてちょっとだけ嫌になった。

「あ、もちろん罰ゲームあるから。三位と四位は……」

ゴクリと生唾を飲む音が響く。今この状況で最も罰ゲームに近いのは俺達だ。変な罰ゲームだけはやりたくない。

「四位は首輪で繋がれて三位と一緒に公園の周りを一周」

警察が来るだろソレ。ていうか子供の教育上悪い気がかなりするんだが。まぁ言えることはただ一つ。このゲーム負けるわけには行かない！

『雷に撃たれて一回休み』

「なぁ佳、この場合一回休みだけでいいんだよな」

さすがに雷まで用意は出来ないだろう、と高をくくっていた俺。

数秒後その考えが甘かったことに気付いた。

「大丈夫、スタンガンがあるから」

……。

「はい？」

「スタンガンがあるから大丈夫」

ちょっと公園にいる人聞きましたか？　スタンガンがあるから大丈夫って、

「なにが大丈夫!?　ていうか何でお前ら平然としてんだよ!」

城道達の他人事みたいな顔。あー、まぁ他人事だけどよ少しくらい心配してくれたっていんじゃねぇか。

「じゃあ威力は一番下で。少しビリッとくるだけだから」

ホントか？　ホントにビリッだけなのか？

「数秒後に焼けた透麻の出来上がりなのだ」

「黙ろうか城道」

お茶目でも何でもないからなそのセリフ。

「じゃあ行くよ」

数秒後焼けた俺が出来上がりました。

『今までで異性に告白された数は？』

「二回しかないのだ」

城道は男には目茶苦茶モテるけど女には全くモテない。まぁ顔のせいもあるんだけど一番は中学の時の荒れようからだろう。柳生城道。俺達の同い年（タメ）でその名前を知らない奴は殆どいないだろう。でも、まぁ”あの人達”よりは数倍マシだけど。

「あ、でも今日も皆と会う前に男の子から告られたのだ。僕が男ですって言ったら固まったのだ」

気持ちはわからないこともない。美少女に勇気を出して告白して実は男でしたなんて言われたら俺なら人間不信になるからな。

『隣りの人に愛していると言う』

「ふーん。楽な命令だな」
佳はそう言って城道に向き直る。
「城道、愛してるぞ」
「あ、ありがとなのだ」
ちょっと照れくさそうな城道。まぁ照れるのはムリないけどな。俺だって城道と佳にそう言われたらたぶん照れる。まぁ來優と汐姫には絶対照れないけど。だって汐姫は絶対佳のこと好きだとわかってるし、來優はケンカ友達だ。照れる理由が無い。
『今までで一番恥かしかったことを暴露する』
「んー、寝ぼけてベットから落ちた時かな」
嘘つけ。今まで色んな恥かしい罰ゲームをやってきといて何で一番がそんなのなんだよ。佳の恥かしい基準がわからない。
『好きな人の名前を言う』

「佳様」

はい命令終了。

『腕たて五〇回』

「余裕だ」

來優には簡単過ぎるだろ。あと一〇倍はいる。

『両隣りからラリアットされる』

おい、何で俺のだけそんな体罰的なんだよ。しかも両隣りって。

「待ってたぜこういう命令」

ボキボキと気合いを入れて指を鳴らすバカ。

「ごめん透麻。でも命令だから仕方ないよね」

お願いです。汐姫は良いけど來優は勘弁して下さい。俺のプライドが色々と許さない。

「じゃあいくよ」
「覚悟しろよ透麻」

知ってた？　ラリアットってかなり痛いんだ。よくプロレスとかで派手にぶっ飛んでる奴いるけどあれは大袈裟ってわけじゃないんだ。そんなのを二人からだぞ。俺の体がもうボロボロだということは言わなくてもわかるよな。なのに、このゲームは……。

『一つ前の奴にラリアット』

來優の番でこれが出た。ホントに舐めてんのか？　しか言いようがねぇよ。俺アンタに何かしましたか？　何て言ってもゲームが答えてくれるわけもなく、また飛ばされる俺。

「見てんじゃねぇぞコラァ！」
「うるさい透麻。恥かしいから静かにして」

負けましたよ。だってアイツ俺のこと嫌いなんだもん。一とか二くらいしかでないんだぞ。負けるだろ普通。まぁせめてもの救いだったのが三位が來優じゃなくて汐姫だってことだな。來優に引かれながら歩くなんて死んでも嫌だ。
うん、つか周りからの視線が痛い。三輪車に乗ってるチビが止ま

ってまでこっち見るし、ババアどもはヒソヒソと指差しながらこっちを見てる。ウゼー。もうやだ、泣きたい。でも泣く前にとにかく指差してゲラゲラ笑ってる來優をぶち殴ることにしよう。

悲恋哀物話　佳

昔々、まだ地球が四角だと思われていた時の話です。生まれた時から身分によって人生を決められるような時代、身分違いの叶わぬ恋をしてしまった二人の悲しくも儚いラブストーリー。

二人が初めて会ったのは満天の星空が地面を照らす素敵な夜。初めて会ってお互いを好きになってしまった二人。あの人は自分の運命の人だ。そう信じてやまなかった。けど、身分の違いが二人の恋を許さなかった。女の方の父親が身分の低いその男と結ばれるのを許さなかった。父親の名前は透麻郎。この土地一番のお金持ちだった。男は何度も何度も父親に頼みにいった。けど父親はそれを無下にあしらう。ちょうど頼みに行くのが一〇一度目の時。女は言った。

「これで断られたら二人で逃げましょう」

男は一度困ったような顔をし、最後、決心がついたのか元の精悍な顔立ちに戻り女の瞳を見つめた。そして、一〇一度目の頼みは断られた。

幸いなことに男に家族はいなかった。だから心配する必要はない。月も陰る夜中、女は屋敷を抜け出し約束の場所へと迎う。”二人が初めて会ったあの丘へと”

「佳之介様」

女は丘にいる男の名を呼んだ。嬉しそうに。これから始まる二人の生活を期待して。

男は振り向いた。そして自分の方に駆けて来る女を抱きしめた。

「おくに……」

男が女の名を呼ぶ。その声は震えていた。泣いているのかと思い女はソレをさして気にしなかった。ただ、男の呼び掛けに答えるように男の腰に腕を回しただけだった。

どれくらいたっただろうか。男は抱きしめたまま離れようとはしなかった。女もそれが嬉しくて男から離れようとはしない。だが、少しして女は異変に気付く。男の力がどんどん弱くなっていっていること。自分の胸の辺りが濡れていて生暖かいこと。女は男の顔を見た。男は女の瞳を愛しそうに見ると、弱々しい声で言った。

「……すまない。一緒に、いられなくて」

男の体が崩れ落ちる。そして女は気付く。男の腹部から〝紅〟が流れでてることを。

「ぁ、ああ」

男の顔を抱き寄せる。嘘でしょ。寝てるだけだよね。ねぇ起きてよ。言いたいことは沢山あった。ただ、どれだけ現実を否定しようと思っても頭の冷静な部分が否定してくれない。わかってしまっている。認めてしまっている。男が死んだことを。

「っあああああああああああああ！」

泣いた。泣き叫んだ。瞳から流れた大粒の涙が幾重にも男の顔に降り落ちる。

「佳之介、佳之介様ぁ！」

男の名を叫ぶ。でもいつものように微笑んではくれない。静かな、本当に寝ているような顔。

ガサガサっと草藪が音をたて、男が一人出て来た。手には槍。その槍の先から血が滴り持っている男の手に落ちる。

大好きな人を殺したのは自分の父親だった。女は父親を睨んだ。

「よくも、よくも佳之介様を！」

自分の娘の幸せなんかどうでもいいといったふうに父親は嘲笑し、そして一言。

「……」

そして一言。

「……」

「透麻郎おじさん一言どうぞ」

「佳の言うとおりなのだ。透麻がセリフ言わないと話が進まないのだ」

父親は嘲笑し、そして一言。

「いつまでするんだこの茶番劇」

「つづく」

「次回予告なのだ。実は死んでると思っていた佳之介が、」
「だぁあああっ！　もううるさい！　つづかねぇよこんなクソ劇！」

「おくに……」
「佳之介様っ！　生きていたのですか！？」
「続くんかいっ！」
「佳と透麻を公園に呼んだのには理由（わけ）があるのだ」
「あ、無視する方向ですかぁ」
「佳之介様ぁ」
「ってやっぱり続けるんかいっ！」

あはは。やっぱり透麻をからかうのはおもしろいのだ。

「理由ってなに城道」
「中学の時の尾西って教師覚えてる？」
「あー、あのウザイ眼鏡か」
「そうなのだ。あのウザイ眼鏡なのだ」

透麻にしては珍しく特徴を掴んでるのだ。

「尾西、城道に最後まで強気だった生徒指導の尾西？」
「そうなのだ佳」
「で、その尾西がなに」
「むぅ、実は昨日尾西が家に来たのだ。それで、ちょっと嫌な話を聞いたのだ」
「嫌な話」

透麻が僅かだけど反応した。眉間に皺をよせて僕の話を聞こうと

している。透麻は僕の”嫌”をかなりわかっているのだ。僕の”嫌”は僕自身か皆のこと以外であまり使わない。それを透麻はよくわかっている。佳は……うん、いつも通りボーっとしている。まぁ聞いてくれると思うのだ。

「中学の後輩がどうやら僕達を狙ってるらしいのだ」
「後輩？　俺達を狙うってことは一年か？」
「そうなのだ」
「そんなこと勝手なこと三年や二年が許さないだろ」
「むぅ、そこなのだよ。透麻何か連絡とか来てないのだ？」
「来てないな。まぁでも大丈夫だろ。一年なんてたかが知れてる。最近まで小学生だった奴らだぞ。心配することねぇよ」

僕も話だけならそう思うのだけど……。

「尾西の表情が尋常じゃなかったのだ。かなり怯えきっていた」
「尾西が怯える……」

透麻が静かになる。真剣な表情をして何かを考えているみたいなのだ。
中学の時の僕に怯えなかった尾西が怯えてるのだ。やっぱり何か嫌な予感がする。

「ま、なんとかなるだろ。そんなことより城道花火祭りはもうすぐだぞ。準備を忘れるなよ」
「わかってるのだよ。佳……、気をつけるのだ。尾西が言うには來優や汐姫は関係ないそうなのだ。だから余計な心配はかけないようにするのだよ」
「ああ、わかった。じゃあ俺は色々と聞いてみるわ。じゃあな」
「僕も一応色々と調べるのだ。佳、本当に気をつけるのだ。怪我と

かしたら花火祭りどころじゃないのだよ」
「んー、わかった。で、城道今から買い物に行こ」
……ホントに佳はわかってるのかな。買い物、ついていった方が安心か。
「はぁ、行くのだ」
「ん、じゃあ行こ」

ピッ。

電話を切り終えたあとすぐもう一つの携帯を開き電話をした。今の時間は午後九時。昼に城道からあの話を聞いてもう大分たってしまった。まさか俺達を狙ってる奴等が”一度もケンカしたこと”のない奴等だとはな。どうりで全く連絡が来なかったわけだ。とにかくそう言う奴等は何をするかわからないから厄介だ。しかもどこで手に入れたか知らねぇけど薬にハマってるらしいしな。まだ無事だったらいいんだけど。

『もしもし。何かわかったのだ?』

「ああ。ケンカもしたことねぇ優等生らしいが、相当ラリってる奴等らしい。気をつけろ」

頭がいいぶん厄介さは更に増す。ラリってるぶんどんなことをするかわからない。ケンカしたことがないぶん限度を知らない。ちっ。だりぃ奴等だ。何で俺達を狙ってんだ。

『わかったのだ。佳に連絡するのだ。じゃあ透麻気をつけるのだよ』

「ああ、じゃあな」

ブツッ。

どうする。相手が仕掛けてくる前にこっちから行くか?　俺なら

”数”で勝てるだろうけど、ただじゃすまないだろうな。

「クソッ」

転がっていた空き缶を腹癒せに蹴った。葵さんに頼むか……、でもあの人が俺達の為に動いてくれるとは思わないしな。

カンッ！

「っぃで！」

道の向こうから男の声がした。俺が蹴った空き缶が当ったみたいだな。一応謝っとくか。数メートル先にいる人を目を細めてよく見る。そうでもしないと暗くて見えない。人型の黒い影が動き、二つに増えた。

「は、二つ？」

目の錯覚か？　いやでも今も確かに大きな四角い影が人型の影の上に……っヤバい！

急いで横に避ける。

ガシャアアン！

大きな落下音。飛び散る破片。俺の目線にはライトが消えた自動販売機が倒れていた。

――何が起こった？

いや、冷静になれ。自動販売機が飛んで来ただけだ。飛んで来ただけだと？　有り得ない。そんなことは有り得ない。冷静になれって俺。自動販売機だぞ。飛んでくるわけがない。

必死で頭の中を整理する。有り得ないことが目の前で起こった。普通では有り得ないことが。冷静になれと言い聞かせてきたかいがあって頭がようやく冷静になって物事を考え始めた。そして出た結論。

――自動販売機を俺に投げ付けた？

誰が？　男が。何の為に？　カンをぶつけられた仕返しに。ぞわっと全身に鳥肌がたつ。自動販売機を平気で投げる奴。しかもカンをぶつけられた仕返しに。そんな無茶苦茶でデタラメな人はあの人しかいない。

ザっと足音がした。その音に俺の体がビクっと反応する。

「テメェ……俺になんか恨みでもあんのか？　ああ〝！？」

銀色の髪をした男がどすを聞かせた声を出しながら俺を睨む。その姿を見て俺の全身から冷や汗が流れでる。ごめんな皆、俺の人生ここで終わるわ。

「ああ？　テメェ、透麻じゃねぇか」
「お、お久し振りです恭優（きょうや）先輩」

「げっ！」
「ああ？　お前は……部活部の守山じゃねぇか」

ちっ。厄日だな。家の近くのコンビニで生徒会のハゲと会うなんて。

「よぉ守山。会った瞬間げってのはないんじゃねぇのか」
「人違いだ。じゃあなハゲ」
「俺はハゲじゃねぇ巳剣だ」

あー、ウゼー。てか何でここにいるんだよ。まさか家が近いってわけじゃねぇだろうな。

「俺ん家ここの近くなんだよ。お前ん家もそうなのか」

最悪だ……。

「無視は酷いじゃねぇのか？　俺達生徒会はもうお前らをどうこうしようってわけじゃねぇんだから」
「……信用できねぇ」

コイツらのしたことを忘れられるわけがない。そしてそれはコイツらも同じ。私達は結局は敵同士だ。

「信用か……。まぁそりゃあそうか」

ミルクティーを持ってレジに向う。後ろから巳剣が酒を持ってついて来た。片方のレジはかごいっぱいにお菓子を入れた男が使ってるから私のレジの方が早いと判断したんだろう。まぁ当然の行動だな。お陰で私は不愉快だけど。

「正直ショックなんだよ」

無視無視。

「柳生に負けたことが。俺と柳生にあんなに差があったことがな」

会計を済まして入口へと向う。だけど私の足は入口の自動ドアの前で止まる。ある言葉を聞いて。

「守山、お前に負けたこともショックだった」

ニヤリと顔がニヤけていく。ハッキリ言って巳剣は私より遥かに強い。あの時私は巳剣が油断した所を狙ったし、床が固かったから勝てた。完璧にまぐれで勝ったんだ。あのケンカが終わったあと私のモヤモヤは消えなかった。でも、今巳剣に認められたことで少しだけモヤモヤが晴れた。自分より遥かに強い奴に認められるのはそれだけでも嬉しいことだ。

「まだまだ俺は弱かった。守山、ちょっとこの後俺の相手してくれねぇか？」

相手ってのはケンカの相手ってことだろう。望む所だ。

後ろを振り向く。レジの人にお金を渡している巳剣。私は巳剣の顔を見て口が裂けるんじゃないかと思うくらい口角をあげる。

「ああ、してやるよ」

その言葉を聞いて巳剣も口角を吊り上げた。

「私の家の近くに公園があるんだ。そこでしようぜ」

「ああ」

嬉しい。ああ、嬉しいなぁ。まさかこんなに早くコイツとまたケンカが出来るなんて。アレから私も出来る限り努力した。強くなったと自分でも思っている。無我の境地にはまだ達してないけど……でも、何でだろう。今なら出来る気がする。今なら強くなったとハッキリと感じられる気がする。このケンカで私の今の力を測る。そして、今度はまぐれじゃなく、実力で勝ってやる。

「嬉しいなぁ」

買い物袋を地面に置く。巳剣も私のあとに続いて買い物袋を手放した。ゆっくりと、巳剣の袋が地面に落ちる。

ボトっ。

その音を合図に私と巳剣は一気に距離を詰めた。お互いに拳を握り力を込める。

「うらぁあああああ！」

「ぉおおおおおおお！」

バキィっ！

「カハッ！」

体が前から強い衝撃を受け反射的に後ろへ吹っ飛んだ。

いってぇ。でも、あと少し。あと少しで巳剣に当っていた。またニヤリと笑ってしまう。

「殴られたのが嬉しいのか？　とんだドMだな」

「バァカ。死ねカス」

もう一度突っ込む。今度こそ。

バキィ。

「なっ！？」

「へっ。ざまぁみろ」

届いた。やっと届いた。

「やるじゃねぇか。今度は俺から行くぞ。手加減無しでいくからな」

「こいよバァカ」

見える。巳剣の拳が見える。

「やるなぁ。じゃあもっと早くするぜ」

「はっ？」

「うおおおおおお！」

なっ！？

ドスっ！

「うっ！　ぉえっ」

いってぇな。晩ご飯が出たじゃねぇか。大好きなグラタンだったのに。まぁそんなことは置いとくか。それよりも、今は。

「わりぃな。吐くほど痛かったか？」

「痛くねぇよバカ。吐いたのはアレだ。ちょうど食い過ぎで苦しかったんだ。だから自分で吐いたんだよ」

「お前はホントに女か」

早かったな。やべぇほど早かった。でも、見えた。

「もう一回行くぞ」

「おう」

集中だ。集中するんだ。全神経を尖らせろ。自然と一体になるんだ。流れに乗れ。流れに逆らうのが敵だ。流れをつくれ。流れになれ。ゾーンをつくれ。絶対領域を。集中。集中だ。集中しろ。集中するんだ私。集中集中集中

集中集中集中

「一番力を乗せた一発だ。良い整形外科医を教えてやるからな」

――ゴスッ！

「……ん、あ」

ここは、公園？　そうか、私負けたのか。

「くそぉ……」

「悔しがることはねぇよ」

「巳剣」

お酒を飲みながら巳剣が言った。

「俺はな最後の一発はお前の顔をぐちゃぐちゃにするつもりで殴ったんだ。けど、お前は瞬間的に後ろに下がり何とかダメージを逃がした。だから気絶したんだ」

顔をぐちゃぐちゃって。怖っ。

「まさかお前が無我の境地に行けるとはな」

ぐいっとお酒を一気飲みした。コイツ本当に高校生か？　どうみても二十代の危ない輩にしか見えない。

「強くなったな」

「……嫌味にしか聞こえねぇんだよ」

結局私は巳剣に一発しか当ててない。情けないなぁ。

「まぁ、でも……あ、ありがとな巳剣」

今日のケンカがなかったらきっと無我の境地にはいけなかった。やっぱり今日のケンカは私の中で必要だったんだ。あの感覚は掴んだ。あとはいつでも出来るように。それと、長い時間出来るように頑張るだけだ。

私の隣りに置いてあるミルクティーを掴む。ストローを差し口にくわえた。吸うとミルクティーの冷たい感じが口の中に広がってきて口の中に出来た傷を刺激する。

「いたっ。あー、クソ。口ん中が痛い」

味がっ。味が痛みのせいでよくわかんねぇ。

「四回」

私がミルクティーに悪戦苦闘していると巳剣がぼそっと一言言っ

た。

四回？　なにが。

「俺がケンカを見て心の底から何かを感じた回数だ」

「は？」

「一人は銀色の長髪に長身の女」

銀色の長髪に長身？　ん？　どっかで……。

「小六の頃その人のケンカを見て俺は感動した。その人は絡んで来た数人の不良のリーダーを一瞬で倒した。綺麗だったな。手際、動き。全て無駄がなくて……、見ている人も、そのリーダーの仲間すらその人に魅入ってしまった。人を魅了するケンカだ」

どこだったかなぁ。どっかで……。結構身近だと思うんだけどなぁ。

「次が中一の時。桐生恭優（きりゅうきょうや）って人だ」

ドキっ。心臓の鼓動がだんだんと早くなっていく。知っている。私はその人を。名前を知っているだけではない。もっと詳しく知っている。その人の身なりも、性格も、”危険性”も。

「あの人のケンカはヤバかった。ケンカなんて優しいものじゃない。アレは死合いだった。対峙しただけで相手は泣き崩れそうになっていたさ。見ている人も俺も泣きそうになった。死を覚悟した」

わかる。痛い程その気持ちがわかる。あの人はそう言う人なんだ。敵と味方しかいない。味方は死ぬ気で守る。敵は問答無用で殺す。そんな人だ。自分を怒らせる人は敵。私が知っている中で二人いる

怒らせたくない人の内の一人。

「そして桐生恭優さんとは対極の人葵って言う人だ。俺達と一緒の高校に通っている。名字は何故かみんな知らない」

「葵さんに名字はないよ。しいて言うなら柳生、かな」

「知ってんのか？」

「ああ」

怒らせたくない人のもう一人。葵さん。確かに葵さんは恭優さんとは全然違う怖さだ。限り無く近いのに限り無く遠い二人。

「あの人のケンカはただの虐殺だった。なぶり殺しだ。見ている俺達も怖かった。足の爪先から徐々に刻まれていくような恐怖。桐生さんのは気を抜いたら一瞬で死んでしまいそうな、死合いで、葵さんのは死にたくても死ねない、拷問」

恭優さんと葵さんの決定的な違いはそこだ。純粋な恐怖は恭優さん。歪な恐怖は葵さん。感じるものは死と絶望。前恭優さんを怒らせた人が顔面崩壊して病院に運ばれていた。でも恭優さんは熱くなるのも早いけど冷めるのも早い。だから顔が崩れるまで殴ったんじゃなく、一発で崩したんだ。その話を聞いた時はゾッとした。背筋が凍り付いた。

そして吐き気がしそうな程嫌な気持ちになったのは葵さんのケンカ相手を見たとき。中学のとき学校に遅刻しそうになったときに葵さんを見た。ズルズルと男の髪を鷲掴み、引きずっていた。ただそれだけなら私達もよくやっていたからよかった。でも葵さんが引きずっていた男には爪が無く指も全部変な方向に曲げられていて腕も肘、肩と明らかに折れていた。グロかった。逃げられないように足もボキボキに折れていて、泣き叫ぼうにも詰め物をされていて叫べそうになかった。二人とも、絶対に敵にまわしたらいけない人。佳

と城道のおかげで今は味方だけど……。

「柳生とケンカがしたかったのはアイツがあの三人に一番近いと思ったからだ」

それを知っていて城道とケンカしたがるなんて……。私なら絶対しないのに。コイツやっぱり強い。

「……最後の奴はな、想像をして鳥肌がたったんだ」

「想像して？」

「ああ。そいつがこれから自分に足りないものを埋めて来たら間違いなく俺はそいつの足元にも及ばなくなる」

誰だ？　そんなに強そうな奴なら知らない筈はないんだけど。

「〝海本〟だ」

「っと、うま？」

は？　意味がわからねぇ。アイツが？　鳥肌？　わからねぇ。わかりたくねぇ！

「アイツとあの時ケンカして見てわかった。海本に死角はない。無我の境地をしなくても海本にはある程度なら視(み)えている」

……。

「海本が無我の境地を出来るようになったら柳生ですら勝てないだろう」

「……ふっ」

「どうした？」

透麻が城道に勝てる？

「あはははははは！」

そんなこと……。

「帰るわ。じゃあな巳剣」

「お、おう」

急に笑い出した私に戸惑っているのかぎこちない返事をした。

「そうだ。お前佳のケンカを見たことあるか？」

「倉本？　そう言えばないな。会長は倉本を侮ったらいけないとか言ってたけど、俺からしたらそこまで気をつける程の奴に見えなかったな」

何もわかっていない。コイツはやっぱりダメだ。少しでもコイツを認めようとした私がバカだった。やっぱりコイツは敵だ。私達のことを、佳のことを何もわかっていない。

「人を魅了するケンカだっけ？　私はそんなケンカをする人は佳しか知らない。それともう一つ。確かに恭優さんも葵さんも怒らしたら怖い」

……けど。

「一人も欠けていない私達を怒らしたらもっと怖いよ」

このケンカで無我の境地に行けたお礼として一つだけ忠告しておお

いてあげよう。

「次、私達の大切なものを奪おうとしたら、本気で死ぬ覚悟はしとけよ」

「っッ！」

透麻が城道より強くなる。

帰りの道中で私は巳剣の言葉を思い返す。私がその言葉を聞いて感じたのは、喜びでも、透麻に対する嫉妬でも、自分に対する奮起でもない。

置いてかれる焦燥感。

それはいつも一緒だと思っていた人に置いてかれる悲しさ、絶望。置いてかれまいと焦る気持ち。いつか仲間外れにされるんじゃないかという不安。全てが私の中でドロドロに混ざりあって蠢いていた。

なんだこの気持ちは。

嫌だ、置いてかれるのは嫌だ。一人になるのは嫌だ。必要とされなくなるのは嫌だ！

何がいけない。私の何がいけない？　努力か？　まだ私には努力が足りないのか？　才能か？　やっぱり才能は努力じゃ埋められな

いのか？　違う。一番ダメなのは、一番足を引っ張っているのは……私という存在だ。私が女じゃなくて男なら。男に生まれていたなら。

「うっ」

これだから女は嫌だ。すぐ涙がでる。悔しくて悔しくて胸が熱くなる。喉が目が熱くなる。泣いても意味がないのに泣いてしまう。さっきまで褒められて嬉しかったのに、もう悲しい。もう、これ以上私は強くなれないのかな。これからみんなと対等じゃいられなくなるのかな。

「うぁっ」

ダメだ。そんなことを考えるのはやめろ。強く、もっと努力を。

ピピピピピッ！

……電話？

「もしもし」

『來優！　俺だ』

「……透麻」

「で、透麻。俺に何か恨みがあんのか？」
「い、いや、ありません」
とにかく土下座。誠意を見せないと……死ぬ！
「そっか。ならいいんだ」
ゴンッ！
「いってぇ！」
「これで許してやる」
頭がヘコむかと思うくらいの大激痛。カンをぶつけただけでコレって……わりに合わねぇ。
「じゃあな透麻」
頭を抑えて蹲っている俺を無視して手をひらひらさせながら歩いていく恭優さん。
ちょっと待て。恭優さんなら動いてくれるかも。いや、佳が関わっている以上絶対に助けてくれる筈。
「待ってください恭優さん！」
「ああ？　なんだ。何か用があんのか？」

「い、いやあの」

やべぇ。怖ぇえええ！

「用があんならさっさと言えや」

「じ、実は佳がっ」

ピピピピピッ！

こんな時に誰だよ！　こっちは命の危険性があるんだぞ。

「すいません。ちょっと待っていてください」

一言そう言ってから電話にでる。

『透麻！』

城道のでかい声が俺の耳を劈く。キーンと耳が痛むけど、そんなことはどうでもいい。それよりも城道の声がいつもより違うことに嫌な胸騒ぎの方が大きかった。トーンが低い、静かな怒声のような声で城道は話した。

『佳がさらわれた。眠らされたみたいなのだ。今から僕は佳がいる場所にいくから透麻も来るのだ』

場所を聞いて俺はすぐに電話をきった。そしてまず來優にかける。佳がさらわれた。これはもう俺達三人の問題じゃない。五人の問題だ。來優、汐姫に連絡をして場所を教える。そして俺も全力で向う。途中キーが挿さったままのバイクを盗んだ。佳がいる場所はここからじゃ少し遠い。走ってたら大分かかる。これで一〇分あったらい

ける。無事でいてくれよ、佳。

「……あー、やべぇ」

やっぱり違うな。うん。生徒会の奴等とやった時とは全然違う。血管がブチギレそう？　んな次元じゃねぇよ。俺頭わりぃから上手く例えられないけど……細胞全てが怒り狂ってるみたいな感覚だ。とにかく殴る。壊す。潰す。殺す。もう一回殺す。もっと殺す。ずっと殺す。死んでも殺す。永遠に殺す。

やべぇ。殺してぇ。

数うちゃ当る　佳

数十分前。

「……で、どこにつけたら空を飛べるようになる竹トンボがあるわけ？」

学生服や私服を着た男女様々な集団に連れられて来たのは薄暗い倉庫。鉄骨やらなんやらが端や横の壁をなぞるように積んであって二台のクレーンが左右一つずつに停めてある。そしてその場にあわない不可解な椅子がその二台の間にぽつんとあった。一般的に使用されるような椅子ではない。その椅子から”対象者”を逃がさない為に手枷が、さらには足枷までもがついている。

はぁ。半信半疑でついて行ったけど……やっぱり空を飛べるようになる竹トンボは嘘か。某アニメキャラのポケットから出てくる物みたいで欲しかったのに。

「くぅっらもと先輩」

語尾にハートがつきそうな声で真ん中に立っている女子が呼んだ。苦手だなぁ、このタイプの声は。何か……媚びてる感じで苦手だ。

「私ぃ、倉本先輩のふぁん何ですぅ」

はぁ。騙されたのは少し腹が立つけど……。流石にこの人数はめんどくさい。さっき適当に数えただけでも五十人は超えてる。よくもまぁこんなにぞろぞろと集まったものだ。見慣れた制服が十数人。知らない制服が数十人。私服が少し、か。一体何関係でこんなに集まったんだ？

「倉本先輩のことが好きすぎてぇもぉ我慢出来ないんですぅ」

自分の人差し指を口に入れて舐めながら女子は続ける。媚びてる声からもっと俺が苦手なあまったるい声になってきた。

「はぁはぁっせんぱぁい、私ぃもう先輩のこと考えるとぉ……。わかりますかぁ、私のココがどうなってるかぁ」

つつーと自分の手を下腹部までなぞっていく。

ぞわっ。鳥肌がたつ。何だコイツ。気持ち悪い。気持ち悪いぞ！

早く帰ろう。そういや今日城道が気をつけろって言ってたんだった。

「だからぁ、倉本先輩。私達のぉ」

「じゃあ俺帰るんで」

スタスタと大きな扉に向って歩く。もう騙されたことは忘れよう。一刻も早くこの変態から離れたい。

「いいんですかぁ？　先輩がここで私達を倒さずに帰っちゃうとぉ次に狙われるのは柳生先輩か海本先輩ですよぉ」

ピタリと足を止める。そうか、コイツらが城道の言っていた奴等だったのか。ただの変態集団だったらこのまま帰ってたけど……。

「はぁ、めんどくさいけど」

城道や透麻が狙われるんなら帰るわけにはいかない。

「わぁ、倉本先輩残ってくれるんですかぁ？　私嬉しいですぅ」

「うん。害虫駆除しないといけなくなったから」

全く、これだから害虫は困る。めんどくさいけど絶対駆除しないといけないから。

「うふふ～。じゃあ手っ取り早く済ませましょうかぁ」

「そうしてくれるとありがたいな」

ズイっと私服の男子達が女子の後ろからやってきた。この中では恐らく一番ケンカ慣れしてる奴等なんだろう。そいつら全員が懐からナイフを取り出し俺に構え、走って来た。

ナイフか。ナイフを持つ奴に負ける気がしないんだよなぁ。しかもコイツらまだ俺より年下だし。そんな奴等がナイフの扱いを知っているとは思えない。予想通りデタラメに振り回しているだけだ。

「そんなのじゃ当らないって」

刺しかかって来た男子の手を狙って蹴る。同じことを残りの奴等にもしてやる。カランカランとナイフを落とし蹴られた指を抑える男子達。

「次はっ」

ちくっ。なんだ？　首筋に何か刺さるような痛みが。虫に噛まれ

た？　静電気？　それとも気のせい？

「うふふ～」

「っ！？」

なんだ。視界が揺らぐ。頭がくらくらする。瞼が重い。

「な、にをした」

「うふふ。知りたいですかぁ？」

自分の指を数回口に出し入れしたあと唾液をたっぷり絡ませた指をこっちに向けながら息をふっと吹いた。

「吹矢ですよ。ちょっとした毒と私の大事なところの液を染み込ませた世界に一つだけの吹矢ですぅ」

吹矢って……そんな古典的な。想像すらしなかった。

「おやすみなさぁい。く・ら・も・と先輩」

……困ったな。寝るわけにはいかないんだよなぁ。

「スー、スー、スー」

「ところで倉本先輩。吹矢に染み込ませた私の大事なところの液ってどこの液かわかりましたぁ？」
「さあ。わかんない」
「そうですかぁ……。答えはですねぇ、――」
「わぁあああっ！」
「――です。って大きな声だしたら聞こえないじゃないですかぁ。もう一回言いますよぉ」
「あーあー、あああ！」
「……倉本先輩、ホントは何かわかってます？」
「わ、わからないって」
「……私のぉ」
「いー、うー！」
「倉本先輩」
「……わかってるから言わなくて、いい」
「ふふふ。顔真っ赤にしてぇ、可愛いですねぇ、倉本先輩。でも、言っちゃいますねぇ。答えはぁ」
「や、やめろ！」
「私の睡液ですぅ」
「え？」
「あれぇ？　倉本先輩何だと思ってたんですかぁ？」
「べ、別に……」
「ふふふぅ。倉本先輩のえっちぃ」
「っうるさい！」

「ハァハァ、ハァ」

間に合え。間に合え間に合え間に合え。無事でいてくれなのだ佳。

「んっ」

「倉本先輩ぃ、起きましたぁ？」

「……最悪な目覚めだ」

「もうっ、そんなこと言わないでくださぁい。悲しいですぅ」

「うるさい。顔近付けるな」

「怒っている先輩もいいですねぇ」

「……臭い。そうか。尾西がお前らにビビっていた理由がわかった」

「なんですぅ？」

「お前ら、薬中だろ。臭うんだよ。この臭いはシンナーか」

「……うふふぅ。正解ですよぉ。でもねぇ先輩。私達も先輩の秘密知っちゃいましたぁ。その椅子に運ぶとき体に触ったときにですぅ」

「……」

「何で隠してるんですか先輩？　折角可愛い顔に生まれてきたのにい」
「……なぁ」
「何ですかぁ？」
「どうでもいいけどお前ら逃げた方がいいよ」
「はぁ？」
「俺のおっかない仲間がくるよ」

バンッ！

「ナイスタイミング城道」
「ハァ、ハァ」

佳、何を呑気に……。それにしても、佳が椅子に拘束されてるってことは眠らされたんだろう。外傷は見当たらないし、佳がすんなりと椅子につくわけもない。

「やっと来てくれましたかぁ。待ちくたびれましたよぉ」

……五十人ちょっとか。

「私達待ってたんですよぉ。どちらかが来るまで」
「……一応聞くのだ。何で僕達を狙うのだ？」
「ドラッグリンチって知ってますかぁ？」

ドラッグリンチ……まさかっ！？

「対象者にドラッグを次々と打っていくんですぅ。楽しいですよぉ。もがき、苦しみ、泣き喚き、助けをこうんです。動画で見たらもうゾクゾクして……。皆それをやりたくて集まったんです」

悪趣味な。気持ち悪い。そんなに人の痛がる顔が好きなら、

「帰って鏡を見るのだ。そうしたらきっとお前らには楽しい筈だから」

五十数人の群の中に走っていく。たかが五十。今の僕の相手じゃないのだ。わかったのだ。今僕はたぶん今までで一番怒っている。佳にバカなことをしようとしたコイツらに。二度も仲間をさらわれた僕に。無我の上が無我とは限らない。要するに無我に勝るのは思う強い気持ちなのだ。怒り、憎しみ、何でもいい。守りたい気持ちっていうのでもいい。その気持ちが最高潮に達した時、何倍も強くなれるのだ。

「あっ！」
「がっ」
「ぎゃぐぁ！」
「ば、化け物だぁああ！」

化け物？　滑稽なのだ。

「お前らの方がよほど醜い化け物なのだ」

目の前にいる男の腹を殴る。ボキボキっと言う小気味良い音がなって男が泡を吹きながら倒れる。

「な、何してるんですかっ。もう少しでゲストの人達が来るんです

よ」
「うるさい。黙るのだ」
ペチャクチャうるさいリーダーらしき女。中学一年生になったばかりなのだろう。幼さが残っている。さすがに女の子は殴れないだろう。
「とでも思ってるような顔なのだ」
「え〝っ！」
拳に固いものが当った感触が一瞬し、その感触が崩壊した。顔面。その中心に拳を叩き込んだ。鼻が窪み、目は白目を向き、開いた口が歪な鼻から出る血を飲み込んでいる。数メートル吹っ飛び、女の子は数回床を跳ねて止まった。暫くぴくぴくと痙攣をしていたが他の奴を殴っている間にいつの間にか止まっていた。
「に、逃げろぉお！」
「逃がすわけないのだ」
一つしかない扉に向って数人の男が走りだす。何か投げるもの。ちっ。鉄骨やらなんやら重たい物しか見当たらない。今から走っても間に合わない。どうする、僕はここにいる奴等を全滅させないと気が収まらないのだ。
ブルォロロロロロ！
バイクのエンジン音。微妙にショボい辺り原付きか？
「うわぁあああ！」

扉から入って来た原付きはスピードを増し逃げている奴等を片っ端から……ハネた。あれは。

「透麻！」

「おまたせなぁ。佳は、無事そうだな」

バイクから降りて扉の前に立ち塞がる透麻。これで逃げられる心配はないのだ。

「ば、化け物共がぁあ」

「こんな話聞いてねぇえええよぉおお！」

あとは、一人残らず一応死なない程度に殺すのだ。

「全く佳はちょっと不用心なのだ」

「そうだぞ。少し反省しろ」

「佳様ぁよかったですご無事で」

「佳、心配かけさせんなよ」

あらかた終わらせたあとで來優と汐姫が到着した。残ってる奴等は來優に任せて、枷を汐姫に解いて貰った。そして今透麻が佳をおぶって帰路を歩いている。吹矢に塗ってあった薬がまだ効いていて上手く歩けないらしい。

「ごめん。空を飛べるようになる竹トンボがあるって聞いて、つい」
「っそんなもん信じるなバカ！」
「何がバカだバカ透麻！　夢があっていいじゃねぇか」
「そうだよ透麻。夢がない男なんて海の藻屑になればいいんだよ」

空を飛べるようになる竹トンボか……。佳らしいといえば佳らしいのだ。でも。

「これからは知らない人についていったらダメなのだ。わかった佳？」
「なんか親みたいだな城道」
「佳が子供すぎるのだ」
「あはは。まぁそうなるか。それにしても」

お腹が減ったのだ。そう言えば晩ご飯まだだったのだ。走ったから更に減ってるし……。

「ありがとな」
「あー、腹減った！　今から佳ん家で鍋だな」
「いいなぁそれ。たまにはいいこと言うじゃねぇか透麻のくせに」
「佳様がいいならボクもそうしたいです」
「僕もお腹減ったのだ」
「んー、じゃあ鍋にするか」

やったぁ。材料皆で買いにいくのだよ。

「……何か忘れてるような」
「どうしたのだ透麻？」
「……いや、なんでもない」

「な、なんだよお前！」
「何で俺達をっ」

ぎゃあぎゃあうるさいチンピラ風の男達。数十人が高そうなサングラス越しに俺を睨む。いや、睨んでんのか？　よくわからねぇな。まぁ、とにかく、だ。

「アンタらだろ。ガキに薬流したのは」
「ハァ？　な、何のことだよ」

まだシラをきるつもりなのか。俺の真下に倒れてる奴の懐から色々とモノが出て来たっつうのに。

「まぁ、アンタらが薬を誰に売ろうが関係ねぇけどよぉ」
「じ、じゃあいいじゃないか」

いいって？　薬だけならなぁ。でも薬だけじゃねぇだろ？

「俺の可愛い妹に手を出すなや」
「い、いもうぎょえっ！」

真下で倒れている奴を蹴りあげて一人の男にぶつける。

「とにかく理由（わけ）を聞かせてくれるかぁ？　半殺しで抑えるから」
「ひぃっ」

男達が後ずさる。情けねぇなぁ。数じゃ圧倒的に有利なのに。

「まぁ、そう慌てんなや。半殺しで済ましてやるっつってんだろ。いや、まて」

喋りながらも次々と顔面を陥没させていく。何人かは気絶したけど、気絶できなかった奴が声にもならない叫びをあげている。前歯が全部折れていてふがふがと何を言っているかわからない。うるさいな。とにかく頭を踏み付ける。殺しはしない。けど、入院生活は覚悟してもらおう。後遺症も。五体満足でいられると思うな。

「でもなぁ、俺結構今プッツンとキテるんだわ」

「う、うわぁあああ！」

仲間を置いて逃げ出す男。逃げられると思ってんのか？　足元に転がっている血ぃダラダラの男の襟首を掴む。

「逃げんなや」

軽く手を振る。本当にキャッチボール感覚で男を投げ、逃げている男に当てる。

「あとはお前だけなんだ。質問に答えろ」

こけている男の背中に飛び乗る。聞きたいことがあるんだよなぁ。それに忠告しておきたいことも。

「一つ、これは忠告だ。ガキ共に言っとけ。今回の件、お前ら内輪だけの問題にしろ。わかったか」

「わ、わかりました。だから助けっ」
「あともう一つ。今回の件、本当にお前らの考えか？　ガキに薬売るなんて危ないことしねぇだろ」
「そ、それは……」

……答えねぇか。まぁいいか。そんなことはどうでもいい事だし。今回の事自体頼まれたことでもないしな。

「じゃあ、もうお前」
「は、はい」
「死んどけ」

横腹を蹴りあげる。ミシミシと骨を折り、浮いた体に今度は踵落としをする。確実に背骨を折る。これでコイツはもう歩くことはできねぇだろう。

「……はぁ、何か久し振りにケンカしたら腹減ったな」

帰るか。肉食いてぇし。

「救急車足りないぞ」
「近くの病院はもうムリです」

「〇×町でケンカ。負傷者一五名。どれも重体。直ちに救急車を頼む」

『倉庫内での重傷者、全員に薬物乱用した形跡あり。なお持ち物等からも大量の麻薬が』

『全員うわ言のように助けて、と呟いてます。恐らく幻覚作用で混乱状態なのでは』

『原付き、ナンバーは〇〇×――』

何だ、コレハ？　ケンカ？　いや、そんなレベルじゃない。重体じゃないか。出血多量。顔面骨折。脳震盪。肋骨骨折。背骨骨折。複雑骨折。体が窪む程強く蹴られている。

「あーあぁ」

こんなことするのはアイツしかいないなぁ。帰って来たのかぁ。

「だからあれ程注意しろって言ったのにねぇ」

倉庫の方にも黒と赤い髪の奴はいないらしいし。失敗しちゃってまぁ。

「冴原刑事、持ち物検査した所この男達にもコカインやＬＳＤ等を所持しているもよう」

「あー、そう。取り敢えず意識が戻り次第事を吐かせるぞ」

はぁ。これだから社会のゴミ達は。

「何の役にもたたないねぇ」
「はい？」
「いや、何でもないよぉ」

まぁ、ゴミに少しは期待した僕がバカなのかねぇ。倉本を一緒に逮捕したかったけど……、仕方ない別の手でいくか。

必ずお前を追い込んでやるからな倉本佳。

闇鍋パーティー　佳

真っ黒だ。何となくぼやぁとソコにあるのだけはわかる。けど、それがなんなのか、どういったものか、どんな色をしてるのか、それが全くわからない。手に握っている箸を目の前の円い物の中にゆっくり入れてく。まぁ鍋なんだけど。鍋の中に箸を入れたらとにかく身近にある物を挟み自分のお椀にいれる。これで俺の番は終わりだ。

「終わったよ」

終わったことを声に出して告げる。すると隣りの人が俺と同じ動作をする。そして終わりと告げ、またその人の隣りが……。そんな感じで全員終わるまで待つ。

「終わったよ」

声からして汐姫か。どうやら汐姫が最後だった見たいだ。行くぞ、と透麻が声を出す。ゴクリ、と誰かが生唾を飲む音が聞こえた。俺は箸をお椀の中にあるモノに近付け、挟む。ゆっくりと口に持っていき……、臭い。なんだろうこのにおい。明らかに普通な具ではない。柑橘類の匂いでもないし、他の果物でも野菜とか肉でもない。てことは、お菓子か？　鍋に入れて溶けてないってことはチョコレートでもない。一体なんなんだ。今までににおったことのない匂い。とにかく臭い。

「うわっ！　キモっ。感触キモ！」

透麻の声がする。感触がキモいものって一体なんなんだろう？

「噛み切れないのだぁ」

城道、噛み切れないものってなに！？

「甘くて美味い。やった。当たりだ」

鍋で甘いものって当たり？　まぁ來優は甘いものが好きだから当たりなのかな。

「……ボク、ダメ」

何食べたんだ汐姫……。

皆食べた。あとは俺だけか……。ええいっ、悩むな。食べろ、口に入れろ、舐めろ、噛め、味わえ、飲み込め。たったそれだけだろ。自分に檄を飛ばす。

……ぱくっ

……。

「……誰だ、ガム何かいれた奴」

しかも、ドリアン味！

「あー、俺だ」

「透麻ぁ、酷い。ガムは酷いよ。しかもドリアンって……、あっ、においはアレだけど意外と美味しい」

不思議だなぁ。

ドンドンっ。

「誰か来たのだ佳」
「誰だろ」

とにかく出るか。電気をつけて玄関に向う。向うさいに汐姫のお椀を見たんだけど、真っ赤な液体が溜まっていた。何食べたんだろ……。

ガチャ。

「よぉ、佳。元気してたかぁ」

ドアを開けたら銀色の髪をした男が抱き付いてきた。ギュッと腕を回す。知らない奴だったら抱き付いた瞬間死刑だけど、この人は知ってる。

「おかえり恭にぃ」
「おう、ただいま佳」

恭にぃだ！　三か月ぶりの恭にぃだぁ！

「佳、腹減ってんだ。何か食わせてくれ」
「うん。今鍋食べてるとこ」
「おっ、鍋か。いいな」

夏に鍋って聞いて突っ込まない所が恭にぃのおかしな所。

「よぉ、悪ガキ共。元気してたかぁ」
「恭優さん!?」
「恭優先輩こんばんは」
「きょ、恭優先輩、こんばんは、なのだ」

來優はビックリして、汐姫は落ち着いている。城道は引きつった顔で挨拶した。城道は恭にぃのこと少し怖がってるからな。で、気になるのが、何で透麻土下座してるんだろ。

「少しもらうぞ」

そう言って置いてある俺の箸を取り鍋のものを摘んでいく。明らかに鍋の具じゃないやつを普通な顔して食べている。辛そうなのも甘そうなのも。ガムも、グミも。

「美味かった。じゃあな」

恭にぃの一番おかしな所。壊滅的な程に味覚音痴。食べれるものなら何でもよくて何でも美味しい。美味しいとしか言えない人見たいに美味しいとしか言わない。

「あ、そうだ悪ガキ共。あんま悪さすんなよ」

そう言って出ていった。嵐の様な人だ。でも名前の通り優しい。何かと気をつかってくれる俺にとっては良いお兄ちゃんだ。血は繋がってないんだけど……。初めて会ったのは大体二年前くらいだけど。でも、まぁ信用出来る人だ。因みに家は俺の隣りに住んでいる。

だからよく晩ご飯を食べに来る。何を隠そう仲良くなった切っ掛けは俺が作った晩ご飯をご馳走したことだ。

そして、恭にぃは俺の秘密を全部知っている。そのことで一度だけケンカをしたことがある。もう……あんまり覚えてないけど、何となくは覚えている。今日皆が帰ったら日記読みかえそ。

「それにしても、またケンカしてたみたいなのだ恭優先輩」

確かに髪が所々赤黒かった。何も知らない人ならもしかしたらそう言う髪なのかなぁと思うかも知れないけど、恭にぃは目茶苦茶綺麗な銀色だ。それが所々赤黒いってことは……血がついてるってこと。

「相手が悲惨だな」

「うん、可哀相」

來優と汐姫は恭にぃの強さを知っている。ケンカしたらどうなるか、想像して本当に同情したんだろう。

「で、いつまで土下座してるんだ透麻」

ていうか何で土下座してるんだ。

「いや、なんか……気分」

意味がわからない。

みんな優しいなぁ。洗い物とか全部してくれた。まぁ殆ど來優がだけど……。

数十分前のことを思い返しながら天井裏に隠してある段ボールを一箱取りベットの近くに置く。開けると日付が書かれたノートがびっしりと詰められていて、一束取り目当てのノートを探す。

『２０年・５月１２日～７月２日』

そう書かれているノートを手にとり開く。確かこの辺りだった筈。ペラペラと捲っていく。うっすら覚えているもの、まだ覚えているもの、もう覚えていないもの、様々な事が書かれている。ちょうど真ん中まで来たあたりで手を止める。見つけた。この日だ。シャンプーを借りに来た恭にぃに裸を見られて女だってことがバレた日。怖かったなぁ。恭にぃ目茶苦茶怒ったからなぁ。

「なぁに見てんだぁ？」
「恭にぃ！？」

いつの間に……？

「日記か？　お、これ佳が女だってわかったときのじゃねぇか」
「うん。覚えてる？　恭にぃに俺殴られたんだよ」
「っははは。全く覚えてねぇ」

やっぱり覚えてないか。まぁ恭にぃらしいっちゃあらしいけど。

「えーと、なになにぃ。『今日恭にぃに女だってことがバレてケンカになった。一方的だったけど……。恭にぃのことだから無いとは思うけどもしこの事を皆に話すようなら相打ち覚悟で殺すしかない』……」

……そんなこと書いたんだ俺。

「上等じゃねぇかコラ」

「いたいっ、痛いって！」

頭のてっぺんを拳でグリグリされる。これ痛いんだって。かなり。

「ハゲる、バカになる、明日お腹壊す、薄くなるって！」

「うるせぇ。テメェ物騒なこと覚悟してんじゃねぇよ」

ゴンッ！　と鈍い音がして頭蓋骨がヘコむかと思うくらいの痛みが走った。いや、本気で血が出そう。

「……なぁ佳」

さっきとは一変して真剣な表情をする恭にぃ。

「まだ話してないんだろ」

言いたいことはわかる。俺の秘密をまだ城道達に話してないってことだろう。

「……うん」
「怖いのか？」
「……うん」
「俺からアイツらに言おうか」

恭にぃから言ったら確かに城道達は怒ることもなにも出来ないだろう。けど、それじゃ意味がない。それにこれは俺から話さないといけないことだ。

「いいよ恭にぃ。もう覚悟は出来てる。女だってことは祭りの時に話すつもりだよ」
「そっか、頑張れよ」
「うん。話したことで皆が離れていっても……それは仕方ないことだから」

大丈夫。離れていった方が皆の為なんだ。まだ皆にすがりつきたいけど、皆のことを考えるとそれはダメなんだってわかる。もう……あまりもたない。わかるんだ。自分のことだから。

「何弱気になってんだよ。アイツらがお前から離れるなんて有り得ねぇよ。そんなことより俺は城道と透麻が佳のことを恋愛対象として見るかも知れねぇのが不安だ。もし、佳と付き合いたいなんて言ってきた場合には俺が兄として試練を与えないとな」
「あはは」

冗談で言ってるのか本気で言ってるのかわからないな。もし本気で言ってるんなら怖いぞ。恭にぃの試練何かクリア出来る人がこの世にいるのかどうか……。

「例え告白されても付き合えないよ。もうすぐ無くなるんだから。

そんな無責任なこと出来ない」
「そのくらい無責任でいいんだよ。アイツらなら許してくれる。それに、俺達はまだ諦めてねぇぞ。だからお前も諦めんな。絶対ぇ呪い何かぶっ飛ばしてやっから」
「……ありがと、恭にぃ」

優しく微笑む恭にぃ。この顔を見たらそんなに怖い人には見えないし強い人にも見えない。虫も殺せないような優しい男にしか見えないのに。不思議だな。
あれ？　そう言えば何で恭にぃは家に来たんだろう。何か用事があったのかな。

「恭にぃ、何か用があった？」
「は？　あああああ！　忘れてた。そうだ用事があって来たんだった！」

頭を抱えて叫ぶ恭にぃ。恭にぃ、もう夜中何だから静かにしようよ。声に出しても意味がないから心の中で思うことにした。

「佳携帯買ったらしいな」
「え？　何で知ってんの」
「飼雲が電話で言ってたんだよ。アドレスは直接聞けって言われてよぉ。アイツそう言うところ律義だからな」
「教えるけどさ恭にぃ……紗弥に教えるなよ」
「そりゃあムリだな。紗弥姉さんに言ったら知りたがってたしな」
「じゃあ恭にぃには教えない」
「教えろよ」
「教えない」
「教えろって」
「教えない」

「ぶん殴るぞ」
「教えます」

もう、暴力は反対だ。

「恭にぃ、暴力はダメなんだよ」
「俺だって弱い奴殴るのは好きじゃねぇよ」

じゃあ、殴らなければいいのに。っていうようなことは言わない。相手が何だろうと殴らなければいけないときってのはある。でも恭にぃはそう言うときが多すぎる。

「まぁそんなことはいいから教えろって。紗弥姉さんだってお前のことを心配してんだぜ」
「……仕方ないな。教えるよ」

心配かぁ。恭にぃはしてくれてるんだろうけど……。紗弥はどうかな。アイツは嫌いだし苦手だし……。わかりたくない。

携帯を開き恭にぃに渡す。やっぱり携帯ってのはわからない。恭にぃに渡したらあとは勝手にやってくれるだろう。

「ありがとな。じゃあ紗弥姉さんにもメールで教えとくから。じゃあな。ちゃんと寝ろよ佳」
「うん、おやすみ恭にぃ」
「ああ」

バタンとドアを閉める音がしてすぐ開く音、閉める音と続いた。

「片付けをして寝るか」

置かれた段ボールと床に重ねてあるノートの束を見て呟く。寝るのは片付けが終わったあとだな。

優しすぎる男　透麻

ピピピピピッ！

うるさい携帯のアラームの音で目が覚める。時計を見ると短い針が十を差していた。そう言えば昨日アラームを十時にセットしたんだっけ。まだ重たい瞼を擦りながらそんなことを考える。とにかく起きたんだ。朝飯でも食うか。

「ふぁ～あ」

あくびと一緒に体を伸ばす。気持ちいいんだなぁこれが。

「あっさめし、朝飯ー」

リビングに下りて冷蔵庫に近付く。いつもながらこの時間家には俺以外誰もいない。まぁ母さんが仕事だから仕方ないんだけど。たまに佳達がいるんだよなぁ。しかも殆ど不法侵入だ。どこの世界に人の家の鍵を勝手に開ける友達がいる？　ていうか開けられる時点でおかしい。将来なれるものがもうその特技で何となく想像がつく。はぁ。出来れば平成のルパンとかにならなきゃいんだけどな。

まぁそんなことを思いながら冷蔵庫を開ける。牛乳を取り出しテーブルの上に置く。コップはいらない。俺はそのまま口をつけて飲

むタイプだ。いわゆるラッパ飲みだ。勿論母さんはそうじゃねぇぞ。母さんと間接キスなんて死んでもごめんだ。

「飲み物の準備は完璧。あとは、主食なんだけど……」

何か良い物は……、あったあった。まだ未開封の食パン。袋を開けこれもテーブルの上に。テレビのリモコンを取り電源ボタンを押す。テレビはつけるだけだ。別に見たいと思ったわけでもないし気になるわけでもない。ただ、飯を食うときにテレビをつけるのが癖になってるだけだ。たまにおもしろそうなのやってるしな。

牛乳を飲みながら食パンを一枚とる。俺は食パンはトーストしたりジャムとかつけたりしない派だ。食パンそのものの味を楽しむ。……ただ焼いたり塗ったりするのが面倒くさいだけなんだけどな。

『笹野瀬財閥が裏で不当な取り引きをしていたことが内部の社員の告発で明らかになりました。なお、その不当な取り引きに関しては笹野瀬財閥の会長、笹野瀬宏次会長は認めておらず、何度も否定しています。ですが、一人の告発を元に他の社員達も不当な取り引きを告発しだし、否定は殆ど意味を成してない様子です。不当な取り引きに関しては警察側が調べている所です。今現在調べでは不当な取り引きがあったことは確実で、笹野瀬財閥の暴落も予想されるでしょう』

へぇー。あそこの会社潰れるんだ。笹野瀬財閥っつったら色んな事に関係してたよな。来年には遊園地を作るとか言ってた気がしたけど……、まぁこの様子じゃムリか。

「にしても食パン美味いな」

朝はやっぱりパンだよな。

『次のニュースです。あの有名なお笑い芸人とっ』

ブツっ。

リモコンのボタンを押しテレビを切る。何枚かまだ入っている食パンを元の棚に戻し、牛乳を持って自分の部屋に戻る。

今日何しようか。このまま佳達から連絡がなかったら街でもぶらぶらするかな。

いや、マジで連絡がないとは。暇だし本当に一人で街をぶらぶら歩いている。壁とか角の方にある掲示板に今週の日曜日にある市の祭りのポスターが貼ってある。あー、そういや何か準備があるとか言ってたな佳。城道も関わっている見たいだったけど……。まぁ嫌なことをするわけじゃないだろうから別に気にしなくていいか。

それにしても。

「することねぇ」

暇だぁ。金あんま使いたくねぇし、このへんも知りつくしてるから歩いていて新しい発見なんかねぇし……。いやぁ、することがないってホント嫌なことだなぁ。昨日はかなり大変だったし。佳がさらわれて走り回ったり、原付き盗ったり……。何かだんだんと腹立ってきたな。

「あー、クソ。ムシャクシャしてきたぁ！」

薬屋の看板を蹴り倒す。たまたま薬屋の前を歩いていて、たまたま薬屋の看板が目の前にあったから蹴っただけだ。この薬屋には何の恨みもない。だから悪いことしたなぁ、と少しだけ思いつつもう一度蹴った。

お、何かスッキリしてきたぞ。やったぁとか思いつつ一蹴り。周りの奴等が俺を何事かと見だしたからラスト一回コッソリ蹴って足早にその場を去る。

「待てやコラァアア！」

急に響く怒声。誰だようるせぇなぁ。ケンカなら違う所でしろよ。そんなことを思いながら後ろを振り向いた。中年のおっさんが険しい顔をして走って来ている。前掛けにさっき通った薬屋の名前が大々的に書いてある。そして右手には注射器を装備。何故注射器なんだ？　すっっごく疑問に思うが、たぶん……というか絶対俺を追いかけてるよなぁ、あのおっさん。謝ってすむかなぁ。

「すまないよな」

てことで逃げるか。

「待てぇえええ！」

このへんの地理で俺に勝てる奴は……まぁいるけど、そのへんのおっさんには負ける気しねぇよ。このへんの細道曲がって、路地裏に入ればもうあのおっさんは撒いたようなもんだ。

「ほら追いかけてこねぇ」

楽勝楽勝。

「おらっ。とっとと歩けや」

「遅ぇんだよチビ」

「ひっ」

ああ？　男の声と女の小さな悲鳴。奥の方で女を囲んで歩いている大柄な男達を見つけた。

アイツらは、生徒会のチビとその取り巻き。前とは明らかに様子が違う。前も同じように囲んではいたが、立場が逆転してるように見える。何かあって力関係が反対になったか。えーと、確かこの先は倉庫があったな。……まぁ俺には関係ねぇか。アイツは敵だしな。

さて、じゃあそろそろ大通りに出るか。

「……あーっもう！」

ちくしょー。優しすぎなんだよ俺。

携帯を取り出しメールをうつ。そのメールをアドレスの中に入っている奴に一斉送信する。メールの内容は簡単だ。今すぐ路地裏倉庫に来てくれ。それだけだ。

「アイツらを追うか」

過去の行い　海里

「おらぁ！」

背中を押され、前に飛ぶ。連れて来られたのはよくわからない倉庫。来たこともない汚い道をあちこち歩かされたから逃げようにも道がわからない。でもホントはそんなことより足が震えて動かない。私が、この私がこんな貧民ごときにビクビクしている？　何でこうなった？　お父様の会社が暴落したから。私がこの男達を奴隷の如く扱っていたから。じゃあ今から私は何をされる。決まってる。酷いことをされるんだわ。

「なぁ、お前」

大柄な男が歩みよって来た。たったそれだけで私は小さな悲鳴をあげ、後ろに後ずさる。でも、足がガクガクと震えてうまい具合に動けない。

「散々俺らに酷いことして来たんだ。覚悟は出来てんだろうな」

「うぐっ」

私の体の上に跨がる男。苦しい。重い。息がっ。

「まぁ女だからな。殴りはしねぇよ。おとなしくしてくれたらな」

ビリビリィっ！

「いやっ、いやぁああ！」

ワンピースを破られる。男のゴツゴツした手が乱暴に私の胸を握る。

「いたい、痛い！」

「うるせぇんだよ」

腹部に鈍い痛みがした。ボコっと自分のお腹がへコむ感覚に陥った。直後、喉を熱いものが駆け巡る。

「おぇっ」

ゴホゴホっと何度もむせる。嫌だ、人前で、こんな奴等の前で。裸にされただけでなく吐くなんて……。

「うぅ……」

「いいよなぁ、女は。泣いたら何でも許してくれると思ってさぁ」

髪を鷲掴みされる。痛い。痛いよ。助けて。

「見たまんまの幼児体型だな」

「俺はそういう方が好きだ」

ぞろぞろと群がってくる男達。寄るな、触るな、舐めるな。顔、腕、脇、胸を何人かに触られ、舐められ、そこからだんだんと下になぞっていく。最悪だ。死にたい。死にたい死にたい。もう嫌だ。痛いのも嫌。触られるのも舐められるのも嫌。

「ちょっと待て」

「なんだよ」
「写真とっとこうぜ」
「いいなぁ。携帯しかないけど、大丈夫だろ」
「じゃあ動画もな」

私の体を触っていた男達が少し離れて携帯を操作しだす。
逃げたい。今のうちに。でも足が動かない。
何だろう。私前にも似たようなことを誰かにした気がする。こんな酷いことを。そう言えばこの男達にも十分酷いことをしてきた。

「あ、あやまるから許して。お願い」

お願いだから許して。

「仕方ないな。許してやるよ」
「今度からは酷いことするなよ」
「あ、あああありがと。ありがとう」

ほ、ホントにありがとう。ガクガクしている足を何とか支え立とうとした。

え？

いつの間にか倒れている。何で？　お腹が痛い。何で？

「許すわけねぇだろバァカ」
「お前はこれからずっと俺達の奴隷なんだよ」

……うぅ。悔しい。少しでも安心した私がバカで、悔しい。男な

んて、所詮男なんて。

「男なんてっ、ぐす」

「男なんて？　何ふざけたこと言ってんだよチビ。お前が散々してきたことだろうが」

倉庫に静かな声が響く。男達のとは違う。嘲笑うような声でもなく、怒気を込めた声でもなく。

「か、海本」

「よぉ、格闘家諸君」

海本まで……。助けてくれる筈がない。この男だけは助けてくれる筈がない。私はこの男の仲間を傷つけた。残酷なほどに。海本透麻。そっか。海本透麻も私に恨みを晴らしに来たのか。

「まぁ、あれだ格闘家諸君。お前らつまんねぇことしてんじゃねぇぞっつう話だ」

そう聞こえた直後私の隣りを男が飛んでいった。

こっそり倉庫に入って俺の視界に入った光景。何十人もの男が一人の女に寄ってたかって陵辱している光景。
なにやってんだよっ。ダメだろ。お前らがそんなことしたらっ。何で……。

「何、してんだよ……」

どんなにバカにされたって、どんなに奴隷的な扱いされたって、それだけはやっちゃダメだろ。

「テメェらは格闘家だろうがぁあああああ！」

近くの男を捕まえ、投げて、その体の上に乗り顔面を殴る。何度も何度も。そいつの手足が動かなくなるまで。

「はぁはぁ、確かにそこのチビはクソだ。善悪で言うと悪だ。人間として腐ってる。けどなぁ、お前らまでそこに墜ちることはねぇだろうが」
「海本、お前に何がわかる！　無理矢理部活やジムを辞めさせられて将来を奪われた俺達の気持ちがわかるかっ！」
「バカか！　そんなもん今から始めればいいだろ。何で、自分から夢を潰すようなマネすんだよ！」
「う、うるさい！」

ガンっとチビの足を蹴る男。名前も知らない。けど、そいつは確

かに格闘家だった。でも、今じゃ堕落してしまった奴だ。こんなの悲しすぎる。格闘家っつうのはもっと気高くて、強くて、絶対弱者を傷つけたりしない。人に夢を与える奴等なのに……。こんなのアイツには見せられねぇな。プロレス好きで、格闘家に理想を抱いているバカ來優には。だから、お前ら。せめて俺の前だけで終わってくれ。

「海本、お前もコイツには恨みがあるんだろ。なら俺達と一緒に」
「くだらねぇ。俺は絶対墜ちねぇ。そんなこと俺のプライドが許さねぇ」

何よりそんなことしたらアイツらが悲しむ。

「ちっ。でもいくら海本でもこの人数相手はムリだろ。見た所お前一人だしなぁ。お前には倉本達以外友達がいないしな」

確かに俺には佳達以外友達がいない。小学校もケンカの毎日。中学校も城道や來優とケンカばかり。たまに佳もいた。でも殆どが俺と城道の二人だ。ケンカなら城道一人でも十分大丈夫だ。なのに俺がいつもついて行った理由。それは城道のやり過ぎを止める為。だから自然と俺はケンカ相手を寸での所で助けることになっていた。そして俺は携帯を二つ持っている。一つはプライベート用。もう一つは、まぁ仕事用とでも言うか。それがどうしたって？

「確かに俺に佳達以外の友達はいねぇ」

因みに仕事用のアドレスに入っている数は二百を余裕で超えている。その全員が中学時代城道と俺が相手したケンカ相手だ。

「ちょっと待て。何か聞こえてこないか？」

男が一人、仲間にそう言う。少し遠くに聞こえていた音が凄い速さで近くなってくる。次第に男達は気付く。その音は幾重にも重なった爆音。その音は自分達には全く関わりがない別世界。その音は――。

その音の元が恐らく倉庫の前まで来た時、まるで目の前で爆竹を鳴らされたように耳が遠くなっていくのを感じた。もうアイツらの声は聞こえない。アイツらに俺の声は聞こえない。けど俺は一応言っとく。聞こえねぇだろうけど、

「知り合いは多いんだよなぁ」

エンジン音が倉庫の扉を破って入って来た。それに続くように多くのバイクが倉庫内に入り群をなし一周する。扉が開かれ本来見える筈の質素なコンクリートの色や空の青色はきらびやかな色で隠されている。車、バイク、どっちも一般人が乗るようなものではない。暴走族とかその類が乗り回すような物だ。

「まぁ、こういう知り合いしかいないんだけどな」

ペタリと力無くその場に膝をつく男達。さすがに呼びすぎたかなぁ。

「これで良いんすか透麻さん」
「おう。ありがとな。皆もありがとう」
「そんなことよりコイツらどうします？」

額に刀傷をつけた男が指を鳴らしながら言う。あーあぁ、完全に腰抜けてるじゃんコイツら。まぁ仕方ねぇか。俺でもこんな大人数に囲まれたら腰抜けるぞ。

「放っとけ。もう何もしねぇよ。まぁ一応携帯は没収このチビの画像や動画がないか確認しとくか」

一個一個慣れた手つきで携帯を操作する。画像や動画があったら消して投げ、なかったらそのまま投げる。

「そういや、お前んとこの若い奴薬使ってたぞ」

データフォルダを見ながら隣りでバイクに跨がっている男に言う。そこのチームは薬は禁止してるから多分その若い奴はボコボコにされるだろう。まぁ身内のルールを守らない奴が悪いから仕方ないけど。別に言う必要は無かったんだけど一応来てくれたしな。

「あー、それともう帰ってもいいよ。ホントにありがとなお前ら」

「何言ってんすか。透麻さんは命の恩人なんすから来るのは当然っすよ」

ホントに感謝だな。まぁ少し悪いけどお前らは知り合い止まりなんだけど……。

一斉に音が去って行く。コイツらにとっちゃあ凄く不思議でかなり怖い光景だったろうな。こんだけ怖い思いさせたら流石にもう一度チビに何かしようとは思わないだろうな。

「じゃあ俺もう帰るから」

一応裸のまま帰れっていうのも可哀相だから服を脱ぎそいつに投げ渡す。

「じゃあな」

「……」

ちっ。感謝も無しかよ。ってアレ？　コイツもしかして……。

「気絶、してんのか？」

「……」

うっわ……マジかよ。放置しとくわけにもいかないし……だりぃ。

「……ちっ、仕方ねぇ」

強引に服を着せる。コイツ身長が低いから何とか膝くらいまで俺の服で隠れた。おかげで今俺は上半身裸だ。流石に下まで脱いでコイツにはかせたら俺が掴まるからな。でもこんな露出女を背負って歩いてる所を人に見られたら……、同じで掴まるか。ってことは人通りが限り無く無いに等しい道を通って俺ん家に戻る……しかないのかぁ？

「あー、クソっ。何でこんな水色チビを」

せめて誰にも見られないことを願うか。

求めていた優しさ　海里

暖かい。大きな背中。お父様の背中なの？　そんなわけない。だって……私は要らない子なのだから。

「ここは……？」

ふかふかとした感触が体を優しく包む。真夏の日の暑さでもなく薄暗いアスファルトの冷たさも感じない心地いい温度。知らない天井の模様。知らない壁の色。知らないテレビ。知らないカレンダー。ここは、どこなのだろう。私はあの後どうなったのだろう。海本がやって来て……。普通に考えれば海本も私を恨んでいる。てことは私が気絶したあと場所を移動したってことが一番考えられる。そうか……。私はまだ辱めを受けるのか……。仕方ないことだとわかっていても、悲しい。

「ううっ……」

「何泣いてんだよチビ」

誰かの声！？　部屋を見渡す。ドアの前にアイスをくわえた海本が立っている。

「あー、もしかしてアレか？　裸を見られたことに泣いてんのか？

なら安心しろ。テメェ見てぇな発展途上を見たって何とも思わねぇから。ってことであんま気にすんな。それと、流石に体に触るわけにはいかないからそのままベットに投げて布団かけて放置してる状態だからまた見られたく無かったらおとなしくしてろ」

ペラペラと椅子に腰掛けながら話す海本。不思議だ。今から私を凌辱するような人の台詞とは思えない。あまりにも呑気で、少し拍子抜けした。

「ったく。やめろっつったのにやめなかったからそうなるんだ」
「……」
「俺が運良く通らなかったら今頃お前どうなってたかわかってんのか？」
「！？　助けて、くれたのですか？」
「ったく」

画面が真っ黒なテレビを見ながらアイスを頬張る海本。
助けてくれた。敵なのに。私を嫌いで恨んでいる筈なのに……。
何で？　何で助けてくれたの？

「何で助けてくれたんだろうっつう顔してんな」
「……」
「勘違いするな俺は今でもお前のことは嫌いだし憎んでる」
「なら何でっ」
「俺はお前を助けたんじゃねぇ。あの男共が許せなかっただけだ」
「でも、助かりました」

……ありがとう。

「怖かった。本当に、怖かった。痛くて、怖くて……自分がしてき

たことに、気付いて……ぐすっ。最悪なことしてきたっ……て」
「ちっ」
「あ、りがとう。ありがとう……ございます」
本当に、ありがとう。
「……泣きやんだら着替えて帰れよ。着替えは貸してやるから」
「は……い」
布団に顔を埋め私は沢山泣いた。声を抑えることなく、涙を堪えることもなく沢山、沢山泣いて、泣いて。
自分の小ささに気付く。海本の大きさに気付く。自分はどうしようもなく惨めで汚い人間だと気付き、海本はどうしようもなく優しい男だと気付いた。気に入らない。私はその優しさが前から気に入らなかったんだ。他人に優しくできる、そんな海本の姿が気に入らなかった。私には出来ないそんな姿が。今も、敵の私に優しい。そんな優しさを私は昔から望んでいて、そんな優しさを簡単にできる海本に嫉妬してたんだ。優しい海本、透麻。
布団に顔を埋めて泣いていると、海本の匂いが伝わってくる。敵なのにその匂いに何だか安心してしまい、私はまた海本の前だというのも気にしないで泣いた。
「……そろそろ帰れよ」
「……帰れないのよ」

「いや、帰れって」
「帰れないの！　私、お父様から、要らない子って、今日言われたから、帰れないの」

今なら蒼空の気持ちがわかる。私は酷いことをされたわけじゃないけど……。けど、優しかった頃を知っているから憎めなくて、好きなままで。どうしていいのかわからない。

「要らない子って……、はぁ。で、お前はどうしたいわけチビ」
「チビではありませんわ。海里です」
「で、どうしたいんだ」
「……めて、いす」
「は？」
「……めて、いです」
「はっきり言えよ。聞こえねぇんだよ」
「っ泊めてほしいですって言ってるんです！」
「はあ！？　ふざけんなチビ。お前何か勘違いしてねぇか。お前は俺の敵だぞ。何で俺がお前なんかを泊めなきゃなんねぇんだ」

……。

「……ぐすっ」
「ちっ……。あー、もうわかったわかった！　一日だけだぞ」
「っありがとうですわ」

嬉しい。やっぱり”透麻”は優しい。こんな私にも優しくしてくれる。

「そのかわり汐姫にちゃんと謝れよ」
「わかってます。私も、やっと気付きました」

「は？」
「とにかく、お世話になりますわ」

求めていた優しさ　海里（後書き）

そう言えば私殆ど裸の状態なんだけど……。

「見た？」
「なにを？」
「……私の裸をですわ」
「あー、見たよ。そりゃあ行ったらもう裸だったし、その上の服着せるのも目を瞑ってちゃムリだし。あ、まぁ安心しろよ。誰もお前の幼児体型に欲情したりしねぇから。それにしても高校生でそれはないぞ。背も低いし胸も全然ない。色気ってもんを知らねぇよな。おまけに毛もはえてなっグハァ！」

目覚ましを投げ付ける。人が気にしてることズバズバと。ただ見たかどうかだけ答えればいいのに。色気が全然ないなんて……。

「ぅ、うわぁあああん！」
「なに泣いてんだ？　泣きたいのはこっちだっつうの」

家庭の味　透麻

要らない子って言われたって泣きそうな顔で言うからつい勢いで泊まっても良いっつったけど……。

「晩ご飯はまだですの？　私お腹が減りましたわ」

「うっせぇ。適当に食っとけ。つかやっぱり食うな」

ウゼー。さっきから何だよこいつ。わがままにも程がある。晩ご飯だの、着替えだの。着替えくらい一人でやれっつうの。結局着替えれないからティーシャツ一枚だし。下着もつけてないわけだぞ。まぁ誰もチビなんぞに欲情しねぇからいいけどよ。

「酷いですわ。食べないと私死んでしまいます。透麻、晩ご飯はまだですの？」

「そんなに欲しいなら自分でつくれ。カップラーメンがあんだろそこに」

「カップラーメンって何ですの？」

……は？

「カップラーメン、知らないのか？」

「知らないですわ」

いるんだな。時代に取り残された人間って。今じゃ食文化の代表選手だぞ。三分ポッキリだぞ。学生ニートの主食だぞ。もはや家庭

の味とも言える代物なんだぞ。

「それを知らないとは、可哀相な奴だな」
「むぅ、可哀相とは何ですの。だったら透麻が私に教えてくれればいいのですわ」
「はあ？　だりぃよ。そんなの自分で覚えろ。側面に作り方書いてあるから」

そう言うとチビは俺の指差したカップラーメンを手に取り側面を見つめた。手にとったカップラーメンはカップラーメンの中でも基本のキの奴だ。蓋を半分開けお湯を線まで入れて三分待つだけ。素人にも優しい超優れ者だ。その優れ者をチビはマジマジと見つめたあと思いっきり蓋を剥した。うん？　もちろん全部だぞ。

「……バカだ」
「えー、と、お湯ですわよね」

ポットを探し、ボタンを全部順番に押して行く。コイツポットは知ってるけど、使い方はわからない見たいだな。お湯が出るボタンをやっと押しお湯を注いでいく。

「透麻、透麻！」
「何だよ」
「大変ですわ。線がありません。どこにも線が書いてませんわ」

当たり前だ。大体線何か何となくわかるだろ。何となく窪んでいるようなところが何となく線だなぁって感じだろが、何となく。

「あー、じゃあ取り敢えずお湯溢れそうだから指離そうか」
「わかりましたわ」

お湯の量、一番上から数ミリ下。薄味決定だわこりゃ。しかも、全部蓋剥したからもう蓋出来ないしな。全く、この世間知らずは。

「と、透麻、どうしましょう。トイレに行きたいですわ」
「行ってこいよ」
「で、でも……もし三分過ぎちゃったら」
「どうもしねぇから言ってこいよ」
「ほ、本当ですの」
「ああ。だからさっさと行ってこいよ」
「と、トイレの場所は……どこですの」
「出て右に曲がってその突き当たりだからとっととさっさと今すぐ行ってこいよ」

トイレに行くだけでどんだけ引っ張ってんだ。三分過ぎたって麺が伸びて不味くなるだけだ。別に俺には関係ないからどうでもいい。
さて、じゃあ俺も自分のを作るかな。

三分後。

「で、できましたわー」

そんな騒ぐことじゃないだろ。蓋剥してお湯入れただけだろ。っと、俺のもそろそろだな。

「はい」

「……は？」

出来たカップラーメンを両手で火傷しないようにそっと持ち、俺の顔の前に持ってくる。

「泊めてもらう、お礼ですわ。私が作ったカップラーメン、あげますわ」

そう来たか……。断りたい。出来ることなら断りたい。誰が好き好んで薄味で伸びた麺のカップラーメンを食べる？　いないよな。そんな奴はいない筈だ。少なくとも俺の周りには……、一人食えれば何でも良いって人がいるけど、アレは除外だ。だから、俺は断りたいんだよ。でも、食べて欲しそうに上目使いで、しかもほんのり頬を染めて、初めて作ったカップラーメンを食べてって言われたら断れないだろ。ここで断ったら小学生の頑張りを無駄にする感じで、断れるわけがない。卑怯だ。背が低い奴はこれだからダメだ。

「あ、ありがと。かわりに俺のをあげるわ」

パァアアっと表情が明るくなり俺にカップラーメンを渡すと、俺が作っていた奴を持って来て俺の横にちょこんと座った。何か、本当に小動物見たいだ。

「いただきます」

そう言って箸を伸びきった麺の渦の中に入れる。適当に挟みカップの上にまで持っていくんだけど、これが長えの長えの、終わりが見えないんだよ。ふー、ふー、と息を吹き掛けある程度冷ます。チビはずっと俺の様子を見ている。

ずずー。

……思った通りの味。決して美味くないし、そこまで不味くない、中途半端な味。感想を聞きたそうにさっきよりも俺を見つめる瞳に力が入っている。

「う、美味いんじゃね？」

「あ、当たり前でしょ。私が作ったんですから」

一瞬目茶苦茶嬉しそうな表情をし、照れ隠しからか素っ気無い態度をとった。それで気持ちを隠せたつもりなのか？　後ろから見ても顔が赤いのがわかる。だって耳が赤くなってるから。

「じゃ、じゃあ私もいただきますわ」

ずずー。

一口食べた所で動きが止まる。数秒たち、急にふるふると肩が震えだしその後一気に首をこっちに傾けた。

「なんですのコレ！　凄く有り得ない程美味しいですわ！」

おお、まさか金持ちの口に合うとは。俺はてっきり不味いって言うのかと思ってたのにな。

まぁ、アレだな。自分が作ったものを美味しいと言われて悪い気はしないな。ていうかぶっちゃけ超嬉しい。蓋剥してお湯入れただけだけど。

「残さず食えよ」

よほどハマったのか俺の言葉が聞こえてない見たいだ。あの様子じゃ残す筈はないからいいか。問題は俺の方なんだよなぁ。正直残したい。もう食べたくない。自分で新しいのを作りたい。まぁチビに悪いからそんなことはしないけど。ちょっとムリをするけど、耐えてくれよ俺の胃袋。

「ほら先風呂入れよ。俺のあと入るの嫌だろ」

女はそう言うもんだって教えてもらった。ていうか女を先にいれるのが紳士道らしい。コイツの着替えはどうしようか。下着とか持ってないしなぁ。來優か汐姫に頼むのもムリだし……。俺のティーシャツで我慢してもらうか。身長のまんま幼児体型だから膝くらいまで隠れるしな。

「お風呂はいつもメイドさんと入ってました」

何かよくわからんこと言いだしたぞ。言ってることはよくわからんけど、少なくとも良い予感はしない。

「一人じゃ怖くて入れないのですわ。一緒に入りましょう」

「死ね」

今日は風呂諦めるか。明日コイツが帰ったときに入ればいいしな。

「お風呂入りたいですわ」
「一人で入れ」
「怖くて入れないです」
「死ね」
「一緒に入ってく」
「死ね」
「お願いし」
「死ね」

寝よ寝よ。よく考えたらこんな奴と話す必要なんかなかった。てことで寝よう。
先にベットに座っているチビを足で払い退けベットに寝る。

「電気きるからな」

言い終わるころには部屋は真っ暗になっていた。誰かが俺の腕を強く握っている。それが出来る奴は一人しかいないんだが……。

「今度はなんだ？」
「べ、別に何でもないですわ」
「……暗いのが苦手なのか」
「……」

苦手だらけかコイツは。

「じゃあ電気つけてやるから手離せ」
「違いますわ。……ひ、一人で寝るのが苦手なんですの」
「はあ？」

「誰かの手を握ってないと寝れないんですの」
「っお前ホントめんどくせぇな」

ビクっとチビの体が震えたのが握られている腕から伝わった。あーくそ。仕方ねぇなぁ。

「じゃあ、もう握っててていいから早く寝ろ」
「ありがとうですの！」

ぎゅぅとさっきより強く握ってくる。あー、幼児体型だと思ってたけど、微妙にあるんだな、胸。まぁ触らないとわからないくらい微妙だけど。あ、触ったわけじゃないぞ。コイツが強く腕を抱き締めるみたいに握るから偶然当ったんだぞ。下心なんかクソ程もないからな。

……くだらない事考えてないで寝よう。とは言っても一応俺も男だからな。女にこんな密着されてたら寝れるもん寝れない。今日は徹夜になりそうだな。

「くー、くー」
「すー、すー」

決心　佳

良い風だ。今日はとくにすることもないからよく学校サボるときにくる土手に来た。ここに一人で来てやることと言えば一つ。昼寝だ。今日もマイ枕とアイマスクをバックの中に入れてある。アイマスクは超高機能なひやぁっとするタイプのだ。だから程よく冷たいし、風もいいぐらいに吹いててこんなに寝やすい状況は外ではこの土手でしかないだろう。バックを開け枕を取り出しアイマスクを装着する。あとは眠気に身を任せるだけ。ほら、いい感じに眠く、

グサリ。

目に強い違和感。前にもこんな事があったような気が……。そんなことを考えていると真上から間の抜けた声が聞こえた。その声に対して俺は今おかれている状況について冷静に突っ込む。

「あれ、佳？」

「目を潰す前にまずは確認からしようか。もし人違いだったら大変なことになるよ。それといつまでも押してないでそろそろ指離そうか」

その言葉に目を潰している奴は笑いながらすまないと謝った。笑いながらだから謝る気何か無いのかと思ったけど一応は罪悪感は感じていたのか謝ったあとすぐに指を離した。

指が離れたからアイマスクを外し、座り相手を見る。相変わらず変わらない赤と黒の髪。ナイスなセンスは健在の様だ。その様子に安心しているとまた指が目に近付いてきた。ガシっとその指を少し

力強く握る。

「あれ、止められた」
「何のつもりだ羽路」
「いやはや、どうやら自分は相手の目を刺すのが癖になってるみたいなんだ」

恐ろしい癖だなぁと思い、目を瞑って話す羽路の頭を軽く小突いた。

「いたっ。酷いなぁ、こんな自分を小突くとは」
「先にしたのは羽路の方だろ」

羽路は目が見えない。何で見えないかは知らない。聞きたいとは思わないし、羽路とはまだ今日を含めて二回しか会ったことがない。二回しか会ったことがないような人が相手の過去、ましてや傷に触れるなんて最悪な奴がやるようなことだ。

「それにしてもまたここで会うとはな。久し振り羽路」
「久し振り。一ヵ月と少しぶりくらいかな」
「前話した件だけど、やっぱりダメ？」
「わあ、相変わらず無視だな」

少し微笑みながら言う羽路。そのあと真剣な表情になり答えを聞かせてくれた。

「すまない。やっぱり自分は」
「いいよ。人それぞれだし」
「ありがとう」

ああ、でも羽路が部活に入ってくれないのは少し悲しい。羽路には悪いけど……俺の代わりになるかなと思ってたのに。センスも似てるし、何より普通じゃない。だから、俺が離れて行っても皆が平気なように――

「――違う」

恨まれないように。俺は狡く汚い奴だ。皆のことなんか考えてない。俺が皆から恨まれるのが、嫌われるのが怖いだけだ。羽路を代わりにしようなんて……汚い。

「佳はよくここに来るのか？」
「え、ああ、まぁよく来る方だと思う。寝心地良いし」
「なははは。寝心地とは。やっぱり変わってるね佳は」
「……ありがと。羽路はよく来るのか？」
「うん。ここは自分のお気に入りの一つなんだ。嫌な匂いがしないし、嫌な音もない。優しく包んでくれるし、慰めてくれる。そして、出会いをくれた。会長との出会いを。なははは。話すのは少し恥かしいけど、会長と出会ってから自分は変わったんだ。自分を好きになれるようになった。会長がこんな自分でも好きでいてくれるから」

そう話す羽路の表情は少し頬が赤く染まっていて、恥かしそうに、照れくさそうに、けど凄く嬉しそうにその会長のことを話していた。どれだけ会長が好きか、一目で伝わって来た。

「佳。自分が前佳と会長は似てるって言ったこと覚えてる？」
「うん。覚えてる」
「今日会って、今日の佳を”視て”確信したよ。佳は会長よりも自分とよく似てる」

薄く目を開けた羽路。そこから見えた瞳は真っ白で、どんな色も、どんなことも何もなかったかのように塗りつぶしてしまいそうな白だった。ゾクっとした悪寒が細胞一つ一つに警報を鳴らすかのように体中を駆け巡る。警報を受けた体は体温が奪われ、徐々に体が固くなっていく。やがて脳が別の指令をだす。動くな。考えるな。冷や汗が流れるのを感じながら羽路の目を見据える。違う。目が離せない。怖くて、羽路の瞳に魅せられて。羽路はそんな俺のことなんか露知らずと言った感じで話を続ける。いや、羽路は知ってるんだ。自分が見ると人がそう言う境地に陥ることを。

「怖いなら話さなかったらいい。そしたら今のままでいられる。でも、佳の友達はそんな簡単に佳のことを嫌う人達なの？」

何で？　何でわかる。何で思っていたことが。悩んでいたことが。考えていたことが。怖いことが。恐れていたことが。何でわかるんだ。俺のことが。

何で何で何で何で、何で何で何で何でなんで何で何で何デ何で何で何でなん、で。何でナンデ何で何デな、んで。んで、何。デ、何でなんで何でナンで、何で何で。何でナンデなん、でな、んデ何で何で何で何で何で何でなんでナンデ何。で何で何　で。何で何デ何でなんで？　何で何で何でなんで何で何デ何で何。で？　ナン、デ何でなんでナンデ！？

「違う。そんな人達じゃないことを佳が一番わかってる筈。だから、そんなに泣かないで。佳はもう独りじゃない」

頭に手が置かれる。その手は数回俺の頭を撫でたあと止まった。警報が鳴りやむ。恐怖が逃げていく。体に体温が戻っていく。温もりが置かれた手から伝わってくる。

そうだ。皆、そんな奴等じゃない。恨むような奴等じゃない。嫌うような奴等じゃない。怒ることはしても離れていくような奴等じゃないだろ。でも、それは実は女だって秘密の場合。もう一つの方は、悲しむ。恐らく皆悲しむ。恨みもせず嫌いもせず悲しむだけ。それが、俺は怖い。恨まれるのも怖い。嫌われるのも怖い。そのくせ何も言われず悲しまれるのも怖い。

――いっそ、皆が俺のことを忘れたら、

違う！　そんなバカなこと考えるな。もうどうしようもないんだ。皆が悲しむ。そんな気持ちもどうせ忘れるんだ。考えても意味はない。だから、何も考えずに、現在（いま）にすがりつくんだ。泣きつくんだ。離さない。最後まで。今思い出した。俺はそう覚悟しただろ。

「よかった。元気になったみたいで」

「ありがと。おかげさまで決心が固まったよ」

もう揺らがない。俺は最後まで離さない。そして、俺は俺のまま死んで行く。

「じゃあそろそろ自分は行くとするよ。会長の家にドッキリ訪問する為にね」
「そっか。じゃあ、バイバイ羽路」
「バイバイ」

羽路が手をふりながら離れていく。さて、寝直すか。何か気分が晴れ晴れしいから良い夢が見れそうだな。
アイマスクをもう一度かけ、今度こそ睡魔に身を任せた。

気付いた想い　城道

『牛乳、卵、小麦粉、鳥肉』

そう書かれたメモをもう一度見ながら深い溜め息をつく。まさか葵さんにお使いを頼まれるとは。瞑想中だったのに。まぁ晩ご飯を作ってくれるらしいから断りはしない。けど、あまりにもタイミングが悪い。ちょうど本調子になって来た所で中断させられたのだから。

もう家を出てから十分たった。買い物なら近くのスーパーでもよかったけど、ちょうど街のディスカウントストアで卵が普段より更に安売りされている。朝の広告で見たから間違いはない。というか、貰ったお金を計算したら、その店で買ってちょうどお釣がこない金額なのだ。葵さんは最初からそこまで行かせる気だったみたいだ。

「むぅ、めんどくさいのだ」

早く帰って続きをしたいのに……。

「あ、あのぅ」

後ろから声をかけられる。弱々しくか細い男の声。僕の一メートル近くにはあまり人がいない。それに声は僕の真後ろから聞こえて来た。てことはやっぱり僕に声をかけてるのだろう。何の用だろう。そう考えつつも、何となく頭の中で一つの答えが出ている。お願いだからそれだけは無いようにと強く思いながら、振り返った。

「なんなのだ？」

男は見た目から僕と同い年か、もしくは一個下ぐらいなのだろう。まだ少し幼さが残る顔立ちをしている。見た目もあまり強そうな感じじゃなく細い体付きをしていて、黒ぶちの眼鏡がさらに弱々しそうな印象を与えている。どこからどうみても不良とか、そう言うのには全く関係無さそうな男だ。

またか。考えていた答えが当たりだと確信しつつも一応男の話に耳を傾ける。

「す、好きです！　友達からでもいいので、ぼ、僕と……付き合って下さい」

はぁ……。深い溜め息をつく。目の前の男には何も悪気はない。それは知っているけど、こうも告白が多いと嫌になる。今日もまた同じ台詞を言う。それを言うと必ずと言っていいほど男は固まって動かなくなるから。

「僕は男なのだ」

いつも通り男は固った。その様子を見てまた溜め息をつき、放っといて歩みを再開する。

僕のことを何も知らない人、同じ中学校じゃなかったり、不良とは全く関係ない生活を送ってきた人達は僕のことを女だと勘違いする。少しでも僕のことを知ってたら関わろうとはしないのだ。まぁ未だに無理矢理関わってくる奴はいるにはいるんだけど。でも殆どは関わってこず、目も合わせようとしない。とくに昔ケンカした相手は。

「それにしてもまた告白されたのだ……」

一人で街を歩くとよく告白されるか何も知らない年上の人にナンパされるのだ。だからあまり一人では歩きたくないのだ。

「早く買って帰るのだ」

それが一番面倒じゃないのだ。

「うわぁあああん！」

……言ったそばからこれだもん。道の角の方で小さい男の子が泣いている。皆その男の子を見るものの面倒事は御免だと無視して歩き続ける。

小さい子には弱いのだよ。

「どうしたのだ。親とはぐれた？」

その子に駆け寄り、膝を折って身を低くし頭を撫でる。小さい子を慰めるコツはその子と同じ目線になることなのだ。

「うん……ぐすっ。ママがいなくなった。うっうあっ」

「泣かないのだ。男の子は強くないとダメなのだよ」

「う、うぐっ……」

「それでいいのだ。じゃあ僕とお母さんを探そうか」

葵さん。帰りが少し遅くなるのだ。怒らないで欲しいのだけど……怒られないよね？

男の子の手を握り今日母親と遊んだ場所を聞く。母親の方も探してるだろうから遊んだ場所に行けばたぶん見つかるのだ。

聞くと、遊んだのは近くの大きな公園でこれから家に帰る予定だったらしい。じゃあやっぱり公園に行けば見つかりそうなのだ。その公園はここから五分も歩けばつく。出来る限り早い方がいいのだ。手を握るのをやめ、男の子を背に乗せる。足をしっかりと手でもち公園まで走った。

「お母さんいたのだぁ？」

「ううん」

むぅ。ベンチの方にはいないらしいのだ。てことは、反対の遊具の方にいるのかな。

「柳生城道、だよなぁ」

の太い声に呼ばれる。どう聞いても敵意が込められている声。今日も、か。今は忙しいのに……。タイミングの悪い奴なのだ。

「なんなのだ」

振り向くと、手に鉄パイプを持った男が五人いた。

「鬼子を倒して名をあげるんだよ」

そう言いながら一人が鉄パイプを振り上げ、突っ込んでくる。鉄パイプの間合いに僕が入ったと判断した男は勢いよく鉄パイプをふり下ろした。

ぶんっと空をきる音がする。避けられたことにいち早く気付いたその男は地面を穿ったその一撃をもう一度繰り出そうと腕を振り上げる――が、遅い。

ドスっと言う鈍い音のあと、男がお腹を抱えて膝をついた。

「で、次は？　僕はこの子の母親を探さないといけないのだ。だから来るなら早く来て欲しいのだよ」

仲間があっさりやられたことで男達に緊張が走る。勝てると思って五人で来たんだろうが、さっきので勝てないという考えが出てきたんだろう。お互い顔を見合わせ、全員で突っ込んで来た。全員で行った方が勝てる可能性が高いと見たのだろう。あながちその考えは間違ってない。けど、そんなバカ見たいに横に並んで来たら意味がないのだ。

足元に落ちている鉄パイプを拾う。そして、型も何もなく、ただ力任せに横に薙いだ。端にいる男から全員が横に一メートル飛ばされる。もみくちゃになって倒れている男達に歩みよって、鉄パイプを一人の男の顔に向って思いっきりふり下ろす。

ゴウっという風をきる音のすぐあと、ガッ！　という音がして飛び散った砂が男達の顔にかかる。男の顔の数センチ前に、十センチくらいの荒い穴ができた。

「まだやる？」

一応聞く。既に戦意喪失してるだろうから逃げていくだろう。そう思っていた。

ブァっ。

「うっ」

目に砂が。卑怯なことをする奴がいる。いや一人に五人、しかも鉄パイプ所持の時点で十分卑怯なんだけども。逃げ出すとばかり思っていたから油断していた。その油断をつかれて砂で目潰しをされたのだ。油断しなければ避けられたんだけど……。投げた砂は見事に僕の顔にかかり、視界を数秒失わす。

何とか目を開けた先に写ったのは目の前にいる敵の顔。顔を歪ませ、何かに怯えているように酷く焦っている。男のその顔を見た瞬間、頭に鈍い痛みが走った。

「へ、へへ。やった。やってやったぜ！　ざまぁ。ざまぁみろよクソがぁ。俺がやった、俺が鬼子をやったぞ！」

頭が熱い。顔に砂がつく。あー、痛い。流石に……痛いなぁ。アレだ。もうダメだ。頭を鉄パイプで殴られたんだよ。そうだよ。そうなのだよ。頭を鉄パイプで殴られて大丈夫なわけがない。冷静でいられるわけがない。キレないでいられるわけがないのだ。今日、透麻がいないけど、まぁいっか。医療技術は日々進歩してるしな。

「なぁ、お前ら見たか。俺がアイツをやったところを〝っ」

うるさいガキをまず黙らせる。黙らせるのは簡単だ。顔面を蹴れば大抵皆黙る。

「折角見逃してやろうと考えてたのに……。もうやめなのだ。お前ら皆死刑」

とにかくそばで倒れているうるさかったガキのお腹を蹴って邪魔じゃない所まで飛ばす。残り三人。二人が雄叫びをあげ、鉄パイプを振り回しながら近付いてくる。そんなもので僕を倒せると思ってるのだろうか。とことん救いようのないバカだ。

振り回される鉄パイプの軌道を読み、掴む。掴んだ腕を捻ると相手は痛みから鉄パイプから手を離す。

「今度はお前らが殴られろ」

両手に握りしめた鉄パイプを目の前の男の顔の中心に叩き込んだ。後ろに吹っ飛ぶ二人の男。飛ぶ途中でぐるりと目が動き白目をむく。自分以外の仲間がやられているのを見ていた男が敵わないと判断したのか急いで逃げ出した。でも判断するのが遅い。鉄パイプをその男目掛けて投げ、自分もその男の方に走る。手を離れた鉄パイプは吸い込まれるように男の後頭部に当った。後ろからの痛みと、もともと震えて上手く動かなかった足がもつれてその場でこける男。起き上がりもう一度走ろうとした時には既に僕は男の首を掴んでいた。

「ぐっ、が、あっ」

「逃げるのは酷いのだ。言った筈なのだよ。死刑だって」

手の力を抜き、解放すると、男は地面に頭をつけ謝り始める。涙と鼻水が地面に零れ落ち、額に砂をつけ、必死で許しを請う。

「許す、とでも思ってるのか」

本当にバカで愚かなのだ。

男の後頭部に足を乗せる。徐々に足に力を入れていきゴリゴリと額を砂で擦る。それを血が出るまでやり続けた。その間も男は許して下さいと呪文のように唱え続け、最後まで僕がそれを聞くことはなかった。

「これで終わりなのだ」

一度足をあげ、力一杯踏み付ける。さっきまでじわりと流れていた血が、勢いよく流れ始め、地面の砂がより広い範囲で赤茶色に染まっていく。

「……」

もう、いいか。子供もいることだしこのくらいで許してやろう。ベンチの前にいる子供の所まで歩いて行き手を差し延べる。

「もう、大丈夫なのだ。お母さんを探すのだ」

にっこり笑って言ったつもりだったが、子供は僕の手をとろうとはしなかった。怯えた顔、僕を殴った男のように酷く怯えた顔で僕を見ている。

「ちょっと！」

大きな怒声が聞こえて来た。後ろを振り向くと若い女の人が僕を睨みつけていた。

「人の子供に何してるのよ！　離れなさい！」

この子の母親なのか。何か誤解をしている見たいだから一応誤解

を解こうと試みたけど、

「ぼ、僕はこの子を」
「ママぁあああ！」
「守ぅ。大丈夫。痛いこと何もされなかった」
「怖かったよぉおお」
「もう私の子供に近付かないで下さい！」

そう言い親子は手を繋いで帰って行った。
そうか……。僕は怖い人に見えるのか。そりゃあ目の前で血を流して倒れている男がいるから仕方ないことなんだろうけど。何か……悲しいな。僕は結局中学生の頃と何も変わってないのか。

「……早く、買い物を終わらせよう」

そして家に帰って瞑想を再開するのだ。

カー、カー。

烏の鳴き声で我に帰る。ここは、土手？　何で。どういう道を辿ってここに来たか全く覚えてない。何でここに来たかも覚えてない。買い物をして、店を出た所までは何となく覚えている。

「よほど、ショックだったのか……」

ボーとして歩くほどショックだったのか。変わったと思っていたのに何も変わってなかったことが。助けたのに、結局怯えられて、怖がられたことが。

少し遠回りになったけど、別にいいか。家につかないわけじゃないし。

そう思いながら歩いていると静かな寝息が聞こえて来た。

寝息がする方に近付いていく。そこには、黒と赤の髪の毛の人が枕をしき、アイマスクをして寝ていた。

「……佳？」

佳の隣りにまで行き座る。よくよく考えて見たらよく聞こえたなぁ、と自分でも思う。隣りに来ても何とか聞こえるか聞こえないかぐらいの音なのに、数メートルも距離があって、しかも烏の鳴き声や人の声までしてるのに。アイマスクに手をかけ、外す。そして無垢な佳の寝顔を見た。自然と口元が緩み、気が楽になる。さっきまで考えていた事が嘘のようにどうでもよくなっていった。佳の顔を見ただけで楽になる。心が温かくなって心地よくなる。

「佳……、好きなのだ」

っ！？　今なんてっ？

勝手に口から出た言葉にビックリする。何でそんなことを。佳は男なのに。何で。確かに佳と一緒にいると心が温かくなって気持ちが安らぐし、気が楽になる。佳が笑っていると自分も嬉しくなる。佳が悲しい顔をすると自分も悲しくなる。佳を傷つける人は許せないし、佳にはいつも笑っていて欲しい。

あー、何だ、そう言うことか。悲しいと思った時に佳と会うとそのことがどうでもよくなったり、色々な音の中で佳の小さな音に気付いたのは、全て佳が大切な存在だからか。仲間とか親友とかとは違う気持ち。そうか、僕は佳のことが好きだったのか。佳が男だからって関係ない。佳という人間が、存在が、佳そのものが好きなのだ。

もう一度佳の寝顔を見る。さらさらした髪、長い睫毛、形のいい鼻や唇、柔らかそうな頬。

「……ん」

気がつけば、佳の唇が目の前にあって。気がつけばその唇に自分の唇を重ねていた。

「佳っ、佳起きるのだ」
「ん、ふぁ……」
「佳、寝ぼけてないで起きるのだ」
「ん～、ぁ、くに……みつ？　おはよう」
「おはようなのだ」
「ふぁ～あ。くぅ～、はぁ」

両手を上に伸ばし、欠伸をする佳。気持ちよさそうな声をだし、欠伸をしたせいか涙が滲んだ目を指で擦る。

「あれ？　何で城道がいるんだ」

「佳がここで寝てるんじゃないかと思って来たのだ」

嘘だけど。

「そっか」

「佳、これから家に来るのだ。葵さんが晩ご飯を作ってくれるのだ」

「んー、行こうかな」

「じゃあ急ぐのだ。葵さんが待ちくたびれてるのだ」

「え？　なんで」

疑問符を頭の上に浮かべている佳の手をとって歩きだす。買い物袋に卵が入ってるから走れないけど、でも走れないかわりに佳と長い間手を繋いでいられる。そう考えると嬉しくて、急がないといけないことを忘れてしまう。

僕のこの気持ち。今はまだ言えない。佳を困らせたくないから。それと今の皆との関係を壊したくないから。だけど、いつか必ず告白するのだ。だからその日までは、大切な仲間として佳を守るのだ。

気付いた想い　城道（後書き）

「くーにみーつちゃん。何でこんなに遅くなったわけぇ？」
「いや、その……、ちょっとした冒険なのだ」
「今なら三途の川までの超特急便が無料で乗れるんだけどぉ……、乗る？」
「ごめんなさい。ちょっと寄り道してました」
「お邪魔します」
「あれぇ？　佳くんじゃん。どうしたのぉ」
「晩ご飯に招待された」
「そっかぁ。じゃあ先行っててぇ」
「わかった」
「あー、佳置いてかないでなのだぁ」
「城道ちゃんは僕と話しをしようねぇ」
「ごめんなさいなのだぁあああ！」
「ダメダメぇ。しっかり反省するまで許さないよぉ」
「うわぁあああああん」

祭りには浴衣なのだ　城道

今日は花火祭りの日なのだ。当然祭りと言えば浴衣。昨日のババ抜きの罰ゲームで誰がどんな浴衣を着て来るのかを決めた。集合場所はずらっと横に並び売上競争を繰り広げている屋台の一番最初の所。長い石段を上り、きらびやかな屋台の列が始まる。その石段の下の大木の下で待ち合わせをしている。楽しみなのだ。昨日の罰ゲームで、佳はピンクの女の子が着る甚平を着てくることになっている。今までは意識してなかったから似合ってるなぁ、程度の感想だったけど、今年は違う。佳のことが好きだと自覚したから、今年の感想は違うのだ。早く佳の甚平姿を見たい。どうしようもなく可愛い筈なのだ。今年は汐姫が男物の甚平、來優が華やかな女物の浴衣、透麻が男物の浴衣なのだ。僕？　僕はもちろん……、女物の浴衣なのだ。でも去年はちゃんと立派に男物だったのだよ！

「彼女ぉ、一人ぃ？」

むぅ。やっぱりこういう祭り事はナンパが多いのだ。肌を黒く焼いた男二人が僕の前に立つ。祭り事でテンションが上がっていて、僕だと気付かないのか。それとも僕のことを知らないのか。あとは考えたくないけど、よほど僕が女にしか見えないのか……。まぁどれらにしても鬱陶しいことこの上ないのだ。

「聞いてる？　彼女」

「あ、わかった。彼氏にフラれたんだろぉ」

無視なのだ。バカは相手にするだけ無駄なのだよ。

「おーい聞いてる？」

「おい、無視って酷いんじゃねぇのか？」

一人の男が僕の顔の横に手をやり、後ろの木に押し付ける。

はぁ。浴衣は動き難いんだけどなぁ。仕方ないか。軽く殴れば諦めるだろう。

「俺のツレに何か用があんのか？」

僕が殴ろうと拳を握った瞬間透麻が一人の男の肩を掴んだ。

「あ、透麻やっと来たのだ」

「やっと来たってお前、集合時間までまだ五分あるぞ。五分前集合してやっとってておかしいだろ」

「僕は三十分前から来てたのだ」

「ああ、そりゃあやっとだわな」

呆れた顔で透麻は言った。僕の言葉を本当だと思ってるからこそ呆れたのだろう。

「て、テメェら何俺達を無視してんだよ！」

「ぶっ殺すぞ、ああ？」

うるさいのだ。僕達が話しをしてる間に何処かに行けばよかったのに。

「あー、まだいたのか。いいよもう帰って。じゃあ、はいさよなら」

「バイバイなのだ。もう二度とその黒い顔見せるななのだ」

一応言っておくけどこれは挑発ではない。僕達なりの穏便な話し合いなのだ。

「っッッ！」

「殺す！」

僕の目の前にいた男が勢いよく拳を突出す。けど、その拳は僕の元には届かなかった。ていうか届くわけないのだ。途中でお腹を抑えだし倒れたのだから。

「早いね皆」

倒れた男の後ろに汐は姫いた。いつの間にかいた汐姫は男が僕を殴ろうとしたのを見て男の股を蹴り上げた。その行為が世の男をどれだけ怖がらせるかわかっていないのだよきっと。流石に三対一はムリだと思ったのか仲間の男も倒れている男を担ぎ足早に逃げ出した。

「で、結局なんだったのあの人達」

「城道に絡んできたアホ」

「あー、祭りだもんね」

それにしても、二人共よく似合ってるのだ。汐姫は紺色の縦に黒い線が入ったようなシンプルな甚平、もちろん長袖だ。ていうか長袖よく見つけたのだよ。そして透麻が真っ黒い浴衣で、背中に白で龍が描かれている。左胸の当たりにも龍と白く書かれていて似合っている。二人並んでたら兄弟みたいなのだ。声に出したら汐姫が怒るから言わないけど。ボクって男に見える程胸がないってこと？とか言ってきそうなのだ。僕は胸がないのに女と間違われるのだけ

ど……。

「佳様と來優はまだ来てないみたいだね」
「そうなのだ」
「もう来るだろ。だってあと三分で集合時間になガフッ！」

スコーンと、いや、ガコーンと透麻の頭を横から下駄がぶった。
自分の頭に当たり、落ちていく下駄を手にとった透麻は、頭を抑えながら下駄が飛んで来た方を睨みつける。飛んで来た方向には周りの目を引きつけている來優の姿があった。突然下駄を投げたことにもだろうが、來優に目が行っている理由で大きいのは來優がモデル並に綺麗だからだろう。背が高くて細く、スタイルが良い。赤い派手な着物に來優の薄く綺麗な金髪がよく栄えている。周りの人達は皆來優のことを綺麗だと思っているだろう。とくに男子達は。なのに……、透麻と来たら。

「テメェ、人に下駄ぶち投げてんじゃねぇぞ！　こっち来いやぁぶっ飛ばしてやる！」

大声で怒鳴る透麻。やめてほしいのだ。透麻も別の意味で視線を浴びて近くにいるのが恥かしいのだ。

「上等だボケ！　相手してやるよ！　ただな、その前にちょっとこっちまで来てくれないか。下駄がないせいで歩けないんだ」
「ッ！　だったら最初から投げんなよ！」
「そりゃあ私だって投げなかったらよかったって思ってるよ。ていうか今思ったよ。たださぁ、何か透麻の姿を見たら何かしないといけないって思うじゃん。わかるだろ？」
「わかるわけねぇだろ。そんなんわかっちまったら俺は鏡見る度に下駄投げねぇといけないだろうが」

「あー、そんなのどうでもいいから早く来いよ。動けないだろ私」
「何でそんなに偉そうなんだよ！」

とか言いながらもちゃんと行くあたりが透麻らしいのだ。

「早く来いよ透麻」
「うるせぇなぁ。ちょっと待ってろよ」

二人共仲が良いのだ。あとは佳だけなのだけど……。遅いなぁ。もう一分過ぎてるのだ。佳は約束には必ずちょうどに来るのに。キョロキョロと佳を探して見る。

「ん、どうしたのだ汐姫」

汐姫がこっちをジっと見てるのに気付いた。むぅ、何か僕の顔についてるのかな。それとも僕が何かした？

「……城道は」
「汐姫、城道」

この声は！？

「佳、遅いのだ」

後ろを振り返る。そこには佳がいて、可愛いピンク色の甚平を着ていた。似合ってる。可愛いすぎるのだ。もう佳のバックに花が見えるくらい可愛い。軽くキャラ崩壊している自分が怖いのだけど……、それくらい似合っているということなのだ。

「じゃあ皆揃ったみたいだし、行くか」

一番最後に来た佳がそう仕切るのは少しおかしいけど、僕達は並んで石段を一つ一つ登って行った。

「ちっ」

人の行列が波のように同じ方向に動く。その波の中俺はただ一人逆らい、他の人とは違う方向に歩いている。脇道に入って、少し歩いたら小さな公園がある。手入れの行き届いてない小さく汚い公園。俺は今そこに向っている。

毎年同じで、祭り事は必ず前半は個人行動だ。各々が好きな所に行って、射的やヨーヨー釣りなど景品がある奴をやってとにかく沢山景品を集める。その集めた景品を持って人がいない丘へと行く。まぁ、あとは同じで一番少ない奴が罰ゲームを受ける。その後は佳の気紛れで何かする。去年は肝試しだった気がするな。まぁ、俺が今一人で行動してる理由はそう言う訳だ。けど、公園に向っている理由は全くの別物だ。來優に下駄を持って行った時に呼び出しをくらった。クソ生意気に俺の胸元を掴んで、あとで公園に来いってな。普段なら行かなくても良いんだが、今回はそう言う訳には行かない。來優の様子が少しおかしかった。

「にしても、一体何の用だ」

佳達がいたら言えないこと、か。呼び出したってことはそう言うことだよな。……行ってみりゃあわかるか。

……いねぇし。

「なんだ、俺まさかハメられたのか？」

俺を呼び出しといてその間に景品をとろうってことか？　クソふざけやがって。

ザッ。

砂を踏み、進む音がした。後ろからだ。

「なんだ。いるならさっさと出てこいよな來優」

言いながら振り返る。

ガンッ！

「は？」

痛い。頭が。何でだ？　何で痛い？　何で熱い？　何で、來優、テメェ鉄パイプ何て持ってんだ！？

殴られた額より少し上のあたりを抑える。そして、殴った張本人、來優を睨みつけた。

「どういうことか説明しろや」

「本気で来い。じゃないと、死ぬぞ」

鉄パイプを両手で握り、正面で構える。静かな、來優の周りを静かな空気が流れている気がした。静かだけど、ピリピリした空気。

その空気が來優を中心に一種の空間を作っている。その空間に入れば恐らく鉄パイプが俺の体目掛けて飛んでくるだろう。けど、その空間に入らないと俺は何も出来ない。間合いが鉄パイプの長さ分來優の方が大きいっつうことだ。

「……來優、テメェ本気で言ってんのか」

「……」

無我の境地、か。來優が出来るとは思わなかった。しかも、それを今やってるってことは……、本気みたいだな。

「……まぁいい。不意打ちをした礼はさせてもらうぜ」

力を抜き、体が地面に向って倒れる。その直前に地面を蹴る。城道がケンカでやってるのを見よう見まねでやって見たけど、結構できた自信はある。ケンカ相手は城道が消えたって言っていた。こういう風に突っ込んだら消えたように見えるってことだろう。俺はバカだから原理なんか知らないけどな。

肌がピリピリとした。入った。來優の間合いに。半歩横にずれる。すぐ隣りを來優の鉄パイプが通り過ぎ、風が肌にビリビリと当る。初太刀を躱せばもう俺の拳も届く範囲にある。

「オラァアアア！」

腹目掛けて下から拳を上げる。あと、少し、あと数ミリで來優に当る所で止め、真横に飛ぶ。さっき俺がいた地面を鉄パイプが激しく穿った。砂が飛び散る。

「ちっ」

目眩ましか。一旦後ろに下がりながら目を擦る。肌がピリッとした。

やべぇ。

目をあけると來優が身を低くして突っ込んでいた。構えは居合い。最速の剣術。

とっさに横腹に腕を持って行く。直後激痛が襲い、真横に体が吹っ飛んだ。

「ガッ！」

何とか片腕で受け身をとり、すぐさま次の攻撃に備える。けど、來優はもう正面にはいなかった。

――横かっ！

一瞬でかがみ回し蹴りをする。足払いを狙った蹴りは、当ることなく、來優の足の下を通過した。空中で、來優が鉄パイプを振り上げていることが見なくてもわかる。

――間に合うか。一か八か。

回した足を止め、上に上げる。足で受けるんじゃない。あくまでも攻撃の為に足を上げた。狙うのは鉄パイプじゃなく、持っている手だ。

カランカランと鉄パイプが転がる音がした。音を聞く前に手応えを感じた俺は起き上がる勢いを利用して來優の顎に拳を突き上げる。寸での所で躱され、來優が伸び切った俺のその腕を掴みに来た。

「させるかよ！」

突き上げた腕を今度は下ろした。こんな物が当るとは思っていな

い。案の定躱されたが、本当の狙いは違う。下ろすと同時に腹を狙いにいった膝。それが本当の狙いだ。腹に膝をモロにくらった來優は一瞬だが動きが止まった。その一瞬をついて、來優の頬に俺の拳がめり込んだ。

「あがっ」

飛ばずに何とか足を踏み締め耐えた來優。けど、それは正しい判断とは言えない。いつもの來優なら痛みの流れに乗ってそのまま自分から飛んでいただろう。先に膝蹴りをモロにくらって判断が鈍ったのか、それとも様子が変なことからか、まぁどっちでもいい。とにかく今俺がやることは一つ。

鉄パイプで殴られ力が入らなかった右腕に無理矢理力を入れる。その腕で來優の左腕を掴み、離れないようにギュッと握った。

「お返しはするぜ」

左腕で、思いっきり殴って行く。顔、腹、頭関係なく。ひたすら殴る。來優も反撃しようと殴りかかるが、その手が届く前に來優の腕を殴り叩き落とした。

「うっ」

何か聞こえた気がして殴るのをやめる。なんだ？　謝る気にでもなったのか？

「とうま、なんかに」

震えている声。微かに肩も震えている気がした。

「とうまなんかに、負けるかぁあああ！」

目に大粒の涙を浮かべながら拳を握る來優。あれだけ殴られたんだ。体中痛いだろうし、当然力も入らない。その筈なのに。

「うわぁあああああ！」

ぱちんと俺の頬に來優の手があたる。殴るというより、触れると表現した方がいいくらい、全く痛くない。けど、來優が、あの來優が涙を流しながら殴っている。それだけで俺はもうどうすれば良いかわからなくなっていた。

「なんで、なんで透麻なんだっ。なんで透麻には可能性があるんだよっ！　なんで、私じゃないんだ……。私が女だからか？　私が弱いからか？　私の努力が足りないからなのか……？」

可能性？　何のことを言っているのかわからないけど、今來優が悲しい気持ちでいるってことはわかった。今來優が泣いてるってことはわかった。

「私が、わたしがおんなだからっ、つよくなれないのか……、よわいから、はなれていくのか……？」

來優が酷く傷ついてることはわかった。だから――

「なぁ、とうま。わたしがだめだから、みんなわたしをすてるのかな」

殴っていた手が止まり、ぼろぼろと涙を流しながら來優は俺の顔を見た。

――來優の体を抱き締める。來優の顔を胸に埋める。來優の涙を俺の体で拭いてやる。

誰だ？　來優にいらないことを言った奴は。

誰だ？　來優を不安にさせた奴は。

誰だ？　來優の傷を抉った奴は！

「とうまぁ、こわい。こわいよぉ、もう、わたしはすてられたくないよ……」

ぎりっと歯が削れるくらい噛み締める。

許さない。來優にこんな思いをさせた奴を、仲間を傷つけた奴を絶対に許さない！

「來優、大丈夫。誰も來優を捨てないし、置いてかない。俺達のリーダーは佳だぞ。佳が俺達を置いてくわけないだろ」

來優の頭をぽんぽんと撫でながらゆっくり喋る。そんなことは有り得ない。絶対有り得ないという気持ちを込めて。

「ぅう……、うわぁあああああああん！」

來優が泣きやむまで俺はずっと來優を離さなかった。

もう言わなくてもわかるだろう。來優は、小さい頃、大好きだった親に捨てられた。家に置きざりにされたんじゃない。孤児院とかそう言う類の物に預けられたわけでもない。捨て犬や捨て猫のように、誰かが拾ってくれると思って道端に捨てられたのでもない。

ゴミを捨てるように、ポイ捨てをするように。ある日、唐突に來優はハイキングから家に帰る道中で車の窓から、

――投げ捨てられた。

集中して獲物を見つめる。手に持っている火縄銃の形をした銃の先を上からゆっくり下に下ろす。獲物の頭に狙いをつけ、銃口が獲物の頭の所に来た瞬間に指に力を入れ、撃った。パンっと渇いた音が響き、獲物の体が宙に舞った。

「ガッハッハッハ。お嬢ちゃん上手いねぇ」

屋台のおじさんが拍手をしながら豪快に笑った。手に持っていた銃を台に置き、地面に置いてあるぱんぱんに膨らんだ袋を片手に持つ。

「どう致しましてなのだ」

「ガッハッハッハ。おじちゃん、もう涙が出てきたよ」

ガラァンとした何もない賞品置き場をちらりと横目で見て涙ぐむおじさん。よく見るとこのおじさんの屋台以外にも、早々に片付けを始めだす屋台が何件かある。どれもヨーヨー釣りや射的、的当てなど賞品がついてくる屋台だ。

「おじさん、もう袋ぱんぱんだから新しいのが欲しいのだ」

「ああ、ほらよ」

大きな袋の中に一つ、この店の最後の賞品、熊の縫いぐるみを入れ僕に投げ渡す。ありがとう、と言って屋台をあとにする。

一杯とったのだ。これだけあれば罰ゲームは免れる。約束の時間まであと二十分くらいか……。かき氷とか食べ物系を買って時間を潰すのだ。

あ、かき氷の屋台見っけなのだ。

「おじさんかき氷のイチゴ一つなのだ」

「あいよ嬢ちゃん」

へぇ。最近は色々な味があるんだぁ。イチゴ、メロン、レモン、ブルーハワイ。この辺りは知っている。けど、コーラ、ぶどう、リンゴ、梨、パイナップル。挙げ句に、ドリアンなのだ。何でもやればいいってものじゃないのだよ。でも、少し興味をそそるのだ。

「はいよ嬢ちゃん。嬢ちゃんは可愛いから二百円でいいよ」

「ありがとなのだ」

少し複雑な気持ちだけど、まぁ安くなったから、いいのだ。

お代をおじさんの手の上に置く。

人が多いのだ。少し人波からずれて休憩しよう。多少嫌なことが起こる可能性が出てくるのだけど……、このまま人波の中で止まってるよりはいいと思うのだ。

「城道」

不意に呼び掛けられ振り返る。

「なんなのだ汐姫」

相変わらず気配を消すのが上手い。ていうか、こっそり後ろから話しかけるのはやめて欲しいのだ。少しビックリする。

「ちょっと、人がいない所に行こうよ」
「いいのだよ」

ちょうど良いのだ。汐姫がいれば声をかけられる確率がぐんと下がる。汐姫が可愛くないと言いたい訳ではないのだよ。今の汐姫は男の子に見えるからなのだ。

人波の流れに乗りながら徐々に列の横に移動していき、すぐ横の薄暗い茂みへと抜けた。そのまま少しだけ歩くと祭りの活気や雑踏が静かな音となって聞こえてくる。うるさくなく、薄暗いと言う条件のせいか、近くの木陰でちらほらと二つの人影が見える。疑う余地無くその二つの人影は恋人同士だろう。要するに恋人がこっそりいちゃつくのにこれほど条件の揃った場所はないのだ。少し人影が目に入るけど人の波よりはマシだし、恋人達は自分達のことで必死だろう。何より人が少ないから別にここで時間を潰しても僕は何も気にしない。恋人同士しかいないからナンパされる心配も全く無い。僕にとってもここは時間を潰すにはちょうど良い所なのだ。

適当な木を見つけ、その木の下に両手に持っていた袋を置く。汐姫もあまり膨らんでいない袋を置いた。

「城道は……」

汐姫が僕をジッと見つめがら口を開く。いつもとは違うその真剣な口調に少し困惑しつつも、僕は汐姫の目を見つめ返した。

「城道は佳様のことが好きなの？」

あまりにも唐突な質問だった。たまに汐姫から同じようなことは聞かれる。けれど、それはいつも冗談の様な口調で言われる。こんなに真剣に言われたのは初めてで、僕の頭の中で一つの仮説が出来

上がった。汐姫にそう思わせる出来事。それは僕には心当たりがあって、それしか心当たりがなくて、その心当たりはあまりにも確実に今の状況を作り上げる。

一昨日、佳に口付けをした所を見られた。

黙っている僕を見て汐姫の瞳が微かに揺れる。自信の無さそうに揺れたあと、覚悟を決めたような強い瞳で僕の目を見つめ直した。

「そっか。やっぱりそうだよね。佳様だもん。好きになる気持ちはわかるよ。城道や僕が好きになるくらい佳様は素敵な人だもん」

数秒後汐姫は、ふぅ、と息を吐き、真っ黒な空を見上げそう言った。

「汐姫が佳を好きなことはわかってるけど、僕も佳のことが好きなのだ」

既にもうわかりきってることだけど敢えて言う。宣戦布告。僕達にとって僕が言った言葉は十分に宣戦布告だろう。汐姫も言葉に込められた意味がわかったのか再び僕の目を見た。その汐姫の瞳には挑戦的な色が宿っていて、負けないよって言う意志がビシビシと伝わって来た。

僕には不利かも知れないこの勝負。けど、

「佳が男だろうと関係ないのだ。確かに男同士は難しいかも知れないけど、生憎僕はこんな顔に生まれたのだ。不利だとは思うけど無理だとは思わない」

「ボクはずっと前から佳様にアピールしてるんだよ。絶対ボクが勝つ。相手が例え……城道、でも」

汐姫の声がか細くなっていく。声に力が無くなっていく。どうしたのだ？　急に弱々しくなっていく汐姫を不思議そうな目で見る。

「……羨ましい、城道が羨ましいよ……、なんで、ボクは女に生まれたんだろう」

おかしなことを言う汐姫を僕は益々不思議に思い小首を傾げる。

「……、その内わかるよ。佳様のことを好きになったのなら、その内わかる。例え不利でも……、それでもボクは佳様のことを愛しているから、諦めない」

よくわからないけど、まぁいいのだ。汐姫もいつも通りに戻ったし、時間ももうすぐなのだ。今から向かえばちょうど良いぐらいの時間になるのだ。

汐姫に時間のことを知らせ、歩き始める。人の波に戻る道筋ではない。屋台の列のずっと先、人の波が向っている所、長い道筋に幾つもある石段を上り辿りつく神社。その裏を暫く進めば街を見下ろせる有名なデートスポットがある。そのデートスポットから少し離れた広場。そこがボク達の集合場所。デートスポットと比べると街の夜景は綺麗に見えないけど、花火はよく見える。毎年その場所に僕達は集まる。もし、万が一他の人が入らない為に、危険。立ち入り禁止、の看板を偽装して立てている。

隣りを歩く汐姫を見る。汐姫が僕の恋敵なのだ。負けるわけには行かない。汐姫に僕の気持ちがバレて何かスッキリした。今までの関係を壊すまいと黙っていようと思っていたこの気持ち。汐姫にバレていたのならもう関係ない。汐姫と真っ向から勝負するのだ。

少し気が晴れた想いで僕は上へと歩いて行く。

黒と赤　佳

「ハァハァ……」

ズキズキと痛む脇腹を抑える。数秒前の容赦のない攻撃を何とか耐え、後ろに下がったものはいいものの……、どうする。最初に食らった不意打ちの蹴り。勢いを殺すことも流すこともできず、まともに食らってしまった。肋が折れてないのは相手が手加減をしてくれたおかげだろう。現に数秒前に手で受けた蹴りは力の入り様が全然違った。

「おい……おいおいおいちょっと待てよ」

大袈裟に俯き、首を左右に振る女。真っ赤な髪が左右に揺れる。

「何の冗談だぁ？　ちっとも笑えねぇよ。なぁ、倉本」

顔をあげ、俺を睨む。そうだ。コイツ、どっかで見たことあると思ったらうちの学校の生徒会長だ。

「テメェ、女じゃねぇか」

「……」

もう、バレてもいい。どうせ今日言うつもりだったんだ。けど、何でバレた？　何でコイツは俺を襲う？

数分前。

皆今頃こっちに向ってるだろうか。

広がった場所の真ん中辺りにぽつんと一つだけあるベンチに座り真っ黒な空を見上げる。皆俺が何も手にしてないことを見たら驚くだろうな。けど、こんな形でしか言う勇気がないんだ。日頃使ってる罰ゲーム。それに頼るなんてな、我ながら卑怯だ。

自嘲的な笑みを浮かべながら皆の驚いた顔を想像する。

「あらぁ、可愛いお姉さん。今一人？」

……何だアホか。たまにあること何で反応せずに無視をする。折角皆のことを想像してたのに、顔も名前も知らないアホな男の顔を適当に想像してしまった。

男？　一秒たったかたってないかで気付く。声が男の声じゃなかった。それともう一つ。足音も、気配すらしなかった。

「一人ならオレと遊ぼうぜ」

「誰だッ」

メリッ！

何だ、脇腹に何かがめり込んでくる。激痛が一気に駈け登り、体が真横に飛んだ。

「あれ？　当ったな」

間の抜けたような声が聞こえた頃には俺の体は地面を滑っていた。

「んー、まぁいいや。とにかく倉本佳、お前をブッ潰す」

敵から目を離さず、体制を整える。俺の目に飛び込んで来たのは真っ黒な靴の先だった。

「くっ」

あと数センチの所でぎりぎり避けた。危なかった。反応が一秒でも遅れてたら一生俺の目は光を見ることはなかっただろう。

「ちゃんと反応出来るじゃねぇか。じゃあ行くぜ。こっからがホントの勝負だ。そのクソ動き難そうな格好でしのげるかァ？」

そう言うが早いか、女は俺の視界から消えた。ゴウッと風をきる音が真下からする。反射的に顎を引くと、スレスレの所を拳が通った。ピリッと空気を肌が感じ、背筋にゾッとした悪寒が走った。拳が突き上げて来た場所、真下を見る。地面スレスレまで身を低くし、片足の裏を上に向けている女の姿がそこにはあった。第二撃目が来る。そう考えた瞬間、さっきよりも激しく風をきって第二撃目が飛んで来た。

とっさに腕を交差させガードする。

世界が反転した。上と下が逆さまになる。痛みのせいで一瞬頭が働かなかった。目の前に女の足があって、一瞬で近付いて来た。

ドサっと背中に衝撃が走り、横に転がった。土が弾け散り俺の体にかかる。

自分が浮いていたと今さら気付き、すぐさま起き上がった。

運が良かった。相手の踵が俺に当る前に、地面に落ち、何となく俺は横にずれた。もしずれなかったら確実に意識を落としていただろう。当っていたことを考えたらゾッとした。へコんでいる地面をちらっと見てホントは自分があなっていたことを考えてしまう。

「やるな。さすがだ。だけどよそ見はダメだろ」

胸に何かが触れた感触がし、一瞬で後ろに飛んだ。何とか衝撃を逃す。さっきの攻撃自体は上手く衝撃を逃せたからさほど痛くはない。だけど……。

今度はしっかりと見る。もう余所見はしない。相手が強いことは十分わかった。本気でやらないとこっちがやられる。

「……」

どうしたんだ？　攻撃の勢いが止まった。目を見開き驚いている。

「ただの、コスプレかと思いきや……」
「は？」
「おい……おいおいおいちょっと待てよ」

よくわからないけど、今チャンスか？

「テメェ、女じゃねぇか」
「ッ！？」
「オレはお前が男だと思って決死の覚悟でココに来たんだぜ。なのに女だと？」
「……何か不満か？」

「ああ。オレはあの女以外には絶対負けねぇ自信がある」

さもつまらなさそうに言う女。

「お前、名前は？」

「生徒会長の名前ぐらい知っとけよ」

「どうでもいいことは覚えない質なんだよ」

「んじゃあ、もうオレはどうでもよくないってことか？」

……、クスリと笑う。挑発の意味を込めたその嘲笑は相手の耳に届き、微かだけど相手の顔を強張らせた。

「お前は女に二度負けるんだ。せめて名前ぐらい覚えて貰わないと悲しいだろ」

自分に勝った相手が自分の名前を覚えてない。しかも、もう無いと思っていた二度目に自分が負けた相手が。そんなの可哀相だろ。

そう言った瞬間相手は強張らせていた顔を解き、大声で笑った。

「アハハハハハ。おもしろいな倉本。いいよ。教えてやる。お前も悲しいだろ？　自分が負けた相手の名前を知らないのは」

俺の言ったことをそのままの意味で返して来た女。凄く自信家なことがわかった。まぁどうでもいいんだけど。

「オレの名前は立花紅妃だ。会長、立花、紅妃さん、紅妃姫、まぁ、色々言われてるが……、オレのことを嫌いな奴は大抵赤鬼って呼ぶ。よろしく、なっ！」

また視界から消える。バカか。同じ手は二度もくわない。しかも、

その移動方法は知り尽くしている。ほぼ相手と同時かと思われるタイミングで体の力を抜く、そのまま落ちていき、地面スレスレで蹴り上げる。

紅妃の姿が目の前に現われる。さっきの攻撃で大体わかった。相手の得意とする技は足技。そして俺の得意とする技も足技だ。

足の裏同士が重なり合う。お互いの力が均衡し、弾ける。数メートル後方に飛ばされる。紅妃も同じだ。自然と両者の間に五メートル程の間があいた。

「……あわせてくるとはな。中々やるじゃないか倉本。だけど、これは合わせれるか？」

もう一度、今度は単純に突っ込んでくる紅妃。間合いが結構な速さで無くなって行く。三メートル、二、一。

顔目掛けて横薙ぎの蹴りがくる。腕を顔の右に持っていきガードした。が、蹴りは俺の腕には来ないで、代わりにほぼ同時かと思うタイミングで、ガードした右とは反対の左頬に足が来た。

来ると思っていた。前の攻撃の蹴りより少しだけ右頬を狙った蹴りの速さが遅かった。左頬をより正確に狙う為、速さが少し下がる。最初の蹴りはフェイントで、逆の足で狙っていた蹴りが本命ってことだ。

その蹴りをかがんで躱す。かがむ時に地面を踏み締め、相手の懐に潜った。それを、予測していたのか、間髪を入れず膝が俺の顔目掛けて突き出された。

手をその膝に乗せ、突き出される勢いを利用して後ろに飛ぶ。飛んで行く際に相手の脇腹に蹴りを入れる。体が浮いているから大した力は入らないけど、まぁ、かなりとは言わないが一応痛いだろう。思った通り、少し顔を歪ませた。

着地と同時に地面を蹴って今度はこっちから突っ込む。浴衣であ

まり足が開かないからいつもよりかなり遅い。
少し手間取りそうだな。
そんなことを思いつつ、手の届く範囲についたから、そのまま手を開いて紅妃の顔目掛けて突き出す。それを右に避ける紅妃。が、その右頬には既に俺の足があった。

ドスッ。と重たい音が鳴る。

頬に当った感触じゃない。それだけを感じると蹴った足の膝を曲げ、ガラ空きの脇腹目掛けてもう一度足をしならせる。紅妃が右頬の隣りに置いてあった腕をすぐさま脇腹の隣りにまで持っていった。これも予測してたんだろう。だけど、違う。脇腹を狙っていた足の軌道が変わる。平行じゃなく、斜め上に。
最初っから狙ってたのはその自信満々な顔の方だ。

バチィッ！

……。

「残念だったな。浴衣じゃなかったら当ってたんだろうが」
「バァカ。誰も右ばっか狙うわけねぇだろ」
「なッ！」

バチィィン！

平手が紅妃の左頬に当る。くらぁっと紅妃の顔が右にずれる。そして、

バキィィイイ！

「ガハッ！」

左に体が吹っ飛んだ。

力無く右に傾く顔目掛けてもう一度蹴った。したのはそれだけだ。だけど、力が入ってない腕のガード何て簡単に突破出来る。力のない腕のガードごと、こっちに向ってくる顔を蹴れば体何か簡単に吹っ飛ぶ。ただ、やっぱり浴衣のせいか決定打には欠けていた。足で何とか着地した紅妃は息を荒げこっちを睨む。もうその目には余裕を感じない。

「ちっ。浴衣破くかな」

紅妃から目を離さずに本音をぼやく。

「あー、クソ。やっぱり強いなぁ。さすが倉本。だけどな、オレも負けるわけにはいかないんだよ！」

突っ込んでくる紅妃。けど、最初の勢いはない。たぶん今の俺と同じくらいの速さだ。

「っ！？」

油断した！　途中で急加速をした紅妃。ぎりぎり反応出来たは良いものの避ける時間はなかった。ドンと紅妃の体が重い塊となって俺にぶつかった。数歩後ろによろめき、距離を開けようと考えさらに数歩下がろうとした。

ぐんっと、何かに腕が引っ張られる感覚がした。咄嗟に右腕を見て確かめる。紐？　細い紐が袖に絡みついていた。ピンと張られていた紐の先が緩くなって……。

――ヤバいっ！

腕から目を離し正面を見る。と同時に顔の前に両腕を持って行く。

「ぐっ」

腕の骨を軋ませる痛みを歯を噛み締め耐えぬく。右腕が不自然に真直ぐ伸びる。そして、その右腕に引っ張られるかのように後ろに飛されていた体が再び前に戻って行く。

この紐を何とかしないと。そう思った直後腹部に鈍い痛みが走った。

「ッガハ！」

開いた口から唾が散る。離れないと、また来る！　そう思い離れようとするけど、離れようとすればする程前に寄せられる。

ドスッ！

「ゲホッ！」

鈍い痛みがもう一度神経を支配した。

「これで終わりだ」

袖を掴まれ、視界が反転した。ビリっと言う袖が破ける音のすぐ後背中に激痛がして、今まで溜め込んでいたものを一気に吐いた。
少量の吐瀉物が頬を伝い、髪にかかり、地面に落ちる。
多量の唾液が宙を舞い、重力に身を預け、顔や髪、地面に振りかかる。
遠のく意識を次に襲いくる激痛が連れ戻した。

ボキっ！

小気味良い音が体内を駆け巡る。音が駆け巡った後、続くように痛みが駆け巡り、最後に熱が巡る。
激痛のおかげで何とか繋ぎ止めている意識で右を見る。ちょうど紅妃が俺の腕を離し立ち上がる所だった。
右腕に力が入らない。肩から先がダランと垂れている。紅妃の顔が笑みに歪み、俺の左腕のすぐ側まで来て、座った。
空がやけにどす黒く見える。周りがやけに真っ暗に見える。まるで明かり一つない部屋に閉じ込められた感じだ。そういや、前にもこんなことあったな。いつだったっけ……。だめだ、思い出せない。でも、いつかは覚えてないけど……、後悔したことは何となくまだ覚えてる。
そうだ。弱くて後悔したんだった。情けなくて後悔したんだった。皆を悲しませて後悔したんだった。
全て俺が弱いせいで。
もう、負けるわけにはいかない！

紅妃が俺の左腕を掴んで、力を入れた。その瞬間、紅妃は前のめりに倒れた。

魅了　巳剣

「なによ、倉本の奴案外たいしたことないじゃん」
「ないじゃん」

双子がつまらなそうに的外れなことを言う。コイツらはバカだから仕方ない。倉本の”凄さ”がわからなくても仕方がないことだ。
倉本と会長のケンカを見て正直驚いた。会長が強いのは知っている。俺じゃ到底敵わない程に強い。だからこのケンカは会長の圧勝で終わるかと思っていた。思いきっていたのに。

「凄い、ですわ……」

海里が隣りで呟く。そうだ。凄いんだ倉本は。守山が倉本は強いと言っていたけどここまでとはな。確かに倉本は会長に負けた。本気の会長にだ。優しさを捨てた容赦の無い会長に負けた。ただ、それは結果にすぎない。俺が凄いと思ったのは過程だ。本気の会長相手に手傷を負わせた。それが凄い。だって、倉本の奴は浴衣姿だぞ。それに下駄だ。そんな動き難い格好で会長とほぼ同等に戦っていた。
ぶるっと身震いをした。もし、倉本が普段の格好だったら。動きやすい格好だったら、どうなっていたか。
まぁ、でももう終りだな。勝負はついた。あとは会長が倉本の両腕を折って終了だ。倉本は強い。それはわかった。けど、守山の言ってた魅了するケンカではなかった。確かに多少は綺麗だったけど、けど所詮はその程度だ。倉本は強い。ただそれだけだ。

「……違う」

海里が呟く。震えるような声で、すぐ隣りにいる俺にしか聞こえないような声で。

「透麻から聞いた倉本は違う」

透麻？　海本のことか。何で海里と海本がそんな話をしてんだ？　海里は海本を特別嫌ってた筈なのに。いや、そんなことはこのさいどうでもいい。倉本が違うってどういうことだ？

「なにやってんだ生徒会」

「っ！？」

この声はっ。後ろを振り向く。が、俺が振り向くより先に蹴られ、バランスを崩し数メートル飛される。草藪を抜けて、会長と倉本が戦っている開けた場所に出る。手で受け身をとり即座に立ち上がる。

「不意打ちたぁ卑怯なんじゃねぇのか海本？」

「うるせぇ。つうか何でお前らここにいんだ……」

草藪から出て来た海本の言葉が途中で止まる。目を見開き、そして俺を睨みつける。

「テメェら、佳になにしてんだ？　もう俺達に関わらないって約束じゃなかったか？」

「あー、わりぃな。今俺達は生徒会としてお前達に関わってるわけじゃねぇんだ。個人的な理由で関わってんだよ」

「っへ理屈を言うなクソが！」

真直ぐ突っ込んでくる。コイツは本当に真正面が好きだな。そう

いや守山も最初は突っ込んで来るな。先手必勝だとでも思ってんのか？
拳を固く握る。海本が間合いに入って来るのを待ち、拳を突き出す。
ばしっ。
俺と海本の間に入って来た乱入者によって拳が止められた。
「あ、りえないだろ……」
何で、コイツがここにいる？
何でコイツが俺の拳を止められるんだ？
何でコイツがまだ動けるんだ。
ぶわぁ、と一陣の風が吹いた。ゆらりと風に揺れる黒と赤。そして、さっき見ていたモノとは違う鋭い瞳が揺れる髪で見え隠れしながら俺を睨む。
ぐるん。
「え？」
何だ？　何で俺は膝をついている？　いや、腕が捻られている。投げられた？　いつ、どうやって。おかしいだろ。速くて気付かなかった、何てものじゃあねぇぞ。触れていた手からも力を感じなかったし、投げる予備動作も見えなかった。何より痛みすらしなかった。膝が地面について、腕が捻られてるのを見て初めて気付いた。
なんだよ、これ。なんなんだこれは。

「お前、俺の仲間に何してんだ？」
「おらぁあああ！」

即座に立ち上がり倉本に殴りかかる。

「なんで、だ」

俺は殴りかかった筈だぞ。なのに、何でまた膝をついてんだ。これじゃ、まるで俺が自分から膝をついてる見たいじゃねぇか。

「まだやる気？」

そうか。そう言うことか。最初に投げられて以来俺の体は放棄したのか。勝てるわけがない。こんな奴に勝てるわけがない。例え勝てるとしても、ケンカしたくない。どっちかと言うと見ていたい。守山が言っていたことがやっとわかった。

一度目は確かに俺は投げられたんだろう。けど二度目は違う。”自分から膝をついた”コイツとはケンカしたくないと体が、脳が勝手に判断した。こりゃあ勝てないわ。倉本はあの人と同じ。倉本とケンカ出来るような奴は倉本と同じような人間か、倉本以上の化け物か。

「会長が、目標としてる理由（わけ）が今わかった」

倉本は確かに強い。確かに人を魅了する。けど、それは俺らの会長だって同じ。

「目標を超えろ会長」
「ああ。任せとけ」

真っ赤な風が俺の横を吹き抜けた。その風は黒と赤の存在を吹き飛した。

「驚いたな。まさかまだ動けるとは」

仲間の男から離れた所で紅妃は言う。楽しそうな、嬉しそうな表情で。ん、さっき脳天に一応蹴りを入れたんだけど、力が入ってない蹴りじゃ大して意味がなかったか。

浴衣の足の方を掴む。ちょうど膝の辺り。そこから下をビリッと手で思いっきり破った。

せっかく心咲姉に頼んで用意して貰ったのに……。あとで謝らないといけない。

「ん、じゃあ、そろそろ時間も時間だし」

集合時間までもう僅か。透麻と來優はもう来たから、あとは城道と汐姫を待つだけ。さてと、城道と汐姫が来るまでには終わらせるか。心配させたくないしな。

「時間だぁ？　オレは何時間でも大丈夫だぜ」

「もう、終わらせる」

下駄を紅妃に向って飛ばす。当然紅妃は下駄を避けた。けど、下駄は目眩ましだ。下駄を飛したあとすぐに急接近する。紅妃が下駄を避けてこっちに集中する頃にはもう紅妃の顔面目掛けて殴りかかっていた。

「ちっ」

舌打ちをしながらも顔を僅かに傾けソレを躱す紅妃。紅妃の頬を掠め、過ぎたあと握っていた拳を開く。腕を引き戻す際に手で紅妃の後頭部を掴み自分の所に引き寄せた。流石に一度躱した攻撃がこんな形で活用されるとは思ってなかったのか顔を歪ませる紅妃。その額目掛けて俺は自分の額をぶつけた。

ゴンッ！

鈍い音が響いたあと、紅妃が腹を抑えて数歩下がった。

「意外に石頭じゃねぇか倉本。しかも膝もついでにくれるとは。全く予想してなかったぜ」

痛々しそうに腹を抑えながら俺を睨む。

「いや、お前の方が石頭だ。かなり額が痛い」
「いやお前の方だ」
「お前の方だって」
「お前だ」
「お前」
「お前だっつってんだろ」
「お前の方だって言ってんだろうが」

しつこい紅妃相手にもう片方の下駄も飛ばす。

「同じ手をくうかバカ」

手を前にだし下駄を掴み、そのまま前にいるであろう俺を殴ろうとするが。

「残念、下でした」

地面すれすれ。その位置から紅妃の顎を蹴り上げる。紅妃が最初の方で俺にやって来た奴だ。それに反応した紅妃は俺と同じように顔を上げて何とか躱した。が、俺のは二段なんだよ。蹴り上げた足を今度は下ろす。

「ちぃっ！」

強引に顔を逸して何とか顔面直撃は免れた。けど、紅妃の肩に俺の踵がめり込み、ミシッと骨を軋む音が触れている肌から伝わって来た。無茶な攻撃のせいで俺の体が地面に倒れる。もともとすれすれで、しかもバランスの悪い体制でやる奴だ。地面に倒れるのは必然的だ。そもそも倒れるのも作戦の内。

「このっ！　モグラかテメェは」

そんなことを言いながら足を上げ、俺を踏もうとする紅妃。体を捻ってそれを躱すと同時にもう一度蹴り上げる。今度は顔じゃなく当たり易い腹部を狙った。

ドスっと確かな手応えを感じ紅妃の体は上に飛んだ。宙にいる紅妃の足を”両腕”で掴み、捻り投げる。流石と言うべきか足の関節をキメて投げたにも関わらずに紅妃はその痛みに耐え受け身をとった。

即座に俺から離れた紅妃。もう右足は使えないだろう。一応普通の蹴りは出来るだろうけど、力はあまり入らないし、何より最初にした時のような変則蹴りは出来ない。得意技は封じさせて貰った。

「ハァ、ハァ。やっぱ強いなぁ……」

集合時間まであと一分。次で終わらせる。

「つーか、いつから両腕使えるようになったんだよ……、ああ、あんときか」

自己解決して、くっくっと苦笑いを浮かべた。地面に倒れた時、あの時に肩をハメておいた。目茶苦茶痛かったさそりゃあ。けど、俺にとっては耐えれない痛みではない。

「そうだなぁ。やっぱり目標はこうでなくちゃあなぁ」
「時間無いから次で終わらす」
「つれないなぁ。まぁ、いいや」

もう走れる程足に力が入らないのか、どっと身構える紅妃。右足を少し後ろに置いている辺り、最後は得意の足技でいく気か。

「望むところだ」

それなら俺も足技でいく。

「来いよ」

手をくいくいとさせて挑発する。それに乗るかのように俺は突っ込んで行った。

「来いよ」

だっ！　と地面を駆ける倉本。倉本より先に、速く、先に――

「っらぁぁあああああアアアアアア！」

倉本の頬目掛けて足をしならせる。倉本は、まだ攻撃していない。

やった。勝った――。

「え？」

視界の隅で黒い影が一瞬だけ見えた。その影が何だったのか。その答えを痛みと音がオレに教えてくれた。

バキィィィイイ！

どんどん倉本が横に移動していく。そして最後にはとうとう視界から消えた。

ああ、負けた、のかオレは。薄れ行く意識の中でただ一つ、それだけは確信がもてた。

「刹那の蹴り。足が暫く使い物にならなくなるけど……、まぁ、楽しかったからいいや」

最後に倉本の痛そうな声が聞こえて、きた。

入学式。

「俺達金無くて困ってんだよなぁ」
「金貸してくれない？　後輩だろ？」

くだらない。弱そうな奴を見つけたら先輩面してお金をせびる。本当にくだらない奴等だ。そして、何であの男は反抗しない？　少しぐらい反抗したらどうなんだ。まぁそんなこと思っても仕方ないか。

「ほら、早くだせよぉ」

はぁ……、仕方ない止めに行くか。

「おい、お前ら」
「邪魔だぁどけどけぇ！」

キキィっ！

激しいブレーキ音。その後に聞こえてきた衝突音。一台の自転車が不良達に突っ込んだ。

「いってぇ」
「透麻、前方不注意だぞ。だいたいそんなスピード出してるからぶつかるんだ」
「佳が寝坊するからだろ」
佳？　透麻？
「おい、テメェら、人にぶつかっといて何か言うことはねぇのか？」
「ぶち殺すぞ」
「ほらぁ、透麻謝って」
「ああ？　スンマセンデシタァ。それじゃ急いでるんで」
「待てよおい。テメェら名前言えや」
「あとクラスもな」
不良の静止を聞かず自転車を立て直す男と、その荷台に乗る男。荷台に乗った男が不良の方へと振り返る。赤と黒の髪がさぁっと混じりあった。
「倉本佳」
そう名乗る男の顔はさもつまらなそうな表情をしていた。不満で満ち溢れた顔。そんな顔をされたら不良共はさらに逆上するだろ。そうなれば力尽くでも止めないと。そう思い不良の方を見た。
なんだ？　酷く怯えた顔で不良達は立ち尽くしていた。
「名乗るのかよ佳。仕方ねぇなぁ。海本透麻。じゃあな、俺達急いでるんで」
もう一人の男が名乗るとさらに不良達は畏縮した。一体なんだっ

て言うんだ？　そんなに怖そうな二人組には見えないぞ。明らかに不真面目そうな男二人、しかも片方は凄くつまらなさそうに生きてそうな奴だぞ。何をそんなに畏縮することがある。

「よし、透麻号レッツゴー。ゴーだ透麻」
「はいはい。わかったから耳元で大声だすな」
「っ！？」

ビックリした。さっきまで世界全てがつまらないと決めつけいたような顔をしていたのに。海本透麻とかいう男と話した瞬間に顔が変わった。本当に楽しそうに笑っている。

不思議な奴。それがオレが倉本に抱いた第一印象だ。

次に倉本と言う名前を聞いたのは数日後。

「見たぁ？　入試トップは倉本佳っていう人らしいよ」
「ああ、私知ってる。同じクラスだもん」
「どんな人？」
「んー、ちょっと変わってるかな？　髪が黒と赤の人」
「ふーん」

初めてだった。オレが一位じゃなかったのは。小さい頃から今までずっと成績では一位だったのに。クソっ。次はオレが勝つ。

頭の出来が良い奴。それが第二印象。

そして、オレの中で倉本が目標となったのは街中で倉本を偶然見つけた時だった。

酔っ払いが若い奴に絡んでる。この街じゃ何となく見慣れた光景。そして誰もが警察が来るのを待っていた。その酔っ払いは質が悪く、若い女性に絡んで、手を引っ張っていた。とうとう酔っ払いの手が女性の体を撫で回し始めた時。

酔っ払いの体が地面に倒れた。倒れた酔っ払いの背後には倉本が立っていて、泣き出していた女性の頭を優しく撫でた。前みたつまらなさそうな表情じゃなく、優しい、穏やかな顔で。

「佳見っけなのだ！」

「あ、やば」

「これで次は佳が鬼なのだ」

隠れんぼでもしていたのか、見つけられて肩を落とす倉本。その倉本を見て、泣いていた女性は微かに笑い、元気を取り戻した。

勉強だけじゃない。強くて優しい凄い奴。それが第三印象。そして倉本はオレの目標となっていた。

いつか超えたい。勉強だけじゃない。強さだけじゃない。優しさだけじゃない。全て。倉本の全てをいつか超えたい。そう思い生徒

会に入った。倉本みたいに仲間も作って、リーダーになった。そして、今日挑んだ。けど……。

やっぱりまだムリみたいだな。

でも、まぁいいや。凄く、もの凄く楽しかった。

ありがとう。倉本。

超えるべき目標　紅妃（後書き）

すいません……
暫く更新休みます

二週間後には再開しますので、
それまでさよならです

ありがとう、ごめんなさい　佳

ぶちぶちっと筋肉が悲鳴をあげる。激しい痛みがズキズキと続き、立ってられなくなり膝が折れる。
ガシっと両脇を誰かに支えられた。

「大丈夫なのだ佳？」
「無茶はしないで下さい佳様」

心配そうに俺の顔を覗きこむ二人。

「ありがとう汐姫、城道」

紅妃の方を見てみる。不思議と満ち足りた表情をして気を失っている紅妃に生徒会の奴等が走り寄っている。余程慕われているんだろう。一人の男以外は皆涙を浮かべている。
ズキンと右肩が痛んだ。

「城道、さっきまで外れてからそっちは持たないでほしい」
「あ、ごめんなのだ」

持ってくれるのは有り難いんだけど……痛い。

「佳！」

透麻と來優が駆け寄ってきた。

「っのバカ！　無茶はするなってあれ程言っただろう！」

耳元で怒鳴られキーンとする。無茶はするな、か。

「無茶じゃないよ、透麻。楽しかったから」

「いや、意味がわからねぇよ。とにかく！」

「じゃあ佳部活を始めるのだ」

「おいっまだ俺の話の途中だっ」

「バカはおいといて、皆景品を見せるのだ」

城道が透麻の話を途中で終わらした。う～っとうなっている透麻。犬みたいだなぁと思い少し口元が緩んだ。

「ボクはほら、これくらいかな」

小さな袋一杯に入った人形をくいっと上にあげる。ん、まぁ十個くらいはあるかな。

「僕は見ての通りなのだ」

大きな袋二つを両手で持ち上げぱんぱんに膨らんでいるのを確認させた。これで城道は確実に罰ゲームを免れる。ていうか、もう罰ゲームする人は決定してるんだけどな。

「俺はこれだ」

そう言い黒い物をちょんと持ちあげる透麻。

「財布？」

「あっ！　テメェそれ私の！」

「來優からとった俺の景品だ」
「透麻は一個なのだ」
「おいっ、返せよ！」
「うるさいな。あとで返すわボケ」

グルグルと俺達の周りを走り始めた透麻とそれを追いかける來優。
仲がいいなぁ。

「で、佳は何個なのだ？」
「……ゼロ」
「へ？」

皆の動きが止まる。走っていた透麻と來優も俺を見て止まっている。
息を深く吸い込み吐き出す。皆を見回して、にっこり笑う。

「罰ゲームは秘密を一つ言うことだ」

俺の……。

「俺の秘密は、」

っ怖い。急に怖くなる。次の言葉が喉に引っ掛かって出てこない。
嫌なことを想像して、皆に嫌われることを想像して声が出ない。
バカだ。決めただろ。
恐怖を笑顔で抑えこむ。引っ掛かっていた声を、言葉を絞りだす。
それは透き通った声じゃない、本当に絞り出したかのような掠れた声だ。

「俺は、女なんだ。今ま、で。皆に嘘、ついてた」

ごめん。と最後に付け足す。
「……は？　佳、何の冗だっ」
「冗談じゃないっ。今……証拠を見せる」
「ちょっ、やめろって」
震える手つきで浴衣胸襟を掴む俺に焦って腕を掴む透麻。
「嘘、じゃないんだな」
真直ぐな、本当に真直ぐな瞳で覗き込まれた。その目を見た瞬間罪悪感が一気に溢れ出して、止めていたタガが外れた。
ぽろっ。
透麻の目を見ながら涙が伝う。
それでも顔は笑っている。笑顔を、いつも通りだと思い込んでいる笑顔を貼り付けている。
グイッと体を寄せられ、気付いたら大きな、固い胸に顔を埋めていた。
「やめろ」
上から透麻の声が聞こえてきて、その胸が透麻の胸だと気付く。
「楽しくないのに、笑いたくないのに笑うのはやめろ。そんな気持ち悪い笑顔、佳はしなくていい」
自分でも気付かなかった。いつも通りだと思っていたその顔は、透麻や皆からみたら気持ちの悪い顔みたいで、何もかもお見通しだ

った。
その言葉が耳に響く。脳に伝い反響し、ゆっくりと漏れていた感情が勢いをつけ漏れていく。
透麻の服を掴み、静かに、泣いた。少しでも音を出していたらその音で掻き消えるような、静寂の中でしか聞こえないような、小さな小さな声をだしながら、透麻の胸の中で泣いた。

「あ、実は僕のコレ、そこで拾ったやつなのだ」

城道の穏やかな声が耳に響く。城道が何を言っているのか一瞬理解が出来なかった。

「だから僕も罰ゲームなのだ。僕のとっておきの秘密を皆に教えるのだ」

そう言い、後ろから城道の腕が俺と透麻の間に回る。ギュッと力強く俺を抱き締めるその腕に城道の優しさを感じた。

「僕は佳のことが好きなのだ」

それを聞き、くすりと頭の上で微笑する声が聞こえた。

「俺も実はあの財布拾いものなんだよ」
「いや、あれは私の、」
「俺の秘密な、俺も佳のことが好きだぜ」
「ボクの秘密もそれです」
「わ、私もそうだぞ！」

來優が言いきったあとぽんと頭に大きな手がおかれる。体が剥され、透麻、來優、汐姫の優しく笑った顔が見えて、抱き締めていた

城道が慌てて、その中に入り同じように笑って、それを見た俺もつられて笑った。気持ちの悪い貼り付けたような笑顔じゃなく、たぶん、いつもと同じ、皆と同じような、優しい笑顔だろう。

「ありがとう、ごめんなさい」

ドォオオオン！

一言。ただ一言そう言った。けど、その声は大きな轟音と綺麗な光に阻まれて、誰も聞くことなく、空気に混ざり、溶けた。

誰も気付かなかったことに少し安堵しながら、音のした方向に振り返る。瞬間、同じよう轟音が空気を震わせ、綺麗な光の粒が集まり輪をつくり空に咲いた。その轟音は俺達を体の芯から震わせ、その光の花は俺達を照らし心に残る。

何度も何度も空に花が咲き、気付いたら涙は止まっていた。

俺は凄く運が良い奴だ。誰でも良かったのに、こんなに良い仲間に出会えて。暇さえ潰れれば良かったのに、こんなに毎日が楽しみで満ちていて。大好きな皆と、こんなに綺麗な花火を一緒に見れて。大好きな皆と同じ時を過ごせて。

そして俺は最低な奴だ。こんなに大好きな皆を忘れてしまうのだ

から。

ドォオオオン！

夜空に咲いた花が形を崩し、消えていった。響いていた轟音も空しく消え、真っ暗な空を照らした光の花も崩れ、消えた。美しく、派手に咲き、儚く消える。

「ありがと……、ごめんなさい」

もう一度。もう一度誰にも聞かれずに空気に消えた言葉を紡ぐ。そして、またその言葉は儚く消える音と光に掻き消された。

出口の無いトンネル何かないぞ、たぶんな。　來優

泣いて、泣いて。目が腫れても、それでも声をあげて泣いて。いずれ喉も潰れて声が出なくなる。けど、泣くことをやめない。口をあけ、目を腫らし、涙を流し泣く。

涙が枯れるなんていうのは嘘だ。みてよ、声が出なくなっても、まだ涙は出る。喉が潰れても涙は枯れない。どれだけ目を腫らしても、ずっと溢れ出る。泣いても仕方がない。そう思った時に涙は止まるんだ。そう覚悟したときに涙は止まったんだ。

真っ暗な夜の中。一メートル先すら見えない黒の中。一人きり。

音のない世界で。全ての音が消えた世界の中で。一人きり。

理解するしかなかった。ああ、自分は捨てられたのだと。

諦めるしかなかった。自分は必要のない人間なんだと。

このまま何もないこの場所で、一人死ぬ覚悟をした。生きること

を諦めた。誰も必要としない人間なんて生きてる意味がない。そう思ったから。

どこに向っているのかわからずにずっと動かしていた足を止める。もう、歩く必要もない。前を見る必要もない。かと言って上を見る資格もない。後ろ何か見たくもない。下で十分だ。ごつごつとしたアスファルトで十分だ。冷たいアスファルトを見ながら、横たわり、死んでいくのだろう。

そのことにとくに何も思わなかった。ただ、自分はそう言う運命だったのだ、と諦めた。要らない子が生きる運命なんてない。要らない子は死ぬ運命なんだ。猫や犬や、他の生き物も皆同じ。要らなかったら、捨てられて、それで死ぬ。そのことに何の疑問も抱かない。自分はついさっき要らない子になった。なった瞬間からここで死ぬ運命だったんだ。誰かに拾われ、必要とされない限り。

そうだな。一つだけ、気掛かりがある。最近透麻が連れて来た、住っていう男の子。そいつが来てから、透麻は変わった。人をあまり殴らなくなったし、あまり怒らなくなった。城道もそいつに懐いている。不思議な奴だ。そいつのどこにそんな魅力があるか。何に引き寄せられるのか。それが気になるな。

まぁ、今となっちゃ気にするだけ無駄なんだけど。

もう、疲れたな。そろそろ寝よう。お父さん、お母さん……、おやすみなさい。

『來優！　いたっ、いたぞ皆！』

眩しいっ。なんだろう、この光は。誰なんだろう、この声は。凄く聞きなれた声。そっか……、この声は――

「なにぼけっとしてんだ」
「……ああ？」
上からの呼び掛ける声にめんどくさそうに答える。透麻は私のその声に、ひくっと片眉を動かしたあと、複数持っている花火を一本私に差し出した。
近くでは手持ち花火を両手にもち、円を描くように手を動かしている汐姫がいる。佳と城道は用意していた様々な打ち上げ花火を横一列に並べている。佳のあの告白が終わったあと、今まで何処に置いていたのか、いつの間にか段ボール一杯の花火を持ち出して来た。それを今皆で順々に消化中っというわけだ。
「財布は返しただろ。なにそんなに不機嫌そうな声をあげてんだよ」
「……別に、ただ」
透麻の手にある火がついている一本の花火に先程貰った花火を近付け、火をもらう。シュボッ、という勢いの良い音とともに緑色の光をだし、火が噴出した。じーっとその光を見つめる。
「いつも透麻だよなぁ、って思って」
「あぁ？　何のことだ」
「何でもない」
私が嫌な気持ちでいるとき気付くのはいつも透麻だ。あのときも、一番に私を見つけて、照らしてくれたのは透麻だ。必要としてくれたのは佳なんだけどな。
それにしても、よく気付くよなぁ。ボーっとしてるつもりなんか

なかったし、不機嫌なつもりもなかったのに……。私すらよくわからないのに、まさか透麻って。

「お前、人の顔見るの好きか」
「意味がわからねぇ」
「私の顔みるの好きか」
「死ね自意識過剰」

冗談を、あっさり返される。私も自意識過剰すぎの発言だと思ったが、所詮冗談だし、気にしない。透麻の花火と私の花火の火が消える。青と緑の光が無くなり、私達の周りに黒が訪れる。

「……大丈夫か」

透麻がぼそりと呟いた。私はその言葉が何をさしているのか何となくわかり、本当に透麻は勘が鋭いなぁ、と思いながら私の答えを返す。

「大丈夫」

今は、あの頃からもう大丈夫。私には私を必要としてくれる人達がいる。私を仲間だと言ってくれる人達がいる。だから、もう大丈夫。もう、この黒には呑まれない。もう今日みたいな失態は起こさない。

「そうか、ならいい」

ポケットからライターを取り出し、複数ある内の三本に火を灯す透麻。同じように噴出し、その花火からまた私が火をもらう。
黒が去っていく。緑と赤と青とオレンジの光が黒を追い払ってい

く。明るい。眩しい光。

「もうあと一本になっちゃった」

汐姫がそう言いながら歩いてきて持っている一本の花火に火をつけた。金色の光が花火から噴出する。

更に私の周りから黒が去っていく。

五つの光がお互い数センチ先で混ざり合い、冷たい地面に降り注ぐ。

「あっ、この花火ボク達みたいだね」

汐姫がそんなことを言いだした。それを聞いた透麻が、余裕そうに笑いながら、そうだなと一言言い放つ。

赤、青、オレンジ、緑、金。各々の光が仲良く混じり合う。

ああ、ホントだ。

「私達みたいだな」

そう言う私の顔はどんな顔だったのだろう。言えることは、何故か胸が暖かかったこと。それと、数十分前までの不安な気持ちが嘘のように晴れていたことだ。

私の顔をみて透麻がくすっと微笑んだ。

「ああ、確かに大丈夫そうだな」

なんでだろう。なんでか知らないけど、その透麻の顔をみて、顔が熱を持ってきた。透麻の微笑んだ顔を見るのが恥かしくなって、その気持ちが心を揺らし、鼓動が少し速くなった。なんかよくわか

らないけど、腹がたつ。透麻なんかに動揺していることに腹がたつ。

「うるさい、死ね」

ふいっと顔を背け透麻に聞こえるように言う。それを聞いて、透麻が怒りだすと同時に花火の火が消えた。

「もう、透麻が動くからだよ」
「いや、俺が動いたからって五本全部は消えないだろ」
「ほら透麻、責任もって新しいの買ってこいよ」
「よぉし、テメェは俺にケンカ売ってんだな。よしわかった。かかってこいやコラァ！」
「上等だボケェ！」

お互い勢いよく立ち上がり胸倉を掴みあう。下着をつけてるから浴衣で胸倉掴まれても胸は見られない。だから気にしない。

いつもなら。

バッと掴んでる透麻の腕をふり払う。

「このっ変態！」

自分で言ってビックリする。私何言ってんだ？　バカか、いつも同じようなことしてんだろ。透麻も私の態度を不思議がっている。

「來優、お前頭大丈夫か」
「お前に心配される程じゃないわバカ」

そう言い放ち汐姫の隣りに戻る。その際も私の中ではさっき言った言葉がずっとリピートされていた。おかしい。何処かおかしいぞ私。

「よぉし、点火だ城道」

遠くでそんな声が聞こえた気がした瞬間、ドォオンっと大きな音が響いた。夏祭りのように本格的な花火じゃないから、音も花も比べると小さいけど、さすがに近い距離で聞くと音は大きく、近い距離で見ると、何故か目が釘つけになる。

ドンっドォン！

続けざまに音が響いていき、火が花開く。

さっきまで考えていたことが嘘のように脳内から消え失せ、かわりに綺麗な円い形じゃなく、歪な円が、けど、決して汚くないそれが脳内を支配した。体を震わせた。胸を踊らせた。

何を仕様もないことを考えていたんだろう。今私は、こんなに楽しい仲間達と一緒なんだ。過去のことなんかで曇るわけには行かない。さっきの私の言葉なんかで戸惑うわけには行かない。全力でついて行くんだ。全力で楽しむんだ。皆といるこの時間を。

最後にとびっきりでかいのが花開いた。

好きなものに妥協はしたくないのだ！　城道

最後に一際大きな花が咲いた。隣りで爛々とした目をしながらそれを見ている佳。少年みたいだ。そう思いながらも、実は女の子なんだなぁ、と先程の告白を思い返しながら佳を見つめる。記憶をその告白から再生して行く。

ふと気付く。もしかして僕の告白は通じてない？　だってあれだけ完璧に透麻が後付けしたら、そりゃあ透麻と同じ好きになるんじゃないか。

「ん、どうした城道」

「むぅ」

やっぱり通じてなさそうなのだ。もう、本当に透麻は空気を読まない。ていうか、理解しない。

「どうした城道。早く行くぞ」

手を差し延べてそう言う佳。夜の中でもにっこり笑った佳の顔がハッキリ見えた。もう、本当にわかってないのだ。

「佳」

「ん、なに」

差し延べられた手を掴み、ぐいっと自分の方へ引っ張る。咄嗟のことで反応出来なかったのか、何の抵抗もなく僕の体とくっつく佳

の体。あー、なんだ。佳はこんなにも女の子だったのか。今まで気付かなかった僕達がバカなのだ。だって、佳はこんなにも良い匂いで、こんなにも柔らかい。

「なんだよ城道」

むぅ、本当に鈍いのだ。柔らかいその体をギュッと握りしめる。

「僕の好きはこういう好きなのだ。透麻や來優のとは違うのだ」

さすがの佳も気付いただろう。佳の顔をみる。

「……」

違う。僕が見たかった顔はそれじゃないのだ。何処かで僕は期待していたんだろう。佳が僕の気持ちを受け入れてくれることを。佳と付き合えることを。だからこそ、今の佳の顔が理解出来なかった。何で、何でそんな困ったような、悲しいような顔をするのだ。何で、嬉しそうなその顔に、真っ暗な悲しみを浮かべるのだ。

「ありがと……、ごめん」

ぐいっと僕の体を引き離す佳。その声には妙な力が籠っていて、その腕には全く力が籠ってなくて。どうすればいいのか、僕に何が出来るのか、わからなくて、ただ僕の体は為すがままに佳の体から離れた。

「……佳」

「さ、行こ」

そう言い佳は透麻達のもとへ歩きだした。

「フラれたか柳生」
「まだいたんだ生徒会のハゲ」
「お前っ、フラれたからって八つ当たりはいけないぜ」
「あはは、見物料とるぞ」

まぁ、ハゲと生徒会は無視して。問題は佳なのだ。あんな顔で理由も聞かされずフラれて、誰が納得するかぁ、なのだ。僕は諦めない。ちゃんと納得する理由を言わない限り、ちゃんと笑顔で断られない限り、そんな顔で断るなら僕は絶対諦めないのだ。
そもそも僕が佳のことを好きなのだ。どこに諦める必要がある？
もう先を歩いている佳のもとへと走る。追い付きざまにもう一度後ろから抱き締めてやる。

「僕は諦めないのだよ」
「……、離れろって城道。暑い」
「嫌だーなのだ」

僕は好きなものには一切妥協しないのだ。覚悟するのだよ佳。いつか必ずオッケーを貰うのだ！

いや、何か……　來優

「付き合って下さい！」

忙しく動き続ける人波の中、二人の足だけが止まる。勇気を振り絞って声を出したは良いが、思いっきり裏返ったせいで顔を真っ赤にしている少年。恐らくいまその少年は周りのものなど一切気にしていないだろう。自分と私が世界の中心。そう思っているに違いない。

「へ、ああ？」

何を言われたのか理解出来ない私は変てこな声で聞き返した。聞き返して数秒もしない内に同じ言葉が少年の口から発せられ、さすがの私もこの少年が何を言ってるのか理解した。その上で私に一つの疑問が浮かぶ。

今まで男に告白されたことがあっただろうか？

数秒間もの凄いスピードで過去を思い返す。が、告白で出てくるのはどれも女の子からの告白しかなかった。

「へ、返事は明日でいいので、明日一日僕と遊んでくれませんか！」

もう私は告白された時点で少しパニックに陥っていたんだろう。

相手の勢いに呑まれ、

「いいよって言ったわけ」

「はい、そうです」

もう何度も見慣れた部屋で数分前の出来事を仲間に相談した。汐姫が城道とゲームをしながらも私の話を聞いて溜め息混じりに答えた。

「そりゃあ、私だってまさかいいよ何て言うとは思わなかったさ。けど、気付いたら声に出てたんだよ」

「それで來優は明日行くの？　行かないの？」

「いいって言っちまった限り行くしかないだろ」

城道のキャラの猛攻を防ぎきれずに顔中が血だらけになっていく汐姫のキャラを見ながらそう答える。最後に城道のフィニッシュブローが決まり、口から勢いよく血を吐き出し地面に倒れる。愛くるしい白黒の体が赤に染まり、白目向いて倒れているパンダを見て、誰が販売しようと考えたんだこのゲーム、とか思ったのは内緒だ。実際に買う奴がいるんだから、言い様がない。

「私、そういうのって初めてなんだよ。だからどんな服着ていっていいのかわからないし、どういう風にしたら良いかもわからないんだ」

行くって言った以上行かないといけないし、どうせなら相手を困らせたくない。どっちにしろ断るけど出来る限り心に傷を負わせたくない。

「だから、頼む。協力してくれ」

顔の前で手を合わせお願いする。

「だぁからぁ……」

後ろの方でそんな声が聞こえた。その直後、後頭部に柔らかい物が当たり、ボスっという音がした。

……っこの！

「何すんだボケ！」

「こっちの台詞だクソボケェエエ！　何当たり前のように人ん家に入って来てんだよ！」

「落ち着くのだ透麻」

「透麻のお母さんが入れてくれたんだよ。もうすぐで帰ってくるからって」

「だからってお前ら本人がいない部屋で寛ぎすぎだろ！　佳にいたっては……」

ぐいっと透麻が片手に持ってる縄を引っ張った。その縄に引かれるように両手を縛られた佳がひこずられてきた。口にアイス棒をくわえて。

「人の家の冷凍庫あさってるし」

「ほうが、ふひがふへはい」

口に突っ込んでるアイスのせいか上手く喋れない佳。ていうか透麻……。

「それ何ていうプレイ」
「うわぁ、キモいのだ」
「透麻にそんな趣味があったなんて」

三人で軽蔑の眼指しで見つめてやる。一気に立場が逆転になった部屋の主は、顔を真っ赤にしながら卓袱台をひっくり返した。

「今そんな話をしてんじゃねぇよ！」
「ああ、透麻お前には期待してないから別に協力しようなんて思わなくていいぞ」
「その話でもねぇよ。てか一番どうでもいいわその話」
「ふひがふへはい」

何かを強く訴える佳。城道がはいはい、と言いながらアイスの棒を引っ張り佳の口から出してやった。

「っ口が冷たいって何度も言っただろ透麻！」
「はいはい、ちょっと黙っててな佳。とにかく、今度からは勝手に人ん家入るのは控えること、それと少しは遠慮を覚えること。わかったか？」
「はぁい」
「わかったのだ」
「ちっ、偉そうに」

やっとめんどくさい時間が終わったか。じゃあそろそろ本題に。

「服は少し女の子っぽい方がいいよ。來優は足長いんだから足見せないと」
「言葉遣いは少し柔らかくするのだ。相手がおとなしい子ならきっと傷つくのだ」
「てかもう何やっても傷つくだろ。諦めて素のままでいけって」
何気に透麻も混じってるし。結構ノリノリなんじゃないのか。
「って、だからお前には頼んでねぇっつうの！」
そもそも役立たずだろう。透麻を睨む。透麻は笑いを堪えているのか体をぴくぴくと動かしながら私から目を逸した。コイツ完全に私で遊ぶ気満々だな。あとで覚悟しとけよ。
「んー、じゃあこうしよう。今日の部活は明日の予行練習にしよう」
「賛成なのだ。そうと決まれば相手役を立てるのだ」
「相手役？　透麻はどうかな。男の子だし、いいんじゃないかな」
「はぁ！？　ふざけんなよ。誰が來優の相手なんて、」
「私だって嫌だぜ！」
「まぁ台詞だけでいいから、やってみて」
「おもしろそうなのだ」
佳と城道に言われ、何も言えなくなる。ちっ。仕方ないな……。
透麻じゃ役不足だけど、大人な私が我慢してやるか。
「じゃあ、透麻はまず愛の告白を」
「ふざけんなよ佳、出来るかそんなもん」
「やって透麻」
「ぐっ、く……わかったよ。クソッ」

佳に言われ透麻が私と向き合う。お互い目が合い何だか離せれない感じになった。佳達が物音一つたてず私達に集中しているのが痛い程伝わる。視線が肌に突き刺さる。

な、何だか急に恥かしくなってきたな。

「俺、前から來優のこと」

透麻が口を開いた。真剣な顔と口調で綴られた言葉。一旦そこで区切り一呼吸置いた。

私の心臓が次の言葉を期待してドクドクと激しく脈うつ。早く、早く続きを、と急かすように速くなって行く鼓動。

ん、私今なんて……？　激しく脈うつ？　いや、その前だ。……次の言葉を期待して、だぁ？　バカか！　私はバカか。期待？　何を期待するんだよ！？　透麻に何の期待をするんだよ！　違う、違うぞ。期待してっつうのはアレだ。次透麻がどんな顔でボケるのかなぁっていう期待だ。絶対告白の続きなんて期待してないんだからな！　有り得ない、有り得ないだろそんなこと。

「なにしてんだよ來優。お前の番だぞ」

「へ、ああ」

いつの間にか言っていた透麻。何て言ったのか全くわからないけど、まぁ、何だかそれはそれで良かった気がする。上手い断り方……。

「えーと、ムリ。私はお前のこと好きじゃない」

「泣かす気かお前は」

はあ？　こんなので泣くのか？　同じ男の透麻がそう言うんだか

らそうなのかな……。じ、じゃあ。

「ごめんな。付き合えない」
「なんか普通だな」

くっ。なら、これでどうだっ！

「好きじゃないのに付き合うことは出来ない」
「本当に普通だな」
「じゃあお前がやってみろよバカ透麻！」

さっきから好き放題言いやがって！　ていうか普通だなって普通の何がいけないんだよ！

「俺ならそうだな……。ごめん付き合えない。じゃあ。かな」
「うわっ、普通」

人のこと言えないじゃねぇか。ていうか他人の聞いて初めて気付いたけど、普通の拒否って全くおもしろくないな。

「あのさ二人共、別に奇抜なのを言おうとしなくて良いんだよ。普通でもいいんだよ」
「そうなのだ。大体勇気を持って告白したのだから、それを奇抜な変な断れ方をしたら逆に傷つくのだよ」

城道と汐姫が尤もなことを言う。そうだよ。別におもしろさを出そうってわけじゃねぇんだぞ。いいじゃんおもしろくなくても。

「アホか！　おもしろくないと見てるこっちがおもしろくねぇだろ」
「お前見にくるつもりか」

「当たり前だろ。來優がデートだぞ。めっちゃおもしろそうじゃねぇか」
「死ね」

人で楽しもうとしやがって。というかこっちは真剣なんだぞ。遊びじゃないんだ。

「そういやお前は女に告白された時どう断ってんだ？　同じ断り方したらいいんじゃねぇのか」
「わりぃ、ごめんな。ダメだろこれじゃ」
「ダメだな。お前は本当に女か？」
「うるせぇなぁ」

んー、やっぱ無難に普通なのでいくか。

「告白はもう普通でいいのだ。あとは言動なのだ」
「いつものじゃダメだよ來優。もっと女らしく」「女らしくかぁ……。まぁ何とかなるかな」
「ならねぇだろ」
「うるさい死ね」

女ならしくないのは私が一番わかってる。けど、言葉つかいだろ。そんなもんどうにでもなる。

「じゃあ次はぁ……」

みっちり三時間。私は皆から色々とレクチャーされた。これで明日は完璧だ。とまでは自信がもてなかったけど……。まぁ、なるようになるかな。とにかく頑張るか。

本番！　來優

『先についてるのは当たり前なのだ。おしとやかな女の子を演じるなら必ず先に場所について、相手が来るのを待つのだ』

わかった城道。携帯を開き時間を見る。待ち合わせより十分早い。これだけ早かったら大丈夫だろう。

えーと、相手が来た時に、私も今来たところ、だよな。うん、よし。待ち合わせの噴水の前についた。そして、噴水の正面で待つ、と。

「あ、早いですね。僕も今来たところ何ですよ」

何でですか!?　何でいるんだよ。しかもその台詞まんま私の台詞だよ。ていうか行動自体が私の行動だし！

「じゃ、じゃあ行こうか」

いつもなら動き易いジーンズなんだけど、今日は違う。膝上二十センチの短いスカートを履いている。……、ていうか制服なんだよ実は。実は私スカートとかそんなの持ってないんだよ！　だから制服！　いいだろ別に何でも。制服だってスカートだろ。

おっと、危ない危ない。おしとやかアピールだったよな。ちょこんと男の三十センチ斜め後ろぐらいを歩いてついて行く。本当にこ

れでいいのか？

「えーと、僕、藤堂歩って言います。僕の名前確かまだ言ってなかったですよね」

「え、あっはい。私は」

「守山來優さん、ですよね」

「あ、知ってたんですか」

「はい。前女の子が告白している所を見たので……」

「そうですか」

そりゃあ好きな相手の名前ぐらい知ってるよな。

「えーと、じゃあ、買い物しませんか？」

「はい、いいですよ」

そう言って男の子は一瞬自分の右手を見たあと、恥かしそうに少し足早に歩き始めた。

「少し疲れましたね。あ、そこ公園あるんで休みませんか」

「そうですね」

小さい子供が元気に遊具で遊んでいる。そこから少し離れた所に

一つだけベンチがあり、そこに私達は座った。綺麗に一人分私と藤堂の間が空いている。

ちょっと待て私。ここまで完璧なんじゃないのか？　何だ、結構やれば出来るじゃねぇか。このままおしとやかな子を演じるのも余裕だな。

「あ、あの守山さん」

「はい、何でしょうか」

「こ、これよかったらどうぞ」

そう言って差し出して来たのは綺麗な四つ葉のクローバーのストラップ。これ、さっきの店で売ってたやつだ。

「守山さんに似合うかな、と思って。守山さんおしとやかで優しいからクローバー似合いそうだなぁって思ったので……。あ、別にいらないならいらないで良いです。僕が勝手に買っただけですから」

「……」

……私、何してるんだろ。本当の自分を偽って、勇気を出して告白してくれたのに、嘘ついて……。こんなの私じゃない。こんなの私は嫌だ。

「守山、さん？」

「実は私っ！」

「うわっ超美人！」

「イエー。美人ちゃんみっけ」

明らかに悪そうな二人組が近付いてくる。藤堂を見たあと、私に顔を寄せる。

「お前邪魔、帰れ」
「はい帰った帰ったぁ」
「ちょっと、やめて下さい」

藤堂が私の前に出て私と男を離した。足がガクガクと震えていて、声も震えている。怖いんだろう。初めてのことで、こういう男達が怖くて、けど、藤堂は決して私の前から離れなかった。私の前に立ち男達を見る。

「お前ホントに邪魔ぁ」

ガンッ！

藤堂の体が横に倒れた。ずざぁと地面に倒れて足や手を擦り剥く。もう足に力が入らないのかガクガクと震えながら地面を見つめている。恐らく他人に殴られたのが初めてなんだろう。肩を震わせながら、咽び泣く藤堂。それを見てゲラゲラ笑う男達。何故だろう。たぶん藤堂とかそう言う人達にとってはそうなることは当たり前なのかも知れない。けれど、頭の隅でその藤堂を情けないと思う私がいる。その分藤堂を殴ったコイツらが許せないとも思っている。恐らく私は藤堂が嫌いな人種に入るだろう。でもこのままおしとやかな子を演じていれば、藤堂にとって多少は綺麗なままで残るのかも知れない。偽りの綺麗さが。

『素のままでやれよ』

透麻の声が頭をよぎる。そうだ。私を好きでいてくれる。そんな人を騙すのはダメだ。例え嫌われても良い。私は私なんだ。
ザッと立ち上がり男達に近付く。

「おっ、物分かりがいいねぇ」
「じゃあ何処にいく？」

肩に触れようと伸ばされた手を、掴み捻る。

「いだだだ！」
「っテメェ、何すんだっゲフ！」

胸倉を掴もうとするもう一人の男のお腹を蹴る。お腹を抱えて痛がる男。それを確認すると今度は頭に踵落とし。ぶあっとスカートが捲れたが、気にしないことにした。

「ガハっ！」
「み、水色」
「……」
「いだだだだ！」

やっぱり気にする。しっかりと見た男の腕を更に捻る。ある程度捻ったあと手を離し拳を握る。そして思いっきり顔目掛けて……。

「見んなアホー！」

鼻血を吹きながら男が数メートル後ろに飛んだ。
さて、と。藤堂の方に振り向く。信じられないと言った顔で藤堂が私を見ている。その目は恐怖に満ちていて、足や肩は震えていて。でも仕方ない。これが私なんだから。

「これが本当の私だ。ごめんなおしとやかじゃなくて。お前とは付き合えない、本当にごめんな」

そう言いながら手を差し延べる。一応立てるかどうかわからないから。

バシっ。

一瞬何が起こったかわからなかった。差し出した手が左に大きくそれた、手の甲に鈍い痛みを残して。手を見たあと藤堂を見る。いつの間にか立ち上がっていた藤堂は、震える声で、すみませんでした、と早口で告げ、走って行った。

「は、ハハ……アハハ」

そっか。やっぱりそうなるよな。いや、別にいいんだ。どうせ振るつもりだったんだから。結果オーライだ。

――なのに。

身勝手だな私は。あんな小さな拒絶でさえ悲しい。体を、心を抉られた気がして。私は藤堂を拒絶しようとしたのに、こんなにも拒絶されるのを嫌がっている。私はなんて身勝手だ。今までも何度もしてきた。今さら気付いた。そうだよ。これは小さな拒絶なんだ。拒絶は拒絶。拒絶の怖さや悲しさは痛い程知っている。だから、他人にはしないようにって。知らないだけでしていたのか。ごめん。ごめんな。

ベンチに座り藤堂の行動を思い返す。それは紛れもなく拒絶で。思い返したせいで更に体に穴を開けられ一気に心まで抉られた感じがした。傷を、もう二度とあんな思いをしたくないのに。その傷を、抉られる。

ズキズキと頭が痛くなる。目眩がし、吐き気がしてくる。前後左右上下がわからなくなり、今自分が立っているのか座っているのか。

何処にいるのか、そんなこともわからなくなる。暗い。さっきまで明るかったのに。暗い。真っ暗だ。あの時見たいに。

ぽんっと肩に何かの感触がした。と同時に声が聞こえて来る。

「ねぇ彼女」
「遊ぼうよ」
「僕達暇なのだ」

不思議だ。さっきまで暗闇と言える程に暗かったのに、今は明るい。今は何処にいるのか、前後左右上下、座っていることもわかる。吐き気もしないし目眩も無くなった。なにより、

「だからさぁ、遊ぼうぜ」

この声達、この顔達。暖かくて、落ち着く。気持ちいい。だから私は言う。もう一人じゃない。もう誰に拒絶されても居場所がある。

「ああ、遊ぼう」

不思議だ。居場所があるってだけでこんなにも幸せだ。皆がいるだけで、こんなにも楽しい。どんなに暗くても明るくなる。どんなに辛くても楽しくなる。どんなに不安でも安心する。どんなに寒くても一気に暖かくなり、どんなに嫌なことがあっても忘れられる。

いつの間にかズキズキは無くなり、心は戻り体の穴も塞がっていた。

止められない時間　透麻

とうとう来てしまったか、この日が！

目を瞑ると今でも昨日のように思い出す楽しかった日々。そりゃあ辛いことも一杯あったさ。けど楽しいことの方が一杯で、幸せを確かに感じていたんだ。そんな日々に終止符をうつかのようにやって来た今日。いやだ。もう終わるなんて。いやだ、そんなの嫌だ！

布団にくるまりぶるぶると震えている。近くにある時計をちらりと見る。八時。時計は正しく時間を刻み俺に現実を知らしめる。

来る、来る、来るぞ。

ピンポーン。

来た！

すぐに耳を塞ぐ。けどその行為に大した意味はなく、塞いでいる筈なのに、その綺麗な声はすぅっと俺の耳に入って来た。まるで直接脳に話しかけているかのように、脳内で反響する。

「透麻くーん、朝だぞー」

間延びした声。やる気のなくて、しまらないだらしない声。それでいてどんな騒音の中でも拾ってしまうような綺麗な声。くそっ、来やがったか。

ピンポーン。

「透麻くーん」

決まってアイツは俺を起こす時にくんを付ける。理由は大したことではなく、以前寝てる時にそう呼びかけたらすぐに起きたからしい。

ピンポーン。

三度目の音が響く。それでも一切の反応を示さないことに痺れを切らしたのか、数秒後激しくドアが叩かれた。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン！

聞くな。感じるな。何も考えるな。この音は気のせい。本当は音なんて鳴ってない。誰も来ていない。そう自分に強く言い聞かせる。けど、音は何の反応も示さない俺を戒めるかのように激しさを増して行く。

朝だぞ。早朝だぞ。近所迷惑にも程があるだろ。頼む、諦めて帰ってくれ！　強くそう思った瞬間、さっきまでの激しい音が嘘のように止んだ。しーんとした静寂が訪れる。時間にしたらたった数分だったんだろう。けれど、この静かな時間が酷く懐かしく感じる。勝ちを確信した。俺の粘り勝ちだ。

「透麻くーん」

聞こえて来た声に、信じられない現実にゾクっと背筋が凍りつく。首を声のした方にゆっくりと向ける。声のした方向、部屋のドアへ

と。確かに閉め切っていたドアが微かに開いている。小さな子供の小指が入るかどうか程の本当に小さなすき間。そのすき間を上から下へとゆっくりと視線を動かす。電気もきっていて、見えるのは暗い暗い壁の筈。

「っっ！？」

ある一点で視線が止まる。ぶつかり合う視線。伝う汗。ほんの小さなすき間から人間の目がこちらを覗いていた。

「……なんだ、起きてるじゃん透麻」

覗いていた主はドアを開け入って来た。

はぁ……。本当にコイツには常識がないのだろうか。

「何の用だよ佳」

「学校行こう」

そうだ。今日で楽しかった夏休みも終わり、学校が始まる。だから今日が来るのが嫌だったんだ。ていうか、

「お前、その格好で行くのか？」

「うん。別にもう隠しとく必要はないだろ。それにしても、スカートって慣れないな」

そう言いながら佳はスカートの裾を少し掴んで上げた。

「やめろ。頼むからやめてくれ。少しはそう言う行動は自重しようか」

「別に見えたわけじゃないからいいだろ」

「お前なぁ……」

そうだった。佳にいくら常識を説明しても意味がない。まぁ見えなかったらいいか。強引に自分を納得させこの話題を終わらせる。

さぁて、重要な問題はここからだ。覚えているか？　俺の夏休みは他の奴等より一日早く始まった。てことは、だ。当然一日遅く終わる。始業式？　そんなの俺にとっちゃあ夏休み最終日だ。

「てことで俺はパスだ。家で寝てる」

「んー、やっぱりそう言うか。じゃあ、まぁいいや。俺も始業式怠いから暫くここにいるよ。始業式終わる頃に学校に行く」

それって行く意味あるのか？　激しくそこをツッコミたい。けど、そんなのにいちいち反応してたらきりがない。てことで普通に聞き流してベットに寝転ぶ。トスっと柔らかくベットがへコんだ。

「……何してんだ」

「何って漫画読んでるだけ」

「いや、人のベットで何してんだ？」

「寝転んで漫画読んでる」

パーフェクトな解答だ。さて、そこまで考えがいたったならもう解るだろ。

「何で俺じゃなくてお前が寝転んでんだよ」

「透麻も寝転べばいいじゃん」

そう言って少し横にずれる佳。ここで言って置く。俺のベットはシングルだ。普通に一人で寝ることを計算し尽くされた設計になっている。二人で寝転ぶ？　そんなことしたら密着して落ちるか落ち

ないかぎりぎりの状態だろう。ようするにだ。佳と密着しなければダメってことだ。佳は女だぞ。体を密着って……。

俺結構佳と体を密着させてたな。おんぶしたこともあるし、頭を撫でたこともあるし、鬼ごっこで結構体を触ったことあるぞ。あれ？　俺って結構佳の体に触れてる？　いや、あの時は佳を男だと思っていたから。ていうか女だとわかった以上もうそんなことは出来ない。仕方ない。ベットに寝転ぶんじゃなくて座ることにした。そうすれば佳と密着することはない。そう思い、佳の隣りに腰掛けようとする。自然と視線が佳を踏まないようにと佳の体に向く。そして、重大な事に気付く。

佳、さっき横にずれたせいでスカートが少し捲れている。かなり際どい所まで見えている。白い太股が露になっていて少しだけ白色の下着が見えている。

どうする。言うべきなのか。それとも言わないべきなのか。佳は漫画に夢中で全然そのことに気付いてない。言ったらどう言う反応をするのか。ヤバい、全く想像つかない。言わなかったら、佳が気付いた時どう言う反応をするか。これも想像出来ない。俺はどうすればいいんだ。くそっ。これが來優だったら普通に言えるのに。そしたら來優は、見るな変態！　とか言って殴りかかって来る。それを躱して更にからかうのがいつも通り何だけど……。まさか佳でこういう状況に陥るとは。どうする。どうするんだよ。

……やっぱりここは見なかったことに、

「どうかしたか透麻」

俺が静かだったことに違和感を感じたのか俺に視線を移す。俺が見ていたことに気付いたのか少し上体を起こし、自分の太股を見た。

あ、気付いた。どうする。恐らく俺が見たことに気付いている。

別にやましい思いで見たわけじゃないけど、やっぱり女側からしたら嫌だろう。そんなことを思いながら良い言い訳を考えていたら、黙っていた佳が口を開いた。

「み、見た……？」

頬染め、恥ずかしそうに口元を漫画で隠す佳。うん、そんな顔されたら本当のことを言うしかないじゃないか。

「何を？」

「み、見てないんならいい」

ごめんなさい。見ました。心の中だけで本当のことを言う。声に出して言えるわけねぇだろ。良いよ、俺は嘘つきの臆病ものので良いよ。佳に変態扱いされるよりはそっちのが数倍良いわ。

急いで自分のスカートを正して、また俯せになる佳。

「スカートは、慣れない」

そうみたいですね。学校で佳が今見たいなことにならない事を祈ってます。

さて、それじゃ久し振りの佳との二人きりのこの静かな時間を堪能するか。

漫画を一冊取り出し佳の隣りに座り読んで行く。久し振りに静かな時間の中ページを捲る音と時計の音が心地よくリズムを刻み響いた。

相対する者　佳

やっぱり注目を浴びる。夏休み前まで男の制服を着ていた奴が女の制服を着ている。それだけで話題制抜群だ。それなのに、今はそれプラス葵が隣りにいる。一年の教室は第一校舎の二階にあって、二三年は第二校舎の二、三階だ。職員室は第一校舎の三階にあって、気になる食堂は別に専用の建物を建てている。どこから見てもミニファミレス見たいな感じで二つの校舎の隣りに堂々とある。玄関さえ一、二、三年で場所がわかれてるのに、まさか校内で葵と会うとは。この学校は何だかんだ言って広い。だから会う約束をしていない限り別の学年の奴に会うことはあまりない。何で葵が第一校舎の二階にいるのかはわからない。職員室に用がある？　いや、葵は職員室に行くような奴じゃない。だったら何でここに？

「いやぁ、まさか佳くんがスカート履いてくるとはねぇ、世の中何があるかわかんないなぁ～」

「ふーん。で、葵は何でここにいるわけ？」

「佳くん、いや、ちゃんの方がいい？」

「くんでお願いします」

葵にちゃん付け何て想像しただけでゾッとする。

「今来たところぉ？　実は僕も今来てさぁ～、まぁ、佳くんに用事があったから教室まで行かなくてすんでよかったぁ～」

喋りながら俺の正面に移動する。相変わらず間延びした怠そうな声だ。とぼけた様な細い目が俺を上から下まで吟味した。

「前回邪魔が入ったせいで聞けなかったからぁ、今聞いとこうかなぁって……、知ってるんでしょぉ、あの人のこと～」

そのことか。葵が探している人は多分あの二人のどっちかなんだけど……、俺としては教えたくない。理由はめんどくさいことになりそうだから。てことで、

「知らないって言ったろ」

「またまたぁ、嘘つき～。なんなら、前回の続きしてもいいんだよぉ」

そう言い、俺に一歩近付く葵。顔と顔の距離が十センチくらいになり、首に指が当てられた。その指はなぞるようにゆっくりと下に下がっていく。

「ねぇ、可哀相な佳ちゃん」

気持ち悪い。語尾にハートマークが付き添うな程に甘い声。なのに、氷の様に冷たくて、針のように突き刺さるような声だった。気付けば、いつの間にか胸にまで辿っていた指が、とんっと軽く俺の胸を押した。一瞬のことだったから大した抵抗も出来ないまま俺の体は数歩後ろに下がった。葵も数歩下がり、俺と葵の間に二メートルくらいの距離が開く。

何でそんなことした？　そう思った瞬間俺と葵との二メートルの間に人が飛んで来た。

「は？」

理解が出来なくて間の抜けたような声が出た。意図的じゃなく自

然に出て来た声。

”人が飛んで来た”

別に深い意味も特別な意味もない。三才児でも理解出来るような単純明解な現実。ボールのように、空き缶のように、紙ヒコーキの様にヒトが飛んで来た。階段の方から飛んで来たソレは俺と葵の間を通りすぎ窓を割って落ちていった。窓ガラスが割れる音がしたすぐ後に見ていた女子複数人の悲鳴が響く。

葵を見ると既にヒトが飛んで来た階段の方を見ている。口元は吊り上がり、笑っている様に見える。けど、違う。いつも閉じている様な目を開き、階段の先をジッと見つめている。珍しく真剣な表情。

「あーおーいーくーん」

ドスが利いた声。その声の主が階段をゆっくりと登ってくる。まず銀色の髪が見え、次に顔が見える。そんな調子でゆっくりと姿を現した男。血だらけの男を片手に一人ずつ持っている。

「恭兄ぃ」

「おーまーえーはぁ、佳に近付くんじゃねぇ！」

両手をあげ、持っているヒトを葵目掛けて投げた。葵がそれを避けて、窓が割れる音がまた二つ響いた。

「……恭優くんさぁ、二度と”俺”の前に現れんなって言わなかったっけ？」

騒がしかった音が全て止む。悲鳴を上げていた女子は一瞬でやめ、静かに泣き始める。ざわざわと騒がしかった男子は黙りこみガクガ

クと全身が震えだす。それでも皆声をだすまいと最後の努力をする。恐怖で泣いている脳が強く命令を出す。喋るな、動くな、音をだすな。

恭兄ぃが来てから空気が変わった。葵さんがキレて更にキツくなった。自然と震えている足に力を込める。

見てるだけでこれだ。あの中に入ったら一体どうなるんだろうな。

「その銀髪ウザいんだけど」

「そうかそうかぁ〝わかった。よぉくわかったから、死ねや葵ぃいいいい！」

恭兄ぃが葵に突っ込んでいった。葵目掛けて拳を叩き込む。それを避ける葵。この二人のケンカにカウンターはまずない。お互いそんなことしようにも出来ないからだ。もししたのなら確実に何か月かは病院のベットで生活しなくてはならなくなる。カウンター何て出来ない程の塊が飛んでくる。避けるのも精一杯なのに出来るわけがない。一発当っただけで、体がどうなるかわからない。葵さんはそう思ってる筈だ。恭兄ぃも、一発当ったらもう攻撃する暇を与えてくれないだろう。暇すら甘い言葉かも知れない。もう攻撃するような体じゃないだろう。一発当った瞬間に出来る隙に何をされるかわからない。指を折られるか、目を潰されるか、喉を潰されるか、関節が逆に曲がるか……。

お互い死ぬ気のケンカ。

「ちょこまかとウゼー！」

「当るわけないだろ」

更に激しさを増していく。それに呼応するかのように空気も重くなる。

「止めるのじゃ！」

声が、音が響く。凄く懐かしく感じる音に全員が振り向く。恭兄ぃまでとは行かないけど綺麗な銀色の髪をした男が歩いて来た。自分達のケンカの乱入者に少し驚いたのか二人共動きが止まる。

「本当はこんな危ないケンカ止めたくないんじゃが」

逆だろ普通。危ないから止めるんじゃないのか。

「生徒会元会長として見過ごすわけにはいかんのう」

そう言い恭兄と葵の間に割って入った。

「おい、邪魔すんなよチビ」

「そうだよマッキー。せっかく恭優を殺すチャンスなのに、邪魔するならマッキーも殺しちゃうよ」

二人の眼光が元会長に突き刺さる。

「恭優、久し振りに会って耄碌したか。アッシをチビと言うのはやめいと言うておったじゃろうが。お主らがアッシを殺す？　返り討ちじゃぁあああああ！」

……キレるの早いぞアイツ。ていうか大丈夫なのか。

再開したケンカ。何故か一人加わってさっきよりもキツくなっている。何回か恭兄ぃの拳が校舎の壁や床に当るんだけど、その度にひびが入ったりヘコんだりしている。誰か本格的に止めないと壊れるんじゃないのか？

「止まれい！」

今度は明らかな怒声が響く。その後ずしん、ずしんと言う音が近付く。

この声は……飼雲！

「お主らぁ……」

うっ……。ツルツルの頭が血に染まっている。何があったんだ。

「仏の顔も、三度までだ。破ッ！」

飼雲が、元会長の腹部に掌を当てた。

「いたたた。少し逃しそびれたか」

後ろに飛びながら言う元会長。不意に元会長の顔に影が出来る。

「死ねマッキー」

葵が肘をマッキーの眉間目掛けて振り下ろした。

「死ぬのはテメェだ！」

攻撃に転じた葵に恭兄ぃがすかさず殴りかかる。反応の遅れた葵の腹に恭兄ぃの拳が入った。不自然な程に吹っ飛ぶ葵。

「ちっ。上手く逃げたか」

「ケホっ、今のはヤバかったかなぁ」

「チビっていった仕返しじゃ！」

今度は元会長が恭兄ぃに蹴りかかる。その足を掴む恭兄ぃ。

「うるせぇんだよチビ！」

そのまま葵に向って投げ飛ばす。飛されながら元会長は足を葵に向けた。さすがに避ける葵。後ろにいた飼雲が元会長の蹴りをお腹で受け止め、ズザァと床を滑った。

飼雲の掌がまた元会長に当てられる。けどそれはお腹じゃなく今度は顔に。

「やばっ」

「破っ！」

バチィィイイ！

ダランと頭を後ろに垂らしながら飛ばされる元会長。その先には恭兄ぃの攻撃を躱し続ける葵がいる。

ドン！

元会長と葵の体が衝突し、葵はバランスを崩した。

「死ね」

恭兄ぃの踵落としが葵の顔目掛けて降りかかる。

「っクソが」

葵が咄嗟に腕を顔の前に持っていきそれを防ごうとする。一本、いや両腕を捨てる覚悟だろう。
踵落としが容赦無く腕に降りかかる。

「やめろ！」

キキィっとブレーキ音がしそうな程に恭兄ぃの踵が止まった。腕との距離を僅かだけ残して。恭兄ぃは一度ゆっくりと息を吐く。そして、声のした階段の方へ振り向いた。
長い銀色の髪をゆっくり揺らしながら紗弥が歩いて来る。

目の前で起こっているケンカ。風紀委員として絶対に止めなければならない事象。そもそも私は騒ぎを聞き付け止める為に来た。

――なのにッ！

「……化け物だ」

ケンカ何てものじゃない。そんなに優しいものじゃない。お互いがお互いを殺す気でやっている。もしかしたらこの人達にはケンカなのかも知れない。

けど、私達から見ればそれは”異常”で”異質”で”歪”で”純粋”で”恐怖”で”畏怖”で”共食い”で”破壊”で”殺戮”で……。

――死合いで。

こんなものもうただの殺し合いだ。こんな化け物同士の共食いなケンカ何て止められる筈がない。止めようものなら一気にその殺意は私に向いてくる。

「は……ハハ」

全身から汗が沸く。体が小刻みに震える。気付いたら涙がでそうになっている。何だ、どうやら私はまだ化け物にはなれてなかったらしい。こんな私でもまだ人間らしい。少なくとも目の前の化け物

や、倉本よりは。
恐らく一番近い場所だろう。あんな化け物達の死合いを一番近く見てながら、アイツは笑っている。楽しそうに。アイツ自身気付いているんだろうか。口元が歪に吊り上がっていることを。

「やめろ！」

誰だ！？

「理事長……？」

銀色の長い髪が歩く度に少し揺れる。険しい表情をした理事長が歩いて来た。堂々と、動きの止まった化け物達の領域に。

「ッこのバカ者共が！」

そう聞こえた時にはもう目の前に銀色の髪をした男が飛んで来ていた。

ドン！

化け物。そう言えば、さっきの死合い確かに怖かったけど、でも、何処か綺麗で魅了されて、少し羨ましかった。人間にはあんなケンカは出来ない。人間にはあんな死合いは出来ない。人間は汚い争いしか出来ない。あんな風に、正々堂々と自分の力を全力で出して、相手の力を全力で受けて、そんなケンカや死合いを私もしたい。あんな、あんなに汚い戦争じゃなく、裏切りなど一切無く、命をかけて戦った敵を汚すでもない。純粋な死合いを私も……。
ふっ、と視界が暗くなり、何もかもが黒に包まれた。

『死ねー魔女！』
『この魔女がぁああ！』
『悪魔！』
『魔女！』
『死ねぇえええ！』

幾ら待っても助けはこなかった。幾ら強がっても何も変わらなかった。今まで信頼していた仲間に裏切られ、今まで守っていた処女も奪われ。それでも強がって、頑張って、けど、もう無理です。神様、私の役目はもう終えたのですね。もうあの時には終わっていたのですね。

十字架に両手足を縛られ、民の罵倒を浴びながら、私の足元の木に火がついた。立ち上ぼる煙で前が眩む。肺に入って来て息苦しくなる。けど決して私は下を見なかった。ずっと前を見据えて、見えない前を見据えて。

『泣くな、泣くな泣くな泣くな泣くな泣くな！』

何度も何度も自分に言い聞かせた。でも、不思議で思えば思う程涙は出て来た。熱さからじゃない、痛みからじゃない、苦しみからでもない。今までの私の人生を思い返してだ。

神様の言う通り頑張った。国の為に、民の為に、皆の為に。何度も何度も死ぬ思いをしたけど、それでも死ななかったのはやはり加護があったからだろう。役目を終えた私は邪魔になったのか、それとも元々嫌われていたのか、だんだんと外され、最後には裏切られた。辛くないと言えば嘘になる。悲しくないと言えば嘘になる。死を受け入れると言えば嘘になる。

生きたい。生きたいよ。まだ生きていたい。だって、私まだ十八だよ。まだ好きな人も出来たことないんだよ。何で、何で私は死ななくちゃダメなの。

生きたい、生きたいよ。

悔いがないと言えば嘘になる。裏切った仲間を許すと言えば嘘になるかもしれない。神様を信じてよかったと言えば嘘になるかもしれない。けど、私は許す。許さないよりは許していたい。信じないよりは信じていたい。私はずっとそうやって生きて来たのだから。どんなに罵倒されたって、どんなに体を汚されたって、最後まで私は綺麗な心のまま、皆が誇れるような私のままでいたい。

『神様……、もし』

もし今私の願いが叶うなら、どうか私の帰りを待っている皆に私は私のまま死んだと知らせて下さい。私を蘇らそうと悪魔と契約する人がいないように。ふふ、ジルとかがしそうで少し怖いけど……、どうか神様、誰も私のあとを追わないように、もう争いが起きないように……。

『私は、ゆだねます』

皆、頼りない私を今まで守ってくれてありがとう。側にいてくれ

てありがとう。

『ありがとう』

空は酷く青く済みわたっていて。その青に皆の姿を見た。

『迎えに……、ありが、と』

ここは、保健室？　何で!?

ガバーッと起き上がる。別に体に痛みはない。あー、そっか、私飛んで来た男とぶつかって気絶したのか。

情けない。矢だって飛んで来た私なのに。まぁ痛み何か覚えてないんだけど……。

目と頬に違和感を感じて指で触って見る。触れた指が少し濡れた。泣いて、たのか？

「ああ、起きたか。何泣いてんだ？　そんなに痛かったか？」

ひょこっと顔を覗かせた銀髪男。私にぶつかった張本人だ。そして、化け物。

「いやぁ、わりぃな」

「……なんで」
「ああ？」
全く悪気がない様子で謝った化け物に、気付いたら私は会話しようとしていた。
「人間は汚い？」
自分でも意味がわからない質問。だいたい人と会話何て羽路以外とはあまりしたことがない。だから少し困惑していたのかも知れない。ずっと探して来た質問を咄嗟にしてしまった。というかそもそも何でこんな化け物と会話をしなくちゃならないんだ。
「ホントに汚いだけだったか？」
「え？」
予想外な答えが帰って来たことに更に困惑する。けど、何処かでこの化け物に期待している自分がいる。言葉を、ずっと言って欲しかった言葉を。
「お前が関わって来た奴等は皆汚いだけだったか？」
そんなの……。何で、何で！
「汚いさ人間何て！　裏切って裏切って、利用して価値が無くなったら捨てて……」
汚い筈なんだ。なのに、なのに、何で。
「もう答え出てるだろ。一々聞くな」

「みんな、まってくれてたんだ……。なのに、なのにわたしはぁ」

私が今まで許せなかったのは、最後の最後に私は生きることを諦めた。それが許せなかった。もしかしたら雨が降って火が消えるかも知れない。もしかしたら最後の最後で助けが来るかも知れない。でも、私は諦めて、私が死んだことを伝えて欲しいと願ってしまった。私があの時願うことはそんなことじゃなかった。生きることを、最後まで生きることを願うべきだったんだ。ずっと許せなかった私の罪。

「泣け泣け、何をしたか知らねぇけど、もう皆許してるよ。死ぬ程後悔してんだから許してくれてるさ」

「ごめんなさい、ごめんなさい。うぅ……わぁあああああああああああああああん」

許せなかった。だから孤独を選んだ。なのに気付けば羽路を受け入れてる私がいて、そのことにまた許せなくて。孤独を選べない私が許せなくて。

「うむ。助けてくれたのならば感謝する。悪いことをしたのならば謝る。誰にでも出来ることなのだが中々するのは難しい。ずっと悩んでいたのだろう。ずっと自分を許せなかったのだろう。けど、お主は今日ここでちゃんと謝った。それでもう十分だろう。それでもう自分を許してあげてもいいだろう。皆も苦しんでおるお主をもう見たくないだろう。もう自分の好きに生きなさい」

「おい飼雲、テメェわかってもの言ってんのか？」

「話の流れからだいたいそうかなと思ったのだが……、違ったのか？」

「さぁな、俺も知らねぇ」

「……あはは」

何だろう。いつの間にかいたデカいお坊さんにも笑ってしまうけど、そんなことよりも、何も知らない人に助けられたことに一番笑える。不思議な人だな。

「そういや飼雲、テメェ何で俺達のケンカに割って入って来たんだよ」

「我が外を歩いていたら空から血まみれの男が飛んで来てな。我の体に当ったというわけだ。三人ともな」

「あー、なるほどな。俺でもキレるわそりゃあ」

「お主は些細なことでもキレるだろう」

「んなことねぇよ。っと、じゃあ俺行くわ。もう大丈夫そうだし。それに俺紗弥姉さんに用があって来たんだし」

「うむ、わかった」

そう言い片手をひらひらとふりながら出て行く銀髪男。私はその背中から目を離せなかった。カッコいい。生まれて初めてそう思う男に出会った。胸もドキドキする。これが恋って奴なのか。そう言えば私、今まで一度も恋なんて……。

「カッコいいな」

「恭優はやめとくのが得策だ。よほどの女子(おなご)じゃないとアレとは一緒におれん」

恭優って言うんだ。制服着てないけど、生徒じゃないのかな。

「もう、大丈夫なのか」

デカいデスクに肘をつき、柔らかそうな椅子に腰掛ける紗弥姉さん。少し自分に負い目を感じてるのか保健室に寝ている女のことを聞いた。まぁ、俺を投げなかったらあの女には当たらなかったんだしな。負い目を感じるのも仕方ない。

「さっき目を覚ました」

「そうか……、ならいい」

ふぅー、と息を吐き安心した。そして今度は心底疲れた様な表情をして見せた。

「ときに、あの男はなんじゃ」

「ああ……」

嫌そうな表情をして聞く紗弥姉さん。答えないわけにもいかないから思い出したくもない男のことを思い出す。そして同時に数十分前のことを思い出した。

「結婚してくれ！」
「は？」

珍しく声が被った。紗弥姉さんともそうだが、チビや飼雲ともだ。どうやら皆葵が言った言葉に驚いているらしい。ていうか驚かない方が不思議だ。そしてやっぱり佳は不思議な奴だ。驚くというより心底嫌な顔をしている。

「な、何だお前はいきなり」
「僕のこと覚えてないですか？」
「知らんお前のことなんて」

見てわかるくらいに落ち込む葵。ざまぁみろ。凄く笑えるぞ。

「まぁいいや。とにかく結婚してくれ」
「わ、私は……、白馬の王子様と結婚するんだぁあああ！」

ああ、紗弥姉さんが狂った。突然のことで脳が容量オーバーしたんだろう。紗弥姉さんは告白されるのに慣れてないからな。何があったかわからねぇくらいの速さで葵の体が真横に飛んで行く。そのまま窓を割り下に落ちていった。

蹴りだ。凄く速い蹴り。それが葵の右肩を捕らえ、強い衝撃を生んで葵を飛した。あの葵が反応が遅れる程速い蹴り。一応ガードはした見てぇだけど、ダメだな。痺れて使い物にならねぇだろ。

まぁ葵がどうなろうと知ったことじゃねぇし、出来ればそのまま死んでくれ。で、処理は事故ってことで済ます。

「……ゴホンっ。何をしている。授業がもうすぐ始まるだろう。早く教室に戻れ」

取り乱したのを誤魔化すように咳払いをし、見ていた生徒に指示を出す。一応この学校の代表者だ。だからその指示に従う生徒達。佳も関わりたくないらしく足早に教室に入っていく。じゃあなと佳に手を振ってから倒れている女の服を掴み持ち上げる。そのまま更に上にあげ右肩の上に乗せた。

「じゃあ俺コイツ保健室に持ってくんで、紗弥姉さんは先に行って待ってて下さい」
「ああ、わかった。マッキー」

絵本の中の泥棒の様にそろりそろりと廊下の端をこっそり歩いて遠ざかっていくチビ。それを呼び止める。

「な、なんじゃ」
「何処に行こうとしている？　割れた窓、さっさと直しておけ」
「姐御そんな殺生なぁ」
「うるさい。つべこべ言わずさっさと直せ」

ホントに葵はアホな発言で身を滅ぼしたなと思う。だいたい紗弥姉さんがアイツがずっと探していた人なら何でもっと早く気付かないんだよ。サボりすぎだろアイツ。

「ただのドSですよ。最悪な程性悪な」
「はぁ……、おい恭優、人選ミスなんじゃないのか？」
「何言ってるんすか。あの時出された条件を十分クリアした人材じゃないすか」

頼りになる奴。規律に厳しい奴。ウザい奴。どれも超変であることが重要。そんな条件を出したから俺はあの三人にこの学校を紹介したんだ。葵には人を通してだけどな。

「まぁ、いい。で報告は」
「解き方は知らない。が、詳しい奴を知ってました」
「なに！？」
「これから行こうと思います。今回はそのことを知らせにと、佳の顔を見に戻ってきました」
「わかった。ありがとう」

下を向き肩を震わせる紗弥姉さん。怒ってるわけじゃない。嬉しいんだろう。俺も聞いたときは嬉しくて飛び上がった。

「お前には、本当に感謝しておる」
「感謝されるいわれはないです。佳が幸せになることは俺の望みでもありますから」

この世の中は理不尽だ。神様何かいない。もしいるんなら俺がぶち殴ってやる。もしいるんなら理由を聞きたい。何で佳見たいな奴が不幸にならないといけないのか。何で、何で”あの人”が死ななくちゃならないのか。
なぁ、お前も俺と同じ考えだろ。葵。もし神様がいるんなら絶対許さないよな。

「俺はもう大切な家族を失いたくないんです」

なぁ、葵。俺達ならわかるだろ？　失う辛さが。だから葵、俺はお前にこの学校を薦めたんだぜ。

空が青い。こう仰向けに倒れて見ると、何で雲があんなに速く動いて見えるんだろうな。何で仰向けに倒れてるかって。動きたくないんだ。二階から落ちて体が痛いってのもある。受け身も半ば強引だったしね。それと、フラれたショックていうのもある。まぁ僕はしつこいからまだまだアタックするけど。あとは……、何だっけ。あまり、思いだしたくないなぁ。

「あー、また引き分けか」

まったく。いつ決まるんだろうねぇ。恭優とは勝敗がいつもつかないなぁ。

そういや何で今日学校に行ったんだっけ。確か城道ちゃんの様子が気になって……、ああ。それを佳くんに聞きにきたんだった。

ああ、それで佳くんのあの顔を見て少し意地悪しようと思ったんだった。イラっと来たんだよね。少し吹っ切れた顔。そのくせにまだ不安を抱えてる。それを皆に相談しない。

とてつもなく腹がたつ。まぁ、恭優ほどじゃないけど。でも腹がたつ。

「フフ」

何でかな……。思いだしたくなかったのに、思いだしちゃった。まるで僕見たいで腹がたったんだ。まるであの日の僕を見たようで動きたくないんだ。

この学校に僕を恭優が誘った理由。ホントに恭優は解りやすい。なのにケンカの時はまったく読めない。厄介な奴だ。恭優は僕に佳くんの世話をして欲しいわけじゃない。それにそうだとしても僕は意地悪だからしない。そもそも世話なら飼雲がよくしているだろう。恭優、お前は佳くんに大事なことを教えて欲しいんだろ？

そんなめんどくさいことしない。と言いたいんだけど……。

「佳くんには一応大きな借りがあるからね……」

本人は忘れてる見たいだけどね。まぁ、仕方ないことかぁ。佳くんは佳くんで大変見たいだし。あの時佳くんは気付いてなかったかも知れないしねぇ。

それに、ここで佳くんの助けをしてたらあの人とも付き合えるかも知れないし。よく見たら佳くんそっくりだったから、恐らく姐だろう。てことで仕方がないな。少しお前の思惑通りに動いてやるよ恭優。お前は優しいから、佳くん達に僕達と同じ思いをさせたくないんだろ。

本当に世話のかかる。

「――だ」

声より早くぶわぁと強風が吹いた。強風は強い音ともに隠れた声を運んで行き、その声を聞くものはいなかった。不気味に笑う。あながち神様って奴はいるのかもな。まぁいたら殴るだけだけど。

佳が不幸!?　一体どういうっ。

「それはそうと、盗み聞きっつうのは少し悪趣味なんじゃねぇのかぁ？」

目の前のドアが開かれる。普通に立って普通に私を見ている恭優さん。けど、それは恭優さんの普通であって、私に凄く威圧を感じさせた。見ているんじゃなく睨んでいるような、そんな錯覚を覚える。ただ目の前に立ってるだけでこの威圧。でもっ。

「佳が不幸になるってどういうことですか!?」

恭優さんを、理事長……いや、佳の姉さんを睨む。わからない。佳が不幸になるなんて。しかも確定事項のように、決まりきっているかのように話していた。一体なんで、どうして、何が佳を不幸にする。

「……はぁ。恭優、お主気付いておったのじゃろう。何故追い払わなかった？」

「それを言うなら紗弥姉さんもだろ」

二人が顔を見合わせながらお互いに溜め息をついた。数秒後佳の姉さんがゆっくりと私を見据える。目を、瞳の中を。

「守山來優、お主は知らなくてよい。どうせ知ったってどうしようもないことじゃ、お主達にはの」
「そんなことっ！」
「こればかりはやらずともわかっておることなんじゃ」
……私には、私達には佳を救えないっていうのか。私達には佳を幸せに出来ないっていうのか。
「……そんな顔するでない。お主達のせいじゃない。これは……ワシのせいじゃ」
悲痛な声で告げられた言葉。違う。佳の姉さんのせいじゃない。ただ佳の姉さんが自分を責めてるだけだ。何故だか私にはそう感じた。
「……本当に、私達じゃその不幸を消すことは出来ないんですか」
「残念じゃが。今その不幸を消すことが出来る人を恭優に探して貰っておる」
じゃあ私達は佳の為に何も出来ないってことか。
「ワシは佳に嫌われておるから何も出来ないが……、守山來優、お主達には出来ることがあるじゃろう」
理事長はそう言いながらゆっくり立ち上がり私の前まで来た。近くで見るとやっぱり佳に似ていて、そんなに悲しそうな顔をしたら何故かこっちまで悲しくなってくる。
「ワシはずっとお主らに感謝したかった」

膝をおり手を床につける佳の姉さん。長く透き通るように綺麗な白銀色の髪が床につく。

「佳を、笑顔にしてくれてありがとう」

床に額をつける。信じられない。仮にも理事長が、この学校で一番力を持つものが一人の生徒でしかない私に頭をつけ感謝している。私は目を見開き驚いたあと、ああ、この人も同じなんだ。私達と同じ、佳が大切なんだ。そう思った。だからこそ、こんな真似が出来るんだろう。

なんだ、佳。姉さんから嫌われてないじゃん。

ただ、佳が少し勘違いしてるだけ。ただ、お互い少しすれ違ってるだけ。そう思えて仕方ない。佳の姉さんに頭をあげるように言う。下げないといけないのは私の方だ。私は何のためにここに来た。あのケンカを見てここに来たんだろ。あのケンカを止めた佳の姉さんに会いにここに来たんだろ。

恭優さんが横で含み笑いをしている。分度器で調べないとわからないくらいに微かに吊り上がっている口元。鋭い目は私を捕らえている。ああ、恭優さんには何もかもお見通しなんだ。だから気付いても私を追い返さなかったのか。

佳の姉さんが顔を上げたのを確認して今度は私が膝をつく。何事かと思い目を丸くして驚く佳の姉さん。

「お願いします。私を強くして下さい！」

ダンっと頭を勢いよく床につけお願いする。数秒の沈黙が訪れる。沈黙と比例するかのように自然と空気も重苦しいものになる。やっぱりムリだったか。さすがにいきなりすぎた。でも私はあの蹴りを見て確信した。私はこの人に学ばないとダメだ。私の目標はこの人

じゃないとダメなんだ。佳を守るには、もっと、もっともっと強くならなくちゃダメなんだ。肉体も精心も。

「く、くく……」

「？」

「くくく、はは、あははははははははははははははは！！」

沈黙を破ったのは大きな笑い声だった。頭を上げ笑っている佳の姉さんを見る。

「あははは。いやなに、悪い悪い。数年も前に同じことを言ってきおった男がおってな。まさか同じことをする奴がおるとはな。いいだろう。守山來優、ワシがお主を鍛えてやろう。ただし、一週間だけじゃ。ワシも意外と忙しいんでな。そこは勘弁してもらおう」

「っありがとうございます！」

もう一度頭を下げる。一週間。短いけど、大丈夫。一週間全てを吸収する。全てに死ぬ気でかかる。

「帰りにもう一度ワシの所に来るといい。わかったらほら一つしかない授業が始まっておるぞ。急いで行くんじゃ」

「はい！」

嬉しくて嬉しくて、にやつく顔を抑えられなくて。私はにやついた顔のまま教室へと戻った。

「懐かしいのう恭優。あの頃のお主は本当に女見たいに綺麗だったな」
「來優は四人の中で一番負けず嫌いっすから、強くなりますよ」
「……なるほど、な。本当にあの子達には感謝してもしきれない」
「ははっ。ホントっすね」

「そういや飼雲先輩とか葵先輩とかあのムカつく元会長って恭優さんがこの学校に入るように薦めたんすよね？　だったら何で恭優さんはこの学校に通ってないんですか？」

素朴な疑問。本当にふと頭に浮かんだただの疑問だった。その言葉を聞いた瞬間恭優さんから笑みは消え、鋭い目を僅かに細めて更に鋭くしている。対して佳の姉さんはくっくっと愉快そうに含み笑いをした。

「それはな、恭優にはどれだけ私が偉くても庇いきれない要因があったんじゃ」

「……」

無言で佳の姉さんを睨む恭優さん。

何のことかわからない。庇いきれない要因？　一体恭優さんには何があるんだ？

「問題外なんだよ。勉強面が」

「はい？」

「さすがに十点以下の奴を合格させるわけにはいかなかったんじゃ」

「……なんか、ごめんなさい恭優さん」

「うっせぇ殺すぞ」

「佳何処に行くのだ？」
「ボクは佳様と一緒なら例え火の中水の中でも平気です」

佳を挟むように僕と汐姫が隣りを歩く。お互いが佳の隣り。これでフェアなのだ。始業式というだけあって午前中で授業は終わった。來優は修行をするとか言って謝りながら何処かへ行った。透麻は電話に出ないということは恐らく寝ているのだろう。透麻の家に直接迎えに言ってもよかったのだけど……、怒られたばっかだし少しは遠慮したのか佳は今回は行かないことにした。そんなこんなで今佳と汐姫と僕で行動している。予定はしらない。何をするかもわからないし、何処に向かっているのかもわからない。けど、まぁ佳と一緒ならそれだけで楽しいのだ。

僕と正反対の位置にいる汐姫をちらりと見る。汐姫も幸せそうな顔をしている。僕と同じ考えなんだろう。好きな人と一緒にいられるのはそれだけで幸せなのだ。

「ちょっと思い出に浸ろうかなぁと思って」

答えにならない言葉を返す佳。でもだいたいはわかる。思い出っていうくらいだから懐かしい場所なのだろう。そしてこの道筋かぁ……。もしかして。

「……中学校？」
「当たり」

僕達の出身中学校に向ってるらしいのだ。あー、行きたくない。行きたくないのだぁ。恥かしくて行きたくてないのだぁ。

「中学校ですかぁ。懐かしいなぁ」
「うぅー、あの頃はケンカばっかだったのだ」
「それは城道が短気だったんだよ。ね、佳様」
「確かによくキレてたな」
「だって、……中学生ってそんなものなのだよ。暴れたい年頃だったのだ」

恥かしさで顔を少し赤くしながらそっぽを向く。我ながら酷い言い訳だ。でも、八割方あってると思うのだ。中学の時は何かとすぐ腹が立っていたのだ。

「城道は生理痛だったんだよね」
「僕は男なのだ汐姫」

軽くボケる汐姫に突っ込みをいれる。そんな何気ない会話を楽しみながら中学校へと向った。

中学校の近くになるとだんだんと懐かしい制服を着た生徒達とすれ違ってくる。歩いている生徒や自転車に乗っている生徒。おとなしそうな生徒はやんちゃそうな生徒。何人かは僕達のことを尊敬してるのか挨拶をしてきた。まぁどれも髪を金色や茶色に染めたやんちゃな生徒なんだけど。

「懐かしいな」

校門までついた所で佳が学校を見て言う。佳の目には今何が映ってるんだろう。校舎？　下校している生徒？　それとも部活をしている生徒？

「懐かしいのだ」
「懐かしいです」

僕の目にはあの頃の僕達が映ってるのだ。仲良く今と変わらないぐらい楽しそうに笑っている僕達の姿が。放課後教室に残り、お菓子パーティーや、罰ゲームトランプをしている姿。鬼ごっこ、隠れんぼをしてる姿。黒板に落書きをしている姿。授業中に弁当を食べて怒られてる透麻の姿。佳にべったりくっついて先生から注意されてる汐姫の姿。紙ヒコーキを窓から飛している來優の姿。空を見ながら眠たそうにコクコクと首が動いている佳の姿。そのなかで笑っている僕の姿。

色々と思いだすのだ。

校舎内で人間花火をしたこともある。自転車に花火を装着して校舎中を走ったこともある。屋上に侵入して打ち上げ花火をしたこともあるし、ロケット花火を校舎中に向けて火をつけたこともある。他の部活に乱入したこともある。教師、警察、不良を含めた街中鬼ごっこをしたこともある。あれは確か僕が原因だったっけ？　他にも色々な部活と計画して体育祭を乗っ取って全校生徒でお祭騒ぎをしたこともある。あの後何人かは上手く逃げたんだけど逃げられなかった人はこってり先生に怒られていた。他にも数えきれないくらいの思い出が色々ある。僕はその全てを鮮明に覚えているのだ。一つ一つが大切な僕の思い出なのだから。佳はどうなのだ？　皆はどうなのだ？　たぶん、いや、絶対皆も僕と同じなのだ。皆考えることは同じなのだ。僕達が一緒に過ごした大事な、大切な時間なのだから覚えているのは当然なのだ。

「中入ろっか」
「わかりました」
「あやぁ、嫌なのだぁ」

嫌と言っても結局はついて行くしかないんだよなぁ。結構この学校の近くの高校に通ってるからここの中学生は僕達の制服が何処の学校か知っている。だから、高校生が何の用だろう？　という風な目で見られる。う～、嫌な注目を浴びてるのだ。何人かは僕達が誰か気付き目を逸らしたり、好奇の視線で見てくる。でもやっぱりたまに尊敬の視線で見てくる生徒もいて、話しかけてくる生徒もいる。やんちゃな子ばかり何だけど……。

来賓用玄関に適当に靴を置き、スリッパに履き替えた。佳が何処に行きたいのかはわからないけど、佳の進む方向について行く。あー、この方向は……、職員室の方なのだ。職員室の方といえば、あの階には写真が飾られている。この学校はある一つのことを除いたらその辺りにもあるごく普通な学校なのだ。ただその一つっていうのが特別変なのだ。それは――

「”功を立てた者、ここに称する”」

佳がぼそりと懐かしむように言う。この学校の唯一おかしい所を。この学校の唯一気に入っている所を。この学校の唯一人気のある校則を。

『功を立てた者、ここに称する！』

職員室がある二階の廊下。ありとあらゆる写真で姿を隠している壁。その壁の一部に思いっきり大きな文字でそう書かれていた。

何度も言うけどこの学校にはおかしな校則が一つある。それは、今までにないようなことをした人は記念にこの階の壁に写真をはれる。ただし、一つにつき一枚のみ。それがどんなことでも構わない。その写真について知った事実は余程のことじゃないと教師は追求しない。それがこの学校のおかしな校則。

ずらぁっと、片側の壁が全て写真で埋まっていて、もう片側ももう半分まで来ている。どんなことでも初めてだったら、だ。バイクで校舎内を走っている写真、柔道で百人抜きをしてる写真、色々貼ってある。生徒教師関係なく。善悪関係なく。知ってる顔がいれば、全く知らない顔もいる。新しい鮮明な写真もあれば、白黒の写真もある。それだけ色々な人が時代関係なく自分の思い出をこの壁に残して卒業して行っている。もちろん僕達もだ。ただ、僕達の写真は特に多く、今までで一番多く残した。しかも善悪で言うと悪ばかりを。

「お前ら何しに来たんだ。あー、中学生になりに来たのか。ごめんな。お前らしゃムリだ。どこも拒否だ」

むぅ。いきなり職員室から出て来たかと思えばその発言。ちょっと酷いのだ。

縁無し眼鏡をつけて明らかにインテリですよーって感じの見た目若い男教師。一応僕達の頃は学年主任をやっていた。僕に頼みごとをしに来た教師なのだ。インテリぶってるけど実は結構武闘派なのだ。とにかく根気があるし自前の根性論がうっとうしい。まぁでも良い先生なのだ。最後まで僕達を注意し続けるほど生徒と本気で向き合ってるのだ。だから何だかんだいって生徒から嫌われてはいないと思う。

「ああ、そうだ。あの時はありがとう」
「尾西先生久し振りー」
「おう蒼空、久し振り。元気してたか」
「元気だよ」

尾西に片手を上げて挨拶する汐姫。佳は尾西のこと何かどうでもよさそうに写真を見ている。汐姫との挨拶を済ました尾西が佳を見

る。人指し指で眼鏡の位置を整えたあと佳の肩に触れた。

「久し振りだな倉本。スカート、着れるようになったんだな」

「セクハラで訴えるよ」

肩にかかっている手を邪魔そうにどける佳。尾西は笑いながら、悪かったと弁明した。むぅ、尾西の奴め、佳にセクハラしたな。

「まぁ、何でもいいけどお前ら校内で花火はするなよ」

「しないのだ！」

ぱしんと僕達の肩を叩いて何処かに行った。

「花火ねぇ」

佳が去って行く尾西の背中を見ながらにやりと笑う。玩具を与えられた子供のような笑みだ。

「佳、まさか」

「ん、冗談だよ。持ってきてない」

よかったぁと胸を撫で下ろす。さすがに今そんなことをしたら怒られる程度じゃすまないと思うのだ。警察を呼ばれる気がする。

ブォン！

写真を一枚一枚見ていたらそんな音が聞こえた。エンジン音だ。別に不思議なことじゃない。僕もバイクで職員室にお邪魔したことはある。だからそのバイクがこっちに走って来てても気にしない。

「ひゃっほー」
「わっ」

……気にしないつもりだったんだけどなぁ。バイクに乗ってる奴が佳と汐姫にすれ違う瞬間手でスカートを一瞬掴んだ。小学生みたいなことをする。二人のスカートが捲り上がり一瞬だけ普段は隠されている領域が姿を現した。瞬きをしたら見落とすくらい速さ。だけど僕は瞬きをしなかった。完全に予想外の出来事だったからバッチリと見てしまった。汐姫のも、もちろん佳のも。そして、タイミングが良いのか悪いのかバイクに乗ってる奴もしっかりと見ていた。まぁ自分から捲ったのだから見ないわけはないか。だけど残念なのだ。本当にタイミングが良いのか悪いのかわからない。佳と汐姫の下着が見えたのはタイミングが良いのだろう。だけどそのせいで僕にラリアットを食らうことになる。そう考えると悪かったんだろう。

バイクが横を通りすぎる瞬間に腕を胸の所に叩き付けた。

「あぶはっ」

変てこな声を上げる男。男をその場に残しバイクが一人廊下を走り、壁にぶつかって倒れた。

「いってぇなテメェ！」
「うるさいのだ」

ゴホゴホと苦しそうに咳をする男の腹を一回だけ蹴る。あとは放っておく。そうすれば騒ぎを聞き付けた尾西が男を叱るだろう。それで終わりなのだ。

「じゃあもう行こっか佳」
「んー、そうだな帰るか」

「佳様、ボクあの男を殴りたいです」
「城道がやったからもういいだろ」

納得がいかないような顔をしながらも佳に従う汐姫。佳が手を差し延べるとふて腐れていた顔が嘘のように明るくなった。

「あ、そうだ城道」
「なんなのだ？」
「……見た？」
「何をなのだ」
「いや、見てないんならいい」
「変な佳なのだ」

白と水色……。どっちが白でどっちが水色かは伏せておくのだ。

『キーンコーンカーンコーン……』

帰りのホームルームの終わりを知らせるチャイムがスピーカーから流れる。そのチャイムに従い担任が生徒に帰りの挨拶をし、それを生徒が復唱して終わる。

「んー、終わったのだぁ」

間延びな声を上げ両手を前に突き出した。長かった学校の授業が今全て終わり、あとは帰るか部活をするだけなのだ。佳の方を見る。帰り支度を始めているからどうやら今日は帰るみたいなのだ。それか他の場所で部活をするか。僕としては二人っきりでデートがしたいんだけど、佳が困るからそういうのは止めておくのだ。

「バイバイ城道くん」
「じゃあな柳生」
「さよならなのだ」

早く帰り支度を終えた人達が帰るさいに僕に声をかける。それを笑顔で返す。高校に入って夏休み入る前のあたりから挨拶をされるようになった。前々から少しずつはされていたんだけどこんな自然な感じじゃなくてもっと怯えたような感じだった。不思議なのだ。あの僕がまさか挨拶されるとは。中学生の時なんか入学二日目でもう佳達以外の生徒からは挨拶なんかされなくなった。一週間も経てば殆どの教師がご機嫌をとるようになった。余計なことは言わず、

ただ頷けばいい。褒めればいい。教師からはそういう扱いをうけ、生徒からは見向きもされなかった。一部やんちゃな生徒や先輩がそんな僕を疎ましく思ったのか何度か襲ってきた。それも当然のように数倍返しであしらったら今度は噂を聞きつけた他の学校の生徒が。次はその生徒の先輩が。高校生が……。そんな感じでどんどん僕に喧嘩を売ってくる奴が増えて、気づいたら僕に話しかけるのは佳達か喧嘩相手ぐらいしかいなくなっていた。そんな僕がまさか挨拶を交わせるようになるとは。世も末なのだ。

くすりと笑う。顔が自然とにやける。嬉しいのだ。何だかんだ言って僕も少し変わったのだ。かなりいい方に。

「何にやけてんだ？」

「わっ！」

不意にかけられた声にたいし、僕は必死でにやける顔を抑えた。

……全く。

「今ちょっとだけ嬉しい気分だったのに、台無しなのだ透麻」

「俺のせいなのかそれは」

「透麻が声をかけなければもう少し良い気分に浸れたのだ」

「ふーん。じゃあ俺達先に帰ってるから城道はもう少しだけ良い気分に浸って帰れば。せっかく佳の準備が終わったことに気づいてない城道に声かけてやったのに」

「嘘っ、嘘なのだよ透麻っ。さっきのは嘘なのだ。ありがとうなのだ」

うー、透麻に少し悪いことしたのだ。

「まぁいいさ。で、何でにやついてたんだ」

凄く知りたそうに顔を寄せる透麻。

「それは……教えないのだ」

挨拶されたのが少し嬉しかったなんて恥ずかしくて言えないのだ。

「そ、そんなことより早く帰るのだ」

早足でドアの所にいる佳のもとまで行く。後ろから透麻が納得のいかないような顔をしながらついてきた。

「今日も來優は修行？」

「そうみたいなのだ。終わった瞬間走ってったのだ」

「そっか……」

寂しそうに佳が呟く。それに慌てて両手をばたつかせながら僕は話しをそらした。佳に少しでもそんな顔をさせたくはないのだ。

「今日はどうするのだ」

「んーと、ごめん今日は恭兄ぃと約束してるんだ。だから別れるまでは一緒に皆で帰りたかったんだけど……」

「はぁ、何やってんだかバカ來優は」

透麻が溜め息を吐き、頭を横に降る。むぅ、僕も残念なのだ。やっぱり佳は皆が揃ってた方が嬉しいのかな。それはそうか。そんなことは当たり前なのだ。五人揃っての僕達なのだ。

「まぁ少しの我慢なのだ佳」

「そうですよ。修行が終わったらまた皆で遊べますよ。それに來優がもっともっと強くなってますよ佳様」

「そう、だな」

んー、何か引っかかるのだ。何だろう。何か、何かが確かに引っかかる。頭の隅の隅で何かが引っかかる。

ガリガリガリ

ガリガリガリ、ガリ、ガリガリガ、リガリガリガリガリ……ガリガリ、……ガリガ、リ……、ガリ、……。

『まるで、麻薬だな。お前らの関係は麻薬そのものだ』

……ガリガリガリガリ

ぐにまた鳴り響く。今でもホラ、気づいてないだけで鳴っている。
ずっと、ずっと、今までもこの先もずっと。気づいてくれる日まで
ずっと……。

ガリ――。

心配されるのは嬉しい　佳

「はぁ、はぁ……」

待ち合わせの場所へと全力疾走をしている。城道達と別れてから時間があまりないことに気づき今みたいに走ったんだけど……。くそっ。あんな所にネコがいなかったら間に合っていたのに。腕に抱えているネコをちらりと見ながらそんなことを思う。ネコは激しい揺れに体をすくめ腕の中で丸くなっている。くそ、可愛いなぁ。待ち合わせ場所の時計塔が遠目だけど見えてきた。走りながら目を細め時間を確認する。

……ゴクリ。

ヤバい、ヤバいヤバいヤバい！　もう一分も過ぎてる。ただでさえ人を待たせるのは嫌いなのに、今待たせているのはあの恭兄ぃだ。うー、お前のせいだぞこら。体を丸めているネコを睨むけど、可愛さ故に目元が緩む。可愛いは卑怯だな。

（そもそもあんな所に捨てた奴が悪いのか）

まぁ人には人の都合があるからな。どうしようもない理由であそこに捨てたのかも知れない。けど、

「お前も都合で振り回されて最悪だったな」

ぼそりとそう呟くとネコは嫌そうに体を少し震わせた。

「飼い主の悪口を言うなってか」

良い飼い主だったのかな。

時計塔を囲むように周囲三メートル近くに全く人がいない。普段では有り得ない光景。その光景を作り出している主が時計塔にもたれかかっている。三メートル範囲に一歩足を踏み入れる。

ぞくっ。

あ、恭兄ぃやっぱりちょっと怒ってるな。

「恭兄ぃ、お待たせ」

「ああ゛？」

ゆっくりと俺の方へ振り向く恭兄ぃ。三メートル離れている人達が一斉に俺を見た。危ない、離れろ。そんな念を込められた視線がひしひしと刺さる。皆俺達が兄妹みたいな関係ってことを知ったらびっくりするだろうな。そんなどうでもいいことを考えてたら頭に鈍い痛みが走った。

「いだっ」

「おせー。まぁ三分だけの遅刻だからこんくらいにしてやる」

「ごめん、ありがと」

「で、そいつは？」

揺れが収まったからかひょこっと抱えてる腕のから顔を覗かせているネコ。それを見ながら恭兄ぃは言った。本能で危険を察知したのか恭兄ぃに見られた瞬間また体を丸めた。

「大丈夫だよ、こうみえて優しいから」

もう怒ってないのかいつもみたいに優しい表情になってる恭兄ぃ。人何か殴りそうな人には見えない。この顔が怒った時には眉間に皺が寄って、激しい時は額に血管すら浮く。まぁ、そこまで恭兄ぃを怒らせることが出来るのは葵か余程の命知らずぐらいだけなんだけど。

怒ってない恭兄ぃを怖がるとは。さすが動物。人間は怒ってる恭兄ぃを見て初めて怖がる。一生忘れられないくらいの恐怖を抱く。

「捨てられてたから、拾った」
「拾ったってお前、飼えるのか？」
「……だって、こいつも人の都合に振り回されて、俺と同じだったから」
「……ちっ。仕方ねぇな。俺が紗弥姉さんに頼んでみるよ」
「ありがとう恭兄ぃ！」

震えているネコの背中を撫でる。気持ちよさそうににゃー、と鳴いた。

「良かったなお前」
「じゃあ行くか。猫はバックに入れとけよ。さすがに店に入れないだろ」
「仕方ないか。少し我慢して」

背にかけていたスクールバックの中にネコを入れる。結構存外な扱いだなとわかってはいるけどこうするしかないんだよな。我慢してくれ。

「あー、そうだ用事って何なんだ？」

「あれ？　俺言ってなかったっけ？」
「ああ。デパートに行くとしか聞いてないぞ」
「そっか」
んー、別に言うほどのことじゃないんだけどなぁ。城道達にも言ってないし。でも、まぁ付き合って貰うんだから言った方がいいのかな。

「実は干してた下着無くなっちゃってさ」
「は？」
「元々三着しかなかったんだけど二着になっちゃって、さすがに二着じゃヤバいなぁって思ってたら前に心咲姉ぇにもっと買え見たいなこと言われたの思い出してさ買おうかなぁと」
「無くなったってどういうことだ？」
「うーん、もう女って言ったし別にいいやと思って外に干してたら無くなってたんだ」
「……盗られたってことか？」
「盗られたの、かな？　でも大丈夫だよ。残り一着はしまってたからそれ履いたし」
「そういうことじゃねぇだろ」

ぞっとした恐怖が辺りを包んだ。恭兄ぃの方を恐々と見てみたら眉間に皺が寄っていた。
あ、恭兄ぃには言わない方がよかったかも……。

「下着ドロブチ殺す」
「いや、でも俺は別に気にしてないからさ恭兄ぃ。たかが下着何だから」
「佳、お前もっと自覚持てって」
「え？」

意味がわからない。何で今そんな話になるんだ。それに何の自覚を持てって言うんだろ。

「下着盗られたら腹をたてろ。周りからみたらお前は普通の女なんだ。これから痴漢とかストーカーとかにあうかもしれねぇ。現に下着盗られてるしな。そういう目にあう度に誰かを頼れ。気にしないで終わっちゃあいけねぇんだ。わかったか？」

「恭兄ぃ、もしかして心配してくれてるの？」

「ったりめぇだろが！　バカかお前は。妹に危害があって心配しねぇわけねぇだろ」

……そっか。心配してくれてるんだ。下着盗られただけなのに……。

「あはは」

「ああ、何笑ってんだよ？」

「やっぱり恭兄ぃは優しいお兄ちゃんだなぁって思って」

何か嬉しいな。

「あ、それと困った時には柳生達にも言ってやれよ。言ってやらないとあいつら泣くぞ」

「な、泣くの？　それはやだな」

んー、言うべきなのかぁ。

「わかった。言ってみる」

「おう」

「ありがと恭兄ぃ」

心配されるのは嬉しい　佳（後書き）

一週間程更新を休みます。
一週間後にまた読んでやって下さい。

捕獲大作戦　佳

「つーわけで、テメェら死ぬ気で死守しろよ」
「はい！」

恭兄ぃのその言葉に俺以外の皆の声が重なる。時刻は夜九時を少し過ぎたあたり。俺の家に皆が集まり綿密に話し合った結果ある事が決まった。

「じゃあ、佳下着ドロ確保作戦開始だ」

恭兄ぃが恥じらいなくそのダサい作戦名を言う。これが綿密な話し合いで決定となったことだ。買い物の帰り恭兄ぃに言われた通り城道達に下着を盗られたことをメールで知らせたら心配してくれて家に集まってくれた。そして何故か下着ドロを捕まえる話しになって、さっきまでその作戦を話し合ってたんだけど……。

「佳、安心しろよ俺達が下着ドロを捕まえてやるから」
「そうなのだ。任せるのだ」
「ボク以外で佳様の下着を盗むなんて、許せない」
「下着ドロの奴絶対捕まえてやる！」

透麻、城道、汐姫、來優がベッドの端に座っている俺を見ながら安心させるようにそう言った。

「俺の妹の下着に手ぇだすとはな、死んでも文句言えねぇよなぁ」

最後の恭兄ぃの言葉で更にやる気をだす皆。ありがたいよ。嬉しいし、頼もしいし、ありがたいけどさ……。

かぶっている布団を更に深くかぶり顔を覆い隠す。俺が布団をかぶってベッドの端に座っているのは下着ドロが怖いせいじゃない。その答えはベランダにある。

ちらりと布団の隙間からベランダを見てみる。そこには風に吹かれゆらゆらと揺られている白い一枚の下着が。それも、下の方……。

「にしても我ながら良い作戦だな。透麻以外と頭良いな」

「ありがとうございます」

「っどこが!?　どこが良い作戦?」

「何がダメなんだよ。別にいいだろまだ履いてない今日買ったばかりの新品なんだから」

恭兄ぃ、全然よくないよ。確かに履いてないけどさ……、これから履くじゃん。

「それにしても佳様可愛い下着ですね。小さな赤いリボンが可愛いです」

やめてくれ、余計恥ずかしくなってくる。

「にしても、こねぇなぁ」

「恭優さん、まだ始めて十分も経ってないっす」

透麻のその言葉に軽い絶望感が現れた。まだ十分?　もう一時間くらい経っているのかと思った。それくらい恥ずかしい。さっきからずっと顔が熱い。

「んー、やっぱり二着の方が良いよな。ってことで脱げ來優」

ドスっ！

「死ねバカ」

踵落としをくらって倒れた透麻に辛辣なことばを投げかける來優。
透麻下着ドロとの戦いの前に戦線離脱。

「今のは透麻が悪いのだ」
「うん。女の子に向かって今のは最低」
「あー、でも透麻の言うことにも一理あるかもな」
「え、何してるの恭兄ぃ」

急にタンスをいじり始める恭兄ぃ。

「ちょっと待って！　そこにはっ」

恭兄ぃの行動を止める為にベッドから飛び出た。タンスに手を突っ込んでる恭兄ぃの所へ駆ける。

「うわっ」

一心不乱だった為に足元が疎かになっていた。透麻の死体に躓き、恭兄ぃの背中へと倒れた。

「ちょっ危ねぇ佳」

恭兄ぃがタンスから手を引っこ抜いて倒れてくる俺を支えてくれた。と、同時にタンスから出てきた薄ピンク色の”何か”が宙を舞った。恐ろしくゆっくりに見えたそれは何も気づいていない城道の

頭の上にやんわりと着地する。

「ん、なんなのだ？」

「あ……ぁあ、城道見るなぁ」

「え？」

ブッ！

遅かった。城道が謎の出血多量につき戦線離脱。城道が手にとったそれは少し皺がある、正真正銘昨日履いていた下着だ……。

「ぅー……、恭兄ぃのバカっ！　もう恥ずかしすぎて、死ぬ」

城道の手から少し鼻血がついた下着を取り、ふらふらとベッドに戻る。最初と同じように布団にうずくまり、閉ざす。ホントに、死にたい。

「あー、何だ悪かったな佳」

「うるさい。恭兄ぃ何かもう知らない」

シーンとした空気が場を包む。何かもうヤダ。早くこの作戦終わらないかな。

「あ、あのさ……、汐姫がさっき頭打って倒れてたんだけど」

來優が倒れている汐姫を指差した。

「飛んでる佳の下着を取ろうとして透麻に躓いて頭打ってた」

満面の笑みで倒れているから心配しなくて大丈夫だろう。バカな

理由で頭部強打につき汐姫戦線離脱。残るは恭兄ぃと來優と俺だけ。

ピリリリ！

電子音が鳴り響く。誰のだろう。そう思っていると恭兄ぃが自分のポケットに手を突っ込んだ。音が少し大きく聞こえてくる。ポケットから取り出した携帯を開き、通話ボタンを押した。

「今忙しいんすけど」

開口一番にそう言うと、恭兄ぃは片手を顔の前に持っていき悪いな、と一言言って外に出た。

恭兄ぃ電話にて戦線離脱。残り來優と俺。

「あはは。相変わらず自由な人だな」

來優が恭兄ぃが出ていったときに開けっ放しにしているドアを閉めながら言った。本人の前じゃ恐らく言えないだろう。

部屋に來優と二人っきりになる。実際は城道とかいるんだけど、意識ないしいないのと同じだ。

「……なぁ佳」

「ん、なに」

來優が声をだす。それはどこか重々しく、絞り出したかのような声だった。

「佳って……、」

「ん？」

「……何でもない」

震えていた？　微かに、本当に微かにだけど声が震えていた。結局來優が続きを喋ることはなかった。來優は何を伝えたかったんだろう。俺のことか？　自分のことか？　それとも皆のことか？　気まずい沈黙がお互いの間に流れる。

「……今さ、修行してるんだ」

來優がにっこりと笑って俺を見た。

「私強くなるから、佳よりも城道よりも」

「うん」

楽しそうに喋る來優。そして一つ間を起き來優が笑顔をやめた。真剣な表情になって、言葉を紡ぐ。一つ一つ大事に、俺に届くように。

「だからさ、何か困ったことが……不幸になりそうだったらいつでも私に言えよ」

曇りなき瞳で俺を見る來優。何を突然変なことを。そう思うこともできた。けど、その言葉の意味に心当たりがあって、その心当たりを來優が知るわけなくて、また俺は笑顔をつくる。無難な、誰一人傷つかない偽りの笑顔を。

「うん」

誰一人傷つかないと思い込んでいるだけの笑顔を。

（佳、やっぱり……）

ガタっと不意にベランダの方から物音が聞こえてくる。いち早く反応したのはいつの間にか覚醒していた汐姫だった。ベランダの方へ走り窓を開けた。黒い人影がびっくりしたのか暗闇の中で揺らいだ。次に反応したのが城道だ。自分の財布を即座にその影目掛けて投げた。急な痛みに怯む影。その隙を見逃さず、透麻と來優が影に飛びついた。汐姫が透麻と來優に捕まって身動き出来ない影をどこに隠していたのかいつの間にか持っていた縄で手を縛った。そして捕獲作戦が終わったあとにのうのうと部屋に入って来た恭兄ぃ。捕まっている下着ドロの男を見ると嬉しそうに口角を釣り上げた。眉間に皺、そしてドスの利いた声で恭兄ぃが下着ドロに向かって喋る。嬉しそうに、ずっと楽しみに待っていたかのように。

「これでメンツが揃ったなぁ。さて、どう落とし前つけてもらおうかぁ〜」

多分、いや絶対にもうこの男は下着は盗らないだろうな。そうだな、あとは下着ドロのご武運を祈るだけか。

”下着ドロ捕獲（殲滅）作戦――完了”

閑話ってなんだ？　恭優（前書き）

閑話になります。あまり本編には関係ないけど恭優と葵、それと二人の大事な人のことです。

閑話ってなんだ？　恭優

最初に異変に気付いたのは七歳の頃だった。小学校一年生の頃、カッとなって同級生の男の子を殴ったらそいつの骨が折れて病院にいった。母親が何回も頭を下げていたのを覚えてる。その時はまだ俺は他の人より力があるんだなという浅い認識で済んだ。この力が明らかに異常であることに気付いたのは次の年の頃だ。友達が六年生にいじめられその仕返しに行った時。俺の倍はあるだろうと思う体重の奴を首を絞めて投げ飛ばした時。怒りで我を忘れて無我夢中だったからあまり覚えてないけど、次の日体中が動かせない程の激しい痛みに襲われたのを覚えている。そしてこれがきっかけで親に捨てられた。許せなかった。けど仕方ないと割り切った。俺は異常なのだと。そういえば生まれつき他の人と髪の色も目の色も肌の色も違った。髪は真っ白で、目は赤みを帯びていて、肌は他の人より白い。極めつけは有り得ない程異常なこの力。幼いながらに俺は理解した。自分は異常で捨てられるのは仕方ないこと、嫌われるのは必然なことだと。

預けられた施設は俺見たいな親に捨てられた子供が沢山いた。俺のように途中で捨てられた奴や、物心つくまえから捨てられた奴。親の顔を覚えていない奴も少なくはなかった。同じ境遇からか俺はすんなりと受け入れられた。一見皆仲良さそうに見えるが一人だけは違った。他の子供と一人だけ距離を置き、何をするでもなく、ただずっと空を見上げてる奴が一人いた。他の子供もそいつには決して近づかなかったしそいつも近づこうとしなかった。いじめられているんだ、ほっとこう。そう思いながらも何故かそいつのことが気になる。見てると腹がたつ。

施設に入って一年がたつ。未だに例のそいつとは挨拶すら交わし

たことはない。そいつが喋ってるいるのを見たこともないし、声を聞いたこともなかった。ただ日々小さなイライラが募っていくだけだった。俺のこの異常が皆に見られたらきっと皆離れていく。俺もこいつみたいに孤立する。別に孤立するのが怖いんじゃない。否定されるのが怖いんじゃない。孤立や否定にはもう慣れた。ただ、こいつみたいになるのが嫌だった。だから、このイライラを皆の見えない所で発散していた。施設のすぐ近くにある使われていない廃墟の壁相手に発散していた。最初は自分の拳が痛いだけだった。けどやっていく度に拳は堅くなり、痛みは慣れたのか麻痺しだし、壁がしだいに悲鳴を上げるようになっていた。

そんな日々を繰り返していたある日、何を思ったのかそいつから俺に話しかけて来た。

「ねぇ……」

いらいらいらいら。

イライラが募って行く。

「恭優くんてさぁ」

いらいらいらいらいらいらいらいらいらいら。

そいつは無表情のまま淡々とただ言葉繋げた。

「ホントは女の子ぉ？」

いらいらいらいらいらいらいらいらいらい

「はあ？」

いらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいら。

これ以上こいつと話してたらぶちキレそうだ。大人しくこいつから離れることにし背を向けて歩き始める。けど、そいつの次の言葉が俺の足を凍らせた。

「なら……化け物？」

振り向くとにやりと笑っているそいつの姿が見えた。気に入らない。その何もかも見通したかのような態度、目、そいつの全てが気に入らない。

いらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいらいら。

「あー、やっぱり化物なんだぁ。じゃないと壁相手にあんなこと出来ないよねぇ」

……ブチっ！

あー、もうダメだ。俺もこいつみたいに何もない日が続くようになるのか。だからせめてこいつだけは潰す。

「おらぁあああ！」

キレた。無我夢中で殴りかかる。こうなったらもうダメだ。こいつは確実に病院送りだろう。今までの奴らみたいに。確実に何一つ疑問を抱かず俺はそう思っていた。

「ははっ」

笑い声？　誰のだ？　俺のじゃない。じゃあ一体……。

「当たらないよぉ」

誰の笑い声かわかった。笑い声の主は軽々と俺の攻撃を交わし後ろに回り込んだ。生意気だ。交わされた驚きよりも苛立ちの方が勝っていてまた殴りかかる。

騒ぎを聞きつけた施設の大人達が俺を止めるまでずっと俺はそいつに殴りかかっていた。全部よけられたけど。

これが原因で俺は一人になった。

「恭優くんさぁ、そこどいてくれない？」

と思ったら違った。二人だった。

「うるせえ」

「そこの窓僕のお気に入りなんだけどぉ」

「……ちっ」

仕方ないから隣の窓に移るか。

ただ俺達は何をするでもなく窓から空を眺めるだけ。楽しいか楽しくないかで言うと圧倒的に楽しくない。けど、暇じゃない。こいつが空を見ていた理由が今なら少しだけわかる。そういや何でこいつは今まで一人だったんだ。

「親がね、最悪だったんだ」

「は？」

「何で僕がずっと一人だったか気になってたでしょ？」

「……何でわかったんだよ」
「恭優くんはわかりやすいからなぁ」
あー腹立つ。明らかに不機嫌になる俺を見てくすりとそいつは笑った。
「まぁここじゃ珍しくもないんだけど、僕虐待されてたんだぁ」
何でそういうことを悲しげもなくつらつらと言えるんだ。
「虐待されてた。それだけじゃ一人にはならねぇだろ」
「ふふ。そうだよぉ。それだけじゃ一人にはならないよぉ」
「……お前といると腹がたつ」
「酷いなぁ。まぁ僕も同じだからいいや」
相手も同じことを思っていたのか。
「躓いてこけちゃって親の足を刺しちゃったんだぁ」
「刺した？」
「包丁でねぇ。それで捨てられてここに来たってわけ。人を刺した奴がきたらそいつには近づかないでしょ」
刺したっつっても事故だろ。そう言おうとして言葉が詰まった。つり上がった口元。今思えば少しだけ、いや多分かなり嬉しそうにそのことを喋っていた気がする。今のこいつの顔を見ればそれは明白だろう。本当に事故なのか。その疑問が頭の中で生まれた。
「くすっ」
愉快そうに笑うそいつ。

「事故だよぉ。ちょっと包丁持って料理しようと思ったらコケちゃったんだよ。運悪く親の方へ。まぁ親の運が良かったのか刺さったのは足だったけどね」

何となくわかった。こいつはわざと刺したんだ。でもどこかしっくり来ない。本当にただ自分の為だけに刺したのか。何か知らないけど、こいつは違う気がする。

「……お前名前は」
「あれぇ？　言ってなかったっけぇ」
「本当に腹立つな。その喋り方やめろ」
「僕の名前は」

無視か。おい無視かこら。

「葵」

これが俺と葵の今思い出しても腹立つ出会いだった。

何て言うんだ？　生理的にムリ？　恭優

ひゅーっと風が白い髪を撫でる。もう枯れて来ている葉が風に舞い地面に降り落ちる。見上げれば空は綺麗な青色をしていて雲一つない。その空を気持ち良さそうに名前も知らない鳥が一羽自由そうに飛んでいる。視線を前に戻す。目の前の墓に掘られた文字を目で辿る。既に誰か来たのか花束が一つ墓の前におかれていた。

「……由美さん、また秋がくるよ」

先週と比べると遥かに肌寒くなった。今年の秋は訪れるのが早い。つい何週間か前に佳達の夏休みが終わったばかりだ。

今年も肌寒い秋がくる。去年も、来年もこれから先もずっと……、アンタのいない秋が。

自分を責めたこともあった。死ぬほど後悔して、死ぬほど歯を食いしばって、死ぬほど泣いた。

「もう、五年もたったんだぞ。ほら、去年よりも背高くなっただろ？　髪も少し伸ばしてんだ。もうどこから見ても男だろ。女なんて二度と言わせねぇぞ」

静かだ。俺の声、風の声、葉が揺れる音、それしか聞こえない。こんなに静かなのはちょっと苦手だな。しかも由美さん、アンタの前だしな。

「葵は何時も通り何も変わってない。背も俺よりは低いし、見透かしたような目も昔のまんまだ。言葉使いも何一つ成長してないよ、ガキの頃から何も変わってねぇ」

『ふふふ。そうだね』

聞こえる筈もない声が聞こえる。あの人の笑い声が、あの人の笑っている顔が、姿が、霞んでぼやけた視界に映る。赤い目から透明な雫が零れて、手に持っている花束へと零れ落ちた。

「由美さん……ごめん」

施設で十一歳の誕生日を迎えた。

居場所がなかった。施設の人達は皆俺達を腫れ物のように扱っていた。そんな環境の中で自分達の居場所があるわけもなく、ただ俺は葵の隣で空を見上げるだけだった。

飛びたい。この空を。そうしたらどれだけ気持ちいいんだろう。空が自分の居場所っていうのはどれだけ気持ちいいことなんだろう。別にそんな大層な居場所が欲しいわけじゃない。何でもいい、何でもいいから居場所が欲しい。葵も同じ気持ちだろう。

今日も同じように葵の隣で空を見ていた。そうしたらふと思う。葵はいつからこれを見続けているんだろう。いつから居場所を求めているんだろう。少なくとも俺が施設にやって来た時にはもう見ていた。ていうことは少なくても三年以上は見続けているってことだ。

「三歳の頃に虐待されているのに気づいたんだぁ。それまで殴られ

る蹴られるご飯が無いのは普通だと思っていた」
「っ！？　テメェまた勝手に人の考えを」
「あはは、わかりやすすぎるんだよ恭優くんはぁ。それで四歳の頃に捨てられたんだ」
「ふーん」
「実はねぇ、二個下に妹がいるんだ。同じく虐待されてたんだけどねぇ。まぁ妹はそんなに酷い虐待はされてなかったからぁ一緒に捨てられた時すぐにいい人がやって来て幸せにするって条件で預けたんだよぉ……」

それだけ言って葵の顔が曇る。

「まぁ、事故でひきとった人と一緒に死んだらしいけどね」
「……悪かった」
「あはは、謝る必要はないよぉ。そうだねぇ、土下座するくらいでいいよ」
「ぶっ殺す！」

隣りにいる葵の顔目掛けて横から蹴る。しゃがんであっさり交わされた。

「避けんな！」
「あはは、何言ってるのぉ？　避けないと当たるじゃん」
「当たれっつってんだよ」
「当ててみればぁ」

クソ野郎がッ！

「先生っまた恭優くんと葵くんがケンカしてる！」
「こらっ、やめなさい！」

周りの奴らがざわめき始める。けど声をかけるだけで直接止めようとはしない。子供も、大人すらも関わりたくないといった感じで遠くの方から声をかけるだけだ。

……胸クソわりぃ。

「ケーンーカー」

ピタリと驚きのあまり手がとまる。なんだ？　間延びした声が聞こえた。いや、それに驚いたんじゃない。その声がかなり近くから聞こえたことに驚いたんだ。見れば葵も驚いている。同じように動きが止まってる。

「両成敗！　ていっ」

ゴンっ！

頭に痛みが走る。痛くない痛み、けど痛い痛み。ダメだ、おかしい。おかしいぞ俺。痛くないけど痛いっておかしいぞ。もう完全に混乱している。何がなんだか訳がわからない。葵すら訳がわからなくて俺と同様に俺達の頭を殴った奴を見ている。

「いったぁ。何、アンタら頭が石で出来てんの!?」

肩にかかるかかからないかの短い髪をした女は殴った両手を涙目で見ながら俺達に文句を言った。何がなんだかわからない。呆気に取られている俺達を見てその女はニヤリと笑ったあと、俺と葵をぐいっと自分の所に引く寄せた。

「決めた。私この子達をひきとる」

……。

「は？」

珍しく俺と葵の声が重なった。

「にひひ」

嫌な声を上げて女は笑った。

「私の名前は桐生由美。ぴっちぴちの二十三歳よ」

両手を腰に置きにやりと笑って自分の自己紹介をするそいつ。連れ帰ると言って数十分くらい施設の大人と話をしてそいつは俺と葵の前にもう一度現れた。ふてぶてしい程の満面の笑みで。

強制的に手を握られどこかに向かっている中思い出したかのようにさっきの自己紹介をした。

「ほら、キミ達の名前は」

名前か。多分、これから少しの間お世話になるんだろう。なら言わないとダメなんだろうな。そう思い名前を言おうと口を開いた。

「恭優くんと葵くんでしょー」

……知ってんなら聞くな。

「恭優くんは友達思いの力持ち。葵くんは人より冷静な判断が出来る勇敢な子。私こんな子が欲しかったんだぁ！」

ぎゅぅっと握っている手に力が込められた。女の人の力だから痛くはない。多分本気じゃないだろうし。それより、その手が俺達を離さないと言ってる感じだった。

俺と葵の異常をそんな風に捉える人がいるんだ。友達思いの力持ちか。言われたこと無いな。ちょっと恥ずかしいけど、でも化物何

かよりはずっといい。葵も同じことを思ってる筈だ。

「私のことはお母さん、ママ、ママミー、お姉さん、お姉さま、由美さん、好きなように呼んでね。私のオススメはママかな？」

明らかに一人だけテンションが違う三人を周りの人がおかしそうに見る。それを全く気にしないでテンションを更に上げ続けている女の人。

「由美さん」
「えっ、私のオススメは無視！？」
「今どこに向かってるんすか？」
「決まってるじゃん！　私達のお家だよ。ほら、もう見えてるよ。あそこあそこ」

指差した先には少しボロいアパートが建っていた。

「あそこが私達のお城だよ～」

何かもうこの人のテンション嫌だ。葵を見るとさっそく葵もげんなりしていた。

「ふっふっふ。キミ達の考えてることは手に取るようにわかってるのだ！　住めば都と言うでしょー、ああ見えてかなり住み心地いいんだからね」

少し早足になってアパートの前までつく。カンカンと歩いたら音がなる階段を上り、一番奥の角部屋についた。

「さぁ二人共心の準備はできてる？」

どんな準備がいるんだとツッコミたいけどそこは無視しとく。俺達から手を離し鍵を探す由美さん。

「あれ？　鍵がない。まぁいっか」

何がいいんだろう。鍵の代わりに由美さんがポケットから取り出したのは二本の針金。それを鍵穴にいれて……って何してんだ！？

「あいたあいたぁ」

そう言いドアノブを捻り開ける。そしてもう一度俺達の手を握った。

「桐生恭優くん、桐生葵くん。ここがキミ達の家だよ。ただいまって一緒に言おうか」

そう言いドアを通り、玄関にはいる。

「せーので言うよ。せーの、ただいまぁ」

言うわけないだろ。

「……せーの、ただいま」

はっ、言うまで繰り返し！？

「せーの、ただいま」

「ただいま」

「……ただいま」

「よしっ良い子良い子」

俺と葵の頭をぐしゃぐしゃっと撫でる。いやかき混ぜる感じだな。

「じゃあ入ろっか」

にっこり微笑んで言う由美さん。

何だ。何だこの感じ。嬉しい。ただ純粋に嬉しかった。引き取ってくれたことも手を握ってくれたこともそうだし何より居場所をくれた。名前をくれた。

桐生恭優……。名字はなかった。居場所もなかった。笑いかけてくれる人もいなかった。俺の無かったもの、欲しかったもの全てをくれた人。葵も嬉しい筈だ。俺と同じものを俺よりずっと前から求めていたんだから。

「ん、何してんのぉ？　早くおいで一緒にご飯つくろうよー」

由美さんはこんな性格だ。明るくて、陽気、で一緒にいると楽しくて、安心して、嬉しい。俺達が由美さんを母親と慕うのも時間はそんなにかからなかった。葵は何となく警戒してたけど、一週間もしたらすっかり慕っていた。

理想の家族。それを俺達は手に入れた。

桐生家　恭優

由美さんとの生活も二年がたち俺達は中学生になった。ホントに毎日が楽しくて何一つ不満はなかった。ただ、少し問題が一つ。別に不満なわけじゃねぇけど、葵とはしょっちゅうケンカしてる。家だったら由美さんが家事を放棄して笑いながら頑張れって応援して来るからお互い途中で止めて由美さんに早く飯を作るように言うか、三人で作るんだけど、外だったらそうはならない。由美さんがいるんなら別だけど。

「恭優くんさぁ……、学校では俺の前に来るなって何度言えばわかってくれるのさ？」

「ああ？　その言葉そっくりそのまま返してやるよ」

入学式から二ヶ月、既に俺達は周りから嫌な意味で注目されていた。不良達からは何故か目の敵にされ、教師やその他生徒からは距離を置かれている。あまりの仲の悪さから同じクラスだったのに違うクラスにされる程だ。それでも休み時間なんかにすれ違うからケンカは絶えなかった。ケンカが始まると生徒は全退避。教師は若い男の、それも体育会系の奴らが数人で止めにはいる。

「ウォラァアア！　今日こそ死ねや桐生！」

他にも今みたいなアホな不良共が割って入ってくるんだけど……。

「うぜぇなぁ」

ガシッと割って入って来た男二人の内一人の首を締め上げる。

「邪魔ぁすんじゃねぇよ！」

そのまま止めに来た体育会系の教師に投げつけてやる。

葵がもう一人バカを蹴って同じように体育会系の教師に飛ばした。

「じゃぁ、邪魔もいなくなったし……」

「死なない程度に殺してやるよ葵」

拳を強く握り葵の顔面のド真ん中に向けて突き出す。視界の右端で何かが動いた。それは俺が拳を突き出したと同時に俺の方へと急接近した。

ちっ。拳があと数センチで葵の鼻っ柱に届く瞬間、急激に離れていく。数十センチ、一メートルと。

自分から少し飛んだから良かったものの。蹴られた腹がズキンと痛む。

「恭優くんの暴力ってデタラメだから嫌いなんだよ。さっさと死んでくれないかなぁ」

「うっせぇ。俺はお前のその減らず口が嫌いなんだよ」

元々お互いがお互いを見るだけでいらいらしてたんだ。ケンカするなっていう方がムリな話だ。一緒に暮らしてるのだって奇跡な位だ。ただ由美さんを悲しませたくないから由美さんの前では激しいケンカをしないだけだ。それに由美さんがいなくても不思議なことに俺と葵がケンカすると決まって決着がつかない。というか十分も続いたことがない。その殆どの理由が、

『ピピピピっ』

ポケットから鳴り響く電子音でお互いの動きがピタリと止まる。

「……はぁ」

溜め息を一つ吐き出しポケットから携帯を取り出す。ディスプレイには由美さんの文字が光っている。葵の方も同じだろう。きっと由美さんの文字が光ってる筈だ。メール画面を開き由美さんからのメールを目でなぞる。

「はぁ」

その内容に再び溜め息を一つ。わかったっと絵文字も何もつけず、素っ気ない感じでメールを返すとパチンと携帯を閉じる。

「葵、先行ってるからな……ってもういないし」

一足先に葵は校門に行ったみたいだ。相変わらず反応が早い。まぁ、大切にしたい気持ちはわかる。居心地もいいし、俺達にはこれ以上ない最高の居場所だしな。俺と葵は絶対由美さんには逆らわない。

由美さんは不思議だ。いつもどこかで見てるんじゃないかと疑う程のタイミングでメールをして来る。今回もそうだ。だからケンカを止めざるをえない。

『安売りしてるから三人で買い物いこうよ～。学校なんかこっそり抜け出しちゃえっ！』

これが今回のメールの内容だ。最後のは母親とは思えない内容の文章だ。しかもハートやら星やら何かキラキラした絵文字を使って

る。メールでもテンションがバカ高いんだ。こんなの見たらケンカする気が萎える。

「遅いよ～恭優。罰ゲームね、恭優が荷物多く持つんだよぉ」
「はぁ！　んなこと書いてなかっただろ」
「もう決まったことだもん。ねぇ葵」
「わがまま言ったらダメだよぉ恭優」

あー、うぜぇ。こいつらうざい。

「じゃあじゃあ早速買い物いこ。早く行って時間かけておいしいもの作ろうねぇ」

子供みたいにはしゃぐ由美さん。もう少しで追い越せそうなその背を見ながら俺と葵は微笑んだ。ずっと、これからもずっとこの笑顔が見れる。俺達に優しい笑顔を向けてくれる。由美さんの笑顔を見ると不思議と心が温かくなるし頬が緩む。太陽みたいな存在だ。

人からは怖がられているし異常者扱いされてる。誰も近づこうとはしない。嫌われ者の異常者。けど由美さんだけは俺を友達想いの力持ちと思ってくれてる。優しい奴だと言ってくれる。由美さんと居る時だけは俺は異常者じゃなくなる。由美さんの子になれる。

にこにこと微笑んでる由美さんの隣を歩く。この温もりが何時までも続くと信じて。ずっと隣にいてくれると信じて。由美さんと葵といつまでも家族でいられると信じて。歩いていく。

「たくさん買ったねぇ」

俺の両手にぶら下げてある四つの買い物袋を見て由美さんは笑う。軽く一ヶ月は大丈夫なんじゃないかと思うくらいの量を買った。まぁ暫くは買い物しなくてすむなぁとか思いながら前を歩く由美さんに追い付こうと少し歩みを速める。ていうか何でアイツら俺に合わせて歩かないんだよ。重たい荷物持ってるんだから歩きが遅くなるのは仕方ないことの筈だ。なのにあの二人は俺に合わせず好きなペースで歩いてる。

「ちょっと遅いよ恭優くん」
「葵の言うとおりだよぉ」
「うるせー」

重さは別に気にしない。というか力だけはあるから重くはない。たださすがに四つともなると歩きにくい。袋の中には卵とかも入ってるから乱暴に扱うわけにはいかない。

少しはそんな俺のことも考えてくれとは思う。てか常々思う。だけど、そんな勝手だから俺はついて行こうと思った。隣を歩いていこうと思った。考えてもみろ。俺と葵に対して身勝手でいられるんだぞ。半端ないだろ由美さん。

「そういえばもう少しで夏休みなんじゃない？」
「あと1ヶ月くらいしたらだよぉ」
「夏休みかぁ。楽しみだねぇ。三人でどこに行こっかぁ」

まだ少し早い夏休みのことを考える由美さん。別に夏休みじゃなくたって今みたいに学校サボって遊びに行けるのに。義務教育なんだから不登校になったぐらいじゃ何ともねぇだろ。

「栗とりにいこ～」
「由美さんそれ秋だから」
「んー、私秋の方が好きだなぁ」

さっきの楽しそうな夏休みのくだりはどこに行ったんだ？

「秋にみんなで落ち葉見ながらお団子食べようねぇ」

突っ込む所が多すぎてどれに突っ込めばいいのかわからねぇ。まず、何で落ち葉？　何で団子？

「今年もご苦労さまでした。また来年逢おうねぇ。ってことだよぉ恭優」
「団子は秋だからに決まってるでしょぉ恭優くん」

俺そんなに顔に出るかな。もしそうなら気をつけねぇとな。
でも、団子かぁ。楽しみだな。

「早く秋がくるといいな由美さん」
「そうだね～」

振り返り笑っているその顔。紅い落ち葉を見ながら三人で団子を食べる。俺と葵はまた仕様もないことでケンカをしていて、それを由美さんが団子を食べながら笑って見ている。賑やかな俺達に紅い葉が降り落ちる。そんな光景を想像して、気が抜けた。

――キキィィイイ！

ドン！

いつまでも、これからも。ずっと一緒に年をとっていく。何だかんだいって葵ともうまくやっていき、毎日くだらないことで笑い合う。その中心にはいつもにこにこ笑ってる由美さんがいる。幸せそうに笑ってる由美さんが。

両手の袋を投げ出し走る。数十メートル先で倒れている由美さんのもとへ行き顔を覗く。素人目でもわかる。時間がない。

「葵救急車！　葵！？」

葵がいない。あのバカっ！

携帯を開き急いで番号を入力してかけた。

「ゴホッ……」

由美さんの口から赤が俺の顔に飛び散った。顔や手、露出してる部分は切り傷だらけで血が絶え間なく流れている。さっきまで元気だったのに今は面影一つ見せない。それでも由美さんは痛さで少ししか開かない目で俺を見つけると微笑んだ。いつもと違う、必至で作った酷く苦い微笑みを。

「由美さんもう少しで救急車来るから」

「あ、おいは？」

「あのバカは逃げた車追いかけてった」

「そっ、かぁ」

どくどくと生暖かいものが俺の体に嫌な感触を残して伝っていく。染み込み、滴り、流れおち。独特の臭いと温かさで神経を支配していく。視覚から、嗅覚から、触覚から。どろっとした手についたそれの感触に気が狂いそうになる。初めて見た多量のソレに吐き気を覚える。不自然に凹んでる腹に恐怖を覚える。

視界が歪む。涙が零れる。怒りと悲しみが混じり合った涙が溢れ

でた。ゆっくりと、その涙は考えを確信へと代えていく。充分すぎる程の情報。だからこそ認めたくなかった。俺がここで泣いたらそれは由美さんがもうダメだって自分で認めてるみたいなもんだ。泣いたらダメだ。そう思うのに涙は止まらない。

「なん、て顔して、るの」

弱々しい声。もっと、いつもみたいな元気な声じゃないとこの涙は止まらねぇよ。

「大丈、夫た〝から、ほら笑っ、て」

いつもみたいな笑顔じゃねぇと笑えねぇよ。

「私なら、大丈夫だから」
「どこが、だよ」
「ふふ、こうみえて、も、昔は、やんちゃしてた、のよ。だから、強いのよ」

強いんなら笑えよ。強いんなら元気だせよ。

「強いんだろ、由美さん」

ならほら、笑ってくれよ。そしたら俺も笑うからさ。

「葵、を、よろしくね。ちょっと、暴れるかも、しれな、から、とめ、あげて。お、に、ちゃん、な、だから」
「何言ってるか、わからねぇんだよ。はっきり、と、喋ってくれよ」
「ふふ、ふ。恭優は、優しいね。じゃあ、ちょっと、疲れ、から、少、し、寝るね」

「っ由美さん、由美さん！」
「少し、したら、起き、から、そし、たら行こ、ね。お、団子、食べ、に……」
ガクンと力なくうなだれる由美さんの体。苦く悲しい笑顔のままで……。

まっ白い病室のまっ白いベッドの上。頭に包帯を巻いているその人は俺を見て笑った。優しくいつものあったかい笑顔で微笑んだ。
「言ったでしょ。少し寝るだけって」
「……由美さん」
その顔を見るだけで安心する。スゥっと氷が溶けていき心が温かくなる。よかった。さすが由美さんだ。そんなことを考えながら由美さんの近くに寄ろうと一歩を踏み出した。
けど足が止まった。笑顔に陰りが見えた。雲が差した。
「そのはずだったんだけどなぁ」
なに言ってんだ？

「恭優、葵をよろしくね。葵が犯罪者にならないように止めてあげて。私のことで二人が汚れるのは嫌だから」

だから何言ってんだよ！

「あ、あと兄弟ゲンカもいいけど、ちゃんとしたあとはお互い謝るのよ。恭優から謝れば葵も謝る筈だから」

アイツは絶対謝らないよ。

「好き嫌いもダメよ。ちゃんと食べるのよ。寝る前には歯磨き、朝起きたときにも歯磨き。朝ご飯はちゃんと食べて学校いくんだよ」

もう子供じゃねぇんだからそれくらい出来るよ。

「あとは、……うん、もう大丈夫かな。じゃあね恭優、葵にもちゃんと言っておいてね」

待てよ。まだ俺言いたいこと何一つ言えてねぇよ。なのに、何で声がでねぇんだ。何で伝えられねぇんだ。何で涙なんか流してんだよ。まだ別れじゃねぇだろ。まだ別れたくねぇよ。

「……何て顔してるの。綺麗な顔が台無しだよ」

綺麗な顔。そう言ってくれるのも由美さんだけだったんだよ。それに好きで泣いてんじゃねぇよ。止まらねえんだよ涙が。

「……三人で落ち葉みて、団子食べたかったな」

見れば良いだろ。まだまだこれからもずっと、見ようぜ。三人でずっと。だから、だから！

「恭優、ありがとう。恭優と葵のお母さんになれて、幸せだったよ。ありがとう、さようなら」

何で由美さんが感謝するんだよ。感謝してぇのは俺の方だ。人を傷つけて捨てられて親も居場所もなかった俺の親になってくれて、居場所もくれて。こんな化け物の母親になってくれて、ありがとうって言いてぇのは俺の方なんだよ。

「由美さん」

声を絞り出す。出なかった声を、思いを、今までの感謝を無理矢理、力の限り絞り出す。こんな、人を傷つけることしか出来なかった俺に、化け物じみた俺に、

「幸せをくれてありがとう」

「うん、大好きだぞこのやろー」

俺達もだよ。

「桐生くん、桐生くん」

誰、だよ。名前を呼ばれて目を覚ます。目の前には全く知らねぇおっさんと看護士がいた。申し訳なさそうな、つらそうな顔で俺を見ている。なんだ？　なんでそんな目で俺を見るんだよ。手術はどうなったんだ。由美さんはどうなったんだよ！

「……手を尽くしましたが、」

「っふざけんなよテメェ！」

ガンと医者のおっさんの胸ぐらをつかみ壁に叩きつける。

「何が手を尽くしただ！」

震えていた。医者のおっさんの肩じゃない。掴んでいる俺の腕が、怒鳴ってる俺の声が、目に映る全ての光景が。

「何で、なんで助けてくれなかったんだよ……」

「……すまない」

おっさんは俺の目を真っ直ぐ見据えて本当に申し訳なさそうに謝った。そうか……、わかったよ由美さん。あの夢は、別れだったのか。

「わりぃ、いや、すみませんでした」

胸ぐらから手を離し頭を下げる。

「医師（せんせい）最後までありがとうございました」

「……救えなくてごめん」

頭を上げる。泣きそうな、必至で涙をこらえてる顔がそこにはあった。この人はそういう人なんだろう。全く関係のない赤の他人が死んでも悲しむ人なんだろう。人の為に涙を流せる人なんだろう。なら、安心だ。

「すみません、俺用事思い出したんで」

そう言うが早いか俺はもう真っ直ぐな廊下を玄関目指して走りだしていた。

やることは一つ。最後に由美さんに頼まれたこと。俺と同じ悲しい筈なのに、怒りが、憎しみが動いた奴。泣きたい筈なのに泣けない奴のところへ。最後の兄弟ゲンカをするために。

一瞬だけ見えた車の中。中の奴らには見覚えがあった。俺が一瞬見えたんだから、隣にいた葵の奴ははっきり見えた筈だ。だから葵は、間違いなくそいつらの溜まり場に向かってる。今の葵は何するかわからない。実際俺もそいつらを見たらどうなるかわからない。キレて殺してしまうかも知れない。けど、由美さんの約束がある。キレても何とか半殺しで済ませる。最後の約束を破るわけにはいかないから。

「由美さん、俺今度は救えそうなんだよ。やっと光が見えたんだ。そいつさ、由美さんみたいなんだけど、今は少し曲がってんだ。あん時の葵みたいな感じなんだよ」

返事はもちろん返ってこない。でもいいんだ。俺が言いたいだけなんだから。きっと由美さんは聞いてくれてると信じてる。それにここでこうやって喋ると、由美さんといた生活を思い出して、もう失いたくなくて強くなれる気がするんだ。

「見ててくれよ。化け物な俺と葵でも救えるものがあるってところを」

さて、と。じゃあ行くか。

「じゃあ行ってくる。次来る時はそいつも連れてくるから。救えた証に。楽しみに待っとけよ由美さん」

『化け物なんかじゃないよ。二人とも大事な私の子供だよ』

『楽しみに待ってるから、必ず連れて来てよ』

『二人共大好きだぞこのやろー』

ミエタヒカリ　恭優（後書き）

とりあえずこれで恭優のは終わりです。続きは葵です。

この話は本当は全部終わったあとで特別編として出そう思ったのに……。

更新に間があいてますが、途中でやめる気はないので気長に待ってやってください。

じゃあ次回は今の続きで葵視点です。

読んでくれてありがとうございます。

落としモノ　葵

何で失う。何で大事なモノだけなくなる。何で僕から大事なモノを奪う。

「ネェ、聞こえてんだろ？」

足下に転がってる奴の腹を蹴る。そいつは真っ当な答えなど一つも返さず吸い込んだ息を吐き出すだけだ。

「……聞こえてんだろ」

血なまぐさい臭いと呻き声、むせび泣く声が暗い倉庫内を鈍色に彩る。どこを見ようと色は鈍色しかなくて、手や服についた赤い筈のソレも鈍色に深く沈んでいた。色がない。感覚がない。確かに存在してるのは憎悪と疑問だけ。悲しい筈なのに、泣けない。悲しい筈なのに、何とも思わない。ただ、当たり散らしたい憎悪と、吐き気のする疑問が頭をグルグルと巡る。

不自然に曲がっている右手の中指を握り、更に曲げる。ぐにゃりと手の甲にぴったりくっつく指を今度はぐちゃぐちゃにかき回した。顔や腕に垂れている血をたどり、血を流している傷に指を持っていく。ぐちゅっとその傷に爪をたてて引っ掻く。

――何も感じない。痛みも触れている感触さえも。

「化、け物……死んじまえ」

ぼそりと誰かが呟いた。数ある苦痛の音の中からそれを聞き取り理解する。

そうだよ。化け物だ。僕は、化け物だったんだ。だから何も感じない。でも、それだったら何で僕、じゃないんだ。

「ネェ、何で由美さんなんだよ。何で俺をひかなかったんだ」

死んでもいい化け物なんだろ僕は、俺は。

「殺せよ、殺してくれよ！」

早く、早くしてくれないと、もう由美さんのあの笑顔が思いだせないんだ。

「ネェ、動けよ、殺したかったんだろ。早く殺せよ！」

……何で誰も応えないんだよ。誰もしないんなら、俺が。

数メートル先に転がっているナイフの元へと歩く。さしかかって来た相手の手を蹴りそこまで飛ばしたナイフ。こんな形で役にたつとは思ってなかったな。ナイフを拾い強く握る。やっと、これでやっと終われる。由美さんといた時は幸せだった。けどやっぱりそれも終わった。化け物に幸せなんかあったらダメなんだ。化け物は死なないとダメなんだ。

ブスッとナイフの切っ先が腹に数ミリ食い込んだ。と同時に頬に確かな痛みを感じて視界が変わった。

コンクリートの地面を何メートルか滑ったところで体がようやく止まった。自分の近くにさっきのナイフが落ちていたからそれを取ろうと手を伸ばした。

カラン、カラン。

黒い靴がナイフを蹴り遠くへ飛ばした。靴の主を見上げる。

鈍色の世界の中で色のある白いそいつの髪が揺れる。赤いそいつの目が俺を捉える。

「葵、テメェ今何しようとした」

そうだった。まだいたんだったな。同じ化け物が。俺と同じで死なないといけない存在が。

「死のうよ、恭優」

「ッのアホが！」

ガンっ！

また、だ。また痛い。無様に地面を転がっていく。

「死のうだぁ？　何言ってんだ。テメェ、由美さんほっといてどっか行ったと思ったら何考えてんだ」

力強く歩いてくる恭優。なのに声は少し震えていた。

「由美さんはな！」

胸倉を掴まれ強引に立たされる。

「死んだんだ」

何でだ。何でお前は泣けるんだ。俺と同じ化け物の筈だろ。なのに何で泣けるんだよ。

「テメェをよろしくって、俺達の母親になれて幸せだったって、」

憎悪が消える。疑問が消える。脳内を恭優の言葉が、思いだせない由美さんという存在が浸透して駆け巡る。

「……やめ、ろ」

これ以上言うな。そんな顔で俺を見るな。せっかく終わる決意をしたんだ。やっと終わりに出来るんだ。なのに、同じ化け物のお前がそんな顔ができるなんて、泣けるなんて。

化け物でも泣くことはできる。悲しむことはできる。恭優を見てるとそう思ってしまう。まだ俺にも生きる意味がある。そう思わされてしまう。

「化け物みたいな俺達のことを」

「やめろ、やめろ。やめてくれ！」

これ以上俺に希望を埋め込まないでくれ。耳を塞ごうが声をいくら出そうが恭優の声は脳に直接響くみたいにはっきり聞こえる。そして、最後にわかりきっていたのに、怖くて聞けなかった、気にしないようにしていた想いが恭優の口から声という手紙で心に届いた。ずっと知りたかった、ずっと聞きたかった言葉。誰かに言って欲しくて、聞くのが怖くて知らないふりをしていた想い。

「大好きだっつって笑顔で逝ったんだぞ」

「……ぅ、ぁ、あああああああ！」

ぴしっ。頭の中で自分の中の化け物が壊れた感じがした。とっくに消えて無くなっていた憎悪と疑問。それを溜め込んでいた化け物という器が壊れた。代わりにどうしようもないほどの悲しみが襲う。失った辛さ。目の前にいたのに守れなかった弱さ。由美さんのことより、憎悪に走ってしまった愚かさ。全てがごっちゃになって一つの悲しみを作り出す。

そして、微かな絶望が頭の隅で鈍い光を放つ。許せない鈍色の光。絶対に許すことの出来ない事実。

「駄目、なんだ恭優」

深く激しい悲しみが襲っているのに泣けることが出来ない。鈍色の光がやっと見つけた感覚を麻痺させる。

あれだけ大事で大好きだったのに……。

「由美さんの笑顔が思いだせないんだ」

逃げた。恭優の顔が見れなくて。自分が許せなくて、そこから逃げるように無我夢中で走った。真っ暗な夜の中、その黒に隠れるように走る。

どれだけ走っただろう。足が疲れもう走れない。ドサッと壁にもたれかかるように座る。走ってる最中も何度も思い出そうとした。けどやっぱり由美さんの幸せそうに笑ってる顔だけが思いだせない。暗く幕がかかる。一番多く見てきた筈なのに。一番好きな表情の筈なのに。何度もその表情に助けられた筈なのに。何でっ！

「はぁ、はぁ」

走りすぎた。器が壊れて痛みを感じるようになったから全身がズキズキ痛む。

「……救急車、呼ぶかな」

「あー、見るからに痛そうだもんな」

上から降りかかる声に少し驚く。誰だ？　高い声、女か。声で人物を考えながら自然と下を向いていた顔を上に戻す。

「呼ぼうか救急車」

一瞬声を失った。夜の黒と同じくらいに暗い色をした髪。その真っ黒の中、一部だけが赤かった。黒の中でよりいっそう存在感を増している。綺麗な赤とは言えない。煌びやかとは無縁の赤。深く、光を失っている。血のような赤だ。初めて感じた圧倒的な存在感にビックリした。それにその髪の主がどう見てもまだ小学生なことにも少し驚いた。救急車、呼べるものなら呼んで欲しいけど、所詮小学生だ。頼りにならない。

「自分で呼ぶから、さっさとどっか行ってくれないかな。一人でいたいんだ」

「一人でいたい？　そっかわかった」

踵を返し歩くその子は何かを思いだしたかのように振り返りまた俺のとこに戻って来た。

「何だよ」

「絆創膏、意味ないと思うけどあげる」

ポケットから取り出した一つしかないソレを俺の頬に貼る。ぴとりと指が触れた。

「ん、じゃあね」

そう言い赤と黒の子は笑った。

「……何で泣いてんの」

笑ったその子の顔がそっくりで、忘れていた由美さんの笑顔を思いだした。

「泣い、てる？」

「あはは。おもしろいねお兄さん。じゃあ俺そろそろ行くよ」

最後に由美さんとそっくりな笑い顔を見せて夜の黒に紛れた。

「泣いてるのか……」

泣けてるのか。良かった。泣けた。やっと涙を流せた。やっと、思う存分泣けるんだ。由美さん、あんたを思って。思い出して離れない由美さんの笑顔が滲む視界の中で見えた気がした。幸せをくれた由美さんの姿が目の前に見えた気がした。

静かに泣く。壁に背を預け、力を抜き、悲しみに全てを預ける。死にたくなるほどの悲しみ。けれど、由美さんを思えば思うほどその分生きなくちゃと思う悲しみ。失った辛さ。痛いほど感じる喪失の苦痛。大好きだった存在にもう逢えない寂しさ。全てが涙になって止まることなく流れた。

『男の子でしょ』

そっと頭に手がおかれた。その手からは何度も感じた温もりが伝わって来た。何度も、朝起きた時から寝てる時まで、感じた温もりが伝わって来た。居場所という、由美さんという温もり。

『泣くなとは言わないけど、泣きすぎだよぉ』

「それだけ由美さんがでかかったんだよ」

失った温もり。明日からはもう触れることも、見ることすら出来ない温もり。

『ふふ、嬉しいなぁ。私なんかの為に泣いてくれるなんて』

「なんかじゃないよ。恭優だって泣いてんだよ、化け物の俺達を、泣かすことができるんだから、凄いよ由美さんは……」

見えない筈なのに由美さんの姿が、笑ってる姿が見える。嬉しそうに、そして寂しそうに笑っている姿が。

『化け物なんかじゃないよ！　二人共私の大事な子だよ。化け物だなんて、自分を貶めないで』

強く由美さんが否定の言葉を返す。化け物という俺達を否定する言葉。俺達は化け物じゃないと言う救いの言葉。

由美さん、俺達がどれだけその言葉に救われたか、どれだけ嬉しかったか、どれだけ希望をもてたかわかる？　本当に感謝してもしきれないほどに想ってるよ。だから、

『ねぇ、葵』

「なに」

だからね由美さん、

『私って二人の自慢の母親になれてた？』

「最高の母さんだよ」

今まで俺達を育ててくれて、愛してくれて、

『ありがとう。嬉しい』
「それは俺のセリフだよ」

――由美さん、

「ありがとう」

『ふふっ――――』

由美さんの姿は消えていた。いや、最初からいなかったんだ。だって由美さんはもういないんだから。アレは幻覚だ。悲しさのあまり作り出したただの幻覚。だって、幽霊とかいる筈ないだろ。

けど、それでも嬉しいなぁ。最後に由美さんの笑顔が見れて、最後に由美さんの声が聞けて。

涙はまだ止まらない。けど、いつまでも流してるわけにはいかない。強く、強くならないと。だって、僕は男だから。最後に聞いた由美さんの言葉が心に力を与える。恭優の言っていたことは本当だった。怖くて聞けなかった想いを聞けた。それだけで、もう大丈夫。もう十分だ。僕は、強くなるよ。守れるように、大事なことを見失わないように。

「ありがとう」

『ふふっ大好きだよ』

「よーしくん」

ぽんっと肩に手を置かれ振り向く。いつもの何を考えてるかわからない顔で笑っていた。おかしい。ここ最近やけに葵から声をかけられる。学校の中はもちろん、こうやって皆で下校途中にもだ。思えば最初に声をかけられて恭にぃとケンカしたときぐらいからか。てことは、だ。もう一ヶ月近くもかけられてることになる。最初の方は恭にぃとバッタリ会ってケンカが始まってそのスキに逃げれたけど、先週あたりから恭にぃはまた旅立った。だから逃げるスキが無くなったんだよなぁ。

「佳くん達元気ぃ？」
「葵さん、今日もなのだ？」

城道が呆れ半分で葵に聞く。呆れもするさ。ほぼ毎日葵はアイツのことを聞いてくる。嫌いなアイツのことを。

「今日もだよぉ。てことでぇ今日も紗弥さんは元気ぃ？」
「知るか、そんなもの自分で聞けば」

素っ気なく返す。どちらかと言うとうざそうに返す。毎日毎日同じことを聞かれて同じように返す。呆れもするだろうさ。城道と顔

を見合わせわざとらしく溜め息を吐いた。

「わかったぁ。自分で聞いてみるよぉ」

これもいつもと同じ言葉だ。これを言ったあと葵は手をふりながらどこかへ行く。それが最近の決まった出来事だ。

やっぱり昨日と同じで葵は手をふった。ただその後に昨日とは違う行動をおこした。歩いていく足を止め葵が振り返った。

「佳くん〜、もうちょっとで秋だねぇ。秋はどんなおもしろいことをするのぉ」

どんなおもしろいことって……。

「そんなのわからないよ、でも」

でも、そうだな。葵にとっておもしろいかどうかは知らないけど、

「汐姫達と真っ赤な落ち葉を見ながらお団子でも食べようかな」

楽しそうだしなぁ。

「……そっかぁ。落ち葉見ながら団子って相変わらずおもしろいねぇ。じゃあねぇ」

そう言い残し葵はまた手をふり、歩いて行った。どこかへ行く際に見せたその表情がいつもとは違う感情があるような笑顔に見えたのはきっと気のせいだろう。うん、きっとそうだ。だってあの葵だからな。

「佳様っ今ボクと二人っきりで行くって」
「いや、汐姫達って言ったんだよ」
「汐姫達ってことはボクとその他ってことですよね！　ボクが主にってことですよね！　あとは別についでってことですよね！」
「いや、そういうわけじゃ」
「僕はついでじゃないのだよ。むしろ僕が大事なのだ」
「わ、私もついでじゃないよな佳っ！？」
「だから別についでとかいないよ。俺は皆と行きたい。皆大事だよ」
「そうだぞお前ら。くだらないことで争うなよ」
「あ、ごめん。透麻はついでだった」
「佳様それは言わなくてもわかりますよ」
「わかりきってたのだ」
「おいっ！　何で俺だけなんだよ。俺一番争いの無い道を言ったよな」
「テメェはついでだっつうことだよバカ透麻」
「よーし歯ァ食いしばれバカ來優」
「ケンカ売ってんのか」
「そりゃあテメェだろうが！」

　來優と透麻がお互い胸ぐらを掴みいがみ合っている。城道がやれやれといった感じでそれを止めに入る。汐姫が我関せずという様に俺の隣で秋にしたいことを話す。それに俺が返事を返す。汐姫と少しの間話してたらケンカを終わった來優と透麻がその話しに入って来て、城道が少し疲れた感じで最後に入ってくる。それで暫く五人で楽しい会話をする。
　楽しいなぁ。何気ない一日一日がとても楽しい。皆と笑っていることが一番幸せを感じられる。

「団子はみたらしがいいのだ」
「なぁ団子もいいけど大福もよくねぇか」

「いいなぁ。私苺大福がいいな」
「ボクは何でもいいよ。佳様の食べ残しなら」
皆と落ち葉見ながら食べれたらいいなぁ。その時まで、もつかな……。
「佳は何がいいのだ？」
「よもぎ」
「渋いのだ」

ゆうえん　佳（後書き）

……本当は昨日更新したかった。
あー、本当に時間が止まったらいいのになぁ。

恋は盲目なのだ　城道

ひゅーっと肌寒い風が吹き抜ける。夏の終わりを告げ秋の到来を感じさせる風。冷たく髪を撫で、服をすり抜け肌に刺さる。

「さむっ」

佳が風で乱れた髪を軽く首を振って直しながら呟いた。いつも寝癖でボサボサなのに、何を気にしたんだろう。佳の考えてることは相変わらずわからないのだ。

「あー、もう秋だなぁ」

透麻の言う通りなのだ。秋と言えば色々とある。読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋。まぁ人それぞれだけど僕は断然食欲の秋をオススメするのだ。理由は人は食べないと生きていけないからなのだ。

「女子は凄いな」

透麻が佳と汐姫を見て言った。

「おい、私も女子だぞ」

「寒くてもスカートだし、必要以上に短くしてる奴もいるしな」

女子の枠に入らなかった來優が文句を言うけど当然のように透麻は無視して話を進めた。

「無視すんじゃねぇ！」
「うるせぇバカ」

いつものようにケンカを始めた二人。まぁこのくらいなら放っておくのだ。

そうなのだ。秋と言えば今年は大事なイベントがあるのだ。それは、衣替えなのだ。夏服から秋服に変わる。当然制服もしかりなのだ。去年までは全く興味なかったけど今年は違うのだ。佳が、夏服から秋服なる！　ていうかもう着てるのだ。女子は規則違反のカッターシャツはもちろん夏から着てるけど、それ＋黒のカーディガンなのだ。黒が佳らしいっていうとらしいんだけど、僕としてはもうちょっと女の子っぽい色を……。まぁいいのだ。佳はカーディガンなら去年も着ていたのだ。けど去年とじゃ圧倒的に違うものがある。それは下がスカートなことなのだ。同じカーディガンでもズボンとスカートじゃこんなにも違うなんて。可愛いのだ佳。ちょこんとカーディガンから指先だけがでてるところが可愛いらしい。女の子なのだ。

「佳様似合ってます。お持ち帰りしたいくらい可愛いです」
「ありがとう」

朝から今までで数十回ほど聞いた汐姫の言葉にこれまた同じくらいの回数になるありがとうを返す佳。

うーん、駄目なのだ。何か佳のことを好きだって気づいたあたりから少し考えがおっさんぽくなってるのだ。汐姫みたいな考えをすることも増えてきたし、恋は盲目ってこういうことなのかな。

そんなことを考えて油断しきっていた僕にこのあと爆弾が投下された。言葉という形で、世の男の子の希望を奪う爆弾が。

「……明日からズボン履こうかな」

え!?

「なんでですか!?」
「なんでなのだ!?」

その言葉にすかさず僕と汐姫が詰め寄る。

「え、なんでって寒いから」
「寒さなんかすぐ気にならなくなりますよ佳様」
「そうなのだ。意外とすぐ馴れるものなのだ。」
「いや城道、お前はそんなのわからねぇだろ」

透麻の言う通り正直僕は馴れるかどうかはずっと履いて過ごしたことがないからわからないけど。

「そうだぞ佳。いいじゃんスカートで。可愛いよ」

來優が僕と汐姫に続いて説得を試みる。

「うっ……、で、でも足がスースーして、正直スカートは、」
「そんなの履いてたら馴れるのだ」
「いやだから城道、お前わからねぇだろ」
「透麻さっきからうるさいのだ」

確かに僕にはわからないけどそれが何か?

「そ、それに馴れなくて何回か……、見られたこともあるし」
「何をですか」
「ぇ、それは……その」

「佳様何を見られたんですか！？」

汐姫が珍しく大声を出した。その様子に佳がびっくりして少し後ずさんだ。そして恥ずかしそうに俯き、小さな声で、

「……下着」

「ボクその男子を殺してくる」

「協力するのだ」

「ちょっと待て。それはやめろ。ていうかどいつかわからないだろ」

透麻が僕と汐姫の手を掴んだ。確かに透麻の言う通り誰かはわからない。けど、

「男子を順番に殺していけばその中に見た人もいるよ。だから離して透麻」

「そうなのだ。会った男子から消していくのだ。だから離すのだ透麻」

「そんな無差別テロ計画聞いて離すバカがいるか！　ってあれ來優は？」

「あそこで男子に絡んでる」

佳の指差す方には一人の男子の胸ぐらを掴み凄んでいる來優がいた。來優僕達より手が早いのだ……。一切悩み無しなのだよ。

「テメェは少しは考えて行動しろ！」

來優に向かって勢いよく走りだす透麻。その勢いのまま地面を蹴り、右足を來優に向かって伸ばす。

いつもならそれを來優が受け、ケンカが始まる。けど今日は違った。パシっと伸びた透麻の足に掌を当て、軌道をずらす。避ける為

の反応や動作はいらない。耐える為の力もいらない。少しの力でいい。少しだけ掌をあてるだけ。ただそれだけで透麻の跳び蹴りは來優の横を抜けて壁に激突した。最小限の力と最小限の動きで相手の攻撃を無きにする。力の向きを変えられた相手には隙ができその隙を見逃さずすかさず攻撃に移れる。來優がしたことは決して簡単なことじゃない。あれだけ最小限に抑えるのにはかなり努力しただろう。あれが來優の修行の成果なのだ。

「透麻、隙だらけだぜ」
「っうっせぇ！」

來優は強くなったのだ。透麻がそのことに焦ってるのがわかる。透麻も負けず嫌いなのだ。ずっと前に佳が言った通り、成長って面白いのだ。

「あんまり調子のんなよ來優」
「まだ私は本気じゃないぞ雑魚」
「っ殺す！」
「かかってこいよ」

掴み合う二人。まぁケンカするほど仲がいいって言うのだ。だからもう面倒くさいから放っとくのだ。それに來優と透麻のせいで話がそれたのだよ。大事なのは佳のズボンを阻止すること。

「佳様ズボンだったら確かに暖かいかもしれません。けど佳様、それは逃げですよ」
「そうなのだ。女子は皆例え寒くてもスカート履いてるのだ。佳だけズボンを履くのは寒さに負けて逃げてるのと同じなのだ」

わかってる。言ってることが無茶苦茶で意味不明だってことくら

い。けど佳も負けず嫌いなのだ。負ける、逃げる、この二つの言葉には反応する筈なのだ。

「……なぁ、城道。私って……」
「私？　どうしたのだ佳？」

いや可愛いけど、出来ればこれからずっと私って言って欲しいけど。

「え、ま、間違えた。わかったよそんなに言うならスカートで頑張ってみる。ただ、」
「ただ、なんなのだ」
「み、見られたらどうしよう……」

見られたらって、そんなの決まってるのだ。

「見た奴を殺すのだ」
「もちろんです」

そんな奴は絶対許さないのだ。殴って叩いて殴って殴って殴って蹴るのだ。

「佳、今日透麻の家泊まらないか」
「はぁ！？　來優テメェ急に何言ってんだ」
「お前さっき私に負けたよなぁ」

あ、透麻負けたんだ。ていうか來優と透麻のケンカに勝敗がつくのは珍しいのだ。まぁ、來優は強くなったから透麻が負けたのも納得はいくけど。

「あー、俺はいいけど」
「あ、僕は今日ムリなのだ」
「うー、ボクも今日はムリなんです」

一人暮らしの汐姫がムリって言うなんて珍しいのだ。

「今日は久しぶりに茜さんが家に来るんです」
「茜さんか、懐かしいな」

茜さん、汐姫の親が生きていたとき働いてた若い家政婦で、親が死んでからも無償で優しく汐姫の世話をしてくれてた人なのだ。良い人だから嫌いじゃない。汐姫もかなり感謝してるだろう。

「あー、てことは私と佳だけか。おい透麻、女二人と男一人だからって襲うなよ」
「女一人男一人バカ一匹の間違いだろ」
「私は男じゃねぇよ」
「バカ一匹がお前だ！」
「佳、頑張ってケンカを止めるのだよ」
「佳様、止まらない時は殴って気絶させちゃったらいいですよ」
「ん、わかった」

あー、僕も行きたかったのだ……。今日の晩ご飯当番じゃなかったら行けたのに。でも、汐姫も行けないんならいっか。お互い今回は休戦なのだ。

恋は盲目なのだ　城道（後書き）

……明けましておめでとうございます。
遅いのはわかってます。そう言うことは5日前に言えよってこともわかってます。
でも自分は正直この挨拶いらないなぁと思うんですよ。だって、めんどくさいじゃん……。

なんかだんだん城道がおっさん化してる気がしないでもないですが、まぁ大抵好きな子が出来たら皆おっさん化するんじゃないかなぁ。
……はい、しませんね。

ではまた次回。更新待ってくれてありがとうございます。

『ごめん！　用事が出来て行けなくなった』

馴れない手付きでさっき来たこのメールにわかった、と返信する。
さて、來優が来れなくなったってことは俺だけか。

「あー、來優の奴来れなくなったのか」
「うん。透麻のとこにもメール来た？」

椅子に座り携帯を弄る透麻。手付きが凄い。なんか理解出来ないほど手慣れている速さだ。
透麻の家に来たはいいけど、七時になっても來優がこない。ついさっきメールで来れなくなったことがわかり、今日透麻の家に泊まるのは俺だけだ。ベッドに座り携帯を弄る透麻を見つめる。そういや透麻って携帯を二つ持ってるな。何でなんだろ。案外知り合いが多いのか？　俺なんてアドレスに入っているのは七人くらいなのに。別に寂しいわけじゃないけどな。

「佳何する？」
「ん、何しよっか」

二人っきりになるのは完璧に予想外だ。二人で出来ることかぁ。ゲームくらいかなぁ。

「あれそう言えば透麻母親は？」
「あー、今日なんか友達と遊ぶとかで帰ってこねぇらしい」
「ふーん」

そっか。てことは今この家にいるのは俺と透麻だけか。朝そうなることは多いけど夜になることは滅多に無いな。
あ、そうだ。透麻の母親がいないんなら二人で出来ることがあるじゃん。

「透麻、ご飯作ろう」
「……え」

……何か今心底嫌っていう風な声が聞こえたな。気のせいか透麻の顔も引きつってるし。

「そりゃあ下手だけどさ、でも二人でやれば大丈夫だって。俺と透麻なら美味しいものが作れるよ」
「ま、まぁ俺も一緒に作るんだから大丈夫か」

でも、あれだなただ単純にご飯作るだけっていうのは面白くない。てことで、

「何か規制をかけよう。お互い來優と汐姫と城道にメールして何をやって欲しいか聞いてそれをやりながらご飯作るってのはどうだ」
「……まぁあまり良い予感はしないけどいいぜ」
「じゃあ決定っつうことで。必ず実行だからな」
「わかってるよ」

「佳様、醤油とってわん」
「わかりました。はいどうぞご主人様」
「さんきゅーわん」

犬耳と付け髭眼鏡をつけている透麻。透麻に返って来たメールは、來優からが犬になれで、城道からは付け髭眼鏡をつけろで、汐姫からは下僕って返ってきた。來優のやつには犬耳と語尾にわんをつけることで達成。城道のは要望通り百円均一で買った付け髭眼鏡をつけて終わり。汐姫のはちょっと優しくなるけど人の名前のあとに様をつけるだけで良しとした。

で、俺なんだけど。來優からはエプロン、城道からは女らしい態度、汐姫からは……裸エプロンをして首輪をつけられたメイド。うん汐姫、出来るわけないだろ。バカってメール返して透麻と話し合った。その結果エプロン着てメイドみたいな口調で、柔らかい物腰だったら良いってことになった。絶対って言ったけど流石に、裸は……。

「あ、マヨネーズとってわん」
「どうぞ」

調味料が置いてある棚からマヨネーズを取り出し透麻に渡す。今俺達はお好み焼きを作っている。俺は作り方は知らないけど、透麻がわかってるみたいで、スラスラと卵と小麦粉と牛乳をボールの中に入れ混ぜている。あ、醤油とマヨネーズも入れだした。

「ご主人様はお好み焼き作れるんですね」
「あー、まぁ簡単だろお好み焼きはわん。一番想像出来る料理だな。

わん」

想像？　意味がわからないけど……まぁいいか。そんなことよりも。

「チョコも入れたらどうでしょうか。私甘い物好きなんですよ」

「いいぞ。入れるかわん」

お菓子の棚からミルクチョコとホワイトチョコを取り出し、ボールの中に入れる。

「よし、あとはフライパンに丸い形になるようにひいて、わん」

ジュウウウ、と焼ける音と共に香ばしい匂いがして来た。チョコの良い匂い。ちょっとだけ知ってるお好み焼きと色が違うけど、まぁこういうのもあるんだろうな。

「もうちょっとで出来上がるわん。佳様飲み物ついどいて。わん」

「はい、かしこまりました」

白と黒の斑点模様のコップを二つ机の上に置く。冷蔵庫を開けて、中を確認する。

「ご主人様、コーラとココアとお茶がありますけどどれにしますか？」

「コーラでわん」

冷蔵庫からコーラとココアを取り出す。注ぎ終わるころに透麻が二つのお好み焼きにお好みソースをかけていた。

「できたぞわん」
「こっちも終わりました」

お好みソースをかけたらもういつも食べてるお好み焼きと変わらないな。透麻も自信満々な顔をしている。

「じゃあ食うか。わん」
「はい。いただきます」

あれ、焼くときまで美味しそうだった匂いが今はちょっと変な匂いに変わってる。……気のせい、かな。

「あ、そうだ佳……様。わん」
「はい、何でしょう」

目の前のお好み焼きに手をつけず透麻が喋る。
凄い。箸で触ると難なくお好み焼きが切れて食べやすい小さな形になる。つまみ、口元まで持っていく。

「俺お好み焼きの作り方知らないんだけどあってたかな。わん」

パク。
透麻が言い終わるよりも早くお好み焼きは俺の口の中に入った。

「……ご主人様」

箸を手元に置き透麻を睨む。お好み焼きの味は正直不味い。俺が作ったのと同じくらいに不味い。

「ご主人様もどうぞ。とっても美味しいですよ」

笑顔を作る。透麻は最初から俺の反応を見てから食べるかどうか考えていたんだろう。卑怯だ。俺はてっきり透麻はお好み焼きの作り方を知ってるのかと思っていた。そう思わせるくらいに手際がよくて、何一つ手順に迷いを感じなかった。

「やっぱり不味いかわん。じゃあ俺はカップラーメンにしよ。このお好み焼きは來優にでもやるかわん」

「透麻ぁ！　作れないなら最初から言え」

「まぁまぁ怒るなって」

「怒るよ！　口の中が何か変な感じがするんだぞ」

辛くて甘酸っぱくて、キーンとするような意味わからない感じ。間違いなく完食はできない。胃がもたないだろう。

「佳もカップラーメンいるか？」

「う……い、いる。で、でも許したわけじゃないからな。本当に口の中が変な感じするんだから」

「わかったわかった、ごめんな。俺カップラーメンは作るの上手いから任せろ」

笑いながら謝る透麻。謝罪の意思が全然感じられないけど……、まぁカップラーメン作ってくれるんならいいか。

「カップラーメンは誰が作っても同じだよ。俺が作っても味は変わらない」

「だよなぁ。誰が作っても同じだよな。俺も一ヶ月くらい前まではそう思ってた」

お湯を入れながら感慨深そうに喋る透麻。よくわからないけど、

一ヶ月くらい前に何かあったのかな。

「世の中にはカップラーメンが作れない奴もいるんだぜ佳」
「どこのお姫様だよ」
「お姫様っつうよりお嬢様」
「はぁ？」

意味がわからない。けど、まぁ透麻にも色々とあったんだろう。

「出来たぞ」

とんっと目の前にカップラーメンがおかれる。湯気がもくもくと立ち上り、良い匂いを運んでくる。匂いは、普通だ。

「……変なもの入れてないだろうな透麻」
「入れてねぇよ」
「……」

じーっと透麻の顔を見る。表情は何時もと変わらないな。さっきのお好み焼きの件があるからな。もしかしたら不味いのかも知れない。いつまでも透麻と睨めっこをしてる訳にもいかないから、一口食べてみることにした。ふーふー、と少し冷ましてゆっくりと口へ運んでいく。

「……おいしい」
「当たり前だろ！」
「あはは。ごめんごめん。お好み焼きが不味かったからもしかしたらカップラーメンもかなぁって思ってさ」
「カップラーメンを不味く作れる奴はさっき話した女しかいねぇだろ」

「誰か知らないって」

美味しいなぁ。やっぱりラーメンは味噌だよなぁ。

「お好み焼きが不味かったからこれが凄くおいしく感じる」

「そんなに不味かったか？」

「食べてみる透麻？」

「いや、遠慮しとく」

うぅ……なんか不公平だけど、まぁいっか。カップラーメンがおいしいから。

家庭の料理　佳（後書き）

「なぁ佳、今回の料理の反省点はなんだ」
「たぶん、焼くのが失敗したんじゃないのかな……」
「あー、なる程な、火加減か」
「うん。あとは形かな。たぶんだけどお好み焼きは綺麗な円じゃないとダメなんだよ。火の通りとか悪くなるんじゃないかなぁ」
「綺麗な円、か。お好み焼き作れる奴って凄いな。今度來優に作って貰おうぜ。來優なら料理得意だから出来るだろ」
「うん。次作るときは來優と一緒に頑張ろ」

※二人は料理の知識は皆無です。

言葉という凶器　透麻

あれ、佳がいない。晩飯を食べ終え、後片付けをして、テレビを見ていた所までは一緒にいた記憶はある。いつだったかな。番組の途中で佳が何か俺に行った気がする。それが思い出せない。たぶんその言葉が佳がどこに行くかを伝える言葉だろう。

「あー、もうすぐで佳が見たいっつってたホラーが始まるのに……」

一人で見ても、つまらないよな。佳はどっか行ったし、仕方ない。今のうちに風呂にでも入るか。

テレビはつけっぱなしにしておく。佳が何時帰って来ても良いように。部屋から着替えを取って来て風呂場に向かう。

ガチャリッとドアを開けた。

俺はもっと考えるべきだった。決めつけるべきじゃなかった。何で佳が外に出たと決めつけたんだろう。何で佳が言った言葉を思い出そうとしなかったんだろう。時既に遅し、と言う。確かにもう遅い。今更佳の言葉を思い出してももう手遅れだ。佳は確かにテレビに夢中な俺の肩をとんとんとつついてまでどこに行くか言った。

『透麻、お風呂に行ってくる』

そう言っただろ。

ドアを開けて先ず目に入ったのは驚いた表情のまま固まっている佳の顔。濡れた黒と赤の髪が艶を増し、毛先から水が滴り落ちてい

る。そして、風呂に入って体が温もったからか、仄かに紅潮している頬。そして視線は何故かだんだんと下に。毛先から滴る水が顔の線を伝い細い首筋を伝う。湯気がぽかぽかと出ている肩の下、少し膨らんでいる形の良い胸。その先まで水がなぞった。

「あっ、え……み、見るな透麻！」

佳が胸の前に手を持っていき背中を向けた。ヤバいっ。そう思い謝ろうとした所で声が詰まった。視線が、意識が、全神経が全て佳の背中に移った。いや、正確には背中じゃない。佳の綺麗な体には不釣り合いなもの。背中に彫られた鬼に全ての考えを持っていかれた。時間が止まったような錯覚に陥る。思考がある所で止まって指先一つも動かせなくなった。

「っ出ていけ透麻！」

怒声と何か固い物がぶつかった痛みで我に帰り急いでドアを閉めた。

「……なんだ、アレ」

女の裸が見れた嬉しさじゃない。固い物が俺の頭を直撃した痛さでもない。そんな物はどうでもいい。気になるのはただ一つ。佳の背中の鬼の刺青。今までずっと過ごして来て佳から刺青を入れたなんて話を聞いたことは一度もない。それだけじゃない。あの刺青どこかで見た気がする。どこか……、いつだったか。

ガチャリッとドアが開く音がして、ジャージ姿の佳が出てきた。

「佳背中の、」

「あ、見たいテレビが始まってる」

刺青の話をしようとした瞬間佳が思い出したかのようにリビングへ走っていった。

「おい、佳」

「あはは、何これ怖っ」

テレビで紹介される心霊写真に笑う佳。まさか……話をはぐらかされてる？

「おい佳」

肩を掴み無理やり佳をこっちに向かせる。

「なに」

冷めた顔。冷めた目つき。冷めた態度。初めてみるその佳に背筋がゾっとした。佳、か？　本当にここにいるのは俺の知ってる佳なのか？

これじゃまるで俺は佳の敵見たいじゃねぇか。

「お前の背中の、」

「あ、透麻どれくらい見た。まさか……む、胸とか、その……下とか見てないよね」

やっぱりだ。明らかに話を反らされている。何だ、何がそんなに嫌なんだ。

「っお前の刺青はなんなんだよ」

何でか無性に腹が立った。佳のあからさまな態度もそうだし、何より俺達に何も話てないことに。そういえば女だってこともそうだった。あれは佳から話てくれたけど、それでも今まで何も話てくれなかった。

「そんなに俺は、俺達は頼りにならないか」

佳、どうなんだ。佳の相談に俺達はのれないのか。

俺の言葉に佳は少し悲しそうな顔を一瞬見せ、冷たい顔つきに変わった。そして同じような冷たい声で、拒絶のような冷めた声で言葉を紡いだ。

「ああ。頼りにならない」

頭が真っ白になり一気に体の温度が上昇する。さっきまで募っていた苛立ちが爆発し、気づいたら佳を押し倒していた。

「そんなに頼りにならねぇかよ！」

違う。何をしてんだ俺は。

頭の隅の微かに正気の所が今の状況を冷静に判断する。

「十年以上も一緒にいてそんなに信じられねぇかよ！」

何で佳の腕をそんなに強く握ってんだよ。何で佳に怒鳴ってんだよ。

「頼ってたのは、信じていたのは」

佳が何も出来ないまま俺を見ている。

こんなにも細く弱々しい佳の腕。力なら俺の方が上だろう。知って見て触れて改めて気付く。佳は本当に女だったんだと。捕まえてしまえば簡単に逃げられなくなる。押し倒してしまえば動けなくなる。力づくで触れようものなら弱々しく壊れてしまう。自分が女だって言うだけで泣くほど脆く弱い。

「俺達だけだったのか」

「……」

否定も肯定もせず黙ってただじっと俺を見ている佳。

否定をしてくれる。そう思っていた俺は更に苛立ち最悪な言葉を口にした。

それは、暴力で理不尽で凶器で殺気で。

それは、絶望で憎悪で否定で拒絶で。

そしてそれは、望まない悲痛の叫びでもあった。

「お前はもう仲間じゃない」

何、言ってんだ俺。仲間じゃない？　そんな酷いことっ！

「佳今のはっ」

違う。そんなこと思ってない。そう言おうとして佳の顔を見る。

……何で、

「……そっか」

何でそんな顔が出来るんだよ。冷たい、そんなことはどうでもいい様な冷めた表情のまま涙を流している。ゆっくりと、流れる佳の涙。泣いてることに気づいてないのか冷めた態度のまま気丈に振る舞う佳。全ての言葉を失った。言い直そうとした言葉も、謝ろうとした言葉も、頼って欲しいと言う言葉も、声にはならなかった。

「わかった」

力が抜けきっていたのかあっさり俺の腕を外し立ち上がる佳。

「……バイバイ透麻」

待て。そんな言葉も言えずただ出て行く佳の背中を見ていることしか出来なかった。

「クソッ！」

壁を強く殴る。拳が痛むがそんなの気にしてはいられなかった。腹が立つ。噛み砕くつもりで歯軋りをする。情けない。悔しい。あんなに一緒にいたのに、あんなに一緒に笑っていたのに、何も話してくれなかった。頼りにされていなかった。そのことにも十分腹がたつけど、何より煮え繰り返そうな程腹立たしくて、殺してやりたいほど情けないのは、出て行く佳に何も言えなかった自分。ムリして気丈振る舞ってるのをわかってたくせに何もしてやれなかった自分。思ってもないことを言って泣かせてしまった自分。

そして、佳のことを何一つ知らなかった自分に一番腹がたつ。

「……何して来たんだよ俺は」

十年以上も一緒にいて、俺は一体何してたんだよ！

來優は、汐姫は城道は知ってるんだろうか。いや、知ってたとしても刺青があるということだけか。佳から話すんなら皆に言う筈だからな。てことは誰一人として佳のことを知らないってことか。

「本当に、何してんだろうな俺達は」

携帯を取り出し電話をかける。数回の呼び出し音のあと電話に出た。

『何だよ。私今忙しいんだけど』

「……來優」

壊れた玩具　ナツ

かなり夜が涼しくなって来た。もう肉まんを食べながら歩ける程にだ。もう夏が終わって秋が来たってことか。そういえば、あの日以来あの人を見なくなったな。元々仲が良いわけでもよく話をするわけでもないからあの人にとっては私なんかどうでもいい存在なんだろう。まぁ仕方ないことだ。話す機会ならいくらでもあった。あの人は大抵倉本が帰る頃に現れていた。倉本と仲が良いんだろう。毎回とは言わないが何回も見ていたからわかる。その時に話そうと思えばいくらでも話すことはできた。毎日毎日話題も考えていた。けど恥ずかしいという理由で話せなかったんだから私が悪い。

はぁ。私ってこんなに意気地なしだったかな。あの人と話てから変だ。初めて格好いいと思い初めて好きになった人。何とかこの思いを伝えたいんだけどな。どこにいったんだろうか。

肉まんを一口頬張る。あったかいな。肉まんは好きだ。心があったかくなる。

「ほら早く来いよ」

「本当に抵抗しねぇな」

……もう夏は過ぎたというのに。あ、バカは年中バカのままなのか。ジャージ姿の女子の手を引き公園に連れて行く男二人。女子は、怖くて動けないのか、抵抗をしてなくされるがままだ。うーん、ダメだな私。放っとけばいいんだけど、見てしまったんだからそういうわけにもいかない。

「脱げよ」

「……」
「さっさと脱げ」
「そういうやり方じゃ女の子はおちないよ」
後ろからぽんと肩を叩く。気づいた男二人が一斉にこっちを見る。
「何だ、お前」
「お前も相手して欲しいのか」
「私もう決めた人がいるんだ。それにお前らのようなバカにしてほしくない。どうせ自分が気持ちよければいいんだろ？」
欲求不満のバカが。
「なめてんのか」
「やっちまうぞこら」
「やるって？　私に勝てるのは三年の化け物達くらいだぞ」
「意味わからねぇことばかり言いやがって！」
「死ねやぁ！」
殴りかかって来た男の拳を避け、足をかける。呆気なくその場に倒れた男の上にさっきと同じ動作でもう一人の男を転ばす。
「言っとくけど私、空手柔道剣道の有段者だから」
「……ちっ」
「ふざけんなよ」
ぶつくさ文句を言いながら去っていく。
「やっぱりバカだな。嘘に決まってるだろ」

男達が見えなくなったあたりで呆れたように声をだす。
さて、と。

「もう大丈夫だよ。ほら早く帰りな」

ジャージ姿の女にそう言うが女子は下を向いたまま何の反応も示さない。
そういえば、この子どこかで見たことあるな。髪の毛が、そうだ倉本そっくりなんだ。でも、倉本のような感じが全くしない。別人だろう。

「ほら、早く帰らないとまた変なのに絡まれるぞ」
「……」

肩を掴みそう言うとゆっくり女子は顔を上げた。

「……倉本、か？」

虚ろな瞳のまま涙を流しているそいつは微かに聞こえる声でごめんなさいと呟いた。どうしたんだ倉本は。直接面識はないから倉本は私のことを知らないだろう。でも私は倉本を知っている。少なくともこんな死んだような目をした奴じゃない。心ここにあらず、その言葉が一番合う。ここにいる倉本は抜け殻見たいだ。

「……ごめんなさい」
「なに、言ってんだ？　何で謝るんだよ」
「……ごめんなさい」

何かあったのか？　いや、あったんだろうな間違いなく。こんなに壊れる程悲しいってことは、仲間関係か。

「敵に塩おくるつもりはない、が」

もうあまり関係なくなったしな。それにあの子の友達だし、あの人とも仲がいい。仕方ない、今回だけ助けてやるか。

携帯電話を取り出し番号を入力する。生徒、おもに煩わしい奴の番号は覚えてる。

「言っとくけどお前の仲間にかけてるわけじゃないからな」

「……」

仲間にかけてやる程お人好しではない。それに仲間と何かあったんなら今は会わない方がいいだろう。あれ？　待てよ。だったらあえて仲間にかけない私ってお人好しなんじゃ……。あー、もうっ。

「貸しだからな。今度恭優先輩を紹介しろよ」

「……」

無言のまま泣いてるだけの倉本。なんなんだ、やりにくいな。まるで私が泣かしているみたいじゃないか。面倒くさい。

『誰だ？』

「お前の家から五百メートル程離れた所にある滑り台の無い公園に倉本を置いとく」

待て、とか色々と聞こえるけど全部無視して電話を切る。アイツならさっきのヒントだけでここに来るだろう。まぁ、十分くらいはかかるかな。

「あと十分もしたらお前のファンが来るからな」

「……」
「聞いているのか」
「……」

こいつ……。

「何があったか知らないけど、お前案外壊れやすいんだな」

面白くない。もっと壊しがいがある奴だと思っていたのに。身内同士で壊れてくれるとは。元々私が手を下す必要はなかったか。まぁ今はそんな事必要なくなったけど。それにしても、これじゃまだ倉本のファンの方が壊しがいがあったな。

「……半分受け売りだけどさ、何があったか知らないけど、お前達の絆ってそんなに弱くないだろ」

ずっと前保健室で聞いたアイツらの言葉。人の為に強くなれる奴何て滅多にいないんだぞ。人間結局は自分が一番だからな。あんなに凄い仲間がいるのに何でこいつはこんなに脆いんだ。何でこいつは自分と仲間を信じてやれないんだ。

「まぁ、私には関係ないか」

……少し居すぎたな。まさかこんなに早く来るとはな。足を一歩前に動かす。風を切る音共にさっき私の頭があった位置を人が通過した。ご丁寧に宙に浮いた足からだ。

「ご挨拶だな。そんなに根に持っているのか？」
「ああ、ショックだったんだぜ。オレがまさか手も足も出ないなんてな」

倉本とは違う、一切他の色を受け付けない赤髪のそいつは倉本と私の間に入った。私が倉本に何かしたと思っているのか？

「じゃあ私はもう帰る」

「なっ、待て！」

「お前の相手してる暇はないんだ」

ほら、沢山買っておいた肉まんが冷めてるじゃないか。

「もう一度だ！　次あったらもう一度オレと勝負しろ！」

呆れた。あれだけやられといてまだ私とやりたいのか。本当に呆れる。だけど……まぁ、そんなバカは嫌いじゃない。多分私もバカなんだろう。

次あったらな。と振り返らず漏らす。聞こえたかどうかはわからない。ただああいうバカは聞こえてなくても次あったら勝手に突っ込んでくるだろう。純粋に、真正面から。

それにしても気にかかる。あんなになるまで壊れるなんて。倉本の孤独、か。まぁ、別に私には関係ないし、アイツには良い仲間がいるから大丈夫か。あとは本人がもう少し周りを信用したらいいんだけどな。

「……早く帰って肉まん食べよう」

倉本のことは忘れよう。私の出る幕じゃない。

「このっバカ野郎が！」

……ここでもケンカか。まぁ、さっきみたいな犯罪的な雰囲気じゃないから放っとくか。殴ったの女みたいだしな。そんなことより私は早く帰って肉まんが食べたい。

壁に強く背中をぶつけた。殴られた頬も、壁に激突した背中も十分痛い。けど……。

來優が肩で息をしながら距離を詰めてくる。胸倉を掴み、力の入ってない俺を自分の近くにまで持っていく。怒り。來優の目からはそれしか感じ取れない。

「このバカがっ！」

もう一度頬に強い痛みを感じた。痛い。ズキズキと痛むし青く腫れ上がっているだろう。けどやっぱり所詮こんなもんだ。俺は知っている。もっと痛いものを。來優も知っている。殴られるよりも、蹴られるよりも、刃物で刺されるよりもずっと痛くて、ずっと悲しいものを。

「わかんだろ。わかってただろ！　なのに」

來優の振り上げた拳が俺の顔に下ろされる。來優が家に来て何回目にもなる痛みがまた俺に襲いかかる。

「何であんなことを佳に言ったんだよ！」

振り下ろされる拳が顔の寸での所で力なく止まる。弱々しく、震える両腕でもう一度胸倉をつかみ、掠れた声で來優は怒りをぶつけた。

「透麻、どうしてなんだよ……」
「……わりぃ」

謝ることしか出来なくて、情けなさすぎる自分の拳を強く握りしめた。

バンっ！

強くドアがあけられ、次の来訪者が姿を表す。二人は俺と來優を見たあと無言で俺の目の前まで歩いてきた。

「……來優が殴ってなかったら僕が殴ってたのだ」
「……もうボクの殴るとこないじゃん」

城道と汐姫が俺を一度キツく睨んだあと、少し表情を和らげた。メンバーは集まった。大事なのはこれからだ。これからこいつらを呼んだ意味が出てくる。

「なぁ、お前らは佳の背中に刺青があったこと知ってるか？」

俺の問いに來優は訳がわからず目を丸くする。だけど、城道と汐姫は違った。心当たりがあるんだろう。僅かに表情を変えた。

「佳が、言ったのだ？」
「いや、偶然見た。お前らもか」
「うん。佳様の部屋に忍び込んださいに」
「僕も似たようなものなのだ」

そうか。二人とも俺と同じでいつ入れたのかはわからないのか。でも、アレを見たんなら感じた筈だ。生まれた筈だ。嫌な予感が。

「お前らも、感じたよな。変な違和感を」
「嫌な感じはしたのだ。けど、佳に聞ける筈がないのだ」
「うん。佳様から言ってこないってことは……、そういうことだから」

汐姫が悲しそうな声を出す。やっぱり佳からしたら俺達は頼りにならないのか。それとも俺達が感じた嫌な予感は話す程のことじゃないのか。

どっちにしろもう俺のすることは決まってる。あのバカが話さないんなら、頼ってこないんなら、こっちが勝手に調べてやる。余計なお世話だろうがお節介だろうが何て思われても気にしない。それにあの鬼を俺はどっかで見たことがある。どこか、暗い所で……。

「よし。俺明日から別行動とるわ」
「どうしたのだ？」
「誰かが世話やかないといけないだろ。ちょうど俺佳を傷つけたし、ちょっと調べてみる」

心当たりはある。微かにある記憶の道筋。風景。それを辿ればわかる筈。

「透麻そんな勝手なこと許さないのだ」

城道が反対するのもわかる。佳があそこまで頑なに話さなかったってことは知られたくないことっていう可能性もある。だけど、佳にあんな顔をさせたくない。あんな冷たい表情で涙を流して欲しくない。けど佳は頼ってくれない。なら俺に何が出来る。勝手に調べて、その根源を無くすことだろ。無くせなくても根源を知りそんなものどうでもいいと佳を安心させることだろ。だから退くわけには

いかねぇ。

「城道、いいよ。透麻の好きにさせよう」
「來優……。わかったのだ、好きにすればいい。けど」

城道が俺をキツく睨む。微かに敵意を帯びた瞳は俺の脳を少し怯ませる。

「ちゃんと見つけるのだよ。そして、佳に謝るのだ」
「わかってるよ。じゃ、佳のこと頼む」

本当は明日にでも行って謝りたい。本当は早く何時も通り笑いあいたい。だけど、ダメだ。傷つけてしまったんだから。そんなに簡単に元通りにはなれない。それに、知ってしまったんだから。自分の無力さを。

ごめんな佳。明日から一人欠けるけど……、城道達と元気に笑ってくれ。

キツく拳を握る。強く意思を込めて。

「ボクは、」

ずっと黙っていた汐姫が呟く。低く、重い声色で。掠れた泣きそうな声色で。ぽろぽろと涙を流しながら汐姫は続けた。

「佳様のなんなんだろう……」

汐姫だけじゃない。その言葉は俺達全員にあてはまる。だからこそ、俺は別行動をとる。だからこそ皆には佳の近くにいて欲しい。これ以上佳を悲しませたくない。

「……佳の姉さんがさ」

重たい空気を來優の声が一掃した。気圧されたのかいつもより小さい声だけど透き通るように俺達の中へ届く。

「私達に佳を笑顔にしてくれてありがとうって言ったんだ」

下げていた頭をゆっくりとあげてその声に耳を傾ける汐姫。涙はまだ流れてる。けど、さっきの声みたいな悲しそうな表情は少し和らいでいた。來優が笑顔で最後の言葉を口にする。俺達の中の希望を言葉で表す。

「私達は佳を笑顔に出来る存在なんだよ。それって凄いだろ」

そう言い來優は微笑んだ。汐姫を安心させるため。自分を安心させるために。來優の言葉をきき、笑顔を見て汐姫の流れていた涙が止まる。まだ瞳は潤んでいる。けど、確かにその中に強い力を持っている。

「うん」

力強く汐姫が頷いた。

……よっしゃ。くしゃくしゃと汐姫と來優の頭を撫でる。滅多にしない行動に自分でもびっくりしたけど、目を丸くして一番驚いている來優の顔を見ると自然と笑いが込み上げた。

「もうっ、やめてよ透麻」

「やめろバカ！」

不謹慎だけど、少し嬉しい。佳を傷つけたあとだけど、何か更に

絆が強くなった気がする。

「約束覚えてるか」

來優と汐姫の頭から手を離す。約束。随分前にした俺達だけの約束。

「当然なのだ」

「忘れるわけないだろ」

「覚えてるよ」

三人ともちゃんと覚えてる。やっぱり俺達はどうしようもなく佳のことが好きなんだな。

「踏ん張り所だ。佳のこと頼んだぞ」

「透麻も頑張るのだよ。何の成果も得られないようなら覚悟しとくのだ」

「バァカ。俺を誰だと思ってる」

「ただのバカ」

「バカだよね」

「バカなのだ」

……さすがにその認識は酷いだろ。

「冗談なのだ。じゃあ僕はもう帰るのだ。抜け出して来たから母上にバレると怒られるのだよ」

「ボクも茜さんが心配してるから。バイバイ透麻」

城道と汐姫が帰って少し静かになる。來優は俺を殴るさいに散らかった椅子や食器などを片付ける為に残ってくれた。何だかんだ言って律儀な奴だ。

「片付け終わったな。じゃあな來優」

もう居る理由がない來優に帰るように言う。外は真っ暗だ。何があるかわかったもんじゃない。來優を痴漢しようとして誰が怪我するかの心配だぞ。來優の心配じゃねぇからな。

じっと俺を見たまま動かない來優。

「どうかしたか？」

あのうるさい來優が静かだ。何かあったのか？

「……透麻、佳は」

震える声で話す來優。目に涙を浮かべ何かを必死で伝えようとする。佳が、なんだ。何で泣いてんだ來優。

「不幸になるんだ」

「……おい、何言ってんだよ」

いくら來優でも、そんな狂言許さねぇ。佳が不幸になる？　そん

なわけねぇだろ。さっき來優が言ったじゃねぇか。佳を笑顔にできるのは俺達だって。なら俺達が離れない限り佳は笑ってるんだぞ。不幸になるわけねぇだろ。

「本当、なんだ」

「いい加減にしろよ。さっきお前が言った言葉はなんだよ。嘘だったのか！？」

僅かに首を横に振り否定をする來優。ぽろぽろと涙が頬を伝い落ちる。嘘を言ってるようには見えない。本気で言ってるようにしか見えない。

「佳の、姉さんが言ってた。私達じゃどうしようもないって……」

「……そうか」

佳の秘密、思ってるよりでかそうだな。佳の姉さんはそれを知っている。けど、來優が知らないってことは教えてくれなかったんだろう。つまり俺達に教える気はないってことか。……佳のことを想ってだろうな。

「どうしよ、透麻ぁ。佳が不幸になるのに、私達は何も出来ないんだ。……笑顔に出来る存在のくせに、不幸から救うことは出来ないんだ」

何でこいつはいつも泣くまで一人で抱え込むんだ。佳も、汐姫もそうだ。誰にも話そうとしない。汐姫の場合は迷惑をかけたくなかったらしいけど、それがなんだ。迷惑をかけて、一緒に悩んで一緒に困るもんだろ。それが仲間だろ。何でそう一人で抱え込むんだよ。話してくれることがどれだけ嬉しいか。

頼ってくれることがどれだけ嬉しいか。

一人泣かれることがどれだけ悲しいか。
一人抱え込まれることがどれだけ寂しいか。
大事な人の泣く姿を見ることがどれだけ腹立たしいかわかるか。
心配もする。悲しくもなる。でも、何より泣くまで頼られなかった自分の情けなさに腹が立つ。汐姫にしたって來優にしたって佳にしたってそうだ。俺と城道がいるだろ。男が二人もいるのに、そんなに頼りにならないか。
こりゃあアレだな。今度城道と話しあってこいつらに説教だな。もっと俺達を頼れって三時間に渡って説教しねぇとな。気が強いのは結構。優しいのは結構。だけど、俺達だって男だ。それに仲間だ。頼られて迷惑だなんて感じるわけがない。頼られて怠いなんか思うわけがない。本気で城道と話し合おう。そして本気で説教しよう。もちろん佳の事が終わったあとで。佳の姉さんの言う不幸をぶっ壊したあとでな。
とにかく今は目の前のバカを安心させるか。一人で抱え込み泣いているバカを。

「大丈夫だ」

優しく頭に手を置く。震えている細い肩が一瞬ビクっと上下に跳ねた。そのまま全く力を込めずに頭を撫でる。

「俺に任せろ。その不幸の正体調べあげるから、皆でぶっ壊せばいい」
「でも、佳の姉さんは……私達じゃむりって」
「ムリじゃねぇさ。俺達に出来ないことはない」

根拠はない。けど俺は本気でそう思ってる。今までだってそうだった。不可能と言われた校舎内全窓からのロケット花火一斉発射だって出来たし、教師、不良、警察を混ぜた街中鬼ごっこだって結局

当日は逃げ切った。やれば俺達に不可能なんてない。だから、な。

「安心しろ。お前が一人で泣くことはねぇんだよ」

「……うん」

まだ声は震えている。まだ涙は流れている。けど、もう大丈夫。

泣きながらも僅かに微笑んでいる。

「ありがと、透麻」

涙を流しながらも笑ってそう言う來優。いつもそう素直だったら

可愛いのに、って俺はバカか！　來優相手に可愛いだと!?　ない

ない、ないわぁ。絶対ないわぁ。

「ちょっと、元気でた」

指で涙を拭いながら笑ってみせる來優。

ないけど、絶対とは言い切れない……かも、知れないな。やっぱ

り俺バカかも知れない。

日記　紅妃

「ついたぞ」

一歩後ろを黙って歩く倉本にそう伝える。倉本の家の場所は知っていた。何たってオレは生徒会長だ。全生徒の家の場所くらいは把握している、……わけじゃないぞ。べ、別にいいじゃないか。気になる奴の家の場所くらい調べたって……。まぁなんやかんやでずっと下を向いたままの倉本の手を取りここまで連れて来た。さりげなく手を繋げてラッキーとか決して思ってないぞ。つ、繋いでないとダメな気がしたんだよ。なんとなく。

ガチャリ、と倉本のポケットから鍵を拝借し、ドアを開ける。入っても、大丈夫だよな。ここまで送ったわけだしな。

「お、お邪魔します」

倉本からどうぞという返事は返ってこない。ここに来るまでにも何度も会話をしようと試みたけど返ってくる返事はごめんなさいとかよくわからない一言だけだ。倉本に何があったか全く検討がつかない、が。

「いつまでもそんなんじゃ困る」

「……」

ベッドがあるから倉本の部屋なんだろう。そこについた所で倉本と向き合う。オレは気の強い倉本を見てきた。掴み所の無い倉本を

見てきた。一人ふわふわとしていて、でも中心にいる倉本を見てきた。そんな倉本だから憧れた。

「今のお前じゃあっさり倒せそうだ」

「……」

やっぱり返事は返って来ない。

「……何があったんだ」

来るさいに何度もした問いをする。そして来るさいと同じその問いの答えは返ってこない。何一つオレの言葉に耳を貸さない。いつもの倉本ならあっさりオレに手を握らせない。あっさりオレを自分の部屋に入れないだろう。だってオレは――。

ベッドに倉本を倒しその上に乗る。倉本の両手を頭の上に持っていき片手で握り固定する。

「オレを敵だってこと忘れてねぇか？」

オレは倉本の敵だ。部活部の敵、生徒会だ。そしてオレは、

「あとお前に憧れてるってことも忘れてねぇか」

倉本に顔を近づける。目と目が近くなり唇との距離が数センチになる。

「いいんだぜオレは女でも。抵抗しないんならこのままやるぞ」

「……」

……反応なしか。コツンと額を倉本の額にくっつける。本当は唇

を奪ってやりたかったんだけど、今の倉本は倉本じゃない。

「おもしろくねぇ」

手を離し両手を解放する。こんなもんだったのか。オレの憧れてた奴はこんな感じに壊れるものだったのか。

「……もう、どうでもいい」

倉本の上から退けようとしたら倉本がぼそりと呟いた。両手で泣いている目を覆い隠し、震えている唇を弱々しく噛み締めている。

「どうなっても、いい」

「どういうことだ？」

「どうせ忘れるんだから、ぜんぶ。今嫌われても、かまわない」

今日倉本と会って初めて成立した会話。意味がわからない。けど不吉な予感がした。忘れる？　全部ってどういうことなんだ。嫌われるってことは、誰か仲間に嫌われたのか。

「けど、ごめん。今日だけは……」

「……胸、貸してやろうか」

男みたいに頼りになるような、包み込んでくれるような固くて広い胸じゃない。柔らかくて膨らんだ胸だけど、こういうのは何かに支えて貰った方が安心する。鼓動を聞いていたら安心する。

「胸貸してやるから、今日だけは思う存分泣け」

倉本の上から少し離れ両手を広げる。小さい子をあやす母のよう

な。迷子に手を差し伸べる優しさのような母性愛にも似た感情を差し出す。倉本は一瞬戸惑ったあとオレの胸にゆっくり飛び込んで来た。ぎゅっと後ろに手を回し優しく抱いてやる。

憧れてた奴は思っていたより強くなかった。スーパーマンや機械人間みたいに完璧な強さじゃなかった。人間らしい弱さがあって、他の人間より壊れやすいのかも知れない。普段は気も強いし、ケンカも強い。頭も良いし、殆どのことは余裕でこなす。けど、今見たいに弱い一面もあった。不思議と落胆はなかった。ただ、前以上に憧れは強くなり、前にはなかった愛らしいと思う気持ちが芽生えた。自分の胸の中で泣く気丈な少女を可愛いと思ってしまう。守りたいと思ってしまう。何だろうなこの感情は。オレは……倉本の仲間になりたいのか。違う。オレはライバルでいたい。本気で力をぶつけ合えるライバルでありたい。だけど、たまにはいいか。ライバルを助けるっつうのも悪い気はしない。

「とうま、ごめん」

ああ、なんだ。ずっと言っていたごめんなさいは海本に言ってたのか。こんなに壊れたのは海本と何かあったのか。あれだけ仲がよかったんだ。壊れても仕方ない。他人から見ると恋人同士に見えるほどに仲がよかったんだから。

「ぁぅっとうまぁ」

暫く倉本は泣き続けた。やがて泣き声が聞こえなくなり、様子を見ると泣き疲れて寝ていた。

「……子供か」

起きないようにゆっくりとベッドに倒してあげる。

「んー、困ったな」

ポリポリと頭をかく。憧れているってのはもちろん嘘じゃないし、ライバルでいたいって感情も嘘じゃない。けど、

「体を重ねたいってのも嘘じゃないんだよなぁ」

オレ、男と女どっちでもいけるからな。それに今特に付き合ってる奴もいないし、別に襲ってもいいんだけどな。

「無防備の相手っつうのは……やめとくか」

柳生や蒼空辺りに殺されそうな気もするからな。

さて、と何をしようか。ぐるりと部屋を見渡す。大して散らかってない。ていうか物がない。ベッド、机、タンスそれぐらいしかない。よく生活できるな。ゲームも何もない部屋を一通り見渡してそう思わずにはいられない。散らかっていたら片付けでもしてやろうかと思ってたんだが、必要ないな。他にすることは……。

そう考えを巡らしていたらある事に気づいた。ちょっとした違和感。天井の一角だけ木目が違う。全体的に縦に薄い線が入っているのにあそこだけその線が横になっている。

「これは」

多分あそこは開くんだろう。倉本が開いて閉じる時に向きを間違えたってことだと思う。暇だし、直しとくか。

「よっと」

椅子に乗り両手で押してみる。ガクンと板が外れた。

……天井裏、か。開け閉めしてるってことは何かを置いてるんだろうか。

「ヤバいな」

好奇心が背中を押す。ちょっとだけ、何を置いてるのか見るだけ。好奇心に負け、天井裏を覗く。

「ダンボール？」

それも複数の。何が入ってるんだ？　一つを取り出し床に置いた。あとで戻せば問題ないよな。

ダンボールの中身を確認する。見た目簡素なノートがびしっと詰めてあった。何のノートだろ。授業のノートっつうのは、有り得ないな。天井裏にしまう理由がないし、保管しとく理由もない。じゃあ一体……？

くそ。倉本の奴、的確に好奇心をくすぶるようなことしやがって。見るしかないだろうこれは。

上に積み重ねてある適当な奴を手に取る。何の絵も描いてない表紙を一枚捲る。

「……日記か？」

へぇ、意外と可愛いらしいことしてるじゃん。

一ページ目を読んで行く。海本達と色々な遊びをしたことが書いてある。本当に仲が良いんだなぁ。パラパラとページを適当に捲り真ん中辺りで止める。

ここにもやっぱり遊んだことが書いてあった。

「仲良いなぁ」

上から順に文字を目でおっていく。けど、途中でおかしなことに気づき視線がその文字で止まる。そういえば一ページ目にも書いてあったこの文字。次のページを開きまたその文字を見つける。次もその次も……。

「なんだ、これ」

『忘れたくない』

その文字が多く書かれていた。

忘れたくないって、普通は楽しい思い出なんて忘れたくないもんだろうけど、そんな頻繁に忘れたくないなんて書くもんじゃないだろ。これじゃまるで怯えてるようだ。忘れることに、忘れてしまうことに。忘れることが確定事項のように書かれている。

日記の最後のページを見る。そこには忘れる恐怖に駆られた思いが延々と書かれていた。泣き言のように誰にも頼れないことと、忘れてしまうことと、この事を知られたら嫌われるんじゃないかって言うことが書いてある。

海本達は知らないんだろう。この日記の感じじゃ倉本は誰にも言ってない。だったら今日のこの壊れようはこの事がバレたからか？

それとも嫌いとでも言われたのか。

手に持っている日記を無理矢理折り上着のポケットに入れる。ダンボールを元あったように閉め天井裏に戻した。

「……倉本」

別に仲間でも友達でもないこのオレがショックを受けたんだ。仲間なアイツらはこの事を知ったらどういう風に感じるだろう。少なくともオレは海里とかにされたら裏切られたように感じる。アイツらは、倉本のことを信じきっているアイツらは何を感じるんだろう。何をするんだろう。

日記を読む限りオレには助けることが出来なくて、忘れてしまうことは回避出来ない未来で、そう遠くない未来に起こること。

「……」

ゆっくりと部屋を出ていく。何かが出来るとしたらそれはオレじゃない。倉本を救うことは出来ない。ならオレはどうすればいいんだ。このまま何もせず、ただずっと見てるだけなのか……。

何か、何かある筈だ。理事長に、問いただしてみるか。あの人なら知っている筈だ。倉本の姉なんだから。

静かに、倉本を起こさないように家を出た。明日、とにかく明日聞いてみよう。

いないいない　佳

ここは、どこだ？　周りが薄暗く数メートル先がうっすらと見える。けど、見える範囲に壁や物は無く、何にもない空間にぽつんと立っているみたいだ。

どこなんだろう。今日は確か透麻の家に泊まる予定だったんだけどな。

『佳』

背後から名前を呼ばれ振り向く。後ろには城道達が横に並んで立っていた。一人じゃないことに少し安心する。けど、少し変だ。城道達は皆自分の両手で顔を隠している。

「……何で顔隠してるんだ？」

聞いても答えが返ってこない。何かのゲームなのかな。

『佳、僕は誰なのだ？』

「誰って、城道だろ」

よくわからない質問だな。俺が答えられない筈はない。何年一緒にいると思ってるんだ。

『じゃあ僕はどんな顔なのだ？』

「どんなって、城道の顔は……、」

言葉が詰まる。何で、何でだよ。城道だろ。城道の顔だろ。そんなの、

『佳、私の顔は？』

「來優の顔は、」

『佳様ボクの顔はどんな顔ですか？』

「汐姫のは、」

何で、何で來優や汐姫の顔もわからないんだ。思い出そうとしても靄がかかって思い出せない。

何で、何で――、

『じゃあ佳、俺の顔はわかるか？』

――透麻の顔を思い出せないんだよ。

「っわからない。思い出せない」

さっきまで遊んでたのに。泊まりに行く約束をしてたのに。一緒にご飯を作ったのに。一緒にテレビを見たのに。何でなんだよ。

……そっか。もうここまで進んでいるのか。

「……ごめん、皆」

俺は……。

「皆のこと、わからないよ……」

視界が歪む。そうだ、俺は泣いてたんだ。透麻に酷いこと言って、

自分勝手に泣いていたんだ。涙で歪んだ視界で上手く見えない筈なのに、両手で顔を隠していてわからない筈なのに、城道達が悲しんでいるのがわかった。俺と同じで泣いているのがわかった。

自問自答　透麻

記憶を頼りに歩いて来た。バラバラのパズルを埋めるように記憶の欠片を繋いで行く。そうやって行き着いたのが一つの古びた神社だった。

「こんな所に神社なんてあったんだな」

俺ん家からそう遠くない。汐姫の家からも遠くない。だからこの道は遊びに行くとき通るんだけど、脇に神社があるなんて知らなかったな。いや、記憶を辿って着いたってことは知ってたんだろうけど、気にも止めなかっただけか。

なんにせよ、佳の刺青（いれずみ）の鬼はここにある筈だ。まだはっきりとしない記憶だけど、間違いは多分ないだろう。でも何かが足りない。まだパズルが完成しない。

「見てみりゃあわかるか」

完成してなくてもここに何かがあるのは間違いない筈だ。

外観は何処にでもあるような古びた神社だ。一応周りを一周してみたけど鬼らしき像も絵も見当たらない。

「やっぱ中を見るしかないか」

短い階段を登り賽銭箱の目の前に立つ。

「土足、でもいいよな」

単に靴脱ぐのが面倒なだけなんだけど。財布から十五円を取り出し賽銭箱の中へと投げる。

神様もこれで土足で上がることを許してくれるだろ。

手を合わせ、これからすることの許しをこう。

さて、とじゃあ行くか。賽銭箱の横を通り抜け奥にある大きな扉の前に行く。当然南京錠が掛けられていて入られることを拒んでいた。

やっぱ鍵くらいかけてるよな。でも躊躇いはない。遠慮もないし、手加減もしない。邪魔する物は壊すだけ。見てる人がいないか全く気にもしないでその無駄に大きな扉を力の限り蹴破った。

大きな音がした割には小さな穴しか開いてない。まぁ少し姿勢を低くすれば入れるから良いとしよう。

「よっと」

尖って剥き出しになっている破片に当たらないようにその穴から中へと入る。

「っなんだ、これ」

朝っつうのに暗くて、壁天井一面に飾られた鬼の面が俺を睨む。気味が悪い。不気味だ。それ以上に……。襲ってくる思いは不安。暗くて冷たくて、孤独だ。一歩踏み込んだだけで心が挫けそうになる。たかが一つの鬼の面に睨まれていると知っただけで心を折られそうになる。その面が数えきれない程の数あってその全てが睨んでいると知って涙を流し塞ぎ込みたくなる。

何だよ、ここは！

「……くそ」

足が震える。じわりと汗がわき出す。思い出したくないことをつつかれてるよう、心の闇を覗かれてるようだ。
どうしようもない孤独感に襲われる。それにガクガクと奥歯を鳴らして体が警報を出す。逃げろ。ここから離れろ。逃げちまえ。
ダメだ。何のために来たんだ。俺達の、佳の為だろ。

『逃げろよ。佳なんてどうせ他人だろ？』

声がして前を見る。酷く見に覚えのあるような口調で淡々と喋るそいつはニヤニヤと笑っていた。

「っントに、なんなんだよここは」

何で“俺”が目の前で喋ってんだよ！

『昨日のアイツの態度見たろ？　アイツは俺達を仲間とは思ってなかったんだぜ』

うるせぇ、黙れ黙れ。

『所詮アイツにとって俺達はその程度だったんだよ』

うるせぇんだよ。黙れよ。

『逃げようぜ。もういいじゃねぇかあんな奴。あんな奴の為に苦しむ必要はねぇだろ』

……くそ、が。
ダメとわかってるのに足が前に進まない。心がどんどん後ずさっ

ていく。諦めの心が出てくる。

『そうだ、そのまま下がれば楽になれる』

気づいたら後ろに一歩踏み出していた。

「うっ、くそが」

止まれよ。何勝手なことしてんだ。止まれって！

「止まれよクソ……」

言うことを聞いてくれない。俺の体なのに、勝手に後ずさっていく足を止められない。逃げている。心がもう諦めて逃げているんだ。

――逃げる？

「ふっざけんな！」

言うことを聞かねぇ足何ていらない。思いきり拳を叩き込む。足からくる激痛が後進を止めた。

「逃げるだと、なら俺はそんな心いらねぇ。逃げる足も心も諦めと一緒に捨ててやる！」

嫌そうな顔をしている目の前の俺を睨む。

「佳の為なら俺のモンを幾ら捨ててもいい。佳を助けることを邪魔してるモンなんかいらない」

もう一発思いっきり足を殴る。あまりの痛さに膝をつく。その姿に目の前の俺がうろたえたように声を震わせ喋る。

『なんで、あそこから立ち直れた。俺なら立ち直れないはずっ』

確かにもう諦めようかと思った。このまま従い逃げようかと思った。けど、そう思った時にあいつらの泣いてる顔が浮かんだ。佳の

汐姫の來優の泣いてる顔が。

「女を泣かしたら男として腐ってんだろうが。それに」

目の前の奴が本当に俺ならわかる筈だ。

「約束は絶対守る。それが俺だろ」

今まで数えきれない程約束をしてきた。どうでもいいものや、大切なもの。どれも守らないと駄目なものだ。そしてまだ守れてない約束が三つ。一つは佳を悲しませているものを見つけ皆で壊すこと。一つは小さい頃佳とした指きり。死ぬまでずっと一緒にいようっつう今思えばプロポーズにも聞こえる佳の言葉。そしてもう一つは――。

『……ちっ。わかってるよ。約束は守らないと駄目なことくらいな』

面倒くさい。そう思わせるような顔で俺を見て言う。

『足は持っていけ。前に進むのに必要だろ。だから不必要な俺を捨てていけ。諦め、逃げ、弱音全てを持ってってやる』

そう言うと目の前の俺の姿が薄れていった。もう殆ど黒と同化しかけているそいつは最後に笑った。楽しそうな笑顔を見せた。

『頑張れよ』

「っ！」

はっと我にかえる。何だったんださっきのは。わからない。けど、何でか知らないけどこの暗闇の中にいても、無数の鬼の面に睨まれていても何も感じない。挫けそうにも折れそうにも孤独を感じることもなくなっていた。

汗も引いてきた。いつまでも呆然と突っ立ってるわけにはいかない。鬼の面を見ていく。何十分経ったかわからない。やっとの思いで全部の鬼の面を見た。その結果わかったことが一つ。佳の背中に彫ってあった鬼は一つもなかった。

おかしいな。ここじゃなかったのか。けど、ここのように暗くて寂しかった場所だった記憶があるんだけどな。なんとなくだけど。

「……とにかく出るか」

出てもう一度思い返してみよう。もしかしたらここは関係無いのかも知れない。

「眩し……」

外は光に溢れていた。透き通るような青も、流れるような白も、さっきまで暗闇の中にいたから余計に眩しく感じる。手で影を作っ

てもその眩しさは防げなかった。さっきまでの情けない自分の背中を押してくれたのもこのくらい眩しいモノだった。眩しくて暖かい、大事な約束だ。

澄み渡り広がる群青な空の下で、風で優しく揺れる緑の上で。向日葵の黄色にも負けない、太陽の光にも負けない程の綺麗な金色（こんじき）の髪をした女の子が笑う。

『もしとうまが』

土を弄るのを止めてその子は続けた。

『わたしたちをまもれるんならとうまをしあわせにしてあげる』

偉そうににこっと笑いながら言うそいつはさっきまで土を弄っていた手を前に出し小指をたてた。

『しあわせってなんだよ』

仏頂面した男の子は鬱陶しそうに髪を掻きながら聞き返す。

『しかたないからおよめさんになったげるよ』

ただでさえ眩しいそいつの髪が光を反射してさらに眩しくなる。その眩しさに目を細めた。ほのかに赤く染まった頬が珍しくて印象に残っている。

その後俺何て言ったんだっけ。酷いことを言った気がする。何を言ったかは覚えてないんだけど、どうせ恥ずかしくてバカとか嫌だとか言ったんだろう。

まだ守れていない最後の一つ。

「好き、じゃあねぇと思うんだけどなぁ」

一緒に居すぎてわからねぇな。ただ、やっぱりこの約束を破ろうとは思わない。

まぁ、アイツはもう忘れてるんだろうな。

佳と出会う前、まだ三人だった頃に透き通るような空の下で交わした約束。城道も知らない二人の約束。

「……何だっていいか。とにかく今は佳だ」

「あら珍しいわねぇ」

神社の石段に座り考えていると杖をついた白髪のおばさんが驚いた声をあげた。何だ？　確かにこの時間に石段に座ってる奴は珍しいと思うけど、声が出る程のもんじゃないだろ。見られていることに気づいたのかそのおばさんは杖をつきながら歩いてくる。俺の隣に座るとおばさんは疲れたように溜め息をついた。

「驚かせてすまないねぇ。本当にこの神社に人が来るのは珍しいと思ってねぇ」

「婆さんこの神社のこと知ってんのか？」

「そりゃぁ知ってるよ。わたしゃ、生まれた時からすぐ隣に住んでるんだから」

「……ここに人が来るのがそんなに珍しいのか？」

「そうだねぇ。来るとしたら綺麗な銀色の髪をしたスーツの女の人と巫女さんぐらいかねぇ。あと和服の女の人もこないだ来てたかなぁ」

銀の髪、和服の女？

「な、なぁ婆さん、もしかして巫女さんの髪は黒と赤か？」

「そういやぁそんな髪だったねぇ」

佳だ！　間違いない。てことはこの神社はやっぱり佳に関係している。

「その人達は何しにここに来てんだ」
「さぁねぇ。ただいつも巫女さんが社の中に入って行ってるよぉ。それから、帰ったあとは何故だか石段に人が座ってるのさ。今のあんたみたいにねぇ」

佳があの中に。くそっ、だったら尚更中で何をしているかが大事なんじゃねぇか。

埋まると思っていたパズルがまた止まる。何か惜しい。惜しい所まで来てる気がするんだ。けど、何が惜しいのかわからない。神社、鬼の面、佳。足りない。これだけじゃまだ足りない。

「あんたは社の中に入ったことがあるかい？」

ギクリと一瞬背中が跳ねる。さっき扉を蹴破って入ったばっかりだ。蹴破ったことがバレたら何を言われるかわかったもんじゃない。

「い、いやないけど、婆さんはあんのか？」
「わたしもないよ。けど、中に何があるかは知っておるよ。鬼がいるんじゃよ、それはもう沢山の」

にやりと口をあけて笑う婆さん。何本か抜けた歯が、空気穴となってスースーと微かに音をたてている。

「安心せい、鬼と言っても鬼の面じゃ」

それは知っている。様々な鬼の面が無数に飾ってある。さっき嫌って言う程見たからな。

これ以上この婆さんからはロクなことは聞けないだろう。話すだけ無駄か。どうしようか、取りあえず一回家に帰って頭冷やすか。

「あれは鬼じゃない」

歩き出そうとした俺の足が止まる。何言ってんだ。確かに角がない奴もあったけど、どれも人の顔とは思えない程の形相だった。誰がどう見ても鬼を想像するだろう。

「わたしの祖母が生前に何度か話してくれたんじゃ。まぁ鬼にしか見えないじゃろうから鬼と言っても過言じゃないとも、言っていたがの」

「鬼じゃないんなら、なんなんだ」

婆さんはまた口をあけて笑う。

「“ヒト”だそうじゃ」

「人？」

あれが人なら作った奴の顔は相当酷かったんだろ。それか目か脳がおかしかったか。どれも正常であれを人として作ったのなら、やっぱりそいつは頭がおかしい。

「正確にはヒトの心だそうじゃ。鬼に見えるくらいじゃからヒトは相当醜い心を持ってるんじゃろうな」

「醜い、心」

じゃあ俺が中で見たアイツは俺の醜い部分だったのか？

「ははっ」

有り得ねぇ。そんな漫画やアニメみたいな話しがあるわけないだ

ろ。夢か幻覚に決まってる。幻覚だったんなら病院行った方がいいかも知れねぇけど。

「あんたはあの巫女さんと知り合いなのかい？」
「まぁそんなところだ」
「そうかい。ならあの事故は悲惨だったねぇ」
「事故？」
「知らないのかい？　ニュースにもなったのに」

婆さんは少し大袈裟に目を丸くして驚いた。

「ニュースあんまり見ないんで」
「そうかい」
「どんな事故だったんだ？」
「酷い事故だったよ。今はもう無いけど蒼空財閥って知ってるだろう。有名だった会社だよ」
「……ああ、知ってる」

知らないわけがない。汐姫の親の会社だったんだから。

「そこの夫婦が車でこの神社の本社に突っ込んだのさ。そこにいた若い夫婦がひかれて死んだのさ。多分あの巫女さんの両親だよ。本当に酷いことをするよ」

……聞いてない。そんなの知らなかったぞ。佳の両親が死んでることは知ってるし汐姫の両親も死んでるってのは知ってる。けど、汐姫の両親が佳の両親を巻き込んだなんて知らなかった。嫌、そんなことより異常だろ。何で自分の親を殺した親の子供と仲良く出来るんだ。汐姫の両親が死んだ時は覚えてる。佳は汐姫を慰めていた。それに葬式にも参加していたぞ。何で参加出来るんだよ。自分の親

も死んだんだろ。おかしすぎだろ。
　知らない所で佳と汐姫には何かある。いや、でも汐姫の昨日の動揺ぶりを見ると佳との間にそんな特別なことはないか。じゃあなんだ。佳と汐姫の間に何かあったんじゃないとすれは……。佳と佳の親の間に、それか佳と汐姫の両親の間に何かあったのか。
　……くそっ。考えてもわからねぇよそんな事。
　そういや佳から佳の両親の話しを聞いたことも全然無いな。俺達、本当に何も知らないんだな。

「そういや、あんたは一体ここで何をしてたんじゃ？」
「何をって……」
　そうだった。今はもっと大事なことを調べてたんだった。確か婆さんさっき本社っつったよな。ここの本社っつうことはここと似てるってことだ。そこに行けばわかるかも知れない。
「婆さん、本社の場所教えてくれ」

「ここか」
　本社は割と近くにあった。あの神社から歩いて一時間半ほど、自転車じゃ三十分ちょっとぐらいだろう。ただあの神社よりも人通りが少なく、周りに家なんか無く軽い森みたいな所の中心にあった。人通りの無い道の脇に足幅に合わせて木の板がしかれていて、どん

どんと森の中を案内していく。その板に従い踏み進んで行くと古びた鳥居があり、さらに真っ直ぐ行くとさっきの鳥居とは全然違う綺麗な神社が堂々とたっている。

婆さんが言ってた事故ってのは多分最初の脇道の所で起きたんだろう。その一点だけ木が不自然に間隔をあけていた。神社の入り口っつってたし、確かに神社への入り口だしな。

婆さんの言葉を思い返しながら神社の敷地に足を進める。

それにしても、ここはさっきの神社より暗い感じがしない。森の中はぐんぐんと成長した木の葉が陽の光を遮ってるから暗いっちゃあ暗かったけど、寒気がするような嫌な暗さじゃない。普通の日陰だ。

「こら！　立て札見なかったの。ここは立ち入り禁止よ」

後ろから注意の声が聞こえ一瞬肩が上下する。静かだった空間にぴんと張るような澄んだ声が耳を刺激した。大きな声だったけど、不愉快じゃない綺麗な声。ここの神主だろうか。とりあえず謝っておこう。振り向き頭を下げた。

「あれ、透麻くんじゃない」

「へ？」

相手が自分を知ってることにびっくりし頭をあげ相手の顔を見る。にこりと誰かを連想させるような笑顔で女の人は歩みよって来た。

「久しぶり。私のこと覚えてない？」

紅色の艶やかな着物を着ている物腰の柔らかそうな女の人。こんな美人を忘れるわけがない。何でもいいから悪口を言えと言われても全く出てこないほど、芸能界に入ればその容姿だけで一生食って

いけるだろうというほど綺麗な人。
外国人が見たら満票一致でどんな和服を着た美人よりもこの人が一番の和服美人だろう。俺がテレビや街で見たどんな美人よりも圧倒的に綺麗な人。そんな人を忘れる筈がない。こんな人を忘れる男がいたらもうそいつは男として干からびている。この人がコンビニで働いていたら九十代の爺さんでも毎日買いに来るぞ。
そうか。よく考えたらそうだな。いない筈がないか。だってこの人は佳の姉さんだもんな。この本社にいてもなんら不思議はない。

「どうしたの？　考えごと？」

無言の俺を心配したのか顔を近づける佳の姉さん。近い。吐く息が届きそうな程近い。ぼんっと意識していないのに顔が赤くなったのに気づく。別に好きじゃないんだけど、近くで見られるだけで勝手に鼓動が早くなる。
ば、化け物だ。理事長や佳といい、なんだよ。佳の血筋は美形揃いか。

「顔赤いわね……。熱かしら？」

ひんやりと程よく冷たい感触が俺の額に当てられた。

「う、うわっ」

突然の感触に、全身で驚きを表す。誰から見ても引くくらいに後ろに数歩下がった。
その様子をみてしゅんと悲しそうな顔を見せる佳の姉さん。

「ごめんね、私手が冷たくて」

や、ヤバい。俺は何悲しませてんだよ。相手はめちゃくちゃ美人だぞ。いや、その前に佳の姉さんだぞ。親友の姉さんを悲しませてどうすんだよ。何か、何か言わないと。

「い、いや……手が冷たいほど心が温かいって言うじゃないすか」

これが今まで生きて培って来た俺の力です……。

「ありがとう。嬉しい」

またにこりと笑う佳の姉さん。

へなぁ、と全身の力が抜ける。その笑顔は反則だ。ただでさえ綺麗なのに、佳にそっくりなその笑顔をされると……。

あー、くそっ！　抜けていた力をまた入れる。何してんだ俺は。ていうか佳の姉さん強敵すぎる。いろんな意味で。

「それで、ここに何しに来たのかな透麻くん」

空気が一変した。多分相手も俺が体に力を入れたのがわかったんだろう。ただ散歩に来たわけじゃないってことがわかったんだろう。素直に、率直に話した。何しに来たのか、どうして来たのか、佳と何があったのか。全て聞いた上で佳の姉さんは中に入るよう進めた。

「元々私達家族で住んでたのよ。思ったより広いでしょ」

入って一番の感想は佳の姉さんの言った通りだ。

佳が君達に何も話してないなら私から言うわけにはいかない。けど、協力するわ。可愛い妹の親友の頼みだもの。

そう言って快く協力してくれるのはありがたい。佳の姉さんに聞けたら楽に終わるんだけど、佳の姉さんの言ってることも尤もだ。協力してくれるだけで充分だろ。

「適当に中を探せばいいわよ」

その言葉を聞き終わる前に俺の足は長い廊下を突き進んでいた。佳の姉さんの声を背中からうっすらと脳に入れる。けど、そんなに探し回るつもりはない。何故か中に入った時から一つの確信があった。説明しろと言われたら出来ないし、勘だろと言われたらそれも違う。そんな大まかなものじゃなくて、なんだろうな。ずっと知ってた見たいに足が、脳が道を示す。ただそれに従って歩くだけだ。

そうして行き着いた先の襖を開ける。

「ここだ」

間違いない。ここで見たんだ。何時だったかは覚えてない。ただすごく暑い日だったってことは覚えてる。何で今まで思い出せなかったんだろ。あんな異常なモノを見ていて。

外は太陽が嫌な程に照りつけ気温が上がっているのに、そこだけは違う。そこの部屋の中だけは違った。外から窓越しに見てもわかる。暗く、冷たい。その中で一人は力無く倒れていて、もう一人は頭を抱えもがき苦しんでいた。汗か何かで透けて見えた背中にはこっちをギロッと睨む、佳の背中に彫られたものと同じ鬼の顔があったのを思い出す。

銀色の髪をした美形な男。多分佳の父親だろう。父親が佳と同じ刺青をしてるっつうことは家族ぐるみか？

「この部屋に鬼の面なんかないでしょ？」

後からやって来た佳の姉さんが不思議そうに聞いてくる。どの部屋にも目もくれず歩いて来たんだ。不思議がるのは当然だ。鬼の面は確かにないけど、鬼を見たのはこの部屋で間違いない。しっくりと記憶のパズルが埋まった。あとは、佳の姉さんに聞きたいことが一つだけ。

「着物脱いで貰っていいっすか」
「訴えるわよ」

……質問の仕方を間違えた。確かに今の言い方じゃ訴えられても文句は言えないな。

「間違えました。背中を見せてください」
「さっきのとどう違うの？」
「佳の姉さんの背中にも鬼の刺青があるかなぁって思って」
「ああ、そういうことね。私の背中にはないわよ。紗弥の背中にもない。佳の背中にだけよ」

ってことは、多分。

「佳は何かを受け継いだってことっすか？」

その言葉に僅かに目を見開いて驚く。

「……そうよ」
「それは一体っ」
「言えない。貴方達は知らなくていいことよ。それに、心配しなくても大丈夫。恭くんが何とかしてくれるから」

恭くんって、恭優さんのことか？　恭優さんも関係してんのか。

わけわからなくなってきやがった。刺青、受け継いだもの、不幸、恭優さん。くそっわけがわからねぇ。なんだ。佳の刺青のことは大体わかった。けど全体が見えない。何で俺達は知らなくていいんだ。不幸になるってのも、恭優さんが何で何とかしてくれるんだ。落ち着け、整理しろ。とにかく今日わかったことを整理しろ。

一旦帰るか。

「ありがとうございました。じゃあ俺もう帰るっす」

「そう。透麻くん、本当にありがとう。貴方達が佳の友達で本当に良かった」

ズキっ。

まただ。この人の言葉はどこか不自然だ。最初会った時も、今日も。佳のこととなると違和感が生まれる。よくわからねぇけど、不愉快な、良い気が全くしない違和感が。

城道は気のせいだと言ってたけど、やっぱりおかしい。

よくわからない不快感に歯ぎしりをしてそれを佳の姉さんに気づかれないように背を向ける。後ろ手で手を振りながらもう一度お礼を言って鳥居をくぐった。

らしさ　恭優

何でだよ。何でいつもそうなんだ。掴んだと思ったら指の隙間から零れ落ちて行く。いつも、いつもいつも。

大切だから、掛け替えの無い奴だから、守りたいと思った。あの人とそっくりな笑い顔で兄と慕ってくれるから、守り抜くと決めた。けど現実はいつもこうだ。思いが強ければ強い程反対の方へ行く。嘲笑うかのように、楽しんでやがる。

「……情けねぇ」

何が絶対助けてやるだよ。何がもう少しなんだよ。全然、全然ちっともダメだったじゃねぇか。

真昼の公園だというのに人が一人もいない。入ってくる人はさっきから何人もいるが、足を踏み入れた瞬間何かに怯えるように帰っていく。ベンチに座ってる俺に怯えてんだろ。紗弥姉さんが初めて会った時に言ってたな。お前の殺気は本能を怯ませるって。よくわからねぇよ自分じゃ。

結局、俺は義妹一人も救えねぇ、人を傷つけることしかできねぇ化け物なのか。

「ハハッ」

くそっ、悔しくてたまんねぇぞ。情けなくて笑えるぞ。

「どうしたのそんなに剥き出しで」

「……ああ？」

伏せていた頭をあげる。誰だっけな。どっかで会ったことあんぞこの金髪女。

「あなたらしくないよ」

いらっ。

よくわからねぇ女に苛立ちが募る。何だコイツ、らしくねぇってなんだよ。

「……俺の何を知ってるってんだァ？　知らねぇくせに知ったふうな口聞いてんじゃねぇぞ」

ギロっと睨みつける。葵や佳や姉さん達以外なら誰だってそうだ。俺が睨んだら喋らなくなる。張り付けられたように動かなくなる。

目の前の女もそうだった。表情が恐怖に染まる。歪み、そして体を震わせる。ただ、そこから他の奴とは違った。恐怖で歪んだ顔が僅かだけど戻り、体の震えが収まる。それだけじゃない、ゆっくりと確実にそいつは口を開いた。

「私はあまりあなたを知らない。けど、優しいあなたを知っている」

「優しい俺だと？」

「何をそんなに恐れてるか知らないけど、あなたなら大丈夫だよ。強いから」

その言葉を聞いて頭に一気に血がのぼる。少し笑顔でその言葉を言った女に怒りが駆け上る。苛立ちが脳を支配し、狂気が体を支配する。

何も知らないくせに。いくら強かろうと、優しかろうと意味がねぇんだ。救えなかったことを知らねぇくせに。

苛立ちが脳を、狂気が体を、そして女を俺が支配する。蹴る。そう考える前に女の腹を蹴り地面に倒した。不意に来た激痛に全身で死を感じながら倒れたまま腹を押さえ何度も咽せる女。その上にのり両手を頭の上に片手で固定する。開いている右手の拳を音が鳴るぐらいに強く握る。

ああ、また壊してしまうのか。良いのか俺。コイツは女だぞ。壊してしまっていいのか。片隅でそんな事を考えながらも右手を振り上げる。

いいだろ。コイツ何か腹立つし、壊しても別にどうってことないだろ。どうせどっかで会った気がするっつう曖昧にしか思い出せねぇような奴だ。何より苛立たした時点で敵だろ。脳を支配した苛立ちがそんな考えを放ち狂気に命令をくだす。

命令通り狂気は振り上げていた拳を顔目掛けて振り下ろす。

「……いいよ」

ドゴッと有り得ない音を立てて顔の横の地面に拳大の穴があく。なんだ？　外した？　それに何か聞こえた気がした。

女を見てみる。恐怖に全身を震わせ、痛みに涙を流している。落ち着いて喋れそうな状態じゃない。

それなのにそいつは俺という暴力を見つめ、化け物を真っ直ぐに見つめて、強がった笑顔を見せた。

「……あなたになら何をされてもいい。殺されても、いい」

震える声で、けどしっかりと俺を見つめて言った。

「な、んで」

初めてだ。命乞いをするでもねぇ、気絶するでもねぇし、逃げるわけでもねぇ。俺に壊されそうになって真っ直ぐ俺を見つめ返した奴はコイツが初めてだ。

「だって、私はあなたに救われたから」

救った？　俺が、コイツを？　俺が人を救った？

「私を許してくれた。人間はそんなに汚くないと言ってくれた」

……思い出した。コイツ俺がぶつかって気絶した奴か。

苛立ちが無くなっていく。狂気が失せていく。敵じゃない。そう認識して俺はコイツの上から体をどかした。

「悪かった」

頭をさげる。殴られる覚悟だった。急に蹴って押し倒したんだ。殴られる覚悟はしていた。

「……いい」

殴られる覚悟をしてたんだけどな、抱きつかれる覚悟はしてなかったな。

顔をあげた俺を見るなり急に抱きついて来た女。おかしいくらいに速い鼓動と、まだ震えているのが伝わってくる。

心臓がバクバクする程怖かったのか。まぁ俺も初めてジェットコースター乗った時はこんなだったかも知れない。由美さんに笑われ

まくったことは覚えてる。

（恭優さんに抱きつくのがこんなにドキドキするなんて……）

「本当に悪かった。怖い思いさせちまったな」

まだ鳴り止まない心臓の音を感じながら頭に手を置いて数回撫でてやる。ずっと前に佳が怯えてる時にこれやったら安心して寝たんだよな。

頭を撫でたことで体の震えは収まったみたいだ。

少ししてベンチに座り直す。女も隣に座った。

「何かお前、」

「ナツって呼んで。私は恭優さんって呼ぶから」

「ん、ああ」

強引に決められた感じがするけど呼び方なんてどうでもいいか。

「ナツって少しだけど義妹に似てるな」

「いもうと？」

「ああ、佳って言うんだ」

「えっ！？」

「ん、知ってんのか」

「え、あ、いや……知り合い程度に」

「良い奴だろ。おもしろくて強くて素直だけど少し今はひねくれてるけど、可愛いだろ」

「妹、なんだよな」

「ん、そうだけど」

「よかったぁ」

「なにが？」
「い、いやこっちの話」

慌てて手を降るナツ。あー、やっぱ少しだけ似てるな。

「……なぁ、俺に救われたっつったよな」
「うん。救われた」
「その、恩返しっつったら厚かましいかも知れねぇけど、少し質問していいか？」
「いいよ。私に出来ることなら何でもするよ。出来ないことでも恭優さんの為なら頑張るよ」

いや、そこまで望んじゃいねぇんだけどな。そんな目輝かせて言われてもなぁ。

「もし、記憶喪失になるのが確定で、その未来を防げないとしたら、ナツならどうする」
「……悲しいな。辛い、だけかも知れないけど思い出を作りたい」
「思い出？」
「うん。どうせ忘れるけど、最後に楽しい思い出を作りたい。楽しい思い出で終わりたい」

……、楽しい思い出か。何にもしてあげられなかったけど、これなら。

「それに、記憶喪失なら思い出す可能性もあるよね」
「……ただの記憶喪失じゃねぇんだ。赤ちゃんの頃を思い出せって言われて思い出せるか？」
「それはムリだよ」

佳のはまさにそれらしい。俺達はずっと記憶が消えていると思っていて、せめてその呪いをといて今ある記憶だけでもって思っていた。けど、実際は違った。解き方なんかない。消えてるわけでもない。奥のもっと奥。そこに封印されてるらしい。産まれた時自分を引き出した医者の顔を思い出せるか？　それよりも難しいらしい。

紗弥姉さんに電話したときの落ち込みようは酷かったな。俺も人のことは言えないけど。やっと見つけた光だったのに……。

「けど、やっぱり楽しい思い出が欲しい。それは本当に辛いだけかも知れないけど、忘れたくないと思うような大事な思い出が欲しい。全て忘れても、やっぱり心のどこかで生きてるから」

「……そっか。ありがとな」

心のどっかで生きてる、か。

「そうだよな。消えるわけじゃねんだ。どっかで生きてるよな」

何をこんな所で絶望に浸ってたんだか。アホか俺は。最後は佳らしく、派手に楽しく行くか。

「それに、もしかしたら思い出すっつう奇跡があるかも知れねぇしな」

「何かよくわからないけど、うんそうだよ」

「ありがとなナツ。今日お前と出会えてよかった。じゃあな」

よし。とにかく紗弥姉さんの所へ行くか。

「で、でで出会えてよかったなんてっ……て、照れるなぁ。私も、

恭優さんと話せてよかった。っていないし」

紫煙の目指す　冴谷

夕焼けの空に紫煙が登る。甘い香りを纏わせゆらゆらと、あの黄昏の陽を乞うように登り、求めた色に消されていく。

服に纏わりついたそれの残り香が鼻をつつく。ほの甘く切ない匂い。夕焼けが真正面から沈み行き、背に薄く輝く月を感じながら名残惜しく夕焼けを見送る。

気付けばもう、自分より下に沈んでいて。

気付けばもう、そんな日を過ごして来て。

月日は残酷だ。あんなに悲しなかったのにもうそんな感情は消え失せた。

あんなに涙を流したのに、もう流れる気はしない。

吸えなかった煙草も吸うようになり、苦いと感じていた味も気にしなくなった。昔から変わらないのは、空を求める紫煙とその匂いだけ。

前を歩く目印だったその紫煙が目標と共に亡くなりいつの日か自分に纏わりついていた。

あの人に近づいたわけではない。今の自分をあの人が見たら怒るだろう。

白く染まった髪が沈み行く夕焼けにあてられ薄赤く染まる。目にかかる薄赤色の前髪に吐き気を覚えて一層強く煙を吸い込み吐く。

アンタが褒めてくれた誠実さも、素直さも、正義感さえも全て捨

てた。一つ、アンタがいなくなって生まれた感情以外を全て捨てて歩いて来た。夢も希望も何もかもを。

加えていた煙草を地面に捨て踏みつける。

「……本郷さん」

アンタがいなくなったこの場所で、アンタを殺した奴とケリをつける時が来たよ。

見てくれよ。ここから見下ろすと人の波がよく見える。何も考えず、のうのうと生きて来たアホ共の姿が。その中でも一層許せないあの赤色。いつも楽しそうに仲間達と遊んでいるアイツ。

「ハハっ。安心してよ本郷さん。殺しはしない」

最後にアンタに教えて貰った事だけは絶対に守る。

“どんな犯罪者でも殺してはいけない。それは罪から相手を逃がすことと同じだ”

そうなんだろ本郷さん。どんなクズでも殺したらダメだ。罪を受け入れるまでは、な。

「明日だ。明日なんだよ。明日全てが終わる」

沈みきった夕焼けに、空は夜に奪われて月が力を持つ。雲一つない、都会にしては珍しく星が輝く夜。地面に消えかけていた紫煙が、去りゆく夕焼けを求めて幽かに舞う。それはまるで捕らわれているように、哀しく求めた物とともに散った。

全てはこのビルで始まった。

全てはこのビルで終わる。

一人の男の始まりと終わりに選ばれたこの場所は、明かりも灯されず、立ち入り禁止の札と共に夜に消える。

再び現れる時はちょうど明日の今頃だろう。雑踏が薄れ行き、人が少なくなり始めたこの時間に、全てが終わりに導かれる。

復讐に憑かれた男の物語り。

幸せ　城道

世界は生きている。

世界は楽しんでいる。自分の中で生きている者達を見て。

世界にとっては自分達なんて替えのきく玩具のような物なんだろう。

そして、世界の一番のお気に入りの玩具は人間だ。沢山替えのきく、惨めでもがき争い合う人間を見て世界は笑っている。

壊れたら新しく替えを用意する。沢山ある中から生み出せばいい。

低コストで楽しめる、そんな玩具だ。

そして、そんな人間の中で最近一番のお気に入りが自分だ。

世界は自分に言う。お前は他とは違うように造ったと。確かに自分は仲間と様々な危険をくぐり抜けて来た。死ぬかと思った時も何となくの思いつきでやり過ごした。

それじゃあ、自分達は何なんだろう。玩具な自分達に意思はいるんだろうか。

例えば、自分が仲間から離れると仲間は悲しむ?

例えば、自分を追ってくる仲間達に他の玩具をぶつけると怒る?

例えば、自分がもう死ぬとしたら仲間は何て思うだろう。

世界の一番のお気に入りは、自ら命を絶った。仲間に何も告げずに、自らお気に入りを止めた。

仲間はそんな彼のことを悲しみ、怒り、そしてバラバラになった。

タイトル“七つの罪”著者――。

本を一冊読み終えるとどうしようもない脱力感に襲われるのは何でなんだろう。

ふぅーと、小一時間かけて読了した疲れを息と共に抜く。それで完全に疲れが取れたわけではなく、こった肩をとんとんと数回叩いた。

数分間脱力感を内に泳がした後本の内容を思い返す。

正直に単純に言えばおもしろかった。だけど、考えれば考える程不思議だ。あの透麻がこんな本を読む何て。週刊誌の倍はあるんじゃないかと言う程の厚み。内容も濃く、字もぎっしりと詰まっている。これをあの透麻が読み終えるとなると一カ月はかかりそうだ。

外を見てみるともう既に夕日は沈みきっていていつの間にか夜に

なっていた。本当の所小一時間も読む気はなかったのだ。適当な所で切り上げて佳とメールがしたかったのに……。

まぁ過ぎてしまった時間を惜しんでも仕様がない。よくよく考えれば晩ご飯もまだ食べてないわけで、これからすることは山ほどある。

とにかく、一番にすることは佳にメールなのだ。内容は何でもいい。佳とメールが出来るだけで嬉しい。晩ご飯がもっと美味しく感じる筈なのだ。

携帯を開きさっきの本の感想を佳に送る。佳からしたら意味がわからないだろうけど、別にいいのだ。佳から来るメールもたまに意味がわからないのだから。

「今頃佳はメール見てるのかな」

約千ページにも及ぶ本の感想だ。五行六行で済むものじゃないのだ。だからかなりの長文になったけど、めんどくさがらずちゃんと読んでくれてる佳の姿が頭に浮かぶ。読み終えたあとは返信にまた時間をかけるんだろうな。佳は携帯は苦手って言ってたのだ。僕もあまり得意な方ではないのだけど、やっぱり苦手でも好きな人と通じ合えてるのだから嬉しいのだ。

「携帯もすてたもんじゃないのだ」

まだ当分音の鳴らない携帯を見つめながら一生懸命返信を打つ佳の可愛いらしい姿を想像して口元がにやける。

どんな内容が返ってくるんだろう。楽しみなのだ。それにどんな内容でもいい。返って来ることが幸せなのだ。メール出来ることが幸せなのだ。佳の頭が僕のことを考えていることがとても嬉しいのだ。佳が携帯を持って本当によかった。

「何幸せそうな顔してるのぉ城道ちゃん」
「あ、葵さん!?」

不意にかけられた声にびっくりして声の主を睨む。弱者のささやかな抵抗なのだ。睨まれてもドアの前で無機質な笑顔をしたままの葵さん。全く睨まれてることを気にしていない。ほら、やっぱり弱者のさやかな抵抗なのだ。

「ノックぐらいしてほしいのだ」
「ノックしたよぉ。ノックの音に気づかない程夢中だったんじゃないのぉ?」
「うっ、言われればそうかも……なのだ」

確かに少し周りが見えてなかったかも知れない。でも仕方ないのだよ。だって佳のことを考えていたのだから。

「まぁノック何かしてないけどねぇ」
「うっ嘘はいけないのだよ!」

周りが見えてなかったとか、そんなこと考えた自分が恥ずかしいのだぁ。

「いやぁ、幸せオーラがドアを通して伝わって来たから、開けちゃったぁ。城道ちゃんの下心満載のにやけた顔佳くんにも見せたかったなぁ」
「し、下心なんかないのだっ!」
「佳くんと付き合いたい?」
「それはもちろんなのだ」

何を急に言い出してるんだろう。好きな人と付き合いたいと思う

のは当然のことだろう。

「佳くんと結婚したい」

「し、したいのだ」

な、何かそこまで来ると恥ずかしいのだよ。

「じゃあ、子供は欲しい？」

「ほ、欲しいのだ。佳の子供ならきっと可愛いのだ」

「うわぁ、城道ちゃんのえっちぃ。やっぱり下心あるじゃん」

「な、何がなのだ！　下心なんて全然ないし、べ、別にえろくもないのだ」

ゆ、誘導尋問なのだ。今のは誰でも引っ掛かる最強の誘導尋問なのだっ。

「今度佳くんに会ったら城道ちゃんが佳くんと子供つくりたいって言ってたよぉって言っちゃお～」

「や、やめて欲しいのだ。なんか卑猥なのだ……」

たぶん今の僕の顔は真っ赤なのだろう。顔が熱いのがわかる。それを見て葵さんはくすくす笑う。

「もうっ、からかわないで欲しいのだ」

「だって城道ちゃんが可愛いからぁ」

「僕は男なのだ」

「知ってるよぉ」

うー、ダメだ。完璧に葵さんのペースにハマってた。少し冷静に

なろう。
　ふぅっと息を吐き頭を冷やす。顔の熱もだんだんと治まっていき、赤いのも治っただろう。
　落ち着いた所で葵さんとの会話を再開する。
「何か用なのだ？」
　用もないのに来ないだろう。葵さんのことだ。何か用が会って来たけどからかうのを優先してしまったんだろう。
「晩ご飯が出来たって香奈恵さんが呼んでたよ」
「わかったのだ。母上にもう行くって行っておいて欲しいのだ」
「わかったぁ。じゃあね、早くしないと僕が全部食べちゃうからねぇ」
　手をひらひらさせて部屋から出て行った。さて、と。床に無造作に置きっぱなしの本を棚にしまう。借り物なんだから万が一があったら困るのだ。
　閉じていた携帯をもう一度開く。笑っている五人の顔が映し出された。入学式の後皆でとったプリクラを待ち受けにしている。あと数分すれば画面の下の方に表示されるメールが一件と言う文字を想像しながらじっとその場所を見る。まだ早い。そう分かってもやっぱり気になるのだ。
　晩ご飯中には我が家のルールで携帯を弄ってはダメなのだ。だからあと一分。あと一分経っても来なかったら下に降りてご飯を食べることにしよう。
　画面の下から目を離し、今度は画面の右上の時計を見つめる。
「……や、やっぱり二分にするのだ」

メールが気になり過ぎて自分に甘くなる。うー、ダメなのだ。自分には厳しくいかないと。

「あ、間をとって一分半にするのだ」

よし、少し厳しくしたのだ。

人知れず携帯が鳴り始める。大好きな人用に変えたありふれたラブソング。より一層盛り上がるサビの所が誰もいない部屋に鳴り響く。

寂しく木霊し、ディスプレイに文字が表示される。

“メールが一件”

まだ知る由もない。内容を知るのは晩ご飯を食べ終え戻って来た時。

出て行った持ち主を呼ぶかのようにメロディーは虚しく鳴り響く。

食べ終えてメールの内容を見たのは約十分後だった。

“明日花見をしよう”

落ち葉は花見と言うかどうか疑問だけど、嬉しい誘いだ。ご機嫌な絵文字をつけて送り返す。

何はともあれ明日が楽しみだ。明日の情景を寝る前に考え、ゆったりとした気持ちで瞼を閉じた。

姉として　紗弥

カチ、カチ……。一秒ずつ動く秒針が静かな音を鳴らす。他に音のないこの部屋の中で唯一音として存在している。
それは時限爆弾のように、望んでもいないのに時を刻む。今も、ずっと休むことなく。

何度止まればいいと願っただろう。何度戻ればいいと祈っただろう。
どれだけ願おうが祈ろうが無情に切り捨てる。
どんなに泣き叫び、悶え諂おうが非情に切り捨てる。

今日の佳の言葉が胸に残る。痛い傷跡として、消せない思いとして深く悲しみと一緒に残る。
恭優の話しが切り裂くかのように脳内を荒らす。
救えない。その揺るぎない絶対が絶望を運ぶ。僅かの希望が今日潰えた。

いつもなら呼んで欲しいと思っていた、“お姉ちゃん”と言う言葉が尖ったナイフよりも深くワシを傷つけた。
それは佳のワシへの記憶がもう殆ど無いということで、もう時間がないということで。
何が正義の味方だ。何が“ワシ”だ。こんな喋り方をしても佳は笑顔にならなかった。こんな喋り方をしても佳を救えなかった。
要らない。こんな声、こんな喋り方、こんな心。佳を救えないくらいなら要らない。

あの人にも似ている銀色の髪も、この顔も、同じ血も、何も、もう何も要らない。

「……ワシは、どうすればいいのじゃ」

心咲姉、ワシ達はどうすればいいのじゃ。大好きな妹も救えない愚者は一体どうすればいい。

もう、諦めるしかないのか。今を諦めて、全て無くなった佳を支えることしか出来ないのか。

「……」

無力な自分の手を握り締める。瞼を閉じ脳裏に佳の笑顔を思い浮かべた。笑っている顔から泣いてる顔へ、最後に何もわからなくて戸惑っている顔に。

無力。

自分がこんなに無力だとは思ってなかった。

守るために死ぬ思いで強くなったし、勉強も沢山して学校を建て理事長にまで上り詰めた。けど、それらの努力は何の意味もなさなかった。

もう、ただ時が過ぎるのを待つしかないのか。

ぎりっと音の無い部屋に小さな音が響く。それが自分の歯を食いしばった音だと気づくのに時間はかからなかった。

数十分前に来た恭優からのメールを思い出す。

内容には諦めが含まれていて、恭優らしさも含まれていた。そし

て最後まで佳を想う気持ちも。
仕方がない。もうどうせムリなんだ。なら恭優のその案に乗っかろう。
明日、昼から花見。落ち葉を見ながら最後に皆で楽しもう。そういうことだろう。

「最後の最後でこんなことしか出来ないワシ達を、許して欲しい」

ここに居るはずの無い佳に言葉を送る。聞こえる筈もない言葉はただの音にしかならなかった。

何年も、何年も何年も何年も——。

「……意味、なかったのか」

自嘲気味に笑う。

佳が忘れてしまってもこの先何年も何年も何年も佳はずっとワシの妹じゃ。

当の本人の前じゃ言えない言葉を想いにして今強く心で放つ。

待ち受けにしている佳の隠し撮り写真の笑顔がいつもより悲しげに見えた。

姉として　紗弥（後書き）

東北地方太平洋沖地震で亡くなられた方の御冥福をお祈り致します。

盲信　透麻

“例えば、今日が世界の終わりだとしたらどれだけ気が楽だったろう”

最後の日記の文頭にはそう書かれていた。

「生徒会、コレどういうことだ」

夕方、楽しかった落ち葉見が終わったあと俺達は生徒会長に連れられ佳の部屋に勝手に入った。

見てほしい物がある。しかも佳の事だ。そんなこと言われたらついて行かざるを得ない。

そして、佳の部屋で見つけた日記帳。生徒会長はソレを読めと言う。

「……なんなのだ」

「透麻、どういうこと」

汐姫が日記の内容について聞いてくる。意味は十分わかっているのに、否定しようと、して欲しそうに。

そうか。繋がった。やっと繋がった。

最近佳に感じていた違和感。佳が不幸になる。俺達じゃどうしようもない。恭優さんが何とかしようとしてくれてる。そしてこのタイミングで、恭優さんと佳からの落ち葉見の誘い。家督もなにか関係してるんだろう。

「……ふざけるなよ」

泣いてる汐姫の肩がビクっと一瞬跳ねる。激しい怒気。俺も怒っているけど、俺じゃない。今までに無いくらい城道が怒っている。

「佳はどこなのだ？」
「城道、これ」

來優が一枚の紙を俺達に向けて広げる。

「……ちょっと佳はお仕置きだな」
「うん。僕達を舐めすぎなのだ」

城道と同じことを考えてるのがわかる。俺でもわかってるんだから城道も俺の考えがわかってるんだろう。

とにかく、佳にお仕置きだ。何でもかんでも一人で背負いこみやがって。

「私も参加するぞ」
「ボクも、こればっかりは言わないと」

來優も汐姫も同じ考えか。お前らもお仕置き対象なんだけどな。

まぁ、來優達は今度でいいか。今は佳だ。

「どこ行くんだ？　倉本がどこにいるかわかってんのか」

「城道を誰だと思ってる。火星人だぞ。佳の居場所ぐらいわかるに決まってんだろ」
「透麻はバカなのだ。わかるわけないのだ」
「紙にはビルって書いてあるよ」
「汐姫それだけじゃわからねぇよ」
「いいじゃん場所なんて。ボクは行くよ」
「……そうだな。どこだろうと関係ねぇか」

場所がわからなくたってそんなの関係ねぇ。俺達なら、絶対誰かが佳を見つけられる。

最初に見つけてくれたのは佳だ。

最初に手を差し出してくれたの佳だ。

「今度は俺達の番だろ」
「当然なのだ」

今度は俺達が見つけてやる。行き先を失ったお前の手を、嫌っていう程に強く強引に掴んでやる。

「手分けして探すぞ」

絶対に、掴んで離さない。だって俺達は、親友なんだろ。

『透麻くんて、盲信しすぎじゃない？』

中学の時誰かが俺にそう言った。盲信、盲目な信頼。何も見ずに無闇に信じ込むこと。

否定する気はない。自分でも狂ってるくらいに信頼してると思う。けど、何も見てないわけじゃない。確かに佳のことは何も知らなかったけど、それでも佳だから信頼した。救ってくれた佳だから、我慢強い佳だから、俺達のことを何よりも大切に思ってくれている佳だから信頼したんだ。

見えなくてもいいんだ。見えなくても佳が手をとって歩いてくれる。そう思っていたんだから。

本当に馬鹿野郎だな俺は。佳にばっかり先を歩かせてどうするんだよ。見えない暗い道でも、目を瞑っていても、佳の隣りを歩く。一緒に笑って泣いて怒って進んで行く。

だから、佳。待ってろよ。お前の隣りを歩くから。

遺言　佳

皆が笑う。笑顔の上を紅葉が舞って、笑顔の下をお弁当が彩る。
そして笑顔の先には私がいた。

何でだろう。そこまで遊んだ記憶はない。楽しい思い出も幾つかは出てくるけれど、やっぱり数えられるくらいしかない。

なのに、その笑顔が暖かい。

何だか心地良い。

日溜まりの中にいるような。

柔らかい草原の上で仰向けで寝てるような。

皆のその笑顔につられて笑うんだ。そしたら皆も嬉しそうにまた笑う。それが何だか幸せで。こんな時間がずっと続けばいいなぁ何て思った。

透麻と來優が競い合うように食べ比べをして、城道と汐姫が私の隣りから離れなくて、それを見て心咲姉さんが二人のどっちを恋人にするかからかって、恭優兄さんがそれを真に受けて二人を私の隣りから引き剥がそうとして、葵は紗弥姉さんにずっと告白をし続けて、それを紗弥姉さんが煩わしそうに何度も断って。

そんな光景を見て笑う私の顔を見て、皆が優しい笑顔を浮かべる。

ひらひらと紅葉が時を感じさせ降り続き、太陽が空を散歩し、おおよその時間を告げる。

楽しかった時間も終わりを告げ、片付けを始める。

片付けを見てたら何だか悲しくなって、切なくなって、皆にまたしようよって言った。

その時の皆の顔は今も鮮明に覚えている。

城道や透麻や來優や汐姫は次するのが楽しみだと言う様に笑った。

葵は素っ気なくいいんじゃないと一言だけ。

心咲姉さんと紗弥姉さんと恭優兄さんはどこか悲しそうに笑っていた。

片付けも終わって、陽が夕陽へと変わった頃最後に皆で写真を撮った。恭優兄さんと葵が隣同士になっていて、心底嫌そうな顔をお互いがしていた。その顔が何だか可笑しくて、皆笑ってたな。恭優兄さんと葵は益々不機嫌になっていたけど。

楽しかった。このまま、楽しいまま今日が終われば良かったのに……。

帰って来て日記帳を開いて、忘れていた事を知って、忘れる事を知って、これから行かないといけない所を思い出した。

あの人が聞きたいことは何となくわかる。だから、今までの日記を全部読んで、あの時のことを頭に叩き込んだ。

皆を守る為に、これが皆に出来る最後だから。だから、大切な皆

に指一本も触れさせない。

最後まで、皆の知っている“俺”である為に。

月明かりが屋上を照らす。明かりの無いこのビルの唯一の明かりとなる。手すりの無い端まで行くと下が見下ろせる。ビルの八階。そこから落ちたら人は死ねるのだろうか。

目を凝らしても地面が見えない。暗くて一つ下の階の場所ぐらいがうっすらと見えるくらいだ。

けれど、むしろそっちの方が良い。明かりはこの屋上のみを照らす薄い月明かりで十分だ。下は見えなくていい。見えない方がいい。

カツカツと階段を上ってくる音がして、その音はドアの前で止まった。

「……」

ゆっくりとドアが開かれる。屋上に来た主はうっすらと笑みを浮かべると、数歩俺の顔を確認するように前に歩を進めた。

止まっていた時間が動きだす。

終わりを迎える為に物語りが進む。

照らすのはあの日と同じ青白い月光。

ステージはあの日と同じ廃ビル。

シナリオは悲劇の一本道。
観客もいない。誰も知ることのない物語り。あの日二人で始まって、今日二人で終わる。
意思を継ぎ復讐誓った男と、唯一真実を知る女。

さぁ、ビルが見届ける。空が見届ける。風が、月が、夜が見届ける。数年を跨いで終わりを迎える悲劇の物語りを。

「さぁ、始めようか倉本くん」

ゴクリと生唾を飲み込む。開幕を告げた男の言葉には確かな殺意が籠もっていた。

その殺意に呑み込まれないように必死で頭を働かせる。足を踏ん張り、拳を握る。そして始まったらとにかく最初に言おうとした事を口に出す。

「透麻達を、巻き込まないでくれ。あの人達は関係ないだろ」

「ああ、関係ないねぇ。だから書いたんだよ。来ないとあの馬鹿なお仲間さん達がどうなっても知らないぞって」

口では笑っていて冗談とも見て取れる。けど、目が笑ってなかった。俺がこの場に来なかったら殺してた。そう思わせる程の殺意に満ちた瞳だ。声色と笑っている口とはあまりにも違う目つき。それがよりこの男の不気味さを増していた。

「まぁ、いいじゃないのそんな事は。ああ書かないと君が来ないんじゃないかと思って書いただけなんだから」

「……あの人達に手は出さないでくれ」

「僕はこうみえても刑事だよ。一般人に手は出さないよ」

口ではそう言っているけど目の殺意は揺らがない。

「絶対に、手は出さないで下さい」

「出さないってぇ。それに――」

殺意が大きく揺れた。興味の無い対象を完全に外し、一点だけに向けられた殺意。やっと、やっとこの人から透麻達が消えた。

「僕が興味あるのはお前だけだよ倉本」

割り振られていた殺意がやっと一人に向いた。
これで、安心出来る。透麻達はこれでもう大丈夫だろう。だから進めよう。物語りを。話そう。あの日の事を。
あの日あの人が何を話したか。何を思って死んでいったか。

「さぁ、倉本くん。逃げ場はないよぉ。自首タイムといこうかぁ」
「自首はしない。俺は何もしていないから。あの人を殺したのはあの人の正義感だ」
「……ははっ、何を言うかと思ったら」

胸元から黒いモノを取り出しその先を俺に向ける。殺意を具現化したモノが俺に向けられる。
指一本動かすだけで人が殺せる凶器。ゆえに日本では持つ事を禁止されている凶器。
銃口はゆっくりと上から下に動いていき俺の胸くらいの位置で止まった。

「お前が本郷さんの何を知っている？　正義感が殺した？　いい加減なこと言うんじゃねぇ」

殺されたいのか。そう言わんばかりに銃を持つ手に力が入った。
後退りそうになる足を地面に縫い付ける。

「あの人はここから飛び降りた」

言うが早いか乾いた大きな音が空気を震わせた。ツーっと自分の右頬に鋭い痛みと何かが流れ伝う感覚を感じて手でそれを触る。
赤だ。赤朱紅。指についたソレは何度も見て来た、自分のこの左の横髪と同じ、暗く鈍よりと煌めく紅色。

見れば、さっきまで胸の位置で止まっていた銃が顔の位置にまで上がっている。

震えが全身を伝う。恐怖を感じて足から力が抜ける。倒れそうになる自分を、すぐ後ろの黒い影が間一髪の所で支えた。

そうだ。まだ倒れるわけにはいかない。まだ途中だ。終わりはもう少し先だ。

おかしな話しだ。内心で余裕無く笑う。

人を殺す凶器の恐怖を死が支えてくれる。矛盾したおかしな話し。

そして、あの人の死もそう、矛盾したおかしな話しだ。人を救う正義に自分が殺されたのだから。

「次ふざけた事言ったら脳味噌ぶち抜くよ」

しっかりと狙いを定められ向けられた銃口に震える体。力が抜けていた足に無理矢理力を入れ一緒に体の震えを抑える。

「あの人に息子がいたことは知ってる？」

「ああ、知ってるよぉ。何度か写真を見せて貰ったからねぇ」

興味なさそうに冴谷は返す。あの人の死。それ以外に興味がないんだろう。

息子がいるのが何？　そう言いたそうな顔をしている。

「その息子がずっと前に交通事故で死んでることは？」

「知ってるよ。本郷さんの葬式の日、本郷さんの親戚から聞いたからねぇ。で、それがなに？　僕言ったよねぇ。自首タイムだって」

「じゃあその息子に婚約者がいたことは？」

それは知らなかったのか一瞬だこ僅かに目を大きくさせた。

「その女の人には親がいなかった。おまけに安月給なバイトで住んでいる家もボロボロのアパート」
「それがなに？　いつまでそんな昔話するつもりなの」
「金目当てだろ。結婚するって家に連れて来た時に咄嗟に言っちゃったらしいよ。女の人は泣きながら帰って行って息子は怒って出て行ったらしい。それが最後だったらしいよ。生きている息子に会ったのは」
「……だから、その話し関係ないよね」
「謝りたかったらしいよずっと」

ずっと後悔して生きて来たらしい。

「女の人にも謝りたかったらしいけど、葬式に来なくて会えなかったんだって」
「それで、会えないし謝れないから死んだって？　馬鹿か。誰がそんな話し信じるか。本郷さんは会えないのなら何年かけてでも探して会って謝る人だ。自分が悪いと思ったら絶対に謝る。相手が悪いのなら必ず反省させる。あの人はそう言う人なんだよ。途中で諦めたりはしない」

よほど冴谷はあの人を信頼してたんだろう。それもそうか。そうじゃないと復讐なんて考えないよな。
だから、あの人を信頼していて、あの人の正義感を一番知っている冴谷だからこそわかる筈だ。あの人が死んだわけを。

「探したらしいよ。何年もかけて、ずっと、仕事の合間に寝る間も惜しんで」

日記にはあの人の言葉全てが書かれていた。多分あの人が俺に頼んだんだろう。

家も引っ越していてずっと、ずっと探していた。そしてやっと彼女が住んでいた家を見つけた。その家は前の家よりもずっとボロボロなアパートだった。大家さんに彼女のことを聞いたら、

「“亡くなっていたよ。三年も前に交通事故で”」

そう日記には書かれていた。一言一句、多分一つも間違いなくあの人の言葉が書かれていた。

そして、続きは、

「“謝りたかった。そして、感謝したかった。息子は貴女のおかげで幸せだった。荒れていた息子を貴女が助けてくれた。ありがとう。そう感謝したかった”」

「な、にを言ってるんだ。やめろっ、やめろ。その喋り方をやめろ！」

あとは、一度だけ見た彼女の笑顔が忘れられないとか、あの笑顔は人を幸せにする笑顔だ、そんなことが五行くらい書いてあった。倉本佳くん、君の笑顔は彼女の笑顔によく似ている。そんなことも書いてあったな。

「本郷さんみたいに喋るのはやめろ！」

「今話した事は全部あの人が言った事だ」

「嘘だ！　嘘つくんじゃねぇ倉本！　それじゃまるでっ」

パン！　と数回銃声が響く。けど、冷静さを失い、震えている手では弾は当たらなかった。一つ左頬を掠めたぐらいだ。

「嘘じゃない。飛び降りる前に俺に言ったあの人の言葉だ」

「は、はは、ハハハ。嘘つくんじゃねぇ倉本。お前が本郷さんを殺したんだ！　いい加減自首しないと今すぐ殺すぞ」
「……俺はあの人がどれだけ偉い知らないし、凄いか知らない」
「はぁ？　何を急に、」
「けど」

あの人の最後の言葉。たった一文だけど、確かに信頼してる部下に向けられた言葉。
あの人が偉いと凄いとか、立派だとかそんなことは全然知らない。けど、人を思える優しい人だってことは少しわかった。最後の一文で冴谷を自分の息子のように大事に思っていることも少しわかった。

「アンタら二人がお互い信頼してることはわかった」
「何も知らないくせに、何がわかったって？　何がわかったっていうんだ！？　何も知らないくせにっ」
「“部下に冴谷って名前の人一倍正義感が強い奴がいるんだ”」

何で最後にこんな言葉を残したのか意味がわからない。この感じだと続きがあるみたいなんだけど日記の言葉はこの一文で終わっている。
俺には理解できない。多分誰にも理解できないだろう。わかるのは二人だけ。本人達だけだ。
冴谷の手から銃がこぼれ落ちた。

「どうしろっつうんだよ……。ずっと、何年間もずっと俺はアンタの復讐の為生きてきた。もう、無いんだよ。アンタの誉めてくれた正義感も、アンタが応援してくれた夢も。何も、もう何も無いんだ。あの頃あったものは何も……」

冴谷が力無くその場に崩れる。

「……倉本、本当なんだな、本郷さんは本当に……自分で飛び降りたんだな」

否定して欲しそうに、否定しろと言うように冴谷は言う。

本当は冴谷は薄々気づいていたんじゃないのか。頭の隅で自殺だった思っていたんじゃないのか。けど、自殺だと認めたら尊敬していた人が崩れてしまいそうで、今までの時間が嘘になるようで怖かったんじゃないのかな。

俺は首を縦に降った。肯定することで冴谷の今までを否定することになる。けど、冴谷が今まで生きて来た復讐の時間は否定されて無駄なものになった方がいい。

「……ははっ、ははははははっハハハはハハハはははははハハハハハハぁははははァハハハッ」

壊れたように笑う冴谷。悲痛な笑い声で、泣き声にも聞こえた。

遺言　佳（後書き）

「それじゃまるで遺言じゃねぇか」

本郷さん、俺は本当に――。

……おぃっ、更新が遅いぞ！

すいません。かなり遅くなりました……。でも前にも言った通りちゃんと最終回は迎えますので、途中では絶対に止めません。今回の間を見ると説得力に欠けるかも知れませんが……。

とにかく！

が、頑張ります！

次回は短いけど冴谷の心情です。

麻薬　冴谷

「笑えよ。そんなことは不可能だって。嘲笑（わらえ）ばいいさ」

そう、キャリア組の温室育ちの坊ちゃんの戯言だって嘲笑えばいいさ。

「“犯罪がない世界にする”いい夢だ。お前はいい刑事になるよ。私と同じ夢を持っている事がなによりの証拠だ」

俺の夢を笑わずに誉めてくれたのはアンタだけだった。本郷さん、俺にはアンタが全てだったんだよ。

煙草を吸う姿が何だかとても格好よくて、真似して吸おうとしたらお前にはまだ無理だといつも馬鹿にしてたな。

見てくれよ。煙草、様になってるだろ。アンタと同じ銘柄で、アンタと同じ吸い方。

今はこの煙草が唯一俺と本郷さんを繋ぐものだ。
復讐が今の俺の生きる糧だ。

――だった。

何、自殺なんかしてんだよ。何で自分で自分を殺したんだよ。何で、俺に何も言ってくれなかったんだよ。

ふざけるな。俺はアンタの何だったんだよ。信頼出来る部下じゃないのか。アンタがそう言ってくれたのは嘘だったのか。

なぁ、本郷さん。俺の今までは何だったんだよ……。

夢も、正義感も、大事だったものも全部捨てた。そんな俺がこれから何をして生きてけばいい？　無理だろ。もう何も出来ないだろ。

狂ってんだよ。そうさ狂ってんだよ。俺も、倉本お前も。そしてお前の仲間達も。

「は、はは。ははハっ。ぁハ、アハははハハハはハハハハハハ！」

出来ねぇよ。今さら無駄になんか出来ねぇよ。

「倉本ぉ」

本郷さん、アンタは自殺したんじゃない。“殺されたんだ。”

「悪いな。もう、無理だ」

カチッ。弾倉が回る。中の弾が移動し、殺意となる。指一本動かせば終わる。全てが、俺の今までが報われる。

「くく、麻薬だなぁ倉本。お前も、俺も骨の髄まで侵蝕されてる」

「ま、やく……？」

そうだ。麻薬みたいなものだ。判断が鈍り、信念が溶け、全身が悦に支配される。味を覚え、それに溺れて、無くては生きて行けなくなる。

「厄介なモノだな」

ああ、とても厄介だ。わかっている。ダメだと言うことは。法に引っ掛かり、道徳を蔑ろにする。それでもしてしまう。その人の為に。

そうさ、人を狂わすんだよ。

「イキすぎた絆ってのはな」

指をちょっと動かした瞬間、一秒にも満たない痛みが生を奪い去った。

救心　城道　葵

どれだけ走っただろう。皆と別れてあてもなく走って。
誰も見向きもしないだろう。必死で前を向いて歩き続けている人達。夜の深さに負けないように必死で光を放つ建物達。その中で一つだけ異質な物があった。
それは、たぶん偶然だったのだ。
偶然、そのビルは光を放つのを止めていて。
偶然、僕は前を向き歩く気になれなかった。

偶然が重なりそのビルは僕を招いた。月明かりに照らされた僅かな赤い光を頼りに。

夜の色が地上からこの場所を覆い隠す。空の月がこの場所の三人を照らす。赤く、銀色に、紺色に。

走って来たから息が荒く鼓動が速い。
探している時に考えていた説教も何もかもが頭から消え失せて行く。ただ、ゆらゆらと、ぐちゃぐちゃと。

ゆらゆらと記憶がゆらぐ。
ぐちゃぐちゃと頭が回る。

会わなければ良かった。会わなければこんな思いをすることもなかった。

楽しいことがありすぎて。

嬉しいことがありすぎて。

好きだと言うことに気づいて。

なんで。会わなければ良かったのに、会わない方が良かった筈なのに。

なんで。好きだよ。好きすぎて、会わなければ良かったよりも、会えて良かったの方が大きい。

嫌なのに。怒りたいのに。悲しいのに。

とにかく今は――、

「大好きだよ、佳」

もう一度、この想いを伝えたい。泣いている顔をしっかり上げて、気持ちを落ち着かせて。今までの気持ちを全部含めた強い想い。

花火の日の時のように、もう一度。

佳が忘れてしまう前にこの想いを。

「ずっと、好きなのだ」

「……俺も、好きだよ」

わかっている。佳が僕のことを、僕達のことを好きなのはわかりきっている。好きの違いが胸を抉る。けど、好きと言ってくれたのが嬉しくて。届かなかった想いを悔しさと一緒に仕舞いこむ。

今まで見たどの笑顔よりも可愛らしく笑って、今まであまり見せてくれなかった涙を流して。

――そして佳は、

「バイバイ、城道」

深い闇に落ちていった。

一瞬前だった。佳が別れを告げるよりも一瞬早く僕の体は動いた。衝動的に、直感的に。嫌な予感が脳裏をくすぶる前に身体がいち早く前に駆ける。直後佳の言葉と同時に嫌な予感が脳裏を刺激し、先立って動いていた身体に指令を送る。とても単純な、一つの指令。

黒い闇へと佳の赤が堕ちていく。それを追うように僕がその赤に手を伸ばす。でも、幾ら伸ばせどその赤には届かず、佳の体には触れられず、闇の中へと佳の後を追い堕ちていく。

死んだ。好きな人を守れず、最後まで好きな人に触れられず、好きな人と一緒に死ぬ。何て不幸なのだ。結局僕はただ馬鹿だったのだ。

「ごめん、なのだ」

ごめん、皆。

声が先に闇に呑まれ、そして、確実な死の痛みを先に感じながら意識がそれから逃げるようにして途切れた。

途切れる瞬間に聞き覚えのある声が最後に入って来た。

月灯りが生きてるモノ全てを照らす。時間が存在し、進み、歩んでいるものを。嫌いなアイツの白に近い銀色の髪が月灯りを浴び強く輝いている。自分の黒い髪は月灯りを浴びてもどんよりと鈍いままだ。

朱色のアイツの眼が夜の黒によく栄える。黒色の自分の眼が夜の黒よりも深く沈んでいる。

画家がアイツを見れば描かせてくれと願うだろう。音楽家がアイツを見れば衝動的に幻想的な歌詞が思いつくだろう。もっともアイツの事を何も知らない奴で、場の雰囲気に鈍感な奴だけに限定され

るけど。
普通の人なら本能的に気付くだろう。弱肉強食、何て言葉じゃすまない。捕食者、搾取者、何てものですむ筈もない。
それは決まっている事。神様を信じている人間が神様を何よりも畏れるように、誰もが呼吸をしなくては生きていけないように。アイツに楯突くことを生存本能が許さない。

アイツは綺麗さと優しさと圧倒的な強さを持っている。そのくせに、まだ欲しがろうとする。まだ醜く縋ろうとしている。まだ、あの人との約束を守ろうとしている。

ああ、だから僕は嫌いなんだ。僕と違って多くを持っているくせに、僕よりも化け物じみているくせに、僕よりも人間臭い。
アイツのそう言う所が昔から気に入らない。そう言う人間臭い所が僕の心を揺らす。アイツと、大好きなあの人だけが僕の心を弱くする。

嫌いだ。嫌いだよ。嫌いだね。嫌いだって。

――大っ嫌いだ。

敵と味方しかいないアイツの視野に僕はどう映っている？
どうでもいい奴だらけの僕の視野にはアイツは、――。

「何だァ？　今日はやけに大人しかったな」

中性的な恭優の眉間に皺が深く刻まれる。誰がどう見ても不機嫌だ。そして僕の眉間にも僅かに皺が出来る。さっきまで恭優の事を考えていたから吐きそうな胸糞悪さと、今恭優の顔を見て込み上げて来る殺意を何とか寸での所で抑える。

「恭優くんこそさぁどうしたの？　まるで首輪をつけられた犬みたいだったよぉ」

「……ちっ、相変わらずうぜえ」

「お互い様だけどね」

でももちろん皮肉は言う。言わないと抑えている殺意が爆発しそうだから。恭優も必死で怒りを抑えているだろう。

「……夢だったろ」

ふーっと肩で大きく息をして一度気持ちを落ち着かせる恭優。けど、やっぱり眉間の皺は消えてない。

恭優の朱色の眼が空を泳ぐ。空を見、雲を見て、月を仰ぐ。その眼にあの人の姿を映しながら。

そうさ、夢だったんだ。淡く、儚い、叶う事の無かったあの人との幸せな夢。

「今日が一生に一度の我慢だ。葵、お前もそうだろ」

「まぁ、そう言うことにしておいてあげるよ」

眉間に皺を寄せながらも不器用に笑う恭優。

ゆらゆらと、心が弱く揺れる。

初めて恭優と会った時、例えようのない衝撃が背中を走った。綺麗な銀色の髪、見たことのない朱色の眼、そして、同じ化け物の香り。直感的に自分と同じだという事を理解し、自分の劣りを理解した。綺麗な、物語りに出てくるような綺麗な女の子。思えば背中を走り抜けた衝撃の中にほんの僅かな恋情も入っていた。

それから何度か恭優は視界に入った。不思議で見る度に膨れ上がって行ったのは恋情ではなく苛立ち。同族嫌悪、嫉妬。この二つの言葉が一番あう。とにかく苛立ちが天井を知る事もなく膨れ上がって行った。なのに、視界に入れてしまう。日に日に視界に入る回数が増えて、それに比例して苛立ちも膨らむ。

そして初めてアレを見た時は笑った。壁をひたすら殴りつける恭優。拳が裂け血が流れ出ようと構わず殴り続けていた。何度も何度も殺す殺すと喚きながら。

嬉しかった。振り乱れる銀も、殺意のこもった朱も、飛び散る赤も、染まる白も、悲鳴を上げる生も、ただ、ただ醜くかった。綺麗だと感じたもの全てが醜く化け物じみていた。綺麗な恭優、けど、醜く化け物な恭優。

やがて悲鳴をあげだしたのは恭優ではなく壁の方。歓喜が三日月型に歪んだ口から漏れる。気持ちの良い悪寒が恐怖を引き連れて全身を這う。対照的な本来なら相容れない筈の二つの感情がどうしようもなく気持ちいい。殺してやりたいと思う程膨れ上がった苛立ちが踊り跳ねる。

そして、初めて会話をした時確信した。僕と恭優は相容れない。恭優は僕と限りなく近くて、限りなく反対だ。

ただ、近くにいるだけでこんなに腹が立つ。会話をするだけで苛立ちが募る。

それから、何かよくわからない人が僕達二人を引き取った。冗談じゃない。知らない女と、そして殺したい奴と一緒に暮らせる筈が

ない。案の定僕と恭優はケンカばかりだった。けれど、いつもなら疲れて終わるケンカが、今度は途中で萎えて終わることになった。
ホントに冗談じゃない。最後までケンカも出来なくなった。一人でいられる静かな時間も無くなった。

――けど、少しだけこんなのも悪くないと思う。

そしてそれを教えてくれて、居場所をくれて、温もりをくれて、愛をくれた人。味方も敵もいなかった僕の世界で唯一の味方だった人。

僕には味方がその人しかいないから、僕はその人が大好きだから。我慢だってするさ。見て暴れそうになるなら両眼を潰す。拳を握りそうになるなら両腕を切り落とそう。この口が挑発をするのなら舌を切り落とし、唇を削ぎ、二度と開かないように縫い付けよう。この両足がケンカに歩くならグチャグチャに潰してミンチにしてやる。この心が苛立ちを抑えきれないのなら、皮膚を抉り、邪魔な骨を砕き、脆弱な心臓にナイフを突き刺そう。
なぁ、恭優。お前もそうだろう？

一つは由美さんの夢の為。そしてもう一つは由美さんが信じてくれた僕の為。決して佳くんの為ではない。城道ちゃんの為でもない。あの子達がどうなろうと、ホントはどうでもいい。
でも、ちょうど佳くんには借りがあったから、恭優が我が儘を言ったから、由美さんが僕を信じてくれたから。

「恭優くんさぁ」
「ああ？」
「化け物二匹で救えると思う？」

答えはわかっている。その答えに至る理由までも完璧にわかる。けど、あえて聞く。試すように、挑発的な笑みをしながら。恭優くんと由美さんの前でしか現れない素顔を見せて。

「あたり前ェだろ」

由美さんがそう言ってくれたから。恭優は静かにその言葉を付け足した。

自信満々に笑いいつの間にか眉間の皺が取れていたその表情に少しだけ腹が立った。だから、これはいつもの言葉。売り言葉に買い言葉。

「よく言うね。結局呪いが解けれなくて落ち込んでたくせに」
「なっ！？」
「挙げ句女の子に襲いかかってしねぇ」
「テメェ、葵！　何でそんな事知ってんだよ！」
「……恭優くんてさぁ、ダッサァい」

ぶちっ、と何かが切れる様な音がする錯覚に陥る。言わずもがなその音の正体はわかりきっている。目の前の恭優の顔を伺う。中性的な顔立ちなど最初から存在していなかったと思わせるような顔。鬼の仮面でもつけてるんじゃないかと言う程に恭優の顔は酷かった。

もう、花見？　は終わった。だから別に今はケンカしてもいい。そうなんだけど、生憎ともうあまり時間がない。

ちょっとからかい過ぎたかなぁ。今にも殴りかかってきそうな勢いの恭優から三歩程距離を置いて要件だけを早く済ませようと口を開く。

「佳くん、今日で終わらせる見たいだよ」

何を、とは恭優は言わない。馬鹿だけど無駄に勘は冴えてるし、それに大事な“家族”のことだ。恭優が何よりもわかってる。

恭優は鬼のような表情を戻し、眼を僅かに見開く。

「どこかわかるか？」

「見えないかなぁ恭優。おかしい程眩しい光の中、一つだけ光を放してない所が」

指を指す。ほら、この場所からならよく見える。眼前に広がる汚い光群の中に一つだけ夜と溶け合ってるビルが。遠くない。走ったら二十分程でつくだろう。

「さぁ、恭優。僕の役目は終わったよ」

あとは、お前の役目だ。眼でそう語る。さぁ、異常者の思考の出番は終わった。あとは異常者の力の出番だ。

「その化け物じみた力でどう救う？」

一度だけ僕を睨むと恭優は走った。

一瞬交差したその眼には確かな殺意と嫌悪感、そして感謝の念が込められていた。

「……どういたしまして」

さて、恭優。救えなかったらホントに今度こそ殺すからな。例え相討ちでも。

「由美さん、見てるかい？　恭優がドジしない様に祈っててね」

届く筈の無い自己満足な言葉を空に向ける。空は気持ちも言葉も何もかもを呑み込んで月が欠け薄く三日月型に笑う。

馬鹿らしい。そう思って嘲笑った。

『――うん、そうだね』

それは、風の音だったのかも知れない。想いが生んだ幻聴だったのかも知れない。いや、きっとそうに決まってるか。

でも、久しぶりに聞けたその声が優しくて、嬉しくて。

やっぱりそうだ。ホントに恭優と由美さんは僕を弱くする。
涙が一筋頬を伝った。

おやすみ。　恭優

――ぐちゃッ！

臓器が血肉と共に散る。潰れ、バラバラになり、飛び散る。由美さんに似てる笑顔は見るも無惨な顔とは呼べない物に変わっていて、感じていた優しさと温もりは感じずに、ただ壊れた玩具のようにそこに有る。

「――クソッ！」

最悪な結末が頭を過ぎる。舌打ちと共にその想像を吐き出し、走る速さを尚上げる。

速く、もっと速く、もっとすげェ速く。最悪な想像が現実にならないように。悲鳴を上げる肺に空気を無理矢理押し込む。圧迫され、破裂しそうになり、一気に空気が吐き出される。全身から否応なく汗が流れ、体温が今までないくらい上昇している。吸う息が痛い。吐く息が辛い。心臓が激痛を連れて跳ねる。それでも速さは増す。

二十分かかる距離を半分以下で詰める。もう少し、もうあと少しでビルの下につく。つくという少しの余裕と安堵からか、上を見た。ビルの屋上だろう場所を。暗くてよく見えない。けれど、この眼が確かに捉えたのは月明かりに照らされる赤。ゆらゆらとその赤は風

に揺れたかと思うと、一気に地面へとその進行方向を変えた。
確認するまでもない。間違いなく佳だ。体はその赤の落下点へと向かって走り、思考はその赤を受け止めることで埋まった。
両手を伸ばす。瞬間支えきれない重さが腕を襲う。膝を曲げ僅かに重さを逃す。けど、そんな物じゃ全てが逃げるわけじゃない。
逃げきらなかった多量の衝撃が痛みとして腕と足を狙う。

「くっ、ソがぁ！」

腕が変な方向に曲がる。足が嫌な音をたて一気に力が抜ける。激痛が足から腰へ、腕から肩へと貫く。それでも、意地でも佳は離さなかった。有り得ない方向に曲がった腕に意地で力を入れ、崩れ落ちそうな足を根性で地面に縫い付ける。一瞬で激痛が全身をかけたころ、もう一人に気づく。

紺色のガキが落ちてくる。

「ッテメェもか城道！」

無茶だ。わかっている。けれど佳の親友だ。放ってはおけない。
佳を地面へとなるべく痛くないように転がす。
次の瞬間、更に酷い音をたてて全身が崩れた。

「早く運んで」

うっすらとそんな声が聞こえて来た。痛む半身を上げれば、喧嘩で何度も見慣れた救急車が三台。焦りながら俺の顔を覗くおっさんと女の人の顔。

「お、れより」

口を開く。おかしいな。なんか喋り難い。

「意識が回復しました」

「喋らないで、しっかり意識を保って！」

「よしと、やぎゅうを」

アイツらは無事なのか。どうなんだ。自分で確認したいけど体が動かない。指一本でさえ動かない。

それよりも、俺よりもアイツらを先に。そう伝えたいけど思い通りに喋れない。

「あの二人なら大丈夫。君のおかげで強い打撲、骨にヒビくらいだ。今はそれよりも君だ」

よかった。それくらいなら人間死にはしない。見ろ、葵。救えたぞ。

「……ははっ」

今度は救えたぞ。

由美さん、やったよ。やっと、救えたよ俺。命があれば……、あとは――。

安心したからか、麻痺していた痛みが一気に襲いかかる。今までにないくらいの激痛に顔が歪むのがわかった。

ああ、死ぬのか。死ぬよなァ、そりぁ。だって、あの高さからの人間だもんなぁ。まァ、いいか。死ぬのも悪くねェ。

さっきまで痛いと感じていた激痛が今は子守歌がわりになってちょうど眠気を誘う。瞼が重くなり意識が朦朧としてくる。もう、いいよな。

もし人に役目があるとしたらもう俺の役目は終わっただろ。佳のウエディングドレスが見れないのは正直悲しいけど、でも、これればっかりは仕方ない。

激痛さえももう消え失せた。体の感覚も一緒にどっか行った。ふわふわと、何か眠ぃだけだ。

「おい、しっかりするんだ！　しっかりと意識を保って！」

……うるせぇなぁ。もう、寝かせてくれ。

瞼の裏にどこか悲しそうな葵の顔が出てくる。

こんな時にお前かよ。けど、まぁ何だかんだ言って一番長い付き合いだしなぁ。

葵、先に由美さんと会ってくる。まぁ、会えたらだけど。

ハっ、嫉妬すんなって。そんな顔すんな。何だかんだ言って葵、

お前のこと、大ッ嫌いだったぜ。

ただ、敵ではなかった、かな。殺してやりたい程腹立たしくて嫌いだけど、敵ではない。もちろん味方でもねぇよ。どっちかっつうと敵みたいなモンだろうがテメェ。

――家族だろ。俺達。それだけは、事実だよ。

んじゃ、おやすみな。

おやすみ。　恭優（後書き）

恭優は個人的に好きなキャラです。けど、一番扱い難いキャラですね……。
憎たらしい程可愛いって奴です。

「何してるの恭優？」

何もかも変わっていない笑顔で由美さんは笑った。いや、この笑い方は違う。口は笑っててても目が笑ってない。

「久しぶりの再会なのにそれかよ」

「誰が来ていいっていったのよ」

ぷぅっと頬を膨らませる由美さん。ぶりっこじゃなくてこの人は素でやっている。少し頭のネジが緩いんだよ。

「仕方ないだろ。来たものは来たんだから。それより聞いてよ由美さん。俺と葵で協力して佳っていう奴を救ったんだ。まぁ、おまけで柳生ってガキも救ったんだけどさ」

「……救った？」

ぴくっと体が一瞬動き由美さんの笑顔が無くなる。

何だよ。何で怒ってるんだ。

「恭優、それで救えたつもりなの？」

「どういうことだよ？」

「あの子達をそれで救えたと思ってるの？　恭優が今ここで死んだらあの子達には一生心の傷が残るんだよ」

「……」

「そんなの、救えたって言えないよ。何で恭優は自分の命を大切にしないの？」

……俺の命、なんて。

「どうだっていい。俺が死んでも悲しむ奴なんてあんまりいねぇよ。喜ぶ奴の方がいるんじゃねぇか」

事実だ。間違いなく喜ぶ奴の方が多いだろう。今まで相手してきた奴らは勿論警察も含めだ。国家権力からも喜ばれるんだからシャレにならねぇ。

「……恭優のバカ」

パチンと頬に痛みを感じる。なんだ？　叩かれた？　由美さんを見ると、目に涙を溜めながら俺を睨んでいる。

「何で諦めたの！？　まだ恭優は生きれるのに、何で諦めるの。待っている人がいるんじゃないの」

……もうやめてくれ。

「もう、疲れたんだよ。由美さんは嬉しくないのか？　俺とまた会えて」

「嬉しいよ！　けど、恭優はまだ生きれるじゃん。生きてよ。生きるのを諦めないで。残される人の悲しみはわかるでしょ恭優」

泣き出しながら言う由美さん。自分も俺達を置いていったことを悔いている。そんな顔をしているし、何故か由美さんも置いてかれ

る気持ちをわかっている様にも見えた。

「……恭優」

ぎゅっと由美さんが俺の背中に腕を回した。もう由美さんの身長なんかとっくに追い越していたから自然と由美さんの顔は俺の胸に埋まる。

「聞こえるでしょ？」

何がとは言わない。どくん、どくんと自分の心臓が動いているのが聞こえる。由美さんからは感じない心臓の鼓動。自分はまだ生きてるんだと教えられる。

「もう私なんかちびだね」

下から俺を見上げそう言う由美さんは少し悔しげに背伸びをしている。それでも全然身長が足りてない。

「男前になったね恭優も葵も」

「っ由美さん」

「見てるよ。二人が強く想ってくれてる時だけ私は見てるよ。二人とも頼もしくなってる」

ぎゅっと背中に回っている腕に力が込められた。

「ホントはね、こうして会えて嬉しいんだよ。恭優とお話し出来て嬉しいんだよ」

けど、って由美さんは続けた。

「もっと生きて欲しい。二人が幸せに長く生きて欲しい。途中で諦めないで」

「……由美さん、わかった。そうだな、よく考えたら死んでいい理由なんか無いしな」

喜ぶ奴の方が多い？　そんな奴ら関係ねぇよ。悲しむ奴がいるっつうことが関係ある。生きれるんなら、悲しむ奴らがいるうちは自分から諦めたらダメだよな。

「わりぃな由美さん。俺行くよ」

「うん」

そっと由美さんは俺から離れた。

「ねぇ、恭優」

「ん、なに」

「お母さんって呼んでみて」

「……絶対嫌だ」

「むぅ、何でよ」

恥ずかしいから。何てことも恥ずかしいから言えない。それをわかってるのか由美さんは意地悪そうに笑う。

「行ってらっしゃい。葵にもよろしくね」

「ははっ、由美さんと会ったって言ったらアイツ自分から首切りそうだけどな」

いや、冗談じゃなくマジで。アイツならそんくらいなら躊躇なく

やる。

「そうなったら恭優が止めてくれるでしょ」
「無茶言うなよ。アイツとケンカするの結構怖いんだよ」
「でも、止めてくれる」
「はぁ、わかったよ」

……由美さんには何もかもお見通しだな。まぁ、自分を傷つけるのはダメだって由美さんが言ってたって言ったら大丈夫だろうけど。

「ホント由美さんには勝てないな」
「私はお母さんだもん」
「ははっ。まぁ、そうだよなぁ」

由美さんが母親だから勝てないんだけどなぁ。他の奴が母親だったら余裕で殴ってもしかしたら殺してる。

「じゃあ、行って来なさい私の息子よ」
「ん、じゃあ行ってくる」

小さく母さんと付け足す。耳を済ましてないと聞こえないほどの声。僅かな騒音でも掻き消されるほどの小さな声。
聞こえたのかどうかはわからないけど、由美さんは嬉しそうににっこり笑いながら無邪気に手を降っていた。

「……ん」

真っ白な天井が目にはいる。ああ、生きてんのか俺は。やっぱり、生きてんのか。ガチガチに固定された両腕を杖がわりに上半身を起こした。――瞬間に襲って来た衝撃にまたベッドに寝かされる。痛くはない。痛くはないが、

「何のつもりだナツ」

胸に顔をうずめているナツの頭をこつんと叩く。僅かに骨に響き少し痛みが走った。叩いてもナツは離れなかった。

ああ、俺を襲ったわけじゃなくて抱きついてきたのか。少したってそんな事に気づいた。しかし、だ。抱きつかれる理由も意味もわ

からない。
ズキっと痛みが走る。ああ、痛いだけでこんなのは迷惑だ。ひっぺ剥がそうにも指先まで固定されて動かない。かなり酷いんだな。

「……ぅぁっ」

小さな声が胸の方から聞こえた。こいつ、もしかして

「泣いてんのか？」

否定はない。けど、よく見れば少し震えている肩と、耳を済ませば聞こえる小さな声が泣いていることを肯定していた。
何だ、こいつも心配してくれてたのか。

「あー、まぁ泣くのは勝手だけどなァ、退け。痛ぇんだよ」

ぶんぶんと人の胸に押し付けている顔を横に振る。ズキズキと痛みが呼応した。嫌がらせかこりゃあ。

「離れろつってんだぞ」
「いやだ」

確かな否定。もう一度金髪が横に揺れる。

「離れたらまた危ないことする。もう三日も、意識なかったん、だから」

ずずーとした音が言葉の合間に何度か聞こえた。おい、まさかこいつ服に鼻水つけてんのか。
本格的にこいつを剥がさないといけないと考えた所でドアが開い

た。

「意識が戻られたようだね、よかった」

白衣を着たおっさんが入って来てまず一言そう言った。そして、俺と抱きついているナツを見てもう一言。

「彼女にあまり心配かけないようにね」

「はぁ？」

彼女っつう言葉に馬鹿らしさを感じる。何を勘違いしてんだこのおっさん。彼女と勘違いされたのが嫌だったのかナツは飛ぶように離れた。少し服が湿ってて気持ち悪ぃ。ナツはあとで一発殴るとして、このおっさんには聞きたいことがある。

「なぁ、聞いてもいいか？」

「……気づいてるんだね。とても言い辛いんだが、君の足はもう歩けない。リハビリで少しは歩けるようになるかも知れないけれど、それでも日常生活では車椅子が必須だろう」

それを聞いてナツが肩を震わせて、更に泣き出す。人前からか静かに泣いてはいるが少し鬱陶しい。

ていうか、聞きたいことはそれじゃない。確かに起きた時に足の感覚が全くと言っていい程無かったから少し驚いたけど正直、

「それはどうでもいい」

「は？」

おっさんが鳩が豆鉄砲をくらったような顔をする。笑える顔だがおっさんの顔もどうでもいい。

「佳と柳生はどうなった？」

とにかく今一番気になるのはそれだ。大したことはないとは思うけど、念の為に聞く。もしかしたらもしかするかも知れないからな。

「柳生くんなら搬送された翌日目を覚ましたから、様子を見て自宅療養を許可した。もともと大した怪我ではなかったから」

……まぁ、柳生は二の次だ。佳は、

「倉本さんは……」

おっさんが言葉を濁す。嫌な予感が脳裏をよぎった。

「佳はどうなったんだ！」

半身を起こし、そのまま身を乗り出そうっつう勢いに慌ててナツがまた抱きついて制止する。

「怪我は柳生くんより軽い。脳にも異常は見られなかった。けれど、まだ目を覚ましていない」

怪我は軽いし脳に異常はない。つうことは、そうか。次目を覚ましたら佳は……。

それから暫く腕や足の説明をしたあとおっさんは部屋から出て行った。部屋の中にはやっと少し落ち着いたのか泣き止んだナツと俺だけになった。

「……ビルから落ちて来た倉本と柳生をキャッチしたらしいね」
「ああ」
「なんで、そんな無茶をするの」
「佳は義妹だし、柳生はその親友だしな。助けるのは当然だ」
「自分の手が使えなくなっても」
「ああ」
「歩けなくなっても」
「ああ。つうかテメェには関係ねぇだろ。困るのは俺だし、痛いのも俺だ」

ナツに何の関係があんだ。確かに治るまで手は使えない。もとのようにはもう歩けないかもしれない。けど、それで困るのは俺だ。

「関係なくない。私、恭優さんのこと凄く心配したんだよ」

言いながらナツはゆっくりと近づいて来る。ギシっと二人分の重さにベッドが軋む。優しくナツは背中に手を回し、俺の胸に耳を当てた。

「聞こえる。恭優さんの鼓動。生きてて、意識が戻ってホントに良かった」

その行動が、あまりにも心当たりがあって。デジャヴっつうのかな。少し笑ってしまう。

「ははっ。由美さんと同じことをすんだな」
「由美さん？」

ナツが顔をあげる。由美さんが誰か知りたそうな顔をしてるけど、

別に教えてやることはない。

どくん、どくんと確かに自分の鼓動を感じる。

「ああ、生きてる」

俺は生きてる。腕はベキベキに折れ、足はもう歩けないと言われた。死んでもおかしくなかったんだぞ、もうそんな危険なことは辞めろとおっさんに言われた。生きてたのは奇跡だと。けれど俺は今生きている。

一度生きるのを諦めた俺が、由美さんのおかげで、生きてる。生きるってすげェな。よくよく考えりぁこれでまた佳を救うことが出来る。佳のウェディングドレス姿を見れることが出来る。

そんな事を考えてるとナツが急に顔を近づけた。

「私が貴方の腕になる」

「……は？」

言ってることの意味がわからねぇ。

「ご飯も食べさせるし、か、かか体も洗う」

いや、別にんなことしなくても。言いかけてナツがまた声を出す。

「私が貴方の足になる。行きたいといった所に車椅子をひいて連れて行く。だからもし、一生歩けなくても心配しなくてもいいよ。私がずっと連れてってあげる」

……ははっ、それじゃまるで、

「プロポーズみたいだな。お前、俺のこと好きなのか」

冗談で言ったつもりだったんだけどナツの顔がどんどん赤くなっていく。

「いや、何本気にしてんだよ。冗談だったんだっ」

だったんだぞ。と言いかけて言葉が止まる。柔らかい何かで口を塞がれたからだ。気づけば真っ赤な顔に潤んだ瞳がすぐ目の前にあって、その瞳に移る自分の赤い目が珍しく見開いていて驚きを露わにしていた。

数秒後ナツの唇が離れる。

「好きだよ。大好き」

体が動かないのは腕と足を固定されているから、頭が真っ白なのは俺が馬鹿だから。そう思いたい。決してナツの行動にびっくりして動けねぇわけではない。慣れない言葉と行動に頭が追い付いてないからじゃない。

「私を救ってくれた日から、ずっと」

そう言うとナツは目を閉じて、僅かに唇を尖らせて、顔を寄せて来た。

「っざけんじゃねェ！」

ガンっと衝突音が響く。勿論ナツの唇が俺の口に触れた音じゃねぇぞ。俺がナツの額に頭突きをした音だ。

ナツは痛む額を押さえながら俺を上目づかいで睨む。

「今、キスする雰囲気だったじゃん」

「アホかテメェは。何ろくに動けねぇ男襲ってんだよ。大体俺はテメェのこと何て全ッ然これッぽっちも好きじゃねぇ」

目に見てわかるくらいにナツが落ち込んで行く。好きじゃない、この気持ちは本当なんだから仕方がない。嘘をついて好きと言う方が下衆だろう。

「でも、」

流した涙が筋となっている。その涙の痕を僅かに出ている指先で拭ってやる。目も赤く充血しているし、腫れている。今思えば声も少し枯れていた。

「嫌いじゃねぇよ」

ここまで心配してくれる奴を嫌いにはなれない。まぁ、元々嫌いではなかったしな。

嬉しそうに顔を上げるその顔が何だか可愛らしくて、本当に佳を想像させる。気づいたら頭を撫でようと手を伸ばしていた。

ゴツンっ！

「いたっ」

まぁそうなるわな。ガチガチに固定された手で頭に手刀。他の奴から見たらそうにしか見えねぇだろ。

「ははっ」

頭を抑え痛がってるナツを見て笑いが込み上げる。ナツも釣られて笑った。

そうだな、ナツなら別にいいか。

「じゃあ、歩けるようになるまで頼むわ」

「え？」

「世話、してくれるんだろ？」

一瞬目をきょとんとさせた後、凄く嬉しそうに首を縦に振った。

「よっしゃ。一カ月で元通りにするか」

一カ月、俺なら大丈夫だろ。それを聞いて少しナツが微妙な表情をしていたので、もう一度叩いておく。

「私のプロポーズを受けてくれたわけじゃないんだ……」

「だからテメェのことは好きでも何でもねぇつってんだろ」

「一カ月。一カ月で恭優さんを振り向かせる」

「やっぱいいわ。他の奴に頼むから」

ぶんぶんと首と両手を大きく横に振って取り乱れるナツ。

ああ、悔しいな。腕が思うように動くなら、頭を鷲掴んでその動きを止めてやれたのにな。

今は、叩くぐらいで我慢してやるか。

並ぶ病室の一室からゴツンと少し痛そうな音が響いた。

悲しんでくれる奴　恭優（後書き）

「恭優さん、私ファーストキスだったんだけど」
「ああ？　だから何だァ」
「いや、あの恭優さんはどうだったのかなぁって、気になって」
「俺も初めてだよ。付き合ったことねぇからなぁ」
「え、そうなんだ。もてそうなのに」
「そう思うのはナツだけだ」

恭優は決してもてないわけじゃないんです。好きになった瞬間、恭優が暴れる所を見てそんな気持ち吹っ飛ぶんです。だから告白もされたことないんです。
因みに葵はよく告白されて付き合うんだけど、ドSなんで一日ももちません。

倉本佳　佳

声が聞こえる。四つの声。四人の泣く声が。
何度も私の名前を呼びむせび泣く四人。眩しい程の金色に、淡いオレンジ色、うっすらした緑色に、僅かな紺色。誰なんだろう。何で私を呼ぶんだろう。何で泣いてるんだろう。

泣かないで。

そう言おうとして笑いかけるけど、四人は私を見てくれなかった。四人共両手で眼を隠している。それは、涙を拭ってるようにも見える。それは、私を見ないようにしてるようにも見える。私は何故か後者を考えた。
名前もわからない。顔もわからない。泣いてる理由もわからない。けれど、この人達が呼んでいるのは私じゃない。この人達が見たいのは私じゃない。何だかそんな考えが頭に浮かぶ。
じゃあ今の私は何なのだろう。確かに私という人格を持っている。名前は、倉本佳。家族は……。友人は……。思い出は……。生きて来た証は……。

――ナニも無い。

つぅっと頬に涙が伝った。わからない。何もかも、私は何なんだ。私と言う存在は、私と言う人格は何なんだ。何で何も覚えてない。何で何も思い出せない。

いつしか、泣いていた四人は泣き止み、私がうずくまり泣いていた。眼を両手で覆い、自分が誰なのかわからなくて。

「私は、佳。倉本、佳」

一人名前を呟く。唯一わかる自分の名前を。私は、生きている。私は、ちゃんとここに在る。何も無くても、私はここにいる。そう自分に思い込ませるように、自分の名前を自分に呟く。

この暗く広い空間で、四人はいつの間にか消えて、いつしか私一人となった。

ずっと呼び続けた。自分の名前をずっと、もうどれくらい経ったかわからない。けど、飽きることもなく、涙は枯れることもなく、声は潰れることもなく、何も思い出せることもなく、ずっと呼び続けた。

『……佳、様』

ふと誰かの声が聞こえた。この空間に澄んだ声が響きわたる。泣いているようで、求めているような声。誰の声なのか心当たりは全くない。何も覚えてないのだから。けれど、自分以外が呼ぶ自分の名前に、嬉しくて、声が漏れた。

「う、ぁ」

涙が大粒となって頬を伝う。勢いを増して流れる。喉が熱くなり、声が漏れる。泣き声なのか、叫び声なのか。ただ一つ言えるのは、この空間に居て初めて自分の名前を呼ぶ以外の声が出た。たったの、二つの音。けれど、それはとても懐かしくて、その懐かしさも私にはわからなかった。

目を覚ますと白い壁が視界を占領していた。覚ますとと言うことはどうやら私は寝ていたらしい。

半身を起こそうとしたがズキっとした痛みに邪魔をされて出来なかった。けれど痛みは最初の一回だけだった。痛みよりも怠さが全

身を襲う。おそらく何日もここでこうして寝ていたんだろう。
今度こそ半身を起こし、部屋を見渡す。この特有の匂いと何もない素朴な白い内装。ここが病院だと言うことは何となくわかった。けれど、わからないことが幾つか。一つは私は何で病院で寝てたのか。一つは私は何日寝てたのか。そして一つは私は一体誰なのか。最後のが一番重要だ。知識はある。何でか知らないけど、自分が高校生だと言うことは覚えているし、高校の問題も全て頭の中にある。けれど、どこの高校に通っていたのか、友達は居るのか、そして、今まで何をしていたのか、それらが全く思い出せない。
記憶喪失って言う奴なのだろう。理解は出来る。けれど、何か胸にポッカリ穴が空いた感覚と、どうしようもない寂しさが襲う。
忘れてしまったものは仕方がない。先ずは知ることからだ。
冷静に自分にそう言い聞かせる。
ふと見ると自分の右手が震えていることに気付く。震えを抑えようと左手を動かす。けどその左手も震えていて、よくよく思えば体に思うように力が入らない。ガチガチと歯も噛み合わなくなっている。ゾっとした悪寒が無意識に私の両手を両肩に持っていく。そこで初めて気付いた。私は恐いんだ。何もない自分が恐いんだ。
恐れをから身を守るようにうずくまり、震える。

恐い、怖い、こわい、コワい、コワイ、コワいコワイコワイコワイこわいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐いコワい怖いこわい、コワイコワイコワイコワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐いコワ、コワイコワイコワイこわいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐いコワい怖いこわい、コワイコワイコワイコワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐い

コワ、い恐い恐い、怖い、こわい、コワい、コワイ、コワいコワイコワイコワイこわいコワいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐いコワい怖いこわい、コワイコワイ　コワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐いコワ、い恐い、怖い、こわい、コワい、コワイ、コワいコワイコワイコワイこわいコワいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐い　コワい怖いこわい、コワイコワイ　コワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐い　コワ、い恐い　恐い、怖い、こわい、コワい、コワイ、コワいコワイコワイコワイ　こわいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐いコワい怖い　こわい、コワイ　コワイよコワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐いコワ、い恐いッ恐い、怖い、こわい、コワい、コワイ、コワいコワイコワイこわいコワイコワイ、、怖いコワイこわい恐いコワい怖いこわい、コワイコワイコワ、イコワい恐いこわい恐い怖い恐いコワ、い恐いッ！！

頭の中を何も知らない恐怖が占領する。暴走し、ズカズカと人の心踏み荒らす。

何もかもが恐い。知らない事は罪だと、この恐れは罰だと思い知らされる。

「佳、お見舞いじゃぞ」

どこか力無い声で銀髪の女の人が入って来た。

入って来たその人は私を見るなりに抱き付いて来た。困惑してる私をよそにその人は腕に力を強く込める。

温もりが私を落ち着かせる。一人じゃない。そう教えてくれる。けど、わからない。この人は誰？　私を抱き締め泣くこの人は一体誰なの。

倉本佳　佳（後書き）

最・終・章ー！

結構前からですが、改めて言ってみたかっただけです。ではまた！
あ、最終話ではありませんよ。

最・終・章ー！

なんとなく毎日が過ぎる。つってもあれから一週間経っただけなんだけど。けど、たかが一週間が長い。楽しくて充実してたわけじゃない。何もなくて長かった。

一週間で俺達は大分変わった。学校で会って挨拶をするくらい。会話も、メールも通話も何もない。汐姫に至ってはずっと家に引きこもってる。

佳と城道が病院に搬送されてすぐにお見舞いに行った。佳に一回、城道に二回。佳の一回目は意識を取り戻していない佳をただ三人で見てるだけだった。汐姫は泣きながら佳に縋り、來優は目に一杯涙をこらえながら汐姫の肩を抱いていた。俺は、ただそれを眺めてただけ。

城道の時の一回は佳と同じ意識がない城道を三人で見てすぐに帰った。

二回目は城道は意識を取り戻した日。四人でケジメをつけようと俺が言った。

『もう、今まで見たいに居られないんだ』

俺達は確かに仲が良い。よく遊んでたし、笑いあったし、一緒に何でもした。けど、その中心にはやっぱり佳がいて。あの屈託の無い笑顔を見せてくれる佳がいた。四人じゃ遊べないわけじゃない。楽しくないわけじゃない。けど、やっぱり違う。俺達は四人じゃダメなんだ。

『忘れ、よう。俺達はもうムリだ』

泣きながら汐姫と來優が静かに頷いていて、暗い顔をして城道が黙っていた。左頬に生温かいものが伝って、その冷たさと共に、寂しさを手で拭い隠した。

一週間がたった。面白くない日々がただ過ぎていった。昨日の夜、恭優先輩から佳が目を覚ましたとメールが来た。多分皆にも行ってるだろう。それでも今日城道や來優と交わした言葉は“おはよう”の一言だけ。

教師が黒板に文字を書く。何かの問題なんだろうけど、全くわからねぇ。答えを教師が説明し、次の問いを難問か書いて行く。数字がアルファベットと共に並ぶ。間に記号が入り、変てこな列を成している。

わからねぇ。全部わからねぇ。詳しい解き方の説明も、何でそうなるかも、たまに挟む教師の雑学や冗談も何もかも耳からすり抜けて行く。

脳が溶けているんじゃないかと思うくらいに何も考えられない。

「俺、こんなに馬鹿だったんだな」

ハッと自分を嘲笑う。虚しさが胸中に染み込み、何とも言えない悲しみが闊歩している。もう、大分前から。ちょうど一週間前ぐらいから。

そう言えば、最近來優が傷を作ってるな。まぁ、そんなことどうでもいいか。

ケジメ　透麻（後書き）

今回短いです。あとこれから時間の流れがやや分かり難くなるかも知れませんが、なんとなぁくでいいので、あまり気にしなくても大丈夫です。

では、次回は佳視点です！

新しい　佳

退院してから、三日がたった。紗弥お姉さんが友人の学校に転入手続きをしてくれているそうなので、高校生の私も今は暇だ。通っていた高校を紗弥お姉さんが気遣ってくれて、違う高校に通わせてくれる。そんなことをされてたら私はいじめられてたんじゃないかと少し心配になる。けど、まぁ新しい高校に行くならもう関係ないか。それに、失った記憶のことをどうこう考えても仕方がない。私は前向きに生きることに決めたんだ。

ていうことで、前向き思考発動中です。何もない私にとって何もかもが新しいこと。だから新しい高校っていうのも悪い事じゃない。今の内に自己紹介の内容でも考えておこう。

「佳、掃き掃除終わったぁ？」

和服の綺麗なお姉さんが眩しい笑顔で歩いてくる。心咲お姉さん。私と紗弥お姉さんのお姉さんらしい。

「えーと、すみません。もう少しかかりそうです……」

掃く度に風に飛ばされ、散らばっている落ち葉を見る。所々に山となって散らばっているんだけど、これでも頑張った方だ。半分以上は終わっている。

「佳、敬語はやめなさい。姉妹なんだから敬語は変でしょ」

「はい、すみませ、あ……ごめんなさい」

「……まぁいいわ、疲れたでしょ。休憩にしましょ」

そう言い私の手を引っ張る。突然のことだったから手に持っていた箒は手から離れ地面に落ち、一つにくくった後ろ髪がゆらゆらと上下に揺れた。

そう言えば左の横髪と後ろ髪が赤かったなぁ。記憶を失う前の私はいじめられてたんじゃなくて派手だったのかな。何にせよ、恥ずかしかったから退院と同時に黒に戻した。その時お姉さん達が少し悲しそうな顔をしていた。

「……可愛いわね」
「え、何が……ですか」

“また敬語！”と注意されるけど、紗弥お姉さんはすぐに続けた。

「貴女よ」
「うっ」

飲みかけていたお茶を吹き出しそうになる。今着ている巫女服は三着しかない。汚してしまうわけにはいかないので、吹き出しそうなのを必死で抑えた。変わりに咽せたけど……。

「げほっ、ごほ、な、な何を言うんですか！」

“敬語”とまた注意される。

「な、何を急に言うの……ですか」

小さく敬語を付け足した。

「可愛いくなんか、ない……です」

「ほら、そう言う所も可愛い」

くすっと笑う心咲お姉さん。小さく敬語を言ったことも、何もかもお見通しと言うような笑顔だ。

「貴女も可愛いし、紗弥も可愛い。なのに、なのに何で彼氏が出来ないの！　私は早く妹達と恋話がしたいの。相談に乗ってあげたいの」

うっ、この言い方からしたら私と紗弥お姉さんには彼氏が出来たことがないらしい。私のことは薄々とわかっていた。もし付き合えたとしても体を重ねるまでは言ってないだろう。私の背中には、何だか大きな痕がある。背中の殆どを占領している何かの痕。手術の痕かな？　よくわからないけど、“何かを消した”ような感じがする。

「心咲お姉さんは、彼氏とかはいるの」

「私はいないわよ」

「え！？」

「私はいいのよ別に。人を好きになるって、よくわからないから。告白されたこともあまりないし」

意外だ。彼氏がいないことにもそうだし、告白されたことがあまり無いってことにも。綺麗すぎるからかな。綺麗すぎるから、高嶺の花すぎたんだね。

「紗弥は紗弥で変な幻想抱いているし……、私佳には結構期待して

いるからね」
「あはは……」

笑ってごまかしておく。恋はしたい。けどまだ、恋はまたいずれ。好きな人が出来てから考えよう。

「あ、そうだ。恭優三日後に退院らしいわよ」
「え、恭優お兄ちゃんあんな大怪我なのにもう退院出来るんですか？」
「うーん、まぁ恭優だからね。ていうか恭優は何で“お兄ちゃん”なの？　私は“お姉さん”なのに」
「ぁ、ぅ……そ、それは、恭優お兄ちゃんが、気が楽だからそう呼んでって……」

私には家族が三人いるらしい。血の繋がったお姉さんが二人、紗弥お姉さんと心咲お姉さんのこと。あと一人、血は繋がっていないけど、兄と慕っていた男の人が一人。記憶を失う前の私は“恭兄ぃ”と呼んでたらしい。私が恭優さんって呼ぶと何か落ち着かないってことで、恭優お兄さんって言ったら、何となく他人行儀だって言って、最終的にお兄ちゃんだ。
だってまだ、恭兄ぃとは呼べない。恭優お兄ちゃんって呼ぶだけで恥ずかしいのに。

「……まぁいいわ。恭優は後で紗弥と一緒にお仕置きするとして、私達のこともこれからはお姉ちゃんって呼んでね。その方が私達も嬉しいから」
「ぅ……わかり、ました」
「また敬語よ」
「ぁぅ……、ご、ごめん。心咲お姉、ちゃん」

恥ずかしいー！　顔が熱くて心拍数もかなり上がっている。そういや恭優お兄ちゃんの時も最初はこんな感じだった。

真っ赤になった頬を熱から感じとって、心咲お姉さん、じゃない。心咲お姉ちゃんを見て見る。恥ずかしいから少し俯いた状態だったから自然と上目使いになっていた。

「……恭優、これは犯罪的でしょ」

ぼそりと心咲お姉、ちゃんが呟いたけど上手く聞き取れなくて聞き返す。

「可愛いすぎるって言ったのよ」

にっこりと笑う心咲お姉ちゃん。何だかその笑顔で可愛いと言われたからかドキっと心が跳ねる。それから逃げるように話題を元に返す。

「で、でも凄いよね。屋上から落ちてくる人を二人も受け止めるなんて。優しいし凄い勇気あるし力持ちです」

「まぁ、ね。勇気と力はあるわね」

あれ？　優しいは肯定しないの。

「でも、元のように歩けなくなるのは……悲しいです」

「ふふ。それも恭優なら本当に一カ月でどうにかしそうだけどね」

「え？」

「出来なくても三カ月あれば何とかなりそう」

話についていけない。幾ら力があるからって歩けないと言われた

人間が歩けるようになるわけがない。心咲お姉ちゃんは何を言ってるんだろう。

「恭優お兄ちゃんでも、普通にそれはムリなんじゃ……」
「あら、私達の長男よ。“普通”なわけがないじゃない」
「どういう、」

言いかけた所で“ただいま”と声が響く。

「おかえりなさい」

心咲お姉ちゃんがそう言う頃にはもうスーツ姿の紗弥お姉さんがこっちに来ていた。

「ほら、佳。紗弥にも言ってあげて」

心咲お姉ちゃんが肘でつついて促す。
紗弥お姉さんが歩いてくる。距離三メートル。

「おかえりなさい、紗弥お姉ちゃん」

うわぁ、やっぱり恥ずかしいよ。また顔が熱を持ってくる。お姉さんからお姉ちゃんに変わってる違和感に気づいたのか、それとも私の顔が赤いのに違和感を感じたのか紗弥お姉ちゃんの動きが止まった。少しして肩がわなわなと震え出す。

「――可愛いぞ佳ぃ！」

一瞬で三メートルの距離を縮め私に抱き付いた。
あまりにも一瞬の出来事なので驚きのあまり瞬きを忘れる。

「あーもう、何じゃこの可愛い生き物は。ワシの妹じゃ。あー本当に可愛い」

嬉しさのあまりか変な自問自答を繰り返し喜んでいる。それがあまりにも可笑しくて、頬が緩んだ。

「因みにこれ、最初に言わせたの恭優なのよ」

心咲お姉ちゃんのその言葉に紗弥お姉ちゃんの動きが止まる。ゆっくりと私から離れおもむろに来た道を辿って行く。

「ちょっと用事が出来た」

心咲お姉ちゃんが悪戯をした子供みたいにニヤニヤと笑いながらどこに行くか聞いた。

「教頭がのぉ、誕生日が近いらしくてのぉ遠回しにうるさいんじゃよ」

あ、だから誕生日プレゼントを今から買いに出かけるのか。紗弥お姉ちゃん優しいなぁ。

「白髪の鬘何かどうじゃ」

白髪の鬘？　鬘なのに白髪？　そう言えば白髪と言えば恭優お兄ちゃんの髪の色も銀と言うより白よりだったなぁ。

「ただでさえ長いんじゃから」

長い？　鬘が？　教頭って女の人なのかな？　それでも白髪の鬘っていうのはやっぱりおかしい。そもそもそんなもの売ってるのかな。

「むしってくる」

「え！？」

買うんじゃなくてむしる！？

「男前にしてあげてね」

「落ち武者にしてくる」

そう言って紗弥お姉ちゃんは出て行った。結局よくわからなかったな。何だったんだろう。

ただ、ただ……　汐姫

右手は只繰り返す。

――暴力の限りを。

左手は只嘆く。

――痛みのあまり。

瞳は只流す。

――溢れ出る涙を。

口は只嘲笑う。

――狂気を漏らし。

脳は只狂う。

――その死の数に。

そして、心は――。

「ぅ、あ」

じゅぷっと音をたてて赤が湧き出る。皮膚がめくれ、肉に触れ、血が湧く。

爪で掻き、痛みを刺激し、血で濡らす。

流れる涙に笑う口。

痛みに嘆き感覚を殺す左手、無くなった感覚に何度も繰り返し傷をつける右手。

何度想像しただろう。自分の死ぬ姿を。いずれも溺死や焼死、窒息死や、圧死なんかじゃない。

無惨に広がる臓物の数。溜まった血の量。溺れるオレンジ色の髪。薄れゆくボク。脳が狂い出す。

何もかも無くなった。

――傷がまた増え血が流れる。

ボクの存在意義は何だったんだろう。

――ざく、ざくと。

それを忘れたボクに存在価値なんてあるの？

――じゅぷ、じゅぷと。

「あは、アハハ」

笑う。面白くないのに口は嘲笑う。とてもオモシロいとボクを嘲笑う。

涙と鼻水を垂れ流し、痛みに逃げる。痛みがボクから逃げて何も感じなくなり、それでも痛みを繰り返す。

死にたい。死にたい。死にたい。死にたい。死にたくない。死にたくない。死にたい。死にたくない死にたい。何度も脳が死と生を行き来する。

「アハハ、アハハハ

貴女がボクを忘れるのならそれはもうボクは死んだってこと。

貴女がボクを思い出せないのならそれはもうボクは最初から居なかったってこと。

「よし、さま……」

ボクに生きる意味と理由をもう一度教えてください。

痛みは繰り返す。

悲しみは繰り返す。

不幸は繰り返す。

なのに、幸せは続かない。

それは、ボクが居るせい。

皆が不幸になるのはボクのせい。

生きててごめんなさい。

生まれてごめんなさい。

ボクは、居なかったら良かった子です。

あの時みたいに、否定してよ。ねぇ、ネエ、ねぇ　ネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエねぇねぇねぇ

ネェネェネェネェネェネェネェネェ　ネェネェネェネェねぇねぇねぇ

ただ、ただ……　汐姫（後書き）

久しぶりに汐姫です。
本来汐姫はこんなキャラなんです。だんだんと話が進む程、佳達と触れ合って行く程鬱病が治りかけて行ってたんですけど……。
比べたら最初の話の方の汐姫と、後の話の汐姫が大分違うのがわかると思います。
そして今回の話の汐姫が先に言った通り最初の頃の汐姫なんです。
佳の事があり、本来のヤんでる汐姫に戻ったということです。
ある意味あの五人で一番変化していたのは汐姫なんです。
まぁ、目立たないんだけどね……。

ではまた！

前向きな考え　佳

……スーパーについたはいいものの、何を買おうか。籠を持った主婦の人達がお昼の安売りに並び、列をなしている。安売りには用がないから列の横を通りとにかく店内を一周しながら考えることにした。

退院祝い何にしよう。何でも良いから適当に買って来てって心咲お姉ちゃんは言っていたけど、何でも良いが一番困る。恭優お兄ちゃんの好きな物なんか何一つわからない。うー、悩むよ。何買えばいいの。

「どうしよう」

予算は三千円。無難に食べ物かなぁ。でも、好き嫌いわからないし……。あ、そうだ詰め合わせにすればいいんだ。どちらかと言うとお見舞いの品みたいだけど、まぁいいよね。それしか思いつかなかったんだから。

買う物が決まったから目的の場所まで移動する。

わぁ、果物の良い匂いがしてきた。色んな果物の甘い匂いがする。

「おいしそう」

ついつい声が漏れる。誘惑してくる色々な果物を頑張って素通りし、目的のバスケットに入ってる詰め合わせ果物の所まで行く。

種類は大、中、小。大が予算を千円程超える。でも自分の財布か

ら出せば買えないこともない。
恭優お兄ちゃんいっぱい食べそうだから……うん。
大きいバスケットを手に持ちレジまで歩いていく。
喜んでくれるかな。頭の中で喜んでくれている姿を想像しながらお会計を済ます。恭優お兄ちゃんの住んでるアパートはここから結構近いから袋には入れずそのまま持って行くことにした。

そう言えば、紗弥お姉ちゃん今日も出掛けてたけど、転校手続きって結構時間かかるもんなんだ。
いつから新しい学校に行くんだろう。楽しみだけどちょっと不安だなぁ。

考え事をしていたらあっという間に目的地につく。時間も何時の間にか過ぎるし、考え事って何か不思議だ。
アパートの二階部分はもう見えている。あとはこの小さな坂を上がるだけ。なだらかで全然苦じゃない坂を上がっていく。

ふいに赤い髪が眼に入る。真上から日の光を浴びて、風に少し揺れる。一本一本が細くて、凄く綺麗で一瞬見とれて歩みを止める。
歩るくのを止めた私を不審に思ったのか赤い髪の女の子は私をじっと見つめた。
はっと我に返り歩みを再開させる。その人はアパートの前に立っていて、必然とその人の横を通らないとアパートの中には入れない。
少し気まずいなと思いながら、横を通るさいに軽く会釈をして通り抜けた。

誰か待ってたのかな。アパートの前にいたし、このアパートの住人の知り合いなのかな。

何でか知らないけど、気になり後ろをちらっと見る。

「あれ？」

いない。誰だったんだろうあの綺麗な赤い髪の女の子。まぁいいか。

「もう会わないと思うし」

それに確かに綺麗だったけれど、派手なのは少し嫌いだ。何でかは知らないけれど、胸が痛くなる。

「……」

ああ、何でだろう。嫌いだな。派手なのは、赤色は嫌いだ。何か泣きそうになる。

気持ちがさっきとは正反対に落ち込んでいく。泣きそうになるのを堪えながら階段を一段一段と登って行く。

ダメだなぁ。楽しいこと考えなくちゃ。せっかくの退院祝いなのに、こんな顔だったら台無しだよ。恭優お兄ちゃんに悪い。

そう思って楽しいことを考えだす。けれど、過去の無い私に楽しい思い出もなく、楽しい友達もいなくて、お姉ちゃん達とお兄ちゃんを思うけど、やっぱり記憶が無いのが足を引っ張って余計に辛くなる。

「だから自分で食えるつってんだろが！」

あ、恭優お兄ちゃんの声だ。
廊下に声が響く程大きな声を出している。
また、ナツさんが何かしようとしたのかな。

呼び鈴を鳴らし少し待つ。パタパタと静かな足音が近づいて来てドアが開く。

「こんにちはナツさん」
「うん、こんにちは。さぁ入って」

お邪魔します。と少し頭を下げて中に入る。靴を脱いだあときちんと揃えると、ナツさんが、良い子良い子と頭を撫でてくる。
子供扱いに少しむっと来るけれど、誰かにし馴れているのか撫でられるのが気持ちよくて、許してしまう。
ナツさん、私と一つしか年変わらないんだよなぁ。
私と違って、随分大人の体つきだ。何か、少しだけ悔しい。

「よぉ佳。どうした?」
「退院祝いを持って来たの」

手に持っているバスケットを前に出す。
恭優お兄ちゃんはベッドから身を起こすとぎこちない足取りでゆっくりと歩いて来た。

「……え?　歩いてる?　え、何で?」

もう歩けないんじゃ……。

「誰も見てない所でずっと一人でリハビリしてたらしいよ」

少し呆れた風にナツさんは言った。

「ほ、骨はもう大丈夫なの」

「あー、んなもんとっくに治ってらァ。俺は化け物だからなぁ」

どこか誇らしげに見えるのはきっと気のせいだろう。

それにしても、どういう体の構造しているんだろう。恭優お兄ちゃんって、普通じゃない。

「……ホントに、バカみたい」

震えた声でナツさんが呟く。ナツさんの気持ち、私もわかる。

「何がバカなんだよ」

恭優お兄ちゃんはわかってないみたいだけど。

「お兄ちゃんが悪いよ。私も、ナツさんと同じ気持ちだよ」

「佳もか」

「お兄ちゃん、一人でリハビリして、何かあったらどうするの？」

「あるわけねェだろ」

「違うよ。“あるわけない”じゃない“あったらどうするの”お兄ちゃんが思ってるよりも、私達は心配なんだよ」

なんだ。声が、言葉が勝手に出てくる。頭に浮かび、考える間もなく声になり言葉になる。

「もっと自覚してよ」

声が、言葉が止まらない。伝えなくちゃ。どれだけナツさんが私が心配してるかを。伝えなくちゃ、恭優お兄ちゃんに。

「恭優お兄ちゃんは、一人じゃないでしょ。心配してくれる人がいるでしょ。私、嫌だよ恭優お兄ちゃんが怪我するの。力になれないかも知れないけど、傍にいて、何かあった時に医師を呼ぶことくらいならできるんだよ」

「……ありがとな。そんな心配してくれているとは思わなかったわ。今度からは気をつける」

「そうだよ、恭優さんはゆっくりと確実に治していけばいいんだ。私が世話するから日常生活は大丈夫だって」

ナツさんがそう言うと恭優お兄ちゃんはすっごく嫌そうな顔をした。

嫌そうな顔だけど、もしかしたら照れてるのかな。口に出したら怒られそうだからそれは言わないことにした。

「それはそうと、佳何かあったのか？」

「え、なんで？」

「来たとき辛そうな顔してたぞ」

……、やっぱりお兄ちゃんなんだ。記憶はないけど、恭優お兄ちゃんは私のことをずっと大事にしてくれていたに違いない。だって、こんなに優しいんだもん。

「ううん。もう大丈夫」

「そうか、ならいいんだ」

もう大丈夫。私にはこれから楽しいことが沢山待っている。だって私にはお姉ちゃんもお兄ちゃんもいる。友達もこれから作ればいい。

うん。前向きに行こう。

「じゃあ私リンゴ切ってくるね」

まずは、出来ることからやって行こう。

前向きな考え　佳（後書き）

はい、気付いた人は多分少ないと思います。
けど、何となく違和感は感じられたかと。
いや、まぁ違和感だらけの小説なんですが……。

今回、少しの既視感と、少しの違和感をねじ込めました。
違和感の方は気付く人は気付くと思いますが、でもやっぱり難しいと思います。

既視感の方は気付いた人がいたら脱帽ですよ！
気付いてくれてありがとうって感謝ですよ。

別に気付かなくても全くと言っていい程支障がないんで、どうでもいい話なんですけどね。

では、既視感と違和感の少ししたヒントです。知りたくなかったら、今すぐお使いの機種の“戻る”をどうぞ。

既視感のヒントは佳の台詞です。
違和感のヒントは人間の本質です。

自分が記憶を失った状態だと想像して頂ければ違和感の方には気付くかと。
既視感はもうぶっちゃけ佳が誰かに言われた台詞のことです。

ぶっちゃけって言う言葉を久しぶりにみて少し感動したのは僕だけではない筈……。

無味乾燥　城道

あれ、ここはどこなのだ？
あれ、あの男は何を言ってるのだ？
あれ、何で皆座って黒板を見ているのだ？
あれ、透麻も來優もどうしたのだ？
あれ、汐姫は休みなのだ？

あれ、佳が見つからないのだ。
あれ、おかしいな。何度探しても見つからないないのだ。
あれ、教室ってこんな色だったっけ。
あれ、景色ってこんな色だったっけ。

あれ、何かおかしいのだ。

あれ、何がおかしいのかわからないのだ。

世界がおかしいのか、それとも僕がおかしいのか。
あれ、世界が白黒（モノクロ）なのは何故なのだ？

色を失っているのは誰のせいなのだ？

佳がいないから？　違うのだ。

無味乾燥の地獄に舞い戻ったのは他でもない、僕のせいなのだ。

永遠だと信じていたのに、終わりはあっさりとやって来た。
何一つの濁りも残さず佳から僕達は消えた。
あの日透麻が言ったことは間違いではないのだ。だけど、納得できない僕がいて、納得できないくせに何も言えない僕がいた。
佳を守れる力はあると思っていた。でも実際はどうだ。何一つも出来ず終わったじゃないか。
僕は、どうすればいい？
このままずっとこの地獄の中を生きていくのか？
それは大切な人を守れなかった僕への戒めですか？
もし戒めならば、僕にはそれに逆らう術がない。

生きて行こう。心を廃にして。大丈夫なのだ。何も考えず、何も感じず、ただ生きていればいいだけ。大丈夫。ずっと昔に戻っただけ。僕なら出来る。

――怖い。

嫌だ。怖いのだ。そんなの出来ないのだ。今は昔と違う。僕の中には皆がいて、佳がいる。思い出を廃にするなんて出来ないのだ。僕にはもう大切な思い出が出来すぎたのだ。

佳、教えて欲しいのだ。僕はどうすればいい。僕は何をすればいい。何を思って生きていけばいいのだ。

佳、僕の心はまた色を失ったのだ。だから、ほら早くもう一度色をつけてほしいのだ。佳と僕の夢は同じって言ったのだ。佳達といれば、叶うって言っていたのだ。

やっぱり、ずっと一緒何てことは有り得ないことなのだ……？

僕達はもう、終わったのだ。

宙を舞う紅葉が目に映る。これを見ながら皆で弁当を囲んだ。それも今じゃ僕を締め付ける暖かくも痛い思い出の一つ。

帰り道を歩く。一歩、一歩と。ほら、街中のこの道も、土手沿いのあの道も、あそこにある公園も……。何もかもが佳との思い出で溢れている。

痛い。痛いのだ。こんなに胸に突き刺さる。こんなに心が壊れそうになる。

佳が隣りにいないってだけで、こんなにも泣きたくなるのだ。

何もかもを失って悲しいのは佳の筈なのに、佳の悲しみなど理解出来ず、ただ自分が一番辛い。

足下を雫が濡らす。歩く度に道を濡らす。記しをつけるように。思い出に別れを告げるように、涙は歩いて来た道に染み込んでいった。

「何を泣いているんだい？」

足を止め顔を上げる。涙で濡れた視界にはいつか見た僕達以外の佳の知り合いが立っていた。薄く開いた眼は穢れを知らない真っ白に澄んでいる。

「キミ達は変わってるな。お互い信頼しあっているのに、何で信じきれないんだ？」

信じきれない？

信頼とかそういう問題じゃないのだ。

「……もうどうしようもないのだ」

くすりと女は笑った。佳と似た赤と黒の髪を僅かに揺らし、相変わらず僕を真っ直ぐに見詰めながら笑う。どこか佳に似ているその存在感がさらに大きくなる。

「“どうしようもない？”」

もう一度笑う。今度は少し馬鹿にしたような笑み。

「まだ何もしていないのに、よくそんな言葉が出て来るね」

女の言葉が胸を抉る。確かに何も出来なかったし、何もしようとしていない。この運命に身を任せてるだけ。

「じゃあ聞くけど、記憶を失った佳はもう倉本佳じゃないのかい？」

「それは、」

佳じゃない。そう言おうとしたのを、白い目に止められる。

「うん、質問を変えようか。キミは大事な人が記憶を失ったらもうその人のことはどうでもよくなるのか？」

鋭い視線で射抜かれる。言葉、声の一つ一つに威圧があり、そのくせに優しさがある。何かを教えようとしてくれているような、失った物を思い出させてくれるような。

「柳生城道。あんなに固い絆で結ばれているのに何故気付かない。佳の軌跡は確かに今息づいている。自分が今キミと会っているように」

佳の軌跡？　言っていることはわからない。けど、何でだろう。鼓動がうるさい。血が熱い。それ以上に、景色が綺麗なのだ。頭が働く。いつもの何倍も。心が奮える。出て来た答えに。後悔しても仕切れない程の時間を無駄にした。何を僕は止まっていたのだ。違うだろう。僕が止まってはダメなのだ。

「自分にはこのくらいしか出来ないけど、まだ沢山の人がキミ達を助けてくれる」

「ううん、助かったのだ。えっと、名前は何ていうのだ？」

「自分は羽路。そう感謝されると嬉しいな」

羽路か。羽路には十分助けられた。見た目だけじゃなく、中身も少し佳に似てるのかな？　何だか頼もしい。もっと仲良くなりたいのだけど、先にやることが出来たのだ。

「羽路を含めて二人なのだ。僕に大事な事を教えてくれたのは」

言わずもがなもう一人は佳だ。

まさか、佳以外の人から色が映るとは思わなかったのだ。

「なははは。うん、少し照れるな」

白い瞳を瞼に収めて羽路は笑う。元々見えないんだろう。最初佳と話していた時も目は開いてなかった。

ただの癖か、それともわざとか、羽路の眼に見られていると、とても一人が怖くなる。何なのだろう。まぁ、気にしても仕方ないのだ。

佳の為に今出来ること。それは、佳に手を差し伸べることなのだ。どんな形でもいい、佳が僕達にしてくれたように。例え佳が記憶を

思い出せなくてもいい。佳の口から直接、要らないと言われるまで僕は手を差し伸べ続けるのだ。

「本当に、ありがとう羽路」
「ん、じゃあ最後にもう一つだけ。尋明神社に行けばいい。もう、一人は最初から戦ってるよ」
「わかったのだ」

最後にもう一度感謝を口にし手をふる。足にしっかりと力を入れ、佳と歩いたこの道を踏みしめる。零からでも一からでもない。もう一度佳とこの道を歩く為に走る。

佳、佳がいない世界はこんなにも色褪せていて、何もなかったのだ。それは、楽しくもないし、辛くもない、生きている実感が何一つ得られなかったのだ。だから、もういいのだ。やっぱり僕には佳が必要なのだ。迎えに行くから、思い出せなくてもいい。迎えに行って手を差し伸べるから、だからその手を取ってまたあの笑顔を僕に見せて。

俺　透麻

「なんなら一緒に帰ってあげてもいいわよ」

校門前に見覚えのあるチビが立ってるなぁと思ったら……、何を開口一番下らないことを言ってんだ。

明らかに待っていたのが丸分かりだ。返事をしない俺をどう思ったのかチビは言葉をつけたした。

「か、勘違いしないでよね。別に一緒に帰りたいわけじゃないんですから」

あまりにも定番すぎる台詞に呆れ顔で返す。一々返事をするのも面倒くさい。

黙って歩きだした俺の後をチビがついてくる。

「透麻には言わないといけないと思って」

身長とかのせいか俺の方が歩幅が大きいから歩くのが早い。自然と開いていた間をチビが置いていかれないようにと少し小走りで隣りまで来て埋めた。

隣りに来たチビは小走りをやめ少し足早で俺と歩調を合わせる。

なる程、俺に言わなくてはダメなことがあったから一緒に帰ろうと言ったわけか。

まぁ、別に深い意味があるなんて自意識過剰な考えなんかしてないけどな。そもそもペッタンコに興味はない。

「私、お父様と上手くやっていけていますわ」

「そうか」

まぁ、正直どうでもいい。俺には一切関係の無いことだ。

「あ、あと私アルバイト始めたのよ」

「ふーん」

これもまたどうでもいい。今時高校生のアルバイトなんて珍しくも何ともない。

チビの話しにはもう飽きた。最初から聞く気もなかったんだが、まぁ勝手について来て勝手に喋りだしたんだ。仕方ない。

「良い人達ですわ。履いている下着を三万円で買ってくれるの」

「それはバイトじゃねぇ！　今すぐ止めろ」

何をやってんだこのくそチビは。ついアホな発言に足を止めてしまう。それは売春行為っつうんだよ。アホか。大体こんなド貧乳で色気ゼロの奴の下着何か買う奴も買う奴だ。

「嘘に決まってるでしょ。それはアルバイトではなくて売春と言うのよ」

「殴ってやろうか」

くだらない嘘つきやがって。そんな嘘をつく意味があるのか。

時間を無駄にした。特に急いでるわけでも用事があるわけでもないけど、とにかく時間を無駄にした。

深く溜め息をついたあと歩みを再開させる。後ろから待ちなさいよって声が聞こえたけど、無視して歩くとまた隣りまで走って来た。

二つに結っている水色の髪が上下に動く。俺の肩より下のそいつの小さな顔が真っ直ぐと、嬉しそうに俺の顔を見る。

「今のは以前の透麻に戻っていたわ」

チビは嬉しそうに微笑む。

“以前の俺？”

何だよそれ。

「最近の透麻はおかしいですわ。ぼーっとして抜け殻みたい」

チビがくどくどと以前の俺とを比較する。何も知らない癖に。そう、何一つ、俺達に何があったか知らない癖に。

「何ていうからしくないですわよ」

「……るせぇ」

ウゼェ。ウゼェんだよ。

「お前が何を知ってんだ？　らしくないだと。そんなのわかってんだよ！」

わかってるさ。自分の事だ。自分が一番よくわかってる。わかってこうなんだよ。以前と違う？　当たり前だ。以前と同じにはなれねぇんだ。

「いねぇんだよもう！」

近くに、俺達の中心に無くてはならない存在が。

「佳がいねぇのに今まで通り何て出来るわけねぇだろ！」

何も知らないチビに、そもそも仲間じゃないコイツに何を言っても無駄なんてこともわかってる。けど、言わずには居られなかった。発散せざるをえなかった。何も知らないコイツにだからこそ、城道達に見られたくない姿を見せられる。こんな怒鳴り散らしてる姿何てアイツらに見せられる筈がない。俺からもうムリだと言ったんだ。俺が真っ先にこの地獄に耐えないと。

「何を言ってるの？　記憶を失った人間と今まで通り何て出来るわけ無いじゃない」

「……は？　いや、つか何でソレを」

「透麻は馬鹿何だから、今まで通りにはムリとか、諦めるとか、そんな事考えなくていいのよ」

背伸びをして無理矢理距離を縮めてくる。その顔は真剣そのもので、キッと少しつり上がった眼が自信満々に俺を見る。

「大事なのは今までではなくこれからでしょ。簡単でしょ。透麻はどうしたいの？」

何を、そんな事聞く前から答えは頭に出た。素直な、真っ直ぐな俺の今の望み。

「倉本と一緒にいたいか、いたくないか。この二択でしょ」

「二択じゃねぇよ」

一緒に居たいんなら俺は今までの佳じゃない事を知り悲しくなるだろう。知らなくて良かった悲しみを知ることになるし、わざわざ感じなくて良かった違和感を痛い程感じてしまう。

――けど、

「馬鹿で真っ直ぐで優しい。私の知ってる透麻はそんな人ですわ」
「馬鹿は余計だけど、まぁチビにしてはまぁまぁだな」

佳と居ないのが一番辛い。身を持って体験したから間違いなく言える。佳といた時間が長すぎた。

盲信？　上等だ。俺は佳を信じている。例え記憶を失っていようが、以前の俺達に戻れなかろうが関係ねぇ。どんな佳でも構わない。佳ならいい。それに、記憶を取り戻す可能性だってまだあるわけだ。

「サンキューなチビ」
「いい加減名前で呼んで欲しいですわ」
「よしご褒美だ」
「ぇ、」

一瞬驚いたあとどこか期待したような顔でチビは眼を細めた。仄かに紅潮した頬が水色の髪で見え隠れする。爪先立ちをし、顔との距離が少しだけ埋まる。

コイツ、そんなにして欲しいのか。仕方ねぇなぁ。

「ぁっ……」

頭に手を置くとチビの声が吐息と一緒に漏れる。細めていた眼を閉じて、俺の服の裾を掴むチビ。

「またカップラーメン作ってやるからな」

「……え？」

頭に置いた手をそのまま優しく動かす。

頭を撫でて欲しいなんて、見た目通りやっぱりガキだ。そういや汐姫も佳に頭撫でられて嬉しそうにしてたな。何だ、背が低い奴は頭撫でられたら嬉しいのか？

「な、何ですの……それ」

余りにも嬉しいのか体を震わせて喜んでいるチビ。そりゃあまぁ小さい奴には嬉しい頭撫でてやるのとそれプラスカップラーメンだ。体が震える程嬉しいのも仕方がない。

「か、えせ」

「は？」

「返せ！」

何を急に大声だしてんだ。大体返せって、何を――

「乙女の純情を返せぇぇぇえええええええ゛！」

顎に激しい痛みを感じた瞬間、水色の髪が視界から消え、変わりに群青色に斑な白色の綺麗な空が眼に入った。

何が何だかわからない状態で脳は考える。

何でチビは怒ってんだ？
全然見当がつかない。わからない事は考えても仕方ないので、聞くことにする。

「透麻なんてもう知らないですわ！　さっさと尋明神社にでも行けばいいのよ」
「じんみょうじんじゃ？」

何処にあるんだそれ？

「っ倉本に縁（ゆかり）のある神社よ！」
「わ、わかった」

本当に何をそんなに怒ってんだ？　まぁいい。佳に縁のある神社か。あの二つのどっちかだろうけど……、近い方から行くか。

「本当にありがとな海里」
「ふんっ」

そっぽを向いた海里に一度だけ手を振り走りだす。行けってことはそこで何かが起きてるんだろう。佳に、これからの俺達に関係のある何かが。
もしかしたら城道が憂さ晴らしに暴れているだけかも知れない……。
有り得なくは無い可能性にちょっと出鼻を挫かれそうになる。もし本当に城道が暴れてるだけだったら、たっぷり説教だな。

絶望の中の希望　來優

全身の骨が軋む。泥のついた顔はしっかりと前を向きキツく睨んでいる。拳を握る。足に力を込め、思いっ切り土を蹴る。幾度となく繰り返して来た突進に地面は穿ち、その数だけ私の体に傷がつく。擦り傷、切り傷、打撲。口の中に泥が入ることも結構ある。けど、私はまた繰り返す。それは果てしなく無謀な行為だ。そんなことはわかっている。けれど、何万分の一でも確率がある限り私は止めない。

「ぅうぉおおおおおおおおおおお゛！」

雄叫びで気持ちを鼓舞し、振り下ろす拳で体を鼓舞する。

負けられない。譲れない。これだけは絶対に。

捉えた。そう思った時には銀色の髪が揺れ私を通過する。力の矛先が何に当たることもなく、勢いを増し地面に吸い寄せられる。ろくな受け身もとれないまま地面を転がる。

「もう、諦めたらどうじゃ。主ではワシには勝てん」

呆れた声で私に言葉を投げかける。確かに言う通り、勝てないかも知れない。この数日何度も何度も挑んだけどまだ一発も当たっていない。一度も体に触れていない。

「主らももう忘れようとしてたんじゃろう？　都合がいいじゃろう。佳も今新しく頑張ろうとしとる。主も諦めて四人で仲良くすればいいじゃろう」

「ダメなんだ」

やっぱりダメなんだ。佳がいないと、私達はダメなんだ。

「……何をそこまで佳に執着する？　今だって、佳に近づこうとしたのは主だけじゃないか」

「それは、」

一瞬だけ視線が下に逸れる。その隙をつかれて私の目の前に足が現れた。腕で防ぐことも力を逸らすことも出来ずそのままお腹に叩き込まれた。体が耐えられず宙を飛ぶ。すぐに地面に落ち、数度全身を擦りながら地面を跳ねた。

諦めろ。今の蹴りに込められた強い思いが伝わってくる。擦りむき、服は破れ露出した肌の所々が皮膚が捲れて血が滲んでいる。

急なお腹の圧迫に肺が息を全て吐き出し空気を求める。激痛がそれをさせてくれず、痛みと苦しさで咽せかえる。

「ワシはあまり主らを傷つけたくはないのじゃ」

あの蹴りでも手加減していたのだろう。困ったような顔で私を見下ろす。

「い、場所なんだ」

「居場所？」

落ち着いて来た呼吸を整え、がくがくと震えている足に喝を入れ、激痛を伴う動きに耐える。ゆっくりと起き上がり、もう一度大きくゆっくりと呼吸をする。

「城道達は今少し混乱してるんだ」

そうだ。皆本当は佳と一緒に居たいんだ。だけど、今が辛くて少し絶望しているだけだ。もう一度居場所が出来れば、もう一度佳が笑ってくれたらすぐに戻って来る。だから、私は皆が戻ってくるように、佳がまた笑ってくれるようにするだけ。そうだ、私が守るんだ。私がもう一度作るんだ。私達の居場所を。

居場所が無くなる辛さを、一人暗闇の中を歩く孤独を知っている私だからこそ今頑張れる。この辛さは一度経験した。この孤独は一度経験した。だから、絶望すること無く考えられた。私達の最善を。

「私が皆を守るんだぁぁあああああああ！」

もう一度突っ込む。痛みで真っ直ぐに速くは走れない。ふらふらと遅くしか走れない。けどがむしゃらに走る。全力で、ある力を全てを使う。私に出来るのはそれくらいだから。

キツく拳を握る。間合いに入る一歩前で拳を引く。一歩、そして体重を乗せて相手の顔面目掛けて前に突き出す。

当たった。そう思った瞬間にはまた拳は空を切り、私は地面に這う。

「無駄じゃ。諦めろ」

冷たい、淡々とした声が疲れ果てた体に突き刺さる。

「だ、れが、諦めるか」

膝を立て、支えにして何とか立つ。血と泥で服と肌は汚れ、痛みと疲れで心は崩れ落ちそうになる。

けど、私は立つ。崩れ落ちそうな心を奮い立たせ、もう一度地面を蹴る。

「何をそこまでする必要がある」

首を掴まれ地面に押し倒される。背中の衝撃と、首を掴まれている息苦しさで意識が飛びそうになるのを唇を噛み締めて防ぐ。切れた唇から血が伝う。

「來優、少し主は異常じゃぞ。諦めが悪いどころの話じゃあない。何が主をそこまで奮い立たせる？　佳を救えなかった罪悪感か？それとも仲間の為と言う使命感か？」

「はぁ、はぁ」

罪悪感、使命感、どちらもある。けど、もう一つ、微かにしか見えないくせに、一層私を奮い立たせているモノ。

「光だ」

「光？」

正体はわからない。何なのか全くわからない。けど、あの日寝ている佳から感じた僅かな温もり。心が真っ暗になって行く中で照らしてくれた、温かな光。確信は持てないけど、それは私にとってあの時の透麻と佳みたいなものだ。暗闇の中孤独で死のうと思っていた私を見つけてくれた透麻。孤独な私に居場所をくれた佳。私を闇から救ってくれた二人のような光。

記憶を失っても佳は佳だ。そう思えた。今の佳はあの時の私だ。何一つない自分に怯えて不安になっている。だから、今度は私が救う番。この微かな光を大きな光にする為に、佳の心を私達の心照らす大きな光に。

「佳は私が助ける」

「……」

首筋から手が離される。無言でゆっくりと紗弥師匠は鳥居まで歩いて行く。

帰らせるか。そう思い立ち上がろうとしたけど、足がふらついて倒れた。

「十二年」

もう一度立ち上がろうとした所で声が私の所まで届く。静かだけど、怒りや憎しみが籠もった声。紗弥師匠が鳥居に手をそえた。良かった帰る気は無さそうだ。

「十二年じゃぞ！」

今度ははっきりとした怒声。抑える気が微塵もない怒りと憎しみが声に乗って私を怯ませる。

「ワシは十二年も前からあの人達から佳を救おうと頑張った」

十二年。口にしたら簡単だけど、その密度は計り知れない程深く厚い。十二年前っていたら私達が出会ったくらいからだ。

「ああ、そうじゃよ。この馬鹿げた喋り方もその意思表示の一つだ！」

だんっと鳥居の柱を思いっ切り殴りつける。数センチ拳型に窪んだ柱が仕返しにとばかり紗弥師匠の拳に破片を食い込ませる。

「來優、お前は知ってたか。佳が四歳になった頃から夜はそこの社

に閉じ込められていたことを」
「……え」
「知ってたか、冬でも毛布一つも与えられなかったことを」
知らない。そんな事知らなかった。話してくれなかった。だって、佳はそんな素振り微塵も見せなかった。
「私は、私達姉妹は何度も救おうとした。心咲姉さんは閉じ込められている佳に食べ物や毛布などをこっそり運んだ。私はずっとあの人達に止めるように訴えた」
ただ感情的に、怒りと憎しみを言葉でぶつける。
「そんな私達は殴られる事何か日常茶飯事だった。私も心咲姉さんも処女を実の親の性的虐待で奪われた。佳と心咲姉さんを庇い、服を剥かれこの柱に全裸で縛られ一晩を迎えた事もあった。知らない男達のモノが私の体を外からも内からも支配することもあった。様々な虫が私の体を這いずり回ることもあった！」
強くもう一度柱に拳を叩き込む。剥き出しになった破片がまた手に食い込んでいた。
「佳を悲しませない為に私達が受けた仕打ちは佳には言ってない。自分のせいで私達が酷い事をされた何て佳が知ったら悲しむからだ」
そうか。紗弥師匠達はずっと戦って来たんだ。私達が何一つ出来なかった事をずっと。どんな事をされても、例え何一つ佳に知られなくてもずっと。
「十二年間やって来て、結局救えなかった。私達の十二年間は無駄

だった。わかるか來優。私達の悲しみが」

確かに救えなかった。結局は佳は何もかもを失ってしまったんだから。けど、だけど絶対にこれだけは言える。

「無駄なんかじゃない」

人の努力が、誰かを救いたいと願った努力が無駄になる何てことある筈がない。

「紗弥師匠達がいたから佳は生きられた。最初から孤独だったならきっと佳は死んでいる。助けてくれていたから佳は辛いのに生きられた。それに、紗弥師匠がいなかったら私達五人一緒で同じ高校何て有り得なかった」

確実に足を引っ張る馬鹿が一人いるから。

「前に私に言いましたよね。佳を笑顔にしてくれてありがとうって。私達が佳を笑顔にしたんなら紗弥師匠達は佳に笑顔を与えた存在です」

この人達が居なかったら佳は居なかっただろう。間違いなくそれだけは言える。クサイ台詞だし、恥ずかしいからあまり口に出したくないけど、

「誰だって誰かが愛してくれないと生きていけない」

偽りでも何でも良い。それが愛と呼べるモノなら、それ無しでは人は成長しない。ただ死を待つだけだ。

どんな馬鹿だって、どうしようも無く情けない奴だって、有り得

ない化け物だって、一度捨てられた奴だって、愛してくれる人はいる。愛してくれた人がいたから今生きていられるんだ。

「私は佳を救う。記憶を取り戻せるかは知らない。けど、きっと今佳の心の中は不安で泣いている。それを誤魔化す為に新しく生きようとしているならそれで構わない。私は私達の居場所を取り戻す。佳の隣りは私達の居場所だ」

「……ふんっ。何て強情な奴だ。結局佳と一緒にいたいと言う自分の欲だろうそれは」

それもある。けど、自分の欲でもあるし、皆の欲でもある。何より、それは佳の欲でもある。

「約束したんだ。ずっと一緒だって」

ずっと昔に佳と皆で。こんな形でその約束を破る気はない。

「本当にそれで良いのか來優？　悲しいだけかも知れないんだぞ」

「何も出来ないよりはましです」

真っ直ぐに視線が交わる。師匠からはもう怒りも憎しみも感じない。

数秒視線が交わった後師匠は口許を緩めた。

「おもしろい。ワシの体に一発でも攻撃を入れれたならその時はワシが責任持って主らを佳の隣りにおいてやる」

師匠の喋り方が佳を救うという意味が込められた喋り方に戻った。この言葉も近づく事を許してくれなかったさっきと比べると随分協力的だ。ただ一つ大きな問題がある。師匠に一発当てられるかだ。

受け流されたら意味がない。力をいなされるのだから当たった事にはならないだろう。何にしろダメージが無いわけだ。受け流す事が出来ず、防ぐしか出来ない。もしくは、そのままノーガードか。この数日間と今の状況を見ると不可能に限りなく近い。けどやるしかない。

「それで居場所を取り戻せるのなら、例え不可能に近くても私はやってみせる」

紗弥師匠がゆっくりと歩いて来て私と向かい合う。お互いの間は十メートル程。ただこの十メートルがとても長く感じる。限りなく遠く感じる。そのくせ、紗弥師匠はドンとデカくて、私との格の違いを思い知らされる。

けど、私は一歩を踏みしめる。強く地面を蹴り上げ、一歩。この酷く遠い十メートルの距離を一歩縮める。

やっと繋がった佳を救う道を一歩進む。

『ありがとうなのだ』

城道はそう言って神社の方向に走って行った。走って行く彼の後ろ姿には悩みなどそういった物は全く感じず、期待とやる気が感じられた。おもしろい。本当に佳達はおもしろい。見てて飽きないっていうのは佳達の事を言うのだろう。

鈍よりと暗く沈んでいた城道の色が走って行く時には明るく輝いていた。もう大丈夫。これで自分の役目は終えた。あの人から与えられた役目は城道の背中を押してやること。まぁ実際自分があの四人の中で役に立てるのは城道か汐姫という女の子ぐらいだろう。けれど汐姫には自分よりも適任者がいた。だからあの人は城道を選んだのだろう。

それにしても、清々しい人達だ。今だってボロボロに汚れていたのに、芯は綺麗なままだった。太く頑丈な一本の糸。あんなに強い絆を持っている人達は珍しい。しかもその糸は一人を中心に張り巡らされている。色々な絆の形を視て来たけれど、こんなに太く強い明快な絆は珍しい。順位で言うと二番目にあたる。

「気持ちいいな」

佳と会った後もそうだけど、城道と会った後もなんだか心が踊る。綺麗なビー玉を貰った小さい子供のような気持ちかな。綺麗な物を

見た後の清々しさ。口じゃ説明し辛いけれどとにかく心が洗われたように気持ちいい。

そよぐ風も、青い空も白い雲も緑の草も、何もかもが自分の心を彩る。

今この場に会長がいたらどれだけ幸せだろう。この時間を大好きな人と共有出来たらどれだけ嬉しいだろう。きっと今の何十倍にも膨れ上がる。

「あれぇ、羽路ちゃんじゃん」

振り返るまでもない。そもそも自分に振り返るという動作は全く不必要だ。振り返っても見えないんだから意味がない。見えない。姿形表情景色、自分は物心ついた頃ぐらいから何も見えない。だからこそ感じれる。本質や色、気配など。佳達のような気持ちのいい存在がいる一方で、憂鬱になる存在もいる。

「無視は酷いなぁ。ちゃんとこっちを見なきゃぁ」

言われるがままに振り返る。嫌みのように言われた言葉が霞む。言葉よりも、その声が耳奥を舐めるようにねっとりと絡み付く。

「何言ってるんですか。自分は見えないんだから振り向いても意味がないんですよ」

「視力だけじゃなくて礼儀や常識も無くしてるんだねぇ」

見えない人にここまで言える人もそうは居ないだろう。

「相変わらず非道いなぁ葵先輩」

さっきまでの心地よさが逃げて行く。風も空も雲も草も、葵先輩の前じゃ色彩を無くす。音を立てずに最初から無かったものだと言わんばかりに一瞬で消えた。

地球上の全てから嫌われている様な人。まさに葵先輩はそうだろう。ごく少数を除いてだけど。意外なことにもその少数の中に自分は入っている。自分は葵先輩を嫌いにはなれない。まぁ好きにもなれないけれど。

十人十色という熟語がある。本質が視える自分からしたらそんな熟語は嘘っぱちだった。人間何て心の中は皆同じ。幼いころから数えきれない程の本質を視て来た自分がだした答えだ。

けれど、葵先輩を初めて見た時それは間違いだと知った。嘘だらけの人間の表裏の中で葵先輩は違った。悪い方に表裏一体だった。葵先輩には三人とその他しかいなかった。合理的で、非情な本質。氷のような綺麗に視える冷たい恐怖が自分の体をゾクゾクと跳ね上がっていったのを覚えている。

「高校は楽しい～？」

興味ないどうでもいい事をわざわざ聞く。言葉で人の考えを支配する。他人の神経を撫でるように踏みにじる。葵先輩の大好きな事だ。そもそも答えを知っているくせに聞くところが一々鬱陶しい。

「お陰様で、ナツと出会えてからは楽しいことだらけです」

「そう、それは良かった」

恐らく今葵先輩は笑っているんだろう。嬉しくもない、どうでもいいことを笑顔の仮面をつけて。

何を考えているのかわからない。何をどこまで知っているのかわからない。

「ありがとうございます」

けれど、やっぱりこの人は自分の恩人だから嫌いにはなれない。ナツと出会えたのは葵先輩のおかげだ。気紛れで、どうでもいいと言う様に自分を助けてくれた。

「何が～？」
「何でもないです」

葵先輩の事だ。気紛れでどうでも良かったにせよ、何か得があると思って自分を救ってくれたのだろう。そして、今もそうだ。城道、キミ達の為にあの葵先輩が動いているんだ。神様を敵にしない限り、この人に不可能は無いよ。

「幾ら自分が目が見えないからってモールス信号はちょっと無茶だと思いますよ」
「何のことかなぁ？　頭もおかしくなっちゃったぁ？」

素直じゃないなぁ。自分がモールス信号に詳しいこと何てナツですら知らない。そもそも誰にも言ってないんだから。そんなこと知ってると言ったらもう葵先輩しかいないだろう。他のどんな人よりも一番可能性が高い。

「それで、葵先輩はこれから何をするんですか？」

自分は言われた通りにやった。自分が城道を担当、他の人達にも根回しはしてるだろう。それで、だ。本人は一体何をするのか。根回しだけで終わり何て中途半端な事はしないだろう。多分葵先輩にしかできない事。もううっすらと答えはわかっているけど。葵先輩

の相手はあの人しかいないだろう。

「ちょっと化け物退治かなぁ。まぁ今歩けないらしいから、やっと殺せるかな」

「ナツを巻き込まないで下さいね」

「さぁねぇ」

足音が遠ざかって行く。離れていく気配は感じない。本当に、葵先輩は自分が気付かない程気配を消すから勘弁して欲しい。あまり驚く事のない自分を驚かせれる人間の一人だ。

葵先輩が化け物と言ったあの人。一番不思議な絆の形。葵先輩とあの人は、お互い大嫌いなのに、なのに凄く固く結びあっている。そして、この二人を強く結び合わせている糸がもう一本。葵先輩の中にあって唯一暖かみを持っているモノ。それが何かはわからないけれど、きっと葵先輩の一番大事なモノなんだろう。

そういえば、葵先輩が自分を救ったのは今日の日を見越してなのだろうか。

「まさかね」

そんなこと、有り得ないか。

じゃあ葵先輩が自分を救って得をする理由は？　佳を救って得をする理由は？　わからない。考えても無駄か。葵先輩を理解すること何て到底不可能な話か。

「雲を掴むようなものか」

空に浮く雲に向かって手を伸ばす。当然届くはずもない。あの雲

を掴めるのは上から照らしてくれる太陽ぐらいだろう。
いるんだろうか。葵先輩には、あの太陽のような存在が。
葵先輩を愛してくれている暖かい存在が。

伝える力　葵

予想以上に使えた羽路と別れて、足はアイツの家へと向かう。行きたくないと言う感情を苛立ちが押さえ込み、殴りたいと言う欲が歩みを速める。

頭の中で何度も殺したアイツの顔がアホみたいな顔で笑っている。その顔の真ん中にナイフを突き刺し、鼻を削ぎ落とし、それでもつり上がっている口を耳まで裂く。いくら頭で妄想しても苛立ちは収まらない。逆に増えて行くばかりだ。

ああ、楽しみだ。

くすっと笑いが漏れる。

段々とアイツが住んでいるアパートが見えて来て、階段を上る音が耳に響き、アイツが部屋の中で誰かと話している声が頭を真っ白にした。

ただ衝動に任せて目の前のドアを蹴破る。

派手な音がした割りにはドアは飛んでいない。ただ鍵が壊れて少しゆらゆらと揺れているくらい。

さぁ、先ずは礼儀正しく挨拶から。

「きょーぉやくん、あーそーぼ」

言い終わるが早いか隣りに差してあった傘を投げる。

「恭優さん危ない！」

恭優の顔面を狙って投げた傘は恭優の隣りにいた女の腕に当たった。

「ふーん、恭優便利な盾を持ってるんだねぇ」

「何しに来やがった葵」

隣りの女の無事を確認したあと恭優は僕を睨む。視線が交わる。似て非なる二つの視線が交わり、少しの間時間が止まったような錯覚に陥る。

その空気を壊したのは僕でも恭優でも無かった。完全な部外者である金髪の女。名前は確かナツだったか。興味が無いから覚えていない。一つ言えるのは、部外者のコイツがこの空気を壊したという事実。恐らく常人は硬直するしかないこの空気をだ。

投げつけられた傘を持ち、声を上げながら距離を縮めて来る。

「本当に面白い玩具を持っているね」

振り上げられた傘が勢いよく振り下ろされる。眼はしっかりと僕の眼を見据えていて、傘は余計な軌道を一切描かずに何の迷いも無く右肩に叩きつけられた。手加減一切無しの衝撃が右肩を起点に体中に駆け巡る。けれどその痛みさえも僕にはどうでも良かった。

今考えている事は二つ。先ず一つ、これは当初の目的通り勘違いをしているアホをどうやって殺すか。もう一つは、与えられたこの玩具をどうやって壊すか。

兎にも角にも先ずは耐久性を確かめてみる。拳をキツく握る。そうだな、この傘の痛みの倍くらいを先ずは返そうか。

女が追撃を喰らわそうと動く。傘がもう一度襲いかかってくる。傘が顔に当たる瞬間前に女の体が地面に崩れた。女は何が起こったかわからない様子で、震えている足を呆然と眺めた。

「止めろ葵！」

恭優が声を張り上げる、がもう遅い。

「これくらいで壊れないよね？」

ボキっと小気味良い音と小さな衝撃が女の指から伝わって来た。この感覚だけは靴を履いた上からでもわかる。何度も感じたこの感覚。足をその場所からどける。どけたその場所には女の手があり人差し指が手の甲にぴったりとくっついていた。

「――っ！」

言葉にもならない叫びを一瞬あげ、女は立ち上がろうとする。その行動に思わず口がつり上がる。

ふらふらとゆっくり立ち上がるけど足に力が入らなくてすぐに地面に尻をつく女。

仕方ないんだよ。最初の一撃で顎を掠めさせて、痛みこそあまり無いかも知れないけど足を封じた。立てなくても仕方ない事だ。それなのに必至で立とうと頑張る女の姿。

「いい、良いね恭優ぁ。何この玩具、僕も欲しいなぁ」

立てない女の手をとってあげる。もちろん立たせてあげる為なんかじゃない。女の右手が力無く垂れる。次は左肩だ。同じように左手を持ち、また肩を外してあげた。もう拳を握る事も出来ない状態なのに女はそれでも震えながらも立ち上がろうとする。

「どうしたの恭優くん。早くしないと壊しちゃうよ？」

ベッドに座っている恭優に視線を移す。悔しそうに唇を噛み締めて拳を握りしめている。

ああ、その顔が見たかったんだ。もっと見れるかな。この女を壊したら、次は恭優はどんな顔をするだろう。

頭の中で顔がない恭優が表情を作っている。耳元まで裂かれた口は真一文字に閉じてあり、潰れた眼からは、黒い感情が漏れている。

みたい、見たい、見てみたい。

頭の中で複数の恭優を想像する。

「――な」

声が想像を壊す。小さな声だったけど、欠片が僅かに耳に入って来て、想像を壊した。欠片だけなのに確かな力が籠もっていて、違う。この力はただの力じゃない。知っている。似たような力を僕は知っている。

視線がゆっくりと戻って行く。玩具だと遊んでいた女へと。

未だに体は震えている。足にも力は入らない筈だ。なのに女は立ち上がる。そして顔をあげ、僕を睨む。眼には大粒の涙を流しながらも揺れる事無く真っ直ぐと僕を睨む。

この顔も僕は知っている。見たことがある。

「恭優さんに、手を出すな」

おかしい。何でだ恭優。何で何時もお前なんだ。誰かに愛されるのは何時もお前だ。何で、同じ化け物の筈なのに。同じ気持ち悪い存在の筈なのに。

何でいつもお前だけ。

「歯ァ食いしばれ」

間近で聞こえる筈の無い声が聞こえて、ハッと我にかえる。けど遅い。すぐ左頬に痛みが走りぬけ、体を宙へといざなった。

けどおかげで痛みが冷静さを取り戻してくれた。

「何だ、歩けるんじゃん恭優」

「葵ぶッ殺してやるから動くなよ」

ズキズキと頬から痛みと熱が体の隅々まで伝って行く。くらくらする頭とは反対に口は饒舌によく動く。

「歩けないって聞いてたのに、何で歩くかなぁ」

「リハビリっつう言葉を知ってるかァ？」

「あぁ、脳筋だから医者の言葉を理解出来ずにずっと歩く練習してたの？　よかったねぇ馬鹿で」

「よぉしそこまで歩いて行ってやるから動くなよ葵。すぐにぶッ殺してやるからなァ」

女の頭に一度手を置いた後足を一歩前に進める恭優。遅い。真っ直ぐでもない早くもない。歩くとは言えないその行動を僕が待つ筈がない。いち早く恭優の背後に回ってその後頭部を殴り筋肉で出来た脳味噌をぐちゃぐちゃに揺らしたい。けど、生憎と今の僕じゃそれが出来ない。

足に思った以上に力が入らない。恭優程じゃないけどいつも通りとは遠く及ばないだろう。こんなので恭優のそばに寄ったらまた一撃喰らってしまう。

「はぁ」

仕方ないなぁ。今日は殺すのを諦めるか。

「どうしたぁ、溜め息なんかついて」
「誰かさんが歩けることがショックでねぇ」
「そぉか。そんなにショックなら気分転換に旅行に行かせてやるよ。地獄への片道切符だけどなァ」
「あははは。歩けるんでしょ？　恭優くんが行って歩いて帰ってくればぁ？」

あぁ、本当に口はよく動く。この調子だったら余計なことも口走りそうだなぁ。

「恭優くんさぁ」
「ああ？」
「何時まで自己満足に浸ってるつもりなのぉ？」

あぁー、余計なことを。

「佳くんが自分で終わらせようとした命を勝手に助けておいて、後はもう知りませんじゃぁ佳くんにとったら助けないでくれた方がよかったかもね」

恭優の動きが止まる。恭優の考えは本当よくわかる。今僕の言いたい事とその答えを脳筋の頭で必至に考えているんだろう。

「ヒント一、恭優くんはさぁ命さえあればあとはいいの？」

これで僕の言いたい事は大体わかっただろう。じゃあ次行こうか。

「ヒント二、助けると救うじゃちょっと違うよねぇ」

これで答えがわかった。じゃあ、最後のヒント言ってみようか。

「ヒント三、いや、これはヒントじゃないか。早く行かないと役立たずのまま終わってしまうよ」

場所は教えない。それくらいは自分で探せ。まぁ佳くんに関係あるとこ巡ってったら一時間もしないうちに着くだろうけど。

さて、これで言いたい事もその答えもやる事も大体わかっただろ。ほら、行けよ。

「その使えない足で醜く頑張れば恭優くん」

ほら、早くしないと本当に終わっちゃうよ。

「……ちっ。今日のところは見逃してやるよ」

「相変わらずバカだね」

まだ少しふらつく足で外まで歩く。階段を踏み外さないように少し慎重になりながら一段ずつゆっくりと降りる。

ふーっと深呼吸を一度だけして流行る気持ちを少し落ち着かせる。落ち着いていく気持ちと一緒に体の力も程よく抜け、いつの間にかポケットの中でキツく握っていたモノを地面に放り投げた。

本当に恭優はバカだ。見逃してやったのはこっちの方だ。お前との決着が道具でつくのはおもしろくないからね。

うん、それにしても……。

「痛いなぁ」

本当に歩けるとは思っていなかった。ああ、本当に考えている事はバレバレなくせに斜め上を行くなぁ。やっぱり恭優なんか大っ嫌いだ。

伝える力　葵（後書き）

なっっっっっがい間更新出来ずじまいですみません。約1ヶ月ぶりですね。気の長い方、終わりまでのもう少しの間お付き合い下さい。

読んでくれてありがとうございます。

確実な一歩　來優

神社でじゃれている。第三者から見るとそうとしか見えない二人組み。ただ、片方の顔は必死そのもので、体はボロボロに傷ついている。とてもじゃれているとは思えない格好だ。それをじゃれていると思わせるのはもう片方の大きな存在のせいだろう。右へ左へ、はたまた後ろへ前へ。縦横無尽に、余裕を顔に貼り付けて確実に攻撃を避けている。

金色の髪が鋭く寄り、銀色の髪がふわりと離れていく。そして、離れたと思ったら一瞬で間合いを詰み圧倒的な力の差を痛みで教え込まれる。

当たるわけがない。掠りもするわけがない。悲観的な考えを、掻き消すようにまた走る。気がつけば拳の矛先に相手はいない。

どこに！　思考は何とか場所を把握しようと働くけど、モーションに入った体は途中では止まらなかった。勢い良く何も無い場所に、体重と力を乗せ拳を突き出そうとしている。あと少しで一番無防備な状態へ、一番体重が乗っている状態へ移行する。ちらっと銀色の細い髪が視界の横の隅にちらつく。

ヤバい。体に急ブレーキをかけるが止まる筈もなく、ゆっくり時間を感じながら体は勝手に動く。今この状態で殴られたら、少しの衝撃でも前から来たら、それは大きな痛みとなって私の体を襲う。もしかしたら意識が飛ぶかも知れない。嫌、普通に殴ればいいんだ。意識を飛ばせば終わるんだから、殴れば確実に意識は飛ぶ。師匠なら確実に意識を飛ばせる力で、一番痛い所を殴ってくる。

くそっ。せっかくチャンスを貰えたのに、もう終わるのか。明日の師匠の気持ち何かわからない。今日だけの気まぐれかも知れないのに。

「もう終わりじゃの」

体の行き先に腕が伸びる。師匠の細く白い腕。この腕から人の意識を一瞬で飛ばせる程の力が生まれる。何の狂いも無く私の顔が腕に吸い寄せられて行く。一つも余計な軌道を描かずに。

前方から襲い来る痛みを覚悟して目を閉じる。瞬間“横”から痛みが襲って来て、私の体の軌道を横へと変えた。

横腹の痛みに耐えながら私が居た場所に目を向ける。

「なに一人で格好つけてんだ馬鹿」

居る筈の無い存在に、一応助けてくれた透麻の姿を見て思ったのは嬉しさ少し感謝少し、殴りたい気持ち後全部。

「何私を蹴ってんだよ。やっぱり馬鹿か」

殴りたい。ホントに五回くらい殴りたい。今すぐ傍まで行って殴りたい。けど、まぁ息が切れてるのと、来てくれた事で許してやるかな。

「っとに、遅いんだよ」

さっきのは嘘だ。本当は殴りたい気持ち少しと嬉しさが後全部だ。そして傍に行きたいっていうのも……。

「悪かったな。それにしても格好良すぎだろ來優」

嬉しさが爆発しそうで、頬が緩くなりそうで、我慢しようとするけど、出来ずにこんなにやけた顔を見られたくなくて顔を伏せる。

「よく頑張ったな」

ぽんといつの間に傍に来たのか頭に透麻の手が置かれる。大きな手で撫でられて、少し気持ち良いと思ってしまう。それが恥ずかしくて、顔が熱くなって来る。赤くなっている顔を見られないように俯いたまま、普段なら透麻に言わない言葉を口にする。

「透麻……来てくれてありがとう」
「おう。こっからは二人だ」
「三人なのだ」

もう一人の声にいち早く反応したのは体の方。勢い良く立ち上がって透麻の体を蹴る。不意の事で何の抵抗も無く透麻の体は飛ばされた。

「いってぇな。テメェ來優ケンカ売ってんのか！」
「お前だって最初蹴っただろ」
「助けてやったんだろうが」
「頼んでねぇだろそんな事」

いつも通りな感じに戻った所で。

「城道がいれば百人力だ」
「何となく展開から何をすればいいのかわかるけど、正直難しいのだ」

険しい顔で紗弥師匠を睨む城道。紗弥師匠は、携帯でメールしてる？

「ん？　あー今佳にメールしておるんじゃ。もうすぐ帰るって。全く飼雲の奴め勝手に佳に携帯なんぞ買いおって。ワシが誕生日に買おうと思っておったのに。まぁ名義は流石に変えたがのう。他人に払わせるわけにはいかんじゃろ」

「確かにそうなのだ。因みに僕は佳の誕生日にはストラップをあげようと思うのだ」

「やめるのじゃ。ワシとかぶる。そもそもの話、お主らは佳の誕生日を祝えれるかわからぬじゃろう？」

「それもそうなのだ。じゃあちょっと殴られて欲しいのだ」

「却下じゃ。そろそろご託宣は良いじゃろ？　早く来んとワシは帰るぞ。佳にもうすぐ帰るってメールしたことじゃしの」

……確かに紗弥師匠が本気を出せば私達なんて一瞬だ。せっかく透麻と城道が来たのに無駄になるのか。

「それはどうかな」

「うむ。流石に紗弥殿でも、この人数は無理であろう」

ズシンと言う足音が聞こえる方、声のした方に振り返る。石段を登り、鳥居をくぐった所。

「……寺部と生徒会か。ぞろぞろと、何しに来たんじゃ？」

「おばさんは退場だし」

「そうだしね」

生徒会の双子が紗弥師匠に突っ込んで行く。確か同じ事をして透麻に一瞬でやられた気がするんだけど。

「誰がおばさんじゃ糞ガキ」

二人とも一回ずつ殴られ地面に倒れた。本当に何だろうあの双子。いるの？

「それにしてもお主ら何故助けに来た？　関係ないじゃろお主らには」

「正直借りを作りに来たんだけど、今はアンタとケンカしたい。オレ達はそれだけだ」

「倉本殿達とは同じ釜の飯を食べた仲だ困っておったら助けるのが当たり前であろう」

唖然としている私達に比べて紗弥師匠の言葉は冷たかった。ただ一言、数の不利など関係無いというように一言だけ。

「くだらぬ」

ただ冷たい言葉とは裏腹に表情は緩やかで、微かに嬉しそうに微笑んだ。佳に似た笑顔。凄く嬉しそうな、見てるだけで幸せになれるような笑顔を一瞬だけして見せた。

「姉さん、これが佳が歩いて来た軌跡だ」

声に体が反応する。この場にいる全員がその声に反応し、声のした方向へと視線を、体を、全意識を向ける。

有り得ない。だってあの人は歩けない筈で、車椅子の筈で、本当は今でも病院のベッドの上の筈なのに。

「嬉しいなぁ。義妹を想ってくれる奴がこんなにいる」

ああ、簡単な事だ。歩けない筈なのに歩ける事も、飛び降りた人間二人を支えて生きていられた事も、なんなく説明がつく。思えば

とても簡単で単純明快な答え。
あの人は私達が思ってるよりもずっと“化け物”だっただけだ。
落ちていく真っ赤な太陽が三人の代表者を照らす。紅い鬼と言われた生徒会長の紅い髪をより赤く。怪物のような力を持つハゲの頭をより明るく。そして、圧倒的な化け物の白銀色の髪を血色へと染め上げる。各々傍には大事な仲間達が。
恭優さんが来て飛躍的に上がった総戦力。それを踏まえた上で、それでも師匠は余裕を崩さない。それどころか僅かに口角を釣り上げ、この状況を楽しんでいる。
圧倒的な化け物や数の不利を目の当たりにし、私が最強だと思うこの人は、誰がどう見ても不利だと思うこの状況で優位な筈の私達を無視して一人だけ楽しそうに笑っている。

そうだ。この人は化け物を弟子にしてた人だ。

砂塵が舞う。風に運ばれ、高らかに舞い上がる。有り得ない踏み込みの力。最初に動いたのは師匠だった。目当ては恭優さんなのか、一直線に恭優さんまで走って行く。一瞬気を取られた生徒会のチビとハゲが間に入るけど、何も出来ずにただ師匠が横をすり抜けた後、膝から崩れ落ちた。
何をしたのか全くわからない。気づいたら離れていた筈の寺部の幸樹と彰までもが倒れている。

「い、石ですね」
「髪色の割には地味なことしてくれんじゃねぇか」

会長と北斗が師匠の前に立ちはだかる。そこで始めて師匠の足が止まった。
待て、会長は一度佳とケンカしてる所を見たから強いって知ってるけど、北斗は強いのか？　いつもおどおどしてるぞ。

「み、見せてあげますよ。ぼ、僕が編み出した、北斗〇拳を。ホァタっ」

北斗の手が鋭く突く。北斗が指先一つで人が殺せるかどうかは別として、確かに捉えるのが難しい程に速い突きだった。なんなく師匠がそれを横によけ、北斗の顎を叩く。それだけで北斗は倒れた。

「背中ががら空きだぜっ」

背後に回り込んでいた会長、それだけじゃない。前には倒れた北斗を足で払いのけ恭優さんが拳を突き出そうとしている。その隣には飼雲先輩。掌を師匠の方に向けている。三人共込められているのは尋常じゃない程の殺気。

三つの殺気の矛先にされた師匠の行動は防ぐわけでも横に飛んで避けるわけでもない。その場に立ち止まったままで迫り来る暴力を待っていた。

結果を見届ける前に私は師匠の元へ走り出した。透麻も城道も走っている。結果は見なくてもわかる。だから走った。次に繋ぐ為に。

師匠が防ぎも、横に飛んで避けようともせずにただ立ち止まったままだった。それは、そこに止まったまま、三つの暴力の矛先にいたままで、その暴力を打ち消せるからだ。

案の定、師匠は先ず一番速い恭優さんの腕に手を当てた。次に飼雲先輩の手を横から蹴る。蹴った勢いをすぐ殺さず、保ったまま勢いに乗って身を捻らせる。この動作で違う所を狙った三つの暴力を噛み合わせた。恭優さんの拳は会長の蹴り上げている足の裏へ、飼雲先輩の攻撃は隣にいる恭優さんへ。

会長と恭優さんが数メートル吹っ飛ぶ。残った飼雲先輩の腹部に片手を添える。反応出来ていないとしてもおかしい程に飼雲先輩の巨大が後ろへ吹っ飛んだ。登って来た石段を真っ逆様に落ちていく。

師匠が飼雲先輩を吹っ飛ばして一秒も満たない間に城道が師匠の足を払いにいった。後ろに避けられないように深い位置まで足を伸ばす。案の定師匠は上に飛ぶしかなく、そこを透麻が殴りかかる。

普通は空中では攻撃は避けられない。透麻の背中が急に上を向く。何をしたのか後ろからじゃ見えないけど、恐らく透麻の力の向きを下に移したんだろう。透麻の拳は下に向き、そして下には城道がいる。ぶつかり合う二人の横を通り師匠と睨み合う。攻防は一瞬。拳を先に突き出したのは私の方。けど気づいたら私の鳩尾に師匠の拳がめり込んでいた。

熱い物が一瞬で喉元まで駆け上り、溢れ出ようと口の中を暴れる。止める事が出来ずにその場で吐き出した。

「悪かったの。年頃の女の子に皆の前で吐かせてしまって」

悪い気など一切無いように吐いた私に言葉を突き立てる。

大丈夫。落ち着け、落ち着け私。呼吸を整えろ。まだ日は沈んでいない。まだ私には意識がある。まだ私の五体は動く事が出来る。

「……ふむ」

ぐるりと辺りを見渡す。三分もかからない内にやられた私達を師匠は見下ろす。

「恭優はまぁあの足だったら仕方ないの。他の者にはガッカリじゃ。こんなにあっさりとやられるとはのぉ。もう助太刀は来ないのか？」

足りない。あと助けが十人来ようと今と何ら変わらないだろう。圧倒的すぎる。絶対的すぎる。師匠の強さは桁違いだ。私達が何十人集まろうと、道端の蟻と同じで一踏みで潰せる。力じゃ絶対に適わない。

だったらどうすればいい。私達はどうすれば師匠に攻撃を当てられる？　力じゃケンカじゃ絶対に勝てない。

「來優ちゃん考え過ぎだよぉ」

「っ葵さん！？」

手を肩に置かれて、真後ろで声をかけられて初めてその存在に気づいた。そうか、恭優さんだけじゃなく葵さんも助けてくれるのか。けど、足りない。それでも足りない。化け物が二人居ても師匠には勝てない。

「ルールをもう一度よく思い返してみようか。大丈夫。來優ちゃん達がずっと動いている限りチャンスは必ず来る」

「チャンス？」

そう。と一言だけ言うと葵さんは恭優さんに向かって石を投げた。結構デカい石だ。手のひらに収まるかどうか位のサイズ。

「いつまで寝てるの恭優くん？」

飛んで来る石を見もしないで拳で打ち砕く。似ている様で正反対な、正反対な様でどこか似ている二人。顔を合わすとケンカしかしない二人が、

「恭優くん、久しぶりに協同作業と行こうか」

「ああ？　足引っ張ったら殺すぞ」

「足引っ張らないとダメなのはそっちでしょ」

「よぉし今すぐ殺してやる」

私の知る限り初めて共に戦う。

葵さんは言った。私達が動いている限りチャンスは必ず来るって。確証の無いことは言わない人だ。葵さんが言うのだから私達が動き続ける事には意味がある。それなら、私は例え足が折れようが、立てなくなろうが、這ってでもがむしゃらに動き続けよう。そのチャンスが訪れるまで拳を握り続けよう。

倒れていた生徒会や寺部の奴らも立ち上がる。下まで飛ばされた飼雲先輩も上がって来た。改めて葵さんと言う化け物を迎えて勝負は振り出しに戻る。

数回拳を握り返し、足に力を込め地面を蹴り上げる。また一歩光へと歩みを進めた。

呼んでくれる限り　汐姫

『――』

『――ぁ、――き！』

『――ん、――そ――な』

『――かわ――よ、――姫』

声がする。ノイズが酷くて、聞き取れない。けど、確かに聞こえる。気のせいじゃない。幻でも錯覚でもない。酷いノイズに混じって、暖かい誰かの声がする。

傷をつけていたばかりの右手が気付けば左手の傷に包帯を巻いていて。涙を流していた瞳も、笑っていた口も、疲れたとばかりに形を消した。

そうだった。そうなってからはずっと何もかも閉ざして。瞳も口も心も思考も、何もかもが嫌になって、ただ何時死んでもいい様に座ってただけ。空腹も、体の痺れも、尿意ですら感じずに、ただ体は力無くそこに在る。

目の前は黒。鼻はとうに血の臭いに犯された。心は無い。ただ、ノイズが空気のように存在している。ノイズだけだった。

誰、この声は誰の声？

この暖かさは誰のもの？

聞こえない。ノイズが五月蝿すぎて。感じない。体が、心が冷めていて。

そんなに小さい声じゃ届かない。

そんなに弱い暖かさじゃ感じない。

もっと強く。もっと激しく。もっと優しく。もっと熱く。

お願いだから、もう一度ボクを呼んで。

大好きな貴女の優しい声で、暖かい声でボクを感じさせて。例えソレが幻でも、夢でも錯覚でも何だって良い。貴女が呼んでくれるなら、ボクは在り続ける。貴女が呼んでくれるから、ボクは生きて居られる。

だから、もう一度。

『――汐姫』

――はい、佳様。

呼んでくれる限りボクは貴女と共に在り続ける。

「――――よし、さま」

師弟　マッキー

少し大きな家。いやそれよりは少し小さな屋敷と言った方が合うか。外はもう日が沈みかけている。けれど日の足掻きとして夕焼けが黒に負けまいと頑張っている。対してこの屋敷の中は真っ黒だった。

自分の足元すらも見えないこの暗闇の中で難なく歩みを進めて行く。真っ暗な道を歩くのは得意だ。昔半年程ずっと山で遊んでいた。小さな子が面白がって天狗とか言うから天狗の面まで付けて遊んでいたな。夜の山に比べたら人が作った物だ。凸凹でも無いし獣がいるわけでも無い。何よりこの屋敷には困って泣いているであろう弟子がいるんだ。進まない訳には行かない。

本当に人が居るのか疑う程の静寂の中、勘で弟子の居る場所まで進んで行く。そして階段を登りきった所で鼻が一つの異変に気付く。

異変は臭い。臭いは多々、どれも鼻をつんざく様な臭い。そして、臭いの根源は全て一カ所にある。奥のあの部屋。ゆっくりと歩みを進め、懐から天狗の面を取り出し被る。

ギィっと静かな音を立てドアが開く。瞬間臭いが波となって襲って来た。むわっとした生暖かさが全身を舐め回す。

臭い。こんな所に居たら十分で鼻が壊れるだろう。そう思わせる部屋の中心に少女がいた。オレンジ色の髪はついた血で黒く染まり、頭の上を蝿か何かが飛び交っている。右手にナイフ。左手の手首は壊死しているんじゃないかと思うくらい黒く淀んでいた。強い光を放っていた綺麗な瞳は虚ろで中空を漂っている。頬は痩せこけ、可愛らしかったあの小さな少女の面影など一つも無かった。時計の針の音と飛び交う羽音だけがこの部屋の唯一の音で、存在しているといって良かった。目の前の少女は存在などしていない。したくないのか、消えたいのか。

「汐姫」

少女の名前を呼ぶ。直向きだった弟子の名前を呼ぶ。が、今の少女に名前は無く、そもそも自分の存在すらも否定している。

取り敢えずカーテンを開け、部屋を僅かでも明るくしよう。少女の横を通りカーテンを開ける。真っ赤な夕焼けが部屋を染め上げる。窓を開けついでに換気もする。

もう一度視線を少女に戻した所で、ゾッと背中に悪寒が走った。少女が座っている所は水溜まりだった。排泄物も含め、何より目立っていたのは目立つ筈の無いどんよりとした黒。鉄の臭いを生み出し、一層この部屋を支配するソレ。

頭に最悪の答えが浮かぶ。ハズれてあって欲しい答え。汐姫の口の前に手を持って行く。

「よかった」

思い浮かべていた答えがハズれて胸を撫で下ろす。

それじゃあ葵から教えて貰った呪文を言うか。もし汐姫が一切反応を示さなかった時の対処方。対処方と言うには少し語弊がある。それは汐姫達の大切な人の名前。汐姫達に効く何よりの万能薬だ。

「汐姫、皆倉本佳の為に自分達の為に頑張っているぞぃ」

倉本佳と言う単語の前に汐姫の指が僅かに反応した。後は汐姫次第。何もかもを諦めて、本当にこの世から消えたいと思っているのならもうどうしようも無い。まだ、少しでも諦めていないのなら、まだ少しでも光を宿しているのなら汐姫は立ち上がる。だってその為に手に入れた力だろう。山に籠もって修行して得た力は、倉本佳の為なんだろう。

汐姫、起きろ。

「――――よし、さま」

気に入らない。葵と恭優はどうしても気に入らない。喧嘩が強いのは認める。背がアッシより高いのもまぁ認めざるを得ないだろう。だけど屈する気にはなれない。姉御がどれだけ恭優と親しかろうが仲良くなろうとは思わない。何を考えているかわからない葵の事を知ろうとは思わない。喧嘩じゃない限り言葉を交わそうとも思わない。

ただ、今は一つだけ。何もかもを見透かした様な苛々する顔をした葵に一言。汐姫の愛する人の命を救った恭優に一言。

葵にとってはただの通過点だったのかも知れない。恭優にとってはただの付属品だったのかも知れない。

けど、アッシにとってはこの娘の瞳は、強さは癒やしだったから。ありがとう。主らのお陰で汐姫は立ち直った。

汐姫に関わらぬまいとしていたアッシに汐姫の事を教えてくれたのには理由があるのだろう。

知っているさ。アッシも、汐姫も、主にとっては他人が全て駒だと言う事を。汐姫を立ち直らせて、汐姫達を姉御と戦わせて、汐姫達をまた倉本佳と一緒にして。主は何をしようとしている？　主と倉本佳の間に何かあるのか？

「わからんぞぃ」

そんな皆目見当のつかぬ事は考えるだけ無駄か。
まぁ良い。何にせよ、現状アッシにも汐姫にも悪くはない事だ。

「踊ってやろう葵。主の掌の上で」

あの化け物の事だ。今頃どこかで笑ってるんだろう。こうなる事がわかっていてほくそ笑んでいるに違いない。

――駒は揃った。

葵の呟きが耳元で聞こえてきそうだ。

「汚れ流したよ、もうボク行くから」
「わかった。アッシも行くぞぃ」

葵、ここからは本当に運頼みじゃぞぃ。神様に……、祈りはせんのだろうな。

狂気　紗弥

前方にはゴツゴツとした拳。後方には空気の壁に添えられた掌。右には鍛え抜かれた筋肉の塊。左には同じく鍛え抜かれた筋肉の塊。

ふむ。あまり隙の無い寺部の包囲。寺部部長の男の意味のわからぬ攻撃以外は大して恐れる必要はない。決して遅くはない四方からの攻撃。問題があるとすれば、部長以外の質の無さ。そして部長の短絡的な一直線の攻撃。どれだけ意味のわからぬ攻撃でも、範囲が直線だとわかれば大して怖くはない。そしてこれは包囲攻撃だ。

左の筋肉の塊を右へ逸らす。この四方攻撃の唯一の隙は左の奴が少し速い事。一つの穴が全てを無駄にする。あと言うならば全ての攻撃が直線を決めている事かな。伸びた腕はもう曲げられない。勢いのついた体はもう止まれない。左を逸らすだけでそこに空間ができ、一歩そこに足を踏み入れるだけ。あとは勝手に自滅する。

ただ敵はこ奴らだけではない。

入った空間のすぐ先にはやけに好戦的な生徒会の男。

「ォラぁアアッ！」

踏み入れた一歩目の足をつくと同時に膝を深く曲げ体制を低くする。頭上を勢いの良い音と共に拳が通り過ぎる。そして今度は目の前に足先。鼻っ柱に向かってくるソレを避け、地についてる足を掴み上げ地面に体を落とす。数の不利が追撃を許してはくれない。だから向かって来る同じ顔の二人をこの男に叩きつける。けどそれは致命傷には遠く及ばない、ただの足止めにしかならないだろう。

けど、仕方ない。そうこうしている内に寺部の部長が目の前に掌を添えている。本当にどういう原理かはわからぬが、面倒くさい技じゃ。右に避けようとした方向に気配を感じて横目で確認する。赤

い髪の生徒会長が地面を蹴り上げ跳び蹴りをして来た。
ちょうど良い。これを利用しない手は無い。
槍のように鋭い蹴りを半歩下がって避け、本来過ぎ去る筈の生徒会長を首を絞め目の前に留まらせる。数歩一瞬で下がり、敢えて寺部部長の直線を保つ。
唐突に盾にされた生徒会長に反応出来ず力を出す寺部部長。今の距離は二メートル弱。この距離は届くのだろうか？

「ぁっ」

生徒会長の呻き声が聞こえ、すぐさま手を離し自分は横へ避ける。瞬間生徒会長の体が一メートルくらい後ろに飛んで行く。
二メートルの距離でも届くのか。念の為早い内に潰しておくか。
その技の直線以外の弱点。出した後の僅かな硬直時間。約一秒間の硬直化。さほど気にする程ではないその時間は、だが今は致命的な時間になる。今までやって来ただろう敵とは違う。今回の敵はワシだ。その一秒は何よりも重い足枷だ。
間合いを詰めるのに一秒も必要ない。意識し難い視界の端へと姿を消す。意識しないと目には決して見えない死角へと体を入り込ませ、頑丈であろうぶ厚い腹部へと拳を添える。優しく触れただけにしか思えないその行為が爆発的な威力を放ち、大きな寺部部長の体を突き飛ばす。
うぬ。後ろにいる生徒会の男と双子を巻き込んだのはただ運が良かっただけだ。
ぎちりっと筋肉の軋む音と多少の痛みと違和感に腕が襲われる。今日は大して時間も経っていないのに二回も立て続けにあの技だ。まぁ、例え右腕が使えなくてもこ奴らに負ける気はしないから気にする程でもないか。
生徒会長、寺部、そして來優達。こ奴らは全然気にしなくて大丈夫だ。束になろうと相手にはならぬ。問題は化け物二人。

ふっと顔に影が差す。すぐさま横に跳ぶと、もと居た地面に踵が振り落ち地面を穿ち砂塵をあげる。意識を集中させろ。自分の周囲三メートル以内に全意識を集中させる。動きがある者が四人。その中で向かって来る者が二人。一人は目の前、砂塵の中から。殺意の塊が砂塵を掻き消しながら突き進んで来る。

あの大振りの踵落としの後にこんなに鋭い蹴りだ。溜めが無いくせに威力は計り知れない。純粋な殺意の塊が前から。そして、すぐ隣りからは似て非なる殺意が体を舐め回す。

横に跳んで避けようとしていた体を無理矢理後ろへと動かす。何とかぎりぎりの所まで跳ぶ事ができ、目の前で恭優の足が止まった。すぐ隣りには横に避ける事を想定し待ち構えていた葵がいた。避けられた筈なのに葵がにやりと笑う。瞬間後、目の前で止まっていた恭優の足が前に動いた。速さは全然無かったから余裕で横に跳び避ける事は出来たが、当の恭優が転んでいる。

「っテメェ何すんだ葵！　ぶっ殺すぞ！」

「だって恭優くん文字通り足手まといなんだもん。頑張ってねって背中推したくなるさぁ」

「“押す”んじゃねェよ」

「何でここがビルの最上階じゃないんだろうねぇ」

「テメェ、ぶっ殺す！」

「今倒さなきゃいけないのは紗弥さんでしょぉ。頭の中何が詰まってんの？　かに味噌かなぁ？」

「やっぱりぶっ殺してやる！」

この二人は何を考えておるかわからぬのう。

言い争いを聞き終わる前にすぐ後ろから敵意が二つ。隙をついたつもりかは知らぬがまだまだ。

足下を狙っている海本透麻の蹴りを半歩下がって避ける。とほぼ

同時に一歩前に踏み出て次にやって来る來優の拳に沿うように手を伸ばす。肘で來優の腕を上げ拳の間合いを消し、掌で頬をぶつ。自分の力と相手の体重を利用し通常の何倍もの力が來優を襲った。膝をつきそうになった所で來優が踏ん張る。ふらふらと力無くその場でバランスをとる。

速攻反撃とまではさすがにいかないみたいだのう。まぁ、まともにカウンターを喰らっておいて速攻反撃が出来る人間がこの世に何人いるのかと言う話になるけども。

……どうせだから膝をつかせておくか。

追撃をしようとした所を海本と柳生が二手から襲ってくるが遅い。焦りが入って僅かに大振りになっている拳を難なく両方とも避け、おまけとして横っ面を裏手で叩く。あまり力は入れてなかったんじゃが、予想以上に外側に倒れていった。本当に焦りすぎじゃのぅ。

じゃあ続きと行くか。來優の額に手を近づけ、中指を親指に引っ掛ける。出来る限り力を溜め、一気に解き放つ。

コンっと小気味良い音がなった後來優がゆっくりと倒れた。

「呆気ないのぅ」

「これでもか！」

後ろから聞こえた声と同時に振り返る事もせず手を後ろに伸ばす。そのまま、そ奴の紅い髪を掴み地面に叩きつける。

「これでも、じゃ」

生徒会長は結構見所がある。地面に叩きつけられる寸でまで足を伸ばしワシの顔を蹴ろうとしていた。

「主は見所はあるんじゃが……」

化け物二人を除くと柳生と寺部部長とこ奴がまぁまぁ秀でている。こ奴の場合は速さもそこそこあるし、力もそこそこ。何よりの見所はその根性。じゃが、短絡的な所がせっかくの長所を消している。多彩な蹴り技は面白いが、いくら多彩でも使い方が駄目ではまるで意味がない。

でも、まぁあの化け物二人を除いたらワシにまぐれ当たりを当てそうなのは柳生か寺部部長かこ奴だ。ちょうど化け物二人は言い争いをしておるし、寺部と生徒会はここから離れた場所におる。そして來優達はまだ立ち上がれていない。

都合が良い。今の内に潰しておくか。

拳を握る。強く握り締め真っ直ぐと地面に倒れている生徒会長の腹部へと叩きつける。これで激痛でもうろくに動けないだろう。起き上がるのも恐らくは不可能だ。意識を失ったかどうかは確認しない。否、出来ない。拳を叩き込んだ後即座に横に跳ぶ。二メートル近くその場から離れ、改めて全体を見る。

生徒会は双子と生徒会長がもう戦えない。寺部は、部長を除いた全員か。二発もアレを喰らっておいて動ける寺部部長は相当おかしい。本当は手足を動かすだけでも激痛が走っているだろうに、我慢強さが異常じゃな。

逆に残っておる者は……、ふむ案外おるのう。來優がまだ起き上がれるのに驚いたが、まぁ奴も根性はあったからのう。

「ふぅ……、ここからは少し本気で行くか」

佳が心配しておるじゃろうしそろそろ帰りたい。それに、さっきから化け物二人の殺気が心地良すぎて、このケンカを楽しんでしまいそうだ。

ドロドロに混ざった二つの殺気。鋭く。鈍く。妖しく。狂わしく。時間が経つ毎に濃度を増して行く。思えばこの空気の中あ奴等はよく戦った。脳を刺激し、本能から怖いと言うこの空気の中でよく動

いた。だけど、それもここまでじゃ。ここからは違う。生徒会長ならもしかしたら戦えたかも知れぬ、が今この空気の中戦えるのは寺部部長か、この空気を作っている化け物二人。残っている生徒会と寺部の奴等が次々と膝をつく。体を震わせ、魂からこの空気に恐怖を覚えている。

ワシも怖い。怖いさ。この空気が怖い。化け物二人が怖い。実力では勝っていると確信を持って言えても、この恐怖からは逃げられない。

ああ、本当にやばいな。怖すぎる。“私”は“私”が怖い。この空気を心地良いと思える私が。このケンカに全力を出してしまいそうな私が怖い。

脳が恐怖に溺れる。それなのに、顔にはいつの間にか笑みが浮かんでいる。拳は強く握られ、足は地面にめり込む程踏みしめている。

そして脳は願う。本気を出すな。二人を殺す気か。この狂気に呑まれるな。理性を保て。が、所詮願い事だ。叶う筈も無かった。

狂気に呑まれた本能が言う。ただ一言を。

――――イけ。

三メートルの集中を解く。代わりに全意識を攻めに向かせる。めり込んだ足が地面を離れ、そして目の前には白銀色の化け物。

ドロドロとした空気に新しい殺意が交わった。

「ヤベェぞ葵」

俺達が敵わない事はわかってた。けど、頭の中のどっかでは俺達二人なら勝てるって思っていた。でもそんな夢物語は完璧にグチャグチャに崩れて失せた。

やっぱりあの人は俺達の遥か上をいっている。今なら確信を持って言える。百万回戦ろうが一億回戦ろうが、一度もあの人には勝てない。

「こうなったら勝てるわけがねぇ」

俺の言葉に葵は僅かに驚いたように眼を開いた。そして何時もの嘲笑。

「冗談でしょ？　やっと勝ちの目が見えてきたんだよ」

勝ちの目だぁ？　紗弥姉さんがこの状態で勝てる奴なんかいるのかよ。

「恭優くん集中」

葵の蹴りが横腹に食い込み鈍い痛みが走る。足が考えについて行かず、そのまま地面に転がった。

何で蹴ったかは何となくわかる。そして今の葵を見ればその考えは正解なんだろう。けどなもっと優しく蹴れないのかと激しく納得がいかない。

「あれぇ、恭優くん僕は助けてあげたのに恭優くんは助けてくれないのぉ？」

「うるせェ！」

足下に転がっていた石を紗弥姉さん目掛けて投げつける。こんなものは当たらないのはわかっている。けど避ける為に体を反らす筈だ。そしたら葵が逃げるか攻撃に転じるか出来る筈。その隙に俺もぶん殴りに行く。

そんな予想をして行く為に立ち上がる。が、予想とは正反対に聞こえたのはカンっと言う小気味良い音。投げた石は倍の速度をもって真っ直ぐと同じ軌道を辿り俺に帰って来た。

有り得ねぇ。あの速さの小さな石を蹴りで返しやがった。叩き落とす事なら俺でも出来る。が、返すと言うのは難しい。丸い球ならまだしも凸凹の石だ。僅かでも角度が違ったら違う方向に飛んで行く。

石を蹴り返した所で隙が出来たと思ったらそんな僅かな隙さえ紗弥姉さんは作らなかった。葵の腹に拳がめり込んだ。紗弥姉さんの速さと正確さが隙を一切作らない。

「勝ちの目なんざねェだろ」

あるわけが無い。誰がどう見ても圧倒的すぎる。今の紗弥姉さんは俺達を徹底的に倒す事に集中している。反撃をする間すら与えてくれない。文字通り手も足も出ない。そんな状況でどうやって勝つってんだ。

万が一つの勝ちも無い筈の中で、それでも葵は不敵に笑いを顔に

貼り付けている。手も足も出ない中で、心臓を抉る様な殺気だけは紗弥姉さんにぶつけている。間違い無くその殺気は紗弥姉さんに限り逆効果だ。

紗弥姉さんはその殺気が栄養の様に、与えてくれた事に悦ぶ様に益々鋭さを増して行く。地面を滑る葵に追いつき喉元を掴み腹に膝蹴りを入れる。そのまま満足に呼吸をさせて貰えないまま地面に叩きつけられ肺の中の空気をギリギリまで無くす。そして葵の腹に添えられたのは柔らかそうな拳。細い腕から、華奢な体から、柔らかそうなその身から今葵の体へと爆発的な力が叩き込まれようとしている。

一瞬で脳は指令を出す。体もその指令を受け、即座に行動に移そうと筋肉をしならせる。けど、この両の足が動いてくれない。この両足だけが思い通りに力が入らない。

恐ろしくゆっくりとした時間が流れる。紗弥姉さんが力を込める。葵が何とかしようと動こうとする。けど首を掴まれていて、尚且つ肺に空気が全然無い事で満足に動けていない。時間にすれば約一秒のソレが充分にゆっくりと視界の中で流れている。この足で間に合うんじゃないかと思うけど、頭だけが周りより速く、体は全く動かない。周りが遅いせいか頭は状況を敏感に察知する。そして初めて気付く。紗弥姉さんに向けられている二つのドロドロの殺気に混ざらない薄くか細い闘気に。弱々しいけど、それは確かに紗弥姉さんに向けられたもの。

――どこから？

視界の隅でもぞりと何かが動いている。誰が見ても綺麗としか言えない金髪を砂利につけて、傷だらけで痛む体でゆっくりと這っている。

根性はある奴だって知っていた。往生際が悪い奴だってのも知っていた。けどこんなにも強い奴だなんて思わなかった。

どれだけ汚れても。どれだけ痛くても。拳を握れなくても、足が動かなくても。這ってでも前に進もうとしている。這ってでも紗弥

姉さんに立ち向かおうとしている。
負けられねぇ。兄弟子として、気持ちだけは負けちゃあならねェだろ。
足は動かない。例え動いても間に合わない。殺気ならずっと前から飛ばしている。けど全く意味がない。なら今の俺に何が出来るか。何をしたら紗弥姉さんの意識をこっちに向かせられるか。
思考は一瞬。答えは原始的なもの。肺が一気に膨らみ、そして声になり、その声は空気を震わせる。

「――――おオオオォォオオオオオオォおおオオォォォォッッッ！」

空気を震わせた音は津波となり紗弥姉さんの意識を襲う。一瞬だけ紗弥姉さんの動きが止まり意識が俺の方に向く。

「うるさいな恭優くんは」

けど、と葵は続ける。
わかった。葵がまだ俺達に勝ちの目はあると言った理由が。これか。紗弥姉さんの気が一瞬だけ逸れるのを待っていたのか。
この気味悪い殺気の中で、純粋な闘気に気付けば誰だって気になる。動ける筈の無い奴が這ってでも動いていたら誰だって見てしまう。そして、意識に入れてしまう。俺がそうだったように、紗弥姉さんも俺の方を見た時に気付いてしまった。這ってでも歩みを進めている來優に。
一瞬の隙は勝敗を左右する。見れば來優を見ている紗弥姉さんの後ろに鈍い銀色の乱入者が気配を殺して襲いかかっていた。
勝った。あまりにも奇跡に近い勝ちを確信して、力が抜けて行く。葵も確信したのか何もしようとはせず、ただ銀髪チビの拳があたり勝つ瞬間を見ようと眺めている。

あまりにも呆気ななかった。訪れた結果は正反対なモノで、チビの拳は紗弥姉さんに掠りもしなかった。代わりに紗弥姉さんの蹴りがチビの腹を捉えていた。抜けていた力が一気に戻り、目の前の光景に歯を食いしばる。

「残念じゃったの。まだまだお主は未熟者じゃ」

地面を数回跳ねたあと、数メートルも先まで滑りやっと止まった。ぴくぴくと少しの手足の痙攣のあと、力無くその体は地に倒れたままだ。

「これで終わりじゃのう」

もう一度葵の腹に拳を添える紗弥姉さん。俺の力も遠く及ばず、葵の秘策も破られた。なす術が完全に無くなった。

「……何を笑っておる？」

「虎は蟻なんて見ないでしょ。人は転がっている小さな石に意識は向かない。紗弥さんは強い。僕と恭優が幾ら頑張っても勝てない程に強い。だからこそ、」

――――トスッ。

「今日だけは僕達の勝ちだ」

紗弥姉さんが振り返る。背中に小さな違和感。痛くはない。痒くもない。ただ触られたくらいの感触。何かに触れたくらいの感触。

「ボク達の勝ちだね」

かなり前よりもやつれた顔で、紗弥姉さんの背中に触れているそいつは目一杯嬉しそうに笑った。

自分に攻撃を当てた奴が汐姫だという事にびっくりしていた紗弥姉さんが数秒後、汐姫の頭を撫で同じように微笑んだ。

「参った。ワシの負けじゃ」

新しい学校　佳

どくんっどくんと心臓が脈打つ。人生でこんなに緊張したのは初めてだろう。まぁ、私には一カ月前くらいからの記憶は一切無いんだけれども。とにかくこの一カ月で一番私の心臓は激しく脈打っている。

教室のすぐ外で待たされ先に中に入った教師の言葉を待つだけの状態。うん、大丈夫。昨日の朝から何度も自己紹介は練習したし、お姉ちゃん達にも手伝って貰った。紗弥お姉ちゃんなんて仕事を休んでまで一日中相手になってくれた。それに今日も電車に揺られながら頭の中で何度も自己紹介を繰り返した。大丈夫。頭が真っ白にならない限り、言葉を噛まない限り何とかいけると思う。

少しだけスカートを正して服装を直す。おかしな所はない。新しい制服だからって嬉しくて昨日着たけど皺にはなっていない。

「皆知っていると思うけど今日転校生が来るぞ。しかも五人だ。理事長からの指示で何でかうちのクラスに全員来るんだけど、まぁそんだけ俺の指導が素晴らしいってことだな。感謝しろー」

どこか緩い教師の発言にクラス中は大喜びをしている。口笛を吹いたり、可愛いかなとか格好いいかなとかそんな声も聞こえてくる。

何だろうこのプレッシャー。逃げ出したい。走って家に帰りたい。

「何でか知らんが四人早速遅刻してんだけどなぁ。まぁ暫くしたら勝手に来るだろ。クラスは事前に教えたからな」

最初よりも激しくなっている鼓動を頑張って抑えようとする。い、

痛いよ、激しすぎてもう胸が痛いよぉ。

「とりあえず遅刻せずに来ている良い子を紹介するから、はい入っていいぞぉ」

来た合図！

どくんっと一際大きく心臓が跳ねる。胸に手を置き数回深呼吸をする。まだ鼓動は激しいまま。足も緊張で少し震えている。けど覚悟は決めた。

よし、行こう。

がらっとわりと静かな音をたてドアを開ける。目の前には教卓の前にいる若い男教師と、二種類の同じ服を着ている二十名余りの席に座っている男女。その全ての視線が私に向く。

ひしひしと体に刺さる程の視線を全身に受けながら一歩、また一歩と前に歩く。

「倉本佳さんだ。皆仲良くしろよー」

その言葉に半分くらいの生徒が返事を重ねた。

「そんじゃまぁ軽く自己紹介よろしく」

来た。幾度となく練習してきた自己紹介。話の主導権が担任の教師から私に渡され、とうとう自己紹介の時間。大丈夫。予想以上の注目と静けさだけど何とかなる。第一印象が大事。これから学校生活を楽しむにはここが重要だ。あんなに練習したんだから大丈夫だよ。自分に言い聞かせ、言葉を紡ぐ。

「初めまして、倉本佳です」

笑顔をつくる。上手く笑えてる自信は全然ないけど、今思えばしなかったら良かったって後悔しているけど、つくってしまったものは仕方ない。

「転校するのは初めてで、こういうのも初めてだから少し緊張しています。でももうきっと転校しないので三年間この学校で皆と仲良くやれればと思ってます。よろしくお願いします」

約一日かけて考え練習した大して長くもない自己紹介。よかったぁ。噛まずに言えたよぉ。お姉ちゃん達と練習したかいがあったよ。ほっと胸を撫で下ろす。これでようやく緊張がほどけて来た。

「じゃあ質問タイムと行くかぁ。はい何か質問ある奴ー」
「好きな食べ物は何ですか」
「えっと、甘い物です」
「得意なスポーツは？」
「とくにないです」

何人かが手を上げたりして当てられるのを待ったり、そのまま聞こえるように言ったりしている。

「お前ら小学生みたいな質問ばっかりだなぁ」

教師が笑いながらそんな事を言うけど、私はこういう質問の方が助かるんだけどなぁ。

「じゃあ好きなタイプは？」

一人の女子が身を乗り出して言い、何人かの男子が待ってました

と声に出した。
ぅっ、少し困る質問の一つだ。好きなタイプ、かぁ……。
「ゃ、優しい人……です」
やっぱり優しい人が一番、かな。恭優お兄ちゃんみたいに優しくて勇気がある人がいい。
「はいはーい俺超優しいよ！」
「はいお前はすっこんでろバカ」
一人手を上げた男子に担任がすかさず突っ込む。
「他には無いかぁ。んじゃそろそろ終わるぞ」
「はい」
「んじゃあお前で最後だ」
最後に指名された男子が私の方を見て笑う。何だろう、嫌な笑い方。意地悪そうな、嫌悪感が背中を走りそうな嫌な笑顔。きっとろくでもない質問だ。
「記憶喪失って本当かよ？」
ぴくっと体が跳ねる。出来れば触れて欲しくなかった事。何となく覚悟はしていたけれど、やっぱり嫌だ。
「詰まらない質問だからお前減点百なぁ。はいじゃあ質問は終わり」
俯いたまま黙った私に気を遣ってくれたのか担任が終わらせてくれた。質問をした男子はにやにやしたまま私を見ている。舐めるよ

うな目つき。嫌だ。帰りたい。もうこんな所にいたくない。

「席は、」

担任の声が頭を通り過ぎていく。何で？　楽しくなると思っていたのに、何で今私はこんなにも帰りたいんだろう。

「聞いてるか倉本？」

「ぇ、あ……」

「一番後ろに五列空いた席があるだろ。好きな所座れ。転校生が来るって聞いてどうせなら一番後ろを一列空けるかと思ってな机と椅子を運ばせたんだ」

「ぁ、はい」

わかりました。と小さく頷く。

私の都合で待たせるのも悪い。そう思い端を通って一番後ろに行こうとドアに近づいた。

――瞬間大きな音をたてドアの方から私に近づいて来た。

頭に激痛が走る。痛みでくらくらする脳内と薄れ行く視界の中でうっすらと会話を聞き取る。多分、いや確実にドアの向こうにいた人達の会話。

「バカ、どう見ても引き戸だろ」

「うるせぇな。このハゲが邪魔して掴めなかったんだよ」

「だからってその人の頭でドアを叩くのは悪いのだ。ほら血が出てるのだ」

「そうだよ。それに誰かドアの前にいたらどうするの」

「どうするっつってもなぁ」

そんな会話をうっすらと聞きながら私の意識は無くなっていった。

あれ、何だろう。暖かい。それに広いし、妙に落ち着く。小さな揺れが気持ちいい。

重たい瞼を僅かに開くとぼやけた視界に少し緑色が混ざったような髪がうつる。

背中に、乗ってるのかな。何でだろう。全然知らない人なのに、全然知らない匂いなのに、安心する。うっすらと見えた緑色の髪が、匂いが、この広い背中が心地よぎて、逆らいようのない眠気が襲ってくる。重かった瞼がさらに重くなり、開けようとする気すら起こさない。

今は、この温もりと揺れに身を任せ、眠っていたい。だってこんなにも気持ちいいんだもん。

前に回していた腕に少しばかり力を込める。離れてしまわないように、もう少しだけこの温もりに触れていたい為に。体をさっきよりも強く背中にくっつける。私の胸から背中越しにこの人の鼓動が微かに伝わって来て尚更それが子守歌代わりになり眠気を強くさせる。

このまま、くっついたまま鼓動と小さな揺れを感じながら、優しく意識は夢の中へとおちた。

新しい一歩だ！　透麻

「あれだな、電車はやっぱり慣れねぇな」

少しひりひりする尻を軽く手で叩く。あんまり電車自体乗らないし、三十分もあの揺れの中で座り続けたんだ。慣れない内は仕方ないだろ。

「そうか？　私は少し楽しかったぞ。景色がもの凄い速さで変わってったな」

「ガキか馬鹿」

「喧嘩なら買うぞ馬鹿」

いつもの売り言葉に買い言葉。流石に電車で三十分も走ればあまり来た事の無い街につく。内心俺も新しい景色に少しわくわくしているけど、來優を馬鹿にした手前そんな事は口にだせない。

「透麻も人のこと言えないのだ」

ただ口に出さなくてもわかる宇宙人が身近にいたのが唯一の誤算だった。本当に余計なことを言う。そんな事言ったら馬鹿が何て言うか。

「透麻もガキじゃん」

「うっせぇ」

やっぱり食いついた。

「ボクはわくわくしてるよ。この新しい街でまた皆と新しい思い出が作れるんだもん」

……何て言うか、素直が一番だな。一番左を歩く汐姫が言った言葉は俺達の心をくすぶる。少し照れくさい。けど、俺達皆が同じことを思ってる。新しい街、新しい思い出。これからまた始まる。正直言うと楽しみ過ぎて何時もより三十分も早く起きたくらいだ。

「それにしても、周りの視線が痛いのだ」
「何でだろうな。透麻の顔が間抜け過ぎるからか」
「お前の顔だよ」

一応通学路を歩いているから俺達が着ている新しい制服と同じ制服の奴らがぞろぞろと周りを歩いている。通り過ぎたり前後を歩いている奴らがちらちらと俺達を見ているその視線がちょっと痛い。まぁ何かと目立つのには馴れている。問題があるとすれば容姿以外でも目立っている事だな。何だろ。あれが転校生かなぁ的な会話がちらほら聞こえる。何かちょっとそういう目立ち方は恥ずかしい。

「結構広い学校なんだよね。教室の場所わかるかなぁ」

校門が見えて来た所で汐姫が呟く。今更とも思える言葉だけどまぁ心配はいらないだろ。オレンジに金髪に美少女面にプラス転校生というオプション付きだ。黙っていても阿呆な奴らが食い付いて来る。

「それなら心配いらねぇよ汐姫」
「そうなのだ」

新しい学校生活。何より佳はただの女子。そして何かと目を付けられやすい俺達。なら来て先ずする事は決まっている。即食いつく餌を撒き、ソイツらを喰らうこと。

「あそこにいる馬鹿に聞けばいいのだ」

城道がわざと聞こえる様に、相手が自分のことだとわかるように金髪で髪ツンツンの奴を指差した。怒った形相で指を鳴らしながら歩いて来る男を今度は來優が指をさす。

「最初はアイツか」
「うん。見た感じ弱そうなのだ」
「よし。じゃあアイツから一番強い奴を聞けばいいんだな」

來優もやる気満々見たいだし、何かいいぐらいに食い付いてきたし、あとは場所だな。流石に邪魔はされたくない。

「おい何指さしてんだ？　ちょっと来いよ」

そう言って親切に校門の外から中に入り人目のつかないよくある倉庫裏まで案内してくれた。つくまでに段々数は増えついた頃には十人を越えていた。

やべー。コイツ親切過ぎる。俺の頭の中でこの男は馬鹿決定だ。数が増え、益々態度がデカくなった男は余裕そうに笑いながら俺達に近づいて来た。

「テメェらぁぶっ！」

喋りきる前に來優が顔面に拳を叩き込んだ。本当に來優は手を出

すのが早い。まぁ、確かに話を聞く必要もないけど。
さてと、一人終わったな。あとは仲間がやられたことでキレてるコイツらを、
「――喰らいつくすか」
これは持論になるんだけど、学校生活を円滑に尚且つ楽しく過ごすには、まぁ俺達の場合に限るけど。とにかく俺達は目立つ。目立つ事をするから何だろけど良い意味でも悪い意味でも目立ってしまう。
そんな俺達がどうすれば学校生活を円滑に尚且つ楽しく過ごせるか、だ。つーことでこっからが本題。
先ず初めにその学校のヤンキーをぶち殴ります。その次にソイツの仲間達を全員ぶち殴ります。そしたらその学校で一番強い奴が来るんでソイツもぶち殴ります。はい、ここで大事なポイント一つ目。圧倒的な強さで勝たないと駄目です。中途半端だと相手がいつか勝てるとか言う阿呆な期待を持ってしまうからです。じゃあ続きで、一番強い奴に勝ったらもう一切俺達に関わるなと命令することが大事です。ここでコレを言わないと九割の奴が次襲いかかって来るでしょう。何故なら人間九割が構ってちゃんだからです。因みにお願いするのも駄目です。お願いしたら選択肢があると思って僅かに心に余裕が出来るからです。だから命令をします。当然はいと答えるまで痛めつけます。時には残酷さも必要です。これで少しの間は落ち着きます。もしかしたらずっと落ち着くかも知れないけど、でもまだ不安は隠せません。
だから、こっからが俺の仕事。個での圧倒的差を見せ付けたら今

度は数での圧倒的差。しかも相手の傷がまだ癒えてない内にだ。三十人程呼べば十分だろう。これをすればもう一切俺達には関わって来ない。まぁこれは出来なくても襲いかかって来た所をまた圧倒的な差で追い返すのを何度か繰り返したら襲いかかっては来なくなるけどな。でも何度も来られたら迷惑だろ。面倒くさいし。だから、明日にでも数で脅してみるかな。だから今日はとにかく差を見せ付けるか。まぁ一応手加減はするけどな。手加減しても城道がいれば圧倒的だから。

「ここ、です」
「ご苦労様なのだ」

暫くしたら騒ぎを聞きつけて自分からのこのこやって来たハゲを城道が殴り倒した。一応この学校でこのハゲが一番強い奴らしい。けど物足りない。全体的に質が悪い。これだったら別に相手しなくても良かったかも知れない。でもしてしまったものは仕方ないから、事前に教師から聞いた教室まで案内させる。

数分廊下やら階段やら庭を挟んだ通路やらを歩いてやっとついたのは一年生のクラスが五つ並んでいる少し長い校舎。その中の一番端の教室のドアの前でハゲの足が止まった。

ドアの向こうで席がどうのこうのっつう声が聞こえる。恐らくは教師の声だろう。席の事を指示してるくらいだからもう佳は来てるのか。

記憶を失った佳と初めて会う。やっぱり前の佳とは違うんだろう。俺達の事を知らないし、あの強さも面白さも無くなってるかも知れない。もう昔見たいに笑ってくれないかも知れない。もしかしたら、拒絶されるかも知れない。一気に不安が襲ってくる。このドアを中々開けられない。もう佳はすぐそこなのに、俺達の新しい思い出はすぐそこなのに、あと一歩が重い。くそ、せめて遅刻はするんじゃなかった。第一印象が悪くなる。

「大丈夫だよ透麻。だから早く行こ」
「……手、震えてるぞ汐姫」
「えっ、む、武者震いだよ！」
「戦いに行くんじゃねぇんだから」
「そ、そうだよね」

……強がってるのがバレバレだ。けど、そうだよな。ここまで来たんだ。今更だよな。もう止まってなんかいられない。

ハゲの頭を後ろから掴む。そして不安を掻き消すようにドアに叩きつけた。

繋がる手　佳

暖かい。何だろうこれ。温もりが全身に伝わってくる。心地良い。けど、知らない。私はこの暖かさを知らない。似てるものなら知っているかもしれない。お姉ちゃん達のような暖かさ。けどちょっと違う。この温もりは気持ちいい。冷えた心を一気に暖かくしてくれるような。嫌な気持ちをどうでもよくしてくれるような。

私はこんなのわからない。この暖かさが何なのか、何で暖かいのか。何でこんなに体が心が気持ちいいのか。ずっと触れていたい。思い出も、自分も何もかもが無い私の心を癒やしてくれる。この暖かさにずっと溺れていたい。そしたら、寂しくなんかならない。もう、一人の怖さを、何も無い怖さを感じなくなる。今見たいに、ただこの暖かさを感じていたい。

そう願ったのに、願った瞬間に残酷な程に何も残さず暖かさは消えた。最初から無かったように、余韻も何も感じない。もう、どんなものだったのかすらも、わからない。

一つだけ、知った事がある。あの暖かさはとても優しくて、そして残酷なものだと言うことを。近くにある内はとても優しくて、離れる時は何も残さず残酷に離れて行く。願えば想いが重い程、縋れば手を伸ばせば伸ばす程、離れて行く距離は遠く届かない。

また、私は一人なんだ。一人の怖さを痛い程知った。一人の辛さは泣くほど感じた。私の近くにあったのは温もりなんかじゃなく、この冷たさ。あの温もりは私が欲しがって生んだ夢だったんだ。

そう思えば、上手く決別出来る。夢は必ず覚めるもの。

思考がはっきりとして来て自分が寝ていたことに気づく。瞼を開けよう。そうしたら夢から別れて現実がやって来る。ゆっくりと瞼を開く。見慣れない白い天井を映しながら、秋の朝の肌寒さを感じる。

寒い。ここ、保健室かな。確か私気を失ったから……誰か運んでくれたんだ。お礼を言わないと。誰だろう。記憶喪失の私なんかと、そのことを気にしなくて仲良くしてくれそうな人だったら嬉しいな。

でも、どうしようあの男の子だったら。また、聞かれるのかな。私は何て答えたらいいんだろ……。

いやだな……。もう、いやだ。楽しくなると思ってたのに。一人じゃなくなるって、楽しい友達が思い出が出来るって思ってたのに。お姉ちゃん達も嬉しそうに見送ってくれたのに。

「もう、帰りたい」

天井のシミをぼぅっと眺めながら呟く。涙が出そうで我慢するけど視界がどんどん滲んで行く。もう、泣いてもいいかな。音が一切しないから誰もいなさそうだし。

「じゃあ一緒に帰ろうよ」

どきっと心臓が跳ねる。我慢を止めようとした瞬間に知らない声が聞こえて、帰りたいって呟いたのが聞かれていて。急いで起き上がって、嘘だと言おうと声のした方向に振り向く。

「うんそうするのだ。僕もちょうど帰りたいと思ってたのだ」

「いいなぁ。抜け出して遊びに行こっか」

窓の方に女の子が三人座って私を見て言った。オレンジの髪をした可愛い小さな女の子に紺色の髪の美少女にモデルみたいに綺麗で金色の髪をした女の子。

印象が悪くなるから嘘って言おうとしたのに、我慢をしていたのに涙が頬を伝う。何でなんだろ。うんって頷きたい。一緒に遊びに行きたい。けど、怖くて言えない。何もない私が、そんなこと言ってもいいのかな。一緒に遊びたいって願ってもいいの。この暖かさに触れてもいいの……。

怖い。要らないって言われたら、冷たさに変わったら。今のままなら、一人の孤独しか知らない今の内ならこれ以上傷つく事はない。それだったら今のままの方がいいのかも知れない。

でかかっていた言葉を飲み込む。変わりに涙が流れるのを止めてくれない。我慢しなくちゃ。そう思い、頑張って止めようとするけど止まらなくて、声を抑えるくらいしか出来なかった。

「な、泣かないで欲しいのだ！　ほら透麻もっと謝るのだ」

透麻？　男の子の名前。てことはもう一人いるのかな。

「悪かった。いや、ごめんなさい」

下からそんな声が聞こえて来た。ベッドの影でちょうど隠れている所にもう男の子がいた。何で土下座をしてるんだろう。

「この馬鹿がドアを壊したから保健室に運んでから今までずっと土下座させてたんだ」

金髪の女の子がそう言うと男の子が馬鹿って言うなって土下座したまま言い返した。

何だかそれがおかしくて。私が泣いているのは違う理由で、ちっともその男の子は関係ないのに、ずっと土下座していたことが何だかおもしろくて。

「……あはは っ」

泣いてるのに、涙は流れているのに悲しさや辛さや怖さが全部吹き飛んで、おかしくて笑ってしまった。

「――変わってないのだ」

笑った私を見て四人も笑う。それが嬉しくてつられて私はまた笑った。

「僕は蒼空汐姫」

少し皆で笑ったあとオレンジの子が私の前まで歩いて来て自己紹介をした。

「柳生城道なのだ。因みに男なのだよ」

「えっ、男の子なの」

かなりその事実に驚く。普通に女の子かと思っていた。でも、そう言えば制服は男の子のだ。

「ちょっとショックなのだぁ」

「はは、まぁ仕方ないって城道」

うなだれた柳生君の肩をぽんと叩く金髪の女の子。

「私は守山來優。で土下座してるそこの奴は、」

「海本透麻。お前は？」

土下座したままの体制で聞かれる。滅多にない体験だなぁと思いながらちょっと心が痛むから土下座を止めるようにお願いする。

「私……。私は倉本佳」

「そっか。じゃあ佳様」

「え、様？」

「一緒に遊びに行こうよ」

そう言って蒼空さんは私に手を伸ばす。

「佳と一緒に遊んだらおもしろそうだしな」

「だから一緒に学校抜け出そうぜ」

「そうなのだ皆で抜け出せば怖くないのだ」

「……いいの？　私なんかで。一緒にいてもおもしろくないかも知れないし、それに私……記憶喪失で何もないんだよ」

人を喜ばせる術も、楽しい遊びも話せる思い出も何もかもが無い。

こんな私と遊んでもおもしろいことなんて……。

「ピっ。佳からは普通じゃないおもしろいオーラを感じるのだ」

「え……？」

「城道が言うんなら間違いないね」

「そうだな。宇宙人が言うんだからお前はおもしろい奴だ」

「だったら尚更私達と遊ばないとダメだな」

「その通りなのだ。僕達は変人歓迎普通拒否なのだ」

……何それ。

「私が変な人みたい」

「佳様と一緒にいたら楽しいってことです」

「……ありがとう」

もういいや。頭で考えるのは止めよう。今の私が頭で何を考えても、悪い方向しか進まない。なら、考えるんじゃなく直感で。私がしたい方に進もう。

「私は、皆と遊びたい」

差し出された小さな手を握る。蒼空さんの温もりが伝わって来て、ずっと空いていた心の穴が埋まったような気がした。皆が私が手を握ったのを見ると嬉しそうに笑った。

――だから私も。

「よろしく」

皆が笑っている。だからつられて私も笑う。そうしたら、何だかどうしようもなく幸せな気持ちになれる。私はきっと初めて会った皆のことがどことなく大好きなんだろう。

幸せな日々　佳

どうしよう遅刻だ。完全に寝過ごしちゃった。生まれて初めての遅刻だよ……多分。とにかく遅れるから先に行っててって皆にメールしなくちゃ。

皆と知り合って一カ月が過ぎようとしている。皆私の記憶のことには一切触れて来ないし、優しくておもしろい。奇抜な発想や罰ゲームがあって遊ぶのが楽しい。一カ月皆といて本当に楽しい事だらけだ。

汐姫さんは少し天然なのかも知れない。場を和ませてくれる。それに何故か私を様って呼んでくれている。慕われてるの、かな。

來優さんは姉御肌で頼りになる。透麻くんとよく喧嘩していて最初は戸惑ったけど、あれは二人のコミュニケーションってことが少ししてわかった。喧嘩する程仲が良いっていうのは二人のことを言うのだろう。

透麻くんは本当に頼りになる人で、私が困っていたら真っ先に気付いて助けてくれる。それに、思いやりが凄くあって、細かい所によく気付いてくれる。何故か皆からいじられているけど……。そういう立ち位置なんだろう。

城道くんは本当に女の子にしか見えない。凄く勘が鋭くて透麻くんからはたまに電波美少女とか宇宙人とか色々言われている。でも見た目とは全然違って、凄い強いみたいでお腹を殴られた透麻くんがうずくまっていた。未だにババ抜きや神経衰弱で城道くんに勝ったことがない。

とにかく皆優しくておもしろくて、暖かい。今私は毎日が楽しく

て仕方がない。

「佳ー、恭優から贈り物じゃ」
「恭優お兄ちゃんから？」

ブラウスのボタンをとめながら紗弥お姉ちゃんの声に耳を傾ける。
戸を開けて一枚の封筒をひらひらと空中で泳がしている。

「何じゃ着替え中か」

言った後紗弥お姉ちゃんの目が光った気がした。封筒を床に起き両手の指を滑らかに動かす。

「どれ、手伝ってやろうかの」
「い、いいよ。絶対目的が違うもん」
「何を言うておる。着替えを手伝うだけじゃぞ」
「目と手がおかしい、って！？　ちょ、ちょっとお姉ちゃんどこ触って、ぁっ、やめてよ。ちょっとお姉ちゃん、んっやめてったら」
「ふむふむ、変わらずスタイルは良いみたいじゃな。じゃが、もう少し肉を食ったほうがよいぞ。その胸じゃ少し心許ないじゃろう」
「ぅっ、余計なお世話だよ。これから成長期なの」

少し控えめな胸に手を当てる。別に……控えめなのを気にしてるわけじゃないんだから。これは、お姉ちゃんに触られないように手を当ててるだけで……。
またいつ襲われるかわからない。警戒はまだ解かないよ。じりっと今にも飛びかかってきそうなお姉ちゃんから一歩離れる。殆ど無意味なんだろうけど。

「そんなに警戒するでない。そこまで離れられると少し寂しいのじ

ゃ。もしかして佳、ワシのこと嫌いか？」

少し声のトーンが落ちた。ぅっ、傷付けちゃったのかな。

「そ、そんなことないよ。お姉ちゃんは良いお姉ちゃんだし、私好きだよ」

落ち込んでいる紗弥お姉ちゃんの前まで歩いて行く。焦りから両手をあたふたと動かし、急に落ち込んだ紗弥お姉ちゃんに“迂闊にも近寄ってしまった”

「なぁんて隙在りじゃ」

「えっ！？」

騙されたぁ。さっきとはうって変わって高いテンションで抱き付いて来た。不意打ちなそれに倒れそうになりながらも何とかバランスを維持する。

「もう酷いよ騙すなんて」

「悪いのう。でも佳に抱き付いておると安心するのう」

片手を背中にやりもう片方の手で頭を撫でる紗弥お姉ちゃん。……ずるいよ。そんなことされたら怒れない。

両手を紗弥お姉ちゃんの背中に持って行く。

「私もお姉ちゃんと触れていたら安心する。心がぽかぽかして暖かい」

恭優お兄ちゃんにも、心咲お姉ちゃんにも、皆にも。何でだろう。暖かい。

「可愛いのう佳は」
「そんなことないよ」
「いや、幼い頃からずっと佳は可愛いかった。ワシの自慢の妹じゃ」
「……ありがと」

何だか恥ずかしい。誉められたのもそうだし、さっきからお姉ちゃんの胸が私の顔を少し埋めるのも理由の一つ。

「……何羨ましい事してるの貴女達」
「あ、心咲お姉ちゃんおはよう」
「おはよう佳。紗弥が鬱陶しいんなら正直に言った方がいいわよ」
「むっ、心咲姉ぇ何を言うんじゃ。心外じゃぞ」

紗弥お姉ちゃんの手に少し力が込められさっきよりも強く抱き締められる。

「はいはい。佳は学校でしょ。早く準備しなさい。紗弥は……また待っているわよ」
「げっ」

紗弥お姉ちゃんの表情が固まる。また今日も来てるんだ。ちょうど私が転校したあたりから殆ど毎日のペースで毎朝家に来る人がいる。

「寒い中外で待ってもらうのも何だから、」
「まさかあのストーカーを入れたのか心咲姉ぇ!?」
「ストーカーってそれこそ心外だねぇ紗弥さん」

心咲お姉ちゃんの隣に現れた人に間髪入れず紗弥お姉ちゃんが近くにあった物を掴み投げる。
お姉ちゃんそれ私の筆箱なんだけどな……。あ、それは私の服、それはスカート……。
見境無く飛んで来る色々な物を全部キャッチする。静かになった頃にはその人の両手は物で溢れていた。

「相変わらず手酷いなぁ。おはよう佳くん」
「おはよう葵さん。今日も来たの」
「ホントは毎日来たいんだけどねぇ」
「来るな！」
「……紗弥さんが怒るからさぁ、毎日は遠慮して週に五回しか行けないんだよぉ。佳くんから紗弥さんに言ってよ。あとこれ返すね」

もとあった位置を把握していたのか一つずつあった場所に戻してくれる葵さん。

「葵さんありがとう。それとストーカーは犯罪だよ」
「あはは。佳くんも厳しいねぇ」

会話しながらも手は凄く早い。もう全部片付けてくれた。ただ、紗弥お姉ちゃんの動きの方が早かった。既に紗弥お姉ちゃんは部屋にはいない。さっき玄関の方で音がしたからもう出たんだろう。

「……葵くん、紗弥もう出たわよ」
「えっ、相変わらず早いなぁ紗弥さんは。じゃあねぇ佳くん、心咲さん」

葵さんも急いで出て行く。外で、ついて来るなって大きな声が聞

こえたから追いついたみたいだけど……。

「葵さんおもしろいよね」

「まぁ悪い人じゃないみたいだし、紗弥も何だかんだ言って気に入ってると思うわよ」

「葵さんをお兄ちゃんって呼ぶ日が来るのかなぁ」

「さぁね。来てもそれは当分先なんじゃないの。それより佳も早く準備しないと、授業間に合わないんじゃないの？」

「忘れてた！　そうなんだ急がないと」

着替えは、さっき葵さんが戻してくれたから、あった。スカートを取り履いていた寝間着を脱いでいく。

「佳これ何？」

心咲お姉ちゃんが落ちていた封筒を手に持ち聞いて来た。スカートを履きながら封筒に目をやる。えっと、確か。

「恭優お兄ちゃんからの贈り物って言ってさっき紗弥お姉ちゃんが持って来たよ」

「……そう。ここ、置いておくわね」

「うん、ありがとう」

うわー、本当に急がないと危ないかな。朝ご飯は、食べてたら確実に間に合わないか。どうしよう、行きながら食べるのは恥ずかしいし、電車の中で食べるのはマナー違反だ。

「我慢するしかないのかなぁ」

ぐるる。っとタイミング良くお腹が鳴る。ぅー、空腹は隠せない

よ。でも、

「……我慢、だよね」

大丈夫。お昼までもつよきっと。たぶん、きっと。……もたなかったらどうしよう。

少し不安になりながらも着替えを終える。スクールバッグを肩にかけ出ようとした所で恭優お兄ちゃんからの封筒が目に入った。どうしよう、開けている時間あるかな。中が手紙なら読みながら行けばいいか。

封筒の先を破り中身を取り出す。

「――これ」

中には一枚の写真が入っていた。

幸せな日々　佳（後書き）

実は前話で本当は最終話にしたかったんです。今度は城道達が佳に手を差し伸べる。これで終わりにする予定だったんですが……。魔が差した？

……まぁとにかくです。本編もうじき、本当にもうちょっとで最終話です。もう少しの間お付き合い頂けたら光栄です。

土手沿いを私は一歩一歩踏みしめて歩く。知っている。私はこの土手を良く知っている。学校をサボってよく皆で缶蹴りや鬼ごっこをした。陽向をいっぱい浴びて柔らかく暖かくてよくここで昼寝をした。

「――っ」

涙が頬を伝い地面に落ちる。

土手沿いを抜け、街の方に足を向ける。この道も、学校に繋がるあの通学路も、迷路のようになっているあそこの路地裏も、商店街への入り口になるそこの別れ道も……全部私が辿って来た路だ。

そうだったんだ。私は大切な人達とこの道をよく通った。大切で、大好きな人達と。

『佳様』

頭の中で私を呼ぶ声が聞こえた。そっか、皆知ってたんだ。

「ありが、とう」

頭の中で四人が笑う。ありがとう。覚えていてくれて。私を忘れないでいてくれて。私との思い出を大事にしてくれて。

――こんなダメな私を、まだ好きでいてくれて。

足を運ばせる。一歩踏みしめるごとに鮮明に思い出に色がついていく。
そして最後にもう葉が枯れきっている木々の下へとついた。

「ここだ」

ここで、最後に落ち葉見をした。あの恭優お兄ちゃんからの封筒に入っていた写真。ここで私は、皆と笑っていた。
一つの木に両手を添える。泣きつくように、すがりつくように添えた手に力が入る。溢れる涙が視界を奪い、抑えきれない思いが思考を麻痺させる。そのくせに考えたくない現実を私に叩きつける。
私は泣きながら喉から声を絞り出す。

「私は、どこにいくの」

誰一人聞いていない。今となっては誰も聞いていないからこそ言える唯一の弱音。

「消えたら、いいのかな」

過去は思い出した。楽しかった皆との思い出も、辛かった思い出も、思い出さなくていいことまでも全て。
そして“俺という人格”までも思い出した。そのくせに私は私のままで。皆が待っているのは私じゃない。皆の笑顔は私には向いてない。そんなことを考えてしまう。

「だってそうでしょ。私は後から生まれたんだもん。私は俺の代わりだよ」

俺と言う人格が無くなったからその代わりに私になったんだ。その人格に比べたら、皆との密度の濃さも比べものにならない。

「ねぇ、教えてよ。私は、どうすればいいの」

こうやって泣いてる間にも、俺という人格が奪って行く。じわじわと私は隅に消えて行く。

「……やだよ、消えたくない」

一人じゃなくなったんだ。暖かさを知ったんだ。私はやっと幸せを知れたんだ。消えたくない。消えたくなんか、ないよ。

「暗闇になんか、戻りたくないよ……」

真っ暗だ。辺り一面真っ暗で、この空間が四角なのか円なのか。広いの狭いのか何一つわからない。ただ真っ暗で。目の前に在るはずの自分の手すらも見えない。この暗闇を皆が照らしてくれていた筈なのに。

そっか……また私は一人になったのか。また私はここに戻って来たのか。

このまま自然に消えていくのかな。何にも残さないで、私という存在自体最初から無かったように消えて行くのかな。

「きえたく……ないよ」

「何言ってるんだ？」

ポンと頭に手を置かれる。この不確かな世界の中にあって唯一確かな温もりを感じた。暖かく、そして眩しい。

「本当は派手なのは苦手じゃないだろ。ただ見てて切なかっただけだろ」

誰だろう。酷く聞き慣れた声。光としかわからなかった眩しいその姿が段々とはっきりしてくる。

「思い出せ。好きな色はなんだ。好きなことはなんだ」

「好きな、色？　好きなこと？」

光が薄れていく。それなのにはっきりと目に見えているその姿は、赤と黒の髪をした写真でみた私の姿。俺という人格の姿。

「違うだろ。俺という人格じゃない。俺達は一つだ。好きな色は？」

「……赤」

そうだ……、私赤色が好きだった。

「好きなことは？」

「おもしろいこと」

皆といたらおもしろくて、楽しい。

「城道も言ってただろ。変わってないって。俺はお前で――」

「――私は貴女」

それを聞くとにっこりと目の前の私は微笑んだ。同じタイミングで私も微笑む。

「そうだ。考えすぎなんだよ。たかが思い出しただけだ。何も俺達は変わりはしない」

「うん。私達は変わりはしない。過去が色付いただけ。私に過去が出来ただけ」

「……もう女だから俺はやめとこっか」

「今まで通り私にしよう」

「私、か。言い慣れないな」

「でも私は私なんでしょ」

「うん。もう慣れた」

そりゃあそうだよ。だって約一カ月半くらいもずっと私って言ってたんだから。さすがに慣れるよ。

目の前の私は少し苦笑しながら私と言う単語を呟く。

「じゃあ、戻るよ」

そう言い、私達は体を重ね一つになった。

何だろう。不思議な感覚だ。記憶が戻るのってなんか不思議な感じだな。

「夢から覚めた？　うーん、例えが難しいよ」

でも、まぁ涙は止まったし、何か清々しい気持ちだし。これからやることは決まっている。

「完っ全に遅刻だよ。でも仕方ないかぁ。帰ったら心咲姉ぇに怒られるかな」

でも帰らないと出来ないし、仕方ないよね。

掛け替えのない今　透麻（前書き）

一応本編最終話です。よければ後書きも読んで下さい。

「……遅いのだ」

城道が盛大な溜め息をこぼす。黒板に字を書いてる教師の肩が溜め息に反応してビクっと跳ねた。教師からしたら自分の授業に文句があるとしか思えないその態度だが、転入初日のケンカがもとで強く言えずにいる。あれだ。不良の烙印を押されちまった。

「たしかに遅いよ」
「何してんだろうなぁ佳の奴」

溜め息が連続して耳に届く。決して聞き心地がいい筈のないもの。不快感しか感じられない。ていうかこいつらは待つ事を知らないのか。

「佳、降りる駅間違てんのかな」
「メールが来てからもう随分と経っているのだ」
「ま、まさか佳様痴漢されてるんじゃ」
「う、心配になって来たのだ」
「どうする、迎えに行ってみるか」

話がおかしい方向に進み始めた。こいつらはアホか。

「痴漢なんてされるわけねぇだろうが。じっと座って待ってろよ。ていうか授業をちゃんと聞いてやれ」

教師が泣くぞ。ほら今だって肩を震わせている。

「……今のどういうことなのだ透麻」

「佳様が痴漢されるわけないってどういうこと？」

「佳は可愛くねぇっつうのか。佳には魅力がねぇって言いてぇのか」

「いや、そういう意味で言ったんじゃなくて、ただ痴漢は有り得ないだろって、」

「有り得なくないよ！」

「そうなのだ。佳はあんなにも可愛いのだ。痴漢の一つや二つあっても不思議じゃないのだ！」

「何考えてんだバカ」

「急に大声出すなって。授業中に迷惑だろうが。それとあとで來優は殴る」

來優だけただの悪口だろうが。

「話を逸らさないで欲しいのだ」

「そうだよ。透麻は本当に佳様のこと可愛くないって思ってるの？」

「いや、誰もそんなことは……。それに可愛い可愛くないじゃなくて痴漢っていう考えが、」

「可愛いか可愛くないかどっち！」

「はっきりするのだ！」

な、何で俺こんなに責められてるんだ。真っ当な意見だったよな俺。何か俺が間違ってたのか？

「早くしてよ透麻！」

「そうなのだ。結局どっちなのだ！」

「そ、そりゃもちろん」

「もちろんなに」
「もちろんなんなのだ」

くっ……こいつらちょっと楽しんでんじゃねぇだろうな。

「可愛いよ。可愛いと思うぜ！」

事実そうだ。あの笑った顔を見ると嬉しくなるし、愛しいとも思う。恋愛感情ではないけど、俺は佳は可愛いと思う。

……少なくとも今右隣で腹抱えてうずくまっている金髪バカよりはな。

「あ、ありがとう……透麻」
「佳！？」

教室の後ろドアの前にいつの間にか佳が立っていた。いつからそこにって言う疑問が生まれ、けどそんなもの佳を見たら消え失せた。目が佳に釘付けになる。意識が全て佳に飛んでいく。不意をつかれたのにもそうだし、さっきのを聞かれていたのもそうだし、でも何より一番大きい理由は、

「な、なんで……？」

城道も汐姫も來優も驚いた顔で佳を見ている。

「えっと……廊下でも、聞こえてたから。ぁ、私も透麻のこと格好良いと思うよ。……なんか透麻に言われたら、照れるね」

いや、そんな頬染めながら言われたら可愛いとしか思えないっていうかそんなことは今大事じゃなくて、いやでも何かそんな風に言

われたらこっちも照れるってだからそこは今は置いといてっつうかなんだこれ、頭ん中がぐちゃぐちゃだぞ俺。佳の髪が黒と赤で、呼び方にくんがついてなくて、でも女の子っぽいままで……、ああもうっ意味わかんねぇよ。とにかく、あれだ。

「おはよう佳」
「おはようなのだ」
「おはようございます」
「おはよ、佳」

佳の記憶が戻ったのかも知れない。それは皆思っていることだ。でも、おかえりでも、久し振りでもない。だって佳は記憶を失っても俺達の知っている佳のままだったから。見てると幸せになれる笑顔のままだったから。変わったのは言葉つかいと女の子らしさ。たかがそれだけだ。

「ありがとう皆。私を好きでいてくれて」
「嫌いになんかならないのだ」
「私達は佳の親友だからな」
「うん。ボクはいつまでも佳様のことが大好きだよ」

悩んだ日もあった。立ち止まって塞ぎ込んだ日もあった。けど、佳が大好きなのは変わらなかった。こんな気持ち、変わるわけがない。

「ああ。俺達はいつまでもずっと一緒だ」

ずっと、俺達五人ならもう何があったとしても変わらず今のままで一緒に歩いていける。

佳に向かって笑う。來優も城道も汐姫も楽しそうに、嬉しそうに

笑っている。いつもそうだ。佳が笑うと俺達もつられて笑う。そして俺達が笑うと佳も嬉しそうに笑ってくれる。それが俺達の幸せ。それが俺達の“今”

「そうだろ佳」

何にも代えられない掛け替えのない俺達だけの時間。

「――うん！」

頬を染めながら照れてはいるけど恥ずかしげもなく大きく首を縦にふり嬉しそうに笑う佳。幸せな気持ちになれる優しい笑顔。

「佳にはずっと隣で笑っていて欲しい」

「……ぇ、と」

ん？　さっきより顔が赤い気がする。ていうか何でちょっと下向いてんだ。少し真っ赤な顔で下向いたあと、目だけを上に向けて俺の目を真っ直ぐ見つめた。そして消え入りそうな声で静かに

「皆の前では、ちょっと……照れるよ」

何が、そう聞こうと声を出そうとした瞬間背中に走った激痛が声を喉の奥にまで引っ込めた。代わりに出たのは言葉にならない声。

ぐげっとあぎゃっとかその辺りと変わらない変な声。

「僕の前で佳を口説くなんて良い度胸なのだ」

殴った張本人は細い指を有り得ないだろうと思う程ボキボキと骨を鳴らして怒っている。

「ちょっと待て城道、何のことだ……って汐姫さん、それは何してるんでしょうか」

「透麻ぁ、人間の指って何で十本あるか知ってる？　二三本無くなっても良いようにだよ」

「物騒なこと言うなっつうか、俺の指から手を離せ。ちょっと待て曲げるな、いだっ痛い痛いからって無理無理もう曲がらなっ痛い痛い痛い痛い！」

なっ何がダメだった。俺は何か変なこと言ったのか。ていうかまじで折れる。折れるって！

「來優っ見てないで助けてくれ、いだだだだ。ちょっおい來優！」

「……なんかいけすかねぇ」

「ちょっおい聞いてんのか來優！」

「何がいけすかねぇんだろう。なんか、モヤモヤする」

「くそ！　あの馬鹿何浸ってんだよ」

あ、もう本当に無理。

「ゴホンっ」

ピタリと一つの咳払いで動きが止まる。その何かを促すような咳払いで俺達は今が何の時間かを思いだす。

……流石に騒ぎすぎた？
教卓の前で授業中だと言うことを思い出して欲しそうに教師がもう一度咳払いをした。周りの生徒もちらちらと俺達を見ている。

「……ちょっと騒ぎすぎたのだ」
「透麻がうるさかったんだよ」
「俺じゃねぇだろ。そもそも城道が、」
「皆今も十分騒いでるよ。來優は静かだけど」

そう言い佳は自分の席につき今やってる授業の教科書を開いて机に立てた。
あれ、佳普通に授業受けるんだ。そう思っていたら佳から静かな寝息が聞こえてきた。

「……早いのだ」
「佳様そういう所も可愛いです」
「ていうか、なんて姑息な」

教科書で教師から顔を隠し、もう寝ている。まぁ教師としてはその方が良かったのかも知れない。だって俺達はもう騒げない。佳を起こすわけにはいかないからな。
それじゃ仕方ないな。真面目に授業受けるか。赤点になりそうだしな。シャーペンを握り黒板の字をノートに写して行く。それを見た教師が満足気に授業を再開した。

数分後教室の一番後ろの五人は皆顔を机に伏せていた。昼前の授業をしている一室の景色。

掛け替えのない今　透麻（後書き）

まず最初に、今までお付き合い頂き有り難う御座います。
どう転がして読んでみても明らかに自己満小説ですが、それでも構わず読み続けてくれていた方々、本当に感謝感激です。
一応はここで本編は終わりです。でもまだ本編では書かなかったこれからの佳達の話や恭優達の話が頭の中を締め付けるんです。
だからまだ最終話ではありません。番外編をちょこちょことやって、その後に最終話で終わらそうかと思います。
なかなかにしぶとい小説ですが、もしよかったら次回からの番外編も待ってくれたら幸いです。

では、【変人歓迎＞普通拒否】完結でございます！

家業と決意　紗弥

最初に異変に気付いたのは九歳年の離れた“妹”が産まれた時。すやすやと寝息をたてる小さな姿。暖かい小さな手に触れた時に涙が零れた。嬉しさ、喜び、感動が頭の中でごちゃ混ぜになって私はその手を弱く握りしめるだけだった。心咲姉ぇも隣で泣いていた。ただ、妹を抱いている母の、産まれたばかりの娘を見つめている父の顔は険しかった。

最初の違和感。その時は大して気にはしなかった。けれど、産まれたばかりの妹の面倒を一切見ない所で私の違和感は確信に変わった。

親がおかしいのか、それとも……。

佳の世話は私と心咲姉ぇがやった。夜泣きは交代で起き、ミルクやご飯も図書館で調べ上手にあげた。おしめの代えもやって行く内に早くなっていた。確かに少し面倒だと思う時も度々あったが不思議と苦ではなかった。佳が笑った顔が好きだったから。何だか嬉しくなるから佳の世話は大好きだった。

佳が二歳になった頃父と母は私達から佳を離した。毎日朝早くから深夜まで二歳の佳を連れて父は家を出ていた。気になって学校を休み後を付けたことがある。父が連れて行っていたのは家の神社の分社。そこの本堂の中に佳を一人入れて父は戸の前に座っていた。

「な、にしてるの？」

「ついて来るなって言っただろうが！」

「佳が泣いてる！　何で開けたげないの！？」

「うるさい！　女のお前には関係ない」

「関係ないってどういう……。どいてっ佳を助ける」

どけようと座っている父の肩に手を置いた。瞬間、拳がめり込み体が飛び跳ねる。内臓を圧迫され、膝をつき胃液が口から零れた。初めて父から奮われた暴力。とてつもなく痛く、意識が薄れて行く。

「そうか、心咲には話したが、お前には話してなかったな」

「な、にを、」

「私達は代々四百年も続く祓い師だ。鬼をもって邪を祓う。私の代で終わらせるわけには行かない」

祓い師、四百年？　意味がわからない。そんなの知らない。そんな事知ったことじゃない。

「なん、で佳……？」

「……お前らが男じゃなく、佳が希望を奪ったからだ」

希望を、奪った……？

「――――、」

ぼやけた視界の中で父の口が動く。けれど今の私にはそれが言葉として耳に届かなかった。

「紗弥、大丈夫？」

布団の上で目を覚ます。外が明るい、私は一日気を失っていたのか。体を起こすと未だ痛みが体内を駆け巡る。

「無理しないで」

心咲姉ぇが私の肩をもちそっと布団の上に寝かした。

「心咲姉ぇは、お父さんのことを知ってたの？」

「うん、それがうちの家業らしいの。で、でも別にそこまで痛かったり苦しかったりはしないってお父さんが言ってたよ。人に取り憑いた悪い奴をやっつける正義の味方なんだってお母さんも言ってた」

「……正義の、味方？」

あんなのが。娘を暗い所に閉じ込めて泣かしているあの行為が正義の味方のする行為なのか！？

「違う、心咲姉ぇ。佳が泣いてたんだよ。娘は泣かせて他人を助けるなんて間違ってるよ」

「……それは、」

「私は他人なんてどうなろうと知ったことじゃない。心咲姉ぇも触ったじゃん。佳の手はあんなに小さいんだよ」

弱く、少し力を入れただけで潰れそうな程小さく脆い。

「私は佳が笑っていてくれるのなら目の前で人がどれだけ不幸になって構わない」

他人より身内、何よりも佳。だって佳は私達が育てた私達の妹だもん。守るのは当然だ。

「それに何で佳なんだ。男ならまた産めば、」

「違うの！　紗弥、それは無理なんだよ」

心咲姉ぇが泣きそうな顔で私の顔を覗く。瞳にはたっぷりと涙を溜めて唇を震わせながら声を出す。

「もうお母さんは子供を産めないの。佳を産む時に、もう産めなくなっちゃったの……。だからお母さんとお父さんさんは佳を愛してないの」

瞳が堪えきれなくなった涙を流し、その涙が私の頬に落ちる。優しいよ。心咲姉ぇは優しい。私は涙なんか出ない。佳に酷いことをする二人の為に涙なんか出ない。悲しいって気持ちなんかにならない。腹が立つ。佳を憎むお父さんお母さんにも腹が立つし、私自身にも腹が立つ。

「心咲姉ぇ、何で私女に生まれたんだろ」

私が男だったら佳は泣かずにすんだ。私が男だったら佳は辛く苦しい目に合わずにすんだ。私だ。私のせいだ。私が女になんか生まれたから……。

「私は強くなる。佳を守れるように強く。佳を救えるように強くなる」

「……私もなるよ。私は二人のお姉ちゃんだもん。私が一番しっかりしないとダメよね」

涙を拭いながら心咲姉ぇは決意した。人一倍優しい心咲姉ぇだ。他人を蔑ろになんて出来ないのに、それでも心咲姉ぇは決意した。

「心咲姉ぇは優しすぎるから無理だよ。だから、心咲姉ぇはその優しさで佳を救って。それが心咲姉ぇの強さだから。だから力は任せ

て。私はお父さんとお母さんと戦う」

止めるように何度も何度も説得する。何度も目の前に立ちはだかる。それが私の出来ること。

昔テレビでしていた時代劇を思い出す。佳が産まれる前に見ていたお父さんの好きな時代劇。お父さんとお母さんと心咲姉ぇと私、皆一緒にご飯を食べながら見ていた。悪事を働く悪者を退治し皆を助けるどこにでもある普通の時代劇。だけど私は好きだった。お父さんの好きなそのヒーローが。皆を助けるヒーローが格好よくて好きだった。

これは私の意思表明。皆を助けれなくてもいい。ただ一人、大好きな妹を助ける為だけのヒーローになる。

これは頭の隅に残ったお父さんとお母さんへの思い。あの時代劇のヒーローを思い出してほしい。あの優しさを、優しかった頃を思い出して欲しい。

「……ワシは佳を助ける」

大好きな妹を救って見せる。親からも、家業からも。それがワシの生きる意味。

この言葉遣いになっても両親は思い出してはくれなかった。何度止めるように言っても両親は止めてくれなかった。

中学生になった頃心咲姉ぇが佳に毛布やご飯を持っていった事がばれ、父親に私達の処女を破られた。そのあとは、父も母も私達を

ストレス発散の道具としか見ずに、罰という形で何度も辱められた。心咲姉ぇだけは助ける為に私が率先して罰を受けた。裸にされ神社の鳥居に縛られたこともあり、虫や人が私の体を陵辱したこともある。本堂には佳が寝ているから何をされても声はあげない。起こして心配かけるわけにはいかないから。

何をされても耐えられる。爪を剥がれても、顔が何倍も腫れても、裸にされても、佳の笑顔を想ったら、佳の笑顔が見れるから耐えられる。例え佳に嫌われても、佳が笑って過ごせているなら私はそれだけで幸せ者だ。

「――きて、起きて！」

「……佳、か。あれもう着替え終えたのか？」

目を開けると巫女服に着替えた佳の顔が目の前にあった。寝ていたのか、しかし懐かしい夢を見た、ような気がするのう。

「とっくに着替えて外で待ってたよ」

「すまぬな。じゃが置いていってくれても良かったんじゃが」

記憶を取り戻した佳にとってワシはやっぱり嫌な姉に戻ったじゃろう。何せ佳が辛い時に何一つ優しい言葉も何もかけなかったんじゃから。

もう一度嫌われるのは……少し寂しいが、まぁ仕方ないじゃろう。それだけの事をしたんだ。

「……、」
「ん、何じゃ？」

ぼそっと佳が何かを言うが、聞こえない。まぁ、また何か怒られるのか、そう思いながら聞き返した。

「……一緒に行きたかったからって言ったの！　一回でちゃんと聞いてよ！」
「……ぇ、いっしょに？」
「うん」

二回言ったのが少し恥ずかしいのか顔を真っ赤にしながら佳は頷いた。予想外の言葉に頭が回らない。
何で、何だどういうことじゃ。一緒にって誰と、ってワシとか？　ワシと一緒にって二人でってことで、でもワシじゃぞ。ワシは嫌われて、でも一緒にってあれ聞き間違いなのか？　いやいやそれは無いじゃろう。

「佳、ワシの事嫌いなんじゃ……」
「嫌いだよ」

や、やはりのう……。

「でも、記憶を無くした時に感じたのは暖かさだった。“紗弥姉ぇ”の優しさは暖かくて、嬉しかった」
「佳、今紗弥姉ぇって」
「紗弥姉ぇの事今は大好きだよ」
「佳ぃぃぃぃぃ！」

佳を抱き締める。嬉しくて、何よりも佳が“私”に笑ってくれたことが嬉しくて。頑張るよ佳。まだ佳を家業から救えてないけど、頑張る。いつか佳の中の鬼を必ず消すから。全ての元凶のその鬼を。

「私ね、私でこの家業は最後にしようと思うの。私は死ぬ時に中の鬼も一緒に連れてく」

「そんなに待たなくてもワシが必ずその鬼を消すから心配するな。佳は楽しく生きるのじゃ」

「……うん、ありがとう紗弥姉ぇ」

家業と決意　紗弥（後書き）

番外編一話目です。書こう書こうと思っていたけど結局書かなかった佳の家業のことでした。
この小説のファンタジー要素ですね。記憶を失う原因となった大きな要所でしたが、何だか纏まらなくて……。

とまぁこんな感じで番外編は進めて行きたいかなぁと。
途中にあった恭優と葵の閑話みたいな、少し長編となる番外編も出す予定ですが、まぁ置いておいてですね……。
唐突ですがではまた次回！

しゃぼん玉　由美

『しゃぼん玉とんだ。
屋根までとんだ。
屋根までとんで、
こわれて消えた』

夕暮れ時の公園のスピーカーから歌が流れる。日が暮れる事を親子供に告げ、家に帰る頃合いだと促す。
その歌を聞き手を繋ぎ帰る親子達。遊ぶ人がいなくなった公園はもう少ししたら無人になる。そう“いつもなら”

「ねぇおかあさん」

一組の親子が立ち止まった。手を繋ぎ歩いている子供が何かを見つけ歩くのを止めたから。子供が指差した方向にはブランコに座っている女性の姿。

「あのひと、ないてるよ」

女性が着ている簡素な衣服は近くの病院の患者が着るもの。それを知っている母親は関わりあいを持つのを避けた。面倒はごめんだ。母親が子供の手を引いて歩きを再開する。

「指差してはダメよ。早く帰ってご飯食べようね」
「うん。でもおかあさん、あのひとすごくかなしそう」
「失礼でしょ。ほら早く」

手を引っ張り子供を連れていく。これで公園内はただ一人を覗いて誰もいなくなった。泣いている女性だけを残した。

声を出さず一点を見つめただ瞳から涙を流しているだけ。瞳に映っているのは誰もいないすべり台。映る筈だったその全てを否定して、時間はただ進む。歌がやみ、周りは暗くなり、脇の道にも人通りが全く無くなっても、流れる雫は止まらなかった。

――なんで、幸せはいつも私から離れるの。

大切なものを失ったのに、現実は顔色一つ変えずに私にそれを知らしめる。

頬を伝う涙が暖かく、その暖かさが懐かしくて……それが嫌になった。

今こうして泣いているだけで思い出す。あの人と想像していた未来を、あの人と過ごした過去を、愛を誓い合ったあの場所を。

禁煙　冴谷（前書き）

伝え忘れです。前話からシリーズものに入りました。

禁煙　冴谷

カツカツと靴音を響かせ階段をのぼる。約二時間前会議が始まる直前に忽然と姿を消した上司を探す。思い当たる場所は殆ど探し、残されたのはここを含めあと三つくらい。この三つにいなければもう帰ってくるのを待つしかない。なんたってあの人は恐ろしい程の機械音痴だ。本人もそれを理解し理解した上で携帯電話を携帯していない。簡単に言うと諦めてるんだ。

「ほんっとに会議が嫌いだなあの上司は」

靴音と一緒に愚痴を零す。

「だいたいいつも会議をサボる度に怒られてるのは誰だと思ってるんだ……」

階段をのぼりきり目の前にあるドアを思いっきり開けた。何もない無骨な灰色のコンクリートが広がり、これまた不用心な頼りないフェンスが空中とコンクリートとを仕切っていた。今はもう使われてないビルの屋上。あの人はよくここから景色を見ている。

風が苦い匂いを運んできた。匂いの先には白髪混じりの髪が風で僅かに揺れ寒そうに背中を丸めながらフェンスに手をついている男性がいた。片手はフェンスに、もう片方はおそらく、いや間違い無く煙草を挟んでいるんだろう。ふーっと息を吐き出し、煙草の煙が空中に溶ける。

「お前も吸わないか冴谷」

「吸いませんよ。煙草は嫌いだっていつも言ってるでしょ。ていうか何で僕だとわかったんですか」

自分で言っときながら馬鹿な事を言ったなと思う。この人にはそんな事わかって当然なんだ。

「がははははっ。階段を忙しく歩く音、勢いよく開けられたドア。そしてここは使われていないビルだ。誰がこんな所にそんな勢いよく来るかよ。自殺志願者はそんなに元気よくは来ないだろう。誰かと待ち合わせして遅れたか、それとも急いで物、もしくは人を探しているか。まぁどちらかだろう」

勿論それだけでは僕だと断定できない。だからもう一つ、決め手があるはずだ。

「それと、俺が会議をサボった事で代わりにお前が怒られ、その後俺を探す為に俺が行きそうな場所を探して行くと……、ちょうどこの位の時間にこの場所に辿り着く」

そうだろう、とでも言いたそうな顔だ。今の言い方だったら怒られる時間までわかっていることになる。何一つ外すことなく完璧な推理だけど、

「そこまでわかってるのなら会議サボらないで下さい。それとサボるのならこんな遠い場所ではなく署から一番近い所にいて下さい」

まったく探すこっちの身にもなって欲しい。

「まぁそう怒るな。堂々巡りの会議なんて出るだけ阿保らしい。俺達の言葉なんて通じねぇんだから」

「確かにそうですけど」

厄介者の僕達の意見は殆ど無視され、勝手に会議は進む。その癖に何かと文句をつけられる。だからといって出ないで良い理由にはならない。

「それとここにいる理由は二つある。一つはここから見える景色が俺は一番好きだからだ」

「もういっそここから飛んで下さい」

「お前たまに怖いこと言うよな」

「冗談ですよ冗談。それでもう一つの理由は何ですか？」

「見ろよ、きな臭ぇだろ」

顎でくいっと人の波を指す。人の波の中、一人だけ順応しきれない奴がいた。いや、順応しきっていて逆にそれが不気味だった。案外普通の人達は時計を見たり、会話をしたり何かと挙動不審だったりしている。その人達が集まり、何方向かに並んで動き波が出来る。だからある程度人並みっていうのは上から見たらバラつきがあるものだ。けどそいつ一人だけは当たり前に前だけを見て歩いていた。ちょっとした違和感。これをきな臭いと思うかどうかはやはり長年の勘って言うやつなのか。それとも何か根拠があるのか。

「明日からつけるぞ。うまくいきゃあ薬物、傷害その他諸々ついてくるかもな」

「調べてるのは傷害事件ですよ」

「もしかしたら薬物ついて来るかも知れないぞ。確かアイツ前科あるからな」

「知ってる顔だったんですか」

「会議サボって観察してたら思い出したんだ。案外まだ脳は若いのかもな」

「冗談が得意ですね」
「……お前本当に嫌な奴だな」

その声を背中で聞き足はドアの方へと進む。前科があるなら話は早い。少しの手間で一瞬で身元がわれる。手間を惜しんだら何も解決しない。これもこの人が教えてくれたこと。

「早く行きましょう。署に戻って資料探しです本郷さん」
「わかったよ。お前の車の中で煙草吸ってもいいか」
「車内は禁煙です」

禁煙　冴谷（後書き）

前書きに書いた通り前話からシリーズものです。本編を書いてる時にいつか外伝で出そうと思っていた話しです。
よろしければまたお付き合い下さい。

繋がり　尊志

温もりが繋がった手を通して伝わってくる。触れ合った肌に優しさを感じ、冬の寒さの厳しさなんて吹っ飛んでいった。

「尊志（たかし）の手、暖かいね」
「そうか？　普通だろ」
「ううん、暖かい」

いつからだっただろう。この温もりを知ったのは。母の愛も優しさも知らず育って来た。人の手がこんなに暖かいことを知らずに生きて来た。

いつからだっただろう。冷えた心に温もりが射したのは。暖かい陽の光が射したのは。

「きっと尊志の心が暖かいから手も暖かいんだよ」
「ありがと。なんか照れるけどな」

違う。俺の心は暖かくなんかなかった。温もりなんか知らなかった。それを教えてくれたのは、心が暖かくなったのはお前と出会ってからだ。その優しい笑顔を見てからだ。

本当はきっと俺の手が暖かいんじゃない。お前の温もりが強すぎて、俺の冷えた心を溶かしていく。笑顔が眩しすぎて、つられて笑ってしまう。隣で笑っててくれたから俺も笑えるようになった。

空いた手で隣にいる由美の頭を撫でる。そうしたら照れくさそうに顔を赤くしながらそれを受け入れてくれる。

ああ、ダメだ俺。付き合い始めてもう二年がたとうとしている。

だからか、最近抑えが聞かない。付き合った当初から考えていて、けど夢が叶うまで言わないと決めていたのに、最近になって我慢が出来なくなって来た。

大丈夫。金ならバイトで貯めた。指輪を買うのには十分だ。問題はそこからの生活。まだ親父にも由美とのことは話していない。親父には……言い辛い。

「由美、あのさ」

「うん？」

言うな、言うな言うな言うな言うな！　まだ言ったらダメだ。夢が叶うまでは、絶対に言わない。

「なに尊志」

「や、えーと、今度家来るか？　ほらそろそろ親父にも紹介したいからさ」

二年も付き合ってる彼女がいるって言う話しすら親父とはしたことがないし、そもそも由美のことすら親父は何も知らない。言わなかったのには理由があって、親父は俺が生まれた頃に母親に俺を置いて逃げられたらしい。だから今まで誰と付き合おうが親父とはそういう話しをしたことがない。そもそもあまり話しすらしたことがないしな。

「ほ、んと……？」

「ああ、親父公認だったら……このあとも楽だろうし」

「このあと？」

「い、いや！　何でもない」

危ねぇ。親父公認だったら結婚までが難なく進むなんて言えるわ

けねぇだろうが。そもそもそんなの半分プロポーズみたいなものじゃねぇか。

「別に由美が嫌だったらまた今度でもいいぞ」

由美には……ちょっと酷かも知れないしな。

「やったぁ。前から会ってみたかったんだぁ。尊志のお父さん良い人なんだろうなぁ。尊志が憧れるくらいだもんね」

「なっ！　ば、馬鹿！　べ別に憧れてなんかねぇよ。あんな仕事一筋の馬鹿親父になんか憧れるわけねぇだろ」

「えー、でも尊志お父さんに憧れているから警察になりたいんじゃないの？」

「違うわ馬鹿。気持ちわりぃこと言うな」

「じゃあなんで？」

「そ、それは……」

お前見たいに人を幸せに出来る人間を守りたいから……なんてそんなこと言えるわけねぇ。

「別に何だっていいだろ。ほら行くぞ」

「えー、照れなくていいのに……」

「まだ言うかこら」

笑いながら走り出す由美。日の光を目一杯浴びて、暗闇なんか似合わない。暗闇なんか吹き飛ばす。そんな由美の隣りを俺は今歩いている。離したくない。ずっと、これから先もずっと手を繋いで、繋がりあっていたい。

「ほら由美、手」

「ありがとう。やっぱり暖かいね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1532j/

変人歓迎＞普通拒否

2012年1月9日03時45分発行